しるしと不思議

マリア・ウッドワース・エター
藤遥　制作

序文

第一の本の序文

伝道の働きに出てまもなく、主ははっきりと示してくださった。私が自分のことを書き記すのを、主は望んでおられたのである。誕生、子供時代、回心、驚くべき召し、聖霊のバプテスマ、そしてそれまでの経験である。こうして私は、最初の本『生涯と経験と働き』を書いた。

第二の本の序文

神はこの最初の本を目に見えて祝福してくださり、ごく短いあいだに、本はすべて遠く近くに散らばっていった。まもなく、第二版を求める声がしきりに寄せられた。このころには、主は私に、神癒を教えるべきことを示しておられた。病人に手を置いて祈り、悪霊を追い出す。そうして人々が回復し、救われ、いやされ、聖霊に満たされるようにするのである。私は従った。そして、刈入れのように多くの魂がキリストに導かれた。

第三の本の序文

主はこれらの本をお用いになり、人々の霊と魂と体を驚くほど祝福してくださった。人々は、もっと神を、もっと光をと、飢え渇いていた。そこで主は、三冊目を出版するよう私を導かれた。『試練と勝利』という大部の本である。この題にしたのは、私の伝道の生涯が試練と勝利の連続だったからである。人々はこの本を読んで、大きな霊感と勇気を受けた。

第四の本の序文

ほどなく『試練と勝利』は人々の手に渡ってなくなり、もう一冊出してほしいと、人々はほとんど懇願するようにしてやって来た。この四冊目は一万部出版した。神はまた、説教集を出版するようにも導かれた。この二冊は、ほとんど並ぶようにして、大いなる刈入れの畑へ出て行った。それを読んで神に触れたという人々から、すばらしい証しが寄せられた。

第五の本の序文

この本は、私が伝道に出て二十五年ほどたったころにまとめた。その間に神がそのはしために対してなさったことを、かいつまんで収めた。これらの本のほかに、神は折々に「歌集」を出すよう私を導かれた。神はそれを目ざましくお用いになり、人々の上に「天の力」を下してくださった。

第六の本の序文

三年近く前（一九一三年）、私はテキサス州ダラスで大きなリバイバルのさなかにいた。そのとき、私の以前の本を求める声がたいへん多かった。どれも人々の手に渡ってなくなり、絶版になっていた。そこで私は聖霊に促されて、六冊目の『聖霊の行伝』を書き、一万部を刷った。この本も、今ではほとんど残っていない。それで、この本『しるしと不思議』を書いたのである。

新しい本の序文

しるしと不思議

一九一六年六月

私たちの神は「前進しておられる」。そして力をあらわされ、この時代の終わりが近づいていることを示しておられる。この世の政府のあり方もろとも、この時代は終わろうとしているのである。

まことの王がまもなく来られ、私たちの主イエスが御国を受けられる。神に会う備えをすることこそ、まことの「備え」である。

この「異邦人の時代」の終わりに、主イエス・キリストの名によって、「最初と同じように」「しるしと不思議」が行われている。神のすばらしいみわざと導きの記録は、おおむね時の順に並べ、以前の本と同じく、説教をいくつか添えた。文章を整えたり飾ったりすることはしていない。

神がこの本の広まりを恵みによって用いてくださるよう、祈っていただきたい。また、できるなら、この本をほかの人に紹介して、その知らせを広めていただきたい。

推薦の言葉

よく知られた宣教師の言葉

スタンリー・スミス牧師は、長年「中国内地会」の働き人であった。三十年ほど前、七人の若者の一団（「ケンブリッジ・セブン」と呼ばれた）がイングランドを揺り動かした。この世でのすばらしい前途を捨て、伝道のために中国へ船出したのである。

その一人がスタンリー・スミス（ケンブリッジ大学のエイトの整調）であった。もう一人は、名クリケット選手のC・T・スタッドであった。スタンリー・スミス牧師は次のように書いている。

この機会に、読者にもう一度ある本を紹介せずにはいられない。『聖霊の行伝』、またの名を『M・B・ウッドワース・エター夫人の生涯と経験』という本である。私はこの本を、聖書の次に大切にしている。特別に神を待ち望む時期には、新約聖書を片側に、エター夫人の本をもう片側に置くと助けになった。後者は、『使徒行伝』を何倍にもしたような、今の時代の記録である。エター夫人は、一八八五年からいやしの務めをしてきた女性である。伝道者としての召しは、その数年前に受けている。あえて言えば、この務めは教会の歴史に類を見ないものだと思う。そのすべての栄光を、私は主イエス・キリストに帰する。エター夫人も、私がそうすることをきっと望むであろう。この務めは、三位一体の神の栄光と信者の益のために、広く知られるべきである。

私の古い友人で、言ったことを必ず守る人、ジョージ・B・スタッド氏は、こう書いてきた。「私はエター夫人とその働きを、じかに知っている。夫人は昨年、ロサンゼルスでの私たちの野営集会に来ていて、すばらしいいやしが数多くあった。夫人は信仰において健全であり、神に力強く用いられている。何年も前からそうである。夫人とその働きを何年も前から知っている、霊的で信頼できる聖徒たちを、私はほかにも大勢知っている。パウロが属していた『宗派』のように、ペンテコステ運動は『反対』を受けている（使徒二八・二二）。エター夫人のように力強く用いられる人も、みな同じである。そうだ、夫人はまことに、真実な『主のはしため』である。恐れることはない。もちろん、ペンテコステ運動にも、まことの麦だけでなく、もみがらがある。奇妙なことや賢明でないことが起こるのも、確かである。しかし、神はその中におられる」

エター夫人の霊的な務めは、神のもとで、罪人をキリストに導き、信者をペンテコステのバプテスマに導いてきた。この点でも、まことに目ざましいものがある。

この証言は、イングランドのサンダーランドで出ている『コンフィデンス』誌にも載った。編集者は、オール・セインツ教会の主任牧師、A・A・ボディ牧師である。

第一章　生涯の夜明け

私は一八四四年七月二十二日、オハイオ州コロンビアナ郡ニューリスボンで生まれた。サミュエルとマチルダのアンダーウッド夫妻の四女である。両親はクリスチャンではなかった。そのため、多くの家庭が恵まれている信仰の教えや感化を、私は受けずに育った。父と母がディサイプル派の教会に加わったのは、父が亡くなる一年前のことである。父は一八五五年七月に亡くなった。父の死は、私の生涯で最初の大きな悲しみだった。父はいつもと変わらず元気に、刈入れに出かけていった。冷たい亡きがらとなって家に運ばれてきた夜のことを、私は決して忘れない。私は近所の子供たちと外に出て、激しい嵐が荒れ狂うのを見ていた。すると、見知らぬ人がふたり、家に近づいてくるのが見えた。ふたりは、起きたことの悲しい知らせを伝えに来たのだった。外を見ると、愛する父の亡きがらを乗せた馬車が近づいてくるのが見えた。冷たくこわばった父が家に運び込まれるのを見るのは、幼い私たちの心にとって恐ろしい打撃だった。母は、人々が正気づかせるそばから、また気を失った。私たち子供は泣き叫び、嵐は猛り狂っていた。父の死因は日射病だった。患ったのはわずか数時間で、家族のために祈りながら息を引き取った。

父は顔立ちのよい人で、たいへん頭がよく、精力にあふれていた。しかし、のろわれた酒におぼれていた。町や市に出かけるまでは、父は酒への欲をよく抑えていた。ところが、町で友人たちに一杯やろうと勧められると、気前がよく人のいい父は、すぐ誘いに乗ってしまった。一杯飲むと、もっと欲しくて狂ったようになった。自分は金持ちだと思い込み、最後の一文まで人にくれてやった。酒を買う金がなくなると、服を質に入れた。そして、食べ物を買う一文も持たず、ぼろをまとって、大勢の家族と悲しみに打ちひしがれた妻の待つ家に帰ってきた。私たち幼い子供は、走っていって隠れたものだった。幼い私たちの毎日は、恐れと苦しみに満ちていた。こういうわけで、私たちは貧しさの中に取り残された。病弱で悲しみに打ちひしがれた母と、頼るもののない八人の子供である。広い世界に、助けに来てくれる人はひとりもいなかった。

そう、私は酒飲みの娘であり、そのほかにも暗い試練をくぐり抜けなければならなかった。このことを人前で明かしたことは、これまで一度もなかった。しかし今、神に導かれて、世に知らせたいと思う。主がどのように私を召され、深みから引き上げてくださったかを。それは、主がすべての者にあって、すべてとなられるためである。また、どんな人間も主のみまえに誇ることがないことを、明らかにするためである。この働きをなさっているのは、主にちがいない。それは人の知恵によらず、生ける神の霊によるのである。

母は八人の子供を養わなければならず、ほとんど無一文だった。こうして、私たちみなの、生きるための戦いが始まった。母は、あれこれと仕事を探さなければならなかった。上の姉たちと私は家を離れ、週ぎめで働きに出なければならなかった。自分の食いぶちだけでなく、家にいるきょうだいたちの分も稼がなければならなかった。感じやすい性分の私には、見知らぬ人々の中に入っていくのは、とてもつらかった。私は不満を抱き、家が恋しかった。私は学校に行って学びたかった。教育を受けたくてたまらず、そのことで泣きながら眠ることがよくあった。台所に本を置いておき、一節を読んでは覚え、また次の一節を読んでは覚えた。こうして、働きながらも、あらゆる機会を生かした。物心ついたころから、教会に行く機会はなかった。八歳のころ、私の心は、神のことを知りたいという強い願いでいっぱいになった。姉たちのうちふたりが、メソジストの集会で回心した。私も一、二度行った。救い主の愛に、私の心は溶かされた。しかし、その人たちは子供に救いは要らないと思っていたようで、私は前に出させてもらえなかった。

十三歳のとき、私はディサイプル派の教会の集会に出た。このころ、私の家族はみなディサイプル派だった。十字架の物語を聞くと、私の心はイエスの愛で満

たされた。目はまるで涙の泉のようだった。

私は大勢の会衆の後ろのほうに座っていたが、主を求めて真っ先に立ち上がった。前の席までがあまりに遠く、とてもたどり着けそうに思えなかった。しかし、私はこう言った。

「行って滅びるなら、それまでのこと
私は心を決めた、行ってみよう
ここにとどまれば、わかっている
とこしえに死ぬほかないことが」

牧師は私に深い関心を寄せ、励ましの言葉をたくさんかけてくれた。そして、私の生涯が輝く光となるように祈ってくれた。もし牧師が先を見通して、私が生涯をかけて主のためにした働きを見ることができたなら、きっと喜んだにちがいない。父のない哀れな幼い少女に、あれほど優しく語りかけたのだから。

しかし、そのときには回心しなかった。その人たちは、心と性質が変えられることを信じていなかったのである。それでも、主をほめたたえよ。主は私を暗やみの中に置き去りにはされなかった。翌日、バプテスマを授けるために人々が私を小川へ連れて行くと、大勢の人が集まっていた。だれかが「あの子はおぼれるかもしれない」と言うのが聞こえた。私は少しこわくなった。「おぼれるかもしれない」と思った。しかし、私は「主よ、たとえおぼれても、やり通します」と言った。そして、主の御手に自分をゆだね、完全に救ってくださいと主に願った。水に入っていくと、光が私を包み、私は回心した。人々はその変化を見て、私が気を失ったのだと言った。

こうして、救い主の愛のうちにある平安と喜びの、新しい生活が始まった。私は満ち足りて幸せになり、一日じゅう歌い、神を賛美した。娯楽の場所へは一度も行かなかった。日曜日には四つの集会に、週日にも三つか四つの集会に出た。病気でないかぎり、一年に一度も集会を休まなかった。今や私は、前にもまして教育を受けたいと願った。イエスのために働き、キリストのぶどう園で役に立ちたかったからである。回心してまもなく、イエスの声が聞こえた。道やかきねのあたりに出て行って、失われた羊を集めなさいと、イエスは私を呼んでおられた。マリヤのように、私はこれらのことを心に留めて、思いめぐらしていた。相談する相手が、だれもいなかったからである。ディサイプル派の人々は、女性にはイエスのために働く権利などまったくないと考えていた。自分の感じていることを話したら、私は笑いものにされただろう。宣教師として以外に、女性が人前で働くなど、聞いたこともなかった。だから、道が開ける見込みはなかった。ただ一つ考えたのは、もし結婚するなら熱心なクリスチャンを選び、ふたりで伝道の働きに入ろう、ということだった。その数年後、私はウッドワース氏と結婚した。

私たちは田舎に住みついた。勤勉に、まじめに働いて、この体を養うだけのこの世のものを、少しでも得ようと考えていた。ところが、私は健康を損ない、何をしてもうまくいかないように思えた。私はクリスチャンの感化から遠く離れ、神の家にもあまり行けなかった。教会の鐘が鳴るのが聞こえると、よく泣きながら眠った。その鐘は、かつては私が礼拝の家へ向かう合図だった。それなのに、今は行けないのだった。試練に次ぐ試練があり、誘惑と落胆が四方から私を取り囲んだ。死の御使が私たちの家にやって来た。数日のあいだあたりを漂ったあと、御使は私たちのただひとりの幼い息子を連れ去った。青い目の、利発でかわいい子だった。息を引き取るとき、その子は上を見上げてほほえんだ。御使のようで、こう言っているように見えた。「お母さん、ぼくのために泣かないで。ぼくはもっといい世界に行くんだよ」冷たい墓にその子を葬るのは、胸が張り裂けそうだった。しかし、私には神の愛の御手が見えた。そして、神が私を呼んでおられる声が聞こえた。もっと高く築き上げなさい、上にあるものを思い、地上のものに心を引かれるな、と。

一年もたたないうちに、死の御使がまた私たちの家に来て、赤ん坊のフレディを連れ去った。同じころ、私も何週間も生死の境をさまよった。これらすべてのことのうちに、私には愛の父の御手が見えた。すべてを捨てて従って来なさいと、父は私を呼んでおられた。このころ、幼い娘のジョージーが回心した。七歳ほどだった。娘は私の大きな慰めだった。神と私たちのあがない主のいつくしみについて話すのが、大好きだった。川の向こうの美しい家のことを、私たちはいっしょに話して、幸せな時を何度も過ごした。娘の弟たちが行ったところである。娘がこんなに早く私のもとを去るとは、思ってもいなかった。弟たちの仲間

に加わり、いっしょに声を上げて、御座にいます私たちの神と小羊に、とこしえに救いを歌うようになるとは。娘はるいれきという恐ろしい病気にかかり、八か月ほど苦しんだ。苦しみはひどかったが、娘は一度もつぶやかず、不平も言わなかった。ただ、これは自分のためになるのだと言っていた。イエスのこと、イエスが用意しておられる美しいすまいのこと、自分を待っている衣と冠のことを読むのが、大好きだった。見舞いに来る人みなに、イエスとその愛について語り、天国で会いましょうと言った。

日曜学校の先生や生徒たち、遠く近くの友だちにも、天国で会いましょうと伝言を送った。亡くなる前の何週間か、娘の顔は神の栄光で照り輝いていた。御使たちが、寝床のまわりを漂っているようだった。娘には、御使たちの歌う声が聞こえた。体は私たちといっしょにあったが、霊は地上を離れて、神と交わっているようだった。イエスのみもとに行くことは喜んでいたが、私を残していくのはつらそうだった。娘はこう言った。「ああ、お母さん、いっしょに行けたら、どんなにうれしいか。お母さんを残していくのはいや。でも、ねえ、天国で会うって言って」私は言った。「ジョージー、そうできるように努めるわ」しかし、それではだめだった。娘は言った。「ああ、お母さん、会うって言って。天国で会うって約束してくれなきゃ、死ねないの」私は言った。「ジョージー、神の恵みによって、天国であなたに会うわ」娘は言った。「これで用意ができた。お母さんはきっと来てくれる。ずっと待ってるからね。お母さんが死ぬときは、迎えに来るから」

亡くなる前の日曜日、娘は私を枕もとに呼んで、「お母さん、わたし、今週お別れするの」と言った。そして、自分の家を整えはじめた。娘は、親しい友だちを訪ねる話でもするように、死ぬことを話した。地上の持ち物は、すべて人にあげてしまった。私には自分の新約聖書をくれた。友だちみんなに、もう一度会いたいとも言った。自分の死に装束と葬られる場所を選び、そのそばに私が葬られる場所を空けておいてほしいと頼んだ。娘は週の終わりまで、私たちといっしょにいた。そして、こう口ずさむのが何度も聞こえた。

「主よ、いま行きます
いま、みもとに参ります
洗ってください、きよめてください、あの血で
カルバリで流された血で」

娘は、イエスのもとに来て救われるようにと、だれにでも勧めつづけた。最後のころ、娘の苦しみは激しかった。口がきけなくなってからも、幸せか、イエスがいっしょにいてくださるかと尋ねると、ほほえんでうなずいた。娘は、もう逝くのだと思った。ひとりひとりに口を寄せて口づけし、苦しい息の合間に、あえぎながら別れを告げた。「天国で会ってね」と言いながら。しかし、娘は持ち直し、さらに二時間生きた。こうして娘は最後まで語りつづけ、その顔は天国の栄光に輝いていた。上を見上げて、娘は言った。「ああ、お母さん、イエスさまと御使たちが見える。小さな弟たちも見える。迎えに来てくれたの」こうして娘は、勝ち誇る一行に天の国へ連れて行かれた。一行が勢いよく門を通り抜けて、新しいエルサレムへ入っていくのが、私には見えるようだった。

いとしい娘と別れるのは、死ぬような思いだった。しかし、イエスは私の魂にとって、とても尊いかただった。天国はこれまでになく近く、キリストはこれまでになくいとしかった。栄光の中に、私の宝がまた一つ増えたのである。

娘が病んでいたあいだずっと、私の健康もひどく悪かった。娘が死ぬ三週間前に、幼いガーティが生まれた。ガーティはジョージーに生き写しで、その優しい気立ても受け継いでいるようだった。大きくなったら、ジョージーの代わりになってくれるだろうと思っていた。しかし、この尊いつぼみは、罪の世で花開くことを許されなかった。生後四か月で、御使たちがガーティを連れ去った。花が決してしおれず、枯れることもないところである。そこでガーティは、金の門で迎えようと待っていた姉と兄たちの仲間に加わった。私はダビデと共に言うことができた。子供たちは私の所に帰ってこないが、私が子供たちの所に行くのだ、と。クリスチャンの望みのゆえに、主をほめたたえよ。

神の小羊を仰げ

罪から自由になりたいと願うなら
神の小羊を仰げ

あなたをあがなうため、主はカルバリで死なれた
神の小羊を仰げ
（おりかえし）
神の小羊を仰げ
神の小羊を仰げ
あなたを救いうるかたは、主おひとりだけ
神の小羊を仰げ
サタンが誘い、疑いと恐れが襲うとき
神の小羊を仰げ

第二章　奉仕への備え

前の章で語った悲しい出来事があってから、私の健康はたいへん悪く、何度も墓の縁まで追いやられた。私を見た人はみな、私は死ぬだろうと思った。しかし、主が私を召してさせようとしておられる働きが、はっきりと目の前に浮かんだ。それで私は、主が私を起き上がらせてくださり、道を開いてくださるだろうと思った。生死の境をさまよっているように見えたこのころ、私はすばらしい幻を見たものだった。

あるとき、罪人の救いのために祈っていると、救い主が十字架にかかった姿で私のそばにお現れになり、私と語られた。私は主の傷ついた体に手を置き、ほほえんでおられる御顔を見上げた。またあるときは、神の愛について思いめぐらしていた。罪人のために死なせようと、ひとり子をお与えになった愛である。神を愛する者のために神が用意しておられる美しい家についても、思いめぐらしていた。すると私は漂うように運ばれ、美しい都に降ろされたようだった。ああ、そこで目にした栄光の光景は、死ぬべき人間の舌では決して言い表せない！　天国は、実在する場所である。本物の都である。そこに住む者たちも、想像上のものではなく、本当にいる。私は、子供たちが輝く栄光に包まれているのを見た。もし母親たちが、そのように自分の子供たちを見ることができたなら、もう子供のために泣くことはないだろう。むしろ、すべてを捨ててイエスに従うだろう。天国で子供たちに会うのを、何ものにも妨げさせないだろう。子供たちはそこで神の御座のまわりに、まばゆいばかりに美しく輝いている。そして、母親たちを美しい都に迎えようと、見守っているのである。私は、自分の子供たちが墓の中にいるとは、決して思わない。そう、決して。私たちが冷たい墓に葬ったいとしい亡きがらは、宝石の入っていた箱にすぎない。その宝石は今、救い主の冠に輝いているのである。

今も、罪人にイエスのもとに来るよう嘆願しているとき、よくこういうことがある。神の愛、天国の美しい家、輝くすまい、衣と冠、小羊の血で洗われた大群衆のことを語っていると、おおいが取り除かれたようになる。そして私は、キリストの愛と栄光の中に我を忘れてしまう。会衆をあとに残して、栄光の雲の中を、上へ上へと漂っていくように感じるのである。ああ、神のすばらしい愛よ！　その半分も知らされていない。決して語り尽くすことはできない。死にゆく世界のための驚くべきあがないの計画、そのあがないの愛を語るには、永遠のすべて

主の力によって、あなたはすべてに打ち勝つ
神の小羊を仰げ
疲れ果てたか、道は遠く思えるか
神の小羊を仰げ
主の愛は励まし、心を歌で満たしてくださる
神の小羊を仰げ
行く手に影が落ちても、恐れるな
神の小羊を仰げ
喜びにも悲しみにも、キリストこそすべて
神の小羊を仰げ

を要するだろう。愛する読者よ、すべてを捨ててイエスに従い、悲しみの決して来ないあの美しい国で、私と会おうではないか。

神はいつも、私のために最良のクリスチャンの友を起こしてくださった。そのいつくしみのゆえに、私は心から神をほめたたえる。私が病気や苦しみの中にあったときはいつも、町のさまざまな教会から牧師や信徒たちが来て、私の部屋で祈祷会を開いてくれた。教会でも、私の回復のために祈ってくれた。私は、幼い娘と息子を残して死ぬことをいとわなかった。神が子供たちを顧みてくださると思ったからである。しかし、神が私を召してさせようとしておられる働きが、目の前に大きく迫ってきた。この何年ものあいだ、神は私を備えてこられたのだった。私が従おうとしなかったからである。神の御前で、私は自分が虫けらのように思えた。魂の救いのための働きを引き受けるなど、私には不可能に思えた。しかし、約束するか死ぬかの時が来ていた。私は神に約束した。健康を回復させてくださり、私を備え、働きを示してくださるなら、それをしようと努めます、と。すると、私はたちまち快方に向かった。

それから私たちは、フレンド派の人々の住む土地に移った。その人々が私を迎えに来て、教会に連れて行ってくれた。そこでは、すばらしい集会が開かれていた。神は私に、こう言われるようだった。「わたしがあなたをここに連れて来た。さあ、働きなさい」ここから戦いが始まった。私はとても臆病で、人を恐れる心に、鎖でつながれたようになっていた。証しをしようと立ち上がると、木の葉のように震え、言いわけを始めるのだった。「ああ神よ、だれかほかの人を遣わしてください！」と。すると主は、幻のうちに、底知れぬ所が開いているのを私にお見せになった。恐ろしさと苦しみに満ちた光景だった。そこでは、人々が泣き叫んだり、歯がみをしたりしていた。そのまわりを大群衆が取り巻いていたが、だれも自分の危険に気づいていないようだった。そして、何の前ぶれもなく、この恐ろしい場所へ転げ落ちていくのだった。私は人々の上の、狭い板の道の上にいた。その道は、曲がりくねりながら天へと上っていた。私は人々に、板の上に来て、あの恐ろしい場所から逃れるようにと、勧め、嘆願していた。何人かが歩きはじめた。私の上には、美しい明るい光があった。私は人々を励まして、あの光について行けば、まっすぐ天国に行けると言っていた。

この幻は、私の心に深く刻まれた。集会で語るように、祈るようにと、神の御霊が私と争われるとき、私はできるかぎり逆らった。すると、あの恐ろしい幻が目の前に浮かび、魂が永遠の苦しみへ沈んでいくのが見えた。イエスの声がささやいた。「わたしはあなたと共にいる。恐れるな」すると私は、たちまち立ち上がるか、ひざまずくかしていた。神の愛と、死にゆく魂のほかは、何もかも忘れてしまった。神が私を通して、人々に語っておられるようだった。しかし、私が立ち向かわなければならない反対は、あまりに多かった。身内の者は反対した。夫と娘も、それにあらがった。そして私自身、出て行って人々の見せ物として立つことに、全身でしりごみした。しかし主は、さまざまな方法で示しておられた。私は行って、主が私に与えておられる働きを果たさなければならない、と。

会ったこともない牧師たちが何人も、折々に私に言った。神はあなたを伝道の務めに召しておられる。あなたは行かなければならない、と。私は言った。「もし私が男なら、喜んでイエスのために働くのですが」牧師たちは言った。あなたには、男にはできない働きがある。主は、失われた魂のために働くよう、あなたを西部へ召しておられる、と。私は言った。「ああ主よ！　ウィリーを連れて行くことも、置いて行くこともできません」すると主は、その子を取り去るのがよいとお考えになった。主はいとしい幼い息子に御手を置かれ、数日のうちに天の家へ連れて行かれた。息子は、私の生きる喜びだった。七歳になろうとしていた。年のわりにとても賢かった。実際、年齢よりずっと大人びていた。近所じゅうからかわいがられていた。病気になったとき、自分はもう治らないとわかっていたようだった。死ぬこと、そしてジョージーに会いに行くことを話した。ジョージーが死んで、その月でちょうど三年だった。息子は言った。いつかは死ななければならないのだから、みんながいっしょに来られるなら、今行くほうがいい。そうすれば、もう病気にもならないし、薬を飲まなくてもよくなる、と。息子は私たちみなに別れを告げ、イエスのところに行くのだと言った。息子は、たいへん幸せそうに死んだ。息子は小さな妹のことをよく話しては恋しがり、妹がいないと生きていけないと言っていた。信仰によって、私には見えた。妹が美しい門で息子を出迎え、神の金の都へ迎え入れているのが。この悲しい死別で、私はほとんど死にかけた。愛する救い主が、これほど近く、確かに感じられたこ

とはなかった。主は私のかたわらにおられ、愛の御腕に私を抱きかかえてくださるようだった。私は言うことができた。『主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな』（ヨブ一・二一）。

ひとりになると、いとしい息子が恋しくてたまらず、胸が張り裂けるほど泣いた。そんなとき、私はいつも祈った。祈っていると、地上のことをすべて忘れ、信仰によって金の都へ舞い上がっていった。そこには、いとしい子供たちがみないっしょに、栄光に輝いていた。子供たちは私を見て言うのだった。「お母さん、わたしたちのために泣かないで。こっちに来て」そして最後にはいつも、子供たちをこんなに幸せな所へ連れて行ってくださった神を賛美し、栄光を帰すのだった。六人のかわいい子供のうち、残ったのは十六歳の長女リジーだけだった。

これらすべての試練の中で、神は私を備えられ、魂の敵との大いなる戦いへの道を開いておられた。今や私の心の大きな願いは、イエスのために働くことだった。救い主の冠に星を一つ加えたいと、私は切に願った。しかし、自分の弱さを思うと、その働きにしりごみした。神の御霊がはっきりと私と争われ、呼びかけてくださるとき、私は従って、「はい、主よ。行きます」と言うこともあった。すると、神の栄光が雲のように私の上に臨んだ。私は何百マイルも運ばれて、麦畑に降ろされたようだった。そこでは、まわりじゅうで麦の束が倒れていた。私は熱意と力に満たされ、全世界の前に立って、死にゆく罪人に嘆願できそうな気がした。すべてを捨てて、すぐに行かなければならないと思えた。するとサタンが洪水のように押し寄せて来て、言うのだった。「おまえが説教するとは、さぞ見ものだろう。人々の見せ物になって、笑いものにされるのだ。おまえにできないことは、わかっているだろう」すると私は自分の弱さを思い、言うのだった。「そうだ、もちろん私にはできない」そして、暗やみと絶望の中に沈んだ。神から逃げ出したかった。あるいは、死ねたらいいのにと思った。しかし、やがてこう考えるようになった。神は私のことを何もかもご存じで、私をこの働きにふさわしい者にする力があり、喜んでそうしてくださるのだ、と。そこで私は、私をふさわしい者にしてくださいと神に願った。

読者にわかっていただきたい。このころ私は、よい経験を持ち、心はきよく、神の愛に満ちていた。しかし、神の働きにふさわしい者ではなかった。私は、自分が虫けらにすぎないことを知っていた。神は、虫けらを取って山を打たせなければならないのだった。そこで私は神に願った。ガリラヤの漁師たちにお与えになった力を、私にもください。奉仕のために、私に油を注いでください、と。私は、パンを求める子供のように神のもとに来た。そして、それを待ち望んだ。神は、私を失望させることはなさらなかった。聖霊の力が、雲のように下った。それは太陽よりも明るかった。私はその中におおわれ、包み込まれた。体は空気のように軽かった。天が下ってきたようだった。私は聖霊と火と力によって、バプテスマを受けた。その力は、それ以来一度も私を離れたことがない。ああ、主をほめたたえよ！　液体のような火があり、御使たちが火と栄光の中で、あたりを取り巻いていた。私が何十万もの男女の前に立ち、キリストの無尽蔵の富を宣べ伝えてきたのは、主イエス・キリストを通して、この力によってである。

フレンド派の人々は、私が一年間、ある牧師夫妻と旅をして、リバイバル集会で働くことを望んだ。費用はすべて出すということだった。しかし夫は、私が行くことも、どこであれこの働きに携わることも、望まなかった。

第三章　備えは進む

私は、ひととおり学びをして、働きの準備をしようと思った。そのうちに主が何かの方法で、夫や身内の者が私を働きに出させてくれるようにしてくださるだろう、と考えたのである。しかし、学びに心を集中することができなかった。何もかもがむなしく空っぽに思え、私は落ち着かず、不安だった。

ある夜、愛する救い主が幻のうちに私のそばに立ち、顔と顔を合わせて私と語られた。そして、地上で何をしているのかと尋ねられた。私は責められているように感じて、言った。「主よ、あなたのぶどう園で働くつもりでおります」主は言われた。「それはいつか」私は答えた。「働きの準備ができたらです」すると主は私に言われた。「あなたが準備しているあいだにも、魂が滅びつつあるのを知らないのか。今行きなさい。わたしがあなたと共にいる」私は主に申し上げた。私には人々に話すことができません。何を言えばよいのかわかりませんし、人々も私の言うことを聞かないでしょう、と。イエスは言われた。「主があなたの魂にしたことを、人々に話せばよい。神の栄光とイエスの愛を語りなさい。罪人に、悔い改めて死とさばきに備えるよう告げなさい。わたしがあなたと共にいる」それでも私は次々に言いわけをした。するとイエスは、そのたびに答えられた。「行きなさい。わたしがあなたと共にいる」

私は主に申し上げた。聖書を学びたいのです。まだ十分にわかっていないのです、と。すると壁に、大きな聖書が開かれて現れた。聖句が、浮き彫りの文字になって浮かび上がっていた。神の栄光が、その本のまわりと上に輝いていた。見ると、私にはそのすべてがわかった。

するとイエスは、また言われた。「行きなさい。わたしがあなたと共にいる」私は叫んだ。「主よ、行きます。どこへ行けばよいのですか」イエスは言われた。「ここへ行き、あそこへ行きなさい。魂が滅びつつあるところなら、どこへでも」主をほめたたえよ。塵にすぎない哀れで弱い虫けらに、これほど驚くべき方法で、みことばと御心を示してくださった。そのすばらしいいつくしみのゆえに、主をほめたたえよ。私はその幻のうちに、何年も懸命に学んで得られるより多くのものを見た。主の聖なる御名をほめたたえよ。私にはわかった。自分にできることに頼ってはならず、力と知恵を主に仰がなければならないのだ。『これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである』と主は仰せられる（ゼカリヤ四・六）。私は、神がご自分の栄光のために用いようとしておられる土の器となるのだった。神の代弁者となるのだった。神が私を通して人々に永遠のいのちの言葉を語ってくださると、信頼しなければならないのだった。

そのあいだずっと、私の内には、ひそかに戒める声があった。罪人を悔い改めに招くべきだ、とその声は告げていた。昼も夜も、その思いを振り払うことができなかった。起きていても夢の中でも、目の前に大勢の会衆がいるように思えた。私が十字架の物語を語ると、みな涙を流していた。こうして何か月も何年も、私は思い悩んだ。それでもなお、ためらい、しりごみした。そして、ヨナのようにタルシシへ向けて帆を張った。もし私が男なら、説教は私にとって喜びだろうと思った。しかし私は女である。たとえ説教できたとしても、女の私が説教すれば、友人や親族のあいだで笑いものになり、さげすまれるだろう。そして、主の栄光ある働きにそしりを招くだろう。

苦しいときにはいつも、私は信仰と恵みと祈りのとりでに逃げ込んだ。ところが、ひそかに祈りに行くと、こういう言葉が臨むように思えた。「あなたは人の前でわたしを拒んでいる。わたしもまた、わたしの父と聖なる御使たちの前で、あなたを拒むであろう」そこで私は聖書を開き、教えと手本を探した。詩人がこう歌ったとき、だれがミリアムをあざけっただろうか。

「姉が一団を率いた
鳴り響くタンバリンを手に
乙女たちは整然と進み
そのあとに従い、叫びつつ踊った」

また、主は迷い出た民に、イスラエルにお与えになった大きな祝福を思い起こさせるために、こう言われた。「わたしはモーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、あなたがたを導かせたではないか」また、預言者たちも神に任じられた。戦いが迫ったとき、バラクは、デボラが先頭に立たなければ、敵に立ち向かおうとしなかった。すると、いつでも神とその働きのために働こうとしていたこのけだかい女性は、言った。「必ず行きます。神の民を敵のえじきにしてはなりません」「いいえ、決して。イスラエルの男たちを呼び集めなさい。シセラの大軍が集まっています」

聖書を読み続けるうちに、私にはわかった。世のどの時代にも、主はご自分でお選びになって、男も女も子供も起こしてこられた。ミリアム、デボラ、ハンナ、ホルダ、アンナ、フィベ、ナルキソ、ツルパナ、ペルシス、ユリヤ、マリヤたち。福音のためにパウロと共に働き、その名がいのちの書に記された姉妹たち。そして、そのほか、働きをたたえられている多くの女性たちである。子供たちでさえ、主の誉れと栄光を現す器とされた。（第一サムエル三・四、エレミヤ一・六、民数記二二・二八を参照）

調べれば調べるほど、私を責めるものが見つかった。主が一タラント、二タラント、五タラントをお与えになるたとえがあった。それを受けた者には、それぞれ果たすべき務めがあり、それぞれの報いがあった。私には一タラントがあったが、それを隠したままにしていた。

預言者ヨエルによって、福音の時代ならではの特色の一つがこうであると、私たちは教えられる。『あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ』（ヨエル二・二八～二九）。預言者ヨエルによれば、終わりの日は、とりわけこのような預言がきわだつ時となるようである。私たちは神の定めをくつがえすことはできない。『天地は滅びるであろう。しかし、神の言葉はとこしえに変ることはない』と言われているからである（マタイ二四・三五、イザヤ四〇・八）。（巻末の、女性の働きについての説教を参照）

さて、この点に敏感な人々に、問いを投げかけたい。第一に、女性が説教に召されているという立場にも、男性が召されているという立場と同じだけの根拠があるのではないか。伝道の務めへのそのような召しがあると認めるなら、その働きを男性だけのものとする権威は、どこから来るのか。パウロと共に労した女たちの働きは、いったい何だったのか（ピリピ四・三）。第二に、女たちが預言をしないで、どうして神に従うことができるのか（使徒二・一八）。ピリポには、預言をする四人の娘がいた（使徒二一・九）。それは、福音の御国の時代が始まって三十五年ほどたったころ、神の権威によってなされたことではなかったか。そして今、女性がキリストの御国、キリストのぶどう園で働くことは、そのころよりもふさわしくないことなのか。

召された伝道者によらなければ神に受け入れられる説教はない、と決めるのなら、だれが、その召しを見定める力を勝手に自分のものとするのか。奇跡の力を授けられた者は、だれもいないというのに。

しかし、みことばを宣べ伝えるのに神の権威などないと言うのなら、最も実を結ぶ働きをする人を最も励ましてよいではないか。良い働き人がみな、正しい報いを受ける時が来る。こう言われているからである。『もろもろの谷は高くせられ、もろもろの山と丘とは低くせられ、曲った所はまっすぐになり、険しい所は平地となる。こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。これは主の口が語られたのである』（イザヤ四〇・四～五）。

私が初めて開こうとした集会は、数年前に私たちが住んでいた小さな町でのことだった。まさに夫の身内の人々のただ中である。その人々に語るのは、私にとって十字架だった。しかし私は言った。神の御名によって、支えてくださる神の恵みによって、やってみよう。結果は神にゆだねよう、と。語ろうとして立ち上がると、この聖句が心に浮かんだ。『あなたの家を整えておきなさい。あなたは死にます、生きながらえることはできません』（イザヤ三八・一）。

その主題について語りはじめると、人を恐れる心は私を離れた。そして、口に出すのが追いつかないほど速く、言葉が与えられた。義理の姉妹は泣き崩れて、会堂から出て行った。集会を数日続けると、二十人が回心を告白した。その一帯のいたるところで、人々が回心した。この集会に来ていたひとりは、のちに私の娘婿になった。

夫が自分の仕事に専念できるように、私は家事を続けながら、できるだけ多くの時間を集会に充てた。私たちが西部へ行くための資金を、何とかして集めたかった。七マイルの道を馬で行き、土曜日の夜に集会を開いた。日曜日には三回、ときにはそれぞれ別の教会で集会を開き、それから起伏の多い悪路を馬で帰った。家に帰り着くころには、私はほとんど疲れ果て、家の仕事をするのに歩き回ることもままならなかった。それでも、週の終わりにはまた出かけた。週日にもよく、私が生まれ育った土地のまわりの町々で集会を開いた。結婚してから私たちが住んでいたあたりである。

身内の者や、昔から知っている人々の前で話すのは、私にとって十字架だった。しかし神は、どこでも私の働きを驚くほど祝福してくださった。どこへ行っても、会堂は人でいっぱいになった。私は説教の原稿を書かず、説教の筋書きも用意しなかった。聖句を一つ取り上げ、神がご自分の方法で導いてくださると信頼した。私の育った土地で数日間集会を開いていたときのことである。会堂は毎晩いっぱいだった。ある夜、聖句が与えられなかった。人々が押し寄せ、会堂はすし詰めになった。私はこわくなりはじめた。ある兄弟が私に言った。「今夜は、ディサイプル派の人たちが大勢来ていますよ」目の前には数百人の人がいるのに、私には聖句がなかった。話すことが何もないのである。何もかもが空っぽだった。私はイエスに嘆願しはじめた。私は主に申し上げた。あなたが私を説教に召されたのです。ここに飢えた群衆がいるのに、私には与えるパンがありません、と。すると、主は約束をたがえず、この人々に御力を示して、ご自分の栄光を現そうとされた。私に言葉が臨んだのである。「キリストといわれるイエスを、あなたがたはどうするのか」その聖句のある箇所も示された。イエスが私の耳にささやかれるようだった。「わたしはあなたと共にいる。恐れるな」私は集会を始め、その聖句を読み上げた。そうすると力が臨み、私はただ口を開きさえすればよいように思えた。会堂じゅうで、人々が泣きはじめた。私は一時間十五分語った。聖霊のバプテスマを受けたときと同じように、力が臨んだ。会堂が神の栄光に満ちているようだった。私は、人々の上に引き上げられたように感じた。塵にすぎない虫けらを助けてくださった神に、栄光あれ。

「悪魔の巣窟」と呼ばれる土地で、神が私に与えてくださった勝利のことを話そう。神の栄光のため、また失われた魂のために働いている人々を励ますためである。私たちがただ神に信頼しさえすれば、神にとって難しすぎる場所はないことを示したい。そこは、不信仰と懐疑で知られた土地だった。どの教派にも開かれた古い会堂が一つあったが、そこで回心した人がいるとは、聞いたこともなかった。最もすぐれた牧師たちのなかにも、ここで集会を開こうとした人々がいたが、みな嫌気がさして去って行った。この土地は、家から六マイル離れていた。私は何度か、ここへ行くのを断っていた。しかし、ついに行くことに決めた。神は不信仰の土台を揺り動かしてくださる、枯れた骨のあいだに動く音が起こる、と信じたのである。大勢の人が私を迎えた。人々はただの好奇心から来ていて、私が逃げ出すのを見物するつもりだった。語るのも、祈るのも、歌うのも、すべて私ひとりでしなければならなかった。しかし、神は大いなる力をもってそこにおられた。不信者のなかには、青ざめて、座ったまま震える者もいた。数日のあいだ、私は泊まる所もほとんど見つからなかった。私は昼の集会を開くことにした。しかし、人々は言った。「とんでもない、昼に集会なんて開けませんよ。だれも来やしません」私は答えた。ほかにだれも来なくても、私は行って、神がこの人々の上に力を注いでくださるように祈ります、と。四日目ごろ、何人かがはっきりと回心した。その人々は働きはじめた。

知らせは火のように広まり、何マイルも四方からクリスチャンや歌い手や牧師たちがやって来た。会堂に入れない人が何百人もいた。戸や窓は開け放たれ、たいへん静かだったので、外にいた人もほとんどみな聞こえたと思う。私は二週間集会を開き、七十五人が主の側についた。七十五歳ほどの老人とその妻、そしてその子供のうち九人が回心した。主の側についた人は、ほとんどみな二十歳を越えていた。その地方全体で最もかたくなな罪人たちのなかにも、回心した者がいた。人々は、神が驚くべき力をもってそこにおられたことを、認めないわけにはいかなかった。私は、生徒百五十人の日曜学校を組織し、有名な酒飲みだった男を校長に据えた。毎週二回の祈祷会を定め、毎週日曜日の集会も始めた。何人もの牧師が、説教をしに来ると約束してくれた。人々は言った。すばらしい働きだ

が、長続きはしないだろう。私が去れば、すたれてしまうだろう、と。神はほむべきかな。この世に戻った人のことは、ひとりしか聞いていない！

神をほめたたえよ。働きは続いており、罪の荒野は、ばらのように花咲いた！のろいと冒涜の言葉があったところに、歌と神への賛美がある。決して落胆しないようにしよう。神にしっかりと寄りかかろう。ただ神に信頼し、神に栄光を帰しさえすれば、神はそのたびに勝利を与えてくださる。神の約束を信じる信仰により、小羊の血の効力によって与えられる勝利のゆえに、神をほめたたえよ！

主の働きを始めようとしている人々を励ますために、言っておきたい。神は、終わりまでいつも私たちと共にいると約束してくださった。私たちは、神がそれを通して語られる土くれにすぎない。『これは権勢によらず、わたしの霊によるのである』と万軍の主は仰せられる（ゼカリヤ四・六）。聖霊が私たちの心に住まわれ、生活と行いを通して輝き出ておられるとしよう。そして信仰によって、神の言葉をそのまま受け取るとしよう。そうすれば私たちは知るだろう。いつでも、どこでも、神の恵みは十分であり、神はそのたびに勝利を与えてくださることを。城壁が崩れ落ちる前に、信仰によって勝利を自分のものとしなければならない（ヨシュア六・二〇）。

礼拝の歌

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能の主なる神
朝まだき、私たちの歌はみもとに昇る
聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、あわれみ深く力ある神
三つの位格にいます神、ほむべき三位一体
聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、聖徒はみなあなたを拝し
ガラスの海のほとりに、金の冠を投げ出す
ケルビムとセラピムも、みまえにひれ伏す
昔いまし、今いまし、とこしえにいます神よ
聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能の主なる神
地と空と海で、あなたのみわざはみな御名をほめたたえる
聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能の主なる神
三つの位格にいます神、ほむべき三位一体

第四章　働きに出る

あるリバイバル集会から帰る途中、私はひどい風邪をひき、それがのどに来た。私たちは、家から十マイルのコロンビアナに立ち寄った。そこにいるあいだに、メソジストのある組長が、祈祷会を受け持って説教をしてほしいと私に頼んだ。集会を告知するには、もう遅すぎた。そこで私は答えた。行けるようなら行きます。ただ、ささやき声しか出ないので、賛美の集会にしましょう、と。その教会は、見栄や高ぶりや催し物などを追い求めるうちに、力を失っていた。生気のない有様だった。行ってみると、驚いたことに、人々が大勢詰めかけていた。人々は次々に来て、会堂はいっぱいになった。その会堂には千人が入るということだった。そこにいる私は、座っているのもやっとで、声はかれてほとんど話せなかった。助けてくれる牧師もだれもいなかった。これほどの会衆の前にも、これほど着飾った人々の前にも、立ったことはなかった。私は席で震えた。しかし、ああ、どれほど神にすがりついたことか。私は黙って祈り、風邪も声のかれも、人を恐れる心も、何もかも取り去ってくださるように願った。そして、死にゆくあの人々に語る言葉を与えてくださるように願った。

説教壇に上がれたら、人々に言おうと私は思った。これは手違いで、話すと約束したわけではないのです、と。説教壇はひどく遠くに思えた。それでも私は進み出て、立ち上がった。主のために働きはじめてから初めて、言いわけをするためである。そうしたとき、この聖句が心に浮かんだ。『わたしは大いなる工事をしているから下って行くことはできない』（ネヘミヤ六・三）。私は、神が風邪を取り去ってくださると信頼した。はじめの五分間、人々には一言も聞き取れないほどだった。やがて私の声は澄んで力強くなり、会堂のどこでもはっきり聞こえるようになった。言葉は、ひとりでにあふれ出てくるようだった。私は一時間語った。神の力が驚くほど現れた。会堂じゅうで人々が泣き、死のようなおごそかさが会衆を覆った。人々は私にリバイバル集会を続けてほしいと望んだが、私にはできなかった。あの集会を思い出すたびに、私の信仰は強められる。そして、私たちの主イエス・キリストを信じる信仰によって与えられる勝利のゆえに、神をほめたたえたくなる。栄光と力と賛美が、世々限りなく主にあるように。アーメン。

一か所にとどまる働きにも、いろいろと招きがあった。そこでなら、よい暮らしもできただろう。合同兄弟教会は、私が婦人伝道会か、巡回区を一つ受け持つことを望んだ。バイブル・クリスチャン派は、私が自分たちに加わり、三つの大きな教会を受け持つことを望んだ。メソジストは、一つの教会を受け持ってほしいと望んだ。どれも家から十マイル以内で、よい給料も受けられただろう。しかし私は、自分の使命は伝道者のそれだと感じていた。私の働きは一つの任地や場所に限られず、主が導かれるところならどこにでもある、と感じていた。私は合同兄弟教会に加わり、説教をすることと、教会を組織することの許しを得た。私は感じた。所帯をたたみ、家も友も、ひとりだけの子供も後に残して、西部を巡り歩かなければならない時が来たのだ。それはつらい試練だった。私は、自分の及びがたいほどの高い岩に逃れなければならなかった。そうして、ようやくこう言うことができた。

「主よ、御心に従って私は行きます
地上のすべてを喜んで後にして
ただあなたが私の導き手となってください
そうすれば、私はどこまでもあなたに従います」

夫は今では、私と共に働きに出ることを望み、しきりにそうしたがっていた。それには強い信仰が要った。弟子たちのように財布も袋も持たずに出発し、必要を満たしてくださる主に信頼しなければならなかったからである。

イエスの約束はまことであると、私は知っている。主のためにすべてを捨てるなら、家も畑も、姉妹も兄弟も与えられ、天国にも家が与えられるのである。どに

こへ行っても、御国に生まれた愛する母や父、姉妹や兄弟、愛する子供たちに出会う。その人々は、私にとって自分の身内と同じように愛しい。

西部へ行く前に、私は九回のリバイバル集会を開き、二つの教会を組織した。その一つは会員が七十人ほどだった。また、生徒百人ほどの日曜学校を組織し、同じ場所で祈祷会を定めた。八つの教派のために、二十二の会堂と四つの校舎で説教し、二百回の説教をした。この働きは、一年半ほどのうちになされた。この短いあいだに、神は私の働きを祝福してくださった。何年も、いや一生働いても見られないと思っていたほどの、栄光ある実を結ばせてくださったのである。主の聖なる御名をほめたたえよ。

神が私を召しておられた働きに就くために西部へ向かったとき、最初に立ち寄ったのはオハイオ州ウィルシャーだった。その晩、私はメソジスト監督教会で説教し、翌日、私たちはフェアビューへ行った。そこでは、S兄弟とT兄弟が一連の集会をちょうど終えようとしていた。組会の人々が集会を続けてほしいと頼んだので、私は十六日間続けた。これらの集会のときほど、神の力が驚くべき仕方で現れたのを、私は見たことがなかった。その教会では、何年も前からもめごとがあった。最も良い会員の何人かが去り、教会は力を失っていた。神がこの教会に愛と和合を取り戻そうとしておられる、と私は感じた。私はそれらの家庭を訪ねた。集会の三日目には、もめごとはすっかり収まった。出席していた人はみな祭壇の前に出て、すべてをささげ、聖霊と火のバプテスマを祈り求めた。その夜、それは臨んだ。十五人が、あわれみを求めて叫びながら祭壇の前に出た。男も女も倒れ、死んだように横たわった。このようなことは見たことがなかった。神のわざだとは感じたが、どう説明すればよいのか、何と言えばよいのかわからなかった。

私は少しこわくなった。私は集会の指導者だったので、人々がどう思うか、私に何をするか、わからなかったからである。神への恐れが人々を覆うなか、私はどうしてよいかわからずに見守っていた。すると神の御霊が、私が主の働きに出る前に見た幻を思い起こさせてくださり、言われた。「あなたが運ばれて、麦畑と、倒れる麦の束を見たときのことを、覚えていないか。あの広い麦畑は、あなたが福音を宣べ伝える大勢の人々であった。倒れる束は、今夜ここであなたが見ているもの、すなわち人を打ち倒す神の力である。これはわたしの力である。わたしはあなたと共にいて、あなたの戦いを戦うと言ったではないか。罪人をやみから光に導き出すのに要るのは、人の知恵ではなく、神の力と知恵である」主はわずかのあいだに、驚くべきことを私に示してくださった。私の恐れはすっかり消えた。会堂のあちこちに、人々が死んだように倒れていた。二時間ほど横たわったあと、みな、ひとり、またひとりと、稲妻のようにすばやく跳ね起きた。その顔は輝き、人々は会堂じゅうで叫んだ。あれほど輝かしい回心も、あれほどの叫びも、見たことがなかった。人々は羽のように軽やかに見えた。牧師たちや年老いた聖徒たちは泣き、大声で主をほめたたえた。人々は言った。これはペンテコステの力だ。主が大いなるあわれみと力をもって私たちを訪れておられるのだ。大きな勝利が来ようとしている、と。

あの集会から、今で十二年になる。主は終わりの日にそうすると約束されたとおり、聖霊を注いでくださった。そして「しるしと不思議」が伴った。主は、ご自分の大いなる輝かしい日が来る前に、御霊の後の雨を降らせると言われた。それは、イエスが雲に乗って来られる前に、魂の最後の刈入れを集めるために与えられるのだった。私は幾度も、何千人もの会衆の前に立って説教し、また歌った。そのとき聖霊が人々の上に下られ、波また波となって会衆を覆われた。ついには群衆が、嵐の中の森の木々や麦の穂のように、前後に揺れ動いた。背の高い樫の木のような人々の多くが、会堂や野営地のあちこちに倒れ伏した。そして、コルネリオの家でのリバイバルのように、立ったまま、また席に座ったまま回心する人も多かった。

多くの人が叫び、ほかの人々は声をあげて泣いた。またあるときは、心を溶かす力となって、御力が会堂を吹き渡った。数分のうちに、聖徒も罪人も、会衆のほとんどみなが泣いていた。死のようなおごそかさが人々の上にとどまった。物音一つ聞こえず、身動き一つ見えなかった。人々は神の力にとらえられていたのである。このように聖霊が注がれると、そのあとには必ず、何百人もの人がキリストのもとに来た。私が使徒たちの道筋に沿ってみことばを宣べ伝えると、主は「しるしと不思議」と御霊の現れとをもって、それを裏づけてくださった。

主は、私たちが終わりの日にいることを示してくださった。主は私のすべての集会で、御霊を注いでくださった。神をほめたたえよ。聖霊がどのように臨まれても、主が導いておられることを私は知っていた。次のみことばを、私はどれほど身にしみて知ったことか。『これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである』と主は仰せられる（ゼカリヤ四・六）。ああ、愛する父なる神の次の言葉は、何と尊いことか。『あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう』（詩篇八一・一〇）。『彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである』と主は仰せられる（エレミヤ一・八）。『あなたは腰に帯して立ち、わたしが命じるすべての事を彼らに告げよ』（エレミヤ一・一七）。『彼らを恐れてはならない。さもないと、わたしは彼らの前であなたをあわてさせる』（エレミヤ一・一七）。「行きなさい。わたしがあなたと共にいる」『強く、また雄々しくあれ』（ヨシュア一・九）。ほかにもある。自分の責任の重さを感じ、満員の会堂を見渡すと、私はペテロのように沈みかけて、叫んだものだった。「主よ、お助けください。主よ、この土くれを御栄えのためにお用いください。この死にゆく人々に語る言葉をお与えください」

すると、それらの約束のいくつかが、聖霊と共に次々に押し寄せてきた。ついに私はキリストのうちに我を忘れ、さばきへと突き進む死にゆく群衆のほかは、何も見えなくなるのだった。

ああ、主をほめたたえよ。主は私たちを優しく顧みてくださる。主の驚くべき救いは、私たちの魂を栄光で満たす。その救いは、迫害への恐れ、人への恐れ、悪霊への恐れを取り去る。そして「主を愛する者には、万事が共に働いて益となる」ことなどを思い起こさせて、試練のただ中でも私たちを喜ばせる。また、死への恐れも取り去る。墓を見つめると、カルバリから叫ぶ声が聞こえる。『わたしはよみがえりであり、命である』（ヨハネ一一・二五）。死は栄光への門である。

次に働いたのは、セントメアリーズ巡回区のベテル会堂だった。そこで私はリバイバル集会を開き、それは十一日間続いた。組会はひどい状態だった。教会では九年ものあいだ、もめごとが続いていた。十六人以上の会員が教会を去っていた。しかし組会には和合と愛が戻り、去った人のほとんどみなが帰って来た。D老人は生涯ずっと教会に加わらずにいたが、進み出て教会に加わった。その家族のうち十一人も、それに続いた。ある兄弟は伝道の務めに身をささげ、今は栄光の福音を宣べ伝えている。ひとりの不信者は罪を示されて回心し、今は伝道の務めに就いている。百三十五人が祭壇の前に出て、三十九人が組会に加わった。四方からクリスチャンの働き人や牧師たちがやって来て、私たちは栄光に満ちた時を過ごした。会堂はあふれるほどいっぱいで、半分の人は入れなかった。求道者たちは踏みつけられた。悔い改めて泣く人々の場所を取ることができなかった。祭壇も脇の席もいっぱいで、集会を閉じた夜には、三十二人が祭壇の前にいた。来た人はみな、罪を示されたようだった。

ふたりの若者が集会に初めから終わりまで出て、深く罪を示されていた。私は昼も夜も、ふたりのために力を尽くした。これがふたりの最後の機会だ、と私は感じた。今イエスのもとに来なければ、その滅びは定まってしまう。私はふたりに、死があなたがたのあとを追っていると思う、と告げた。ふたりは青ざめたが、従わなかった。集会が終わってまもなく、ふたりはほとんど同時に病に倒れた。ふたりとも最期まで意識が戻らず、一筋の望みもないまま永遠へと去って行った。人々は、私がどれほどふたりのために力を尽くしたかを思い出した。そして、これはほかの人々への神の警告だと考えた。救い主の腕の中に逃れ、正しい神の報復を免れよ、という警告である。ああ、キリストなしに死ぬのは恐ろしいことである。暗やみの中へ跳び込み、ヨルダンの暗い水の中へ下って行くのである。その水をご自分の栄光で照らしてくださるキリストもなしに。

インディアナで

私たちは一連の集会を開くために、インディアナ州プレザントミルズへ行った。そこでは、組会がほとんど崩れかけていた。救いの経験のある人は六人しか見つからず、その人々も落胆していた。牧師でさえ、組会が再び建て上げられる望みを持っていなかった。そこではバプテストの勢いが強く、教会のあいだに争いがあった。兄弟たちの多くは、行かないほうがよいと私に勧めた。しかし私は、そんなに難しい所なら、どこよりもそこに働きが必要だと考えた。城壁が崩

れ落ちる前に、私は勝利を自分のものとした。始めた夜、会堂は人でいっぱいだったのに、会員はふたりしか来ていなかった。私は『わたしは大いなる工事をしているから下って行くことはできない』という聖句から語った（ネヘミヤ六・三）。私はおもに教会の人々に向けて語った。私は人々に告げた。私たちはキリストにある兄弟姉妹で、みな主のために建物を建てる仕事に携わっている。そして、ひとりひとりに、その建物の受け持ちがある、と。

私は人々に、進み出て手伝ってほしいと呼びかけた。それはあなたがたの特権であるだけではない。神は、あなたがたが主を助けて勇士に立ち向かうよう命じておられる。私たちには戦うべき大きな戦いがあり、兵士はひとり残らず必要なのだ、と。神は言われた。「主を助けて勇士に立ち向かわない者は、のろわれる」どの教会の人々も進み出て、だれがバプテストで、だれが兄弟教会の者か、見分けがつかなかった。バプテストの牧師のB兄弟も進み出て、できるかぎりのことをすると申し出た。その多くが、確かな救いの経験に入った。ふたりが祭壇の前に出て回心した。私たちはみな愛のきずなで結ばれた。そのきずなが永遠に続くことを願う。初めは、教会が建て上げられると思う人はだれもいないようだった。人々は言うのだった。「ここで何か良いことが起こったら、それこそ思いもよらないことです」人々には信仰がなく、私はまったく頼りにできなかった。

三日目に、六十歳ほどの老人ふたりが、生まれて初めて祭壇の前に出て回心した。ひとりの若者も進み出た。そして彼らはすぐに働きはじめた。見ることは信じることである。これが会員たちを燃え立たせ、私たちは栄光に満ちた時を過ごした。会堂は毎晩あふれるほどいっぱいになった。集会は十六日間続いた。五十五人が祭壇の前に出た。ほとんどみなが、輝かしく回心したと思う。

日曜日の朝、私には語るべき言葉が見つからなかった。教会に着くと会堂はいっぱいだったが、まだ聖句がなかった。玄関に足を踏み入れると、ある兄弟が私に尋ねた。説教の時間に葬儀の説教をしていただけますか。もしそうなら、まもなく葬列が来ます、と。私は少し考えた。すべては主から出たことだと思い、引き受けると答えた。しかし、私は葬儀の説教をしたことがなかった。ああ、ご自分の栄光のために私を導いてくださるよう、どれほど神を仰いだことか。神が私を通して語ってくださらなければ、私は恥を見るとわかっていた。この聖句が心に浮かんだ。『わたしは彼の所に行くでしょうが、彼はわたしの所に帰ってこないでしょう』（第二サムエル一二・二三）。聖書のその箇所を開くと、神の光がその聖句を照らしているようだった。亡くなったのは子供で、その両親は救われていなかった。ふたりとも罪を示され、高価な真珠を見いだすまでやめないと私に約束した。私が立ち上がって聖句を読むと、その意味が開かれ、神の御霊が大いなる力をもって下られた。会堂じゅうで人々が泣いていた。ああ、主をほめたたえよ。私たちが主に信頼するとき、主はいつもそこにおられ、助けてくださる。

第五章　思いがけない祝い

集会を開いているあいだに、私は、病気で救われていないある男を訪ねた。私は彼と語り合い、共に祈った。彼は穏やかに救われた。私が帰るとき、彼は救い主の愛を喜んでいた。彼は教会に迎え入れられたが、数週間後に亡くなった。彼はたいへん幸せで、すべてを主にゆだねていた。私は別れを告げに行った。彼は言った。もうすぐ行きますが、上にある美しい都でまたお会いしましょう、と。最期の時が近づくと、友人や近所の人々が集まって来た。彼は人々に語りかけ、キリストを求めて天国で自分と会うよう勧めた。御使たちと、先に世を去った幼い子供が、この部屋にいる、と彼は言った。彼は息を引き取るまで叫び、神をほめたたえた。勝利に満ちたその死を見て、最もかたくなな罪人のなかにも、信仰がまことであると悟った者がいた。ああ、『わたしは義人のように死に、わたしの終りは彼らの終りのようでありたい』（民数記二三・一〇）。愛する父なる神は、ご自分の子供たちを、ひとりまたひとりと家へ呼び寄せておられる。私たちのなかには、ここよりも向こうの金の岸辺に、多くの愛する者がいる人もいる。その人々は、私たちを見守り、待っている。その人々が見守るのは、むだになるのだろうか。

オハイオ州リマにいたとき、私はP老人のために、本人には知らせずに開かれた祝いの会に出た。その日はP老人の八十三歳の誕生日だった。百六十人ほどが、家の近くの美しい木立で食事をした。郡で最も古い開拓者たちも何人か来ていた。老人が山ほどの贈り物を受けたあと、私は歌で集会を始めた。ヴァンワート郡に最初に住みついたR老人が、祈りを導いた。私は「私たちは旅人であり寄留者である」という聖句から説教し、そのあと賛美の集会を開いた。九人が、神の民に祈ってもらうために立ち上がった。最後に「かなたの家を思え」を歌い、握手をして閉じた。あの栄光ある集まりで再び会うことは決してないだろう、と私たちは感じた。しかし忠実であるなら、私たちはみな金の岸辺で会うだろう。そこでは、もう二度と別れを告げることはない。

B兄弟に頼まれて、私たちは五月にオリーブブランチ巡回区のシオンへ行き、集会を始めた。集会は二週間続いた。組会の名簿にはいくつか名前があったが、その人々は散り散りになっていた。忠実な人は二、三人しか見つからなかった。その人々も牧師も、落胆していた。戦わなければならない反対があまりに多く、シオンが起きて光を放つことは決してないと思っていた。しかし私は信仰によって持ちこたえ、城壁は築かれはじめた。とうもろこしの種まきの時期だったが、私は昼も夜も集会を開いた。集会には大勢が集まった。日曜日には会堂がいっぱいになり、夜には全員が中に入ることはできなかった。神の民は大いに生き返り、信仰から離れていた人々は立ち返った。多くの人が、まことの光の中に進み出た。

集会が終わって数日後、ひとりの男が教会の近くで落馬して死んだ。それは、罪の自覚にあらがっている人々への神の警告だったと思う。彼はキリストの外にいた。暗やみの中へ跳び込んだに違いない。愛する読者よ、あなたはどうだろうか。もし今日、死の青ざめた使いがあなたを迎えに来たら、あなたは永遠の中へ跳び込み、審判者がこう言われるのを聞くのだろうか。「のろわれた者どもよ、わたしを離れて、永遠の刑罰に入れ。そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう」それとも、叫びながら栄光の家に帰るだろうか。あなたが天国を自分の家とすることができるよう、神が助けてくださるように。

それらの土地を訪ねたあと、私はある校舎で数日間集会を開いた。十五人が、祈ってもらうために立ち上がった。一つの家族の六人が、主の側についた。私が懸命に働きかけ、キリストのもとに来るよう説いていたひとりの若者が、まったく突然に死んだ。彼は、救われたというしるしを何も残さずに死んだ。その死は、近所一帯に暗い影を落とした。父親も家族全員も、母親のほかは救われていなかった。私はとりわけこの家族のことが気にかかっていた。しかし、彼らは一度も集会に来なかった。

兄弟たちの何人かが、その家族の住まいの近くにある校舎を借りられると言った。私たちが集会を一度開くと、その家族も出席した。私たちはひと月のあいだ、週に一度集会を開いた。母親はたいへん輝かしい経験に入り、父親と五人の子供も喜びのうちに回心した。ただ、息子のひとりは別だった。その息子は、まだ心が満ち足りないと言った。家族はみなフェアビューの組会に加わり、たいへん熱心な働き人になっている。教会にとって大きな助けになるだろうと思う。C兄弟がフェアビューで説教し、教会の扉を開いて入会を呼びかけた。十人が迎え入れられ、そのなかにこの家族もいた。それから私たちは川へ行き、そこで二十人がバプテスマを受けた。これほど美しい光景を見たことはなかった。聖霊が大いなる力をもって下られ、ほとんどみなが、叫び、主をほめたたえながら水から上がった。たいへん大勢の群衆がその光景を見守った。だれもが神の力を感じているようだった。それから私たちは校舎へ行き、夜には説教があった。

私はベテルで何回か集会を開いていたが、家に帰って来て驚いた。四方から、軽馬車や荷馬車や人々が、家に向かって来るのである。愛する兄弟姉妹や友人たちが、私の三十九回目の誕生日を祝うために、その日集まって来たのだった。みなが食べ物をいっぱいに詰めたかごを持って来て、食卓はごちそうであふれた。食卓にたっぷりと並べられたごちそうをみなで十分に味わったあと、私はたくさんの贈り物を受けた。それから私たちは近くの木立に集まり、その日の残りを礼拝のうちに過ごした。T牧師が開会を告げ、W兄弟が祈りをささげた。H兄弟がその場にふさわしい言葉を述べ、ほかの兄弟たちもすばらしい話をした。そのあと、姉妹たちの何人かも言葉を述べた。神の力が驚くほど現れた。それから私は人々の親切に感謝し、やがて川の向こうで私たちを待っている栄光の再会につい

て話した。そして私たちは立ち上がり、「かなたの家を思え」を歌った。私は言った。歌いながら握手をし、みなでかなたの家と愛する者たちを思いましょう、と。会衆はみな泣いた。そして私たちはみな感じた。たとえ地上で二度と会えなくても、別れも悲しみもない天国で会うだろう、と。

私は川のほとりの美しい木立で、弁当を持ち寄る集会を開いた。一八八三年七月二十八日に始まり、三日間続いた。大勢が集まり、たいへんよく秩序が保たれた。日曜日には、二千人ほどが木立に集まった。朝には賛美の集会を開いた。あらゆる教派から来た神の子供たちが、声をあげて天国への望みを語っていた。それを見、また聞くのは、栄光に満ちた光景だった。この天の宴の終わりに、私は次の聖句から説教した。『見よ、ユダ族のしし、ダビデの若枝であるかたが、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる』（黙示録五・五）。神の力が驚くほどそこにあった。死のような静けさが人々の上にとどまり、聖徒も罪人も多くが泣いた。午後には、M兄弟が「教会の夜明け、その月の光と今日の日の光」と題して説教した。終わりに、私たちは近くの川へ行き、何人もがM兄弟からバプテスマを受けた。川岸に群がる人々を見渡していると、私の思いはヨルダン川の光景へとさかのぼった。夜には、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』という聖句から説教した（マタイ二五・六）。

第六章　インディアナ州ウッズ・チャペル

インディアナ州との境を越えたウッズ・チャペルから、マケドニヤの叫びのような招きが、たいへん切実に届いた。私は、主が召しておられると感じた。集会を始めたときの有様は、まことに心くじけるものだった。会堂は新しかった。組会は、おもに回心していない会員で組織されていた。九年ほど前に教会で争いがあり、会員は散り散りになっていた。

組長は墓の縁でよろめいているような人だったが、神はほむべきかな、立ち返った。その妻と、家族のほとんどみなも、群れの中に導き入れられた。もうひとりの兄弟は、かつて主の働きを大いに助けた人だったが、力も救いの経験も失っていた。彼は、二度と信仰に関心を持つことはないと言った。最初の夜、会堂はいっぱいだった。人々の祈りが必要なときがあったとすれば、それはまさにそのときだった。私はひどく弱っていて、説教台に上がるのもやっとだった。私はこの人に祈りを頼んだ。彼は祈りはじめた。「主よ、あなたがこの女をここに送られました。たとえこの女がさばきの日まで説教しても、だれひとり救われないでしょう」云々。私は顔を上げて、だれなのかを見た。私は言った。「あなた、幾日もたたないうちに、考えを変えることになるでしょう。私のために祈れないのなら、私は自分のために祈れます」そのことが私に力と強さを与えたのだと思う。

次の夜、私はまた彼に祈りを頼んだ。彼の祈りが変わったのを聞いて、人々は喜んだ。私は十二人を教会に迎え入れた。彼は真っ先に私に手を差し出したひとりで、私の最もよい友のひとりになった。神をほめたたえよ！　私が新しい戦いの場に行くと、偏見を持っている人や、私と戦おうと構えている人が、いつも真っ先に福音の網にかかる。そして真っ先に、私を自分の家に招いてくれるのである。

多くの家族が、家族ごと教会に迎え入れられた。周囲三マイルのうちで、集会で家族のだれも回心しなかったという家は、ほとんどなかった。集会は昼も夜も五週間続き、人々の関心はますます高まっていった。会堂はたいてい、あふれるほどいっぱいだった。それまで一度に開いた集会の、ほとんど二倍の長さだった。

少し前、この集会のあいだに回心した、その土地の兄弟に会った。みな持ち場にしっかりと立っている、と彼は言った。この集会のあいだ、深く罪を示されているひとりの女がいた。しかし彼女はその思いを振り払い、反抗的になった。私は彼女に言った。あなたは、神があなたか家族の上にさばきを下されるまで待とうとしている、と。彼女は、それでもかまわないと言った。集会が終わって数日後、彼女のかわいがっていた息子が、鉄道の仕事に出た。二日後、息子は列車にずたずたにされて、母親のもとに運ばれてきた。彼は集会に初めから終わりまで出ていたが、最後の招きを拒んだのだった。愛する読者よ、警告を受けて、岩なるキリスト・イエスのもとに逃れ、身を避けていただきたい。

何年もあらゆる集会をつぶそうとして、それをなし遂げてきた男がいた。彼はこの集会にも来て、いつものように始めた。彼は私のことを言いふらし、思いつくかぎりの悪口を言った。人々が祭壇の前に出ないように、できるかぎりのことをした。兄弟たちは落胆して、あの男にあわれみはないと言った。彼がいつか救われるとすれば、それはその夜でなければならない、と私は感じた。私は強く促されて、神に祈った。つまずきの石を取り除いてください。もし彼にあわれみがあるなら、すぐに回心させてください。さもなければ、彼を取り除いてください、と。彼は会堂の中にいた。神は私の祈りにお答えになり、深い罪の自覚を送ってくださった。彼は喜んであわれみを求めて叫んだ。神をほめたたえよ。あの祈りが自分を救ったのだと思う、と彼は言った。次の夜、私は彼に、会衆の前で話すよう頼んだ。人々は、それほどの変わりようを見て、たいへん驚いた。

私たちがただ神に信頼しさえすれば、神は勝利を与えることがおできになり、また与えてくださる。

メソジストの人々が、リバティーから四分の一マイルのシロに来てほしいと私に頼んだ。私たちはそのとおりにした。私は合同兄弟教会の会員たちを訪ね、来て合同の集会をしようと誘った。その人々はやって来て手伝い、私たちを家に招いてくれた。多くの親切な兄弟姉妹のなかに、F兄弟たちとその家族がいた。その親切を、私はいつまでも忘れないだろう。

私たちは栄光に満ちた集会を持った。ほとんどどの家も、祈りの家になった。五十歳を過ぎた三人が輝かしく回心した。また、八十五歳の懐疑論者で不信者の人も回心した。彼はあらゆる教会と争い、話しかけてきた牧師たちを侮辱してきた。私は彼の家を訪ねた。見ると、老人はたいへん頭がよく、どんな事柄にも通じていた。ただ、自分にとって最もたいせつな一つの事柄だけは別だった。ああ、私の心は、どれほど彼をあわれんだことか。何か手を打たなければ、彼は永遠に失われてしまうとわかった。私には、彼が墓の縁に立っているのが見えた。その墓は、彼にとっては地獄だった。彼は、肝心の一点のほかは、どんな点でも議論したがった。私はそのたびに、彼の失われた状態に話を引き戻した。そして、神があなたをキリストに導くために私を遣わされたのです、と告げた。彼がひどく落ち着かなくなり、神の御霊が彼をとらえておられるのがわかったので、私は帰った。彼はたいへん思い悩むようになった。数日後、彼は私を呼びにやり、救われるには何をすればよいのかを教えてほしいと言った。私が話すと、彼は子供のように泣いた。夫が泣くのを見たのは初めてだ、と妻は言った。みなが驚いたことに、その夜、彼は私たちと一緒に教会へ行った。彼は説教壇の真ん前に座った。そこからなら、私の顔をまともに見て、一言も聞きもらさずにいられた。私は『あなたの神に会う備えをせよ』という聖句から語った（アモス四・一二）。私はまっすぐ彼に向けて、彼のために語った。彼はすばらしい集会だと思った。こんなものは見たことがない、と彼は言った。彼に大きな変化が起こった。

しかし私は、彼の経験に満足していなかった。彼には、心が新しく変えられるということがわからなかった。ニコデモのように、理屈で納得したがったのである。次の日、彼は集会に来た。私は彼のところへ行き、語り合い、共に祈った。彼は幼な子のように祝福を受けた。彼はすっかりイエスに身をゆだね、天を仰いで御霊のあかしを求めた。主はほむべきかな、あかしは与えられた。

神がこの愛する老人を祝福され、守ってくださるように！　私は天国で彼に会い、最後の時刻に彼を救ってくださった神の驚くべきあわれみについて語り合うのを楽しみにしている。

第七章　幻

インディアナ州アレン郡モンローヴィルに着くと、私たちは主任牧師のM兄弟を訪ねた。そして、その晩からメソジスト監督教会で集会を始めた。一八八三年十一月のことである。その教会は、わずかな人を除いて、死んでいた。町では何年も、リバイバルと呼べるほどのものはなかった。ほとんどだれもが、失敗すると予想した。九年か十年のあいだ、悔い改めの席も置いていなかった。次の日の集会の終わりに、私は堂守に頼んだ。オルガンを後ろに下げ、あわれにもさげすまれていた悔い改めの席を、前に出してほしい、と。堂守は笑って、そうしましょうと言った。悔い改めの席を見て、人々は言った。これであの女はいい笑いものになる。あの席を使うことなどないだろうから、と。その夜、私は説教しながら勝利を叫び、祭壇の前をあけるように言った。会堂は人でいっぱいだったからである。そして、求道者を招いた。人々は祭壇の前に押し寄せはじめ、昼も夜も三週間、それが続いた。

教会はひどく形式的になり、会員たちの歩みは信仰とかけ離れていた。そのため、最も良い男女の多くさえ、ほとんど疑い深くなっていた。心で体験する信仰がまことであると人々に悟らせるには、神の力が大いに現される必要がある、と私は感じた。神は言われた。「神の栄光のためにあなたがたが願うことは、なん

でもかなえてあげよう」私はその約束を信じて、三晩のあいだ祈った。神が働いておられることを人々に示すために、ご自分の方法で御力を現してくださるように、と。神が祈りに答えてくださると信じて、私は心を尽くして祈った。

三日目に、年老いた姉妹のひとりが倒れ伏し、死んだように冷たくこわばった。脈が打っているほかは、生きているしるしは何もなかった。私たちは彼女を説教壇の長いすに寝かせた。彼女はその日の残りをそこで過ごした。夜の集会のあいだには、ほかにふたりの婦人が同じように倒れた。人々はたいへん興奮した。私たちは会衆に、静かに来るなら、まわりを通って見てよいと告げた。こわがって、触れようとしない人もいた。兄弟姉妹の何人かが残り、夜通し、倒れた人々と共に歌い、祈った。次の日には、ほかに六人が倒れた。ひとりの若い婦人は、目を大きく見開いたまま、立ったまま力に圧倒された。その顔には優しいほほえみが浮かんでいた。顔は神の栄光に照らされ、彼女は御使のように見えた。彼女は二時間ほどそのまま立っていた。それから人々は、彼女とほかの五人を家へ運んだ。生きているしるしもない人々が、ひとり、またひとりと運び出されていくのを見て、人々はおびえた。教会から逃げ出す者もいた。私もそのようなことは見たことがなかった。ああ、私の信仰はどれほど強められたことか！　神が私の祈りにお答えになって、これを送ってくださったのだと感じた。

ある夜、私は罪人たちに、神のひとり子の婚宴への招きを受け入れるよう嘆願していた。死がすぐそばにあると感じた。私は人々に告げた。だれかが、これを最後に招きを拒もうとしている。棺と死に装束がすぐそこにある、と。ああ、あわれみのあるうちに受け入れるようにと、私はどれほど人々に嘆願したことか。ひとりの老人は、深く罪を示されて耐えられなくなった。それでも彼は従おうとしなかった。彼はメソジスト教会をののしりながら、会堂を出て行った。神から逃げ出そうと思ったのである。しかし、すみやかなさばきが彼のあとを追っていた。町を出るときに、彼は列車にひかれて死んだ。翌朝七時前に、彼はもう死に装束を着せられ、棺に納めるばかりになっている、と知らされた。それはたいへんな騒ぎを引き起こした。ある人々は言った。あの女は、あの男を殺してくださいと神に祈ったのだ。五十ドルもらっても、あの女に祈ってもらうのはごめんだ、と。私が人々に催眠術をかけたのだと言う人々もいて、多くの人が教会に来るのをこわがった。私は会衆に言った。来ないでいても同じことです。私たちはその人々のために、家にいるままでも祈ることができます。神は私たちの祈りにお答えになって、その人々を罪に病ませてくださいます。その人々は喜んで教会に来て、あわれみを請うようになるでしょう、と。神をほめたたえよ！　神はご自分の方法で働いておられた。罪の自覚が人々をとらえた。

悔い改めの火が広がりはじめ、多くの人が輝かしく回心した。その集会で、二百人ほどが確かな救いの経験に入り、百人ほどがメソジスト監督教会に加わった。

預言者は言った。「人が夢を見、また幻を見ても、それを語るのを恥じる時が来る」その日は来ている。世は不信仰に満ちているので、こうしたことを語るには、神の大きな恵みが要る。しかしイエスは、そうなると言われた。「人々はますます悪くなる」「教会の中に背教が起こる」「信心深い様子をしながらその力を否定する偽教師が起こる。こうした人々を避けなさい」

罪人たちに嘆願するとき、私の心はどれほど愛とあわれみをもって彼らに向かうことか。同じ言葉が、ある人には永遠のいのちを、ある人には永遠の滅びを定めることを知っているからである。先へ先へと延ばしているうちに、御霊が私たちを滅びのままに捨て置かれる。私たちは無感覚になり、かたくなな心に引き渡されてしまう。それは恐ろしいことである。『主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。あなたがたはどうして死んでよかろうか』（エゼキエル三三・一一）。いのちは、金を出さずに、ただで、あなたの前に置かれている。しかし、主をあなた自身の救い主として受け入れないなら、それは何の役にも立たない。悪霊どもでさえ、自分たちを待つ刑罰のゆえに、信じておののいている。

最後のうるわしい朝

最後のうるわしい朝が
花咲き、美しく

速やかに近づき
まもなく現れる
（おりかえし）
力強い、力強い、力強いラッパが
鳴り響く、来たれ、さあ来たれと
ああ、喜びの日を迎える備えをしよう
その輝く朝が
栄光のうちに明けるとき
私たちの涙は流れやみ
悲しみは消え去る
花婿は栄光から
地に下って来られる

第八章　神の力

私はホーグランドのバプテスト教会で集会を開いた。集会は五日間続き、神の力が驚くほど現された。私の知らない何かの理由で、ほかの教派はみなこの教会に偏見を持っていた。働く気にならず、手をこまねいていた。バプテストの人々はたいへん弱く、働ける状態ではなかった。ほかの土地で回心した人々の何人かがやって来て、驚くべき力をもって働きはじめた。

あれほど神の力が現れたのは、前にも後にも見たことがない。会堂は神の栄光に満ちていた。それは霧のようだった。会堂じゅうで、人々は神の栄光に圧倒されて、席に倒れた。罪人たちは、あわれみを求めて叫びながら進み出た。

万人救済論者と不信者とカトリック教徒が回心した。三人とも七十歳だった。そのうちのふたりは、最後の夜に進み出た。

祭壇の前は、毎晩人でいっぱいだった。

五十人ほどが回心し、多くの人が立ち返った。働きは今も栄光のうちに続いている。ホーグランドの愛する人々のための私の祈りは、こうである。神が、もっ

輝く万の御使が
そのまわりに仕える
墓は開かれ
死者はよみがえり
あがない主と共に
天へと昇る
そのとき聖徒は朽ちない者となり
栄光のうちに治める
花嫁は花婿と共に
とこしえにとどまる

と上に上って来なさいと言われるときまで、人々が平和と愛のうちに守られるように。そこで私たちは再び会うだろう。

金曜日の夜、私はルーテル教会で集会を開いた。前の年に私が集会を開いたあちこちの土地から、何人かの牧師が来ていた。牧師たちはみな、私がそれぞれの任地で開いた集会の実りと、その土地の変わりようについて、よい知らせを伝えてくれた。まことに喜びの時だった。

この集会のあいだに、十四人の牧師が出席した。

夜になると、人々が何百人もやって来た。会場には二千人ほどがいたという。明かりはひどく乏しかったが、たいへんよく秩序が保たれた。

この前の冬に私の集会で回心した人が、二、三百人来ていた。その幸せそうな顔を見、主に仕える喜びを語るのを聞くと、私の心は喜びに躍った。なかには、永遠の火の中から取り出された燃えさしのような老人たちもいた。

説教の時が来た。それは私にとって試練の時だった。あれほど喜びの時を過ごしていたのに、悪魔が陣営の中にいたのである。昔、人の子らが礼拝に来たとき、サタンもその中に来た。このときも同じだった。サタンは、エデンの園に来たときとは形を変えて、しかし同じねらいとねたみを持って来たのである。悪魔はいつも、神と神のみわざをねたんできた。初めに悪魔は天でそむき、王座を奪おうとした。しかし神は彼を追い出された。「彼は電光のように落ちた」のである。それから神が、アダムとエバをご自分のかたちにお造りになると、サタンはへつらいの言葉と偽りの舌を持ってやって来た。そして、もっとよい働きをするふりをして、神のなさったことを壊そうとした。それ以来、悪魔は同じやり方で働き続けている。神のために栄光ある働きがなされると、悪魔は必ず、自分で、あるいはユダの姿をとってやって来て、それを覆そうとしてきた。このときもそうだった。私が失敗するように、私を混乱させるためのあらゆることがなされた。頭が痛んで、ほとんど目も見えなかった。準備をする暇も、考えをまとめる暇もまったくなかった。しかも、これほどの群衆の前に立ったことはなかった。

私は、聖書の最も深い主題について語らなければならないと感じた。「ゆるされない罪と聖霊の務め」である。私は叫んだ。「主よ、お助けください。そして、ご自身の栄光を現してください」すると言葉が臨んだ。『彼はわたしに言われた、「人の子よ、立ちあがれ、わたしはあなたに語ろう」』（エゼキエル二・一）。「彼らの顔を恐れてはならない。その顔つきも恐れてはならない。さもないと、わたしはあなたをあわてさせる。わたしがあなたと共にいて、あなたを救う」神はほむべきかな。語りはじめて五分もしないうちに、私は頭の中の轟きを忘れていた。私の失敗を祈っていたかもしれない敵たちのことも忘れていた。

目の前で、さばきへと突き進んでいく群衆のほかは、すべてを忘れた。あれほどの力と自由を与えられたことはなかった。主題は真昼のようにはっきりと私に示された。口に出すのが追いつかないほど速く、言葉が与えられた。神のいつくしみのゆえに、また、悩みの時にはいつでもいと近き助けとなってくださることのゆえに、神に栄光あれ！

そこにいた年老いた牧師が私のところに来て、言った。確かに神がこの土くれを通して語っておられた。この主題が、どの点もこれほどはっきり説き明かされたのを聞いたことがない。人々は光を受けた。この集会の実りは、永遠だけが明らかにするだろう、と。

一八八四年、私はインディアナ州アレン郡シェルドンのメソジスト監督教会で、一連の集会を開いた。会員たちはたいへん弱く、互いに争いが多く、働ける状態の人はごくわずかだった。シェルドンは、州で最もすさんだ町だと言われていた。しかし神は、お働きになり、勝利を与えることがおできになる。どれほど悪に満ち、見捨てられた土地でも、私たちがただ、今ここで生きた信仰を働かせさえすればよい。

私は神に信頼し、勝利を叫びながら、働きに取りかかった。罪人たちはキリストのもとに群がり来るようになり、教会はより深い経験を求めて進み出た。もめごとも収まった。ほかの教会の兄弟たちも何人か来て、働きを手伝った。何年も教会にいた多くの人が、自分は枯れた骨にすぎなかったと気づき、あわれみを請いに来た。その人々はのちに、教会の前で告白した。自分たちはやみの中にいた。心で体験して知ることもなく行いに頼っていて、神に受け入れられていなかった、と。

五十一年間ディサイプル派の教会にいたある婦人が、集会のあいだに、自分の家で回心した。彼女は家じゅうで叫びながら神をほめたたえ、これこそ私の求めていた信仰です、と言った。

B氏は人望があって才能に恵まれた、品行の正しい人だったが、輝かしい救いの経験に入った。諸教会は何年も、彼を救命ボートに導き入れようとしてきた。彼は集会に出席した。彼を見たとき、彼はこの集会で救われなければならない、と私は感じた。私はいろいろな方法で働きかけ、昼も夜も彼のために祈った。そして、彼はまもなく神の子になると確信していた。ある夜、その時が来たと感じた。会堂は人でいっぱいで、通路にも長いすが並んでいた。私は長いすをいくつも乗り越えて彼のところまで行き、イエスのもとに来る用意はできていないのですか、と尋ねた。彼は泣きだし、私と一緒に祭壇の前に出た。多くの人が喜んで叫んだ。その顔つきが変わったのが見えたので、彼の回心を疑う人はだれもいなかった。

S老人は二十年も集会に来ていなかった。あらゆる教会に反対し、妻や子供たちが集会に来るのも妨げようとした。彼は八十三歳だった。妻は、夫の魂の救いをしきりに願っていた。妻は夫に私の写真を見せて、好奇心をかき立てようとした。ついに彼は昼の集会に来た。私が求道者を招くと、彼は戸口に向かいはじめた。私は彼のところへ行った。彼がどれほど年老いて弱っているかを見、その失われた状態を思うと、私の心はあわれみに溶けた。神が、救われるために彼をここに送られたのだと感じた。今でなければ、二度とない。私は、彼が折れて祭壇の前に出るまで語りかけた。数分のうちに、彼は輝かしく回心した。まもなく彼は浸礼を受け、神の教会に加わった。彼が洗足の礼典に進み出ると、彼と同じときに回心した小さな男の子が、彼の足を洗った。それから彼が、その子の足を洗った。心を打つ光景だった。彼はまさに最後の時刻に入ってきたのである。主が家へ呼んでくださるのを、ただ待っているのだ、と彼は言った。六月の終わりに彼は病に倒れ、ひどく苦しんだ。わずか数日で世を去った。彼は忍耐強く、優しく、幸せで、救い主が永遠の家へ呼んでくださるのを待っていた。

真夜中の叫び

聞け、叫びが高く響き渡る
今や花婿が近づいて来られる
あかりをみな整えて輝かせ
心を主の御前に聖くせよ
喜んで思いを天に上げ
愛の主に向けよ
聞け、警告が高く鳴り響く
「真夜中の叫び」に耳を傾けよ
（歌うときは、最後の二行をくり返す）
勝利の叫びをあげよ
来たるべき王に栄光あれ
王はすべての聖徒に喜びをもたらされる
御使の歌う歌に声を合わせよ
勝利者をたたえて声高く叫べ
私たちは顔と顔を合わせて主を見る
聞け、警告が高く鳴り響く
「真夜中の叫び」に耳を傾けよ
（歌うときは、最後の二行をくり返す）
さあ、刺し通された小羊をたたえよ
わき腹と手のひらに聖なる傷を受けられた方を
聖なる喜びをもって主を拝し
罪の混じりけなく主をほめたたえよ
眠っている聖徒を、主はまもなく伴って来られる
聖徒は天の賛歌を歌う
いと高き主に栄光あれ
まもなく私たちは空で主に会う
聞け、警告が高く鳴り響く
「真夜中の叫び」に耳を傾けよ

第九章　『わたしの霊による』と主は仰せられる（ゼカリヤ四・六）

一八四年八月二十四日の夕方、私たちはメープルズに着いた。列車を降りると、何人かの愛する友が迎えてくれた。

私は一日に三回の集会を開いた。人々は熱心に集まった。神が絶えず私たちと共におられる、と私は感じた。正しい心で来た人はみな、喜びにあずかった。

十四人の牧師が出席した。

この集会の目的は、再会の集いを持つことだった。兄弟たちと、前の年の集会で回心した人々を、一つに集めるのである。その目的どおり、何百人もの回心者が集まった。みな前に出て、神が自分にしてくださったことを示した。

会場には警官が何人かいたが、その必要はなかった。秩序がたいへんよく保たれていたからである。毎晩、会場には千人から八千人がいたという。

日曜日、主は驚くほど私を支えてくださり、すべての集会を導く勇気と力を与えてくださった。それほどの群衆に語ったことは、それまでなかった。私はずっとひどい風邪をひいていた。しかし神は澄んだ力強い声を与えてくださり、私の声は林のすみずみまではっきりと届いた。野営集会でこれほどの秩序と熱心さは見たことがない、と多くの年配の人が言った。人々の上には厳かさがとどまっていた。人々はいつも、集会が終わるのを惜しんでいるようだった。

多くの人が回心した。そのひとりは、ダンカー派の教会に属する七十七歳の老婦人だった。彼女の息子夫婦はこの前の冬に回心し、主のぶどう園で大いに働いている。幾冬もの霜に髪の白くなった、杖にすがる老人も回心した。彼は火の中から取り出された燃えさしだ、と私は感じた。六十歳のもうひとりの兄弟は、生涯ずっと品行の正しさに頼ってきた。しかし目が開かれて、永遠のいのちが必要であることを悟った。イエスは言われる。『あなたがたは新しく生れなければならない』（ヨハネ三・七）「永遠のいのちは神の賜物である」『行いによるのではない。それは、だれも誇ることがないためなのである』（エペソ二・九）。

最後の日曜日、集会を閉じる日に、私たちは林の中で主の晩餐を執り行った。厳かな時だった。幾冬もの雪に髪の白くなった回心者たちが、杖にすがって震えていた。群れの小羊たちが、神の愛に顔を輝かせていた。人生を歩みだしたばかりの若い男女がいた。人生の大きな責任を負った中年の父親や母親たちがいた。みなが主の食卓を囲んで座っていた。ある人には初めての、ある人には最後の食卓だった。

ニューヘイブンで

牧師のS兄弟の切なる願いにより、私はインディアナ州アレン郡ニューヘイブンのメソジスト教会で、一連の集会を始めた。私は、自分が枯れた骨の谷に置かれたことを悟った。クリスチャンはごくわずかで、働きに手を貸せる人は二、三人しかいなかった。私たちは信仰と祈りによって神にすがり、城壁が崩れるのを待ち望んだ。人々はすぐに祭壇の前に出はじめ、何十人も出てきた。一度に四十人、六十人と出てきた。私たちは福音の網を打った。あまりに多くの魚がかかったので、岸に引き上げられないほどだった。

私は祈った。「ああ神よ、助けをお送りください」祈りの答えとして、賛美伝道者のS兄弟や、ほかの人々が来た。

諸教会が一つになって働いた。集会は、一部の期間はメソジスト教会で開いた。集会は二週間続き、何百人もが回心した。そのほとんどが諸教会に迎え入れられた。この集会で、ひとりのカトリック教徒が回心した。七十歳になる愛する姉妹と、五十歳のもうひとりの姉妹は、何年も教会員だった。しかしふたりは、自分たちは欺かれていて、霊的に盲目だったと言った。今、ふたりは救いの神によって喜んだ。

一つの集会で、あれほど多くの若い男性が救いの経験に入るのを見たことはない。そのうちのふたりは、その後メソジスト教会で説教の免許を受けた。

八つか九つの小さな女の子が、祭壇の前に出てきた。私はいくつか質問をした。イエスさまの小羊になりたい、とその子は言った。まもなく、その小さな顔は神の愛に照らされて輝いた。お父さんとお母さんはクリスチャンか、と私は尋ねた。お母さんは天国にいる、でもお父さんは悪い人で、お酒を飲むの、とその子は言った。私はその子に言った。お父さんとお話しして、一緒にお祈りしなさい。そして、イエスさまのところに来なければ滅びてしまうと言いなさい、と。

幾晩かたって、その子は込み合った会堂の中を通り抜けて、説教壇のところまで来た。私はその小さな子に気づいた。私が声をかけるのを待っていたのである。私はその子を抱き上げて、今もイエスさまを愛しているかと尋ねた。その子は言った。「うん。でも、お父さんは病気なの。お話しして、一緒にお祈りしたけど、集会には連れて来られなかったの」実は、父親は罪に病んでいたのである。神が彼の心に罪の自覚を送っておられたのだ。彼は、自分が罪人で、地獄への道を歩んでいることを悟った。私はその子に言った。お父さんに、あした集会に来るように言いなさい。よくならないかもしれないのだから、と。

彼は娘と一緒に来た。私は彼の手を取って尋ねた。娘さんは、あなたの魂のことであなたと話し、一緒に祈りましたか、と。そうです、と彼は言い、震えて泣きだした。私は言った。あなたは子供の行く手をふさいでいる。大いなるさばきの日に、子供に「父が祈るのを一度も聞いたことがない」と言わせたくはないはずだ、と。彼は私と一緒に祭壇の前に出た。数日前に回心した老人が彼と共に祈り、まもなく彼は祝福を受けた。ふたりは互いの首に抱きつき、綿のように白い髪を寄せ合って、喜びの涙を流した。心を打つ光景だった。まことに『小さいわらべに導かれ』とあるとおりだった（イザヤ一一・六）。

私はそこからメープルズへ行った。小さな礼拝堂で、兄弟姉妹が温かく迎えてくれた。会堂はいっぱいで、忠実な働き手の小さな群れがいた。その人々は集会で大きな働きをした。

ニューヘイブンから回心者が五十人ほど来て、働きに加わった。その人々が、明るく幸せそうな顔を神の愛に輝かせて、通路を進んで来た。私は歌いはじめた。「援軍は今来たる、勝利は近い」

メープルズの人々は、この人たちのほとんどと知り合いだった。この人たちはひとり、またひとりと立ち上がり、救いと、心にあるイエスの愛について証しをした。そして罪人たちに、迫ってきている神の怒りから逃れるよう勧めた。メープルズの人々は、その大きな変わりように驚いた。そのうちのふたりは、小さな男の子だった。この集会に出るために、ニューヘイブンから五マイルの道を歩いて来たのである。ふたりは小さな説教者のように語った。栄光に満ちた時だった。

リバイバルはすぐに始まった。私たちは集会を十日間続けた。神の力が驚くほど現された。

リトルリバーの後、私たちは土曜日にマシロンへ行き、教会で三回の集会を開いた。会堂はいっぱいだった。マシロンの教会は、まことに『山の上にある町』となった（マタイ五・一四）。この前の冬に回心した百人は、みなしっかりと立っている、と人々は私に告げた。主はほむべきかな！　その人々のほとんどがその場にいて、自分の口で語った。キリストの愛を語ろうとして、一度に六、七人が立ち上がるのだった。

愛する兄弟姉妹、父親や母親、そして私の子供も同然の若者たちの、幸せそうな顔を見た。ああ、私はどれほど神をほめたたえたことか。その人々は強く、ゆるがず、神の恵みによって、神の美しい都に入るまで進み続けようと決意していた。

ウッズ・チャペルで集会を開いていたとき、私は何人かの兄弟姉妹と一緒に、教会に行けない老人を訪ねた。彼はしばらく前から主を求めていたが、満たされていなかった。彼が私を呼びにやったのである。彼は、私が着くのを待ちきれないほどだった。彼は戸口で私を迎えた。ひどく弱っていた。家は人でいっぱいで、私たちはたいへん厳かな時を過ごした。老人は救われた。彼は人々に勧め、神をほめたたえた。ほかにふたりの男が回心し、私たちはみな喜んで主をほめたたえた。放蕩息子が家に帰って来るという知らせを御使たちが持ち帰ると、天では喜びの叫びがあがった。

ある夜、集会の終わりに使いの者が来た。そして老人が亡くなったと告げ、葬儀の説教をしてほしいと頼んだ。一晩じゅう雨が降り、出かけるときもまだ降っ

ていた。八マイルの道を行かなければならなかった。私は乗り物に座っているのもやっとだった。家が込み合うことはわかっていた。行ってみると、はたしてそのとおりだった。私はひどく弱っていると感じた。しかし神に信頼し、力と声を与えてくださるよう神を仰いだ。すると言葉が臨んだ。『その欲望は衰え、人が永遠の家に行こうとするので、泣く人が、ちまたを歩きまわる』（伝道一二・五）。

一八八四年九月、インディアナ州コロンビアシティで神の教会の長老会が開かれ、私も出席した。そこで、私たちが集会を開いたあちこちの土地から来た、多くの兄弟たちに会った。回心者のひとりが説教の免許を受けた。またふたりは、教会の長老に選ばれて説教をしていた。

第十章　驚くべき力の現れ

次に私たちはリトルリバーのユニオン・チャペルへ行き、金曜日から日曜日の夜まで集会を開いた。会堂はいっぱいで、何百人もが中に入れなかった。

トリニティ、マークル、ゼインズヴィル、シオンから、多くの回心者がやって来た。その人々は聖なる火を携えて来た。罪人たちは震えて、『救われるために、何をすべきでしょうか』と叫んだ（使徒一六・三〇）。祭壇の前に出た人の中に、ディサイプル派の七十四歳の婦人がいた。彼女は神をほめたたえ、救いを喜んだ。六十六歳のもうひとりの愛する老姉妹も大きな祝福を受け、喜びながら道を進んでいる。

日曜日の朝、私たちは栄光に満ちた賛美の集会を持った。二百人以上がイエスのために証しをした。説教の後、私たちは川へ行った。そこで回心者のうち四十人がバプテスマを受けた。壮大な光景だった。千人ほどが、この厳かな光景を見守った。

チュルブスコから、私たちはインディアナ州シェルドンへ行った。一年前にオハイオから移って来た、ひとり娘とその家族を訪ねるためである。みな元気で、私は女性の長老として按手を受け、礼典を執り行い、結婚式を司る権限を与えられた。私の切なる祈りは、主の足もとに低くなって生きることである。陶器師の手の中の粘土のように、主の用に役立つ者として。

私は説教を頼まれた。それはかなりの十字架だった。これと同じほどか、もっと多くの牧師の前で説教したこともあった。しかし休みない働きで、私はひどく疲れきっていた。私は『ここにわたしがおります。わたしをおつかわしください』という聖句から語った（イザヤ六・八）。神は自由と力と声を与えてくださった。ああ、主のいつくしみと、悩みの時にいつも助けてくださることのゆえに、主をほめたたえよ。主は約束を、なんと驚くほど確かにしてくださったことか。『見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである』（マタイ二八・二〇）。

私たちにまた会えたことを喜んでくれた。

トリニティの愛する人々を訪ねると、みな今もヤコブのはしごを登り続けていた。

私はリバイバル集会を開くために、ギャリソンの校舎へ行った。選挙の週で、だれもが興奮していた。天気は悪く、雨が降っていた。しかし私は二週間、集会を続けた。

五十人が輝かしい救いの経験に入り、しっかりと神の側に立った。その中に、この地方で最も才能に恵まれた人のひとり、M兄弟がいた。彼は連邦議会の議員だったことがある。

最も輝かしい回心は、ひとりの万人救済論者のものだった。だれもが、彼はもう滅びた者だと思っていた。何を言っても、彼の心には響かなかった。もし彼がまだ死の一線を越えていないなら望みはある、と私は感じた。彼はその線のすぐ近くにいて、一刻の猶予もなかった。私は毎晩、彼に働きかけた。昼の集会は開けなかったのである。私は人々の前で彼のために祈った。彼の妻は輝かしい救い

の経験に入った。私は彼に話をするよう頼んだ。彼は言った。妻が救われてうれしい。子供たちを天国に行けるように育ててほしいから。しかし自分のことはほうっておいてくれ。自分には望みがないのだから、と。

彼は、家に帰って祈ると私に約束した。生まれてから一度も祈ろうとしたことはないが、やってみる、と彼は言った。彼は約束を守った。彼が祈りはじめると、神が助けてくださった。神が光を差し入れてくださり、彼は自分がどれほどの罪人であるかを悟った。次の日、彼はとうもろこし畑で一日じゅう祈った。その夜、私は彼のところへ行って、その手を取った。彼は口がきけなかった。泣き崩れたのである。私は、祭壇の前に出るよう彼に言った。彼は歩きだしたが、だれかが支えなければ倒れていただろう。まもなく彼は回心し、立ち上がって自分の経験を語った。少年のころから一度も泣いたことがない、今はもう四十歳だ、と彼は言った。母の墓のそばに立っても、子供たちの墓のそばに立っても、一滴の涙も流さなかったという。これが最後の機会だった、と彼は言った。もし拒んでいたら、永遠に失われていただろう。

次に私は、リバイバル集会を開くために、インディアナ州ハンティントンの近くにあるバザードの校舎へ行った。この土地はたいへんかたくなで、神にほとんど見捨てられている、と私は聞いていた。何人もの牧師が教会を建て上げようと骨折ってきたが、うまくいかなかった。私は行きたいと願った。多くの魂が救われると信じていたからである。

求道者たちは何十人も祭壇の前に出続け、ついに百四十人ほどが回心した。その人々はたいへん輝いていて、すぐに働きはじめた。ダンカー派の人も何人か救いの経験に入り、教会員も何人か回心した。回心者の中に、五十歳から七十歳までの人が三十人いた。

私は神の教会を組織した。またこの集会の実りとして、メソジストの人々は会堂を二つ建てた。四十九人が川で浸礼を受けた。その人々は御使のように見えた。そしてほかの多くの人と共に、叫びながら水から上がってきた。何百人もの人が、川の土手からこの光景を見守った。人々は、神がそこにおられると感じているようだった。

日曜日の朝九時、人々は四方から集会にやって来た。この最も驚くべきリバイバルの最後の礼拝に連なるために、木々の茂る神殿に集まって来たのである。

私たちはしばらく歌い、それから栄光に満ちた賛美の集会を持った。回心した人のうち百人以上が、ひとり、またひとりと立ち上がった。そして、イエスが地上で罪をおゆるしになり、自分たちに御霊のあかしを与えてくださる力を持っておられることを語った。

多くの人が教会に迎え入れられた。私たちは会堂を建てるために数百ドルを集めた。私は人々に別れの勧めを語り、ひとりひとりと握手をして集会を閉じた。私にはつらい試練だった。人々は自分の子供のように思えた。兄弟姉妹も、父親も母親も、みな共に泣き、多くの涙が流された。しかし私たちは、美しいすまいでのあの大いなる集いを待ち望んだ。

次の集会は、コロンビアシティから数マイル離れた田舎で開いた。主はその近隣で大きなわざをなさった。ほとんどどの家も、祈りの家になった。どこにあっても、あらゆる反対と迫害に打ち勝つ勝利を与えてくださる神をほめたたえよ。神は人々に確信させてくださる。神が私を召され、天から下された力をもって福音を宣べ伝えるために遣わされたことを。また神が私と共におられて私をお守りになり、主と主のみわざの敵から救い出してくださることを。

次に私たちはインディアナ州シラキュースへ行き、大きな合同教会で集会を開いた。激しい戦いだったが、神は勝利を与えてくださった。罪を示す霊が、町とその周辺に下った。罪人たちは死人のように倒れた。ほかの人々は、あわれみを求めて叫んだ。ある夜、神の力がひどく強く下ったので、さばきの厳かさが人々の上にとどまっているかのようだった。そこにいる者の中に、二度とあわれみの招きを受けない者がいることを、主は私に示された。私は涙で顔をぬらして立ち上がり、会衆に告げた。あなたがたのうちのある人には、死がすぐそばに来ている。青白い馬がすぐ近くにいて、そのひづめの音がほとんど聞こえるほどだ。今夜、神と和解しないままこの会堂を出るなら、永遠に失われる、と。集会が終わって一時間もたたないうちに、ひとりの若い男と若い女が、教会から数メートルの湖の底に横たわっていた。ふたりはスケートをしていて、氷が割れたのである。ふたりは罪の自覚を振り払おうとしていた。私は何度も、キリストを受け入

れるようふたりに語りかけていた。その夜も、心を主にささげ、もうこれ以上待たないようにと迫った。その夜、多くの友人たちもふたりをキリストに導こうとしたが、ふたりは従おうとしなかった。女は、数日後にダンスパーティーがあるから、それが済むまで待つと言った。ふたりはキリストを退け、数時間の罪の楽しみを待ち望んだ。そのために、自分の魂と、永遠のいのちにあずかる権利を失ったのである。しかし、ふたりがダンスパーティーに出ることは許されなかった。思いがけない時に、死が来たのである。ふたりは生ける神のみ手のうちに落ちた。永遠とさばきの中に入って行き、恐ろしい嘆きの声をあげることになった。「刈入れの時は過ぎ、夏もはや終った、しかしわたしはまだ救われない」ふたりは一つの墓に葬られた。神への恐れが土地じゅうに下った。多くの人が、私がふたりを殺してくださいと神に祈ったのだと言ったからである。私の与えた警告は神から出たものだった、とも言われた。この集会でどれほどの人がキリストに導かれたかは、永遠だけが明らかにするだろう。

大いなるさばきの朝

（次は、救世軍のある大尉が見た夢である）
　私は夢を見た、大いなるさばきの朝が
明けて、ラッパが鳴り響いたのを
私は夢を見た、もろもろの国民が
白い御座の前に、さばきのために集められたのを
御座から、まばゆく輝く御使が来て
地と海とに立ち
手を天に上げて誓った
もう時がない、と
　ああ、なんという泣き叫び
失われた者たちが、自分の定めを告げられたとき
彼らは岩と山とに呼ばわった
祈ったが、その祈りは遅すぎた
　金持ちもそこにいたが、その金は
溶けて消え去っていた
彼は無一文でさばきの場に立ち
負債は重すぎて払えなかった
偉い人もそこにいたが、その偉さは
死が来たとき、はるか後ろに置き去りにされた
記録の書を開いた御使も
その偉さの跡を一つも見つけられなかった
　やもめもそこにいた、みなしごたちも
神はその叫びを聞かれ、覚えておられた
天国には、とこしえに悲しみがない
神がその目から涙をすべてぬぐわれた
ばくち打ちもそこにいた、酒飲みも
彼らに酒を売った男も
その男に許可を与えた人々と共に
彼らはそろって地獄に沈んだ
　品行の正しい人もさばきに来たが
自分の義のぼろ着は役に立たなかった
イエスを十字架につけた人々も
品行の正しい人として通っていたのだ
救いを先に延ばした魂
「今夜はやめておこう。いずれ救われるさ
今は信仰のことなど考える暇はない！」
その人々も、ついに死ぬ暇は見つけたのだった

第十一章　多くの回心と入神

ハートフォードシティから何度も招きを受けた。私は、神の御霊がそちらへ導いておられると信じて、行くことを承知した。神が大きなわざをなさると信じて、私は出かけた。

一八八五年一月一日ごろ、私はその町のメソジスト教会で集会を始めた。最初の夜、私たちがその晩に来て集会を始めることは、知らされていなかった。鐘が鳴らされると、四方から人々が来て、教会はあふれるほどいっぱいになった。

教会は冷えきって形式的になり、町の最も良い市民の多くが懐疑に流されていた。人々に悟らせるには、神の力が驚くほど現されなければならない、と私にはわかっていた。そこで私は、神が御力を現してくださるように祈った。罪人が、神は今も生きておられること、信仰はまことであることを知るように。そして神が、恐ろしいさばきについて罪人の目を開いてくださるように、と。教会のおもだった会員の五人が、私と心を合わせて祈ると言った。主が上からの力を注いでくださり、町も、周囲何マイルもの地方も揺り動かされるように、と。私たちは祈った。クリスチャンも罪人も死人のように倒れ、主に打ち倒される者が多くなるように、と。主は、目を見張るようなしかたで、私たちの祈りに答えてくださった。

最初に神の力に打たれて倒れたのは、組長の小さな男の子だった。その子は起き上がって説教壇に上がり、神の知恵と力によって語りはじめた。父親は叫んで主をほめたたえはじめた。小さな子が人々に勧め、キリストのもとに来るよう願うと、会堂じゅうで人々が泣きはじめた。叫ぶ者もいれば、倒れ伏す者もいた。御霊のさまざまな働きが見られた。神の力の現れは、集会を閉じるまで増し続けた。集会は五週間ほど続いた。主の力は風のように町じゅうを吹き抜けた。通りから通りへ、店や仕事場や酒場や悪所を吹き抜けて、あらゆる階層の罪人をとらえた。聖書が成就した。悪しき者は追う人もないのに逃げる。男も女も子供も、家で、仕事場で、道で打ち倒され、死んだように横たわった。その人々は驚くべき幻を見て、回心して起き上がり、神に栄光を帰した。見たことを語るとき、その顔は御使の顔のように輝いた。神への恐れが町に下った。警官たちは、これほどの変わりようは見たことがない、することが何もない、と言った。ひとりも逮捕していない、神の力が町を守っているようだ、とも言った。愛の霊が町じゅうにとどまった。通りでは、けんかも、ののしる声もなかった。人々は静かに行き来し、あらゆる階層の人々のあいだに愛と親切の霊があるようだった。まるで、だれもが神の御前にいると感じているかのようだった、と警官たちは言った。

ある商人は、自分の家で入神状態に陥り、何時間も横たわっていた。何百人もが、彼を見に家に入った。彼は幻を見て、教会に伝える言葉を受けた。主は、多くの会員の状態を彼に示された。彼は幻の一部を語ったが、教会に言葉を伝えることは拒んだ。すると、彼は口がきけなくなった。主が語らせようとされたことを語るのを拒んだので、一言も話せなくなったのである。言葉を伝えるまで決して話せない、と主は彼に示された。彼は泣きながら立ち上がり、幻を語ろうとした。神は彼の舌を解かれた。その場にいた人々は、彼が口をきけなかったことを知っていた。だから、彼が話しはじめて自分の経験を語ると、そのことは教会にも罪人たちにも驚くほどの感化を与えた。

ある夜、町から十七マイル離れた所でパーティーがあった。若い婦人たちの何人かが、ひとつ楽しんでやろうと思った。そして入神状態のまねをして、演じてみせはじめた。主は、そのうちの何人かを打ち倒された。その婦人たちは、撃たれたかのようにその場に横たわった。ふざけ騒ぎはたちまち祈祷会に変わり、あわれみを求める叫びが聞こえた。人々は何マイルもの道をそりに乗り合わせて、集会に来た。ある夜、そりいっぱいの男女が集会に向かいながら、入神のことを冗談の種にしていた。今夜はひとつ入神してやろう、と互いに言い合った。集会が終わる前に、ふざけていた人はみな神の力に打ち倒され、死人のように横たわった。そしてそのまま、そりで家に運ばれなければならなかった。一緒に来た

人々は、その人たちが倒れているのを見て、ひどくおびえた。そして、集会に来る途中でその人たちが神の力をばかにしていたことを話した。あざける者、ばかにする者が、会堂のいたる所で打ち倒された。

ある男は、神がからだを支配しておられるひとりの女をまねてばかにしていた。その女は、身ぶりをしながら説教していた。男がそのばかにした格好をしていると、神は彼の口をきけなくされた。男はこわばって、両手を上げ、口をばかにした形にゆがめたまま、五時間そのままでいた。会堂じゅうの人の見せ物になったのである。神への恐れが、すべての人に下った。神をあざけり、神のみわざをばかにするのは恐ろしいことだ、と人々は悟った。まことに、主はこの集会で驚くべきしかたで働かれた。郵便局長が回心した。あらゆる階層の人が、キリストの群れに導き入れられた。乱暴者やならず者から、町で最も高い香柏のような人々、最も才能に恵まれた人々までである。私たちは集会を劇場に移したが、そこにも群衆は入りきらなかった。それほど大きな目覚めが人々のあいだに起こっていたのである。旅回りの商人たちは、毎晩この町に戻って来られるように予定を組んだ。『シンシナティ・エンクワイアラー』紙は記者を送り、集会のことを書いて毎日報じさせた。毎日、新聞売りの少年たちが「ウッドワースのリバイバルのことなら何でも載ってるよ」と叫ぶのが聞こえた。多くの州や大都市から、記者が集会の記事を書きに来た。

C弁護士は、町のおもだった弁護士のひとりだった。彼は、私が入神状態にあって聖霊の力に支配されているのを見て、イエスの信仰がまことであると確信した。私は、あるときは顔と手を天に上げて立ち、顔は天の輝きに照らされていた。あるときは顔に涙を流し、声を出さずに説教し、キリストのもとに来るよう罪人たちに嘆願していた。またあるときは何時間も横たわり、ときには死んだようになっていた。御霊のさまざまな働きがあった。そのあいだずっと意識はあったが、私はすっかり聖霊の力に支配されていた。この集会でも、ほかのどの集会でも、私がこうした状態にあるときは、いつも神への恐れが人々に下った。会堂じゅうで罪人たちが打ち倒された。多くの人が救われた。人々はあわれみを求めて叫びながら、祭壇の前に駆け寄った。神が私をこのようにお用いになっているあいだに、何十人もが回心することもあった。C氏は州でも指折りの弁護士だった。彼は懐疑論者で、教会など相手にしなかった。牧師たちは、彼がいつか救われるという望みを、すっかり捨てていた。その彼がやって来て、町にいるあいだは自分の家に泊まるようにと私たちを招いたので、人々は驚いた。彼は、入神状態のときの経験を話してもらえないかと私に頼んだ。好奇心を満たすためではなく、光を得るために頼むのだ、と彼は言った。あなたを信頼しているから、話してくれることを信じる、とも言った。主がこのことを導いておられる、と私にはわかった。私は、それまでだれにも話したことがないほど多く、自分の経験を彼に話した。話しているうちに、神の力が私たちみなの上に下った。神の栄光のまばゆさに、私はほとんど目が見えなくなった。私の手は透き通って見えた。彼は泣き崩れた。私たちはみなひざまずいた。この強い人、この高い香柏のような人が、生ける神の前にひざをかがめたのは、これが初めてだった。まもなく、その知らせは町じゅうに広まった。しかしその夜、彼は込み合った劇場に堂々と入って来て、祭壇の前にひざをかがめた。すぐに、町のもうひとりのおもだった弁護士が、その隣にひざをかがめた。人々の興奮と驚きは限りがなかった。この地で私たちの主イエス・キリストによって勝利を与えてくださった神を、私はほめたたえる。

ハートフォードシティにいるあいだに、シンシナティ、フォートウェイン、ユニオンシティ、そのほか多くの大都市の教会から招きが来た。来てほしいと、次々に電報が届いた。しかし、神の道は私たちの道とは異なり、神は人が見るようにはご覧にならない。神は心をご覧になり、人は外の顔かたちで判断する。十五マイル離れたニューコーナーという小さな町に行かなければならない、と主は私に示された。私はそりに乗って行った。着いたとき、私は声がひどくかれて、ささやき声でしか話せなかった。疲れきって、人の助けがなければ歩けなかった。集会の時刻だった。会堂も庭も人でいっぱいだった。説教壇までたどり着くのもやっとだった。私は、神が声がれを取り去られ、声を与えてくださると信じて、歌いはじめた。五分のうちに、私の声は力強く澄んだものになった。私は神の力と勢いによって歌った。私は賛美歌を二、三曲歌った。神の力が私の上に下り、そこにいた一週間ずっととどまった。その力は、集会に来たすべての人の目に見え、耳に聞こえ、肌で感じられた。その夜、私は説教をした。そこにいたあ

いだの、ただ一度の説教だった。その夜からは、会衆の中で罪人たちが倒れるので、私の話はさえぎられた。すると人々が祭壇の前に駆け寄り、打ち倒された人の友人たちが叫んだ。数分のうちに、会堂全体が悔い改めの席になるのだった。

集会の最初の夜、歌っているときに、私は通路に立っていた男と握手しようと手を伸ばした。私は彼に、キリストのもとに来るよう勧めた。彼は震えはじめ、あおむけに倒れた。人々がこの力を神ではなく私のものと考えてはいけないと思い、私はもうほかのだれにも話しかけないことにした。私が後ろに下がると、説教壇にいた牧師のひとりが両手を上げて倒れた。その教会の牧師だった。神への恐れが罪人たちに下った。牧師でさえ倒されるのなら、自分たちが逃れる道はない、と罪人たちは思った。人々は教会から出ようとしたが、出られなかった。会堂はぎっしり詰まっていて、身動きする余地もなかったのである。祭壇の近くにいた六十人の罪人が、祭壇の前に出た。ほかの人々は、場所がないので後ろにとどまるしかなかった。牧師は入神状態からさめると、自分の見た驚くべき幻について語った。地獄の恐ろしさと天国の美しさを見たのである。天国はほんとうにある都だ、と彼は言った。彼はそこで多くの友人に会い、語り合った。御使の大軍も見た。地上で知っていた人々が、地獄にいるのも見た。この集会で悔い改めて救われなければ、そこへ行くことになる人々のことも、神は彼に示された。この幻は、諸教会と牧師たちを揺り動かした。牧師たちは、力のバプテスマを求めて祭壇の前に出た。その教会員のほとんどが、それに続いた。二日目の朝、人々は教会から座席をすべて運び出した。人が立てる場所をできるだけ広く取るためである。座席を二列に並べ、説教壇から戸口まで、二重の祭壇をこしらえた。説教壇の右に一つ、左に一つを作った。その祭壇は、昼も夜もほとんどいつも人でいっぱいだった。

ときには人が四重に並ぶほどだった。祭壇の前に出なかった人でも、何十人もが救われた。ある夜には、百十五人が回心した。このリバイバルのあいだに救われた人のほとんどは、神の御霊が心に入って来られると、力に打たれて倒れた。あるいは跳び上がって、神をたたえて叫んだ。倒れた人は、ある人は十五分、ある人は三十分、ある人は一、二時間、ある人はまる一昼夜、またある人はもっと長く横たわっていた。みな、神をほめたたえながら起き上がった。私は朝九時に集会を始め、夜の十二時まで続けた。外にあまりに多くの人がいたので、閉じることができなかった。ひとりが出て行くと、ひとりが入って来た。罪人たちは家で、また道ばたで打ち倒された。周囲何マイルにもわたって、人々が救われた。

多くの医者が訪れる

ある日、あちこちの町から十五人の医者が、この力と入神を調べにやって来た。医者たちが来たとき、私は聖霊の力の下に横たわっていた。私は何時間もそのままでいた。神は、私と、同じときに入神状態にあったほかの人々をお用いになった。そのしかたを見て、医者たちはこれが神の力であると確信した。医者のひとりは組長だった。彼は、この力が神から出たものだと認めたくなかった。これがほかの何かであると証明できたら、彼は喜んだことだろう。彼は入神を調べに来たが、会堂の別の所に呼ばれた。何か新しいものが見つかると思って、彼はそこへ行った。驚いたことに、そこでは彼の息子が祭壇の前にいて、父親に祈ってほしいと願っていた。彼は祈ることができなかった。神は、彼が何者であり、何をしているのかを彼に示された。彼は自分のために祈りはじめた。祈っているうちに彼は入神状態に陥り、地獄のあらゆる恐ろしさを見た。彼はその中に落ちていくところだった。恐ろしい苦闘の末に、神は彼を救われた。彼は、キリストのために魂を勝ち取る働きに取りかかった。彼が何千人もの前で、自分の恐ろしい経験を語るのを、私は聞いたことがある。その結果、一週間で少なくとも五百人が救われ、集会が終わってからも何百人もが救われた。教会から何マイルも離れた所で、男も女も回心した。多くの人が、家に帰る途中で、また集会から何マイルも離れた所で打ち倒され、死人のように横たわった。ああ、人々が悟ってくれたらよいのに。人々を救うために私たちに必要なのは、力強く働く神の力である。三千人が救われたペンテコステの日のように。

この集会の最後の場面は、たいへん心を打つものだった。一連の集会の最後だったので、この集会はとりわけ人々の関心を集めた。回心した人々が、多くの輝かしい証しをした。

「今夜ここでくり広げられた光景を描ける筆は、記録の御使の筆のほかにない。会堂のほとんど全体が祭壇に変わり、あわれみを求める何十人もの叫びと、勝利の叫びとが入り混じった。この働きがどこまで広がるかは、だれにも予言できない。迷信深い人の多くは、W夫人の力に圧倒されるのを恐れて、近づかずにいる。夫人と握手するのを拒む人もいる。

「夫人は、以前の隣人や友人たちの熱心で心からの推薦を携えて、私たちのところへ来た。どこへ集会に行くときもそうである。今ここには、名の知られた市民たちからの手紙があり、いつでも見ることができる。それらの手紙は、夫人が精力的で、心を尽くすクリスチャンの婦人であることを裏づけている。入神について何と言われようと、夫人の集会が大きな善を生み出していることは否定できない。ついに永遠のために束が束ねられるとき、多くの人がこの伝道者の名をたたえるだろう」（『インディアナポリス・ジャーナル』紙）

第十二章　『わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう』（イザヤ四三・一三）

次に私はインディアナ州サミットヴィルへ行き、一八八五年二月二十五日、水曜日の夜に集会を始めた。最初の夜、会堂はいっぱいだった。集まったのは、不信者と懐疑論者とあざける者たちだった。あざける者の多くは教会員だった。神の子供たちが何人か、勝利を祈りながら私のそばに立ってくれた。あの女はここでしくじるだろう、とほとんどだれもが言い、しくじればよいと願っていた。私は神の力によって出て行った。私の味方である方は、私に敵する者たちよりも大いなる方であると知っていたからである。私は立ち上がって人々に告げた。神が力をもって来られる。あなたがたの多くは今夜、あわれみを求めて叫びながら祭壇の前に出ることになる、と。笑っている者たちが見えた。おれたちのことを知らないな、とでも言いたげだった。私は「救命ボートに乗せてください」を歌いはじめた。聖霊が私の上に下られた。神は人々に見せてくださった。永遠の大海に浮かぶ救命ボートと、やみと絶望の中へ流されて、恐ろしい地獄へと落ちていく自分たちの姿を。私は先に立って祈った。私が立ち上がると、会堂は死のような静けさに包まれていた。人々は罪の自覚に震えていた。私が説教しているあいだ、神は一言一言を、イエスの血に浸した矢のように、人々の心に送ってくださった。

説教の後、私は罪人たちに前に出るよう呼びかけた。人々は祭壇の前に駆け寄った。祭壇の前はすぐにいっぱいになった。私に最も反対していた人々が、真っ先に出てきた。従おうとしない者の中には、会堂のあちこちで、死んだように打ち倒される者もいた。最初の夜、多くの輝かしい回心があった。働きは一週間、ますます人々の関心を集めながら続いた。教会の中で、五百人ほどが救われた。立つ場所を作るために、座席が運び出された。会堂全体が悔い改めの席だった。町や周辺で最も悪かった男たちの多くが救われ、熱心なクリスチャンとして生きた。周辺のいたる所で、ほとんどの家でも、多くの人が自分の家で救われた。神をほめたたえながら死んだ人もいた。何人かは、福音を宣べ伝えに出て行った。その人々の働きによって、何百人もがキリストに導かれた。

私は朝九時に集会を始め、夜の十二時に閉じた。何人かの男が、集会をつぶしに来ようと示し合わせた。私は、その男たちのことも、何をしようとしているのかも知らなかった。男たちはやって来て、戸口に詰めかけた。神は、そのかしらがだれであるかを私に示された。私は大声で、キリストのもとに来るよう彼に呼びかけた。神への恐れが彼に下った。彼は死人のように青ざめ、祭壇の前に向かいはじめた。半分ほど来たところで、彼は神の力に打たれて倒れた。彼は十六時間ほど横たわっていた。横たわったまま語る彼の様子とその身ぶりに、見た人はみな神への恐れに打たれた。

一緒に入って来た男たちは、神に逆らって戦うのは恐ろしいことだと悟った。男たちはまもなくひざまずき、あわれみを求めて叫んだ。彼が起き上がると、語るべき驚くべき経験があった。神はその経験をお用いになって、多くの人をキリストに導かれた。彼は魂をキリストに導く働きに取りかかり、まもなく説教を始めた。多くの牧師がやって来て、上からの油注ぎの力を受けた。最初の集会で聖霊の力が私の上に下り、そこにいるあいだずっととどまった。その力は、来たすべての人の目に見え、耳に聞こえ、肌で感じられた。歌っているとき、祈っているとき、説教しているときに、何度もその力が私を支配した。私は立ったまま動けなくなり、人々にも御使にも見せ物となった。ときには何時間も続けて横たわっていた。聖なる火は、すべての教会に入り、何マイルにもわたって広がった。私がほかの働き場へ移ってからも、何百もの失われた魂がキリストに導かれた。

私たちはフェアマウントから、インディアナ州コロンビアシティへ行った。そして一八八五年三月十二日、木曜日の夜に、万人救済派の教会で集会を始めた。集会は四週間ほど続いた。最初の夜から、罪人たちが祭壇の前に出た。多くの人

が天国への旅に踏み出した。人々の関心があまりに大きかったので、私たちは大きなスケート場を借りた。そこも人でいっぱいになった。関心は最後まで続いた。一年前に私の集会で救われた多くの人々がやって来た。あちこちの土地で私を手伝ってくれた牧師やクリスチャンも何人か来た。そして、主を助けて勇士を攻めた。

神のいやしを説くよう召される

ここにいるあいだに主は、私にいやしの賜物と、病人の回復のために手を置く賜物があることを示された。私は何か月も昼も夜も働いていて、集会のたびに神が与えてくださる力のほかには、力がなかった。眠りにつくのが二時になることも多かった。神のいやしを説かなければならないと神が示しはじめられたとき、私にはそれが神の御霊の導きであると理解できなかった。休みが欲しくて死にそうだったのに、私は三晩、眠れずに横たわっていた。神は、私が学べない、あるいは学ぼうとしない教訓を教えておられたのである。私は言った。主よ、ご存じのとおり、私は天国のために魂を勝ち取ろうとして歩みだしました。そしていつも忙しく働いてきました。あなたが私にお与えになった務めのすべてに、忠実であろうとしてきました。休みない働きでひどく疲れきって、床から起き上がるのにも、たびたび人の手を借りなければなりません。

神のいやしを説けば、人々は近隣じゅうの足の不自由な人たちを連れて来るだろう。そうなれば、魂の救いがおろそかになる、と私は思った。主は、働きのことは主ご自身が引き受けてくださると示された。私は主に申し上げた。私が病人のために祈ることをお望みなら、病人を集会に送ってください。そして、その人々のために祈るよう望んでおられることを示してください。そうすれば祈ります、と。この約束をすると、私の心と魂は完全に安らいだ。このときから神は、神のいやしを教え、病人のために祈るよう、私を導きはじめられた。それから九年になる。神は、あらゆる病にかかった何千人もの人をいやされた。人々がいやされるのを見て、何千人もがキリストに導かれた。悪魔は、救われる人がずっと少なくなる、と私に思わせようとしたのだった。

一八八五年四月十日、金曜日、私たちはコロンビアシティを発って、インディアナ州ハートフォードシティへ向かった。フォートウェインで、ハートフォードシティのC弁護士が出迎えてくれ、私たちを自分の家へ案内した。夕方、私たちは、きれいに整えられたダニエル団の部屋で、その人々と会った。みな神のために燃えていて、私たちの心は励まされた。私が日曜日まで滞在することになったので、ダニエル団は劇場で集会を開く手はずを整えた。土曜日の夕方五時には人々が詰めかけはじめ、集会が始まるころには、劇場はあふれるほどいっぱいになった。神は人々を大いに祝福してくださり、何人もの魂が救われた。日曜日は、一日じゅう劇場がいっぱいだった。しかし日曜日の夜は、私がそれまで見た中で最も壮大で、最も栄光に満ちた光景だった。優に二千人が会場に詰めかけ、その晩のうちに十五人以上が入神状態になった。神は大いなる力をもってそこにおられた。月曜日、私たちはニューコーナーへ行き、夕方にその町のダニエル団と会った。会堂は文字どおりぎっしり詰まっていた。ほとんどだれもが主の側についていたので、祭壇の前を満たすほどの罪人が会堂にいなかった。

たいへん切実な願いを受けて、私は次にインディアナ州ティプトンへ行った。一八八五年四月二十六日、日曜日の朝、私はメソジスト教会で集会を始めた。そして二週間、私たちは死にゆく世にキリストの十字架を掲げた。クリスチャンと称する人々からも、外の世からも、あらゆる反対を受けながらであった。地獄のすべてが私たちに向かって陣を敷いているかのようだった。しかし私は、主エホバが勝利を与えてくださると信頼した。そして何百人もの人が、ティプトンの集会のゆえに神をほめたたえている。

二度目の日曜日の夜、興奮はこの上なく高まり、祭壇の前は救いを求めて悔い改める人々でいっぱいだった。そのとき、K夫人という人が入神状態に入った。その状態にあるあいだに、P医師が、入神状態を自分の目で見ようと、会堂の前のほうへ行った。夫人はまもなく、ひざまずくようにと彼に身ぶりで示しはじめた。彼は死んだように倒れた。彼は主に従った。あとで彼が語ったところでは、今でなければ二度とないと思ったのである。神は彼を祝福され、救われた。

この集会ほど、御霊と力の現れを見たことはない。教会のおもだった会員の多くが、神の力の下で打ち倒され、あるいは立ったまま動けなくなった。その顔は

神の栄光に輝いていた。神の臨在がありありと感じられたので、主への恐れがすべての人に下った。

私がここにいた二週間に、五百人以上が主の側についた。その人々が、いのちの終わりまでいつも忠実に守られるように。

神の驚くべきみわざの知らせは、その地方一帯に広まっていった。人々の関心があまりに大きかったので、私は昼も夜も休む暇がなかった。あちこちの教会で集会を開いてほしいと、各地から委員が送られて来た。休みない働きでひどく疲れきって、座っているのもやっとだった。私たちはこっそりインディアナポリスへ抜け出し、個人の家に下宿した。だれにも居場所を知られずに、幾日か休みたいと思ったのである。しかし半日もたたないうちに、市内の教会の牧師が何人も会いに来て、自分の教会で集会を開いてほしいと説き伏せようとした。今はとても無理です、と私は答えた。すると牧師たちは、せめて日曜日に説教をと迫ったが、私は断らなければならなかった。

インディアナ州ペンドルトンから来た人々は、下宿先まで私たちを探し当てた。そして、たとえ一週間でもよいから来てほしいと、しきりに頼んだ。次の約束まで、一週間しかなかった。ここでは休めないとわかったので、私は行くと答えた。私が行くという知らせは、私の着く数時間前に向こうに届いた。牧師の家族も、ほかのほとんどどの家族も、家の大掃除や畑づくりに追われていた。これほど心くじける有様はなかった。私はひどく弱っていて、集会の時刻まで床に就いていなければならず、それから人に助けられて教会へ行った。私は八日間とどまった。この驚くべき集会の結果、何百もの魂が小羊のいのちの書に名をしるされた。その中には、町や郡のおもだった市民、医者や弁護士や商人も多くいた。名の知れた不信者のT医師は、回心して糖尿病をいやされた。彼は今、インディアナ州議会の議員である。最も年老いた罪人も、最も頑なな罪人も救われた。

私たちは祈った。列車に乗っている人々に主が罪を示してくださり、その人々が列車を降りてここに来て、救われるようにしてください、と。ある日の午後、私は神の力に打たれて倒れ、幻を見た。そして会堂が人でいっぱいになるまで横たわっていた。夜、五人の医者が私を診察した。医者たちは言った。体は正常で、脈も鼓動も自然である。ただ、それが音楽に合わせて拍子をとっている、と。私は身ぶりで医者たちに、あなたがたはみな回心すると示し、それぞれの召しを示した。医者たちはみな神をほめたたえるようになった。

その状態にあるあいだに、私は三人の男が列車から降りて来るのを見た。三人とも旅回りの商人だった。

人々は、私は説教できないだろうと思っていた。しかし私は起き上がり、ぎっしり詰まった会衆の前に立った。聖霊の力が、雲のように人々の上にあった。幻の中で列車から来るのを見た三人の男が、そこにいた。三人は離れて座っていた。私はひとりずつのところへ行って告げた。主があなたがたをここへ連れて来られた。あなたがたはみな今夜回心する、と。三人は初めは腹を立てた。自分たちはほかの町へ行くところだったが、何かにとらえられて、列車を降りずにはいられなかったのだ、と言った。群衆が教会へ向かうのを見て、自分たちも来たのだという。主をほめたたえよ。三人ともその夜に救われた。ひとりは、千二百マイル離れた家にすぐに帰って、母にこのよい知らせを伝えるのだと言った。

一、二週間たって、この男たちは、私たちが集会を開いていた別の土地にやって来た。そして、自分たちがどれほど驚くべきしかたでキリストに導かれたかを語った。

その集会から、リバイバルはその地方一帯に広がり、何千人もが救い主の愛を喜んだ。最も裕福な男女がキリストに導かれ、立派な新しい教会を建てた。

周囲二十マイルにわたって、男も女も、家で、仕事場で、道や通りで打ち倒された。何時間も横たわって、驚くべき幻を見た人もいた。多くの人が伝道の務めに就き、あるいは伝道者になった。

ココモで

四か月以上も絶えず招きを受けていたので、私は次にインディアナ州ココモへ行った。三週間にわたって、神は私とその町の人々を驚くほど祝福してくださった。

最初の集会は、たいへん大きなフレンド派の教会で開いた。それでも人々は入りきらなかった。次の日、私たちは郡庁舎へ移った。そこにいるあいだに、バー

ナムのサーカスが町にやって来た。ウッドワースの集会とサーカスのどちらが多くの群衆を集めるか、競争になるだろう、と新聞は書いた。何百人もがサーカスを見に町へ来た。しかし郡庁舎での驚くべき集会のことを聞くと、そちらに来た。一度、大サーカスの行列が通り過ぎていたとき、私は説教していたが、群衆は私の話から離れなかった。次に行列が通ったときには、何百人もがひざまずいて祈っていた。窓に寄る人はひとりもいなかった。聖霊の力によるこのような勝利のゆえに、神をほめたたえよ。私たちは郡庁舎から、町で最も大きな建物であるスケート場へ移った。百人ほどがバプテスマを受けた。この厳かで驚くべき光景を、二万人ほどが見守ったという。最初にバプテスマを受けたのは、メソジストの牧師だった。バプテスマを受けるつもりのなかった教会員が二十人ほど、深く心を動かされて、晴れ着のまま進み出てバプテスマを受けた。群衆があまりに多かったので、その夜は三つの集会を開かなければならなかった。一つは郡庁舎の庭で、一つは通りで開いた。その二つの集会は何人かの牧師が受け持ち、私はスケート場で集会を開いた。神の力は、周囲五十マイルにわたって感じられた。何千もの魂が神の光の中に導き入れられた。集会を閉じた日曜日、神は私たちにペンテコステを与えてくださった。スケート場の中と戸口のまわりに詰めかけた群衆の上に、聖霊が下られた。すべての集会で神の力が注がれ、「しるしと不思議」が伴い、人々の上にとどまった。聖霊は、全能の主の、血で洗われた息子たち娘たちの上にとどまられた。

二時間のうちに、五百人の回心者が証しをした。自分は神の力によって救われたと知っている、そして喜んで天国への道を歩んでいる、と。多くの人が、語っている最中に聖霊の力に打たれて倒れた。会堂のいたる所で、多くの人が倒れた。年老いた男女が声をあげて泣いた。叫ぶ人もいた。罪人たちはあわれみを求めて叫んだ。あらゆる階層の人が打ち倒された。さまざまな教派の多くの教会員や牧師もである。集会の中だけでなく、町の中でも、何マイルも離れた所でも打ち倒された。その人々は、地獄と天国と、神の深い事柄の多くについて、驚くべき幻を見た。その人々が立ってその幻を語ると、神への恐れが人々に下った。何百人もが罪を示され、キリストに導かれた。

ひとりの牧師が、家に帰る途中、十マイル離れた所で、集会に来ていた友人たちの家に立ち寄った。そこにいるあいだに、彼は入神状態に陥った。知らせはすぐに広まった。近所の人々が集まって来た。ひとりは、すきを置いたまま入って来た。彼は罪の自覚を振り払おうとしていた。自分の牧師が死んだように横たわっているのを見ると、神の御霊が彼に示された。牧師が入神状態からさめる前に回心しなければ、自分は永遠に失われる、と。彼はひざまずき、救ってくださいと神に呼ばわった。ほかの人々も続いた。家全体が悔い改めの席になった。まもなく、その嘆きは賛美の叫びに変わった。牧師が天国の訪問から戻る前に、御座のまわりでは知らせが叫ばれていた。「罪人たちが神のもとに帰って来る」神がだれかを入神状態に打ち倒され、それによって集会から遠く離れた所でリバイバルを始められた例は何百もある。これはその一つにすぎない。コルネリオの家での大きなリバイバルは、すべて二つの入神によって起こった。一つは罪人の、一つは聖徒の入神であり、そのときふたりは何マイルも離れていた。サウロの回心をもたらすために、神は三つの幻を用いられた。神の力あるみわざをすべて書こうとすれば、集会ごとに一冊ずつ本を書かなければならないだろう。

第十三章　野営集会に何千人も集う

ココモの集会を閉じた後、私はエルウッドへ行った。そこの、回心して間もない愛する人々を訪ね、クリスチャンの旅路を歩む彼らを励ますためである。まことに祝福された時だった。みな忠実に立ち、まわりの人々の救いのために熱心に働いていた。

私はインディアナ州の次の土地で野営集会を開いた。グリーンタウン、ジーニア、ウィローブランチ、ウィローブランチから十マイルの所、ミレナーズ・コーナー、グリーンフィールドである。

これらの集会には毎日何千人もが集まり、何千人もが回心した。これらの集会の結果、さまざまな教派がいくつもの会堂を建て、いくつもの教会が組織された。

ミレナーズ・コーナーの近くの校舎での集会を閉じた。その後、私たちはインディアナ州アレクサンドリアから五マイルの所で野営集会を開いた。私たちは、日曜日を二度そこで過ごした。これは、私がそれまでに開いた中で最も驚くべき集会だった。会衆は二万五千人と見積もられた。朝、説教の前に、今ここにある救いについて、何百もの力強い証しがあった。それから私は、聖霊の力について説教した。語り終える前に、神の力が群衆の上に下り、五百人ほどを支配した。多くの人が地に倒れた。顔と手を天に上げて立っている人々もいた。聖霊がその人々の上にとどまられた。叫ぶ人もいれば、語る人も、声をあげて泣く人もいた。罪人たちが回心し、証しをして神をほめたたえはじめた。私は力に圧倒されて、自分の天幕へ運ばれた。午後、人々は林の中に高い壇を組んだ。群衆が私の姿を見、声を聞けるようにするためである。私は神の力によって起き上がり、それまでで最も大きな会衆の前に立った。神は私に深い主題を与えてくださった。私は二時間近く語った。人々はみな立っていた。死のような厳かさが群衆の上にとどまった。からだをいやされた人々もいた。そして何千人もがキリストに導かれた。

T医師は、糖尿病という病に苦しんでいた。彼は、自分にはもう望みがないと感じていた。最も優れた医者たちも彼を見放し、いつ死んでもおかしくなかった。回心する前の二週間で、体重が十一キロほど減っていた。彼はペンドルトンの集会に二度来た。彼は名の知れた不信者で、馬の売り買いをする博労でもあり、家に聖書を置くことを許さなかった。私は、神が彼の魂とからだをいやしてくださるよう祈った。祈りはかなえられた。彼は、全身がすっかり丈夫になったと感じ、神をほめたたえながら家に帰った。

彼は多くの患者を抱えていたが、神のために働く時間をたくさん見つけた。回心してからの彼は、神のために燃えるたいまつとなった。まことに、彼の働きによって何百人もがキリストに導かれた。彼はそれから何年も生きた。毎年、回心の記念日には自分の家で集会を開き、そこで多くの人が回心した。彼は大いに成功して政治家になり、神のための力となった。その驚くべきみわざのゆえに、神に栄光あれ。

アレクサンドリアの近くに住むD姉妹は、信仰によって、死んだも同然のところから起こされた。その父親の口から聞いた言葉を、少し記しておく。

「娘は何年も、いくつもの病が重なって苦しんでいました。五人の医者が、もう助からないと見放しました。娘は六か月ほど床に就いていました。たいていは、枕で支えなければ体を起こしていられませんでした。医者たちは、これ以上薬を与えても無駄だと判断しました。

「いよいよ最期の時が来たように見えました。娘は頭も上げられず、子供のように人の手を借りなければなりませんでした。体はひどく軽くなり、夫が子供を抱くように両手に乗せられるほどでした。もう死ぬものとすっかりあきらめ、神のみこころに完全に従っていました。そのとき、娘は寝床で身を起こしました。そして、自分でも何をしているのかわからないうちに、もう床に立っていたのです。それから部屋の中を歩きまわりはじめました。生きた骸骨のようでした。夫はひどく驚きました。死が娘を襲ったのだと思い、今にも倒れるかと見守っていました。

「ウッドワース姉妹に、娘の回復のために祈りに来てほしいと使いをやりました。しかし姉妹は来られず、馬車に乗ったまま、娘の回復のために熱心に祈ってくださいました。同じ時刻に、娘は入神状態に入りました。その中で、娘は輝く光に囲まれたキリストを見ました。左には罪人の群れがいました。娘は、自分が起こされたのを感じて床から起き上がり、歩いて出て行って、夕食をたっぷり食べました。『神のうちにとどまる者の祈りは、大いに力がある』のです」

この姉妹は、魂の救いのために働こうと、伝道者として働き場に出て行った。姉妹の働きは栄光に満ちた成果をあげていると聞いている。

アレクサンドリアの近くの集会を閉じると、私たちは南部への旅に出た。途中、ケンタッキー州の美しい町ルイヴィルに幾日か立ち寄った。私たちはさらに南へ旅を続け、幾日もの疲れる旅の末に、テネシー州メンフィスに着いた。

テネシー州メンフィスで

私たちはメンフィスに一か月ほどとどまり、いくつかの大きな教会で集会を開いた。私は四つのリバイバルを始め、また、その町の黒人の人々のあいだでも少し働いた。インディアナ州インディアナポリスに着くと、すぐにニューヨーク市へ来てほしいという手紙が待っていた。私たちは出かけて、アメリカ第一の大都市である、その驚くべき町を初めて見た。

滞在中、私たちはセントラル・パークや、ほかの多くの美しい名所を訪ねた。また、ムーディーの集会にも出て、その働きを手伝った。

にぎやかな町の通りに立って、人の造った驚くべきものを見ていた。すると、終わりの時についての預言が目の前で成就しているのが見えた。高い建物の屋根の上を戦車が走り、車両が空を飛ぶように走り、町じゅうに空中の駅が建てられていた。その駅から見下ろすと、路面電車が押し合いへし合いしているのが見える。どこを見ても、神の声が雷のような響きで語られるのが聞こえる。「さばきに備えよ。まもなく御使が、片足を地に、片足を海に置いて立ち、もう時がないと誓う」

ニューヨークを発って、私たちはペンシルベニア州のフィラデルフィアとハリスバーグを通って戻った。それらの町を出ると、私たちはシッペンスバーグへ行き、「神の教会」の長老会に出席した。日曜日、私が説教するようにと、みなが言い張った。それはかなりの十字架だった。私の働きはずっとリバイバルの集会だったし、長旅の後でひどく疲れていたからである。みな知らない人ばかりだったので、なおさら神が共にいてくださる必要がある、と私にはわかっていた。会堂は二階席までいっぱいで、教会の庭も人で埋まっていた。多くの牧師が出席していた。私は次の言葉から一時間語った。『もし主を愛さない者があれば、のろわれよ。マラナ・タ（われらの主よ、きたりませ）』（第一コリント一六・二二）。

M長老と共に、そこからペンシルベニア州チェンバーズバーグの長老の家へ行った。そして、数時間前に知らせただけで、その町で集会を始めた。私はここに三週間とどまり、栄光に満ちた集会を持った。多くの年配の人が回心した。ひとりは八十二歳だった。町の最も良い市民も多く回心した。教会の聖歌隊も、全員が群れの中に導き入れられた。私が去るとき、町には五つのリバイバルが起こっていて、どれも栄光に満ちた成果をあげていた。その三週間前、私は見知らぬ者としてこの町に来たのだった。それまでこの町に来たことはなく、この州で集会を開いたこともなかった。人々が私の来たことを初めて知ったのは、教会の鐘が鳴ったときだった。私がリバイバルの集会を開いた神の教会は、ひどい状態にあった。残ったわずかな人々の心をくじくようなことばかりが起こっていた。

ある女は、洗濯だらいの前で救われた。彼女は家じゅうで叫んだ。何百人もの男が働いている機械工場で、ひとりのカトリック教徒が打ち倒された。男たちは、彼が死んだか、死にかけていると思った。正気づかせようと手を尽くしたが、すべて無駄だった。彼は何時間も横たわっていたが、それから跳び起きて、神をたたえて叫んだ。それを見た男たちに、神への恐れが下った。男たちは、それが神の力であると認めないわけにはいかなかった。

チェンバーズバーグから、私たちはインディアナ州ハンティントンへ行った。ニューベテルに立ち寄って、トリニティ・チャペルで何回か集会を開いた。

そこから私たちはインディアナ州コロンビアシティへ行った。八か月前にそこにいたとき、私は神の教会を組織したのである。教会は神のために燃えていた。その教会は、その後立派な会堂を建てた。

コロンビアシティから、私たちはインディアナ州バトラーへ行った。そこで私は主のために激しい戦いをしなければならなかったが、栄光に満ちた勝利が私の働きに冠を与えた。私は百人の会員からなる神の教会を組織した。それから九年がたった。何百人もがキリストに導かれたそのとき、四方に燃え広がった火は、今も燃え続けている。

この集会を閉じると、私たちはオハイオの私の郷里の家を訪ねに出かけた。三年ぶりのことだった。愛する家族みなに、とりわけ年老いた母にまた会えたのは、大きな喜びだった。別れぎわに私が口づけすると、母は「天国で会いましょうね」と言ってくれた。私の祈りは聞かれていた。母は回心したのである。母は七十歳で救い主を見いだした。

オハイオの家からの帰り道に、私たちはオハイオ州クリーヴランドに立ち寄った。何人かの兄弟たちが私が町にいることを聞き、町のミッション教会で私が一度集会を開くと告知した。私が行くと、人々の関心がたいへん大きかったので、しばらく集会を続けた。ムーディーが町に来ていた。人々は二か月以上も前から彼を待ちわびていた。だれもがその集会に行くつもりでいた。それでも、私たちの集会にも大勢の群衆が集まった。関心は高まっていった。主の力が、この町でこれほど現されたことはなかった。ある実業家が、自分の家で打ち倒された。彼は私たちの集会に使いをよこし、働き手のだれかに来て祈ってほしいと頼んだ。彼は死にかけている人のように見えたが、まもなく叫びながら起き上がり、仕事場へ出かけて行った。次の集会で、彼は語った。自分は、私のことを婦人とは呼べないようなあらゆる悪口で呼びながら、集会から帰って行った。すると神が自分を打ち倒され、地獄の穴を見せてくださった。神の力とみわざに逆らって戦うのがどれほど恐ろしいことかも示された、と。

クリーヴランドのある大学の学生が、私たちの集会で神の力を軽んじる言葉を口にした。すると戸口から出て行くときに打ち倒され、家まで運ばれなければならなかった。町で最も裕福な婦人のひとりが、教会の後ろのほうで入神状態に陥った。すべての目が彼女に注がれた。彼女は正気に返ったとき、回心していた。彼女は起き上がって通路を歩き、神がしてくださったことを語った。それからひざまずいて、求道者たちのために働きはじめた。

打たれた牧師

町の牧師のひとりが、私たちの集会でこの力を軽んじる言葉を口にした。その夜、彼は説教をしに自分の教会へ行ったが、神が彼の口を閉ざしておられた。彼は説教ができなかった。彼は聖書を閉じた。口が閉ざされていたのである。次の日、彼は罪を告白するために、私たちの集会に戻って来た。神が驚くべき経験を通して自分を低くされた、と彼は言った。そして、この集会での神の力に逆らって戦わないよう、人々に警告したいと言った。逆らえば神はその人々を打ち倒されるだろう、と彼は言った。そして、サウルの娘が、神の箱の前で叫び踊ったダビデをあざけったときのことを話した。神は彼女を打たれ、子を産めない身にされたのである。

第十四章　刈入れは多い

ペンシルベニア州トラウトマンと、ペンシルベニア州ハーモニーに行った後、私たちはカンザス州ローレンスへ向かった。

そこで主は、私の働きを驚くほど祝福してくださった。主の火が四方に燃えだした。とどまって、刈り入れるばかりになった実りを刈り取ってほしいと、兄弟姉妹たちが熱心に願った。その願いを退けるのは難しかった。インディアナからは「戻って来てください。あなたの働きはまだ終わっていません」という招きが届き続けた。主も、昼も夜も、戻りなさいと私を呼んでおられるように思われた。

私たちは戻った。最初の集会は、戦いの舞台であるインディアナ州ココモで開いた。私たちは天幕を張り、鬨の声をあげて兵士を募った。兵士たちは東から西から、北から南から集まりはじめた。盛大な再会となった。一年前の集会で回心した何百人もがそこにいた。ほかにも多くの人が来て、あらゆる迫害を通して神が守ってくださったと、輝かしい証しをした。あらゆる病をいやされた人も多かった。その中の多くの人が、伝道者として、また牧師として働き場に出ていた。ある日には、さまざまな教会から説教の資格を受けた若い牧師が二十人来ていた。みな、ココモでの私の最初の集会で回心した人々だった。主がなぜ私を連れ戻されたのか、今わかった。この愛する働き手たちを励まし、堅く立たせるためだったのである。その人々の集会を通して、何百もの魂がキリストに導かれた。

この集会に、肺病で死にかけていた説教者が来た。私たちが彼のために祈っていると、何千人もの目の前で彼はいやされた。彼は福音を宣べ伝えに出て行った。

ココモの人々は立派な会堂を建てた。その教会は町で最も力のある教会で、会衆も最も多い。

あらゆる反対と、悪魔とその子らのほえたける声を越えて、主は私たちを栄光に満ちた勝利へと導いてくださった。

ほかの土地から牧師たちが来た。若い兵士たちも前線に集まった。最初の夜、私が先に立って祈っていると、力が波のように群衆の上に押し寄せた。

D兄弟は六十歳で、十二年のあいだ足が不自由だった。杖か松葉杖なしには歩けなかった。同じ所に少しのあいだしかじっとしていられなかった。私たちの何人かがひざまずき、彼に手を置いて共に祈った。聖霊が彼の上に下られた。痛みが去り、はれが引き、硬くなっていた所が消えた。彼は「神に栄光あれ、いやされた」と叫びながら跳び上がった。『足なえは、しかのように飛び走り』（イザヤ三五・六）。彼は松葉杖を投げ捨てた。いやされてから、もう九年ほどになる。彼は何千人もの前で証しをしてきた。多くの人が彼を訪ね、手紙を書いた人々もいる。彼は今も元気である。『信じる者には、このようなしるしが伴う』（マルコ一六・一七）。

私たちが初めていやしのために手を置いたのは、ダゲット医師だった。

去年、一九一五年の八月に、カンザス州トピーカで集会を開いたとき、私は御霊に導かれて、この最初のいやしについて話した。話し終えると、ひとりの男が前に出て来た。自分はダゲット医師の息子です、と彼は言った。三十年前、父があれほど驚くべきしかたでいやされる数か月前に、私の本の一冊を読んで回心した。しかし私に会ったのは、長年足の不自由に苦しんだ父がいやされた、あの集会が初めてだった、という。彼の父はいのちを延ばされ、その後何年も生きた。

まことに「神は人知を超えた道によって
その不思議なみわざを行われる」

そして神はいつでも、イエスの名による私たちの働きにほほえまれ、みことばを確かなものとしてくださる。

日曜日の朝九時に、私たちは賛美の集会を始めた。大勢の群衆が集まり、なおも増え続けて、林は生きた魂のうごめく群れとなった。賛美の歌、喜びの叫び、響きわたる証しが、老いも若きも、白髪の父や母から小さな男の子まで、あらゆる人から上がった。祝福を受けて、自分が救われていると知っている人はみな手を挙げてください、と私が言った。すると五百を下らない手が挙がり、みな「主をほめたたえよ」と叫んだ。力が旋風のように来た。群衆はあちらこちらへ揺さぶられた。罪人たちは立ったまま回心した。神のしもべたちは神の栄光に満たされて、昔の祭司たちのように、務めを行うことができなかった。偽りの証人たちの前に引き出されたステパノのように、顔が輝いている人々もいた。

第十五章　アンダーソンの地震

インディアナ州アンダーソンの罪人たちとクリスチャンたちは、二年前から私を町に招こうと努めていた。集会を開いてもらいたかったのである。私も行きたいと強く願っていたが、七月まで行くことができなかった。七月に、私は共進会場で野営集会を始めた。

最初の夜、天幕には人々が入りきらなかった。ほとんどは、信仰を告白していない人々か、信仰の死んだ、クリスチャンと称する人々だった。後のほうがなお悪い。手伝ってくれる人はほとんどいなかった。不信者を公言していた多くの市民が、群衆をかき分けて来て、私たちの側に立った。その人々があまりに集会を励ましたので、教会員たちは顔を赤らめ、ちりの中に頭を垂れるほどだった。私たちには、立つ力も語る声もほとんどなかった。しかしエリヤの神の力によって、勝利を叫びながら戦いを始めた。

私は罪人たちに前に出るよう呼びかけなかった。クリスチャンと称する人々に前に出るよう強く求めた。ところが罪人たちが、天幕のあちこちから前へ押し寄せて来た。

集会が終わる前に、町のほとんど全体が関心を寄せ、何かしたいと願うようになった。さまざまな教会の婦人たちが訪ねて来て、私を自分の家に招いた。もっと長くとどまってもらおうと、人々はあらゆる手を尽くした。しかし私はインディアナ州ファームランドへ行くと約束していて、その約束を守らなければならなかった。本当は、その前の日曜日にファームランドに行っているはずだった。その日に私が来ると、公に告知されていたのである。そのとき私は、自分が行けるまで働きを進めてもらうため、ほかの良い働き手を何人か送った。私がファームランドに来ると思われていた最初の土曜日の夜、二千人が私を迎えに駅に来ていた。私が自分で行かずにほかの人を送ったので、人々はひどくがっかりした。アンダーソンの駅に座って、ファームランド行きの列車を待っていた。すると驚いたことに、私がファームランドに送った伝道者のひとりが、そこに座っていた。彼女は、心がくじけた、向こうでは何もできない、と言った。人々があまりに頑なで、霊的に死んでいるというのである。彼女は幻を見て、人々がみな棺に入っているのを見たと言った。あまりに死んでいるので、霊的に起こされることは決してないと信じている、と言った。私が向こうに着くとすぐ、送ったもうひとりの伝道者が、私に何も告げずにこっそり立ち去った。

私には逃げ出す考えはなかった。私は神の力によって起き上がり、助けられて説教壇に上った。私は震えながら立ち、歌いはじめた。力が私の上に下った。私

パーキンズヴィルの集会は省かなければならない

パーキンズヴィルを発って、次の集会はインディアナ州サミットヴィルで開いた。私たちは天幕を張り、戦いを始めた。敵は、この土地は自分のものだと思っていた。実際、そう見えた。しかし主の兵士たちが、四方八方から隊をなしてやって来た。多くの牧師と、二年前に私の集会で回心した何十人もの人々が来た。

は祈り、説教し、それから罪人たちを祭壇の前に招いた。みなが驚いたことに、多くの人が出てきた。まもなく、新しく生まれた主の息子たち娘たちの叫びが、野営地じゅうに響いた。十日のあいだ、昼も夜も、祭壇の前は求道者でいっぱいだった。これほどの関心のある中で集会を閉じるのは、ほとんど無理に思えた。しかし私は、十日後にアンダーソンへ戻ると約束していた。その地域全体が揺り動かされ、何百人もが深く罪を示されていたが、私は集会を閉じなければならなかった。

十日後、私はアンダーソンへ戻り、兄弟たちが用意してくれた美しい林で集会を始めた。

戻った最初の夜、二十八人が回心した。私はこの集会を三週間続け、毎日三回の集会を開いた。一つの集会が次の集会までつながってしまうこともあった。毎日、二十人から五十人が回心した。この集会では、合衆国のほとんどすべての州から来た男女が回心した。そして、救い主の愛の知らせを携えて、それぞれの家へ帰って行った。

野営地には毎日何千人もがいた。聖霊の力は旋風のように来た。群衆は、嵐の中で伸びゆく麦のように、何度も揺さぶられた。会衆のいたる所から叫びが上がった。四方で男も女も打ち倒され、大きな壇へ運ばれた。しかし壇には、主に打ち倒される者が載りきらなかった。その光景は言葉に表せないほどだった。大会衆の三分の二以上が、集会のあいだずっと立っていた。その多くは、墓に入る日に向かって髪が白くなりつつある、年老いた父や母だった。こうした人々の多くが、輝かしく回心した。

弁護士も医者も不信者も、「最も高い香柏」のような人々から最も弱い者まで、キリストに導かれた。この集会によって、多くのあわれな酒飲みが引き上げられた。その人々は今、立派な市民となっている。ああ、アンダーソンでなされた驚くべきみわざのゆえに、主をほめたたえよ。何千人もが回心した。

ひどく年老いた婦人がふたり、集会に連れて来られた。ふたりは弱っていて、馬車から降りることもできなかった。ふたりの頼みで、馬を馬車から外し、ふたりは馬車に座ったままにされた。馬車は説教台の近くまで引いて来られ、ふたりの老婦人はどちらも集会のあいだに回心した。町の南の郊外に住む老紳士が、集会の一つに出て歌の本を買った。家に帰ると、腰を下ろしてそれを読んだ。読んでいるうちに彼は回心し、歌と賛美があふれ出た。その声に引かれて、近所の人々が彼の家に集まって来た。その人々も加わって、やはり回心した。この回心者たちの歌声と叫びは、近所じゅうに響いた。

これらの集会には、その郡で、いや、どの郡にもひけを取らないほど立派な男女が加わっていた。

何百人もが救命ボートに乗り込み、栄光の国へと出発していた。そのあいだにも、ほとんど説き伏せられながら、どうしても降参しようとしない聡明な男女が大勢いた。私はその人々のことがひどく気がかりだった。その人々にとって、今でなければ二度とないと感じた。主は私の心に示された。これが最後の招きであると告げなさい。祈りを信じる者にはみな、ひざまずいて顔と手を神に上げるよう求めなさい。そして、地を揺り動かしてください、必要なら地震を送ってください、と神に願わせなさい、と。五百人以上の人々が、天に手を上げてひざまずき、祈った。それは何という驚くべき光景だったことか。みなが、主が何か驚くべきしかたで近づいてくださるのを待ち望んでいた。神の力が会衆の中に下った。すると突然、大地が揺れはじめた。地震が起こり、町じゅうで揺れが感じられた。それは、サウスカロライナ州チャールストンが破壊された地震だった。その揺れが、インディアナ州アンダーソンにまで及んだのである。信仰による祈りは、たとえ主が天を引き降ろされることになっても、聞かれる。

ほかにも多くの土地で大地が揺れ、群衆が揺れ動いて倒れたことがある。

ある日、ひとりの弁護士が集会の中で立ち上がった。永遠だけが明らかにするこの良い働きについて、一言言わずにはいられない、と彼は言った。彼は、名の知れた不信者だった兄弟から受け取った手紙を手にしていた。手紙にはこう書いてあった。自分は私に会ったことも、私の集会に出たこともない。しかし遠くから集会について見聞きしたことと、私の本を読んだことで回心した。これから伝道の務めに就くつもりだ、と。その兄弟は、何百ドル分もの不信仰の本を持っていたが、火をたいてそれを焼いたという。兄弟のことをこう語った弁護士自身も、私が町に来たときには不信者だった。しかし、その不信仰はすっかり払い去られた、と彼は言った。

私は林の中で教会を組織した。二百九十五人の名が登録された。何百人もが来て、クリスチャンの交わりのしるしに、その人々の手を握った。それは、野営地にいただれもが、おそらくそれまで見たことのない光景だった。

町の何人もの実業家たちの熱心な願いによって、私たちは最後の集会を郡庁舎の階段で開いた。郡庁舎の庭と通りを見下ろすと、こちらを見上げる顔がぎっしりと詰まっていた。どの店からも、どの窓からも、見よう、聞こうとする顔がのぞいていた。あの苦しい時に私のそばに立っていてくださった神を、私はほめたたえる。あの高い階段に立つには、恵みと勇気が要った。私のまわりには、牧師、弁護士、医者、記者たちがいた。何か月も休みなく働いた後で、私はひどく弱り、神経が張りつめていた。しかし神は、澄んだ力強い声を与えてくださった。私の声は、何区画も先まで届いた。

アンダーソンで集会を開いているあいだに、ファームランドのさまざまな教会の牧師たちが委員会を作った。そしてアンダーソンにやって来た。私に戻って来てもらうよう説き伏せるためである。牧師たちは言った。私が向こうで開いた十日間の集会の良い成果を、みなが見た。地域は大きく良いほうへ変わった。教会は驚くほど生き返り、強められた。以前は尻込みしていた人々も、今は前に出て、私を助けるためにできるかぎりのことをするつもりでいる、と。私は、行くのが主のみこころだと感じた。アンダーソンの集会を閉じると、私は向こうへ行き、最初の集会を開いた林よりも良い林で野営集会を始めた。その良い成果は、永遠だけが語ることができる。村のほとんどすべての牧師が前に出て、私と肩を並べて戦った。

何百人もが回心し、その多くは年配の人々だった。回心した人のうち、十八歳を超えていなかった者は、十二人もいなかったと思う。救われた人の半数は、四十歳以上だったと思う。

まことに「しるしと不思議」が伴った。聖霊は、人を打ち倒し、心を溶かし、油を注ぎ、いやす力をもって来られた。

主の驚くべきみわざと、ファームランドで刈り集められた魂の大いなる実りのゆえに、主をほめたたえよ。

牧師たちと年老いた人々は言った。この地方で、これほどのリバイバルはかつてなかった。これほど聖霊が注がれたことも、これほどしるしと不思議が伴ったことも、これほど魂が刈り集められたこともなかった、と。

第十六章　困難な土地、インディアナ州マンシー

インディアナ州マンシーのクリスチャンたちから、町に来て野営集会を開いてほしいと何度も頼まれていた。私はそうすることに決め、ファームランドから向かって、共進会場で集会を始めた。そこで集会を始めたのは、ひどく心くじける状況の中でだった。天気は寒く陰気で、人々の心はさらに冷たかった。しかし神が驚くべき勝利をもたらしてくださると知って、私は集会を始めた。私はファームランドでの激しい戦いで、ほとんど疲れきっていた。手伝ってくれる人もほとんどいなかったので、先行きは暗く見えた。しかし私は神を信じていた。そして神は、私を「勝ち得て余りある者」として、戦いを切り抜けさせてくださった。空は晴れわたり、晴れた空と共に人々がやって来て、大きな天幕はあふれるほどになった。集会によっては、多くの人が私の声の聞こえる所まで近づけなかった。

神は大いなる力をもってそこにおられ、何百人もが救い主の愛の御腕に導かれた。多くの年配の人々がキリストに導かれ、何十人もがさまざまな病をいやされた。

マンシーは、不信仰と、宗教をあざける者たちで知られていた。あの女は決してマンシーに来ない、おれたちを恐れているのだ、とその人々は何度も豪語していた。そうした大口をさんざん聞かされたので、私は行って、神に何がおできになるかを知らせてやろうと決めた。そうした不信者やあざける者の多くが、真っ

先に、人を打ち倒す神の力に打たれて倒れた。ほかの人々は、震えて立っていられなくなり、ひれ伏して神にあわれみを求めて叫んだ。集会は四週間続いた。最も年老いた人々は言った。これほどの覚醒はかつてなかった。生ける神を礼拝するために、これほどの群衆が集まるのを見たことがない、と。ハートフォードシティやニューコーナーをはじめ、インディアナじゅうの私たちの集会で回心した多くの人々が、共に戦うために来た。ほかの州からも来た。

何十人もの牧師が、自分の働き手たちを連れて来た。日曜日には群衆があまりに多くて、天幕の中では集会を開けなかった。人々は、林の中の丘の頂に高い壇を組んだ。集会が野外で開かれるとわかると、人々がどっと押し寄せた。そこにいただれも見たことのないほどの殺到だった。だれもが、見えて聞こえる所に行こうとした。座席はなく、老いも若きも立っていなければならなかった。それでも人々は、立つ場所を得られたことを喜んでいるようだった。その中の何十人もがひどく年老いていた。本物のペンテコステのリバイバルを見るまで生きながらえさせていただいた、とその人々は泣き、叫び、神をほめたたえた。来る日も来る日も、主の力が会衆の上に押し寄せ、人々は何度も嵐の中の麦のように揺さぶられた。これらの集会は、ほかのどの土地とも同じように、戦場のようだった。主に打ち倒された者たちが、あたり一面に横たわっていた。罪人たちは泣きながらカルバリへの道をたどっていた。勝利の叫びと、戦場から追い払われた敵のわめき声とうなり声の中でのことだった。

インディアナの州都で主のための働きを始めることが私の務めであると、私は長いあいだ心に示されていた。それで私たちはマンシーからその町へ行き、戦いを始めた。それは、私が王なるイエスのために戦った中で、最も激しい戦いとなった。

インディアナポリスで

十二月の寒い夜、私たちはインディアナポリスのメリディアン・スケート場で、旗を風にひるがえした。あの土地で、私たちほど共感が少なく、反対の多い中でリバイバルの集会を始めた者はいない。そう言っても差しつかえないと思う。やみの力がこぞって、私たちに向かって陣を敷いていた。しかし、あらゆる苦しい状況の中で、敵が四方から投げつける火の矢の中で、私たちは絶えずイエスを仰いだ。戦いは長く激しかったが、私たちは大いなる勝利を得た。

ちょうどクリスマスの二週間前で、どの教会も、休暇を盛大に祝う準備として、親睦会を次々に開いていた。たいていの教会は、聖霊による信仰のリバイバルのほかなら、どんなことでも考えていた。ほとんどすべての人の心がクリスマスに向いていて、だれもが何かしらで時間を取られていた。まわりでは、おびただしい魂が恐ろしい地獄へとなだれ落ちて行くのが見えた。毎日、葬列が通り過ぎるのが見えた。その多くは、やみの中へ飛び込んで行った人々だった。私は、これらのことの暗い面を見て心くじけるかわりに、自分の責任をそれだけ重く感じた。そして、私たちの神の力によって前進しよう、と言った。私たちが町に行く三日ほど前に、合同兄弟教会の会堂が焼け落ちていた。その牧師と会員たちは、主を助けて勇士を攻めた。町の地の塩のような人々も、戦いのことを聞いてやって来た。多くの牧師が味方してくれ、戦いの中で立派に働いた。来られるかぎり、一度も欠かさなかった。私たちは一日に三回の集会を開いた。どの集会でも魂が救われた。スケート場に四週間とどまり、それからフリーメーソン会館へ移った。

会館は昼も夜もいっぱいだった。何百人もが、いなかやほかの町から来た。四十歳から七十五歳までの年配の人々が、何百人も救われた。八十五歳の人もいた。ひとりの老婦人が、二十五マイル離れた所から連れて来られた。百三歳だった。彼女は転んで、ひどいけがをしていた。その苦しみはあまりに激しく、昼も夜も叫び声が聞こえるほどだった。人々がいやされていると聞くと、彼女は息子に言った。集会に連れて行ってくれれば、神が苦しみを和らげてくださり、いやしてくださる、と。彼女の容態では、それは大仕事だった。しかし息子は年老いた母をたいへん誇りにしていて、母を楽にするためなら何でもしたいと願っていた。彼女は運び込まれた。私たちが祈ると、彼女はいやされ、神の力に満たされた。彼女は会館じゅうに響く声で叫び、神をほめたたえ、驚くほど御名をあがめた。息子が立ち上がって、母は百三歳ですと人々に告げると、人々は「きょうは驚くべきことを見た」と言った。彼女は、私がそれまでに会った中で最も年老い

た人だった。メソジスト教会でたいへん高い地位にあり、集会を手伝ってくれていたひとりの牧師が、こう言った。自分は四十年、失われた魂のために働き、驚くべきリバイバルを数多く見てきた。しかし、これほど多くの年配の男女が祭壇の前に出るのを見たことはない。これほど多くの白髪の頭が悲しみにうなだれ、泣きながらカルバリへの道をたどるのを見たこともない、と。

インディアナポリスでの集会の最終日（日曜日）は、神の子供たちにとって、比べるもののない喜びの日となった。会館は一日じゅう、集会のあいだに救われた人々でいっぱいで、多くの人が中に入れなかった。朝からだれもが加わる賛美の集会が始まり、ほとんど一日じゅう続いた。

夜は早い時刻から、建物はあふれるほどいっぱいになった。何百人もが中に入れなかった。私は「すべての人の復活」という題で、一時間以上語った。集会の終わりに、私たちは一時間近く立って別れを告げた。インディアナポリスにいるあいだに愛するようになった人々と握手したのである。

次に私たちは、前もって手はずが整えられていたインディアナ州グリーンズバーグへ行った。次の土曜日の夜、劇場で集会を始めた。ここでも、ほかの土地と同じように、まことのキリスト教は軽んじられていた。愛する読者よ、驚かないでいただきたい。最初の夜、主の側にいる人は立ってくださいと私が言った。すると大勢の群衆の中のだれひとり、自分はイエスのものだと認めなかったのである。グリーンズバーグの始まりはこうだった。しかし幾日もたたないうちに、何十人もが一度に立ち上がるようになった。自分は主の側にいると言える機会を、だれもが心から喜んだ。

私たちは四週間集会を続け、主のために大いなる勝利を得た。何百人もが輝かしく回心した。さまざまな集会で多くの人が入神状態になり、中には驚くべき幻を見る人もいた。回心したある商人の妻が、集会の一つで、いすに座ったまま入神状態になった。その状態にあるあいだの彼女は、愛らしさそのものだった。それは畏れを覚えさせる光景で、どんなに気丈な人も泣いた。彼女は叫びながら入神状態からさめた。本人の言うところでは、天国で娘を見たのだった。

W判事が、アンダーソンから集会に来た。判事は会衆に語った。百マイル離れた所で、私たちの祈りに答えて、主が自分にしてくださったことがある。ここに来てそれを話すのは、神と人々に対する務めだと感じた、と。判事は言った。自分は肺病でひどく弱り、治る望みをすっかり捨てて、まもなく死ぬものと思っていた、と。そのとき私は祈りの時刻を決めて、彼にこう告げていた。その時刻に主のもとに行き、神がいやしてくださり、聖霊のバプテスマを授けてくださるのを待ち望みなさい。私たちも同じ時刻にあなたのために祈る。そうすれば、そのとおりになる、と。決められた時刻に、ただひとり神と共にいたとき、自分はいやされた、と判事は言った。人々は、彼が元気で丈夫になっているのを見た。判事は幾日か集会にとどまった。

H兄弟はインディアナポリスのメソジストの牧師で、重い病にかかっていたが、私たちが祈るとたちどころにいやされた。彼はグリーンズバーグに来て、イエスがしてくださったことを語った。語っているうちに、神の力が彼の上に下った。彼は「ハレルヤ」と叫びはじめた。その言葉は、御座の後ろから出てくるかと思われるほどの力と麗しさをもって、あふれ出た。

ディケーターでの集会を閉じると、私たちは天幕をたたんでその季節を終え、インディアナへ戻り、数日の集会を開いた。そこで、一年前の集会でからだの病をいやされた多くの人々に会った。どの人も、私たちが期待していたとおり、丈夫で元気だった。神のみわざは人のわざとは違うからである。それは完全で、いつまでも続く。主のために働いてきた年月を振り返ると、苦しい場面と困難の中で戦った多くの激しい戦いが思い起こされる。そのすべてを通して、私たちはいつもイエスに目を注ぎ、主の愛の御手に導かれてきた。どれほど戦いが激しくても、私たちに向かって陣を敷く軍勢がどれほど強くても、神は私たちに戦いを切り抜けさせてくださった。私たちは勝ち得て余りある者となった。すべての栄光が御名にあるように。

主はまもなく来られる

旅人の耳に届く知らせは、なんと麗しいことか
ふるさとを離れてさすらうその耳に

まもなく救い主が栄光のうちにお現れになり
まもなく御国が来る
　（おりかえし）
主は来られる、まもなく来られる、私は知っている
この地にふたたび戻って来られる
疲れた旅人は栄光の国へ行く
救い主が治めに来られるときに
　旅人たちの眠る、苔むした古い墓は
かつてのように大きく開かれ
大海の深みに眠る幾百万の人々も
もう一度この地に生きる
　そこで私たちは、エデンの家で愛する者すべてに会い
あがないの麗しい歌を歌う
北から、南から、あがなわれた者はみな来て
天の王を礼拝する
　ハレルヤ、アーメン、またハレルヤ
しばらくすれば、私たちはそこにいる
ああ、そのときまで忠実に、望みを抱き、喜んでいよう
そして輝く栄光の冠をかぶるのだ

第十七章　インディアナ州アンダーソンとミズーリ州ハンニバルで

インディアナポリスで長老会に出席した後、私たちはインディアナ州アンダーソンへ行った。一年前に私がそこで組織した教会が新しい会堂を建てたので、その献堂式に出るためである。大きくて居心地のよい会堂である。

アンダーソンから、私たちはダニエル団を訪ねるため、イリノイ州アーバナへ行った。ダニエル団はバスリー会館で集まった。会館はいっぱいで、立つ場所もすべてふさがり、何百人もが帰らなければならなかった。何人もの牧師が出席して集会に加わった。そして、私たちが前にそこにいたときになされた大いなる働きと、今もダニエル団によってなされている働きについて語った。多くの人が証しをした。四か月前にいやされ、今も元気である、と。以前のどのときよりも健康になった人々もいた。三人はがんをいやされていた。回心した人々が、主にあって強い男女になっているのを、私たちは見た。

次に私たちはミズーリ州ハンニバルへ行き、パーク・ホテルに泊まった。私たちはスケート場を借り、賃料は自分たちで払った。それは、私たちがそれまでに戦った中でも、最も激しい戦いの一つとなった。そこには、偽りの信仰を告白する一団がいた。その人々も、その信仰も、だれにも信用されていなかった。その一団は私たちの集会になだれ込み、集会を乗っ取ろうとした。私たちはその人々のことを何も知らなかったが、私にはそれが偽物だとわかった。町の人々は、その一団がしきりに集会に加わっているのを見て、私たちもその人々と同類だと思った。そのために、人々は集会から遠ざかった。私はできるかぎりその一団を忍んだ。自分たちが間違っていると気づいて、光の中を歩むようになってほしいと願ったのである。しかし、見ようとしない者ほど目の見えない者はない。私たちと歩調を合わせるか、さもなければ出て行きなさい、と私はその人々に告げた。その一団はどちらもしようとせず、集会をつぶすためにできるかぎりのことをした。

私たちがそのようなやり方を認めていないとわかると、人々の関心は高まっていった。ついには町で最も大きな建物がいっぱいになり、何百人もが帰らなければならなくなった。最初の回心者は、七十歳の酒場の主人だった。多くの人がそれに続いた。その中には、町の最も良い市民も多くいた。長い祭壇の前は、昼も夜もいっぱいだった。ときには数分のうちに、祭壇の前の人がみな回心するか、いやされるかして、空になった。そして二度目、ときには三度目にまたいっぱいになった。人々は集会の中で死んだように打ち倒されただけでなく、何マイルも離れた所でも打ち倒された。ひとりの男は自分の家で入神状態に打ち倒され、三日のあいだその状態で横たわっていた。何人かの医者が診に行ったが、どこが悪いのかわからなかった。彼は神をほめたたえながら入神状態からさめた。そして集会に来て、自分の経験を語った。

ある女が、私たちがキリストの教えを説いているかどうかを示してください、と主に願った。主は幻のうちに彼女に示された。私たちが説教壇にしていた壇も、スケート場をほとんど端から端まで横切る祭壇、すなわち悔い改めの席も、真っ白だった。私も、私と共にいる人々も、真っ白な衣を着ているのが見えた。壇の上には、雪のように白い土の器がいくつも見えた。そのすべての上に、吹き寄せられた雪よりも白い、柔らかな栄光の雲がかかっていた。すべての器の上に、輝く文字でこう書かれているのが見えた。『これらは、キリストの純粋な福音を力をもって運ぶ、わたしの選んだ器である』目に映るものは何もかも真っ白で、清さのしるしだった。彼女はその幻を会衆に語った。

聖徒たちの戴冠

天は輝きに照り映える
しかし天よりもはるかに明るく
聖徒たちは栄光のうちに輝く

キリストが彼らを装われるときに
救い主のその麗しさは
すべての目をくらませる
やがて来る戴冠の日に
　そのとき私たちの痛みは終わり
もう罪を犯すことも、嘆くこともない
悲しみはみな後ろにあり
前にあるのは喜びばかり
あがない主にある喜びだ

第十八章　イリノイ州スプリングフィールドで

　ほかにもいくつかの伝道の旅をした後、私たちはイリノイ州スプリングフィールドへ行った。オークリッジ公園に天幕を張り、私たちの神の宮を建て上げるために合同の集会を始めた。私たちは、すべての牧師とクリスチャンの働き手に、主を助けに来るよう呼びかけた。町の説教者でその呼びかけに応えた者は、ルーテル教会の牧師たちのほかにひとりもいなかった。ルーテル教会からは何人かが前に出てくれた。私たちは、町にひとりの知り合いもいなかった。神の声が言われた。「行きなさい。わたしがあなたと共にいる」私たちは天幕で暮らし、料理人を雇い、費用はすべて自分たちで払った。必要な助けはみな神が備えてくださると信頼していた。最初の数日は雨ばかりで、何もかもが私たちに逆らっていた。最初の夜には十八人しか来なかったが、私たちは勝利を叫び、神がこの町を揺り動かされる、と人々に告げた。関心は高まり、ついには何千人もが集まるようになった。祭壇の前は昼も夜もいっぱいだった。あらゆる病をいやしていただこうと、人々はさまざまな州から、国じゅうから来た。人々は寝台に乗せられ、列車で、いすに乗せられ、松葉杖をつき、辻馬車に乗って運ばれて来た。そして何百人もがいやされ、回心した。私たちの知るかぎりでも、輝かしく回心して、集会が終わる前に死んだ人が三人いた。若い婦人と八十歳近い老人、そしてもう

私たちが主のそば近くにいるときに
やがて来る戴冠の日のために
　待ち望む者はみな、早めよう
その来たるべき喜びの日を
心からの献身によって
狭い道を歩み
失われた人々を集めることによって
主はその人々のために死なれた
やがて来る戴冠の日に

ひとりの老人である。この人は自分の家で、死の床にあって救われた。自分の家で回心した人々もいれば、森の中で回心した人々もいた。
　小さな女の子が、母親の腕に抱かれて集会に運び込まれた。その子は、生まれて二日の赤ん坊のように何もできなかった。脊髄膜炎にかかって、全身がまひしていた。脳もそこなわれていた。頭は胸に垂れ、背中も手足も動かせなかった。六か月のあいだ病んでいた。四か月のあいだ、少しの牛乳のほかは何も口にしていなかった。私はその子に手を置き、汚れた霊どもに、この子から出て行けと命じた。五分たつと、その子はまっすぐに座り、両腕を頭の上に挙げられるようになった。さらに五分たつと、口がきけるようになって立ち上がり、高い祭壇の上に上がった。そして母親と一緒に路面電車まで歩き、家に帰って、食べたいものを何でも食べられるようになった。次の朝、その子はだれよりも早く起きて、家から家へと走りまわり、神がしてくださったことを話した。このことは近所じゅうを揺り動かした。この子には信仰を働かせることもできなかったし、私たちが何をしているのかもわかっていないようだった。何人もの子供が驚くほどいやされ、乳飲み子も何人かいやされた。ひとりの小さな男の子は、水腫と胃腸の病をいやされた。ひどくむくんでいて、服のボタンがかけられなかった。むくみはた

ちまち引いた。母親はチョッキと服のボタンを全部かけて、その子を壇の上に立たせた。神がしてくださったことを、だれもが見られるようにするためである。その小さな子は、澄んだ、よく響く声で、神さまが治してくださった、と言った。

ここで言っておかなければならない。私たちがどこへ行っても、神は、信仰を告白していない多くの男女を起こされ、私たちの味方にしてくださる。その人々は言う。聖書がまことなら、あなたがたは神の子供だ。あなたがたは、来たるべき世のためだけでなく、この世でも人々に善をなしている。だから私たちはあなたがたの味方をする、と。神をほめたたえよ。こうした立派な男女の多くが、私たちの集会で回心する。その人々は、神が生きておられ、そのみことばがまことであることを悟らされる。そして神に従い、神の賜物である永遠のいのちを受ける。

どの集会でも、神はさまざまな賜物を持つ多くの働き手を起こされ、送り出しておられる。

集会の最後の二、三日には、ほかの土地から二十人以上の牧師が来ていた。牧師たちはみな前に出て、戦いに加わった。S兄弟はメソジストの牧師だったが、祭壇の前で働いているときに入神状態に陥った。彼は何時間も横たわり、死人のように運び出された。集会を閉じた夜、彼は、群衆のだれにも聞こえる澄んだよく響く声で、自分の見た驚くべき幻を語った。彼は、驚くべき金の都と、そこに住む栄光に満ちた人々のことを語った。地上で知っていた多くの人を、彼はそこで見た。彼はまた、地獄の恐ろしい淵と、そこにいる人々の有様を語った。そこへ向かって行くおびただしい群れも見た。彼の話を聞いた人はだれも、彼が語ったことをすべて本当に見たことを疑えなかった。会衆のあちこちで、また自分の家で、多くの人が打ち倒された。

年老いた不信者が救われる

W兄弟は八十二歳の不信者だったが、回心してリウマチをいやされた。彼は十五年のあいだ、足が不自由だった。彼はひざまずいていた所から立ち上がり、まわりの人々と握手した。そして、最後の時刻に自分を救ってくださった神をほめたたえた。彼は祭壇の上に上がり、自分は生涯のほとんどを不信者として過ごしてきた、と人々に語った。自分はロバート・インガソルに初めて不信仰を教えた者のひとりだった、と彼は言った。ふたりは二十年のあいだ、不信仰を学び、教えてきたという。ふたりは、神を偽り者とし、イエスを詐欺師とし、聖霊を神話とし、聖書を作り話としてきた。彼は、人は牛のように死に、魂などないと信じようとした。彼は言った。自分は三度、入神状態で横たわった。神の力に打ち倒されたのだ、と。そのときは、それが何であるかわからず、納得しようともしなかった。しかし今は、それが神の力だったとわかる、と。彼は一八五〇年にインガソルと出会った。一八五七年に、最初の入神状態があった。彼は十四時間横たわっていた。自分が死んで葬られたように思われた。自分の霊が、墓に入るからだを離れたのがわかった。友人たちが墓の前で泣いているのが見えた。彼の葬儀の説教も聞こえた。人々が棺を墓に納め、墓を埋めて、家へ帰って行くのが見えた。神がこのようにされたのは、彼には決して死なず、自分が自分でなくなることもない霊があると示すためだった。しかし彼は信じようとしなかった。何年もたって、彼はまた入神状態に陥り、それは二十二時間続いた。彼の霊はからだを離れて天国へ運ばれた。そこで彼は、みな真っ白な衣を着た、幾百万、幾千万もの人々を見た。この上なく麗しい音楽を聞き、この上なく美しい花々と、美しく壮大な都を見た。そのすべてを言い表すことはできなかった。このとき、彼は自分が自分であることを保っていた。彼の霊は、まったく自由だった。それでも彼は罪の自覚を振り払い、全能者と争い続けた。神はふたたび幻のうちに彼のもとに来られた。そして、この世とその中のすべてが過ぎ去った後の、永遠における神の聖徒たちの有様を示された。彼は新しい地を見た。何もかもが新しく美しかった。それは、主のあがなわれた軍勢が用い、楽しむのにふさわしく整えられていた。

最初の天、すなわち神があがなわれた子供たちのために備えられた、まことの神の都が、下って来て新しい地に据えられる。合衆国にとってのワシントン市のようなものである。神の子供たちは、美しい都の中に閉じ込められるのではない。新しい地全体が、私たちの受け継ぐものとなる。私たちのからだは軽くな

り、その力はあまりに大きくなって、知ることに限りがなくなる。私たちは父の驚くべきみわざの中に、新しい美しさと宝を絶えず探り求めていくのである。

自分を信じない者とか不信者とか呼んで、偽りを信じ込もうとしているあなたがたよ。神があなたがたの魂をあわれんでくださるように。そして、あなたがたが偽りを信じて永遠に滅びるのを神が許される前に、自分の危うさに気づけるよう助けてくださるように。

最後の集会の終わりに、祭壇の上に立って、会衆が私たちと握手して別れを告げられるようにしてほしい、と頼まれた。それはたいへん心を打つものだった。クリスチャンも罪人も、ほとんどだれもが来て私たちの手を取り、「神の祝福がありますように」と言った。罪人だった多くのたくましい男たちが泣きくずれ、自分のために祈ってほしいと言った。

集会であざけっていたひとりの老人が天幕に来て、泣きながら告白した。これは神のみわざだと信じる、と彼は言った。

別の男はそこに立って泣きながら、その朝救われるために仕事を休んで来たのだと言った。もし私に、その人々と共に祈る時間があったなら、彼もほかの人々も、そこで救われただろうと思う。その人々も、ほかの多くの人々も、自分が救われたと知るまでやめない、と言った。

その朝、不信者の医者が訪ねて来た。彼は私の本と写真を持って来た。そして、驚くべきみわざを確信した、救われたら手紙を書く、と言った。

カトリックの婦人が、美しく生けた愛らしい花をいっぱいに盛った、きれいなかごを私にくれた。私への愛と、私たちがこの町でした立派な働きへの敬意のしるしだ、と彼女は言った。その愛のしるしを、私がどれほどありがたく思ったか、言い表せない。彼女は愛らしい顔立ちの婦人だった。私が口づけすると、私の心は不思議に彼女に引き寄せられた。花がとこしえに咲く天国で、彼女に会えると感じた。

私の同労者たちが「神ともにいまして」を歌うと、みなが歌に加わった。駅のあたりに立っていた人はみな、帽子を取った。歌っていた人々は次々に泣きくずれ、ついには駅にいたほとんどだれもが泣いていた。たくましい男たちが声をあげて泣き、力が私たちの上に下った。私もあやうく力に圧倒されそうになった。

回心者の数は何千人にも上った。私たちは、回心者とクリスチャンの働き手たちで合同の団を作った。その人々は、罪人の救いのために週に何回も集まった。最初に集まった夜、六人が入神状態になり、何人かが回心した。神は驚くべき力をもって、その人々と共におられた。神が彼らを輝く光として守ってくださるように。それが私の祈りである。

第十九章　大いなる戦い

王なるイエスのための次の戦いは、一八八年八月、ケンタッキー州ルイヴィルでのことだった。イリノイ州スプリングフィールドでの私たちの集会には、ほかの州や町から多くの人が来ていた。その中に、ミズーリ州セントルイスの名士が何人かいた。その中に、「フェイマス」という靴店の商人R氏とその母親がいた。ふたりは、ぜひセントルイスに来て自分たちの家に泊まってほしいと言い張った。私たちはそのとおりにして、幾日かそこに滞在した。人々は、公園の一つで集会を開いてほしいとしきりに願った。何人もの実業家が、私たちを引きとめようとずいぶん骨を折った。しかし私たちは、主がルイヴィルへ呼んでおられると感じた。これほど良い機会を後にして、長旅の費用を負うのは、かなりの十字架だった。ルイヴィルには知り合いがひとりもいなかった。道を開いてくれる人も、泊めてくれる人も、助けてくれる人もいなかった。費用はたいへん重かったが、すべて自分たちで負った。一銭も受け取らないうちに、持っていた四百ドルほどの金を、ほとんど使い果たした。これが信仰によって歩むということだった。

そこで私たちは、世界で最も悪い町の一つで、見知らぬ人々の中にいた。心くじけるなどとは思いもしなかった。イエスが一歩一歩導いておられると知って、「勝利だ」と叫び続けた。

町に着いたとき、私たちは激しい働きと長旅でひどく疲れていた。それで町から七マイル離れたオハイオ川の岸辺の小さな林に、休むために野営した。そこにいるあいだに、私たちは自分たちがまことに兵士であることを知った。パウロがテモテに言ったように、「キリストのために苦しみを忍んで」いたのである。料理はみな、小さな口が一つしかないこんろで作った。こんろは天幕の外に置いてあった。箱を食卓に、長いすをいすに、草をじゅうたんにし、床の上にじかに寝床を作った。町から遠く、路面電車もそちらへは通っていなかったので、行き来する手だてがなかった。それで、多くの便利なものなしに過ごした。金はあったので、良いホテルに泊まることもできた。しかし集会を始めるためにその金を取っておき、少しでも金を受け取る前に、何百ドルも使った。私たちは多くの土地でこうしてきた。

キリストに熱心に従う者には、この世でほとんど休みがないことがわかる。私たちの主のように、私たちも父の仕事に励まなければならない。町では、宗教の集会を開くための林を借りられなかった。ほかの目的なら、たいてい借りられただろう。私たちは、町の共有地を借りることができた。私たちは照りつける日の下で天幕を張った。八月の初めで、天幕で昼も夜も集会を開くのは、耐えられるぎりぎりだとわかっていた。しかし神が私たちをそこに呼ばれ、私たちを守ってくださることも知っていた。私たちは共有地に移って小さな天幕を張り、戦いに備えた。大天幕と、暮らしに要るほとんどの物は、一週間以上も届くのが遅れた。それでも私たちは、主の金を使ってホテルに泊まりたくはなかった。野営したその日に雨が降りだし、一週間ほとんど絶え間なく降り続いた。水は上にも下にもまわりにもあった。水かさは床の高さまで上がった。私たちは物見高い人々の見せ物になった。ジプシーだと言う者もいたが、まわりには子供も馬もいなかった。占い師だと言う者もいれば、画家だと言う者もいた。しかし私たちはそのどれでもなかった。私たちは、先祖たちのように天幕に住み、目に見えない都を求める旅人の一団だったのである。

ついにひとりの記者が来て私に話を聞き、日刊紙に私たちのことをよく書いてくれた。すると市民たちが訪ねて来るようになった。まもなく人々は、私たちがだれで、何をしているのかを知った。大天幕と小さな天幕がみな張られると、まるで村のようだと人々は言った。ちょうど大統領選挙のさなかで、市民たちは、何週間も続く街頭の市、あるいは商店の行列を催していた。月明かりのオハイオ川で、模擬戦も行われた。毎日、ほかの州や町から何千人もがやって来た。これらのことはみな私たちに不利だったが、それでも、ほかの州から多くの人が私た

ちの集会に来ることになった。そうでなければ決して罪を示されることも救われることもなかったはずの人々が、何人も罪を示されて救われた。

こうした騒ぎのただ中でも、私たちは一度も集会を欠かさず、昼も夜も集会を開いた。見事な花火が上がった夜、その打ち上げ場所は私たちのすぐ後ろだった。音はすさまじく、悪魔は全力をあげて私たちを戦場から追い払おうとした。あらゆる階層の人がそこにいた。地獄の砲兵がこぞって私たちに砲口を向けたが、私たちは神の助けにより、天からの火と剣と砲弾で戦い、勝利を得た。両軍がぶつかったのである。神の兵士たちが隊列を組んで進み出た。私はその人々に言った。まわりのものから目を離し、騒音には耳を貸さないでください。黙って祈り、心を神に上げてください。私が説教します、と。私たちが歌い、祈っているあいだに、神は驚くべき力をもって来られた。花火を見に行く途中の多くの人々が、これほどの群衆と集会を見てひどく驚き、魔法にかかったように足を止めた。天幕はいっぱいだった。中の立つ場所はすべてふさがり、外にも何百人もが立っていた。私は一時間以上説教した。会衆はじっと耳を傾けていて、一言も聞きもらさなかったと思う。ああ、私は勝利のゆえに神をほめたたえた。さまざまな花火の音の中でも、私は少しも妨げられなかった。神は私に声と力をお与えになり、死がそこにあるかのように人々を静まり返らせてくださった。神に栄光あれ。悪魔は力がある。しかし神は全能である。これを読む人はだれも、主の働きをするときに、決して心くじけないでいただきたい。これ以上心くじける状況の中で開かれた集会は、かつてなかった。何もかもが私たちに逆らい、味方は神のほかになかった。しかし神は、私たちに逆らうすべてのものよりも大いなる方だった。

いちばんの妨げになったのは、黒人のことだった。南部の人々は黒人にひどい偏見を抱いていて、白人と一緒に礼拝することを許さない。私たちは、あらゆる階層、あらゆる身分の人に集会に来るよう呼びかけた。金持ちも貧しい人も、白人も黒人も、教会員もあらゆる罪人も、その招きに応じた。白人たちは、黒人が来るのを許すなら自分たちは家にいる、と言った。そこで私たちは、天幕の一角を黒人たちにあて、別に座ってもらった。それでも人々は承知しなかった。裕福な市民の何人かは言った。集会は気に入ったし、支援もしよう。しかし黒人を来させるなら何もしない、と。牧師たちもクリスチャンと称する人々も、同じことを言った。この町に来た伝道者はみな、黒人を追い払うまでは何の成果もあげられなかった、と人々は言った。私は答えた。神は、全人類を一つの血から造られた。キリストはすべての人のために死なれた。キリストは「行って、すべての国民に、すべての造られたものに、わたしの福音を宣べ伝えよ」と言われた。神に従いながら、飢え渇く魂を追い払うことができるだろうか、と。

イエスは、生きている者と死んだ者との間に立たせるために私を遣わされたとき、こう言われた。「神があなたを遣わされる所へ行きなさい。人によっても所によっても、分け隔てをするな」黒人を集会に来させないよう説き伏せに来た人々に、私は告げた。今のような感情がある中で黒人を来させれば、恐ろしい戦いになることはわかっている。しかし私たちには、黒人を追い払うことはとてもできない。そうすれば聖霊は去られ、神はこの働きから御顔を隠され、働きはしくじるだろう、と。神に感謝する。こうしたもめごとのただ中で、私たちは勝利を叫んだ。神がすべてを御栄えのために治められ、ケンタッキー州でかつてなかった大いなるみわざをなしてくださると知っていたからである。私たちには黒人を追い払いたい気持ちはなかった。むしろ、その人々をキリストに導く特権を与えられたことを喜んだ。そのことを神に感謝する。

神があまりに驚くべき力をもって来られたので、まもなく人々は肌の色を忘れたかのようになった。祭壇の前は、片側に白人、反対側に黒人と、求道者でいっぱいになった。

F姉妹という黒人の伝道者が来ていた。私が主の働きに出る前から、名を聞いていた人である。東部の人々から、たいへん重んじられていた。白人と共に働いてきた人だった。私は何年も前から、彼女に会いたいと願っていた。ある夜、集会で彼女を見かけた。だれなのかは知らなかったが、先に立って祈ってくださいと頼んだ。何という祈りだったことか。彼女の祈りは御座に届いた。彼女は神をとらえ、会衆のひとりひとりを揺り動かし、みなを立ち上がらせんばかりだった。神が彼女を祝福してくださるように。彼女は神のための燃えるたいまつである。これらの集会で何百人もの黒人が救われ、多くの人がからだをいやされた。驚くべき幻を見た人々もいた。

私たちは三か月以上この町にとどまり、人々の関心はその間ずっと高まっていった。天幕には寒すぎる季節になると、大きな会館を借りた。何百もの魂が回心し、何百人もがさまざまな病からからだをいやされた。松葉杖をついて来た人々が、松葉杖なしで帰って行った。目の見えない人は見えるようになって帰り、寝台に乗せられて来た病人はいやされて、寝台を担いで歩いて行った。

イリノイ州スプリングフィールドで

私たちは夜の十一時に、イリノイ州スプリングフィールドに着いた。回心者の一団が列車まで迎えに来て、私たちのためにすっかり家具を整えた家へ案内してくれた。おいしい夕食も用意してあった。まるで母親が子供たちのもとに帰って来たようだった。その人々は、私たちがくつろげるように、あらゆる骨折りを惜しまなかった。救い主の愛に輝く幸せそうな顔を見て、私は主の婚宴を思った。そのとき私は、神が与えてくださった愛する子供たちと共に食卓に着くのである。その子供たちは、東から西から、北から南から来る。ああ、それは何という再会になることだろう。

これほど熱心な働き手の一団が、神のために共に戦ってくれたのだから、驚くべき集会になったことはわかっていただけるだろう。最初の夜から罪人たちがキリストのもとに群がって来た。そして関心は、私たちがこの町を去る最後の瞬間まで高まり続けた。何百もの魂が救われた。最も重い病や障害も、手を置いて祈ることによって、驚くほど多くいやされた。あらゆる種類の人々に福音が届いた。不信者、懐疑論者、ばくち打ち、遊女、酒飲み、死んだ教会員、そして品行の正しい人々である。州議会の議員がふたり、祭壇の前にひざまずいて回心した。そして満員の会衆に向かって、神が自分たちにしてくださったこと、ほかの人々にもしておられることを語った。私たちが去れば、六週間で働きはしぼむ、みな堕落してしまう、と多くの人が言った。どこへ行っても、人々はそう言う。しかし、回心者たちは堅く立っていた。私たちのいなかった五か月のあいだに、ほかのすべての人々がこの一年で救ったよりも多くの魂を救っていた。それを見て、人々は、神がその人々と共におられ、力あるみわざをなしておられると認めないわけにはいかなかった。

W兄弟は名の知れた不信者で、ロバート・インガソルに初めて不信仰を教えた者のひとりだった。その彼が、イリノイ州スプリングフィールドで回心した。最初にこの町に来たときのことを書いたところで、その驚くべき経験を紹介した。彼はケンタッキー州ルイヴィルでの私たちの集会に来て、魂をイエスに導くために時間と力をささげた。パウロのように、自分の驚くべき回心を語ったのである。彼はスプリングフィールドに戻り、卒中で倒れた。私たちが戻るまで生きていられるように、というのが彼の祈りだった。神はその祈りに答えてくださり、私たちは彼を見舞った。彼はひどく弱っていた。私の手を取ると、泣いて神をほめたたえはじめた。彼は自分の救いの経験に、まったく満ち足りていた。イエスが彼のすべてだった。彼は、自分の土の家がくずれかけていることを知っていた。しかし、肉体から離れることは主と共に住むことだということも知っていた。彼には天国にすまいがあった。『天にある、人の手によらない永遠の家』（第二コリント五・一）。彼は、自分がまことに火の中から取り出された燃えさしであると感じていた。「最後の時刻に、こんな罪人を救ってくださるとは、神はなんとあわれみ深いことか」と彼は言った。口がきけなくなると、友人たちは、彼が意識を失ったと思った。しかしイエスは彼にとってこの上なく尊く、いつも彼と共におられた。私は彼の臨終を見とらなかったが、彼は死に際に私への言葉を託した。「ああ、罪人たちよ、回心した不信者の、死に際の証しを聞いてほしい。ウッドワース姉妹に伝えてほしい。姉妹は、神が私の魂を救うためにお用いになった器だった、と。回心してから、神との経験を疑ったことは一度もない。すべては良い。天の光が私の魂を照らしてくださったことを、神に感謝する」亡きがらは、私たちが集会を開いていた会館に運ばれた。私は、伝道の書の次の聖句から葬儀の説教をした。

『その日になると、家を守る者は震え、力ある人はかがみ』（伝道の書一二・三）。

彼はオッドフェローズの手で葬られた。その会員の多くは、彼が不信仰を教えていたころから、何年も彼を知っていた。勝利に満ちた彼の死を聞いて、その

人々は泣いた。多くの人が罪を示され、信仰がまことであることを確信した。会衆のほとんど全員が墓地まで列をなして行き、私は墓のそばで短く語った。たくましい男たちが泣いていた。神の力がすべての人の上に下った。

私たちは神の教会を組織し、長老ふたりと執事ふたりを任命し、礼拝のための新しい建物の手はずを整えた。一八八九年二月、私たちは七週間の集会を閉じた。教会は、私たちが集会を開いた会館で集会を続けた。主はその人々に多くの魂を与えてくださった。大きな日曜学校もあった。

何人かが説教者や伝道者として出て行き、良い成果をあげた。

町の牧師たちは集まって、私と働きをつぶそうとした。牧師たちは、歴史の本や博士たちの本や悪魔のわざを持ち出して、神の力は教会から取り去られたと証明しようとした。弾薬の用意ができると、牧師たちは、大神学者で論争の名手である、クリスチャン教会のB博士を大砲の撃ち手に選んだ。B博士は、私がいかさま師であることを証明し、それを盾に私を町から追い出してみせる、と告知した。彼は大勢の群衆を集め、特別の献金を募った。多くの市民がその話を書き留めて、私のところに持って来た。これほど中身のない話は聞いたことがない、と人々は言って、うんざりしていた。私が攻撃されたその夜、私たちの会館はぎっしり詰まった。私が彼をののしると人々は思ったのである。会衆が集まると、神は、私がそれまで一度も使ったことのない聖句を与えてくださった。『すべて神を恐れる者よ、来て聞け。神がわたしのためになされたことを告げよう』（詩篇六六・一六）。

私は、生まれてからそのときまでの自分の経験をかいつまんで話した。会館のいたる所で人々が泣いていた。神が私をこの働きに召され、大いなる力をもって私と共におられ、人々のただ中で驚くべきみわざをなしておられる。そこにいた人で、そう信じなかった人はひとりもいなかったと思う。私はB博士の議論に答えるつもりはなかった。聖書に基づくのなら、だれとでも論じ合う、と私は言っていた。しかし彼は、論証のほとんどを聖書の外に求めていたのである。市民たちは、私が答えることをしきりに望んだ。ついに私は、日曜日の夜に彼に答えると告知した。会館はいっぱいで、何百人もが帰らなければならなかったという。

愛する読者よ、この巨人に立ち向かうのは大仕事だった。彼は、自分の大学での学業、教養、知恵、人気を誇った。そして私を、あわれで無知な、目の見えない変人のように見せた。私はキリストのための変人である。悪魔も私を変えることはできない。私は神に信頼していた。私は顔を火打石のようにした。神が共におられたからである。私を攻める武器はどれも目的を達せず、私を罪に定めようと立つ舌はどれも私が説き破ると知っていた。私が語ろうと立ち上がると、会衆は死んだように静まり返った。私はB博士の議論を書いた紙を手に持ち、一つずつ取り上げて、それが誤りであることを証明した。彼は、私が聖書によるどの試しにも合格しなかった、私はいかさま師だ、と言っていた。私は言った。私たちが説教するために神に召されている何よりの証拠は、魂が救われているという事実である、と。これらの集会で回心した人はみな立ってください、と私が言うと、二百人以上が立ち上がった。

神の力によってからだをいやされた人はみな立ってください、と言うと、五十人ほどが立った。私が聖書を手に取る前に、彼自身の剣で彼の首をはねてしまった、と人々は言った。私は彼の議論のすべてに聖書によって答え、聖書の外には出なかった。私は、彼がどの点でも間違っていることを証明した。勝利のゆえに神に栄光あれ。彼がどれほど知恵を誇っても、神は弱い女をお選びになり、その女を用いて彼を説き破られ、罪に定められた。そして、神にも聖霊の力にも逆らって戦うのは無駄だと、世に示された。私の味方をした牧師はひとりもいなかった。みなが一つになって私に反対し、私をつぶそうとした。私に向かって陣を敷いたやみの力がこれほどであったにもかかわらず、関心は日ごとに高まった。とどまってほしいという願いが、町の最も良い市民たちからも、町じゅうからも寄せられた。あなたはB博士にも、キリストのまことの教えに反対するすべての者にも、これほどの勝利を収めたのだから、と言うのである。

町で最も才能ある人々の多くが、救いの道を尋ね求めていた。しかし神は、私たちをケンタッキー州ルイヴィルへ呼び戻しておられた。私たちは、多くの悲しむ心と多くの涙のうちに集会を閉じた。次の朝九時に、私たちは発った。駅に着くと、大勢の群衆が見送りに来ていた。

白髪の年老いた父親たちは、ほおに涙を流しながら、子供たちをキリストに導いてくれたことを感謝した。妻たちは夫が救われたことを、酒飲みたちは酒に倒れて墓に入る運命から救われたことを感謝した。

第二十章　『わたしの計りごとは必ず成り』（イザヤ四六・一〇）

私たちは二か月ほど離れていた後、一八八九年一月にケンタッキー州ルイヴィルに着いた。私たちはボール会館で集会を始めた。前の年の回心者たちが、私たちが町を去ってからずっと、そこで集会を開いていたのである。その人々は持ち場を守っていた。悪の町ルイヴィルにいるこの聖霊の兵士たちほど、勇敢で力あるキリストの働き手の一団を、私は見たことがない。魂を勝ち取り、キリストの御国を建て上げることにおいて、これほど成果をあげている一団も見たことがない。

私は、この若い小羊たちを世話して働きを続けるために、何年も経験を積んだ牧師を残したのではなかった。集会で回心したひとりに任せたのである。

私たちは二週間とどまり、私は教会を組織した。その人々と別れるのはつらかった。しかし神が、その人々が自分たちで働きを続けられるよう備えてくださったと感じた。

私はケンタッキー州ルイヴィルから、御霊に導かれてオハイオ州の小さな町ショーニーへ行った。そこは枯れた骨の谷で、見よ、骨はいたく枯れていた。

そこは鉱山の地方で、圧延工場や溶鉱炉があり、新しい鉄道も敷かれつつあった。私たちの集会には、天下のほとんどすべての国の人々がいた。ときには祭壇の前で、八つか十もの違う言葉が聞かれた。みなが一度に、人をも身分をも分け隔てされない天のただひとりの神に祈っていたのである。クリスチャンと名のる人々からしばしば見下される、きつい労働をする人々を、神が祝福してくださるように。イエスは、民衆が喜んでご自分に耳を傾けたと言われた。ここでもそうだった。しかしほかの人々は、あざける者の座にすわり、罪びとの道に立った。そしてキリストの飾らない福音を批判し、あざけり、聖霊の力を否定した。

生涯のほとんどを酒場の商売で過ごしてきたひとりの酒場の主人が、どぶの中から引き上げられた。彼は人々の前に立ち、自分のようなあわれでみじめな罪人を救ってくださった神をほめたたえた。

多くの年老いた男女が、火の中から燃えさしのように取り出された。二十五年も教会に行っていなかった人々もいた。

ある夜、白髪の老人が八人、祭壇の前で並んで回心した。私たちのどの集会でも、懐疑論者や不信者が救われる。

ショーニーで最も才能に恵まれた人のひとりで、不信者だった男が、八歳の小さな女の子に手を引かれて祭壇の前に出た。彼は次の日に輝かしく回心し、入神状態に入って地獄の幻を見た。そこにいる人々の恐ろしい有様を見た。彼はその町の人々に大きな影響力を持っていて、その人々をキリストに導くためにできるかぎりのことをした。

プリミティブ・メソジスト教会の牧師とその会員たちは、戦いのあいだずっと、立派に私たちの味方をしてくれた。そうすることで、その教会は驚くほど建て上げられ、牧師は罪人たちの尊敬と愛を得た。神はこの牧師の上に、最も豊かな祝福を注がれた。彼は、自分の冠に輝く星を勝ち取った。一方、あざけり批判した人々は、心を神にささげないかぎり、地獄で目をあげることになるだろう。

私は土地から土地へと旅をし、あらゆる苦難を忍んでいる。暮らしの多くの便利なものもなく、雨と寒さ、暑さと嵐にさらされている。人々はそれを見て不思議がる。私は主のために、この犠牲を払っているのである。キリストが私のすべてである。この世は私のふるさとではない。この世には、私を引きつけるものは何もない。私は天国に宝をたくわえている。私にはそこに純金で建てられたすま

いがあり、それは決して壊されることも、私から奪われることもない。すべてを捨ててイエスに従う特権のゆえに、神をほめたたえよ。

私がこの働きを始めてからずっと、神は何百人もの男女を起こしてくださった。その人々は牧師や伝道者として出て行った。若い働き手たちは多くの人を囲いの中に導き入れた。その人々は今、喜んで天国への道を歩んでいる。私のもとには、その働き手たちから、試練と勝利を知らせる手紙が届く。その人々は私を母のように頼りにして、助言を求めるのである。最近、私が最初に開いた集会で救いの経験に入ったひとりの兄弟から便りがあった。彼はすぐに説教を始め、それからいくつもの教会を受け持ってきた。今では、教会で最も高い地位にある者のひとりである。

ケンタッキー州ルイヴィルで集会を開いていたとき、オハイオ州コロンバスに住む私の実の姉妹のS夫人が訪ねて来た。彼女が私の集会に出たのは、これが初めてだった。彼女は何年も教会員で、日曜学校の教師でもあり、できるかぎりのことをしようと努めていたが、彼女自身は救われていなかった。信仰を、ただ耐え忍んでいたのである。集会に行くと、神は、永遠の光の中でご覧になる彼女の姿を、彼女自身に示された。神の目には、彼女は枯れた骨にすぎなかった。彼女の心には、一度も神の愛がなかった。彼女は回心し、自分の名が天にしるされたことを喜びながら、幸せな思いで家に帰った。彼女は家庭礼拝を始め、まだ回心していない夫と共に祈れるようになった。

休んだ後、私たちはオハイオ州ショーニーで野営集会を開いて働きを続けた。主は力をもってそこにおられ、魂を救われ、からだをいやされた。私は多くの会員を擁する神の教会を組織した。

女が浸礼を授けるのを見た者は、それまでひとりもいなかった。志願者を浸礼によって水の墓に葬った女は、記録の上でも、人の知るかぎりでも、私が最初だった。神は力と恵みと誉とを与えてくださる。

何千人もが岸辺に立って、その厳かな光景を見守った。集会は昼も夜も開かれた。人々は見ようとして木に登った。聖霊が旋風のように下られ、男も女も、嵐の中にいるかのように揺さぶられた。人々は会堂の中でも外でも倒れた。外に立っていた警官たちはおびえて、青ざめた。神の力によって、会堂が嵐に遭ったように揺れるのを見た、と警官たちは言った。何百人もが救われた。周囲何マイルにもわたって、人々が罪を示された。

三か月後に私たちはまたそこへ行き、大天幕で集会を開いた。リバイバルはすぐに始まり、何千人もがやって来た。人々はペンテコステのときのように、神の大いなる力を見、肌で感じ、耳で聞いた。聖霊の多くの賜物としるしが、いたる所で見られた。

ひとりの女が打ち倒されて、夕方まで横たわっていた。人々は彼女を家に連れ帰った。彼女は次の日曜日まで、全部で八日のあいだ横たわっていた。それから叫び、説教しながら入神状態からさめた。そして何も食べずにまっすぐ集会に来て、説教し、自分の驚くべき経験を語った。

神への恐れが人々に下った。周囲何マイルもの人々が「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。人々は驚くべきことを見た。神がそこでご自分の民を顧みてくださったからである。これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである、と主は仰せられる。

私たちがショーニーで最初の集会を開いたのは、この三か月前のことだった。神はその働きを祝福してくださった。そこには組織された教会が三つある。一つはショーニーに、二つはそこから数マイル以内の所にある。

第二十一章　『群衆また群衆は、さばきの谷に』（ヨエル三・一四）

一八八九年の秋、主が私たちをカリフォルニアへ呼んでおられると感じた。私たちはその声に従い、支度をしてすぐに出発した。その地方には知り合いがひとりもいなかった。カリフォルニアへの旅と、その土地のことを、かいつまんで記そう。列車は州から州へと走り、旅を進めるにつれて、気候の違いに気づいた。ある州は一面に草木が茂り、何もかもが緑で美しかった。ある州は鉱山の地方で、さまざまな鉱物の莫大な富があった。美しい石の石切り場も多く、ニューヨークやシカゴの最も立派な邸宅の多くは、その石で建てられている。列車は深い峡谷と美しい谷を下って走り続けた。両側には高い山々がそびえ、雲に届かんばかりに見えた。しばらくすると、私たちはその山々の頂の上を進んでいた。かと思うと、また平原と砂漠を駆け抜けていた。ときには何百マイルも、低木も木も一本も見えなかった。黄色い砂しか見えないときもあり、また何マイルも何マイルも黒い砂ばかりのときもあった。見渡すかぎり、地面は床のように平らで、草木は一本もなかった。カリフォルニアの奥へ進むと、景色は大きく変わった。平原は耕され、草や木や低木、あらゆる草木に覆われていた。これらの壮大で驚くべき創造のみわざを見て、私たちの心は愛とやさしい思いに満たされた。そして天を仰いで、こう言うことができた。「わが父、天の神が、これをみな造られたのだ」

ついに私たちは大都市サンフランシスコに無事に着き、数日ホテルに泊まった。長旅と夏の働きでひどく疲れていたので、心もからだも休めるための静かな場所を探さなければならないと感じた。それで、六十マイルの旅をして、山に囲まれた谷の小さな町ペスカデロへ行った。

一八八九年十月二十八日、私たちはカリフォルニア州オークランドで集会を始めた。雨の季節が始まっていた。私たちは、オークランドでそれまでなかったほどの雨の中で天幕を張った。人々はあきれ、驚いて眺めていた。人の目から見れば、何もかもが暗く、心くじけるものに見えた。まことに、神の道は私たちの道とは異なっている。道の一歩先もわからないまま、神の命令に従って進むには、神への大きな信頼と信仰と勇気が要る。私たちは見知らぬ土地にいて、金もほとんど尽きていた。東部に帰る手だてもなかった。私たちは、自分たちが見知らぬ国の旅人であることを言いあらわしていた。しかし、目に見えない都を求めていることも知っていた。主のために大いなる働きがなされるまで、帰ろうとは思わなかった。金に困って苦しむことも恐れなかった。私たちの神が、いっさいの必要を満たしてくださると知っていたからである。

集会の広告はしていなかった。人々は、そこで何が行われるのかを知らなかった。最初の夜には二十三人が来た。その人々は、神がそこにおられると感じた。私はその人々に言った。神が私たちをここに遣わされたのであり、大いなる働きがなされるだろう。何百人もが救われるだろう。数日のうちに、福音を聞きに来る群衆が天幕に入りきらなくなるだろう、と。笑う者もいた。群衆が来ると聞かされるより、このぬれた天幕に群衆がいるのを見たいものだ、と言わんばかりだった。その夜来た人はみな、次の夜も、ほかの人を連れて来た。神の子供たちの何人かが私たちのことを聞いて、見に来た。その人々は、神が力をもってそこにおられ、大いなる働きがなされるだろうと見て取り、感じた。そのひとりは出かけてストーブを注文し、すぐに天幕に入れさせた。その人々は材木を手に入れて、天幕にきれいな床を張った。ああ、私たちをやさしく顧みてくださる神を、私たちはどれほどほめたたえたことか。寒さと湿気にはほとんど耐えられないほどだったが、今は何もかもが明るく、心地よく見えた。愛するクリスチャンたちは、私たちに要るものを先回りして察しているかのようだった。寝泊まりする天幕はひどく寒かった。そこにはまだストーブがなかったのである。

ある夜、集会が終わって大天幕から寝泊まりする天幕へ向かうとき、私は、天幕に暖かいストーブがあればいいのに、と言った。天幕の入口を開けると、驚いたことに、だれかが親切にもそこに来て、ストーブを据え、真っ赤に燃やしてお

いてくれた。私たちは神に栄光を帰し、主が備えてくださる、と言わずにはいられなかった。だれがそれを置いたのかは、とうとうわからなかった。数日後、ひとりの兄弟が七ドル分の食料品を届けてくれた。二十ドルをくれた人もいれば、五十ドルをくれた人もいた。こうして愛する主は、私たちのために備えてくださり、私たちを顧み続けてくださった。

クリスチャンたちは、あらゆる教会から、主を助けて勇士を攻めるために、祈りと金とを携えてやって来た。その人々は、さまざまな方法で集会を大々的に広告した。人々の関心は集会のたびに高まった。一週間ほどで、天幕はいっぱいになった。

最初の回心者は、六十五歳から七十五歳までの五人の老人だった。老いも若きも、救われ、あらゆる病をいやされるために、次々に祭壇の前に出て来た。ついには何千人もがイエスにあって幸せになった。多くの人が、イエスが魂を救ってくださり、からだをいやしてくださったと証しすることができた。

何百人も、ときには何千人もが天幕のまわりに押し寄せた。説教されるみことばが聞こえる所まで近づこうとして、たびたび雨の中に立っていた。それは驚くべき光景だった。群衆を収めるには、もっと大きな天幕がなければならない、とクリスチャンたちは言った。そしてすぐに、八千人を収める天幕を千三百二十五ドルで注文した。まもなく天幕ができあがり、奉献式の用意を整えて地に張られた。奉献の説教は、サンフランシスコのメソジスト監督教会の牧師がした。祈りは、オークランドのメソジスト監督教会の牧師がささげた。ほかにも何人もの牧師が出席していた。会衆は、式にも天幕にも満足した。

世界のほとんどあらゆる所から、人々が集会に来た。神は御霊によって、東部、西部、北部、南部の州から、ご自分の子供たちを大勢引き寄せられた。その人々は、上からの力でバプテスマを受けた。これほどの祝福と力と光を受けたことはそれまでなかった、とその人々は証しした。その人々は、前にまさる信仰と勇気をもって神の働きに加わった。イエスが雲に乗って迎えに来られるか、死によって召されるまで、働きをやめるつもりはなかった。

世界の各地から、多くの水夫が船の船長たちと一緒に来た。神に感謝する。船長とその妻たちの何人かが救われ、水夫や航海士の多くも救われた。ある船長とその妻は救われ、出航する前に、乗組員の十二人も救われた。船長夫妻は、船の上で毎日午後に礼拝を開くと言った。船は西インド諸島へ向かうところだった。夫妻は、乗っている者の魂をひとり残らず神のものとすると信じて求めた。港に着く前にみなが救われると期待している、と夫妻は言った。

多くの人が、私の本や文書を持って行った。働き手たちは私の本や説教集を何百冊も買い、汽船や帆船に配った。多くの人が聖霊のバプテスマを受け、海を渡る航海のあいだ、船の上で集会を開いた。こうして驚くべき福音と、聖霊によるイエスの力あるみわざが、世界の多くの地へ出て行き、広まった。

一つの集会にこれほど多くの国の人々が来ていたのを、私はほかに見たことがない。そのうちのこれほど多くがキリストに導かれたのも見たことがない。その人々は救われ、聖霊に満たされた。その多くは、魂の救いのために働くよう、神が自分の国へ呼んでおられると感じた。多くの人が伝道の働きに召され、聖霊と力のバプテスマを受けた。その人々は、救い主の愛と、主がまもなく来られることの栄光に満ちた知らせを宣べ伝えるために、それぞれの国へ帰って行った。

主の力は、説教に伴って「しるしと不思議」として現れた。主に打ち倒される者は多かった。あらゆる階層の多くの罪人が、罪の中にいるまま打ち倒された。何時間も横たわっていた人々もいた。幻を見た人々もいて、その人々は輝かしく回心して起き上がった。その中に、六十三歳の老人がいた。ある夜、彼は自分の生涯と驚くべき回心について、短く証しをした。彼は白人の足の及んだ世界の至る所を旅し、聖地にも三度行っていた。私たちの救い主の生涯にゆかりのある聖なる場所には、みな立ったことがあった。私たちの集会のころ、彼は友人の一行とオークランドを訪れていた。一行は集会のことを聞いて、好奇心から来た。彼は会衆を見渡しながら、神の力の現れについて友人たちに軽口をたたいた。そして調べてやろうと、大胆に説教壇のほうへ進んで行った。しかし説教壇に着く前に、神の力によって床に打ち倒され、二時間以上そこに横たわっていた。そのあいだに、神は彼に地獄と天国の幻をお見せになり、二つの場所のどちらかを選ぶように告げられた。彼は、救ってくださいと主を呼び求め、キリストと天国を選ぶと言った。彼は神をほめたたえながら正気に返り、自分が救われ、聖霊に満た

されたことを知った。彼は六十年以上もの長い年月を罪の中に生き、信仰を告白したことは一度もなかった。

この兄弟は回心の三年後、オレゴン州ポートランドでの私たちの集会に来て、自分の経験を語った。彼は言った。自分は神の力に守られて、救われたまま幸せに過ごし、できるかぎりの方法で主のために働いてきた、と。

神の力が会衆全体をおおい、オークランドの町じゅうに及んだ。私たちが説教しているあいだに、聖霊が人々の上に下られた。群衆は、死がそのただ中にあるかのように静まり返った。最も知性があり、最も身なりのよい男たちの多くが、神に向かって手を上げたまま、座席で後ろに倒れた。神の大いなる力に押さえられていたのである。天幕じゅうで、男も女も、嵐の中の木のように倒れた。神の幻を見る人々もいた。そのほとんどが、神の賛美を叫びながら起き上がった。

第二十二章　ミズーリ州セントルイスでの力あるみわざ

一八九〇年四月、主は私たちをミズーリ州セントルイスへ呼んでおられた。しかし私たちは、夏のあいだカリフォルニアにとどまりたかったので、どうすべきかを知るためにずいぶん思い悩んだ。私たちは荷物を列車に積み、カリフォルニア州ロサンゼルスへ行こうとしていた。その夜、セントルイスへ来てほしいという手紙を受け取った。私たちは家財道具を売り、次の朝セントルイスへ向けて発った。集会の告知が出るまで、私たちが来ることはだれも知らなかった。まことに、神は私を不思議な道に導かれる。私が自分で選ぶことはできない。ここへ行く、あそこへ行く、と言うこともできない。私は神の声を聞き分けなければならない。そして神の導かれる所に従って行く。この二年前に、セントルイスへの道は開かれていた。町の最も良い市民の多くが、来て集会を開いてほしいと私たちを招いていた。その人々なら、私たちの重荷を大いに軽くしてくれたことだろう。しかし愛する主は、私たちが肉の腕に寄りかかったり頼ったりすることをお許しにならない。戦いは私たちの戦いではなく、主の戦いだからである。

天幕は八千人を収めた。アメリカで最も大きな伝道の天幕だと言われていた。それが毎晩いっぱいになった。集会を閉じた日には、群衆のために騒ぎが起きるのを恐れて、警官が大勢で出ていた。警官たちは、一万人が天幕に入れなかったと言った。集会が終わると、これ以上ないほど秩序が保たれた、と警官たちは言った。昼の集会にも夜の集会にも多くの牧師が出席していて、祝福を受けた人、いやされた人はみな立ってください、と呼びかけた。どちらの集会でも、何千人もが立ち上がった。人々はみな立って、主がなされた大いなるみわざのゆえに、神に賛美を歌った。

最もたちの悪い男や少年たち、私たちをいちばん困らせた者たちもいた。その何人かは、警官に連れられて別れのあいさつに来るまで帰ろうとしなかった。その者たちは目から涙を流しながら、自分たちのしたことをゆるしてほしいと願い、救われるように祈ってほしいと頼んだ。

私たちは二か月のあいだ、会館で集会を開いた。最初の夜には十八人が来た。神は力をもってそこにおられた。ふたりが回心した。群衆は日ごとに大きくなり、集会のたびに魂が回心した。主は、驚くべき神のいやしをいくつもなされた。私たちは、下宿代を払う余裕はないと感じた。集会の費用を払うために、金を取っておかなければならなかったのである。私たちは個人の家の三階に部屋を借りて、自炊した。これはたいへんつらかったが、それがせいいっぱいだった。

ある日曜日の午後、私たちはユニオン・マーケットで集会を開くよう招かれた。私たちは、主がこれに導いておられると感じ、招きを受けた。大勢の会衆が、熱心に耳を傾けた。ミシシッピ川にかかったばかりの新しい橋を見に行く人々で満員の路面電車が、そばを通り過ぎていた。

カトリック信者のひとりの老人が、私の説教を耳にした。彼は路面電車を降りて集会に来て、熱心に耳を傾けた。そして集会の終わりに救われた。私たちの持っているような信仰がほしい、と彼は言った。家族はみなカトリック信者で、

彼は家族とのつらい戦いを戦わなければならなかった。しかし彼は堅く立ち、天国を自分のふるさとにすると心に決めている、と言った。神はこの集会に、ご自分の印を押してくださった。多くの人が罪を示された。どれほどの人が良い種を心に宿して帰って行ったか、神はご存じである。その種は育って、永遠のいのちとなるだろう。

もう六月の初めになり、私たちはカリフォルニアから持って来た大天幕を張る用意ができていた。十分な広さの場所を借りられたのは、「ケリー・パッチ」だけだった。そこはならず者の巣として知られ、町じゅうからならず者が集まって来る所だった。ここでは、昼夜を問わず、人が撃ち倒されたり、強盗に遭ったり、石を投げつけられたりしてきた。天幕の両側に一つずつ、大きなカトリック教会が二つあった。一つは一区画ほど、もう一つは二区画ほど離れていた。私たちは日陰になる木一本ない所で、五か月のあいだ小さな天幕に住んだ。

クリスチャンたちは、「ケリー・パッチ」に天幕を張らないよう私たちを説き伏せようとした。天幕を張った後も、その邪悪で荒っぽい連中から離れて移るよう勧めた。しかし私たちは、神がそこに導かれたと感じていた。私たちはその土地を三か月の約束で借り、七十五ドルを払った。クリスチャンたちは言った。私たちの天幕のある所には、これまでにいくつも見世物の天幕が張られたが、荒くれ者たちが綱を切って天幕を引き倒した。見世物の天幕の綱さえ切るのなら、福音の天幕などひとたまりもないだろう、と。私たちは答えた。神が私たちをここに置かれたのだから、神の恵みによって、ここにとどまる、と。私たちの親しい友人の多くも、妻や娘を来させるのを恐れ、自分で来るのさえ大きな危険を冒すことだと感じていた。会衆は、行き帰りに石を投げつけられたからである。ときには石が天幕を突き抜けて飛んで来た。その連中は、野営集会が何であるかを知らず、何かの見世物だと思っていた。そのほとんどは、教会に行ったことのない人々だった。最初の夜、天幕はいっぱいになった。男たちは帽子をかぶったまま座席の上に立ち、葉巻やパイプをくわえ、上着を脱いで袖をまくり上げていた。女たちは古い汚れた前掛けと服を身に着け、頭に何もかぶらず、腕をむき出しにしていた。その連中は爆竹を鳴らし、私たちが歌うといっそう大声で歌い、私たちが祈ると手をたたいて、はやしたてた。ピストルやこん棒を持っていて、私たちを殺し、天幕を引き倒そうと身構えていた。私たちはみな殺されてしまいそうだった。何人かの牧師が話そうとしたが、石を投げつけられて黙らされるか、声をかき消された。降伏か死か、というありさまだった。

小さなクリスチャンの一団が、恐ろしさのあまり座席に凍りついたように座っていた。それを、荒々しく猛々しい男女の群れが取り囲んでいた。その多くは半ば酔っていて、目は血走り、顔は赤くほてっていた。恐ろしい光景だった。何をしてもうまくいかず、その連中をどうすることもできなかった。私は同労者たちに言った。「決してあきらめません。私たちが去る用意のできる前に、あの人たちが私たちを天幕から連れ出すとしたら、それは私たちが死んだときです」そして、ひとりずつ順に先に立って祈ってください、エリヤの神が答えてくださいます、と言った。

ひとりの姉妹が、死人のように青ざめて説教壇にひざまずき、手と顔を天に上げた。そして、よく響く澄んだ声で、さばきに向かっているこの群衆を救い、祝福してくださいと神に願った。神の恐るべき臨在の気配が、人々の上に下りはじめた。もうひとりの姉妹が続いて祈った。それから私は立ち上がって、人々の前に立った。私は主の名によって手を上げ、聞きなさい、と命じた。私は言った。主は、あなたがたに良いことをするようにと、私をここに遣わされたのです。私たちの働きが終わって、主が去れと言われるまで、私は去りません。私たちに危害を加えたり、短刀で私たちを突いたりしようとする者がいれば、主はその最初のひとりを打ち殺されるでしょう。だれかが私たちを殺そうとすれば、主はその者を打ち殺されるでしょう、と。神の力が下り、神への恐れが群衆全体に臨んだ。人々の顔に汗が吹き出し、入神状態にあるかのように立ち尽くした。男たちはパイプを口から外し、帽子を脱ぎはじめた。女たちは、むき出しの首や腕を前掛けで覆いはじめた。人々は、自分たちが神の前に裸で、罪ある者として立っていると感じたのである。人々は座席の上から下りて、座ろうとしはじめた。しかし倒れて、死んだように横たわる者もいた。口をぽかんと開けて立っている者もいた。あるカトリック信者は、私が彼を打ち倒して地獄を見せた、と言った。多くの顔に涙が流れ、汚れの上に筋を残した。人々は動くのを恐れるかのように立っていた。そして、みな静かに出て行った。それからは、ならず者たちはいつ

も私に敬意を払った。多くの者が、私とすれ違うときに帽子を取った。しかし、集会の行き帰りの人々に石を投げつけることも、天幕に石を投げ込んだり天幕越しに投げたりすることも、しばらく続いた。主の名と警察の助けによって、その者たちを抑えるまでのことである。

市民たちがこの件を取り上げ、務めを果たしていないと警察を責めた。警官たちは暴徒を恐れていたのである。警察署長がやって来て、警察を総動員してでもあなたを守る、と私に言った。ジェファーソン兵営の兵士たちは、あなたがたは大いなる働きをしている、警察が守らないのなら自分たちが守る、と言った。

私たちの天幕の近くの空き地は、昔から町じゅうのならず者のたまり場だった。その連中は日曜日に集まり、ビールの樽を持ち込んだ。この日曜日の集まりには、野球をする者の組もいくつか加わっていた。私たちが集会を開いた最初の日曜日のことである。歌いはじめると、千人近くの荒くれ者やごろつきが、バットとボールを持って天幕になだれ込んで来た。年寄りも、中年の男も、若者も、子供もいた。野球の服を着た者もいれば、ぼろをまとった者もいた。酔っている者もいれば、パイプをくわえた者も、葉巻をくわえた者もいた。その連中は天幕に石を投げ、集会の行き帰りの人々にも石を投げた。

次の日曜日にも、その連中はいつものようにやって来た。しかし警察署長が何人かの警官を連れて来て、その連中を追い払った。ああ、このような勝利のゆえに神をほめたたえよ。近所の人々は、死ぬほど悩まされていた。町の荒くれ者たちは毎日そこにいて、日曜日にはとりわけ多かった。集会がほかに何の益ももたらさなかったとしても、ひどい迷惑から解放してくれた、と近所の人々は言った。警察の親切と神の力によって、集会に来ても手なずけられない者は追い払われ、残りの者はおとなしくなった。すると、行儀の良い人々がやって来た。その多くは、それまで来るのを恐れていた人々だった。その人々が恐れたのを、私たちは責めはしない。私たちが石の雨の中を耐え抜いたのは、ただ神の恵みによった。地上で最も悪い者たちのいくらかが、集会に来ていた。神が守ってくださらなかったら、私たちは生きてあの野営地を出ることはできなかっただろう。神に栄光あれ。神は決してご自分の子供たちをお離れにならない。

女や子供たちは、前よりきれいな服を着るようになった。ボンネットをかぶって来て、汚れた前掛けは家に置いてくるようになった。男たちはひげをそり、髪をとかして、家族と一緒に来た。集会は役に立っている、妻や子供たちが身ぎれいになり、家も前よりきれいにしている、と男たちは言った。私は集会に反対する人々に言った。たとえ、この町の市民のいくらかを身ぎれいにし、その品行を良くするほかに何の益もなかったとしても、それは良い働きだと思う。だから、あなたがたは私たちに助けの手を差し伸べるべきだ、と。町の最も良い市民の多くが集会に来た。そして、私たちが荒くれ者たちに収めた大いなる勝利と、よく保たれた秩序に驚いた。

天幕は八千人を収めた。五か月のあいだ、毎日昼も夜も集会があった。天幕の外にも何千人もいたが、その人々にも見え、聞こえた。大天幕のほかに小さな天幕が六つあり、まるで小さな町のようだった。私は助け手たちと共に、天幕の中で赤ん坊のように眠った。ああ、顧みと守りのゆえに主をほめたたえよ。

多くの人が運び込まれて来て、起き上がって歩いて出て行った。目の見えない人は喜んで叫び、足の不自由な人は松葉杖を投げ捨てて、躍り上がって喜び、「ああ、いやされた」と言った。耳が聞こえず口のきけない人は、喜びの涙を流しながら手をたたいた。一度も歩いたことのなかった子供たちが、主をほめたたえながら走り回った。まったく身動きのできなかった人々が、若い人も年寄りも、天の電池から衝撃を受けた。その衝撃が手足にいのちを通わせたのである。その人々は手をたたき、跳びはね、喜んで叫んだ。

聖霊の賜物

多くの人が聖霊のバプテスマを受け、多くの賜物を受けた。聖霊によって、あらゆる賜物が現された。多くの人がいやしの賜物を受け、悪霊を追い出す賜物を受けた。奇跡の賜物、幻の賜物、手を置いて聖霊の賜物を受けさせる賜物を受けた人々もいた。新しい言葉を語る賜物を受けた人々もいて、御霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で、たいへんはっきりと語った。御霊は、その人々に、自分が何を語っているのかをわからせてくださった。

主はひとりの男を名指しで召され、多くの国々へ行って光を与え、その国々の言葉で語らなければならないと告げられた。そして、解き明かしを書く賜物をお与えになった。彼はまた、多くの幻を見た。主は深い事柄を彼に示された。それ以来彼は、あらゆる国の、多くの見知らぬ人々に説教してきた。その人々は泣き、叫んで、「私たちのために死んでくださったお方に仕えます」と言うのだった。

ある日、ひとりの小さな女の子が私のもとに連れて来られた。全身が不自由で、話すことも歩くこともできず、からだのどこも思うように動かせなかった。私はその子のために祈った。いやしの池に入ろうとするように何百人もが押し寄せていて、ひどい人込みだった。それで私たちは、その子を少し外に連れ出して、歩かせてみるようにと言った。すぐに歩けるかもしれないし、ほかの子供が歩くのを覚えるときのように、教えなければならないかもしれないからである。しばらくすると、人々はその子を連れて戻って来た。その子は歩き、話していた。しかし人々には、その子の言うことが一言もわからなかったのである。主をほめたたえよ。その子は全身を思うように動かせるようになり、歩きながら、知らない言葉、すなわち異言で話していた。その子は御霊に満たされ、聖霊の力によって獅子のように大胆だった。

私がその子を壇の上に立たせると、その子は歩き回って説教しはじめた。両手を上げて天を指し、足を踏み鳴らして、驚く群衆に説教した。そして、主が自分にどんなに大きなことをしてくださったかを示した。英語でもいくらか語ったからである。

これは、信仰が科学と人のわざとやみの力とを相手にした戦いだった。ミシシッピ川流域でかつてない最大の戦いだった、と人々は言った。町全体が揺り動かされた。多くの所で伝道所が始まった。いろいろな教会が、それまでになかったほど路傍集会を開き、監獄や病院を訪ねるようになった。

あなたがたは三か月もとどまれはしない、あの金は無駄になる、と人々は言った。しかし神をほめたたえよ。私たちは三か月とどまり、さらに二か月その土地を借りた。

土地の持ち主はカトリック信者だった。彼は近所が良いほうに変わったことをたいへん喜び、土地をただで貸すと言った。「ケリー・パッチ」でのこの五か月の野営集会への関心は、広く行き渡った。それは大西洋から太平洋にまで、さらには海の向こうにまで及んだ。会ったこともないスコットランドの牧師から、何通も手紙を受け取った。うわさに聞いた神の驚くべきみわざについて、問い合わせる手紙だった。彼は、集会をたたえる手紙を、公にしてほしいと言って送ってきた。カナダの著名な牧師たちからも手紙が届いた。ペンシルベニア州ピッツバーグからも、インディアナ州からも、国じゅうの至る所からも届いた。神がセントルイスでなさっている大いなるみわざについての問い合わせだった。救われるために、あるいはからだをいやしてもらうために、二千マイルもの道のりをやって来る人々もいた。医者の中には、六百人がいやされたことを知っている、と言う者もいた。そのうちの多くは、セントルイスの最も優れた医者たちに見放されていた人々だという。何千人もが救われ、何百人もがたちどころにいやされ、同時に救われたのは本当だった。

この集会を開いていたとき、ひとりの少年が私たちのもとに連れて来られた。少年は野犬捕りに捕まって犬の荷車に放り込まれ、死ぬほど怖い思いをしたのだった。少年は気が狂った。この二年来、夜ごと日ごとに、ときにはもっと頻繁に、恐ろしい狂乱の発作、あるいはひきつけを起こしていた。医術でできることは何もかも試みたが、効き目はなかった。珍しい症例だった。母親の話では、ドイツから来た医者たちも治そうとしたが、みなしくじり、治る望みはすっかり捨てられたという。少年は、何ともないときもあった。少年は集会のことを聞いて、連れて行ってほしいと母親にせがんだ。

ある日曜日、母親は少年を連れて来た。母親が野営地の外れ近くの大群衆の中に少年を連れていたとき、少年は狂乱の発作を起こし、だれかれかまわずかみつこうとした。人々はうろたえて、できるかぎり急いで少年を抱え上げ、私の小さな天幕に運び込んだ。そこで少年は厚い帆布に歯でかぶりつき、かみちぎって、縦横十センチほどの穴を開けた。何百人もがこの一部始終を見ていた。

私は母親に、二度と少年を連れて来ないでほしい、私たちがみな逮捕されてしまうから、と言った。しかし少年はその後良くなり、母親にしきりにせがんだ。

それで、ある夜、私が長い祭壇の前で何百人もに語りかけながら働いていると、母親が少年を連れて私のそばに立っていた。私はたいへん恐ろしかった。しかし母親が私をどれほど信じているかがわかり、少年もとても哀れに見えた。それで主は、少年のために祈る信仰を私に与えてくださり、少年はすっかりいやされた。

町のほとんどの人が少年の容体を知っていた。そして、少年がいやされ、正気をすっかり取り戻したと聞くと、だれもが少年に会いたがった。私が大きな壇に上がるように言うと、少年はいかにも男らしく進み出た。そして、主が自分を救ってくださり、いやしてくださり、御霊で満たしてくださったと語るのだった。

その後何年も、私が日曜日をはさんでその町に行くと、少年は美しい花束を持って、通路を説教壇まで歩いて来た。

反対する者、あざける者、偽りを言う者の口はふさがれた。何千もの魂が救われた。祭壇の前には、何人もの警官、多くのカトリック信者、多くのドイツ人、ほかの国々の人々がいた。その人々は泣きながらカルバリへの道をたどり、まもなく、血で洗われた人々と共に歌に加わった。

天幕には寒すぎる季節になった。私たちは、町の最も良い地区にある教会堂を借りた。私たちは、四百人以上の会員で伝道所を始めた。集会への関心は夏じゅう高まり続けていた。そして教会堂に移ると、神は大いなる力をもってそこにおられ、しるしと不思議がそれに伴った。罪人たちは、祭壇の前に出るよう招きがあるまで、じっとしていられないほどだった。その人々は何十人も出て来た。その中には、最もひどい酒飲みも何人かいた。何人ものカトリック信者が、いや、まことにあらゆる階層の人々が、キリストに導かれた。

第二十三章　永続する実

二つ三つの町を再び訪れた後、私たちの次の集会は、一八九一年一月、インディアナ州アンダーソンで開かれた。四年以上前に私たちが組織した神の教会は、なお神のために生きていた。たいへんな群衆が集まり、多くの人が中に入れなかった。愛する主は、救いといやしの力をもって、驚くほど御霊を注いでくださった。

ある姉妹は五年以上前に事故に遭い、腰を痛めていた。腰はやせ衰え、この三年は寝床から出ることもできなかった。しばらくは松葉杖をついて、いくらか歩き回っていたこともあった。ほかの病気も抱えていた。友人たちが何人かで、彼女を祭壇の前に連れて来た。私が見たとき、彼女はそこにぐったりと横たわっていた。ひどい有様だとわかった。しかし私は、主にとって不可能なことは何もないと知っていた。私は彼女に、神に信頼しなさいと言った。私が彼女のために祈ると、彼女はすべての病からすっかりいやされて起き上がり、叫びながら会堂を歩き回った。彼女は松葉杖を教会に置いて、歩いて家に帰った。

もうひとりの姉妹は、顔と頭と目の片側にできたひどい癌をいやされた。彼女はたちどころにいやされた。癌の跡はまもなくすっかり消えた。

私たちは、集会での神の栄光に満ちた臨在のゆえに、神に栄光と賛美をささげた。私はたいへん喜び、励まされた。五、六年前にこの州で救われた人々の多くに会えたからである。その人々は、自分たちが幸せであるだけでなく、ほかの人々をキリストに導くために、実にさまざまな方法で働いていた。

マンシーとアンダーソンで、私は説教の資格を受けた二十一人の牧師に会った。みな、私たちの集会で回心したか、働きのために油を注がれた人々だった。神の教会の牧師もいれば、メソジスト監督教会、合同兄弟教会、フレンド派、バプテスト、ニューライト派の牧師もいる。

アンダーソンから、私たちはインディアナ州ペンドルトンへ行き、合同兄弟教会で三日間集会を開いた。何人もが回心し、幾人かがからだの病をいやされた。

ペンドルトンの近くに住むある農夫は、六年前に私たちの集会でいやされていた。彼は三、四年、精神病院に入っていた。数日少し良くなっても、また前よりも悪くなるのだった。友人たちが彼を集会に連れて来た。彼は回心し、たちどころにいやされた。彼は家に帰って、自分の農場を切り盛りした。それ以来、彼は仕事のできる人として、またクリスチャンとして歩んでいる。九年前のペンドルトンでの一週間の集会と、今度の三日間の集会がどんな実を結んだかは、永遠だけが明かすだろう。

ペンドルトンから、私たちはインディアナポリスへ行き、五年近く前に組織した神の教会を訪ねた。教会に着くと、大きな建物は人でいっぱいだった。教会はすっかり一つになって、神のために燃えていた。私たちは五日間集会を続けた。平日は一日に二回、日曜日には三回集会を開いた。会堂は昼も夜もいっぱいで、多くの人が帰らなければならなかった。関心があまりに高かったので、若い人々には遠慮してもらい、年配の人々に場所を譲ってもらわなければならなかった。祭壇の前は昼も夜も求道者でいっぱいだった。魂の救いを求める人も、からだのいやしを求める人も、聖霊の油注ぎを求める人もいた。主の力がそこにあって、魂もからだもいやした。神の子供たちの何人もが、奉仕のためのバプテスマを受けた。その人々は、イエスの命令に従ったのである。『上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい』（ルカ二四・四九）。

回心した人々の中に、八十歳の男がふたりいた。そのひとりは、生涯のほとんどを病に苦しんできた。彼は、いやされると同時に回心した。インディアナポリスほど、リバイバルの見込みの明るい所はどこにもなかった。しかし、先の予定がもう組まれていたので、私たちは去らなければならなかった。

私たちはインディアナポリスからイリノイ州スプリングフィールドへ行き、神の教会のために二週間の集会を開いた。教会はすっかり一つになり、愛に満ちて、集会の用意を整えていた。多くの魂が救われ、何年も患っていた病からから

だをいやされた人々もいた。会堂は息が詰まるほどぎっしりだったが、それでもこれ以上ないほど秩序が保たれた。

イリノイ州スプリングフィールドから、私たちは一八九一年二月にミズーリ州セントルイスに戻った。友人たちが私たちを待っていて、部屋は暖められ、食事も用意してあった。私たちはその夜のうちに、満員の会堂で集会を始めた。伝道所の会員はみな、多くの友人と共に、私たちが町に戻ったのを迎えに来ていた。私はその伝道所を、二百人以上の会員を擁する神の教会に組織した。伝道所のままでいるより、教会になったほうが働きは栄えるだろう、とあらゆる階層の人が考えた。交わりに加えられた人々の多くは、町の最も良い市民たちだった。リバイバルは一年じゅう続いていて、毎晩集会が開かれている。

セントルイスから、私たちはオハイオ州カントンへ行った。そこの神の子供たちは、二年前から、助けに来てほしいと私たちを呼んでいた。私たちは一か月のあいだ、幕屋で集会を開いた。そこには、罪人がキリストに導かれるのを見るためなら、どんな犠牲もいとわない、勇敢な十字架の兵士たちがいた。私が最後に所帯を持っていたのは、カントンだった。私がキリストのためにすべてを捨て、主のぶどう園に出て行ったのは、そこでのことだった。自分の親類の中で集会を開くには、たいへんな恵みと勇気が要った。親類のほとんどは、私の説教を一度も聞いたことがなかったのである。しかし神は、キリストの無尽蔵の富を大胆に宣べ伝える恵みと勇気を私に与えてくださった。古い知り合いの多くが、光の中に導き出された。

カントンから私たちはセントルイスへ行き、神の教会と共に一夜を過ごした。会堂は、再び私たちを迎えようと集まったクリスチャンと友人たちでいっぱいだった。

セントルイスから私たちはカンザス州トピーカへ行き、市の公園に幕屋を張った。最初の一か月は、雨や嵐で何度も妨げられ、半分ほどしか集会を開けなかった。雨はひどく激しかった。ある夜には二、三千人が来たが、次の夜は雨のために集会が開けなかった。

ある夜、ちょうど会衆が集会に集まって来たとき、激しい嵐が起こり、雨がバケツをひっくり返したように降った。雷が、何年も聞いたことのないほど鳴りとどろいた。鮮やかな稲妻が次々にひらめき、大きな炎のように空を照らした。嵐があまりに突然に来たので、天幕を下ろすことができなかった。嵐は天幕を打ち、その一端をほとんどずたずたに引き裂いた。私たちには、嵐のときの貧弱な避け所しか残らなかった。私たちはできるかぎり天幕を張り直し、風があまり強くないときには、その中で集会を開いた。天幕の片側は日よけになった。しかし風が強すぎるときには、野外で集会を開いた。私たちは自分の費用で、見知らぬ人々の中へ出かけて行ったのだった。そこへ行って集会を始めるのに、三百ドルほどかかった。天幕が壊されるのをただ立って見ているのは、大きな試練であり、信仰の試しだった。しかし神の恵みは十分だった。そのただ中で、私たちは少しも心くじけず、気落ちもせずに、嵐のただ中で神をほめたたえた。私たちは「主が与え、それが取り去られるのを主が許されたのだ」と言うことができた。私たちは主の管理人にすぎない。天幕は主のものであり、働きも主のものであり、私たちも主のものである。『神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さる』（ローマ八・二八）。

次の日（日曜日）、大群衆が集会に出て来た。そして壊れた天幕を見て、聖徒も罪人も同情を寄せた。町の最も良い市民の多くが進み出て、新しい天幕のために募金を始めた。その人々は、まもなく天幕を買ってくれた。私たちはそれを主にささげた。こうした困難や、集会を妨げたほかの多くの困難にもかかわらず、神は初めから力をもって私たちと共におられた。罪を示す霊が、どの会衆の上にもとどまっていた。

重んじられた神の言葉

人々は神の言葉に飢えていた。一時間以上にわたる説教のあいだ、人々は座って、この上なく熱心に耳を傾けた。町は驚くほど揺り動かされた。多くの人が聖書を取り出し、これらのことが本当かどうかを調べた。その聖書は、きっと何年も手つかずのまましまい込まれていたものだった。あらゆる種類の罪人が、神のもとに帰って来た。何人もがさまざまな病からからだをいやされた。何人もが神

の力に打たれて、死んだように横たわった。男も女も驚いて眺め、青ざめて、「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。私たちが働くどの土地でもそうだが、ここでも、救われる人の半分以上が中年を過ぎていて、年老いた人も多いことが目についた。

何人もの酒飲みが救われた。町で最もたちの悪い者たちである。ある男は、酔うと町じゅうに恐れられる存在だった。今ではこの人々はみな、主のための熱心な働き手となり、家族やまわりの人々の喜びとなっている。主は、あからさまな罪人を救われただけでなく、品行正しく暮らしていた人々も救われた。

いろいろな教会の多くの会員が、自分には信仰の告白しかなかったことを悟らされた。今その人々は、自分が神から生まれたことを知っている。神の御霊が、その人々が神の子であることをあかししてくださる。もし子であれば、神の相続人であり、主イエス・キリストと共同の相続人である。

ある姉妹は、子供のころから教会に属していた。彼女は、最も良い働き手のひとりと見られていた。集会に来て、彼女は自分の心が一度も変えられていなかったことに気づいた。彼女はほかの罪人と同じように祭壇の前に出て、あわれみを求めて神に叫んだ。愛する御名をほめたたえよ。神は彼女を失望させることはなさらなかった。救いが、彼女の魂に流れ下った。自分の経験を語ったとき、彼女は言った。この何年ものあいだ、自分はヨブのように全き者だと思っていた。しかし今は、もし死んでいたら永遠に滅びていたとわかる、と。

もうひとりの姉妹も回心した。祭壇の前から立ち上がると、彼女は、十一年のあいだ教会員だったと言った。その年月のあいだ、自分はクリスチャンだと思っていた。しかし集会に来て、深く罪を示されたので、一晩じゅう祈ったのである。

同じ経験をしたほかの多くの人々も、主に導かれた。これは、私たちが行く先々で教えていることが本当である証拠である。今日の教会には、自分は大丈夫だ、永遠のいのちを持っていると思いながら、滅びの状態にある人々が何千人もいるのである。どうか神が、盲目の手引きや偽教師たちをあわれんでくださるように。そして、その者たちが自分に従う者たちと共に地獄に下る前に、目をさまさせる何かを送ってくださるように。今日、「わたしの娘の傷」を手軽にいやしている牧師が何千人もいる。主なる神が平安はないと言われるのに、平安、平安と言っているのである。その者たちは人々に自由を与えると約束しながら、彼ら自身は滅亡の奴隷になっている。その者たちは、生ける水の源であるキリストを捨てて、自分で水ためを掘った。それは、こわれた水ためで、水を入れておくことのできないものである。人々に信心の形を教えながら、その力を否定している。主は言われる。「この民を治めるあざける人々よ、あなたがたは死と契約をなし、陰府と協定を結んだ。あなたがたが死とたてた契約は取り消され、陰府と結んだ協定は行われない」

人々は罪過と罪とによって死んでいる。それなのにこの偽教師たちは、魂のうちに神の御霊によって神に生かされなくても天国に行ける、と人々に信じ込ませている。来世の刑罰を取り去って、地獄はないと信じ込ませている。主は言われる。その者たちは人々に、偽りの避け所の陰に隠れるよう教えている。しかし神の怒りの嵐の中で、その避け所は押し流され、その者たちも、それに従う者たちも、隠れ場を失うだろう、と。どうか神の御霊が、読者のひとりひとりの上に臨んでくださるように。そして、神と永遠の光の中で自分の心を探り、偽りの避け所の陰に隠れていないかを見させてくださるように。もし隠れているなら、あなたは砂の上にいる。キリストのもとに来ていのちを受けないかぎり、恐ろしい運命があなたを待っている。

集会への関心は、終わりまで高まり続けた。神は私たちに、反対するあらゆる勢力に対して驚くべき勝利を与えてくださった。それで偏見のほとんどは消え去り、民衆は「これは神のわざだ」と言った。クリスチャンたちはあらゆる教会から来て、神のなさった大いなるみわざのゆえに神をほめたたえた。何百人もが、もっととどまってほしいと願った。私たちは、二百人以上の会員で神の教会を組織した。

集会の最後の日は、多くの人の記憶にいつまでも残るだろう。天幕はいっぱいだった。何百人もが、魂を救う神の力について証しをし、多くの人がからだのいやしについて証しをした。イエスは「あなたがたはわたしの証人である」と言われる。これほど多くの、高らかに響く証しを聞いて、私たちの心は喜びにあふれた。

最後の集会で、私は『子供たちよ。今は終りの時である』（第一ヨハネ二・一八）という言葉から説教した。会衆は、私たちが今別れて、次に会うのはさばきの日だと悟っているようだった。私はクリスチャンたちに、堅く立って最後まで耐え忍ぶよう勧めた。罪人には、手遅れにならないうちにキリストのもとに来るよう嘆願した。そして、私たちがやみの力との大いなる戦いに携わっていたあいだに示されたすべての親切を、さまざまな人々に感謝した。そのあいだ、悲しみが群衆の上にとどまっていた。

いろいろな教会のクリスチャンや牧師たちは、私たちが町に来たことを神に感謝した。そして、神が私たちを通してこれほど驚くべきみわざをなされたことを感謝した。

私たちは、主がフロリダ州で働くよう呼んでおられると感じた。私たちは荷物を、カンザス州トピーカからフロリダ州ジャクソンヴィルへ送った。私たちはセントルイスを経由して行き、途中で降りて、神の教会のために五日間集会を開いた。私がセントルイスで最初の説教をしてから、一年六か月がたっていた。集会はそれ以来、毎晩続いていた。私が教会を組織してからは、九か月がたっていた。回心者のほとんどは忠実で、教会は霊的にも経済的にも栄えていた。

神がこの何か月ものあいだ、どのように人々を救われ、守ってこられたかという驚くべき証しを聞いて、私はうれし泣きに泣いた。その多くは、どん底まで落ちた酒飲みだった。しかし、すさんだ生活の跡はどこにも見えなかった。何年も望みのない病人だった多くの人々がいた。足の不自由な人、耳の聞こえない人、目の見えない人、あらゆる病に苦しんでいた人々もいた。その人々が、全身を丈夫にしてくださり、健やかに保ってくださった神をほめたたえた。

再びセントルイスで

私たちはフロリダ、ニューヨーク市、オハイオ、イリノイ、オレゴン、カンザスを訪れた。それから一八九三年四月六日、セントルイスの神の教会ベテルで集会を始めた。大勢の群衆が私たちの帰りを迎えてくれた。喜びの涙と叫びの中で、私たちはわが家に帰ったように感じた。教会が霊的に良い状態にあるのを見て、私たちは喜んだ。美しい礼拝堂のことも喜んだ。それは私たちがオレゴン州セイラムにいたあいだに献堂されたもので、私たちがその中で集うのを許されたのは、これが初めてだった。美しい建物を眺め、これが、わめく暴徒と石の雨の中、ケリー・パッチで私たちが始めた戦いの実であることを見て、私たちは悟った。これは権勢によらず、能力によらず、神の御霊によるのである。神がこう言われるのを聞け。『わたしはすべて命ある者の神である。わたしにできない事があろうか』（エレミヤ三二・二七）。S長老が三年のあいだ教会を受け持ち、毎晩集会を開いてきた。握手が終わると、私たちは祭壇の前での集会を開いた。何人もが前に出てひざまずき、罪のゆるしを得ようとキリストを求めた。からだのいやしを求める人々もいた。神に感謝する。主の力がそこにあって、魂を救い、からだをいやした。ある人々は大声で叫んで神に栄光を帰し、ある人々は喜びの涙を流して、主の力に打たれて倒れ伏した。私たちは、ペンテコステの日のペテロのように言うことができた。「あなたがたが見聞きしているこのことは、父の約束である」関心は日ごとに高まった。六人が、集会に出るために三百マイル以上の道のりをやって来て、三、四日とどまった。みなが上からの祝福を受け、からだをいやされた人々もいた。ひとりは、五年来の胃カタルをいやされた。彼はたちどころにいやされた。その人々は「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。そして、主がどんなに大きなことをしてくださったかを知らせるために、家に帰って行った。

ある姉妹は、一年以上患っていた血腫を抱えて集会に来た。医者たちは、治らないと言っていた。私が手を置いて祈ると、彼女はたちまちいやされた。信仰による祈りは病んでいる人を救い、主はその人を立ちあがらせてくださる、と神の言葉は言う。十四歳の少女が、二年患っていた脊椎の病気をいやされた。少女は治療のために入院していて、医者たちは良くならないと言っていた。少女は全身を装具で固めて集会に来たが、救われて、たちどころにいやされた。母親は装具を外して、家に持って帰った。その子はすっかり元気になって、夕方の集会に戻って来た。そして、自分を救ってくださり、いやしてくださった神をほめたたえた。聖徒たちは勝利を叫んだ。神は力の旋風をもって町を揺り動かされ、群衆は神の臨在に心を動かされた。

いろいろな州の人々から、たくさんの手紙が届いた。その人々は、神がなされた驚くべきみわざを聞いて、魂の救いやからだのいやしを求める思いに駆られたのである。そして、自分の家にいながら救われ、いやされるように祈ってほしいと願ってきた。集会に出るために、何百マイルもの道のりをやって来る人々も多かった。

どの集会でも、主の力がそこにあって、魂とからだをいやした。主は、『信じる者には、このようなしるしが伴う』（マルコ一六・一七）と言われたその言葉を、裏づけてくださる。祭司や律法学者たちは、ペテロとヨハネについて言った。彼らによって著しいしるしが行われたことは、エルサレムの住民全体に知れわたっているので、否定しようもない、と。セントルイスの町の多くの人々も、この四年のあいだ働きを見守ってきた。そして、その祭司や律法学者たちのように、多くの奇跡が行われたことを認めた。

カリフォルニア州オークランドでの私たちの集会で回心し、いやされた兄弟と姉妹がいた。その兄弟姉妹がこの町で伝道の集会に携わっていて、私たちはうれしく思った。この集会のあいだに主が神の教会ベテルでなされた多くの驚くべきみわざを語るには、時間も紙面も足りない。私たちは六月の初めまでその教会にとどまり、それからセントルイスの南部に天幕を張った。初めから、集会には千人から三千人が集まった。多くの人がほかの州から来て集会を楽しみ、天幕の中に豊かに整えられた私たちの父の食卓に着いた。救われる人もいれば、からだをいやされる人もいて、喜んで家に帰って行った。三十年以上もリウマチに苦しんでいたひとりの伝道者が、百マイル近くの道のりをやって来た。そして、たちどころにいやされ、躍り上がって叫んだ。次の日、彼は町じゅうを何マイルも歩いた。

ある男は三年前に仕事場で事故に遭い、ひどい苦痛に苦しんでいた。二十二人の医者が彼を治療したが、そのつど少しのあいだ痛みを和らげるほかには、何もしてやれなかった。ある日の午後、友人たちが彼を集会に連れて来た。痛みとはれが彼のからだから去った。彼は神に栄光を帰した。彼の妻は救われ、幼い息子は心臓の神経痛をいやされた。今その一家は、『わたしとわたしの家とは共に主に仕えます』（ヨシュア二四・一五）と言っている。

八十二歳のボヘミア人の婦人が救われ、いやされた。婦人は長年リウマチで全身が不自由になり、手足に包帯を巻いていなければならなかった。痛みとはれはすぐに彼女のからだから去った。神の力が彼女のからだをとらえ、彼女は若返って、叫んで神をほめたたえた。私たちには彼女の言葉はわからなかった。しかし、彼女の叫びを聞き、喜びの涙が年老いたいとしい顔を流れるのを見て、多くの人が泣かずにはいられなかった。彼女は、家族をキリストに導こうと働きはじめた。次の日には、家族のふたりを祭壇の前に連れて来た。ふたりは救われ、いやされた。ひとりは舞踏病を、もうひとりは肺病をいやされた。次に彼女は五十九歳の娘を連れて来て、ふたりの息子もそれに続いた。家族のほかの何人かも、キリストを受け入れた。彼女がキリストを受け入れたのは最後の時刻だったが、自分の冠のための星をいくつも勝ち取った。

天幕集会でなされた驚くべき神のいやしのうち、ここに記したのはほんのわずかである。

いやしの力は天幕の中だけにとどまらなかった。町の多くの人々や、ほかの州の人々も、私たちが天幕の中でその人々のために祈っているあいだに、たちどころにいやされた。多くの酒飲みが救われ、酒への欲望を取り去られた。何年も教会員だった人々も、多く救われた。

十四年間の働きのまとめ

紙面が許さないので、オハイオ、インディアナ、カリフォルニアなどでの伝道については書かない。最初の十四年間の働きのまとめを記す。

私が、生きている者と死んだ者との間に立ち、世の罪を取り除く神の小羊を罪人たちに指し示すために出て行ってから、十四年以上になる。私はほとんど昼も夜も、戦場から戦場へと渡り歩いてきた。このあいだに、およそ三万五千三百二十二マイルを旅し、十三の州で集会を開き、何十万人もの人々の前に立った。聖霊の力は、これらの集会から合衆国じゅうに出て行き、大海の向こうの多くの所でも、人を目ざめさせる力として感じられた。何千の魂が私たちの主イエス・キリストの御国に生まれたか、何人のからだが主の力によっていやされたかは、神

だけがご存じである。五十歳から八十五歳までの人々が何千人も救われた。九十歳を過ぎた人々もいた。回心した人々の三分の二以上は、中年を過ぎていた。

何百人もが、牧師や伝道者として、アメリカで、またほとんどすべての国々へ、西インド諸島やアフリカへも出て行った。集会で祝福を受けた人々のうち何百人もが、生きた信仰の勝利のうちに死んだ。その多くはたいへん年老いた人々で、永遠の火の中から燃えさしのように取り出されたのである。その多くは、息を引き取る間際に、美しい門で私たちを待ち受けていると言った。

私はヨシュアと共に言うことができる。主が約束されたすべてのことのうち、一つも欠けたものはなかった。主はどの試練のときにも私と共におられ、恵みと栄光を与えてくださった。主は私の敵をことごとく征服され、何度も何度も御名の栄光を現された。主はこれまでなさったことを、これからもなさるだろう。主が私を働きから報いへと召されるまで、私は主に信頼して進んで行く。私たちは、牧師として、教会として、またひとりひとりとして、多くの試練と迫害を通ってきた。キリストのためにそれを耐え忍んできたなら、決して報いからもれることはない。イエスは言われる。『喜びおどれ。天においてあなたがたの受ける報いは大きい』（ルカ六・二三）。主のために苦しむに足る者とされたことを、私たちは神に感謝すべきである。主のために苦しむなら、私たちは栄光のうちに主と共に治めるのである。私たちは、自分が大きな試練と患難を通って上って行き、衣を小羊の血で洗われた一団に属していることを知っている。

先触れが『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』（マタイ二五・六）と叫ぶときが来る。天の王が来られるのを見るとき、喜びに満ちた私たちの目の前に、どれほどの光景が開けることだろう。イエスは、私たちを罪ののろいから救うために、また堕落によって失われたすべてを回復するために来られた。イエスは、男盛りの力と勢いにあふれた人生の盛りに死なれた。私たちは主に似る者となる。この『わたしたちの卑しいからだ』（ピリピ三・二一）は変えられて、栄光に満ちた神の御子と同じかたちにされる。それは脱ぐためではなく、その上に不死を着るためである。ああ、それは何という幸せな再会になることだろう。家族も友人たちも、そろって古い教会墓地からよみがえり、互いに長く抱き合う。その抱擁はとこしえに続く。親と子が、夫と妻が、兄弟姉妹が、友と隣人が、牧師と群れが再会する。生きている者はたちまち変えられ、罪の影響から解き放たれ、天の栄光を着せられる。

第二十四章　神の力である福音

いくつもの州をあちこち旅したが、そのことは紙面が許さないので書かない。その後、私たちはアイオワ州ノースリバティへ行き、神の教会のために集会を開いた。最初の夜から大勢の群衆が集まり、集会のたびに、終わりまで増え続けた。毎日何千人もがやって来た。初めから魂が救われ、病がいやされた。

私たちが前に開いたほかの集会から、多くの人が四十マイル、七十マイルの道のりを、軽馬車や荷馬車に乗って陸路でやって来た。その人々は、主がどのように自分の魂を救ってくださったかを語った。その多くはまた、神の力によっていやされ、全身を丈夫にされていた。最も優れた医者たちに、死ぬものと見放されていた人々である。その高らかに響く証しを聞いて、集まった人々は、神が大いなる力をもって私たちと共におられると確信した。この人々が魂もからだも救われ、聖霊に満たされているのを、集まった人々は見たのである。神の教会の牧師のほとんどが集会に来ていた。ほかの教会、すなわちメソジスト監督教会、合同兄弟教会、会衆派、クリスチャン教会などからも、多くの牧師が来ていた。その多くが、上からの力を注がれるために、祭壇の前にひざまずいた。幾人かは、さまざまな病をいやされた。人々は四方八方から、ほこりと暑さの中を、四十五マイル、七十マイル、百マイルもの道のりをやって来た。

主をほめたたえよ。主は多くの人を、幻によってこれらの集会に導かれた。それは、主がコルネリオとパウロを導かれたのと同じように不思議なやり方だった。パウロが、手を上げて「渡ってきて、わたしたちを助けて下さい」と叫ぶマケドニヤ人を見たときのようだった。パウロは、主が呼んでおられるとすぐに悟った。

何百人もが、救われるために何をすべきでしょうか、と叫びながら祭壇の前に出て来た。一度に四十人のこともあった。ときには、何十人もの、生まれたばかりの乳飲み子たちの叫びが響き渡り、天にまでとどろいた。三十五歳から七十五歳までの人々が、何十人もキリストのもとに来た。しかし兄弟たちの何人かは、若い男女が来ないことで気落ちしはじめた。その地域には若い人々がたいへん多く、そのうち最も悪い者たちはひどく荒れていた。兄弟たちは、その若者たちを救おうと懸命に努めたが、できなかった。兄弟たちは、何よりもその若者たちのために、この集会を望んでいたのである。私は兄弟たちに言った。神を信じなさい、若者たちの中に突破口が開かれるでしょう、と。神に感謝する。そのとおりになった。最も悪い者たちが真っ先に来た。ほかの者たちもそれに続き、ついには、残っている者がほとんどいなくなった。

罪人たちは打ち倒され、主をほめたたえながら起き上がった。その仲間たちは、罪人たちが死んだように横たわっているのを見て、神への恐れを抱いた。ある人々は地獄とさばきの幻を見た。滅びに至る広い道の幻を見た人々もいた。雪よりも白い、天に届くはしごの幻を見た人々もいた。白い衣を着た聖徒たちが、まわりを御使に囲まれて、そのはしごを上って行くのである。クリスチャンの男も女も子供も倒れ、何時間も横たわっていた。一晩じゅう横たわっていた人々もいた。自分の家で打ち倒された人々もいて、多くの人がいやされた。聖なる火はその地方一帯に燃え広がり、あらゆる教会に入って行った。

ここでもまた、いくつかの記録を省かなければならない。私はミズーリ州セントルイスから、オハイオ州のリスボン、セイラム、カントンへ行った。カントンでは、六年前に幕屋で集会を開いていた。今度は、神の教会で集会を開いた。教会員のほとんどは、私たちが前にそこにいたときに回心した人々だった。その教会を受け持っていた牧師は、私たちが幕屋で開いた集会で伝道の務めに召され、働きのために油を注がれた人だった。

セントルイスに戻る

カントンから私たちはセントルイスに戻り、しばらく神の教会と共に過ごした。私は、伝道者として召されている働きをしながら、教会の世話と責任を負う

のは、自分には重すぎると感じた。それで、五年のあいだ世話をしてきた、五百人の会員を擁する教会を、神の教会の南インディアナ長老会に託した。長老会は喜んでそれを引き受けてくれた。教会が栄えるかどうかについて、私はもう責任を負っていない。教会と、私たちがしてきた働きとは、主の御手の中にあって、これまでになく堅く立てられ、セントルイスの人々に重んじられている。

アイオワ州マウントプレザントで

この地での集会のあいだ、いろいろな新聞の編集者たちが働きを支持してくれた。そして、主が町でなさっている驚くべきみわざを、すばらしい記事にして伝

第二十五章　アイオワ州キャロルで

マウントプレザントから、私たちは北西に二百五十マイル離れたアイオワ州キャロルへ行き、神の教会のために集会を開いた。牧師夫妻も教会も、私たちを温かく迎えてくれた。最初の夜、教会に入ると、大勢の会衆が私たちの来るのを待っていた。私たちが通路を進んで行くと、会衆は「すべての祝福の源なる神をほめたたえよ」と歌った。主が私たちを遣わされて、祈りに答えてくださったのを見て、たいへん喜んでいたのである。最初の夜に魂が回心した。五週間のあいだ毎日昼も夜も、叫びが天に上った。私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの御国に生まれた人々の叫びだった。あらゆる病からからだを丈夫にされた人々の叫びでもあった。その地方の至る所から人々が来て、救われた。七百マイルの道のりをやって来て、救われ、いやされた人々も幾人かいた。

この集会には多くの牧師が来ていて、救いの車を前へ押し進めるために、できるかぎりのことをした。集会を閉じた日、人々は、夏に私たちに天幕を持って来てもらうことについて投票した。満場一致だった。教会の長老のひとりが、数年前に神がキャロルでの働きの幻を見せてくださった、と言った。彼は、群衆が滅びの瀬戸際にいて、すぐにもキリストのもとに集められなければならないのを見た。主は彼に、自分が主に用いられて集会を実現させること、その集会が群衆をえてくれた。神がその人々を祝福してくださるように。自分たちのした善がどれほどのものであったかを、その人々は永遠に入るまで知ることはないだろう。そのときには書物が開かれ、すべての人が自分のした善に応じて報いを受けるのである。関心は、終わりまで高まり続けた。集会を閉じた夜には、六時にはもう会堂が外の戸口までぎっしり詰まり、多くの人が帰らなければならなかった。祭壇の前は、最後まで求道者でいっぱいだった。

キリストに導くことを示された。ある夜、彼は私たちの集会で神の力に打たれて倒れ、栄光の雲が説教壇の上にとどまっているのを見た。神は彼に、これこそ幻で見た集会であり働きであると示された。その幻を見たのは三年前だと彼は言ったと思う。彼は人々に、この働きが神から出たものであることを疑うな、と言った。ああ、この地で主が与えてくださった驚くべき勝利のゆえに、主をほめたたえよ。

デダムでの集会

次に私たちが集会を開いたのは、キャロルから十三マイルのデダムだった。私たちは、メソジスト監督教会で集会を開いた。この町はうまく名づけられていた。人々のほとんどが霊的に死んで（デッド）いたからである。私たちの受けた助けは、ほとんどすべて、キャロルでの私たちのリバイバルに来ていた人々からのものだった。キャロルの回心者やほかのクリスチャンたちは、一度に三十人、四十人とやって来て、勇敢な兵士のように前線へ進み出た。

ある日、祭壇の前に、六十歳の女と七十五歳の女と七十三歳の老人とが並んでひざまずいていた。三人はほとんど同時に救われ、最後の時刻に救ってくださった神をほめたたえながら立ち上がった。三人は、まるで十六歳であるかのように、叫んで跳び回った。三人は若返ったのである。

町と周辺の地方の指導的な実業家の多くと、最も良い農夫の多くが、キリストに導かれた。人々は列車や軽馬車に乗って、周辺の地方からこの集会に来た。

第二十六章　アイオワ州マスカティンで

アイオワ州アーサーとノースリバティで伝道した後、私たちはアイオワ州マスカティンへ行った。アイオワシティから五十マイルほどの町である。私たちはパークプレースに天幕を張った。一年前に三週間の集会を開いたのと同じ場所である。初めから群衆は多く、関心も高かった。「武器を取れ、武器を取れ」と、ときの声が上がった。すると、血で洗われた兵士たちの部隊が、主を助けて勇士を攻めるために上って来た。その兵士たちは、前の年に私たちが主の戦いを戦ったさまざまな戦場で、敵の手からあがなわれた人々だった。これら勇敢な兵士の中には、百マイルの道のりを来た者もいた。多くの者が、五十マイル、六十マイルの道のりを陸路でやって来た。

七月四日、集会の二日目に、私たちは盛大な再会の集いを開いた。何十人もの若い男女が、アイオワ州ノースリバティから、ほこりと暑さの中を馬車でやって来た。その人々は独立記念日のあらゆる祝いに喜んで背を向け、イエスの証人となるために来たのである。群衆は、若者から中年、八十歳までの老人に至るこれらの回心者が自分を捨てているのを見た。そして、神が御力によってどのように自分たちを救ってくださり、守ってくださったかを語るのを聞いた。それで、主がその人々と共におられると認めないわけにはいかなかった。ある人々は酒飲みのどぶから、ばくち場から、不信仰から救われていた。多くの人は死んだ信仰の告白から救われて、主イエス・キリストのまことの光と御霊の中に導き入れられひとりの婦人が、アイオワ州マウントプレザントから、二百五十マイル近くの道のりをやって来た。彼女は八か月ほど前、コロンバスジャンクションでの私たちの集会で、胃癌をいやされていた。十七人の医者が、死ぬものと彼女を見放していた。いやされてから、彼女は体重が二十キロあまり増え、今も元気で、アイオワ州に住んでいる。彼女の証しは疑いようがない。彼女は立ち上がって、主が自分に何をしてくださったか、自分がどれほど驚くべきしかたでいやされたかを告げた。すると神は、人々の心に確信を与えられた。

ていた。マスカティンの町も、周囲何マイルもの地方も、揺り動かされた。人々は「主が大いなる力をもって私たちのただ中におられる」と言った。アイオワシティでの私たちの集会に寝台に乗せられて連れて来られ、驚くほどいやされた男が、この集会に来た。そして人々に、いやされてからずっと元気で、毎日せっせと働いていると語った。幾人かが彼と一緒に来ていた。彼と一緒に来たひとりの男は、糖尿病と胃の病をいやされた。ひどく苦しんでいた人だった。

一年以上前にコロンバスジャンクションで胃癌をいやされた女が、この集会に来た。十七人の医者に死ぬものと見放されていた人である。彼女は何千人もの前で、今も元気だと証しした。この婦人は、いやされてからずっと、イエスのために出て行って働いている。いくつもの天幕集会を導いてきた。主は彼女と共におられ、その労苦を祝福してくださった。

前の年の夏に私たちの集会の一つで腫瘍をいやされた婦人も、この集会に来ていた。そして、どのようにいやされたか、それ以来すっかり元気でいることを語った。

罪の自覚が人々に下り、人々は神への恐れに震えた。主の子供たちは「私たちはペンテコステを経験した」と言った。主をほめたたえよ。タルメージ兄弟が言ったように、「私たちは過去の死んだペンテコステを眺めているべきではない。行く先々で、何千ものペンテコステを経験すべきである」ある日、ひとりの

女が、二本の松葉杖をついて集会に連れて来られた。彼女は十一か月のあいだ、松葉杖なしでは一歩も歩けず、四か月は寝たきりだった。苦しみはあまりにひどく、ほとんど耐えられないほどだった。医者たちは、彼女に何の望みも与えなかった。私が手を置いて祈ると、神の力が彼女に臨んだ。彼女は救われ、いやされて、躍り上がって立った。そして手をたたいて主をほめたたえながら、天幕の中を行ったり来たりした。彼女は松葉杖を天幕に置いて、歩いて帰って行った。彼女は終わりまで集会に出て、イエスがどのようにいやしてくださったかを、いつも喜んで証しした。彼女の教会の牧師と、多くの教会員が彼女の家を訪ね、帰って来て、彼女は元気だと報告した。

指導的な教会員のひとりは、天幕の中でこう証しした。彼女が松葉杖なしで歩いていると聞いたが、信じなかった。それで、行って確かめてみる、もしそうでなかったら神のいやしを非難する、と言った。ところが彼女の家に行ってみると、驚いたことに、彼女はすっかり元気で痛みもなく、自分で家事をしていた。松葉杖はもう要らなかったのである。彼は神のいやしを非難するどころか、神をほめたたえながらその家を出た。神が使徒たちの時代と少しも変わらず今日もおられることを確信させられたので、彼は神をほめたたえた。何人もの女が卵巣の病をいやされた。それは外科の手術のほかには手の施しようも治しようもない病である。しかも手術をしても、そのほとんどが手術中か、手術のせいで死んでしまう。

この病をいやされた女のひとりは、救われるために祭壇の前に出るよう勧められても、断った。しかし主は彼女を会衆の中で打ち倒され、彼女は死んだように横たわった。同じとき、彼女の夫は祭壇の前でキリストを求めていた。一時間ほどすると、彼女は叫びながら跳び起きた。救われ、いやされた、と彼女は言った。医者たちはみな、彼女を見放していた。医者たちは言っていた。いのちを救える見込みがあるのは手術だけだが、それでも望みはほとんどない。いつ出血で死んでもおかしくない。手術をしなければ、もう長くは生きられない、と。救われたその日、彼女は、涼しくなるまで手術を延ばすことについて医者に相談しに行っていた。しかし医者は、すぐに手術を受けるようにと強く勧めた。手術をして生き延びられるかと彼女が尋ねると、医者は、わからない、危険を冒すしかない、と答えた。彼女はひどく沈んだ気持ちで集会に来た。自分に死ぬ用意ができていないことは知っていた。しかし主に打ち倒されたとき、彼女は魂もからだも主にゆだね、救われ、いやされた。彼女はすっかり元気になり、幸せに満ちて立ち上がった。偉大な医者であるお方が、メスを使わずに彼女を治してくださったのである。

彼女は晴れの日も雨の日も集会に来た。そして家事もすべて自分でした。イエスがどのように自分をいやしてくださり、救ってくださったかを語るとき、彼女の顔は神の栄光に輝いていた。

ひとりの婦人が、百マイル以上の道のりをやって来た。のどと腕の下に腫瘍があって、ひどく苦しんでいた。八年のあいだ腕が使えず、その腕はいつも冷たくて、死人の手のようだった。私は祈り、ナザレ人イエス・キリストの名によって手を伸ばしなさい、と彼女に言った。彼女が手を伸ばすと、その手はほかの手のように良くなった。彼女は頭の上で手をたたいて、神に栄光を帰した。自分の手は八年のあいだしびれて感覚がなかったが、元どおりになった、と彼女は人々に語った。彼女は何度も証しをした。自分は元気になった、自分で食事をし、髪をとかすことができる、聖霊のバプテスマも受けた、と語った。マスカティンのある婦人は、十五年のあいだ片手がなえていたが、いやされた。手首の骨は盛り上がり、指は曲がって引きつっていた。その手は、その年月のあいだずっと冷たく、動かなかった。私がその手を取って祈ると、たちまち、もう一方の手のように元どおりになった。この婦人は、何千人もの男、女、子供の前でいやされた。人々はこの神の力の現れを見て、泣き、喜びの声を上げた。イエスが地上におられたときに人々がしたのと、まったく同じだった。

ある日、ひとりの婦人が、腕と肩の骨折にひどく苦しみながら集会に来た。手首も折れ、指もつぶれていた。長い階段を転げ落ちて、全身の重みが腕と手にかかったのである。彼女はたいへん太っていた。この事故に遭ったのは八か月前だった。腕と手はひどくはれ上がり、炎症を起こしていた。医者たちは、その腕や手がまた使えるようになる望みはないと言った。祭壇の前に出る前に、彼女は立ち上がって、目に涙を浮かべながら自分の容体を会衆に語った。そして、主がいやしてくださると信じている、と言った。私たちが彼女のために祈ると、人々

は何が起こるかを見ようと祭壇のまわりに押し寄せた。彼女が指と手を動かしはじめた。はれが引いていった。彼女はその腕を上げて伸ばし、それから両手を打ち合わせて「いやされた」と叫んだ。それを見た人々は、自分の目がほとんど信じられなかった。罪人であったたくましい男たちが泣いて、「まことに神がここにおられる」と言った。聖徒たちは叫び、彼女を見たすべての人に主への恐れが臨んだ。彼女は幾日か集会にとどまり、イエスが自分にしてくださったことを証しした。

ある日曜日、午後の集会のために公園へ行く路面電車を待っていると、黒い雲が集まって来るのが見えた。大嵐が近づいていたのである。天幕は町から二マイル離れていて、まわりには身を寄せる所がどこにもなかった。私は、ほかの人たちと一緒に天幕にいたいと気がせいた。私は祈りはじめた。主がその人々を守られ、火の城壁のようにその人々を囲まれて、災いから守ってくださるように、と。祈っていると、パウロの言葉が心に浮かんだ。沈みかけた船の上でパウロが語った言葉である。読者も覚えているだろう。パウロは、船は難破するが、いのちを失う者はひとりもない、と言った。私にはその意味がわからなかった。しかし路面電車を降りると、嵐が今にも猛威を振るおうとしているのが見えた。天幕はいっぱいだった。人々は側面の幕を下ろすのを怠っていて、今からではもう間に合わなかった。人々は証しの集会をしていた。あまりに熱心だったので、嵐が迫っていることに気づいていなかった。私は説教壇に上がって人々に言った。嵐が迫っています。逃げようとしないで、ただじっと座って、神にすべてをゆだねてください。神が私たちを救ってくださいます、と。私がそう言ったとたん、嵐が天幕を打ち、私の立っていた説教壇のすぐまわりで綱が切れた。側面の柱が飛び、音を立てて折れた。私は倒れて説教壇の上に横たわった。ほかの牧師や罪人たちはみな、はじき飛ばされた。会衆はこの一部始終を見ていた。二本の大きな中央の柱ごと、天幕が倒れてくるのを見た。天幕が今にも自分たちの上にかぶさってくるのを見た。多くの人は、私が死んだと思った。天幕が倒れていくのを見て、私は、祈りの答えとして主が与えてくださった聖句の意味を悟った。天幕は壊れる、あるいは倒れるが、いのちを失う者はひとりもない、ということだったのである。柱に打たれた者はひとりもなく、けがをした者もひとりもいなかった。嵐は続いた。私たちは木々の梢の上まで吹き飛ばされそうだった。一時間近く、雨が滝のように降りそうに見えたが、少しにわか雨が降っただけだった。主が驚くほど私たちを守ってくださったと、だれもが感じた。嵐が来たとき、ひとりの男が神の力に打たれて、説教壇の前に横たわっていた。説教壇が彼の上に倒れかかり、水差しやたくさんの花も彼の上に落ちてきた。しかし彼は、そのあいだずっと横たわったまま、神をほめたたえていたのである。

そこで集会を閉じる前の日曜日には九千人が、閉じた日曜日には一万人が、集会の場に集まった。朝の集会では、からだのいやしの証しが百三十あり、魂の救いの証しは何百もあった。

いくつもの州でのさまざまな集会は省かなければならない。読者には、著者から求めることのできる古い本『聖霊の行伝』をご覧いただきたい。

結婚とマスカティンの集会

一九〇二年一月一日、私はアーカンソー州ホットスプリングスのS・H・エター氏と結婚した。それから私たちは、数年前に私が働いたアイオワに戻った。私たちはマスカティンの共進会場で、七週間のあいだ集会を開いた。これは、私たちがその町で開いた三度目の野営集会だった。集会は初めから、霊的にたいへん深かった。主は大いなるしるしと不思議をもって、この集会に印を押してくださった。魂を救ってくださり、からだをいやしてくださったのである。八年ほど前に深い救いの経験に導き入れられた多くの人々は、生きた信仰の勝利のうちに死んでいた。こうして主の働きは、アイオワのこのあたりに堅く立てられている。最も優れた医術でも治せなかったのに、今日も生きている人々が多くいる。その人々のいのちは、愛する者たちのために残され、親たちは子供の世話をするために生かされたのである。

多くの人が福音を宣べ伝え、パンくずを国じゅうに配り、飢えた魂にいのちのパンを与えている。

第二十七章　イリノイ州モリーンでの集会

一九〇三年、私は美しいプロスペクト公園で三週間の集会を開き、大きな成果を得た。多くの人が私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの御国に生まれ、多くの人があらゆる病をいやされた。集会を閉じたときも関心は高かったが、天候がひどく寒く、雨がちになったので、閉じなければならなかった。私は美しい湖でバプテスマを授けた。大勢の群衆が、その荘厳な光景を見守った。ひとり、またひとりと水の墓から上がって来るにつれて、主の力が現れた。私たちはみな、主の御前で喜びにあふれた。マスカティンやアンダルシアから来てバプテスマを受けた人々も幾人かいた。その人々は、遠い道のりを来るために払った犠牲が十分に報われたと感じた。私たちはそこからアンダルシアに戻った。前に大天幕で集会を開いた所である。主は大いなる力をもってそこにおられた。周辺の地方一帯が揺り動かされた。多くの人が救われ、神はしるしと不思議をもってみことばを裏づけてくださった。多くの人がいやされ、また多くの人が神の力に打たれてひれ伏し、すばらしい祝福を受けた。

私たちは、人々の切なる招きに応じて、二度目に戻った。働きをさらに堅く立てるためである。私たちが離れているあいだも、モリーンの人々は働きを続けていた。関心がたいへん高かったので、人々は私たちが戻って来られるように道を開いてくれた。主が呼んでおられると、私は確信した。

私たちはウォー・ホールで働きを始めた。最初の四週間で、千三百人が祭壇の前にひざまずいた。私はひとりひとりに手を置いて祈った。そのほとんどが回心し、あるいは立ち返った。また、ほとんどの人が、一つから十二もの病をいやされた。キリストと使徒たちの時代とまったく同じように、力がそこにあった。これより大きな働きがなされた所のことは、どこにも書かれていない。午後の集会では、六十人がいやしを求めて一度に祭壇の前に出た。ほとんどすべての人が喜びながら立ち上がり、すっかり元気になったことを証しによって示した。二階席の多くの人々が叫び、あるいは手を振った。みなの目の前でなされる驚くべき奇跡を見て、会場のほとんど全体が涙を流すこともあった。

驚くべき光景だった。集会のたびに、人々は、私が祭壇の前に出る機会を与えるのを待ちきれないほどだった。その時が来ると、人々はどっと押し寄せた。人々は病人を、椅子に乗せ、簡易寝台に乗せ、枕に載せて運んで来た。目の見えない人、足の不自由な人、足のなえた人、耳の聞こえない人、口のきけない人、中風の人がいた。肺病、腫瘍、癌、敗血症、胃や肺のカタル、あるいは全身の血のカタルで死にかけている人々がいた。骨の折れた人も、ほかのあらゆる病の人もいた。どれも、地上のどんな力でも治せない慢性の病だった。人々はその病人たちを、イエスの足もとに置いた。ペテロの大リバイバルのとき、人々はペテロの影がかかるほど近くに寄ろうとした。ここでも同じだった。ベテスダの池の人々が真っ先に水に入ろうとしたように、だれもが私のいちばん近くに寄ろうとした。人々はひとり、またひとりといやされた。一時間のうちに、全員が喜びながら立ち上がることもあった。見ていた人々は、大きな腫瘍や甲状腺腫が消え、癌がなくなるのを見た。一度も歩いたことのない子供たちが、立ち上がって歩いた。人々は、耳の聞こえない人が聞き、口のきけない人が話すのを見た。それまで一度も聞いたことも話したこともない人々だった。人々は驚き怪しんだ。そして、神の大いなる力と、苦しむ人々への神の愛のゆえに、神に栄光を帰した。

警察の助け

警察は、病人を救急車で連れて来たり、担架で運び込んだりすることに、たいへん熱心だった。ひとりの男は、炎症性リウマチで、まったく身動きができなかった。指を動かすこともできず、熱のためにひどく苦しんでいた。彼は救われ、いやされて、壇の上を歩いた。それから歩いて外へ出て、警察署まで行った。警官たちが彼を迎えに来たとき、彼はもういなかった。警官たちは笑って、

簡易寝台を持って出て行った。それまで神を信じたことのなかった不信者や、あらゆる罪人が、イエスの信仰がまことであることを確信して、回心した。

町で最も立派な人のひとりであったある医者は、自分の患者がこれほど多くいやされるのを見て回心し、熱心な働き人になった。

実業家をはじめ、あらゆる男女がいやしを求めて来て、二重のいやしを受けた。トライシティーズの商業学校の校長が、遠くから父親を連れて来た。父親は、らっぱ形の補聴器を使わなければならなかった。父親は聴力を回復して、息子と共に帰って行った。何十人ものカトリック教徒が回心し、いやされた。ひとりの修道女は、十五年のあいだ足が不自由で心臓病を患い、どこへ行っても助けを得られなかったが、救われ、すっかり治った。彼女はまたやって来て、神に栄光を帰した。

幾人かのユダヤ人が、いやしを求めて来た。そのひとりはラビの妻だった。初めて来たとき、彼女は、イエスなしでいやしてもらえないのか、と尋ねた。私は、それはできない、と答えた。彼女は、イエスとはかかわりを持ちたくない、と言った。彼女は重い病にかかり、長年ひどく苦しんでいた。私が少し話をすると、彼女は帰って行った。しかし数日後に戻って来て、救われ、いやされた。そして人々の前でキリストを告白し、その驚くべきみわざのゆえにキリストをほめたたえた。

スウェーデン人、ドイツ人をはじめ、さまざまな国の人々が大勢来た。互いに言葉は通じなかったが、その人々はいやされ、回心した。

聾唖学校から、ふたりの少年が連れて来られた。聾唖の霊が追い出されると、ふたりとも完全に話し、聞くことができるようになった。口のきけない人が三人来た。男がふたり、女がひとりである。三人とも、聞く力と話す力を受けた。その女はほかの病もいやされた。そのうちの二つは心臓病と腫瘍だった。夫は、妻がいやされ、腫瘍が消えたのを見て、泣いて主をほめたたえた。

モリーンのある女が、癌を患って来た。どの医者からも、死ぬものと見放されていた。彼女の母親も癌で死んでいた。服はただ体に引っかけているだけだった。少しでも押されると吐いてしまうので、何かが体に触れるのに耐えられなかったのである。彼女がひどくはれ上がり、形が変わってしまっているのを見て、私は彼女の肩掛けを払いのけた。そして人々に言った。この人を見てください。この人は癌の腫瘍で死にかけています。しかし主が今すぐこの人をいやしてくださり、それをすっかり取り去ってくださいます、と。彼女はひざまずけなかったので、私は彼女に、祭壇に腰かけなさい、神が今いやしてくださる、と言った。私は彼女に手を置き、ナザレ人イエスの名によって、汚れた霊どもに、彼女から出て行けと命じた。痛みも苦しみも、癌も腫瘍も、すべて消え去った。彼女は、二階席から下まで、見ていたすべての人の前で立ち上がった。そして主をほめたたえ、すっかりいやされた、と言った。彼女はまたやって来て、まったく丈夫になり元気になったと証しした。

二階席からも会場じゅうからも、叫び声が上がった。たくましい男たちが泣いた。男も女も前に出て来て祭壇の前にひざまずき、「神はおられると信じます。クリスチャンになりたいのです」と言った。

ひとりの婦人が、腫瘍のために死にかけてアイオワから来た。シカゴとセントルイスの専門医たちに見放されていた。痛みがひどく、一分もじっとしていられなかった。彼女が集会に来て祭壇の前に出ると、私たちは手を置いた。そしてナザレ人イエスの名によって、腫瘍の霊に、そのすべてのしわざと痛みと共に彼女から出て行けと命じた。彼女はまったく丈夫にされ、叫びながら立ち上がった。そして、これほど驚くべきしかたでいやしてくださった神をほめたたえた。彼女は腫瘍のあとかたもないまま幾日かとどまり、高らかに響く証しを何度もした。そして、主がどんなに大きなことをしてくださったかを告げるために、家路についた。会衆は、神が私たちの手を通して行われる力ある奇跡を、驚き怪しみながら見守った。

ある女が、六歳の息子を連れて来た。その子は全身が腫瘍だらけで、ひどく形が変わっていた。だれも見たことがないほど恐ろしい姿だった。腫瘍はのどにも気管にもあった。そのためにひどくせきこみ、息が詰まって死にそうになった。二十人の医者の治療を受け、三度の手術を受けていた。夜も昼も、一分も休むことができなかった。私たちが初めて祈ったときから、その子はもう苦しまず、赤ん坊のように眠った！　夜も昼も静かにしていた。人々は、腫瘍がどんどん消え

ていくのを目の当たりにした。それは大きな山だった。しかしイエスの名によって、その山は移されて海に投げ入れられた。

あらゆる年齢の、何十人もの耳の聞こえない人がいやされた。生まれつき耳の聞こえない人々で、赤ん坊から四十歳、五十歳の人までいた。いろいろなことで鼓膜が破れていた人々も、鼓膜を元どおりにされ、聞こえるようになった。サウスダコタから来たある婦人は、四十年のあいだ片方の耳が聞こえず、十九年のあいだ片腕がまひしていた。その腕を頭まで上げることもできなかったが、たちまちいやされた。

二千人を超える人が、自分で、あるいは運ばれて、祭壇の前に出た。私たちはその人々のために祈った。そのほとんどが回心し、あるいは立ち返った。ほとんどの人が、一つから十二もの慢性の病をいやされた。何百人もが、回心すると同時にいやされた。二重のいやし、すなわち魂とからだの救いを受けたのである。キリストが『子よ、あなたの罪はゆるされた』『起きよ、床を取りあげて歩け』と言われた中風の者と同じだった（マルコ二・五、九）。『あなたの罪はゆるされた』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらがたやすいか（マタイ九・五）。おわかりのように、主にとっては、一方も他方も同じようにたやすかった。主はその両方を一度になさった。主ご自身が『わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた』からである（マタイ八・一七）。

主は、魂のいやしとからだのいやしが共に与えられるように定められた。それは、主が今も変わらないお方であることを世が信じるためである（ヘブル一三・八）。また、世が私たちの伝えることを信じ、主が御子を愛されたように私たちを愛しておられることを知るためである。

イリノイ州ロックアイランドの集会での驚くべきいやし

七歳の男の子がいた。一度も歩いたことがなかった。生まれつき心を病み、目が見えず、耳が聞こえず、口がきけなかった。そして、墓場にいた汚れた霊につ

第二十八章　万国博覧会のころ

かれた人のように、いつも頭を打ちつけ、自分を打ちたたいていた。人々は、最も優れた医療をはじめ、あらゆる手を尽くした。しかし医者たちは苦しみのもとを突き止めることができず、この子はいつまでも分別を持てないだろう、と言った。しかし主をほめたたえよ。主は『わたしはすべて命ある者の神である。わたしにできない事があろうか』と言われる（エレミヤ三二・二七）。

聖なる御名をほめたたえよ。『信ずる者には、どんな事でもできる』（マルコ九・二三）。私たちは両親に言った。あなたがたが自分自身と子供とを主の御手にゆだねるなら、主はこの子をいやしてくださると私は信じている、と。両親はカトリック教徒だった。主は、これまでに知られている最も大きな奇跡をなさった。聖書の記録にも、この男の子ほど驚くべきいやしの例はない。

生まれつきの盲人は、大きな不思議とされた。また、美しの門にいた、生まれながら足のきかない男は、弱かったくるぶしをいやされ、大きな奇跡とされた。しかしこの子は、生まれつき目が見えず、耳が聞こえず、口がきけず、知恵もなかった。それが今は、完全に聞き、見ることができる。神はこの子に、明るく聡明な心を与えてくださった。今は笑って遊び、毎日、会衆みなの見ている前で、説教壇の前を歩き回っている。いやされる前は、一日に二十回もけいれんを起こしていたが、今は元気で幸せである。この子をいやすことによって、神はこの働きに印を押された。そして、私が神に召され、遣わされていることを世に示された。この終わりの日に、主がみこころを行うために、私を驚くべきしかたで用いておられることを示されたのである。

エリヤの力が、力ある奇跡としるしと不思議をもって人々の中に働いている。それは、主の来臨が近づき、戸口にまで来ていることを示している（第一テサロニケ四・一六）。主は花嫁を整えておられる。花嫁を力の白い馬にお乗せになり、花婿を迎える用意をさせておられるのである。

万国博覧会のあいだにセントルイスに来て集会を開いてほしいと、私たちは切に招かれた。地上のすべての国民の代表が集まっている所へ行けという、神からの招きだと私たちは感じた。主の子供たちを一つ所に集めるのによい時だった。そこで私たちは、ペンテコステの力を、油注ぎを、前の雨と後の雨とを同じ月に受けることができる。それは、この終わりの日に求める者に与えると、主が約束してくださったものである。そうして、召された者、選ばれた者たちが、ここから世界の至る所へ散って行く。そして、私たちの救い主イエス・キリストのまことの教えと共に、聖霊の力を広めるのである。最後の招きを告げ、福音のラッパを吹き鳴らし、主の大いなる日が近いという最後の警告を与えるのである。

私たちは六か月以上その町にとどまり、一日に二回の集会を開いた。最初の集会から、主は力をもって私たちと共におられた。何百人もの人が、より高い経験に導き入れられ、神の救う力といやす力を喜んだ。

あらゆる病が、男や女や子供のからだから追い出された。それは、イエスがまさに「きょうも変ることがない」お方であることを証明した。イエスは偉大な医者であるお方として、魂もからだもいやしてくださる。二重のいやし、すなわち魂には救う力を、からだには健康を与えてくださるお方である。そして、御名を信じる者にはこれらのしるしが確かに伴うことも証明した。信じる者は『悪霊を追い出し』、『病人に手をおけば、いやされる』のである（マルコ一六・一七～一八）。主イエスは、これらの祝福を十字架の上で買い取ってくださった。そして、ご自分の条件を満たすすべての人のために、遺言の中に残してくださった。『彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた』と言われているとおりである（マタイ八・一七）。また、『その傷によって、あなたがたは、いやされたのである』とあるとおりである（第一ペテロ二・二四）。

生まれつき目の見えない女が、見えるようになった。その目は赤くはれ、彼女はひどい痛みに苦しんでいた。

生まれたときから病気だった子供たちがいやされた。その中には、生まれつき体の不自由な子や、足の不自由な子もいた。

生まれてからずっと耳の聞こえなかった幾人もの男女が、聞こえるようになった。多くの人々が、まひやリウマチや脊椎の病のために足や体が不自由になっていた。その人々も、病気の霊につかれた人々も、神をほめたたえるようになった。多くの人が神の力に打ち倒され、幻を見た。

人々は来る日も来る日も驚きながら見守り、「きょうは驚くべきことを見た」と言った。主の力が救い、いやすためにそこにあるのを見て、多くの人は泣き、またある人々は青ざめた。

病院から来た人も多かった。町で最も優れた医者たちに、治る見込みがないと見放された人々だった。その人々は救われ、いやされた。そのうちのある人々は、まもなく力仕事に就いた。主がどんなに大きなことをしてくださったかを、それによって示したのである。

なされた不思議

（オレゴン州セイラムの『アポストリック・ライト』誌から転載）

ミズーリ州セントルイス発。私たちの神であり救い主であるお方のいつくしみを、共に喜んでいただきたい。神が私たちに、たいへん恵み深くあられたからである。この二か月のあいだに、ウッドワース・エター姉妹の集会だけでも何百人もが救われ、それより多くの人がいやされた。いやされた人のほとんどは慢性の病だった。医者に不治と宣告されてから、やっと来た人も多かった。ある女は、子供の治療に五百ドルを費やしていた。数百人が聴力を回復した。まひしていた人、腫瘍や肺病の人、手足のなえた人もいやされた。

きのうの午後の集会では、主イエスが天をたれて下られた。多くの人が力に打たれた。ふたりの女とひとりの少女が打ち倒されて意識を失い、床に横たわった。少女は一時間後に正気に返り、救われて御霊のあかしを受けた、と言った。二人目の女は、両腕を天に上げたまま、二時間半ほど意識を失って横たわっていた。意識が戻ってくると、彼女は御霊によって神への賛美を歌い、罪人たちに悔い改めるようにと警告した。三人目の女は、夜の集会まで四時間ほど意識を失って横たわっていた。そして、主から私たちへの伝言を預かっている、と言った。その要旨を私は速記で書き取った。だから読者は、それを神の御座から直接受け取るのである。彼女はこう言った。

「私は連れ去られ、天国でイエスと共にいました。そこで両親に会い、先に逝った子供たちにも、知っている人々にも会いました。死んだ人の中には、そこに見当たらない人もいました。その人々は外の暗やみに投げ出されたのです。残酷な人々に殺された男がいて、私は何か月もその人のことで心を痛めていましたが、その人に会いました。人々に処刑されて、天国にいたのです。天国で会うとは思ってもみなかった人々にも会いました。罪なくして死んだと思われていたほかの人々は、見当たりませんでした。

「主は私に言われました。『帰って、わたしがすぐに来ることを人々に警告しなさい。人々があなたの顔につばきをかけても、アーメンと言いなさい。わたしがあなたと共にいる。セントルイスの集会では驚くべきことがなされる。激しい戦いがあるが、わたしの力を高く掲げなさい。罪人たちよ、手遅れにならないうちに、わたしと和解しなさい』」

セントルイスでの不思議

私たちのただ中に神がおられることが驚くほどはっきりと現れていて、私たちは毎日喜んでいる。この二週間、ウッドワース・エター姉妹の集会で神がなさったほどの驚くべきみわざを、私は見たことがない。父なる神は、イエス・キリストの栄光を現しておられる。あらゆる病のいやしによって、魂の救いによって、悔い改めた罪人に与えられる平安と愛と喜びによってである。『あなたがたもまた祈をもって、ともどもに、わたしたちを助けてくれるであろう。これは多くの人々の願いによりわたしたちに賜わった恵みについて、多くの人が感謝をささげるようになるためである』（第二コリント一・一一）。

主イエスは、これらの集会に御霊を注いでおられる。主はそれを、ひとりの姉妹に幻で示された。集会にいる私たちも、それを目にしている。十二人ほどが死んだように倒れ、何時間も床に横たわって、幻と啓示を受けた。ときには、ある人が歌い終えたとたんに、御霊がその人をとらえられることがある。その人は賛美歌集を手に持ち、手を上げたままの姿で、十五分か二十分のあいだ像のように動けなくされる。立っている人やひざまずいている人が、このように動けなくされたこともある。きのうは、ふたりの女が座席に座ったまま回心し、御霊のあかしを受けて、自分が上から生まれたことを知った。三月二十四日の午後の集会では、エター姉妹自身が力に打たれ、一時間以上、壇の上に寝かせておかなければならなかった。姉妹は幻を見た。主は姉妹に多くのことを示された。とくに、セントルイスでの働きのすぐ先のことを示された。

幻と啓示を受けた人々はみな、人々に警告する伝言を持ち帰って来る。イエスがまもなく来られる、という伝言である。罪人は主と和解しなければならない。救われた人々は、堅く立てられ、力を注がれ、主がまもなく来られるという知識によって証印を押されなければならない。主がお現れになるとき、忠実でまことの者と認められるためである、と。

力に打たれているあいだに啓示を受けた人々はみな、私たちの主がまもなく来られるという伝言を持ち帰って来る。御名をほめたたえよ。主の聖徒たちにとって、それはなんと輝かしい時となることだろう。

私たちはセントルイスを訪れた。主は大いなる力をもってそこにおられた。驚くべきいやしの奇跡があり、聖霊の力が多くのしるしと不思議となって現れた。異言とその解き明かしとなって、また天の歌となって現れたのである。

ひとりの姉妹は、神の力によって、運ばれるようにして壇の上から会衆の中へ行った。そしてそこに立って、すばらしい幻を見、多くのさまざまな国の言葉で語った。

ひとりの幼い男の子が、口がきけなくなり、耳が聞こえなくなり、目が見えなくなった。三日後、人々が祈っているあいだに目は見えるようになったが、耳と口が元に戻ったのは一か月後だった。耳が聞こえず口がきけないあいだ、主はこの子を驚くべきしかたでお用いになり、多くの幻と啓示を与えてくださった。この子は地震や火事や洪水を預言し、それはそのとおりになった。

スウェーデン人のある姉妹は、すっかり神の力の下にあって、多くのさまざまな国の言葉で語り、その解き明かしをした。彼女は、主が来られるときまで及ぶ多くの預言をした。その多くは、すでにそのとおりになった。

別の姉妹は、すばらしいバプテスマを受け、ギリシャ語とラテン語で聖歌を一曲ずつ歌った。彼女が歌った天の歌は、遠くまで聞こえた。それは天から聞こえ

てくるかのようだった。彼女は幾つかの違った国の言葉で語り、涙を流しながら立ち上がって説教した。

別の若い婦人はバプテスマを受けて、八つの違った国の言葉で語った。その後も、力にとらえられるたびに何度も語った。それが神の力であることを、だれもが知っていた。

異言を語る

ペンテコステについて説教し、そのときの人々もまた異言を語ったことを説き明かしていると、神の力が私をとらえた。そして私は、御霊が語らせるままに異言を語りはじめた。私は三つの違った国の言葉で語り、ペンテコステの驚くべきみわざを他国の言葉で説いた。私は御霊によって幾つかの歌を歌い、ほかの幾つもの国の人の笑い方に似たしかたで笑った。

異言を語ってバプテスマを受けた人はみな、大きな力を受けた。

ひとりの若い娘が集会に来て、働き人たちをあざけった。しかし主は彼女を救ってくださり、ローマ・カトリックの闇を示された。彼女は、主がどのように救い出してくださったかを、すばらしい証しで語った。

主は幻の中で彼女にお現れになり、こう言われた。次の日、前に住んでいた郊外の町へ行きなさい。わたしがあなたに多くの魂を与える、と。主は、救おうとしておられる人々を、幻の中で彼女に示された。

彼女は従い、次の日に出かけて、昔の友人のひとりを訪ねた。

その家の人々は、彼女がたいへん幸せそうなのを見て驚いた。回心する前の彼女は、ほとんど笑うこともなく、不満を抱いて不幸せで、ひどく乱暴な言葉づかいをしていたからである。人々は言った。「いったい何があったのか。ずいぶん幸せそうだね。私たちもそんな信仰がほしい」彼女がそれを得る道を教えると、人々は祈りはじめた。神が力を送られると、まもなく全員が倒れ、十五分か二十分のあいだ横たわっていた。九歳ほどの小さな女の子が、「お母さん、イエスさまが見える、イエスさまが見える」と叫びながら、家じゅうを走り回った。みな輝かしい救いの経験に入り、叫んでいた。雇われていた娘も含めて、全部で十人だった。

それから彼女は別の家へ行った。その家の人々も同じことを言った。彼女がすっかり変わったのを見て、何をしたのかと尋ねたのである。彼女は、回心したのだと答えた。話しているうちに神の力が彼女に臨み、彼女は神の力の下で人々に説教しはじめた。正気に返ると、人々はみな力に圧倒されていた。人々はしばらく横たわっていたが、やがて神をほめたたえて叫びながら救いの経験に入った。近所の人々も呼ばれて来ていたので、全部で十九人だった。

その後、彼女が通りを歩いていると、女友だちに出会った。その友だちは、翌日のピクニックの段取りを決める委員会に出るために、ダンスホールへ行くところだった。彼女も一緒に来るよう誘われた。初めは断ったが、主が行くようにと示された。

着いてみると、そこは幻で見た場所の一つだった。彼女が話しはじめると、聖霊の力が彼女に臨み、彼女は人々に説教した。説教を終えると、二十人全員が、戦場のように床のあちこちに倒れていた。彼女がその人々のために祈ると、みな輝かしい救いの経験に入った。

その日、四十九人が救われた。そのうち四十八人がローマ・カトリック教徒で、ひとりは信仰から離れていたメソジストだった。

またあるとき、彼女は、V夫人に手紙を書くようにと心に示された。V夫人には生まれつき耳が聞こえず口のきけない娘がいた。その娘は十七か月前に路面電車にはねられ、そのために腰から下がまひしてしまった。医者たちは娘の体を石膏のギプスで固めた。

V夫人は娘をセントルイスに連れて来て、その姉妹を訪ね、娘のために祈りに来てほしいと頼んだ。姉妹は出かけて行った。そして祈っているうちに聖霊の力に打たれて倒れ、手話で娘と話した。姉妹は手話の文字を一つも知らなかったし、今も知らない。それなのに、どうすれば主に自分をささげられるかを、手話で娘に教えたのである。それから、病んでいて耳も口も不自由なその娘が祈ると、娘もまた聖霊の力に打たれて倒れ、口を開いて言った。「イエスさまが見えます。イエスさまが『あなたは歩ける』と言われて、手を伸ばされました」娘が

その指先をつかむと、ギプスが割れて、娘はすぐに寝床から起き上がった。そして部屋を横切って父親のところまで歩いて行き、手を伸ばして父親の額に触れた。すると父親もまた神の力に打たれて倒れ、救われた。ほかに七人も救われた。

次の日、娘は家に帰り、友だちと電話で話した。その友だちは足が不自由で、十六年のあいだ松葉杖をついていた。しかし友だちは、生まれつき耳が聞こえず口のきけない娘が聞いたり話したりできるとは信じようとしなかった。そして「アグネスでしょう」と言った。アグネスは、その友だちの女友だちの名である。

娘は「こっちへ来て、見てごらんなさい」と答えた。足の不自由な友だちは、松葉杖をついて入って来た。そして、ヴァーンがいやされているのを見ると、「あなたが歩けるなら、わたしも歩ける」と叫んだ。そして松葉杖を投げ捨てて歩いた。

ある姉妹が、盲腸炎と胆石と、もう一つの病に苦しんでいた。ある日、彼女は意識を失い、夜の九時までそのままだった。一緒に住んでいた人々が、彼女を市立病院に運ばせた。正気に返ると、彼女はその病院のベッドに寝ていた。そして、手術を受けなければならないと告げられた。

手術が行われ、二十五針縫われた。その後、彼女はひどく悪くなり、目も見えず口もきけなくなった。病院の人々は、患者が死にかけているときの習わしどおり、彼女のまわりに臨終のついたてを立てた。医者と看護婦がひとりずつ、彼女が息を引き取るのを見守っていた。

伝道所の姉妹がひとり見舞いに来て、帰りぎわに「九時に、あなたがいやされるように祈ります」と言った。そばに立っていたふたりの看護婦が、それを聞いた。

その日のうちに、彼女はさらに悪くなった。手足はひじとひざまで黒くなり、指はこわばった。また出血もあり、口と鼻と耳から血が出て、着ているものが血でぐっしょりぬれた。九時少し前、人が死ぬときのように、彼女の手足がすべて伸びきった。看護婦は彼女が死んだと思い、医者のところへ行って「亡くなりました」と告げた。医者が見に来ると、彼女は起き上がって座っていた。医者は驚いて、横にならなければいけない、と言った。彼女は「いやされました」と言った。医者は、頭がおかしくなっている、と言ったが、彼女は、神がいやしてくださったのだと言い張った。ついに医者も、そのとおりだと認めた。

翌日、二十九人の医者が彼女を診に来て言った。「これまでに知るかぎり、最も驚くべき症例だ。完全に治っている」医者たちは、その手術から回復した人をほかに知らなかった。

このような場合、抜糸は十五日たつまでは決してしないものである。しかし彼女の場合は、いやされていたので、四日目に抜糸された。

面会日が来ても、彼女には訪ねて来る人がいなかった。それで病院の院長が、自分と妻とで喜んで見舞いに行こう、と言った。院長夫妻がやって来て、ベッドのそばに座ると、彼女は自分が回心したいきさつを語った。院長の妻の目には涙が浮かんでいた。

第二十九章　御霊の現れ

十五年ぶりに、私はインディアナポリスに戻った。夫のエター氏も一緒だった。夫はそこで、最も激しい戦いの中で私と共に勇敢に立った。結婚したその日から、夫は一度もしりごみしたことがない。戦いが最も激しいとき、夫は先頭に立つ。みことばと、聖霊のすべての賜物と働きとを守る。しかし、熱狂や愚かなふるまいは少しも望まない。集会の中でも外でも、夫は私を何よりも大切に世話してくれる。私が何を頼んでも、いやとは言わない。祈りもし、説教もし、歌いもする。祭壇のまわりでの働きもたいへん上手である。私の書き物は、ほとんど夫がしてくれる。私の本を出すのも手伝い、集会の内外の世話もしてくれる。主は私に何が必要かをご存じだった。すべては、私と働きに対する主の愛と配慮によって、主が成し遂げてくださったことである。

私たちは町の南部に大天幕を張った。私たちが町に来ているという知らせは、すぐに広まった。古くからの友人たちや、イエスにある子供たちが、私たちを助けに来はじめた。集会は初めからよかった。罪人たちがキリストのもとに群がって来はじめた。そして勝利の叫びが、大きな白い御座に上りはじめた。「いなくなっていたのに見つかった。死んでいたのに生き返った」

多くの人が神の力に打たれて倒れ、すばらしい幻を見た。大いなるしるしと不思議と力の現れがあり、異言を語ることもあった。罪人たちは、死んだ男や女のように打ち倒された。主は、罪人をキリストに導くために、小さな子供たちを驚くべきしかたでお用いになった。聖霊が子供たちをすっかり支配しておられるとき、聖霊ご自身が子供たちをお導きになり、会衆の中を通らせられた。そして、この男、あの女へと手を伸ばさせられた。子供たちはその人々に手を差し出し、一緒にまっすぐ祭壇の前へ行った。そのあいだ、子供たちはずっと目を閉じていた。子供たちが主に導かれていることを、だれもが知っていた。祭壇に着く前に回心した人々もいた。その後に実際に起こったことを預言した者もいた。

かなり肌寒くなってきたので、私たちは町の中心へ移り、十一番通りとセネット街の角にあるペニエル・ホールへ行った。みなもついて来た。聖霊が大いなる力をもってそこにおられた。手を置くことに伴って、賜物と、しるしと、幻とが現れた。説教壇の上にも会衆の中にも、光と栄光の目に見えるしるしがあった。肉眼でそれを見た人々もいた。聖徒たちは、これほどの集会に出たことも、これほどの神の力、聖霊の力を感じたこともない、と言った。

インディアナポリスで

翌年、私たちはインディアナポリスに戻り、同じ場所に天幕を張った。一年のうちのほぼ同じころだった。前の年のリバイバルの霊がまだ人々のうちにあったので、働きはすぐに始まり、群衆が集まって関心も高かった。働きは前の年よりはるかに大きかった。人々は、敵に立ち向かう助けをするために、上って来る用意ができていた。群衆はさらに多く、関心はさらに深かった。多くの人が、いやされるのを、あるいは救われるのを待っていた。毎日、新しい兵士が隊列に加わり、さらに大きないやしの奇跡が起こった。

ひとりの女が、車椅子に乗せられて百マイルの道のりを運ばれて来た。彼女は十七年以上も寝たきりで、二十五人の医者にかかっていた。医者たちには彼女の病がわからず、初めから何もしてやれなかった。ただ少し落ち着かせてやることしかできなかった。ときには、立つことも、寝床で寝返りを打つこともできなかった。彼女の町のある男が、セントルイスでの私たちの集会に来て、そこでいやされていた。男は家に帰ると彼女を訪ね、そのことを話した。彼女は、男がひどいリウマチを患っていたことを知っていた。男は松葉杖もつかず、だれの助けも借りずに入って来た。回心した、幸せな人になっていた。男は私の本を一冊持って来ていて、読むようにと彼女に渡した。男に会い、その本を読んで、彼女

は回心した。ほとんど生涯ずっと教会員だったのに、それまで一度も回心したことがなかったことに、彼女は気づいた。

彼女は夫が回心することを切に願っていた。自分の状態に気づいて、彼女は言った。「主よ、回心し、いやされるために、私はインディアナポリスへ行かなければならないのですか」「そうです」と彼女は言った。「連れて行ってもらわなければなりません」その旅の危険を冒すのは、いのちがけのことだった。しかし夫が彼女を集会に連れて来た。彼女は回心し、いやされた。夫もまた回心した。夫が叫びながら彼女のところへ行くと、彼女も叫びはじめ、いやされた者として車椅子から跳び出した。すると天幕じゅうに叫び声が上がった。夫は彼女の腕を取って壇の上へ歩いて行き、大勢の会衆の前に立った。ふたりが並んで立ったのは、十七年以上ぶりのことだった。ふたりとも背が高く、堂々として見えた。夫は、花嫁と花婿として並んだときよりも、彼女を誇らしく思った。天幕の中にいる人も、まわりにいる人も、みな喜んだ。いかつい顔からも、喜びの涙が幾筋も流れた。私たちは「ハレルヤを響かせよ」を歌い、ハンカチや帽子を振って、賛美の揺祭をささげた。賛美の叫びと共に、すべての手が上がっているように見えた。

彼女の故郷の人々は、彼女が死んで、棺に入れられて帰って来るものと思っていた。しかし元気になって帰って来ると聞くと、町のほとんど全員が川の波止場に出て、彼女の帰りを迎えた。彼女は十七年以上ぶりに、その町の教会へ行った。そして立ち上がって説教し、主がどんなに大きなことをしてくださったかを語った。夫の兄弟は長年説教をしていたが、この兄弟と夫は伝道の務めを共にするようになった。それ以来、夫婦は一緒に出かけて集会を開いている。

ある男は二十年前に、この天幕とこの働きの幻を見ていた。路面電車に乗って天幕へ行き来する幻も見ていた。彼はこの集会の様子を語った。幻の中で私を見てもいた。主は、罪人をキリストに導くために、さまざまなしかたで彼をお用いになった。彼は、主が求められることは何でもすると主に約束した。ある夜、彼は家に帰る途中だった。たいへん暗い夜だった。主に導かれるままに、彼は路地に入って祈った。彼がひざまずいて、失われた人々のために祈っていたとき、すぐそばの小屋には、ふたりの男が隠れていた。主は、悪い男や女のために祈るよう彼を導かれた。そう祈っていると、小屋の中で物音がして、ふたりの男が隠れていた所から彼の背後に出て来た。男たちは彼に抱きつき、強盗をしようと待ち構えていたこと、もし見つかったら人を殺すつもりだったことを告白した。男たちは毒を持っていて、捕まるくらいなら死ぬつもりだった。男たちはその場で回心し、幸せな人となって家路についた。

この集会は、一年前の集会よりもさらに大きな成果を上げた。私たちの知っている多くの牧師が、私に会い、集会に加わるために、各地からやって来た。十年前、十五年前の私の集会から、牧師や伝道者として出て行った人々である。その中には多くの回心者や働き人もいて、主のぶどう園であらゆる働きをしていた。ああ！　私たちのあいだには、なんという愛と交わりがあったことだろう！　主の力と臨在が、賜物と、力の現れと、働きと、召しとに現れた。聖霊の力あるわざも伴っていた。

ある姉妹は一晩じゅう異言を語った。これは、カリフォルニア州ロサンゼルスで聖霊が下る前のことである。ひとりの牧師が私に会いに来た。その牧師は、私を通して回心したある牧師を通して、自分は回心したのだと言った。私のことをたいへん多く聞いていたので、自分の祖母に会うために五十マイルの道のりを来たのだ、と言った。

八年後の昨年の夏、私たちはまた戻って来て、数か月のあいだ天幕集会を開いた。数百人が救われ、ほとんどあらゆる病をいやされた。癌、腫瘍、目や耳の病の人々がいた。体の不自由な人々が運び込まれ、あるいは松葉杖をついて入って来た。死にかけている人々もいた。みな神に触れていただき、神の力によっていやされて、歩き、叫び、神をほめたたえた。多くの人が聖霊のバプテスマを受けた。

ひとりの女が、癌で死にかけた状態でシンシナティから連れて来られた。医者たちは、死を待つばかりの彼女を家に帰していた。彼女はひどい状態で、その悪臭に人々は気分が悪くなった。六月のたいへん暖かいころで、彼女の服にはハエがびっしりとたかっていた。彼女はクリスチャンで、死ぬ用意ができていた。しかし主は、彼女は死ぬことなく生きる、と言われた。私が祈りはじめてから十分

もたないうちに、彼女は完全にいやされた。彼女は跳び上がって叫んだ。悪臭は、膿と共にたちまち止まった。彼女は一週間とどまり、それから働きに出た。

私たちは集会を閉じて、インディアナポリスの東二十三マイルにある小さな町マクスウェルへ行った。主は各地から人々を引き寄せられた。小さな町なのに、日曜日には一度に二千人が集まり、最後の日曜日にはさらに多く集まった。

次に私たちはオハイオへ行き、それからインディアナポリスに戻って、クリスチャン教会で集会を始めた。そして八か月ほどとどまった。初めから人々が救われ、いやされた。人々はシカゴやほかの町から、また周囲何百マイルもの至る所からやって来て、救われ、いやされ、聖霊のバプテスマを受けた。初代教会の時代以来なされてきたどれにも劣らない、目ざましいいやしの奇跡が数多くあった。ここに証しを一つ紹介しよう。その兄弟自身の証しである。彼がいやされてから、今で四か月ほどになる。それ以来、痛みも病もなく、何の不自由もない。彼は健康な人である。神の力によって、たちまちそうされたのである。彼は三十年のあいだ痔を患い、四度も切除したり焼き切ったりしたが、やがて癌になった。病はひどくなり、空気を入れた輪の上に座らなければならなくなった。また一日に二度、妻に腸を洗ってもらわなければならなかった。長い浣腸器と管を使い、一度に二リットル近い水を使った。そのあと彼は出血し、ひどい悪臭のため、妻はほとんどそれができないほどだった。腸は、左側が二十五センチほど上まですっかりなくなっていた。背骨は内側の肉がなく、むき出しになっていた。リウマチも患っており、罪人でもあった。神は、十五分もたたないうちに、一度に彼を回心させてくださり、いやしてくださった。彼は六十四歳だった。彼は聖霊のバプテスマを受け、今では神の小さい者のひとりである。私たちの神にできないことは何もない。

（ここには、ダラスのF・F・ボズワース長老がこの集会を訪れたときの記事が転載されているが、著作権が残っているため訳していない）

死からよみがえる

（ここには、集会中に倒れて天国にいたように感じたというサラ・ネルソン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ウッドワース・エター姉妹によれば、そのとき騒ぎが起こった。助けに出て行く人々もいれば、戻って来る人々もいた。姉妹は「どうしたのですか」と尋ねた。人々は会衆を動揺させたくなかったので、「気を失ったのです」と言った。エター姉妹は言った。「あの人は大丈夫です。たとえ主があの人を取り去られても、あの人には用意ができています。ほかのみなさんも、同じように備えができていればよいのですが」

かなりたってから、人々は彼女の体を運び込んで言った。「死んでいます！」「脈が止まりました」心臓は動いておらず、体は冷たくぐったりとして、顔はしかばねの顔だった。エター姉妹はほかの人々を彼女のまわりに集め、イエスがよみがえりであり、いのちであることを語った。そして祈り、主の名によって彼女に呼びかけた。すると彼女は目を開いた。

目を開いたとき、その目は黄色く、彼女は初めのうち何もわからないようだった。そして、しかばねのような姿で大きなひじ掛け椅子に座っていた。集会の後のほうで、彼女は証しをしたいと言い、証しをした。それ以来、彼女は集会に出続け、毎日働いている。

インディアナ州インディアナポリス、一九一五年一月六日

主にはいやす力があることを、私は証しできます。

私は直腸癌をいやされました。この町のふたりの医者は、望みのない症例だと宣告しました。私の年齢と病の進み具合からして、入院させるほどの症例でさえない、というのです。手術をしても何の益もないと言われました。私はそのとき六十五歳でした。

直腸の左側は、癌に食い尽くされていました。体はすっかり壊れていました。一晩眠るということがどういうことかもわからず、食欲もなく、神経はすっかり参っていました。

一九一二年一月九日、私は、エター姉妹が集会を開いている所へ行きました。この町の十七番通りとマーティンデール街の角です。私はまったくの見知らぬ者でした。ひとりでは出かけられなかったので、よき妻が一緒に来てくれました。妻のほかには会堂の中にひとりの知り合いもいませんでした。

エター姉妹が祭壇への招きをしたとき、私は祭壇の前に出てひざまずきました。兄弟姉妹たちが私に手を置いて祈り、イエスの名によって病をしかりつけてくれました。背中に手を置かれたとき、私は身震いしました。ひどく痛み、敏感になっていて、背中を洗われることさえ耐えられなかったからです。癌が今にも突き抜けそうになっていたので、スポンジを取って、背中にそっと水を絞りかけるほかありませんでした。しかし神をほめたたえます。神は痛みをすっかり取り去ってくださいました。痛むところに何かが落ちてきたように思えました。膏薬を四枚か五枚重ねたように感じられました。それがあまりに確かに感じられたので、どれほどの厚さかと、私は背中に手をやってみました。祭壇の前に十五分もいないうちに、痛みもうずきもすべて消えました。あのひどい焼けるような感じは去って、今日まで一度も戻っていません。いやされてから三十一か月ほど、三年近くになりますが、病の跡は少しも残っていません。うずきも痛みもありません。神がこれほど驚くべきしかたでいやしてくださったその日から、一日も病気になったことがありません。同じ日に、右の腕と肩のリウマチもいやされました。腕はわきに引きつけられたままで、自分で服を着ることもできませんでした。主は私の腕をまっすぐにしてくださり、今もまっすぐです。主をとこしえにほめたたえます。ああ、イエスに栄光あれ。イエスは救うことがおできになり、いやす力を持っておられ、実際にいやしてくださいます。ああ、イエスが私の体に触れてくださり、いやしてくださったとき、どれほどうれしかったか、とても言い表せません。私は祭壇のところで跳び上がりました。上着を脱いで、また着ました。何週間もできなかったことです。主が痛みやうずきを一瞬で止めることがおできになるのなら、私が仰ぐべきは主だ、と私は言いました。

私は、空気を入れたゴムの輪を持ち歩かなければなりませんでした。直腸がひどく痛んで敏感になっていたので、いちばん柔らかい羽毛の枕の上にも座れなかったからです。

私はその輪の空気を抜いて箱にしまい、浣腸器も片づけました。それまでは、朝晩、三リットル近いぬるま湯で腸を洗い、毎晩丸薬を三つ飲み、二時間ごとにほかの薬を飲んでいました。家には二週間分近くの薬がありましたが、すべて捨てました。いやされたその日から、どんな薬も一服も飲んでいません。全世界をもらっても、一服も飲むつもりはありません。主は、私にもう薬が要らないことを、疑いの余地なく示してくださいました。主が人にも病にも力を持っておられることを、示してくださいました。ただ主に信頼し、従えばよいのです。五週間、便通がまったくありませんでしたが、私はいつもどおり食べ続けました。生涯でこれほど食欲があり、気分のよかったことはありません。御名をとこしえにほめたたえます。私は今日、これまでのどのときよりも九キロほど体重が増えています。主は、酒とたばこの習慣も治してくださり、同時に私を救ってくださいました。ああ、イエスにとこしえに栄光あれ。

ジョン・Ｚ・アームストロング
ドーマン通り九五三番地
インディアナ州インディアナポリス

（ここには、アームストロング夫人が夫の証しを裏づけた一文が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第三十章　テキサス州ダラスでのしるしと不思議（その一）

（ここには、ダラスのF・F・ボズワース長老の報告が『ワード・アンド・ウィットネス』誌から転載されているが、著作権が残っているため訳していない）

ダラスにおける聖霊の行伝

（『デイリー・タイムズ・ヘラルド』紙から転載）

使徒的な集会で、何百人もの人々がいやされている。天幕には毎晩、広い土地を埋めつくすほどの人々が来ている。カリフォルニアやアイオワやインディアナで新聞がエター夫人について書いたことを、うのみにする必要はない。天幕へ行き、神の力あるわざを自分の目で見、自分の耳で聞けばよい。オクラホマやアーカンソーやジョージアから、人々がいやされに来ている。

オクラホマ州マカレスターのエルマー・フーパー、三十六歳。生まれつき耳が聞こえず口がきけなかったが、たちまちいやされた。

テキサス州ダラス、ブールバード通り三一一二番地のチェルヴ・マロック夫人。肺病の末期だったが、完全にいやされた。

さあ「相棒」、墓場のような古い「神学」の陰に引っ込んで、祝福を逃してはいけない。神はダラスにおられ、奇跡を行っておられる。だれもが来て、だれもが神をほめたたえている。メソジストも、バプテストも、長老派も、キャンベル派も、カトリックもである。群衆の端の、九十メートルほど離れた所に立っていても、バプテスマのヨハネがよみがえったのかと思うかもしれない。あるいはジョン・バニヤンか、ジョン・ノックスか、ジャン・カルヴァンか、ジョン・ウェスレーがよみがえったのかと思うかもしれない。そして、群衆が昔ながらの信仰を取り戻したのかと思うだろう。

テキサス州ダラスのリバイバルの続報

（『ブライドグルームズ・メッセンジャー』誌第五巻第百二十号から抜粋して転載）

神は今もテキサス州ダラスで、驚くべきしかたで力を現しておられる。そして福音の宣教に、『しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また聖霊の賜物によって』あかしをしておられる（ヘブル二・四）。集会のたびに、大天幕は群衆でぎっしりになる。その多くはほかの州から来ている。すでにたいへん多くの人々が、病人や苦しむ人を連れて、百マイルから二千マイルの道のりをやって来た。合衆国とカナダの至る所から、一日に四十通もの手紙が殺到している。集会について問い合わせ、いやしのための祈りを求める手紙である。

ある男が、数百マイルの道のりをやって来た。転んで肋骨を三本折り、苦しんでいた。ありえないことのように思えるかもしれない。しかし、彼に手が置かれ、信仰による祈りがささげられると、たちまち痛みが去った。折れた肋骨は端が内側に曲がっていたが、ひとりでに元の位置に戻ってつながった。その数分前には、エター姉妹がわき腹に手を置くと、彼は痛みに身をすくめていた。しかしいやされた後には、その肋骨を自分の手でたたくことができた。いやしは完全だった。彼は信仰から離れた者でもあったが、驚くべきしかたで立ち返った。

純血のチョクトー族のインディアンの女が、オクラホマからやって来た。十六歳のときに牛に足を踏まれ、それから三十八年のあいだ、その足の膿の出る傷にひどく苦しんでいた。傷は盛り上がった肉の塊で、においはほとんど耐えられないほどだった。夜も眠れず、その足に掛かる布団の重みにも耐えられなかった。手を置くことによって、神はたちまち痛みをすべて取り去ってくださった。足は今、治りつつある。

この前の日曜日、ボズワース兄弟がさらに三十九人に水のバプテスマを授けた。神の力が大いに臨んでいた。大群衆がその光景を見守った。

この二か月のあいだに、百二十五人以上が聖霊のバプテスマを受けた。この前の土曜日の夜には八人が、ある日曜日には十二人がバプテスマを受けた。一週間に五十人もが聖霊のバプテスマを受けたこともあり、多くの人は自分の家で受けた。この二か月、これらの集会には、神の大いなる力と臨在が驚くべきしかたで現れている。

テキサス州ダラスで増し加わる神の不思議

集会は関心も力も増し加わっており、人々は多くの州からやって来る。きのうの朝には、ひとりの男が、この集会に出るためにわざわざインディアナ州インディアナポリスから着いた。太平洋岸から来た人もおり、イリノイやミシガンやほかの州から来た人々もいる。四十マイル、五十マイルの道のりを自分で駆って来る人も多い。きのうは、ガルベストンやヒューストンや、テキサスのほかの多くの町から人々が来ていた。

八月十二日、三人の男が、肺病と癆孔で死にかけているひとりの男を連れて来た。男を簡易寝台に乗せ、荷物車で二百マイルの道のりを運んで来たのである。彼はテキサス州マーキュリーから来た。簡易寝台に乗せられて天幕に運び込まれたときは、死人のように見えた。結核のいちばん末期で、ほとんど骨ばかりになっていた。祈ってもらうと力が臨み、彼は簡易寝台から跳び起きた。そして神をほめたたえながら、人々の前を走り回った。彼はほかの乗客と同じように座って家に帰り、今では一週間に二キロ近く体重が増えている。癆孔は翌朝にはふさがり、それからは一度も手当てをする必要がなかった。その地方一帯が揺り動かされ、その近くからさらに二十五人ほどが来た。おとといの夜には、その郡からの一団が、耳が聞こえず口のきけないふたりを連れて来た。ひとりは三十四歳、もうひとりは十七歳の美しい若い婦人だった。神はふたりの耳を開いてくださった。若い婦人は救われると同時にいやされ、たいへん喜んでいる。けさ、ふたりは私たちの家に来ていた。私はふたりのためにオルガンを弾いた。ほかにも多くの人が、耳が聞こえないのをいやされた。

きのうは、私がこの働きで見たうちで最もすばらしい日だった。神は、心を溶かし、人を打ち倒す力をもって来られた。二十一人が、パウロのように神の力によって打ち倒され、一時間から十時間のあいだ横たわっていた。その人々は天国とイエスのすばらしい幻を見た。そしてみな、顔を輝かせ、神の愛に満たされて我に返った。そのうちの十二人は聖霊を受け、初めて異言を語った。これほどの力の現れは、見たことがない。人々が倒れて死人のように横たわるのを見ると、まるで戦場のようだった。神は『主に打ち倒される者は多い』と言われた（イザヤ六六・一六）。罪人たちは神のすばらしいみわざを見て、泣いている。

二十年のあいだリウマチに苦しんでいた七十五歳の女が、二百マイルの道のりを連れて来られ、最初の集会でいやされた。彼女が来たのは、前に述べた肺病の男がいやされたからである。

生まれつき耳がまったく聞こえない少年が、父親に連れられてテキサス州マーティンズバーグから来た。神は少年を完全にいやしてくださった。両親から手紙が来て、耳は完全に聞こえ、話すことを覚えているところだ、と書いてあった。

テキサス州パーマーから来た女が、ペラグラをいやされ、同時に御霊に満たされた。医者たちに見放されていた女である。彼女は今も集会に来ており、元気である。ダラスから六十マイル離れたテキサス州ブルーリッジの男は、顔と首の片側一面に広がった癌に、十年のあいだ苦しんでいた。苦しみがひどく、集会から連れ出さなければならないほどだった。あごを動かすとひどく痛むので、話すこともできなかった。エター姉妹が彼のために祈ると、力が臨み、彼はいやされた。痛みも、焼けるような感じやこわばりもすべて、たちまち去った。頭をどの方向に向けても痛まなくなった。彼は祭壇の所に立って、人々に説教した。きのう彼の友人たちが、癌は治りつつあり、彼は元気になってきている、と私に話してくれた。

おとといの夜、カトリックの婦人が初めて集会に来た。彼女は両耳が聞こえず、聖歌隊が歌っても何の音も聞こえなかった。彼女はたちまちいやされ、ふつうの会話が聞こえるようになった。土曜日の夜には、腫瘍で死にかけている婦人が、テキサス州ボーモントから連れて来られた。医者たちは、四十八時間ももたないだろうと言っていた。彼女はたちまち救われ、いやされ、御霊のバプテスマ

を受けた。そして人々の前で跳び上がり、神をほめたたえた。罪人たちはそれを見て泣き、それから祭壇の前へ進み出る。

日曜日は私が見たうちで最もすばらしい日だった、と私は書いた。ゆうべは、さらにすばらしかった。あの集会は、口でも筆でも言い表せない。耳が聞こえず口のきけない三人がいた。五十四歳と三十四歳と十七歳で、互いにまったく見知らぬ者どうしだった。神が三人の耳をみなお開きになり、声をお与えになり、三人とも救ってくださった。それで三人は三十分ほど抱き合い、口づけし、泣き、叫んだ。大会衆はそれを見て泣いた。そして、壇の前の空いた所に詰めかけられるだけの人々が詰めかけ、救いと、いやしと、バプテスマとを神に求めた。多くの人が神の力によって打ち倒され、イエスのすばらしい幻を見た。また多くの人が、ペンテコステの日のように聖霊のバプテスマを受けた。自分の家で打ち倒される人々もいる。耳が聞こえず口のきけなかった人々が聖歌隊を見つめ、歌と楽器を楽しんでいることを身ぶりで伝え合っていた。その様子を、読者にも見せたかった。その人々と一緒に来た一団は、けさ彼らを連れて帰った。もうひとり口のきけない人を連れて来る、ほかにも苦しむ人々を連れて来るかもしれない、と言っていた。ゆうべ、一団と一緒に来た説教者が立ち上がって話した。あの耳が聞こえず口のきけなかった若い婦人を生まれたときから知っていて、自分の娘のように愛してきた、と。

ダラスでのいやしの奇跡

（シカゴの『ラター・レイン・エバンジェル』誌、一九一二年十月号から転載）

テキサス州ダラスで、ウッドワース・エター夫人と牧師が導いている集会において、神はまことに驚くべきしかたで働いておられる。九月の第一週には、五十人ほどが聖霊のバプテスマを受けた。そのほかに、輝かしい回心と奇跡的ないやしが数多くあった。

目撃者から受け取った八月二十二日付けの私信から、次の部分を引用する。

「毎晩、五千人ほどが集まっています。日曜日の夜には、さらに多く集まります。病人や苦しむ人々が、テキサスの至る所から来ています。オクラホマ、アラバマ、ジョージア、ルイジアナから来た人もいます。列車で、幌馬車で、あらゆる手段を使ってやって来ます。ああ、なんと痛ましい光景でしょう！　どれほど私の心が痛むことでしょう！　ときには、耐えられないほどです。一つの集会に、癌や肺病にほとんど食い尽くされ、この世のあらゆる助けに見放された人が、四人も五人もいるのを見るときです。その人々は最後の頼みとして、主のもとに来るのです。

「私がここに来た最初の夜には、死にかけた人が四人、簡易寝台で運び込まれました。車椅子の人も何人かおり、歩ける病人も大勢いました。簡易寝台の人のうちふたりが、共に祈ってもらうと起き上がって歩くのを、私は見ました。死にかけていると思われていた人々の中には、信仰による祈りがささげられた後、簡易寝台の端を跳び越えた人もいます。その人々は、跳びはねたり歩いたり叫んだりしながら天幕じゅうを回りました。目ざましい例を一つ二つ挙げましょう。

「ここダラスに、胃癌と肺結核の二重の病で死にかけている女がいました。生きた骸骨のようになり、この町の一流の医者たちみなに見放されていました。彼女は簡易寝台で集会に運ばれて来ましたが、エター姉妹が自分のところに回って来る前に死ぬだろう、と思っていました。共に祈ってもらうと、彼女はたちまち両方の病をいやされ、簡易寝台から起き上がって、叫び、主をほめたたえました。彼女は毎晩集会に来て、証しをしています。まだたいへんやせていますが、病は根を絶たれ、日ごとに回復しています。

「数百マイル離れたテキサス州ボーモントから、てんかん性の精神病を患う少年が連れて来られ、たちまちいやされました。数日後、その町の実業家がダラスの集会に来て、少年はすっかり健康になっている、と証言しました。

「ダラスの街で新聞を売っている小さな浮浪児が、ふらりと集会に入って来ました。片腕はまひしており、もう片方の腕は、数日前に路面電車から跳び降りて折っていました。ああ、なんと見捨てられ、哀れで、汚れて、寂しげに見えたことでしょう！　みことばには、たとい父母が私たちを捨てても、主が迎えてくださる、とあります。主はまことに、あの小さな子を迎えてくださいました。エ

ター姉妹が少年に手を置いて祈ると、少年はたちまちいやされました。少年は、だれにも言われないのに、まひしていたほうの腕で、折れた腕から添え木と包帯をはぎ取りはじめました。そして両手を天に向かって差し伸べ、高く上げて、叫び、神をほめたたえました。それ以来、ほとんど毎晩、集会で少年を見かけます。少年はあの大群衆の前で証しをし、完全に治った両腕で、神の大いなる力に何ができるかを示しています」

また、一九一二年九月七日付けの『ダラス・デイリー・タイムズ・ヘラルド』紙から、次の切り抜きを載せる。

「ダラスとテキサス全土と、ほかの多くの州の何百人もの人々が、この集会ですでにあらゆる病と苦しみをいやされた。『信仰による祈』への答えとして、神の力によっていやされたのである（ヤコブ五・一五）。千マイル以上の道のりを連れて来られ、驚くべきしかたで救われ、いやされた人も多い。足の不自由な人、目の見えない人、耳が聞こえず口のきけない多くの人、中風の人、まひした人、肺病の人がいる。癌、腫瘍、瘻孔、ペラグラ、手術の後に苦しむ人、てんかんの多くの人、長年寝たきりだった人もいる。その人々が、魂と体のいやしのゆえに神をほめたたえている。

「月曜日の夜に大会衆が目にした光景は、おそらくこれまでになかったものである。耳が聞こえず口のきけない三人が、二十分ほども抱き合い、口づけし、泣き、叫び、神をほめたたえた。五十四歳と三十四歳と十七歳の、互いに見知らぬ者どうしである。神が三人の耳をみなお開きになり、声をお与えになり、魂を救ってくださったからである。罪人たちはそれを見て泣き、祭壇の前へ進み出る。日曜日には、神が人を打ち倒す力をもって来られた。二十一人が、サウロのように神の力によって打ち倒され、一時間から十一時間のあいだ横たわっていた。その人々は天国とイエスのすばらしい幻を見た。そしてみな顔を輝かせ、神の愛に満たされて起き上がった。『主に打ち倒される者は多かった』ので、天幕は戦場のようだった（イザヤ六六・一六）。この力は一週間ずっと続き、天幕から数マイル離れた自分の家で打ち倒された罪人たちもいる。ダラスの何百人もの人々が、ペンテコステの日のように聖霊に満たされた。今この時、神がこれほど驚くべきしかたで力を現しておられる所は、世界のほかのどこにも、おそらくないだろう」

いやされた、耳が聞こえず口のきけなかった人のひとり、クレイ・E・マーティン夫人は、次のような証しを書いている。

（ここには、マーティン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

イングランドの編集者からの手紙

（ここには、イングランドの編集者スタンリー・H・フロッドシャムの手紙が載っているが、著作権が残っているため訳していない）

注　フロッドシャム兄弟は、イングランドのボーンマスから来た編集者で、ダラスの集会を訪れていた（著者）。

第三十章　テキサス州ダラスでのしるしと不思議（その二）

ダラスの集会のさらに詳しい報告

テキサス州ダラスにおける神の大いなる力

（カリフォルニア州オークランド、『トライアンフス・オブ・フェイス』誌編集者、キャリー・ジャッド・モンゴメリー）

夫と私は、テキサス州ダラスを発とうとしているところである。この町の大きな幕屋（天幕に代わって最近建てられた）で開かれている集会で、たいへん興味深い時を過ごした。エター夫人はそこで五か月のあいだ集会を開いてきた。年の初めまでとどまり、それからテキサス州サンアントニオへ行って、一連の集会を開く。

エター夫人は、私たちの古くからの友人である。私たちが初めて夫人と知り合ったとき、夫人は太平洋岸で、たいへん目ざましいリバイバルの働きのさなかにあった。そこでは何千人もが救われ、多くの人がいやされた。私たちと夫人は、長い年月を経て再会し、喜び合った。夫人は私たちを心から温かく迎え、壇の上の自分の隣に席を用意してくれた。

私たちはこれまでにも、このダラスの集会の報告を誌上に載せてきた。それが信頼できる報告であることもわかっていた。しかし、自分たちで集会に出て、神の大いなる力を目の当たりにしたのは喜びだった。その力は、罪人に罪を示して回心させ、病んだ体をいやし、聖徒に聖霊のバプテスマを授けていた。私たちは数日しかとどまれなかったが、そのあいだに、決して忘れられないものを数多く見た。土曜日の夕方に幕屋に入ると、前のほうに喜び合う人々の群れが見えた。あとで聞くと、耳が聞こえず口のきけない六十歳ほどの男が、ちょうど救われ、たちまちいやされたところだった。エター夫人が信仰によって命じ、耳が聞こえず口のきけない悪霊どもにイエスの名によって去れと言うと、神の力によってそうなったのである。耳が聞こえないのをいやされた別の男を、人々が教えてくれた。彼は目を閉じたまま、ほかの人々と声を合わせて賛美歌を歌っていたので、どれほどよく聞こえているかは明らかだった。まったく耳の聞こえなかったある婦人にも会った。祈りがささげられた後、死んだようだった耳に生気が戻りはじめ、近くの大きな音が聞こえるようになっていた。たちまちいやされる人もいれば、少しずつよくなる人もいる。しかしエター夫人はこう考えている。夫人がその人々のために『信仰による祈』（ヤコブ五・一五）をささげたとき、その人々が素直に受け入れていたとする。その場合、あとは信仰によって持ちこたえ、神のみことばを根拠に神をほめたたえ続けさえすればよい。そうすれば症状は必ず消えていく。実際、日々あまりに多くのいやしがあるので、とりわけ目ざましいものだけが人の目を引くのである。

エター夫人がいちばん心にかけているのは、人々が魂において「神との関係を正しくする」ことである。そのうえで夫人は、あなたがたはいやされる、と告げる。霊のいやしよりも体のいやしを求めて夫人のもとに来る人々には、魂が神と正しい関係に入るまで、体のいやしのために祈ることを断る。これは疑いなく、夫人の働きが実を結んでいる大きな理由の一つである。もう一つの理由は、キリストのからだのすべての肢体を一つにするために働くべきだと、夫人が信じていることである。だから夫人はただの理論を説かず、生きておられるキリストを高く掲げる。そして、キリストに対して心と志の正直な人をみな受け入れる。たとえその人々が、夫人の教えるとおりにはまだ真理を見ていなくてもである。また夫人は、特定の言葉や言い回しを強調することを避けている。敵はそれを使って、キリストのからだに分裂を起こそうとしているからである。それでこの集会には、争いや不和がなく、愛と一致がある。

エター夫人が、あがないの中にいやしがあると教えていることは興味深い（何年も前に、私たちが聖霊ご自身から教えられたのと同じである）。また夫人は、

すべての聖徒に、神からさらに力をいただくよう求め進むことを勧めている。信じる者がイエスの名によって行う、とイエスが言われた奇跡のわざを、行うための力である。

エター夫人は、はっきりした音で語る人である。病と悪霊を、これほど天から授かった権威と力とをもってしかりつける人を、私たちはほかに見たことがない。この「残酷な悪霊ども」が去れと命じられるのを聞いて、私たちの心には霊の喜びが新たに押し寄せた。ここで言うまでもないことかもしれないが、人々が神ご自身ではなく、神がお用いになる器に目を向けるなら、いやしは受けられない。その一方で、信仰の目を救い主だけに注いでいる人々は、しばしばいやしを受けている。この集会から送り出される、油を注いだハンカチや小冊子を信仰によって当てることによってである。この方法で病人に手を伸ばすことをあざ笑う雑誌もある。しかし神は、それでも驚くべきしかたでハンカチや小冊子をお用いになっている。神はパウロの手によって異常な力あるわざをなさったが（使徒一九・一一～一二）、今も、神に信頼する人々のために同じことをしておられる。至る所で、神の子供たちのたいへん多くが病んでおり、必要はきわめて差し迫っているからである。不信仰もたいへん大きい。そのため人里離れた所では、苦しむ聖徒たちのために『信仰による祈』（ヤコブ五・一五）をささげてくれる人が、近くに見つからないことがよくある。

エター夫人は、たいへん素朴に、力強く福音を説く。語ることはすべて、神のみことばを引いて裏づける。祭壇での集いは、たいへん目ざましい。聖徒も罪人も、深い真剣さをもって祭壇のまわりに集まり、それぞれの必要を神に求める。神の力がその人々の上に下る。求める人々の魂に光が差しはじめるとき、その顔に表れる変化を見るのはすばらしい。神の力は、しばしばその人々を打ち倒す。小さな子供たちさえ、「力に打たれて」いるのが見られる。神のほかには何も意識していないようで、その小さな顔は御使のように輝いている。

集会には、合衆国の多くの州から来た人々がいた。

私たちが発った夜には、目ざましいいやしが三つあった。甲状腺腫と、癌と、耳の聞こえないのとである。甲状腺腫の婦人は、それによる、のどを締めつけられるような、息の詰まるような感じにひどく苦しんでいた。エター夫人がイエスの名によって、敵に去れと命じた。するとまもなく、婦人が頭を左右に自由に動かすのが見えた。腫れはすっかりとは言わないまでも、ほとんど引いたようだった。癌の男の痛みと腫れも、数分のうちに取り去られた。

聞くところによると、三百五十人ほどが、新しい言葉を語るしるしを伴うペンテコステのバプテスマを受けたという。

集会にはたいてい深いおごそかさがあり、人々の顔はたいへん真剣である。祭壇での集いでは、多くの人が一度に賛美したり祈ったりしていることがよくある。しかしそれを除けば、集会はたいへん静かに進められる。燃え広がる野火のような熱狂や狂信に向かう傾きは、すべてきっぱりと退けられている。

この集会がおごそかなのは、おそらく、主が花嫁を迎えに間もなく来られることがたえず教えられ、備えをするようにと勧められているからだろう。H・C・ミアーズ牧師という愛する兄弟は、四十年以上福音を説いてきた人である。彼はこの働きと戦うために来たが、これが神から出たものだと確信するようになった。そして異言のしるしを伴う聖霊のバプテスマを受けた。その後、神は彼に、天国と、主がご自分の民のために備えておられるものについて、最もすばらしい幻を与えてくださった。また主の来臨の幻も与えてくださった。この愛する兄弟に与えられた、主の来臨についての啓示を聞くと、大いに奮い立たされる。彼の心はたいへん愛に満ち、柔和なので、主イエスがナタナエルについて言われた言葉を思い起こさせる。『見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない』（ヨハネ一・四七）。

約束を自分のものとする

『わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう』（ルカ一〇・一九）。

最近の集会でのことである。祈りの必要な人はみな祭壇の前に出るように、という招きがなされたすぐ後だった。エター姉妹は祭壇のまわりで多くの人のために祈っていた。神は驚くべきしかたで、その人々をみないやしてくださった。姉

妹がひとりの婦人のために祈っていると、姉妹の手から五センチほどの所に、さそりが一匹いた。

姉妹はそれに気づき、払いのけようとして、刺された。痛みは全身を走り、心臓にまで届くように思われた。指は赤くなった。主は姉妹に、これは命取りになる毒のある刺し傷で、主のほかには何も姉妹を助けられない、と示された。ひとりの兄弟がさそりを殺した。何人かの聖徒がそれを見て、すぐに祈りはじめた。姉妹は、私たちにへびに打ち勝つ権威が与えられるという約束を、自分のものとした。すると恐れはすべて去った。

人々は、姉妹がいやしてくれるのを待っていた。姉妹は主と主の約束にすがりついた。すると痛みが治まりはじめ、姉妹はそのまま病人のために祈り続けた。刺された跡のほかには、何も残らなかった。傷は完全にいやされた。

（ここには、S・B・フィンリー兄弟が集会で見た光や幻についての証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

この八年ホーリネスの説教者をしてきた兄弟が、この集会に来た。彼は三年ほど、この働きと戦ってきた。ついに主は、最終的な決断をしなければならないことを彼に示された。彼は光の中を歩むことに決めた。この集会に来てから、彼と妻と四人の息子と、娘とその夫とが、みな聖霊のバプテスマを受けた。息子のうちのふたりには、しばしば神の力が臨む。その力に打ち倒されているあいだ、ふたりは永遠の世界の栄光に満ちた幻を見る。息子のひとりは、頭の腫れをいやされた。祈ってもらうと、腫れはすっかり引いてなくなり、それからは一度も痛まない。自分たちの家でも、神の力がその人々に臨む。神の御霊が彼らを通して異言で語られ、彼らは幻を見る。

ある女は、何年ものあいだ顔とあごに腫瘍があった。ひどい状態で、ほとんど何も食べられなかった。彼女はまたやって来て、腫瘍はすっかり消え、顔のその側ももう一方の側と同じようにまっすぐになった、と証しをした。

ある男が、医者たちみなに見放され、死ぬために家に帰る途中の妻を連れて来た。妻は口の癌を患っていたが、救われ、いやされた。たちまち腫れはすっかり引き、痛みも去って、口を完全に使えるようになった。彼女は翌日またやって来て、いやされたと証しをした。

ダラスの集会

（ここには、ダラスの牧師F・F・ボズワース長老の報告が載っているが、著作権が残っているため訳していない）

ウッドワース・エター姉妹への賛辞

この十一年、主の働きに携わってきたある福音の牧師が、こう書いている。

私たちは使徒信仰運動の指導者たちのほとんどに会ってきた。しかし、ウッドワース・エター夫人ほど、知恵においても神のことの知識においても深い人には、これまで会ったことがない。

この集会ほど神の力が現されたのを、私たちは見たことがない。夫人の説教は、いつも霊と力との証明による。

イエスのしもべである夫人は、ここで信仰の仲間に御国の堅い食物を与えている。人は座って、それを心ゆくまで味わうことができる。

ある集会で祭壇への招きをしたとき、夫人は何人かの求道者に手を置き、神がその人々に聖霊のバプテスマを授けてくださるよう祈った。そうして祈ってもらった三人が、次々に聖霊の注ぎによって倒れて横たわり、バプテスマを受けた。夫人がある人々のために祈り、手を置くと、聖霊の力がその人々に臨む。そしてその人々は、神の御霊が語らせるままに異言を語る。そのことに人々は気づいている。

夫人は、求道者が何を必要としているかを、すばやく正確に見て取る。そして数分のうちに求道者を助け、御国へ導き入れることができる。ほかのたいていの働き人なら何時間もかかり、それでもおそらく同じ結果は得られないだろう。

私たちは、夫人の集会で救われ、いやされた、さまざまな町の多くの人々に会ってきた。また、利害関係のない、偏りのない証人たちにも会ってきた。その人々は、私たちの結論を裏づけてくれる。夫人は、私たちがこれまでに会っただれよりも、神と、神の御霊の働きとをよく知っている、という結論である。

集会を受け持ち、導く力量と資格について言おう。夫人は三十五年のあいだ、神ご自身の直接の教えと監督と導きのもとで、活発に伝道の働きをしてきた。そ

の点で、筆者と同僚たちが確かめることのできたかぎり、夫人に並ぶ者はいない。

夫人は、ダニエルのように天の父から『大いに愛せられる人』である（ダニエル一〇・一一）。また愛された弟子ヨハネのように、いつもイエスの胸に寄りかかっている。そう信じるのには、十分な根拠がある。

集会のさなかに、ときどき神の御霊がふつうでないしかたで下って来られ、雲のように夫人を包まれる。そのようなとき、夫人の姿は変わり、顔の様が変わる。夫人は数分のあいだ身動きもせずに立ち、天の光が顔に輝き注ぐ。そして、目に見えない主と、御使の大軍と、そのほか幕の内にある霊の事柄とを見る。それらは、ほかの人々には隠されている。大祭司が至聖所に入ったときのように、夫人は会衆を待たせておく。そして霊において戻って来ると、再び会衆に仕える。

そのようなときには、神への恐れと強い罪の自覚が、会衆全体の上にはっきりと臨む。人々は、それが御霊の現れであることを悟らずにはいられないからである。人々はほかのときにもまして、うやうやしくふるまう。神の御霊がこのように目に見えて働かれるのを見て、神が自分たちのただ中におられることを、いっそう生き生きと感じるからである。

伝道者の報告

（ここには、英国の伝道者W・J・モートロックの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第三十章　テキサス州ダラスでのしるしと不思議（その三）

たびたびの危険

『愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試錬を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである』（第一ペテロ四・一二～一三）。

イエスは、人々が理由なしにご自分を憎んだ、と言われた。神のまことの子供たちは、光と力を着せられている。神の永遠の御座から遣わされた、天からの聖霊を着せられているのである。世が私たちを知らないのは、イエスを知らなかったからである。それで悪魔は、イエスとその聖徒たちに対する戦いに、全軍を繰り出す。しかし、私たちのうちにおられるかたは、私たちに敵するすべての者よりも大いなるかたである。主は、たとえ天の全軍を下らせなければならないとしても、私たちのために戦ってくださる。

預言者が主の敵に囲まれたとき、そのしもべはおびえた。主人がきっと殺されると思ったからである。しかし神の預言者は落ち着いていた。預言者は神を仰いで、『主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください』と言った（列王紀下六・一七）。若者の目は開かれた。あたりを見回すと、主の軍勢と、火の馬と火の戦車が見えた。天の軍備のすべてが、神の小さな預言者ひとりを取り囲んで守っていたのである。

人々はパウロに、『この宗派については、いたるところで反対のあることが、わたしたちの耳にもはいっている』と言った（使徒二八・二二）。この終わりの時に、聖霊によって、しるしを伴って宣べ伝えられる福音は、悪魔とその軍勢をかき立てる。彼らは私たちを捕らえようと、落とし穴やわなを仕掛ける。私たちの救い主に対してもそうした。人々が主を丘のがけから突き落として殺そうとしたときである。しかし主は、するりと去って行かれた。悪魔は私を全く憎み、何度も、さまざまなしかたで、私を殺し滅ぼそうとしてきた。私が逃れられたのは、いつもそばにいて見守ってくださる主の、愛に満ちた配慮のおかげにほかならない。主は『恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる』と言われた（イザヤ四一・一〇）。神が私たちと共におられると知ることは、何にもまさることである。

私は、自分のいのちがわら一本ほどの値打ちもないような所に、何度も身を置いてきた。しかし、いつも堅く立っていた。この上ない危険の中にもいた。しかし、聖なる御名をほめたたえ、賛美する。主はいつも、天の軍勢を連れて来てくださった。そして、相手がひとりであれ、わめく暴徒であれ、その上に神への恐れが臨むようにしてくださった。ある者たちは動けなくなった。ある者たちは酔った人のように倒れた。逃げ出す者たちもいて、いのちと自由を失わずに逃れられたことを喜んだ。これらのすべての試練の中で、神は勝利を得られた。主が私と共に、また私たちと共におられ、ご自分の戦いを戦っておられることを、みなが知ったからである。

カリフォルニアでの集会

カリフォルニアは悪のはびこる所で、男も女も法の手を逃れて身を隠す所である。私たちの集会に集まった大群衆の中には、人殺しやあらゆる種類の無法者がいる、と人々は私に言った。彼らは武器を隠し持って群衆の中に紛れ込み、少しでも気に入らないことがあれば、人を殺すか、けんかをしようと身構えていた。兄弟たちは、私が立つ説教壇の後ろに、高い板塀を巡らせた。理由は言わなかったが、私が説教の最中に撃たれるのではないかと恐れていたのである。

救われて聖霊のバプテスマを受けた人々もいた。その友人たちの中にはそれに反対する者がいて、悪魔に自分を支配させた。彼らは手紙を送ってきた。手紙に

は、どくろと交差した骨の絵が描いてあった。短剣が突き刺さって血のしたたる心臓の絵もあった。書いた者たちは、私に期限を切った。それまでに群衆を連れて出て行け、さもなければ天幕を引き倒し、私たちを皆殺しにする、というのである。

しばらくのあいだ、私は震え、どうしてよいかわからなかった。私たちは何週間も、日に三度の集会を開いてきた。私は絶え間ない働きと、集会の責任と、心配とで、すっかり疲れ果てていた。いつ暴徒が来て、なだれ込んで来るかわからなかった。どこかの卑怯者が、夜に忍び込んで来るかもしれなかった。私たちはみな、小さな天幕で寝ていたからである。小さな天幕が六つあったが、身を守るにはあまり役立たなかった。

私は、力と影響力のある兄弟たちを何人か呼んで、手紙を見せた。兄弟たちはこの件を警察の手にゆだね、警察は彼らを見張った。午前二時ごろ、荒れ狂った暴徒が忍び寄り、私たちの天幕を取り囲んだ。私たちを皆殺しにし、天幕を壊すつもりだった。彼らは思いどおりになると思っていた。しかし気がついたときには、警察に取り囲まれていた。

どんな手はずが整えられていたのか、私は知らなかった。しかし、主が守ってくださると固く信じていた。それで助け手たちと私は天幕に戻って床に就き、暴徒が来たときには眠っていた。ああ、嵐のさなかにあっても、私たちは落ち着いて主を賛美することができる。

また別のときには、何かの理由で、酔った警官の何人かが働き手の何人かに腹を立て、私たちみなを憎んだ。あたりは暗く、雨が降っていた。彼らは暴徒を集め、天幕を引き倒して私たちみなに襲いかかろうとした。彼らは仲間の一部を、天幕から少し離れた外に残した。残りの者が中に入り、外にいる者たちに、天幕へなだれ込む合図を送ることになっていた。

どんな手はずが整えられていたのか、私は知らなかった。しかし、安心していた。兄弟たちは、自分たちの手はずを私に知らせなかった。兄弟たちは私を守る用意をしていて、必要なら死ぬ覚悟でいた。

大柄でたくましい警官が大勢、雨がっぱを着て、警棒をその下に隠し、走り込んで来た。ある者は入った所に座り、ある者は散らばった。立っている者たちもいた。私はおびえた。危険の中にいることがわかり、それを感じたからである。彼らはひどく怒った、意地の悪い顔つきで、私たちを八つ裂きにしかねないようだった。

主の御霊が私に臨まれた。私は祭壇の上に上がって立ち、彼らを見つめた。そして、御霊が語らせるままに語りはじめた。祭壇は長く、彼らのいるほうへ下って延びていた。私はその上をゆっくりと歩きはじめ、御霊が語らせるままに、力をもって語った。聖霊が、私のからだ全体を、腕も手も足も支配しておられた。彼らは、神の恐るべき臨在が自分たちのただ中にあるのを見、また感じた。私が自分の力で彼らに挑んだり、彼らの前に立ったり、あのように語りかけたりする勇気はないことを、彼らは知っていた。神への恐れが彼らに臨み、彼らは私を恐れた。私は、自分が巨人になったかのように感じた。もし彼らが私たちのほうへ動いたなら、神は彼らを打って殺されただろう、と信じた。彼らはまひしたかのように立ちつくした。そして、外にいる者たちに合図を送らずに、粛然と出て行った。ああ、私たちの主であり救い主であるイエスによって、勝利を与えてくださった主をほめたたえよ。その後、二度ともめごとはなかった。私たちの神のように救い出してくださるかたは、ほかにない。『わが油そそがれた者たちにさわってはならない、わが預言者たちに害を加えてはならない』（詩篇一〇五・一五）。

反対する者たち

神の箱に手をかけた者たちには、恐ろしいさばきが下ってきた。律法のもとでは、神の箱に触れたり、手をかけたりした者は即座に死んだ。今日、だれかが聖霊による神の働きに故意に手をかけるなら、その男や女には霊の死が臨む。ダビデの妻ミカルが、その戒めである。ミカルは死ぬ日まで子供のない者とされた。ダビデが御霊のうちに神の箱の前で踊っていたのを、ミカルはさげすんだのである。ときには即座の死が臨む。私たちが集会を開いた多くの所で、こういうことがよく言われるようになった。「まあ、あの男を見ていなさい。あの男がどうなるか、今にわかる」ときには数日のうちに、またしばしば一、二年のうちに、

人々は私に手紙をよこす。このように罪を犯した者たちの身に起こった、恐ろしいさばきを知らせてくるのである。こうしたことを知って心に留めた人々は、それによってしばしば神への恐れを抱いた。

ウザとミカルに対する神の扱いを戒めとしなかった編集者や説教者の多くが、恥のうちに落ちぶれた。大きな会衆と高い俸給を持っていた多くの者が、何かの罪のために、恥のうちに去らなければならなかった。あるいは会衆がばらばらになり、人々が彼のもとを去った。多くの編集者が身を滅ぼし、苦境に陥り、酒におぼれ、正気を失い、あるいは自殺した。罪の誘惑が来ることは避けられない。しかし、それをきたらせる者は、わざわいである（ルカ一七・一）。

ある集会のさなかに、ひとりの男が群衆に囲まれて、神のみわざをあざけり、私と神の力について恐ろしいことを言っていた。すると突然、男は地に倒れ、まひに打たれて身動きのできない者となった。顔はゆがみ、舌は突き出て、目はぐるぐる回っていた。男は死ぬまでその状態だった。そして、間もなく死んだ。

男を見た人々はみな、それが神のすみやかなさばきであることを知って、神への恐れに打たれた。

『あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共におる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない』（イザヤ四三・二）。

カンザスでの集会

私たちは、カンザス州で何度か集会を開いた。オクラホマとの州境に近い大草原の、小さな町から少し離れた所である。主の力が旋風のように下った。男も女も、自分の家で、また集会の中やまわりのほかの所で倒れた。金持ちや最も立派な人々の多くが、周辺の農夫たちも含めて回心した。町には教会の大学があり、その教会員の何人かは罪を責められて腹を立てた。

集会に来ていたひとりの婦人が、ある日曜日にメソジストの教会へ行き、聖霊の力に打たれて倒れ伏した。人々は、その力の下から彼女を引き出そうとした。冷たい水を浴びせ、引き出すためにできるかぎりのことをした。

彼女が少しさめると、人々は、私たちの集会に行ったことで彼女を責め立てた。すると彼女はまた力の下に入った。そうして一日じゅう、夜通しそのままだった。人々は罪を示されて激しく怒り、私を殺しかねなかった。彼らは役人たちを呼び集め、私が何かで法を犯していないか調べさせた。私を捕らえる落ち度を見つけようとしたのである。それから、私を逮捕させようと、保安官とほかの者たちを私の下宿先へよこした。しかし私は、法によればあなたがたにはそれはできない、と言った。そして、主の御名によって私は行かない、あなたがたは私を連れて行くことはできない、と言った。彼らは悪態をつきながら去って行き、いつか必ず捕まえてやる、と言った。また、私が娘の家に一緒に来て、私がかけた魔法から娘を解かなければならない、とも言った。娘は気が狂っている、娘の父親が私を殺すだろう、と言うのである。

私は彼らに言った。そっとしておけば、娘さんはじきにさめる。私には娘さんを傷つける力も、あの力の下から引き出す力もない、と。彼らはまた、カウボーイたちのあいだでも動き回り、私が人々を狂わせていると言って、カウボーイたちを怒らせていた。私たちは彼らの脅しを耳にし、彼らが暴徒を集めていることを知った。しかし私たちには、行く所がなかった。私は人々に、主の御名によって私と共に立ってほしい、と言った。私たちの神が私たちのために戦ってくださる、と私は言った。神がなんらかのしかたで御手を伸ばされ、彼らの上に神への恐れを臨ませてくださることを信頼しよう、と。集会に来ていた人々は、必要なら死ぬ、しかし決して逃げも降参もしない、と言った。私たちの唯一の望みは神にあると、私たちは知っていた。私の敵となった者たちは、私を殺すか、捕らえて連れて行くつもりでいた。兄弟たちは、彼らのねらいが私であることを知っていた。兄弟たちは話し合い、椅子でも何でも手に入るもので戦ってでも、私を守ろうと決めた。

彼らは、私たちが思ったとおりにやって来た。私たちがみなおびえて震えている、と彼らは聞かされていた。彼らが馬に乗って道をやって来ながら、ピストルを撃ち鳴らし、叫ぶ声が聞こえた。彼らは粗末な服を着て、大きな帽子をかぶっていた。私は「勇気を出しなさい」と言った。私たちは歌いはじめた。彼らはやって来て、天幕を取り囲んだ。それから何人かずつ集まっては、今にも私たち

のところへなだれ込もうとするかのように荒れ狂った。私たちは歌い、祈った。愛する人々は、私を自分たちの真ん中に置き、できるかぎり私を隠して守ろうとした。私が語りはじめると、主の力が驚くべきしかたで私の上にあるのを、彼らは見た。私は御霊のうちにあり、恐れはすっかり消えていた。私は小さな子供たちに話すように彼らに語った。すると彼らは落ち着きはじめ、静けさが彼らの上に広がっていった。

彼らは私たちを取り囲んでいて、私たちは逃げることも、外に出ることもできなかった。左手に、その日私を逮捕しに来た男が、ほかに二、三人を連れているのが見えた。主は私を壇の上に導き出され、その男たちのすぐ前まで行かせてくださった。私は彼らに手を差し伸べ、ほほえんだ。頭の男が「今日、あんたに会ったな」と言った。私は「ええ、会いましたね。ここでお会いできてうれしいです」と言った。本当にうれしかった。恐れはすっかり消え、勝利を得たことがわかったからである。私は続けて言った。「集会をとても気に入って、またいらしてくださるといいのですが」神の御手が彼らの上になかったなら、彼らは私をナイフで刺し貫くことも、引きずって行くこともできただろう。彼らは動けなかった。私はほかの何人かとも握手をした。それから説教壇に戻って、語り、泣いた。

娘の父親に率いられた一団がいるのが見えた。大きな帽子を顔の上まで引き下げ、群衆が帰るのを待っていた。彼らは「一緒に来て、娘をあの魔法から解いてもらおう」と言った。私は答える前に、しばらくイエスを仰いだ。神の力が私の上にあるのを感じた。私はまっすぐ父親の前まで進み出て、手を差し伸べ、ごく優しく話しかけた。父親は驚いた。彼はじっと立って私を見つめ、ほかの者たちは私たちを見守っていた。彼は震えはじめた。神の力が彼らの上に臨み、獅子はおとなしくなった。私は彼に、娘さんにつらく当たって、集会に来たことや力の下にあることで、ひどい仕打ちをしたのではありませんか、と尋ねた。彼は、した、と言った。「娘さんはあなたに話をして、もっと良い人になってほしいと願ったのではありませんか」彼は「ああ、そうだった」と言った。「それであなたがひどい仕打ちをしたので、娘さんはまた神の力の下に入ったのですね」そのたびに彼は「そうだ」と言った。私は言った。「娘さんがああなったままなのは、あなたのせいだとわかりませんか。家に帰って、娘さんの言うことに耳を傾ければ、じきに元どおりになるとは思いませんか」彼は泣き崩れて言った。「娘が正しいのはわかっている。娘の言うことを聞いてやるべきなんだ。娘はまともだ。あんたもだ」「それなら、すぐ家に帰って、主に仕えてよいと娘さんに言ってあげなさい」

みなが握手をした。私は会衆に、これでみなほっと息をつける、これからは私たちはみな主にあっていっそう強くなる、と示した。主は確かに私たちのために戦ってくださった。その後もめごとはなく、集会は大きな成功のうちに続いた。どんな必要のときにも、驚くべき臨在と力を現してくださる神をほめたたえよ。

ほかの所でも、私は大きな危険の中にいた。説教壇で、あるいは集会への行き帰りに、いつ撃ち倒されるかわからないことが何度もあった。あとをつけられたり、立ち聞きされたりしたことも何度もあった。悪い男たちの一団が、人を殺そうと、あるいは集会をめちゃくちゃにしようと入って来ることもよくあった。その顔つきや姿だけで、人を震え上がらせるのに十分だった。しかし私は、決して逃げも妥協もしない、と言った。主はいつも、ご自分の大いなる力を私の上に置いてくださった。そうして恐れをすっかり取り去ってくださり、私を巨人のようにしてくださった。主はいつも、あらゆる面で私のそばに立ってくださった。もし彼らがなんらかのしかたで私を撃とうとしたり、殺そうとしたりしたなら、主は彼らを打って殺されただろう。私はときどき、彼らにそう言った。

主の力が私の上にあった。イエスは、縄で作った小さなむちで、宮から力ある男たち、両替人たちを追い出されたことがある。そのときイエスの上にあった力に、それはどこか似ていた。彼らを恐れさせるものは、神の恐るべき臨在のほかに何もなかった。神への恐れが、いつも彼らを立ち去らせた。今日も同じである。ときには、彼らは死人のように倒れる。こうした者たちが群衆の中にいるとき、主はいつもそれを私に指し示され、私たちの危険を示してくださった。

愛する読者よ、私たちは今、暗い日々の中にいる。この文を読む多くの人が、大きな危険と迫害と、またつらい試練を通らなければならないだろう。しかし、神に忠実であっていただきたい。みことばのために立ち、御名をあがめ、その栄光を現していただきたい。そうすれば、神が守り、救い出してくださる。

私たちは、イエスが来られるまで生きているという信仰を持つことができる。神が私たちをあらゆる危険から、敵のあらゆる矢から、疫病から守ってくださり、どんな災いも近づくことはない。その約束を自分のものとしようではないか。詩篇第九十一篇にある約束は、この終わりの時に生きる、神のまことの子供たちすべてのためのものである。ああ、世々限りなく生きておられるかたの御名に栄光あれ。そのかたは、ご自分の子供たちをすべての悩みから救い出すことがおできになる。それなら、悩みが来たとき、なぜ恐れるのか。来たるべきわが家にふさわしく私たちが全うされるためには、試練がなければならない。

なされた預言と、その成就

カリフォルニアで集会を開いていたとき、主は私に、大きな破壊と地震が来ることを示された。

間もなく新聞は、サンフランシスコとその周辺の地方を襲った恐ろしい地震と大火の写真で埋めつくされた。神はいつもさばきの前にあわれみを送られる、と私は人々に話していた。あなたがたはあわれみを拒んだ、だから次には破壊とさばきが臨む、と私は話していた。地震はほどなく起こり、その預言を覚えていた人々に神への恐れが臨んだ。どちらの預言も一週間のうちに成就し、私は生きて、その廃墟の上を歩いた。

聖霊のバプテスマを受け、骨折した脚をいやされたひとりの婦人は、恐ろしい嵐が来るのを見て、人々に告げた。その預言は、来ると言った日からちょうど二週間後に成就した。

ケンタッキー州ルイヴィルで集会を開いていたとき、主は大いなるあわれみと力とをもって、その町を訪れておられた。しかし多くの人が御霊を拒み、心をかたくなにしてしまった。主はそこにいたひとりの姉妹に、嵐が来ることを示された。嵐はその後間もなく町を襲い、建物などに大きな損害を与え、多くのいのちが失われた。

この同じ姉妹は、汽船タイタニック号の遭難を見た。沈む十日以上も前に、何百もの魂を乗せた船が沈んでいくのを見たのである。姉妹は、船が沈んで見えなくなるのを見た。人々がまず救命ボートを下ろし、乗客がボートに降りるのを手伝っているのを見た。男たちが、救命ボートに隠れていたひとりの男を引きずり出して殺し、海に投げ込むのを見た。姉妹はその恐ろしい惨事を見てひどく取り乱し、夫はその叫び声におびえた。それほどありありと、姉妹はその惨事を見たのである。

光の中を歩む

ダビデの町で、神の祝福あれ
見よ、みどりごが泣いた
それは世のあがない主
救いが近づいたのだ
（おりかえし）
光の中を、光の中を
私たちは主の光の中を歩む

王なるイエスは天から来られた
失われた罪人をあがなうために
御霊が私のあかしをしてくださる
私はいやしの流れに身を沈めた

主は私に力のバプテスマを
聖霊のバプテスマを授けてくださった
使徒たちに授けられたように
ペンテコステの日に

わが魂は栄光に満ち
主よ、私は叫ばずにはいられない
イエスのきよめの血が
悪魔を追い出した

罪人よ、あなたの魂は闇
あなたの心は罪で黒い

血の流れる御手で
イエスは戸をたたかれる、ああ、主をお入れせよ
　主を受け入れたその瞬間
あなたの闇は光となる

主はあなたの心を整えて、歌わせてくださる
光の中を歩むために

第三十一章　主の来臨の幻

一九〇四年三月二十四日、祭壇の前にいた最後のひとりのいやしのために祈っていたとき、私は神の力の働きに打たれて倒れた。そのとき私は、十字架にかかっておられる救い主と、そのもとへ来る罪人たちを見た。天国の真珠の門まで渡って続く階段が見えた。泉に飛び込んだ者はみな、すぐにその階段の上に置かれた。ひとりひとりが光を携えていて、その光は上へ行くほど明るくなった。その人々の衣には、しみ一つなかった。私は、その人々が世の光であること、そのともしびは天国でともされたことを悟らされた。その人々は魂のうちにキリストを持っていた。ひとりひとりに神の御使の護衛が付いていて、上への旅を守っていた。階段の頂には真珠の門があり、天の軍勢が地上の旅人たちを迎えようと待っていた。

また私は、世が大きな闇の中にあり、聖徒がごくわずかしかいないことを見た。『招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない』（マタイ二二・一四）。つまり、受け入れる者は少ない。多くの人が罪を示されていたが、水のバプテスマや堅信礼や、教会員であることに頼っていた。しかし神からの光を携えていないなら、その人々は公然の罪人よりも悪い。

ほんのわずかの人を除いて、全世界は大きな闇の中に横たわっている。私は、キリストが間もなく来られることに備えて、天でも地でも準備が進められているのを見た。天は騒然としているようだった。主はご自分の軍勢を整えられ、馬と戦車を用意しておられた。天の軍勢は動きはじめ、門は開かれていた。ひとりの御使が、大きなラッパを吹きながら門から出て来た。救い主は天のすべての栄光を帯びて先頭に立たれ、大声で聖徒たちに叫んでおられた。その声は死者を目覚めさせた。

主は私に示された。主はご自分の聖徒たちをさばかれ、麦と毒麦とをより分けておられる。信仰の仲間は、神の定められたこの時に、自分の分の食物を受けている。御使は、花嫁に連なる最後の者たちに、生ける神の印を押していた。その人々は小さな群れで、最後のひとりもじきに印を押される。そのとき主は栄光の雲のうちに来られ、ご自分の花嫁を婚礼の祝宴、すなわち晩餐に連れて行かれる。

この幻を読むすべての人が、神に助けられて警告を受け、悔い改めるように。神のさばきが迫っているからである。

もう一つの驚くべき幻

一八九四年三月、オハイオ州フォストリアでリバイバルの集会を開いていたとき、私は床の中で神の幻を見た。私は昼の集会に出ていて、説教壇のそばに立っているようだった。会衆の中のある男が、大声で言った。「ウッドワース姉妹、戸の上の手をごらんなさい」私がそちらを見ると、玄関の間から入る戸のすぐ上に、大きな手と手首と腕の一部が見えた。手首は十センチほどあらわになっていた。柔らかく流れるような袖が、二十センチほど垂れ下がっていた。袖は白く、いかにも柔らかそうだった。指はみな少し曲がっていたが、小指と人差し指だけは、それぞれの向きに伸びていた。その手と腕は美しかった。袖も何もかも、白く輝いていた。手と腕はあちこちに動き、会衆全体を何度も何度も指し示した。それから人差し指で私を指し、手と指を振った。私を手招きするように、来なさいと呼ぶようにである。手はなおも人々の上を動き、それから指し示した。だれの目にも、その驚くべき手が見えた。私は大声で叫んだ。「ああ、あれは神の御手だ」

会堂の同じ側に、とても大きな窓があった。欄間の窓が開いていて、前の手とそっくりの手がそこから入って来た。そして前の手とまったく同じように動き、人々に警告し、人々に私を指し示した。二つの美しい手は会堂じゅうを指し、それから私を指した。私は何度も叫んだ。「ああ、あれは神の御手だ」二つの手は同時に去って行った。

会衆は身動きできないようだった。それから私は言った。「ああ、これは神の御手だと思う。人々にとって、とくに私にとって、何かすばらしいことを意味している」ちょうどそのとき、同じ窓の欄間を通して、天まで続く、幅六メートル以上の道が見えた。道は天から下まで届いていて、星と光に満ちていた。見ていると、片方の手と、柔らかく流れる袖をまとった腕のほとんどが天から出て来て、輝く道を下って来た。それから手は窓のほうへ来て、止まらずに欄間を通り抜け、会衆の上を越えて来た。人差し指と腕は私を指していた。その指が私の額に触れた。小指か親指か、あるいはその両方が、私の顔に触れた。手と腕が私の上で揺れ動いた。私は、永遠の腕と柔らかな袖が私を包むのを感じた。そのときには、だれもがそれを見た。手はまっすぐ会衆を横切って窓から出て行き、止まらずに天へ昇って行った。私は大声で叫んだ。「神の御手だ。あれは永遠の腕だった」私は言った。「神は驚くべきしかたで、私にご自分を現そうとしておられる。神の指で、私の思いにご自分の律法を書き記そうとしておられる。もしかすると、間もなく私を天の家に連れて行かれるのかもしれない」そう言ったのは、悪魔も来て、私が死ぬのだと信じさせようとしたからである。しかし私は「いいえ」と言った。

主は私に示された。この幻は、キリストが間もなく来られることにかかわるものである。警告と、人々の上を指し、それから人々に私と天とを指し示した手は、神が人々を私のもとへ引き寄せておられることだった。人々が、私たちの主が速やかに来られることについて光を得、主を迎える備えをするためである。それはほんの数年先のことだという。私は生涯と働きの中で、いくつかの変化を通る。それは私の益となり、神の栄光となる、という。この幻はキリストの幻ではなく、とこしえに住まわれる神、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの父の幻だった。人格をもった神として、神の大いなる父性と愛が、これまでになく私に現された。神は、イエス・キリストと同じように人格をもっておられる。イエスは『わたしは父の本質の真の姿である』と言われた（ヘブル一・三）。神は霊のかたちをもっておられる。ただ神だけが不死を保っておられた。しかし神は、十字架の死に至るまでのキリストの従順によって、いのちと不死とを明らかに示された。

私の額に触れたのは、神の腕と神の指だった。神は私に示された。神の知恵と、栄光に満ちた代々の計画の知識とをもって私に印を押してくださり、それを私に現してくださる、と。それは、この刈入れの終わりのこと、花嫁の召しと備えのこと、花婿であるキリストが間もなく来られることである。また、異邦人の門がじきに閉ざされること、そして花嫁が携え上げられた後、すなわち昇天した後に来る大きな悩みの時のことである。

残された者はみな、この大いなる日、大いなる悩みの時の中に沈み、あるいはそれを通らなければならない。それは御使ガブリエルがダニエルに告げた時で、かつてなく、また二度とないほどの時である。その恐ろしい時の終わりに、全能の神が地の軍勢と大いなる戦いをされ、全世界はわなにかかる。そのとき主は聖徒たちと共に戻って来られ、栄光に満ちた千年王国を建てられる。それは千年続き、キリストが花嫁と共に諸国民をさばかれる。

その幻の中で、主は私に、この働きへの特別な召しを与えられた。それは、信仰の仲間に時に応じて食物を与えることである。異邦人の罪人たちに、最後の招き、小羊の婚宴への最後の招きを与えることである。小羊の妻はもうすぐ婚姻の関係に入ろうとしており、戸は閉ざされて、二度と開かれないからである。また、召された者たちが堅く立ち、忠実で真実であるようにすることである。そうしてその人々が聖霊と力とを注がれるためである。また、主の来臨と、千年の統治のあいだの自分たちの大きな働きについて、正しい知識の印を押されるためである。その千年のあいだ、聖徒たちは世と御使をさばき、地のすべてのやからは祝福される。

主は私に示された。主はみことばによって、これらのことを私に悟らせてくださり、現してくださる。御霊によって、それを私の額に、すなわち思いと心に書き記してくださる。主は親指と指で私の口に触れられた。私の口に言葉を授けてくださり、これらのことを示してくださるそばから、それを説き明かす知恵を与えてくださることを示されたのである。それは、私たちがこれらのことを知らなければならない、主の定められた時であった。そして今もそうである。主は愛の腕を私に回された。愛に満ちた配慮と守りとを示されたのである。主は、この働

きのために私のいのちを新たに延ばしてくださった。そのいのちは、人々に警告し、花嫁を整えるという、この備えの働きにささげられるはずのものだった。

私は何度か死の間近まで行った。しかし、あの驚くべき幻の記憶が、私に新しいいのちを吹き込んできた。この年月のあいだずっと、私は驚くほど悟らされてきた。私はこれらのことを日ごとによく理解している。神が私をお導きになり、みことばにより、御霊によって、麦と毒麦とをより分けさせてくださるからである。白い衣をまとい、力を着た偉大な刈り手キリストが、この大いなる刈入れの働きの中で私と共におられる。主は日ごとに光を与えてくださる。時はまことに短い。主はこの方面で多くのことを示しておられる。私は今ほど、ほむべき愛の父を愛したことはない。神のご計画がこれほど大きく栄光に満ちたものだとは、思いもよらなかった。ああ、とこしえに御名をほめたたえよ。

主はこの幻の中で、その後の四年間に私が通る多くの浮き沈みと変化を示された。それらの啓示は成就したし、今も成就しつつある。

一九一六年の注

主がこの幻を私に与えられてから、十五年になる。注意して読んで、そこに神の御手が見えないかどうか確かめていただきたい。そして、神がこの幻を与えられたことを知っていただきたい。主がどのように私に勇気を与えてくださり、預言させてくださったかを見ていただきたい。主が私をお用いになって、もう一冊の本を書かせてくださり、それを速やかに送り出させてくださる、という預言である。四か月のうちに、私たちは六冊目の本として、『聖霊の行伝』という新しい本を一万部世に出した。

この本は、ほとんど全世界に行き渡った。その一部はいくつもの言葉に訳された。主は、あらゆる期待をはるかに超えてこの本を祝福してくださった。この本によって、あらゆる階層の人々が悟らされ、罪を示され、奮い立たされて、さらに神を求めるようになった。世界のあらゆる所から、魂とからだの両方の助けを求める手紙が届く。祈ってほしいと、何千枚ものハンカチが送られてくる。神はかつて、パウロの手によって異常な力あるわざをなされた。人々はハンカチや前掛けを送り、それはパウロの身から病人のもとへ運ばれた。悪霊は追い出され、人々はいやされた。それと同じように、神は今日も働いておられる。海の向こうから、また大西洋岸から太平洋岸まで、手紙が届く。その手紙は叫んでいる。

「神に栄光あれ。私はいやされ、神に満たされました」

私たちが祈っているあいだに、人々がいやされることもよくある。また、手紙を読んでいるあいだに神の力がその人々に臨み、ハンカチを当てると、たちどころにいやされることもよくある。回心することもたいへん多い。聖霊のバプテスマを受けた人々もいる。同時に、最も重い病気の人々の多くと、足の最も不自由な人々が、完全ないやしのゆえに躍り上がって神を賛美するようになる。

この二年半のあいだに、私は二万二千マイル以上を旅した。今は五月である。私は二十七の州と、首都ワシントンから一つ、カナダから二つの招きを受けた。一か月以上の大会や野営集会を開いてほしいというのである。それらの州の小さな所からも、多くの招きを受けた。

いろいろな集会の記録を注意して読み、神のなされた驚くべきみわざを見ていただきたい。そうすれば、神がこの幻を与えられたこと、幻と預言が実現したことを認めないわけにはいかないだろう。そうであれば、神のこの大いなる驚くべきみわざをどのように受けとめるか、よくよく気をつけていただきたい。神は、どんな人間も誇ることがないように、最も弱い者のひとりを選ばれて、強い者をはずかしめられたからである。

神はたえず、ご自分の子供たちに御国の奥義を現しておられる。それは『知恵のある者や賢い者』には隠されている（マタイ一一・二五）。

「神の子供たちは超自然の啓示を受け、幻を見る。そうでなければ、聖書は神の言葉ではありえない。聖書は、幻から生まれ、幻を記録したものでもあるからである」

幻を見たと言う人は、ただそう思い込んだだけだと思う、と言った人がいる。もしそうなら、十字架の後、マリヤはキリストを見たのではなく、ただ思い込んだだけになる。ふたりの御使を見たときも、そう思い込んだだけになる。イエスがマリヤに現れたときも、やはりそう思い込んだだけになる。もしそうなら、イエスを見たと証しした使徒たちも、見たと思い込んだだけになる。その後、イエ

スが五百人の兄弟たちに、全員に同時に現れたときも、その五百人もただ思い込んだだけになる。みながそろって、まったく同じときに思い込んだことになる（第一コリント一五・六）。そして、死人の中からよみがえられたイエスを見た者はみな、ただ思い込んだだけになる。超自然の証しを退けるなら、あなたはいったいどんな根拠で、イエスが死人の中からよみがえられたと信じるのか。霊のことは、御霊によって判断されるのである。

霊の御国に新しく生まれた後、神の子供たちは、奥義である事柄を知る。それはとこしえに秘められ、生まれながらの、新しく生まれていない人の目には隠されている。その人がどれほど賢く、学があり、聡明であっても、どれほど高い鋭さと悟りに達していても、そうである。

ドタンで、エリシャの召使は、町が馬と戦車をもった軍勢に囲まれているのを見た。召使は主人のもとへ来て、『ああ、わが主よ、わたしたちはどうしましょうか』と言った（列王紀下六・一五）。エリシャは、『主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください』と祈った（列王紀下六・一七）。すると見よ、火の馬と火の戦車が山に満ちて、エリシャのまわりにあった。エリシャの召使に見えたのなら、私たちに見えないはずがあろうか。

パウロは宮で幻を見た。ペテロは屋上で幻を見た。黙示録を書いたヨハネも幻を見た。ほかにも多くの人が見た。

キリスト教の初歩的で根本的な教理の一つは、「全能の神の不変性」である。ふつうの言葉で言えば、こう固く信じることである。神は、この時代が続くかぎり、人類に対するご自分の扱いを変えてこられなかったし、これからも変えられることはない。神は全能であり、初代教会の時代から過ぎ去った何世紀ものあいだに、その力を少しも失っておられない。神は今も忠実で真実であって、みことばに定められた条件のもとで、約束されたすべてのことを果たしてくださる。神は、かつて人類に抱いておられた愛を少しも失っておられない。そして同じ事情と条件のもとでは、かつてだれかのためにしてくださったのと同じだけのことを、私たちのためにもしてくださる。

「繰り返して言う。『全能の神の不変性』の教理とその信仰は、キリスト教の根本的な教理の一つである。それは代々、あらゆる教派のキリスト教会によって堅く守られてきた。神が幻のうちにご自分のしもべたちにご自身を現されることを否定する者は、だれであれ、正統なキリスト者であり続けることはできない」

「幻と入神についての説教」を見よ。

ミアーズ長老の幻

（ここには、ダラスの集会に加わったH・C・ミアーズ長老が見た幻の記録が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ダラスの集会の多くの聖徒たちが、幻を見た。栄光の王であるキリストが、王の威厳をもって、天のすべての軍勢を従えて、ご自分の花嫁を迎えに来られる幻である。また、主にあがなわれた者たちが変えられ、携え上げられる幻である。聖徒たちには、あがなわれた者たちが、天の音楽にまじって喜びの叫びをあげながら昇って行くのが見えた。婚宴の栄光に満ちた幻を見た人々もいた。祝宴の整えられた食卓と、そのまわりに集まる聖徒たちの輝きが見えたのである。イエスが白い馬に乗られ、『王の王、主の主』と記された旗を掲げて来られるのも見えた（黙示録一九・一六）。白い馬に乗ったすべての聖徒たちと天の軍勢を従えて、再び地上に戻って来られるのである。それはハルマゲドンの大いなる戦いへ、大いなるエホバの宴へと向かうためである。そこで反キリストとその軍勢は滅ぼされ、キリストは永遠の御国を建てられる。そして聖徒たちは、王また祭司として千年のあいだ治める。

主は、地でも天でも、これから起こることを現しておられる。私たちのすべての集会で、神の火が、分かれた舌のように人々の頭の上に見える。聖徒も罪人も、多くの人が、壇の上やそのまわりに光を見ている。イエスが人々のただ中を歩かれ、また立っておられるのも見えた。

この二年のあいだ、恐ろしい戦争が全世界を揺るがし、美しいヨーロッパの国々をほとんど血と死者で覆った。これらの戦争はみな、ダラスの集会で預言されていた。一年足らず前のことである。ほかにも、実現した多くのことが預言されていた。

主はミアーズ兄弟を大いにお用いになった。ミアーズ兄弟は、私がこの国で間もなく開く多くの大きな集会の幻を見た。大西洋岸から太平洋岸まで、大都市で、山の上で、谷間で、最大の建物で、また大きな天幕で開かれる集会である。ミアーズ兄弟は、群衆が周りに立っているのを見た。人々が何百人とキリストのもとに来るのを見た。主に打ち倒される者たちが、戦場のように横たわるのを見た。また、病人が何十人、何百人といやされているのを見た。

ああ、そんなことはありえないと私は思った。私が旅をして、これほどの苦難と責任に耐えられるはずがない、と。しかし、そのすべてが成就した。ダラスにいたとき以来、私は二万二千マイル以上を旅した。ミアーズ兄弟は、『聖霊の行伝』という本についても預言した。神はこの本を大いに祝福され、この本は速やかに世界のあらゆる所に送られる、と言った。一万部が陸に海に散らばった。そして今、人々の求めと主の導きとによって、私は新しい本を送り出す。それは七冊目の本で、『神のなされたしるしと不思議』と題するものである。

テキサス州ダラスにて記す

ペンテコステの日にペテロが言ったように、まことにこう言うことができる。あなたがたが見、聞き、感じているこのことは、父の約束であり、不思議を行われる聖霊である。

主は大いなる「しるしと不思議」をもって御手を伸ばされ、力ある奇跡を行ってこられた。あらゆる病気をいやされ、悪霊を追い出され、人々を死人のように打ち倒してこられた。多くの集会は戦場のように見えた。罪人たちは罪のうちに打ち倒され、聖徒たちはペテロやパウロのように、死人さながらに横たわった。聖徒たちは、天から大いなる幻と啓示と預言を与えられた。

聖霊は、分かれた舌のように、光の筋のように、また説教壇と祭壇の上を覆う大きな栄光の雲のように見えた。多くの人が、主が天幕の中や祭壇のまわりを歩かれるのを見た。

何千もの人々が奮い立たされ、霊とからだの両方の助けを求めて、私たちに手紙を書いてくる。そのマケドニヤの叫びはこうである。「来てください。来て私たちを助けてください。でなければ、助けを送ってください」

神は、聖徒たちと、伝道の務めにある兄弟たちと、伝道者と働き人たちを、あらゆる所から呼び集められた。その人々はみな足並みをそろえ、私たちのただ中にある一致と愛と神の力とを喜んだ。そして、生ける神の力がもっと、私たちのうちに、私たちを通して、私たちのただ中に必要だと確信して帰って行った。

五か月がたち、私たちはここでの働きを閉じようとしている。初めから高まってきた関心は、今いっそう深まり、神の臨在はこれまでになくはっきりと現れている。

私たちが間もなく去るので、人々はこの機会を生かそうと、あらゆる所からここへ押し寄せている。

カナダから十二人が着いたばかりで、イングランドからもひとり来た。ほかにも、こちらへ向かっている人々がいる。

主はひとりの兄弟に、幻のうちに示された。イエスの誕生のときに歌った御使の群れが、聖徒たちを通して歌っている、と。

主は、ご自分の子供たちにご自分の臨在をますます現しておられる。そしてあらゆるしかたで、私たちを励ましておられる。私たちが備えをし、世から引き離されて、主が間もなく来られるのに備えるためである。

この五か月のあいだ、主は私を驚くほど支えてくださった。主をほめたたえる理由は十分にある。私は集会の中だけでなく、集会の外でも、たいへん激しく働いてきた。

読者に言っておきたい。私の本に書いてあることは、一度も触れられず、記録もされていない多くの集会と驚くべきことに比べれば、大海の一滴のようなものである。

私は主の御名によって本を送り出す。主は私に、急いで本を出さなければならないと示された。主がそれを世界じゅうに送ろうとしておられるからである。本は、聖徒たちを集め、婚宴と将来の大いなる働きに備えさせるのに用いられるだけではない。残されて患難の時を通る人々にとっても、大きな助けとなる。

これを読むすべての聖徒たちに祈っていただきたい。私がたえず主の御心のうちに保たれ、主の大いなる愛と力に覆われるように。神が私を通して、私を召さ

れた働きを成し遂げられ、すべての栄光をお受けになるように。

ウッドワース・エター夫人

一九一二年十二月十二日

第三十二章　神のいやしについての問答

問　神のいやしとは何か。

答　神のいやしとは、聖霊の直接の力による神の恵みのわざである。それによって肉体は病気や疾患から解き放たれ、健全で健康な状態に戻される。

問　神のいやしが、神の民の得ることのできる祝福として意図されていた、という約束が聖書の中にあるか。

答　ある。そうした約束はたくさんある。イスラエルの民には、特別な契約の約束として与えられている。『あなたが、もしあなたの神、主の声に良く聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプトびとに下した病を一つもあなたに下さないであろう。わたしは主であって、あなたをいやすものである』（出エジプト一五・二六）。『あなたがたの神、主に仕えなければならない。そうすれば、わたしはあなたがたのパンと水を祝し、あなたがたのうちから病を除き去るであろう』（出エジプト二三・二五）。

問　神の民のだれかが実際にこの祝福にあずかったことを、聖書は証明しているか。

答　証明している。この契約の祝福が約束される前から、民のからだの状態は完全だったと書かれている。それは、神が民の健康に特別な関心をもっておられたことをはっきり示している。エジプトを出たとき、民は少なくとも二百五十万人いた。そして『その部族のうちに、ひとりの倒れる者もなかった』のである（詩篇一〇五・三七）。モーセは特別なしかたで、この祝福にあずかった（申命記三四・七）。カレブもそうで、年老いるまで守られ、健康であるという、まれな経験をした（ヨシュア一四・一〇～一一）。ダビデは、いやしの益と祝福を身をもって知っていた（詩篇六・二、三〇・二、一〇三・一～四）。イスラエルが契約の条件どおりに生きたときにはいつも、みながいやしと健康の益にあずかった（詩篇一〇七・二〇、歴代下三〇・二〇）。ヒゼキヤも同じことを身をもって経験した（列王紀下二〇・一～五）。

問　この祝福は、ユダヤ人のほかのだれかにも約束されたことがあるか。

答　ある。それは、あがないの祝福として預言の中で与えられている。そしてキリストによるほかのすべての福音の祝福とともに、ユダヤ人にも異邦人にも差し出されている（ガラテヤ三・二七～二九）。

問　預言は、神のいやしについて何と言っているか。

答　預言の中には、今読む時間がないほど多くのことが語られている。しかし、いくつかの節だけを引いておこう。残りは暇なときに読めばよい。『その時、目しいの目は開かれ、耳しいの耳はあけられる。その時、足なえは、しかのように飛び走り、おしの舌は喜び歌う』（イザヤ三五・五～六）。イエスご自身も、まさにこの預言に触れておられる。そのころ、この預言は日ごとに成就していたのである。『盲人は見え、足なえは歩き、らい病人はきよまり、耳しいは聞え、死人は生きかえり、貧しい人々は福音を聞かされている』（マタイ一一・五～六）。もう一つのたいへんはっきりした預言が、イザヤ書にある。『まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった』（イザヤ五三・四）。この霊感による驚くべき声の成就は、マタイによる福音書にある。『彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた』（マタイ八・一七）。バーンズ、マギー、ヤング、リーサーなど、信頼できるすべての翻訳者と最も優れたヘブル語学者たちが認めている。イザヤ五三・四は、文字どおりに訳せば、マタイ八・一七とまったく一致する、と。したがって、後者は前者を直接さしていることがわかる。そして救いといやしの美しい預言が、次の節にある。『しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲しめをうけて、われわれに平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ』（イザヤ五三・五）。これらの預言はみな、イエ

スのあがないのわざを指している。そのわざの中心は十字架にある。使徒ペテロは、今引いたこの節に、次の言葉で触れている。『わたしたちが罪に死に、義に生きるために、十字架にかかって、わたしたちの罪をご自分の身に負われた。その傷によって、あなたがたは、いやされたのである』（第一ペテロ二・二四）。いやしについて預言がさらに多くを語っていることは、次の箇所を見ればわかる。イザヤ四二・七とイザヤ六一・一の預言は、ルカ四・一八～二一で成就した。マラキ四・二の預言は、マタイ四・一六とルカ一・七八～七九で成就した。これらはみな、あがないにおいて成就している。

問　聖書は神のいやしをあがないの祝福として教えている、とあなたは信じるか。

答　信じる。今引いた預言とその成就の中で、このことがどれほどはっきり示されているか、わからないか。イエスは生涯においても、伝道においても、死と復活においても、あらゆる点で、まさにあがないの計画どおりに働かれた。イエスの言葉とわざは、このあがないの計画を神が言い表されたものである。そして、からだのいやしが魂のいやしと同等に置かれていることが、はっきりとわかる。どちらも同じ根拠、すなわち従順と信仰によって得られる。

問　人は、いやしを受けずに救いを得ることができるか。

答　できる。どちらも信仰によって得られるが、同じ一つの信仰の行いによって両方が得られるとはかぎらない。私たちの信仰がイエスをどのようなかたとして受け取るか、イエスはそのとおりのかたとなってくださる。

問　イエスはすべての人をいやされたか。

答　いやされた。信仰をもってみもとに来た者は、みないやされた。マタイ四・二三～二四とマタイ一二・一五を読みなさい。

問　しかし、その人々には信仰がなかったようではないか。

答　いや、あった。今挙げた箇所を読めば、人々がいやしを求めて「みもとに来た」こと、「ついてきた」ことに気づくだろう。イエスがお育ちになった故郷の町ナザレでは、人々の不信仰のゆえに、大きなわざをすることがおできにならなかった。最も驚くべきいやしのいくつかがなされたカペナウムでは、人々は信じる民だった。キリストと使徒たちの伝道の中で最も目立つ、個々の人のいやしの例が十九ある。そのうち十二の例で、その人々の信仰について語られている。残りの例も、どの場合にも信仰がいやしをもたらしたことがわかるほど、十分はっきりと述べられている。

問　イエスは、ご自分の神性を立証するためだけに、思いのままにいやされたのではないか。

答　そうではない。イエスは、あがないの法則に従って、また苦しむ人類への大きなあわれみのゆえに、いやされた（マタイ一四・一四）。

問　イエスが地上での伝道を終えられたとき、いやしはやんだのではないか。

答　やまなかった。ペンテコステの日の後、使徒たちの伝道の中で、いやしはさらに驚くべきしかたで現された（使徒五・一二～一六、三・一～一六、一四・八～一〇、九・一七～一八、八・六～八、一九・一一～一二、一四・一九～二〇、九・三三～三五、九・三六～四二、二〇・八～一二、二八・三～六、八）。このことは、神のいやしが、聖霊の時代全体のためのあがないの祝福であることを、はっきり証明している。

問　しかし私たちは、それは福音の時代の初めのためだけのものだったと教えられている。それはどうなのか。

答　聖書は、そのようなことをまったく教えていない。

問　しかし聖書は、『全きものが来る時には、部分的なものはすたれる』と教えている（第一コリント一三・一〇）。これはどうなのか。

答　この聖句は、神のいやしや、あがないのどの祝福についても、それがこの時代にすたれる、と言っているのではない。この時代に、福音の祝福を十分に所有し、現すことについて、『全きものが来た』と言えたときがあったとしよう。それは、聖霊がペンテコステに来られたときだった。しかしその後にも、救いといやしの力あるわざが見られた。そうしたわざは少しも『すたれ』ず、大いに増し加わった。だから、『すたれる』という議論には、聖書の根拠がまったくないことがわかる。恵みの時代が続くかぎり、恵みの益は、望む者にはだれにでも及ぶ。

問　では、神のいやしはいつすたれたのか。

答　神のご計画においては、一度もすたれたことはない。

問　初代教会でもいやしが続いていた、と言うのか。

答　もちろん続いていた。歴史が示すとおり、数世紀のあいだ、教会ではほかのいやしの手段は行われていなかった。

問　しかし、その後はどうなのか。

答　ほかのすべての福音の真理を押しのけたのと同じもの、つまり背教の迷信と不信仰が、いやしを押しのけた。しかし神に感謝する。闇は過ぎ去り、翼にいやす力を備えた義の太陽が輝いている。古い教理や信条や迷信をすべて捨て、古い使徒の土台、すなわちみことばに立ち返る者すべてに、救いと健康の光を注いでいるのである。

問　しかし、神が今もいやすことを望んでおられると、どうしてわかるのか。

答　神が救うことを望んでおられるとわかるのと同じしかたで、つまりみことばによってわかる。みことばは神の御心である。

問　しかし、私をいやさないことが神の御心かもしれない。

答　そのような結論の足場を見つけるには、みことばの外へ出なければならない。聖書の中には、いやしについて、私たちの尊い聖句と一致しないことは何もないからである。『彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた』（マタイ八・一七）。神が自分をいやすことを望んでおられないかもしれない、と論じる人がいる。そういう人のほとんどは、同時に薬を飲み、よくなるためにあらゆる人間の手段を使っている。なぜそんなに矛盾したことをするのか。なぜ神の御心に逆らって戦うのか。よくならないことがあなたへの神の御心なら、死になさい。神に逆らって戦うのをやめなさい。

問　しかし、病気は祝福として神から来るのではないか。

答　そうではない。病気が神から来るのは、誘惑が私たちに来るのと同じように、神が許されるという意味においてだけである。病気が私たちにとって祝福となるのも、ほかの誘惑や試練が祝福とみなされうるのと同じ意味においてだけである。祝福は、解放といやしの中にある。神のいやしの御手に触れられたことのある人はみな、それとともに魂にどれほどの祝福が来るかを知っている。病気はからだの異常な状態であって、神からの祝福ではありえない。

問　病気が神から来るのでないなら、どこから来るのか。

答　悪魔から来る。イエスは地上での伝道の中で、病気をいつも悪魔のわざとして扱われた。みことばは、悪魔が病気の張本人であることをはっきり教えている。ヨブ二・七、ルカ一三・一六、使徒一〇・三八を読みなさい。

問　しかし、病気が神から来ると教えている聖句も、ほかにあるのではないか。

答　神が許されるという意味においてだけである。

問　聖書は、神が薬を使わずにご自分の民をいやすかたとなるおつもりだ、と教えているか。

答　教えている。聖書のどこにも、祈りと信仰とともに薬を使え、という命令はない。

問　しかし、ヒゼキヤのいちじく、盲人の泥、テモテのぶどう酒はどうなのか。

答　確かにイザヤは、ヒゼキヤに干しいちじくのひとかたまりを取るように言った。しかしこれは、新約聖書のいやしの手段とは何の関係もない。また、いちじくがヒゼキヤをいやしたのでないことは、きわめて明らかである。神が『わたしはあなたをいやす』と言われたのである（列王紀下二〇・五）。イエスが盲人の目に泥を塗られたのは、何かの治す力のためではなかった。イエスはすぐに、行って洗い落とすように命じられたからである。生まれつきの盲目が泥を薬として使っていやされたという話は、その後も、またそれ以前も、だれも聞いたことがない。イエスがつばと泥を使われたのは、盲人に服従と従順を求めるためだったことは明らかである。泥を目に塗られたとき、盲人はいやな思いをし、屈辱を感じたに違いない。しかし彼は、ナアマンのように服従して従い、言い尽くせない祝福、すなわちいやしを受けた。ぶどう酒は、食物の一つとしてテモテに勧められたのである。今日でも、同じような事情のもとで正しく用いるなら、差し支えないだろう。

問　薬は、みことばの中で認められているのではないか。

答　認められている。どのように認めているか、読んでみよう。『あなたの傷をつつむ薬はなく、あなたをいやすものもない』（エレミヤ三〇・一三）。『あなたは多くの薬を用いても、むだだ』（エレミヤ四六・一一）。『心の楽しみは良い

薬である』（箴言一七・二二）。欄外の別訳では『薬に益を与える』となっていて、心の楽しみが薬にまさることを示している。『その実は食用に供せられ、その葉は薬となる』（エゼキエル四七・一二）。この最後の箇所は、物質的な治療を意味しているのではなく、いのちの木と神のいやしの預言である（黙示録二二・二）。このように、みことばは薬そのものに何の価値も置いていないことがわかる。

問　からだのための医者の務めは、魂のための福音の務めと同じように、神が定められたものではないか。

答　そうではない。この国の医者の大部分は神を敬わない人々で、その多くは不信者を公言している。神は彼らに、だれかに薬や毒を与えさせるようには決して定められなかった。ましてや、からだが聖霊の聖なる宮である神の民には、なおさらである。福音のまことの牧師こそ、魂とからだのための務めを行う者である。『弟子たちは出て行って、村々を巡り歩き、いたる所で福音を宣べ伝え、また病気をいやした』（ルカ九・六）。『弟子たちは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主も彼らと共に働き、御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった』（マルコ一六・二〇）。

問　しかし、医者の務めは聖書の中で認められているのではないか。

答　認められている。どのように認めているか、読んでみよう。『あなたがたは偽りをもってうわべを繕う者、皆、無用の医師だ』（ヨブ一三・四）。『アサはその治世の三十九年に足を病み、その病は激しくなったが、その病の時にも、主を求めないで医者を求めた』（歴代下一六・一二）。『多くの医者にかかって、さんざん苦しめられ、その持ち物をみな費してしまったが、なんのかいもないばかりか、かえってますます悪くなる一方であった』（マルコ五・二六）。これらの聖句は、聖書が医者をあまり好意的には認めていないことを示している。

問　油を塗ることは、聖書の時代の治療の方法だったのではないか。

答　そうではない。ある種の油は、ある種の病気に何らかの医学的な価値があるかもしれない。しかし油は、病人をいやす信仰による祈りと結びつけて、そのような用い方をするためのものではまったくなかった。もし油を塗ることが治療の方法だったなら、教会はこの点について教えを受ける必要はなかっただろう。それは医者たちによって、どこでもふつうに行われていたはずだからである。そしてもしそれが使徒の考えだったなら、使徒は油を塗る働きを医者たちに割り当てたはずである。「長老はマッサージ師ではない」のである。

第三十三章　人々への賜物についての説教

『あなたは高い所に上られ、とりこを率いて、人々のために賜物を受けられた。そうだ、そむく者のためにさえ受けられた。主なる神が彼らのうちに住まわれるためである』（詩篇六八・一八）。

イエスの生涯のすべての後に、その力あるしるしと不思議と奇跡のすべての後に、人々はこう言った。『見よ、この人だ』（ヨハネ一九・五）。『この人の語るように語った者は、これまでにありませんでした』（ヨハネ七・四六）。『このかたはどういう人なのだろう。風も海も従わせるとは』（マタイ八・二七）。

もしイエスがカルバリで、あるいは冷たい墓に下られたところでとどまっておられたなら、そのみわざは失敗に終わっていただろう。多くの人は、死んだ救い主だけを見ている。その人々の信仰は死んだ信仰で、形式と行いだけのものである。そこにはいのちも力もない。思い起こしなさい。イエスは復活によって、いのちと不死とを私たちに明らかに示されたのである。そうだ、墓はイエスをとどめておくことができなかった。地獄のすべてが武器を取り、イエスを冷たい死の中にとどめておこうとしたのに、である。百人以上の武装した兵士が墓のまわりに立っていた。弟子たちがなきがらを盗み出すのを恐れたのである。彼らはまた、総督の封印で墓を封じた。その封印を破る者は死刑だった。

大いなる戦いが戦われた。天の全軍が、地獄の軍勢と激しく陣を構えて戦った。その戦場は岩の棺、すなわち墓のまわりだった。そこには、十字架につけられた私たちの主イエスの傷ついたからだが、死んで冷たく横たわっていた。悪霊どもの声を聞け。「やつを捕らえたぞ。とりこにしておくのだ。おまえたちの君はどこにいるのか。おまえたちの王はどこにいるのか」しかし聞け、耳を澄ませ。戦いの形勢が変わる。勝利は近い。助けが来る。全能の主なる神ご自身が、大いなる御使を伴って来られる。御使は墓から石をころがし、その上にすわる。その姿はいなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。見張りの者たちは、御使を恐れて震えあがった。彼らは倒れて、死人のようになった（マタイ二八・二〜四）。

神は力強い臨在をもって、大きな地震を送られた。そして死と地獄と墓に勝つ大いなる叫びとともに、勝利者が出て来られるのが見える。その手には、死者の牢獄を開くかぎがある。

女たちは、最後まで十字架のもとにいて、最初に墓に来た。御使は言った。『恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっている。もうここにはおられない。よみがえられたのである。さあ、主が納められていた場所をごらんなさい。そして、急いで行って、弟子たちに、主はよみがえられた、と伝えなさい』（マタイ二八・五〜七）。

女たちが大喜びで行くと、イエスが女たちに出会われ、こう言われた。『恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤでわたしに会えるであろう、と告げなさい』（マタイ二八・八〜一〇）。

女たちは御使たちから、のちには主ご自身から、復活の最初の知らせを宣べ伝えるように命じられたのである。

そうだ、主は死んではおられない。主は本当によみがえられたのである。ああ、生きておられるキリストのゆえに、生きている教会のゆえに、また間もなく来られる私たちの王であり主であるかたのゆえに、神をほめたたえよ。

墓が開け、墓の中で眠っていた聖徒たちの多くのからだが生き返った。そしてイエスの復活の後、墓から出て来て都に入り、多くの人に現れた（マタイ二七・五二〜五三）。

ユダヤの教会は主を捨てていた。それで主は、ご自分の御霊をそこから取り去っておられた。およそ四百年のあいだ、ユダヤの教会は闇の中にあった。預言者も祭司もなく、天からの便りもなかった。バプテスマのヨハネの誕生とキリストの誕生が告げられるまで、そうだったのである。

聖書には『多くの聖徒たち』とある（マタイ二七・五二）。多くとは、何千人かそれ以上ということだろう。そして、その聖徒たちの大部分は預言者と祭司だったと信じる十分な理由がある。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そして聖霊に感じて語った昔の聖なる人々である。その中には、少し前にイエスのために殺されたバプテスマのヨハネも含まれていた。

ああ、昔のこれらの力ある人々の復活のゆえに、神をほめたたえよ。その人々のからだはよみがえり、霊がからだと一つにされた。その人々は生きた人間で、息をし、歩いた。そのからだは朽ちることから解き放たれていた。その人々がエルサレムの通りを行き、あちこちを訪ね、自分がだれであるかを知らせているのを見よ。

ああ、私たちのからだの復活のゆえに、また私たちが互いにだれであるかがわかるようになることのゆえに、神をほめたたえよ。

そうだ、悪魔はその人々のからだを、何百年ものあいだ墓の中にとりこにしていた。しかし見よ、力ある勝利者が鎖を断ち切られる。悪魔からも墓の力からもその人々を取り返され、ご自分のとりことされる。とりこを率いて行かれる先は、どこかほかの世界である。そこで神は疑いなく、ご自分の栄光のために、何か大いなるしかたでその人々を用いておられるのである。

主はご自分が行かれたとき、その人々を天国に連れて行かれたのではない。天に上った者は、まだだれもいなかったからである。主が来られるときによみがえらされる者が、復活の初穂となる。まだだれも天国に行った者はいない。ペンテコステ以来、聖徒たちの霊は、キリストと共にいるために行ったのである。パウロは言っている。肉体から離れているときには主と共にいることを、自分は知っており、確信している、と（第二コリント五・六〜八）。

主は高い所に上られ、人々に賜物を与えられた。そうだ、そむく者にさえ与えられた。イエスは、神に死人の中からよみがえらされるまでは、いっさいの権威を持っておられたのではなかった。神の賜物である永遠のいのちは、御霊によって生まれるまで、だれも持つことができなかった。

イエスはいっさいの権威を持っておられる。いっさいの権威をもってよみがえらされたのである。聖霊は弟子たちと共におられた。しかしイエスは『あなたがたのうちにいる』と言われた（ヨハネ一四・一七）。一同が集まっていたとき、イエスは彼らに会われ、その霊の心を開かれた。そして彼らに息を吹きかけられ、こう言われた。『聖霊を受けよ』（ヨハネ二〇・二二）。彼らは聖霊を受け、神の性質にあずかる者となった。神の賜物を受け、光を与えられて、『わが主よ、わが神よ』と叫んだ（ヨハネ二〇・二八）。そのときまでに、そのような経験をした者はひとりもいなかった。彼らは新生によって神の子となった。それは神の賜物である永遠のいのちであり、『そむく者のためにさえ』与えられるものだった。これは、あらゆる賜物の中で最も大切なものである。この賜物がなければ、決して真珠の門の内に入ることはできないからである。

罪人がそむくのをやめて悔い改めるとき、神はその人に、キリストを受け入れる信仰を与えてくださる。神の子となる力を与えてくださる。神の子とは、人によらず、人の欲によらず、血肉によらず、神の力によって生まれた者である。そのときその人は、もはやそむく者ではなく子である。神の賜物を受け、神の霊の家族に生まれたからである。その人の名は、神の指によって家族の記録に書き記された。そして「この者はシオンで生まれた」と言われたのである（詩篇八七・五）。その人には、罪と汚れのためのカルバリでの完成されたみわざがある。その人は今や神の子供であり、ペンテコステのバプテスマと力のどの賜物も、すべての賜物も受ける備えができている。その人は神の人である。

イエスは人々のために賜物を受けられた。天に上られる前、山の上で最後の祝福を与えておられたとき、イエスは彼らに言われた。『上から力を授けられるまでは、エルサレムにとどまっていなさい。聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受ける。そしてわたしの証人となるであろう。わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた。全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じる者（わたしを信じるすべての者）には、このようなしるしが伴う。これらは、わたしが人々に与える賜物のいくつかである。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる』（ルカ二四・四九、使徒一・八、マタイ二八・一八、マルコ一六・一五〜一八）。

これが、救い主が地上で語られた最後の言葉だった。主はそれから、目に見えるかたちで上げられ、彼らの目から見えなくなられた。その後、彼らは約束のパプテスマ、最も大いなる賜物を受けた。そして出て行って、至る所でみことばを宣べ伝えた。主も彼らと共に働かれ、みことばに伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった（マルコ一六・二〇）。

彼らは、以前のように主ご自身を見ることはできなかった。しかし、目に見えない主の臨在の、目に見えるしるしを見たのである。

これらのしるしと賜物は、生まれつきの目と耳で見聞きすることができた。イエスは、あらゆる賜物、しるし、奇跡、御霊のさまざまな働きをもって、彼らと共におられた。主はそれらによって、真理と彼らの説教を確かなものとされ、それに印を押されたのである。

ペンテコステに、主は父の約束を送られた。聖霊は激しい風のように来られ、炎のように分かれた舌となって、一同の頭の上にとどまられた。この分かれた舌は、新しい言葉のしるしだった。それは火の舌、御霊の舌だった。一同は御霊に満たされ、御霊が語らせるままに語り出したからである（使徒二・二～四）。

それはユダヤ人の大きな祭りの時で、天下のあらゆる国々のユダヤ人がそこに集まっていた。人々は、聖霊とその賜物と神の栄光との、驚くべき現れを見聞きした。

人々は驚いて言った。『これは、いったい、どういうわけなのだろう。わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を聞かされるとは、どうしたことか』（使徒二・八、一二）。イエスは、男にも女にも賜物を送ってくださったのである。聖霊はとどまるために来られた。今や聖霊は限りなく与えられたのである。

神はペテロをカイザリヤにお遣わしになり、異邦人のあいだでリバイバルの集会を開かせられた。ペテロが語っていると、みことばを聞いていた人々の上に聖霊がくだられた。彼らが異言を語って神をさんびしたので、それがわかったのである（使徒一〇・四四～四六）。

聖霊は、ペンテコステにユダヤ人の上に注がれたのとまったく同じように、あらゆる賜物と共に異邦の国々の上に注がれた。『この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである』（使徒二・三九）。ああ、愛する兄弟たちよ、神をほめたたえよ。その約束には、あなたも私も含まれているのである。

イエスは、ペンテコステのあらゆる力と栄光と共に、これらの賜物を送ってくださった。私たちのからだは神の発電所である。聖霊が生ける水の川のように流れ出る通り道である。『御霊をさして言われたのである』（ヨハネ七・三九）。

『主なる神が彼らのうちに住まわれるためである』（詩篇六八・一八）。これが、失われた世に対する、神が私たちと共におられるというしるし、目に見えない神の臨在のしるしである。私たちは人々に驚かれる民である。「父よ、ここにわたしと、あなたがわたしに賜わった子たちとがいます」（ヘブル二・一三）。私たちは、シオンにいます万軍の主から与えられた、イスラエルのしるしであり不思議である（イザヤ八・一八）。そのシオンとは、天国ではなく、この地上のことである。

『とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えた』『そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった』（エペソ四・八、一一）。これらは、聖霊のすべての賜物と働きを含み、意味している。

なぜ主は、この力と賜物を人々に、ご自分の兄弟たちに、教会に送られたのか。主は、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせるためだ、と言っておられる（エペソ四・一二）。聖徒たち、すなわち神の人々を全き者とし、同じペンテコステの力と賜物のうちに導くためである。

牧師たちにはそれが必要である。牧師たちは、自分を励ますために、聖霊の印と、こうしたすべてのしるしと賜物を持たなければならない。それらは世に対しては目に見えるしるしであり、牧師たちに対しては印である。神が彼らと共におられ、彼らと共に働かれ、目に見えるしるしをもってみことばを確かなものとしてくださる、という印なのである。

弟子たちは、いやしと奇跡を行う大いなる力が彼らと共にあったために、牢に入れられ、いのちをおびやかされた。そのとき彼らは、イエスの名によって宣べ

伝えることを禁じられた。その力がイエスの名を通して来ることを、人々は見て取ったからである。

彼らは集まった。自分たちへの迫害をすべて引き起こしているのは神の力だと、彼らは知っていた。信心の形だけを持ち、その力を否定するなら、もう苦しめられることはないことも知っていた。しかし、愛する者たちよ、彼らは言った。「私たちは神に忠実であろう。たとえ死んでも、みことばを宣べ伝えよう」それから主に祈って言った。『主よ、いま、彼らの脅迫に目をとめ、僕たちに、思い切って大胆に御言葉を語らせて下さい。そしてみ手を伸ばしていやしをなし、聖なる僕イエスの名によって、しるしと奇跡とを行わせて下さい』（使徒四・二九～三〇）。

このように、これらの牧師たちには力が必要だった。イエスのために立ち、このいのちの言葉を漏れなく宣べ伝える大胆さを与える力である（使徒五・二〇）。

彼らは説教するとき、目に見えないキリストの臨在のしるしを集会の中に見なければならないことを知っていた。キリストはそこにおられて、みことばと彼らの言葉を確かなものとしてくださるのである。イエスは言っておられた。『わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる』（マタイ二八・二〇）。そうして彼らは、ペテロのように、そこにいる人々に言うことができた。「あなたがたが見、聞き、感じているこのことは、父の約束であり、聖霊である」

御子は彼らの祈りと信仰と勇気を喜ばれた。そして、その場所、すなわち彼らが集まっていた建物が揺れ動き、一同は聖霊に満たされて、大胆にみことばを語った（使徒四・三一）。

愛する者たちよ、見なさい。これはいっそう大いなるバプテスマだった。彼らは、なすべき働きに備えるために、それを必要としたのである。この後、彼らはいっそう大きな成果をあげた。神は使徒たちの手によって、力あるしるしと不思議を行われた。教会全体と、これらのことを聞き、見たすべての人は、非常なおそれを感じた（使徒五・一一～一二）。おびただしい数の男と女がキリストのもとに群がって来て、主に加えられた（使徒五・一四）。

おびただしい数とは、何千人ということである。人々はエルサレムと周りのすべての町々から、病人を寝台や寝床にのせて連れて来た。そして、ペテロが通るとき、彼の影なりとかかるようにと、病人を通りに沿って置いた（使徒五・一五～一六）。このように、力が使徒たちのからだから出て行ったのである。パウロがハンカチを自分のからだに当て、それを病人に送ると、悪霊や病気が出て行き、人々がいやされた。それと同じである（使徒一九・一一～一二）。

ああ、神をほめたたえよ。私はこれらのことの証人である。今日も同じことが見られる。私がこれまでに見た最も大いなるいやしと救いの奇跡のいくつかは、同じしかたで、何百マイルも離れた所でなされたのである。主は人々に賜物を与えられた。

コリント人への第一の手紙の第十二章を、注意して読みなさい。パウロはそこで、教会が聖霊のすべての賜物と力と召しと働きを持っていることを示している。それらは、キリストのからだ、すなわちキリストの教会の中にあるのである。

ああ、愛する者たちよ、この終わりの時に、私たちはどこにいても、この高さにまで達するべきである。今は、花嫁がその用意をしている時なのである。パウロは、霊の賜物について私たちが知らずにいることを望まない、と言っている（第一コリント一二・一）。『更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい』（第一コリント一二・三一）。『愛を追い求めなさい』。『霊の賜物を熱心に求めなさい』（第一コリント一四・一）。神がそれらを教会の中に置かれたからである（第一コリント一二・二八）。

そむく者のための賜物もある。神に感謝する。罪人は、もうそむいている必要はない。主の足もとにひれ伏して、古い借りを清算すればよい。主は、あなたのための賜物がある、と言われる。ああ、『神の賜物は永遠のいのちである』（ローマ六・二三）。そのとき、あなたは神の人となる。もはや異国人でも宿り人でもなく、キリストの血によって近いものとされたのである。キリストによって、私たちは一つの御霊の中にあって、父のみもとに近づくことができる。あなたは聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族である。あなたは、組み合わされつつある建物の中の生ける石であり、主にある聖なる宮である（エペソ二・一三～二

二、第一ペテロ二・五)。兄弟よ、あなたは子であり、ペンテコステのすべての祝福と賜物と力の相続人である。天の法廷に、あなたの権利を申し立てなさい。

聖霊のバプテスマと力を求めなさい。あなたは神の聖所の柱となって、二度と外へ出ることのない者になれる(黙示録三・一二)。主の来臨を悟る賢い者のうちに入りなさい。大空の輝きのように輝く賢い者のうちに入りなさい(ダニエル一二・三、一〇)。この説教を読むすべての人が、警告を受けるように。『主人のこころを知っていながら、それに従って用意もせず勤めもしなかった僕は、多くむち打たれるであろう』(ルカ一二・四七)。

驚くべき恵み、その響きのなんと甘いことか
私のような惨めな者を救った恵み
私はかつて失われていたが、今は見いだされ
盲目だったが、今は見える
恵みが私の心に恐れを教え
恵みが私の恐れを取り去った
その恵みのなんと尊く見えたことか
初めて信じたそのときに
多くの危険と苦労とわなを通って
私はここまで来た
恵みが私を無事にここまで連れて来た
恵みが私を家へ導いてくれる
主は私に良いことを約束された
主のみことばが私の望みを確かにする
主は私の盾、私の分け前となられる
いのちの続くかぎり
そうだ、この身も心も衰え
死ぬべきいのちが終わるとき
私は幕の内で得る
喜びと平安のいのちを

第三十四章　福音における女性の権利についての説教

『五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると』（使徒二・一）。

『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう』（使徒二・一七、ヨエル二・二八～二九）。

『突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。

『また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。

『すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』（使徒二・二～四）。

驚くべき騒ぎが起こった。何が起こったのかを見ようと、人々は大群をなして町から駆けつけて来た。人々は、この男たちと女たちが、顔を神の栄光に輝かせて、みないっせいに宣べ伝えているのを見た。神が自分たちに、また死にゆく世に何をしてくださったかを、だれもが語りたがっていた。罪の自覚が、短剣のように人々の心を刺し貫いた。そして今日と同じように、神の力が現れると、人々は従うかわりに「騒ぎすぎだ」と叫び、神に逆らって戦い始めた。「この人たちは気が狂っている。新しい酒で酔っているのだ」と言って、あざ笑ったのである。

ペテロが立ち上がって、キリストの立場を弁護する。ペテロはヨエル二・二八～二九を引く。『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう』（使徒二・一七～一八）。パウロは、女が説教し預言するのはごく普通のことであるかのように語っている（第一コリント一四・二二～二六、一一・五）。

『祈をしたり預言をしたりする時、かしらにおおいをかけない女は、そのかしらをはずかしめる者である』（第一コリント一一・五）。『この人に四人の娘があったが、いずれも処女であって、預言をしていた』（使徒二一・九、エペソ四・一一）。

パウロは、使徒たちのだれよりも多く、女たちと共に福音のために働いた。プリスキラとフィベは、パウロと共に旅をして宣べ伝え、教会を建て上げた（使徒一八・二、一八、二六、ローマ一六章）。

パウロとフィベは、一緒にリバイバルの集会を開いてきた。今、フィベはローマの都に召されている。パウロは一緒に行くことができない。しかしパウロは、フィベの評判と、フィベが敬意をもって迎えられることに、たいへん気を配っている。それで推薦の手紙を書く。『ケンクレヤにある教会の僕（これは教会の牧師という意味である）、わたしたちの姉妹フィベを、あなたがたに紹介する。どうか、聖徒たるにふさわしく、主にあって彼女を迎え、そして、彼女があなたがたにしてもらいたいことがあれば、何事でも、助けてあげてほしい。彼女は多くの人の援助者であり、またわたし自身の援助者でもあった』（ローマ一六・一～二）。

このことは、フィベが諸教会で務めを行う権威を持っていたこと、魂をキリストに導くことに成功していたことを示している。パウロは、フィベに励まされたと言うのを恥じない。パウロは、主の働きに忠実に仕えた何人もの姉妹たちを、最高の言葉でたたえている。その姉妹たちは、魂を救おうとして、いのちをかけたのである。そしてパウロだけでなく、異邦人のすべての教会が感謝を送った（ローマ一六・四）。

パウロは言った。『婦人たちは教会では黙っていなければならない』（第一コリント一四・三四）。律法がそう言っているのである。しかし私たちは、律法の下ではなく、恵みの下にいる。『家で自分の夫に尋ねるがよい』（第一コリント一

四・三五)。夫のいない女はどうするのか。知らないままでいて、滅びるとでも思うのか。また、知識を夫に頼らなければならないとしたら、知らないまま死んでしまう女もいるだろう。

パウロは、諸教会の中の争いについて語ったのである。パウロは、結婚しないほうがよい、とも言っている(第一コリント七・八)。そのことでパウロに同意する人が、どれほどいるか。従う人が、どれほどいるか。パウロは諸教会の中の争いについて語っているのであり、神の家で問題を持ち出して言い争うのは恥ずべきことだ、と言っているのである。パウロは兄弟たちにこう書いている。『お互の間に分争があることを、わたしは耳にしており、そしていくぶんか、それを信じている』(第一コリント一一・一八)。

『このふたりの女を助けてあげなさい。彼らは、「いのちの書」に名を書きとめられているクレメンスや、その他の同労者たちと協力して、福音のためにわたしと共に戦ってくれた女たちである』(ピリピ四・三)。女預言者も何人かいた(ルカ二・三六、列王紀下二二・一三〜一五)。シャルムの妻である女預言者ホルダは、エルサレムの下町に住んでいた。人々はホルダと語り合い、ホルダは人々に言った。『イスラエルの神、主はこう仰せられます』(列王紀下二二・一五)。

(ここには、パレスチナの礼拝で女たちが質問するのをボディ牧師が聞いたという、編者A・E・シドフォード長老の注が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない)

『モーセ、アロンおよびミリアムをつかわして、あなたに先だたせた』(出エジプト一五・二〇、ミカ六・四)。

『そのころラピドテの妻、女預言者デボラがイスラエルをさばいていた』(士師記四・四)。神がデボラに与えられた責任ある地位を見よ。デボラは座して、イスラエルの人々の軍勢をさばいたのである。イスラエルの人々は罪を犯していたので、神は彼らのために戦おうとはされなかった。二十年のあいだ、国々が彼らに逆らって立ち、出て来て戦えと挑んだ。バラクは、デボラが先頭に立たなければ、敵に立ち向かおうとしなかった。いつでも神の立場を守ろうとしていたこの勇敢な女性は言った。「必ず行きます(士師記四・九)」神の民を敵に取られてはならない。いや、決してならない。主の軍勢を呼び集めよ。シセラの大軍が集まっている。兵士はみな持ち場につけ。見よ、この勇敢な女性が、指揮官バラクと共に軍の先頭に立って進んで行く。軍勢を勝利へと励まし、軍を率いながら勝利を叫ぶ。敵の隊列をなぎ倒し、死と滅びをもたらしていく。ついに王は戦車から飛び降りて、いのちからがら逃げ去った。しかし王は、ひとりの女に捕らえられて殺された。兵はみな剣にかけられ、敗北を伝える者はひとりも残らなかった。

シセラの母は、王である息子が戦いから帰って来るのを、窓から待ちわびて叫んだ。「ああ、どうしてあの子は来ないのか。どうして車の来るのがこんなにおそいのか。なぜ、ああ、なぜこんなに手間取っているのか」(士師記五・二八)。母が息子の帰りを待って泣いているあいだ、息子は天幕の中で、死んで冷たく横たわっている。そこでひとりの女に捕らえられ、殺されたのである。

王妃エステルは王の宮廷でとりなしをする。そして王の悲しむべき命令は覆され、エステルのいのちも、ユダヤの民のいのちも救われる。

パウロは、何の差別もなく、男も女もキリスト・イエスにあって一つである、と言っている(ガラテヤ三・二八)。イエスを私たちの型とし、手本としよう。そして、イエスのほかには、だれも見ないようにしよう。

女たちは、天からつかわされた御使によって、また主イエス・キリストによって、福音を宣べ伝えるように召され、任じられた(マタイ二八・五〜一〇)。

おくびょうな弟子たちは、救い主を見捨てて逃げてしまった。ペテロは救い主を否み、そんな人は知らないと誓った。しかし多くの女たちはイエスに従い、十字架のそばに立った。また墓まで行って、なきがらが納められるのを見た。大きな石が入口にころがしてあった(マタイ二七・五五〜六一)。この女たちは、悲しみに打ちひしがれて家に帰った。しかし、愛する友に最後の敬意をささげるために戻って来た。女たちは、主のなきがらに塗る香料を用意して夜を過ごした。夜が明けるころ、女たちは墓に来た。墓は空だった。主はそこにおられなかった。女たちが泣きながら立っていると、ふたりの御使がそばに立って言った。『恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることは、わたしにわかっているが、もうここにはおられない。かねて言われた

とおりに、よみがえられたのである。さあ、主が納められていた場所をごらんなさい。そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、「イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう」。あなたがたに、これだけ言っておく』（マタイ二八・五〜七）。

女たちは喜びにあふれて、すぐに出かけた。歩くのではもどかしく、兄弟たちを捜し出して良い知らせを伝えようと走った。女たちが行く途中、イエスが女たちに出会われた。女たちはイエスの足もとにひれ伏して拝した。イエスは言われた。『恐れることはない。行って兄弟たちに、ガリラヤに行け、そこでわたしに会えるであろう、と告げなさい』（マタイ二八・九〜一〇）。良い知らせを伝えることになっていたのは、十二弟子だけではなかった。このとき、兄弟たちは何百人もいた。そうだ、イエスに従う者は何千人もいたのである。女たちは、血に飢えた兵士たちのことなど考えもしなかった。兵士たちは女たちの主を死に追いやり、あえて主を弁護しようとする主の友を捜し回っていたのである。

イエスがこの弱い女たちにゆだねられた、驚くべき使命に目をとめなさい。それは、最初の復活の説教を宣べ伝えることだった。いのちをかけてキリストに従う者たちを呼び集め、驚くべき集会の開かれる所に集めることだった。しかし今日の多くの人と同じように、弟子たちは信じようとしなかった。ペテロは言った。「あなたがたの知らせなど信じない」トマスは言った。「その手と足に釘あとを見なければ、決して信じない」（ヨハネ二〇・二五）。

こうしたあらゆる落胆のただ中で、女たちは働きを続け、すばらしい成果をあげた。イエスは弟子たちに会われ、彼らに語られた。みなが喜びにあふれた。女たちは御使たちと栄光の主に召され、福音を宣べ伝えるためにつかわされたのである。名が記されている女は四人だが、ほかにも多くの女がいた。

今日、神はこの国じゅうのマリヤたちとマルタたちを召され、主のぶどう園のさまざまな場所で働かせようとしておられる。どうか神が、その人々が応えて『主よ、ここにわたしがおります。わたしをおつかわしください』と言うようにしてくださるように（イザヤ六・八）。この召しは、キリストがよみがえられた後になされたのである。ヨハネ四・一〇〜二九、三九〜四二も開いてみなさい。

『終りの時には、わたしの霊を注ごう』という言葉は、とくに、今私たちが生きているこの終わりの時のことを言っている。主の大いなる輝かしい日が来る直前の、最後の大いなる刈入れのために、神はご自分の女の僕たちを備えようとしておられる。そのために、大きな祝福と力を約束しておられるのである。私たちはまず、一つの御霊によってキリストにつくバプテスマを受けなければならない。つまり御霊によって生まれなければならない。それから、力と知恵の油を注がれるべきである。神の深みを知る知識を得るために、御霊が油のように私たちの頭に注がれるべきである。主は、私たちが預言をする、と言われる。

パウロは言う。『霊の賜物を、ことに預言することを、熱心に求めなさい』（第一コリント一四・一）。どれほど多くの賜物を持っていても、語る賜物と教える賜物がなければ、あまり役に立たない。主はこの最も大いなる賜物を、ご自分の女の僕たちと娘たちに約束しておられる。パウロは三節で、預言するとはどういうことかを説き明かしている。預言をする者は、人に語ってその徳を高め、彼を励まし、慰める。預言をする者は、教会の徳を高める（第一コリント一四・三〜四）。聖霊の照らす力によらなければ、だれも神のために語ることはできない。モーセは言った。『主の民がみな預言者となり、主がその霊を彼らに与えられることは、願わしいことだ』（民数記一一・二九）。

イエスがヤコブの井戸のそばに座られ、休んでおられたとき、ひとりの哀れな女が水をくみに井戸へ来た。罪の中に生きている女だった。女はひどく身を落とし、友人たちにさげすまれていた。女を引き上げ、もっと良い道を教えてくれる人はひとりもいなかった。しかしイエスは、失われた者を捜し、倒れた者を引き上げるために来られたのである。

どうか神が私たちを助けてくださり、イエスの手本に従わせてくださるように。人々が、自分の足が地獄の穴にすべり落ちていくと感じているとしても、イエスは力ある救い主である。イエスはその人々を引き上げることも、王の子供にすることもおできになる。

イエスは救いを宣べ伝えられた。女は回心した。女は水がめを置いたまま、救いの井戸を携えて町へ走って行った。そして顔を神の栄光に輝かせて、通りから通りへと歩き回った。一時間前なら、人々はおそらく女をあざけっただろう。し

かし今、人々は女の変化を見、感じ取った。「あのかたが私に何をしてくださったか、見てください。あのかたは、あなたがたにも同じことをしてくださいます」

人々は店を離れ、仕事場を離れ、客間や台所を離れて、世の救い主を見ようと大勢で出て来た。その井戸のそばで、大きなリバイバルが起こった。イエスは町に入られ、二日のあいだとどまられた。救いの波はどこまでも広がっていった。これは、ひとりの弱い女の、たった一度の説教の結果だった。『この人は、わたしのしたことを何もかも言いあてた』と言った女の宣べ伝えによって、多くの人が回心し、救い主の愛を喜んだ（ヨハネ四・三九）。人々は女のところに来て、「今は自分自身でわかった」と言った。そしてシバの女王のように『その半分もわたしは知らされていなかった』と言ったのである（列王紀上一〇・七）。

キリストにある愛する姉妹よ、この言葉を聞くとき、どうか神の御霊があなたの上に臨んでくださるように。そして御霊が、主のお与えになった働きを、あなたが喜んでするようにしてくださるように。今こそ、女たちが自分の光を輝かすときである。しまい込まれてさびついていたタラントを取り出し、神の栄光のために用いるときである。神に力を求めて信頼し、手のなしうることを力を尽くしてするときである。神は『わたしは、決してあなたを離れない』と言われたのである（ヘブル一三・五）。

ああ、畑は色づいている。刈入れは多く、よく実って、福音のかまを待っている。ああ、金色の穀物を主の倉に集める働き人は、どこにいるのか。

世は死にかけている。墓は満ちていく。地獄は勝ち誇っている。すべては間もなく終わる。

神は、魂を救う栄光ある働きを、教会の手にゆだねられた。教会はだれでできているか。男と女と子供である。私たちは神の建物を建てている。だれもがこの建物の一部を受け持っている。柱や隅のかしら石になれないなら、大くぎや、くぎや、れんがになろう。小さいことの日をいやしめないようにしよう。正しい動機でイエスのためにすることは、何であれ、イエスの目に尊い。神の教会は仕事場であり、怠け者はそこにいられない。「働け、働け。みな持ち場につけ」という張り紙を出すべきである。サタンが私たちを誘惑するとき、あなたも私もネヘミヤのように言うべきである。『わたしは大いなる工事をしているから下って行くことはできない』（ネヘミヤ六・三）。「私は天の王から、王のために働くよう任じられているのだ」働きは大きく、時は短い。主は大きな報いを差し出しておられる。あの盲人のように、私たちは神がしてくださったことを語ろう。『わたしは盲であったが、今は見える』（ヨハネ九・二五）。

『御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」と言いなさい』『いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい』（黙示録二二・一七）。

私たちは、ダビデのように滅びの穴から引き上げられたか。私たちはいのちの糸一本で、その穴の上にぶら下がっていたのである。足を泥の沼から引き出されたか。青銅や鉄のように私たちを縛っていたサタンの鎖を、断ち切られたか。足を堅い岩の上に置かれ、新しい歌を口に授けられたか（詩篇四〇・二〜三）。神の家族に迎え入れられたか。その家族の一部は天に、一部は地にいる。私たちの名はいのちの書に書かれているか。そうなら、私たちは永遠のいのちの賜物を持っている。天の銀行の相続人であり、永遠の資産と、金の都のすまいと、衣と冠の相続人である。私たちは、いと高き神のむすこ娘である。そうであれば、この高い召しを重んじ、死の陰の谷に座している人々を救うために、できるかぎりのことをすべきではないか。

弱さを言いわけにするのはやめよう。神は、この世の弱い者を、ご自分の栄光のためにお用いになる。主は、栄光ある福音を死にゆく世に示そうとされたとき、ユダヤのサンヘドリンに行かれ、知恵ある者や力ある者を選ばれたのではなかった。ガリラヤの海べを歩いて行かれ、無学な十二人をお選びになって、言われた。『わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう』（マタイ四・一九）。十二人は神の力によって出発し、私たちの主イエスの御国を打ち立てた。十二人は力ある勝利者に率いられた。そして今日、主は川から地のはてまで王の笏をふるっておられる。

ああ、兵士を呼び求めておられる主の声を聞け！　主は、私たちを勝利へと導くと言われる。ああ、だれがこの呼びかけに応えるか。だれが天の名簿に自分の名を載せるか。だれがこの戦いに加わり、力ある敵を打ち負かす助けをするか。

だれが闇の力を押し返す助けをするか。主はあなたに、死ねとは言われない。永遠に生きよと言われるのである。主は栄光ある報奨金をくださる。それは永遠のいのちである。

報いを得るために働こう。私たちは、自分のわざに応じて報いを受ける。『多くの人を義に導く者は、星のようになって永遠にいたるでしょう』（ダニエル一二・三）。私たちは、星のない冠を受けたくはない。ああ、主の栄光のために星を勝ち取ろう。

『悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう』（マタイ五・四）。哀れな罪人たちのために今泣き悲しむなら、私たちは永遠にわたって笑うだろう。ああ、今働こう。やがて私たちの涙は終わる。私たちは束を携え、喜びの声をあげて帰って来る。私たちは言うことができる。「父よ、ここにわたしと、あなたがわたしに賜わった子たちとがいます」（ヘブル二・一三）。

ひとりの子供が死にかけていた。「お父さん」とその子は言った。「わたし、川まで来たの。渡し守が向こうへ渡してくれるのを待っているの」「娘や、暗くて寒いかい」「ううん、ここは暗くなんかない。川は一面、銀でおおわれているの。舟は、光でできているの。渡し守もこわくない。ああ、川の向こうが見える。大きくて美しい都があって、光でいっぱい。御使たちが音楽を奏でている。ああ、とても美しいかたが見える。わたしに、おいでって手招きしてくださってる。ああ、だれだかわかった。ほむべきイエスさまよ。わたしを胸に抱いてくださったの」こうしてその子は、死の川を渡って行く。あがない主がそこにおられるので、川は銀の流れのようになっている。

第三十五章　幻と入神についての説教

『幻がなければ民は滅びる』（箴言二九・一八）。

このことは、聖書全体を通して証明されている。神の民が真実で忠実だったとき、主は目に見えるしるしによってご自分の臨在をお知らせになった。また幻のうちに、ご自身と多くのことを民に示された。

そのようなとき、民はいつもあらゆる点で栄えた。神への恐れが異邦の国々に臨み、異邦の民は神の民の前から逃げ去った。そして「イスラエルの神のような神はない」と叫んだ。こうして神のみわざは、地上で栄光を受けたのである。

しかし民が神から離れ、従わなかったとき、神は御顔を隠された。幻はなくなり、民はあらゆる点で滅びた。民は罪から罪へと進んで行った。神の力と御霊のかわりに、形式や聖会や外側のものを置き、汚れたいけにえをささげ、人間の知恵と行いに頼ったのである。

そのとき神は、御霊と幻と、ご自分の臨在のしるしとを取り去られた。民は三百年以上も闇の中に捨て置かれた。キリストが来られるまでそうだった。そしてキリストが来られたとき、民はキリストを知らなかった。民は栄光の主を十字架につけ、人殺しを無力な女や子供たちの中へ解き放った。ユダヤの民は、ほとんどすべてが滅びた。これはみな、民が神の御霊に導かれようとしなかったために起こったのである。

新しい生きた道が開かれたとき、主は多くの幻を与えられた。それは、キリストが来られたこと、神の御子が地上におられることを示すためだった。だれも滅びる必要はないことを示すためだった。御霊によって生まれようとする者はだれでも、キリストがその人のうちに来られ、住まわれる。そしていつまでも共におられ、聖霊を通してご自身を現され、示してくださるのである。

聖霊は、神のことを私たちに示され、きたるべきことを私たちに知らせてくださることによって、キリストの栄光を現されるのである（ヨハネ一六・一三～一四）。

ペンテコステの日、聖霊が見られ、聞かれ、感じられたとき、何千人もの人が神の霊的な御国に導き入れられた。ペテロは聖霊の力と栄光に燃えて立ち上がり、こう言った。神がご自分のむすこ娘に御霊を注がれるとき、彼らは幻を見、夢を見、預言をする、と。そして、御霊が注がれるときには、これらのしるしが必ず伴うと人々に告げた。

主はミリアムに言われた。『あなたがたのうちに、もし、預言者があるならば、主なるわたしは幻をもって、これにわたしを知らせ、また夢をもって、これと語るであろう』（民数記一二・六）。モーセは言った。「主の民がみな預言者となり、みなが預言するようになればよいのに」（民数記一一・二九）。

ペテロは、神の御霊を持つとき私たちはみな預言をする、と言っている。幻は、私たちが御霊を持っているしるしの一つなのである。

主は、私たちが預言者であるなら、幻によってご自身を私たちに知らせてくださる、と言われる。異教徒、すなわち異邦人は滅びかけていた。異邦人はイエスの信仰について何も知らなかった。

神は二つの幻をお用いになって、大きなリバイバルを起こされた。そこでは会衆全体が回心し、神の栄光に満たされた。これは、異邦人のあいだで起きた最初の聖霊のリバイバルだった。それは、その後に続くすべてのリバイバルの見本だった。人々が自分たちのただ中に神の臨在の目に見えるしるしを見、神がご自身を人々に現されたとき、だれもが神の御前にいると感じた。罪人たちはキリストの愛の腕の中へ駆け込み、救われていない者を待つ恐ろしい運命から救われた（使徒一〇章）。

『幻がなければ民は滅びる』（箴言二九・一八）。

今日、御霊の現れに反対している人々はこう言う。私たちにはこうしたものは要らない。私たちは時代と共に進歩している。私たちが求めているのは知的な信

仰だ。みことばは人間の立場から、科学的に説明し、示さなければならない、と。

この終わりの時に、宗教の教師と呼ばれる人々の大多数は、パウロが言った部類に属している。信心深い様子をしながらその力を否定する人々である。こうした人々を避けなさい。その人々は健全な教えに耐えられず、人々を真理からそむけさせる（第二テモテ三・五、四・三〜四）。

この偽教師たちは、ユダヤ人よりも悪い状態にある。はるかに大きな光に逆らって罪を犯しているからである。その人々は自分から盲目になり、教理や人間の言い伝えに頼って、うその避け所に隠れるよう、自分に従う者たちに教えている。『無意味にわたしを拝んでいる』と主は仰せられる（マタイ一五・九）。

神のさばきが、最も恐ろしいかたちで、偽りの教会に臨もうとしている。

カイザリヤのリバイバルには、こうした幻は要らなかった、と言う人もいるだろう。それなら、なぜ主は、使徒たちをみな、また聖霊に満たされた何千人もの聖なる男女を呼び集められ、その働きをおさせにならなかったのか。いや、そうではない。主は彼らにも私たちにも、こう示そうとしておられたのである。人々が救われるのは、人間の力や知恵や大勢の人によるのではなく、神の力と御霊によるのだ、と。使徒たちは、その大いなるみわざが終わるまで何も知らなかった。そして救いの波は地方一帯に押し寄せ、ついに使徒たちのもとにまで届いたのである（使徒一一・一）。

コルネリオが幻を見てから、ペテロがユダヤ人の兄弟六人と共に来るまで、四日あった（使徒一〇・三〇、一一・一二）。驚くべき幻のこと、そして神のそのような僕が自分たちをキリストに導くために来るということが、知れ渡った。人々は、神が自分たちのただ中におられたこと、救うために大いなる力をもって来られようとしていることを信じた。人々は確信し、罪を示されて、仕事をすべて置いて集まった。そして天の御国が、力と栄光をもって自分たちの心に来るのを、ひたすら待っていたのである。

この大いなるみわざは、みなペテロがしたのだ、と言う人々がいる。しかし、すべてをなさったのは神であり、聖霊を通してなさったのである。ペテロは一度説教をしただけである。ペテロは、悔い改めと、生きておられる、よみがえられたキリストへの信仰とが、今ここにある救いをもたらすと説いた。また、生けるキリストが心に来られ、いつまでも共にいてくださると説いたのである。

神の道と知恵は、救われていない者には愚かなものである。しかし神は、それをご自分の選ばれた者たちに示してくださった。そうだ、神の深みまでも示してくださったのだ！　ああ、いつも私たちと共に生きておられ、共に歩んでくださる主の知恵と知識、主との交わりと主の臨在のゆえに、主をほめたたえよ。

ステパノは使徒ではなかったが、信仰と聖霊とに満ちていた。そして私たちはみな、同じ力に満たされるよう命じられている。ステパノは民衆の中で大いなる奇跡を行った。いのちを失うことも恐れずに、よみがえられたキリストを堂々と弁護したとき、ステパノを偽って訴えた者たちはその顔を見つめた。そして、御使の顔のようだと言った（使徒六・八、一五）。

聖霊の力の伴った純粋な福音は、人々の心を刺し貫いた。人々はそれを受け入れようとせず、ステパノにむかって歯ぎしりをした（使徒七・五四）。

『しかし、彼は聖霊に満たされて、天を見つめていると、神の栄光が現れ、イエスが神の右に立っておられるのが見えた。

『そこで、彼は「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と言った』（使徒七・五五〜五六）。

サウロは当時の最もすぐれた学者のひとりで、洗練された信仰の形を持っていた。しかしサウロは、幻も、神の力の目に見える現れも、信じず受け入れようとしなかった。それでサウロは、神の栄光を見、ステパノが見た驚くべき幻を語るのを聞いた。そして、わめき立てる群衆が集まって来ると、群衆に手を貸し、ステパノを殺すことに賛成したのである（使徒七・五八、八・一）。

こうして大迫害が始まった。サウロは血のにおいをかぎつけた猟犬のように跡を追い、牢を満たし、聖徒たちを死に追いやった（使徒二六・一〇〜一二）。

聖徒たちを牢から引き出して死に追いやろうと、ダマスコへ向かう途中のことだった。昼ごろ、太陽が最も強く照っていたとき、目に見える神の力を信じなかったこの人は、天からの光を見たと言った。それは太陽よりも光り輝いて、『わたしと同行者たちとをめぐり照しました』というのである（使徒二六・一三）。

サウロも一行もみな、死人のように地に打ち倒された。この強い男たちをそのような状態にするような、大声の祈りも歌も、宗教的な興奮もなかった。神が、天の電池から電撃を送られたのである。

御霊の現れを憎んでいたサウロは、自分が失われていて、地獄への道にいることをすぐに悟った。サウロが聖霊の力の下に横たわっているあいだに、主はサウロに、福音を宣べ伝えなければならないことをお示しになった。また、どこへ行っても、自分が見聞きしたすべてのことと、主がこれから示されることとを語らなければならないことも、お示しになった（使徒二六・一六）。そのときイエスはサウロにお現れになり、顔と顔を合わせて語られた。その後も何度も、幻のうちに語られた。

主は三つの幻をお用いになって、ユダヤの教会で最も聡明な学者のひとりだったサウロを回心させられた。サウロは深く罪を示され、三日三晩、食べることも飲むこともしなかった（使徒九・九）。サウロは代価を計算した。キリストを受け入れたとき、サウロは聖霊に満たされた。サウロが最初にしたのは、生けるキリストを宣べ伝えることだった。また牢を開け放ち、恐ろしい迫害をやめさせ、さげすまれていたイエスの弟子たちに、自分が彼らの友であり兄弟であることを示すことだった。教会はみな平安を保ち、救いの波が全地を覆った（使徒九・三一）。

教会と世にもたらされた、栄光ある結果を見よ。そのすべてが、三つの幻によってもたらされたのである。

『幻がなければ民は滅びる』（箴言二九・一八）。

パウロは、神の力も、そのどんな現れも、決して疑わなかった。パウロは聖霊の人格について、また聖霊の多くの務め、賜物、幻、啓示、さまざまな働き、導き、教え、力について、多くを知っていた。それは、ほかのどの使徒よりも、またほかの使徒全員を合わせたよりも多かった。そしてそれらについて、だれよりも多くを教えた。パウロは、この力のすべてが永遠に神の民のためのものであることを、はっきり証明したのである。

ヨハネの黙示録は、聖書の中で最も驚くべき書である。キリストはヨハネにご自身でお現れになり、次から次へと幻をお与えになった。キリストはヨハネに、天の都、大いなる都、金の都、碧玉の城壁を見せられた。都は方形で、高さは千五百マイル、長さと幅は高さと同じだった（黙示録二一・一六）。ヨハネは、都の気候と、そこに住む者たちと、その務めについて告げられた。また、大いなるさばきの日の幻を見、火と硫黄との池と、そこへ投げ込まれる失われたすべての者の幻を見た。主はヨハネに、見聞きしたことをすべて書いて諸教会に示すように命じられた。そして諸教会は、それを世に示すことになっていたのである。

預言者は、幻を見た者がそれを語るのを恥じるときが来る、と言った（ゼカリヤ一三・四）。そのときが今来ている。教会の指導者の大多数は、超自然のものをすべて恥とみなす。そして「催眠術だ」「興奮だ」「酔っているのだ」と叫び、あるいはほかの何かの力のせいにする。ユダヤ人とまったく同じように、時代と共に進歩しながら、死んだ形式に満足しているのである。

教会は回心していない人々でいっぱいである。幻がなければ民は滅びる。幻が起こるほどの力がないなら、ひとりの魂を救うほどの力もない。

幻の賜物は、とくに終わりの時のために約束されていた。『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。

『その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう』（使徒二・一七～一八）。

主に感謝する。その時が今来ている。神は、正しいしかたでみもとに来る者たちに、ご自身を現しておられる。特別な賜物のうちに、あらゆる病のいやしのうちに、聖霊の力のあらゆる満ちあふれのうちにである。何百人もの人が驚くべき幻を見ている。そしてこれらのしるしがみことばに伴う所ではどこでも、あらゆる階層の人々がキリストのもとに群がって来る。

タルメージ博士は、ある日曜日の朝、ブルックリン・タバナクルに入って行き、会衆にこう言った。「私は天国に行って来ました。今帰って来たところです。私が見たことをお話ししましょう」博士が天国で最初に会ったのは、三十二年前に亡くなった母親だった。博士には母親がわかり、母親と話をした。博士は、地上にいたときに知っていた多くの人に会った。また、一度も知らなかった

多くの人を知らされた。すまいの戸口には、金の戦車につながれた白い馬が立っていた。ほかの馬は通りを駆けていた。そのほかにも、さまざまなものを見た。

多くの名高い男女、あらゆる階層の神の子供たちが、天からの知らせを地にもたらしている。これらのことは、ほかの多くの時のしるしと共に、主が間もなく来られることを示している。主はご自分の聖徒たちのために、また失われた世を罰するために来られるのである。主を愛すると告白している人々が、神の力を知るのに十分なだけ主の御霊を持つことができるように、主が助けてくださるように！

『幻がなければ民は滅びる』（箴言二九・一八）。

パウロは、宮で祈っているうちに入神状態に陥った、と言っている（使徒二二・一七）。パウロは、主の幻と啓示について語ろう、と言った。パウロは第三の天にまで引き上げられた。それが、からだのままであったか、からだを離れてであったか、パウロには知ることができなかった。しかし神がご存じだった。パウロは驚くべきことを聞き、見たのである（第二コリント一二・一～四）。

それは驚くべき経験だった。パウロは、魂もからだも共に引き上げられたのか、霊がしばらくからだを離れたのか、知ることができなかった。しかし、引き上げられていることははっきりわかっていて、それが神の力であることを知っていた。パウロは、教会が集まるとき、啓示を受けた者がいたら、それを告げるように、と言った（第一コリント一四・二六）。

第三十六章　キリストの再臨についての説教

数年前に語った説教

『わたしたちは主の言葉によって言うが、生きながらえて主の来臨の時まで残るわたしたちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう。

『すなわち、主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえる。

『それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう』（第一テサロニケ四・一五～一七）。

『主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる。

『その時、主は神を認めない者たちや、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し、

『そして、彼らは主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰を受けるであろう』（第二テサロニケ一・七～九）。

『それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった。これが第一の復活である』（黙示録二〇・五）。

『またそのとき、地のすべての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るであろう』（マタイ二四・三〇）。

『預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、立ってはならぬ所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）』（マルコ一三・一四）。

『この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する』（黙示録二〇・六）。

復活という主題は、思いめぐらすほどに壮大で栄光に満ちている。それは私たちのすべての教会で教えられ、説き明かされるべきである。それは教会の望みであり、預言者たちと使徒たちの説教の主題だった。

復活とあがないこそ、新約聖書の基調である。

私たちは、自分たちが終わりの時に生きていること、主の来臨が近づいていることを信じている。

一八七八年十一月、ニューヨークで預言についての会議が開かれた。各州から、また海の向こうから、百四十人の監督と牧師が集まった。キリストの来臨に関する預言を比べ合わせるためだった。会議は、ダニエルの『七十週』（ダニエル九・二四）がほぼ満ちたと結論した。

ダニエルは、キリストの来臨の前に起こるべきこととして御使が示した多くのことを語った。それらはすでに起こっている。

ダニエルは、火と洪水によって人命と財産が失われることを語った。町がまるごと押し流され、何千何万という家族が、これらの破壊の力によって家を失い、一文なしにされた。昨年は暗黒の年と呼ばれた。事故と疫病によって、二十万人以上が永遠へと押し流された。恐ろしい地震では、十万人以上がのみ込まれた。

『そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい』（マタイ二四・三三）。

イエスがオリブ山ですわっておられると、弟子たちがひそかにみもとに来て言った。『どうぞお話しください。いつ、そんなことが起るのでしょうか。あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか』（マタイ二四・三）。

イエスは答えて言われた。『人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者がわたしの名を名のって現れ、自分がキリストだと言って、多くの人を惑わすであろう』（マタイ二四・四～五）。

今日、世界には自分がキリストだと称する者が三十二人いて、そのひとりひとりに大勢の信奉者がいるという。その中で最も名高いのは、おそらくペルシャ人のアブドル・バハであろう。彼はアッカの谷に住み、バハイ運動の創始者である。バハイ運動は偽りの宗教の体系で、この数年のうちに合衆国じゅうに広がった。そして、わが国で最も教育があり教養のある男女の多くを、彼の祭壇の前にひれ伏させてきた。

ニューヨークやボストンの最も裕福な人々の中には、この偽キリストに面会するためだけに、わざわざペルシャまで旅をした人々もいる。彼らはこの教派の教師や信奉者を合衆国に連れ帰り、その教えを広めるための資金を出した。こうしてバハイ運動はわが国を席巻し、今日ではすべての大都市に見られ、千二百万人の信奉者を持つに至っている。

『また、戦争と戦争のうわさとを聞くであろう。注意していなさい、あわててはいけない。それは起らねばならない』（マタイ二四・六）。

わが国の南北戦争は国土を血に染めたが、そのときから、ほとんどすべての国が戦争の恐ろしさの中に投げ込まれてきた。一八九五年の中国と日本との大きな戦いに続いて、一八九八年には米西戦争が起こった。わが国とスペインとのあいだの戦雲が消え去るか去らないかのうちに、世界は別の血なまぐさい争いの詳しい報道を読んでいた。今度は英国とボーア人との戦いで、南アフリカは三年のあいだ恐ろしい殺戮に浸された。

そのちょうど二年後に日露戦争が起こった。それは近年のすべての戦いの中で、最も血なまぐさいものだった（何年も前に語った説教）。

この十二年のうちに、地上の大国のうち八つが戦争という恐ろしい大殺戮に加わった。しかも戦いのたびに、激しさと失われる人命が増してきた。このことを悟るとき、人は最も厳粛な思いで、こう問わずにはいられない。終わりはいったいどうなるのか、と（今の一九一六年の情勢を考えてみよ）。

今日、世界の列強は表向きは平和を保っている。しかし東の大陸では、一度ならず戦争の地響きが聞こえた。戦争が起こっていたかもしれない。そうならなかったのは、ロシアとトルコと中国で、革命という強い内部の力が働いているからである。共産主義、虚無主義、社会主義が、最も強固な王座の土台を脅かしている。今日、王冠をいただく者で、暗殺者の弾丸から安全な者はひとりもいない。

『民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちに、ききんが起り、また地震があるであろう。しかし、すべてこれらは産みの苦しみの初めである』（マタイ二四・七～八）。

地震

『あちこちに地震があるであろう』（マタイ二四・七）。

さて、地震という主題に来ると、こういうことがわかる。この二十五年のうちに、ほとんどすべての国が、一度あるいは何度も、大きな自然の激変に見舞われてきた。しかも地震は驚くべき割合で増えている。ここでは、人命と財産に大きな被害を与えたものだけを挙げる。

一八九九年、ロシアで地震があり、六つの村が壊滅し、ほかの七つの村が被害を受けて、千人が死んだ。同じ年に小アジアでは、同じ原因で千六百人以上が死に、ほかに多くの人が負傷した。

私たちの多くは、サウスカロライナ州の地震を覚えているだろう。チャールストンの町の四分の三が壊滅し、百人ほどが死んだ。この同じ地震の揺れは大西洋を越えてフランスとイタリアに及び、イタリアでは二千人が死んだ。

地震と火山の噴火による人命と財産の恐ろしい損失を、ある一年、一八九二年の分だけ挙げてみよう。

トルキスタンでは一万人が死に、一万五千軒の家が倒れた。同じ年のまた別のときには、七百人近くが死に、千人が負傷した。セントビンセント島では、火山の噴火で二千人が死んだ。マルティニークを壊滅させたペレー山の噴火は、みながありありと覚えているだろう。そこでは二千人が永遠へと押し流され、多くの人が負傷した。これがみな、一年のうちのことなのだ！　何と恐ろしい記録だろう！

今世紀の最初の三年に、地震は四十八回あった。続く三年ごとに同じ数があるとすれば、世界がそれまで続くなら、今世紀には千六百回という驚くべき記録に

なる。

『戦車はその備えの日に、火のように輝く。戦車はちまたに狂い走り、大路で互いに押し合う。彼らはたいまつのように輝き、いなずまのように飛びかける』（ナホム二・三〜四）。

（自動車のこと）自動車が現れて、もう十五年近くになる。大きな明かりを付けた、大きくぎこちないこの戦車が、絶えず通りを行き来し、互いに押し合い、いなずまのように走る。私たちはそれにすっかり慣れてしまった。そのため、それもまた、終わりの時についての神の預言の成就であることを、忘れてしまっている。

往来と知識の広がり

『終りの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、あちこちと行き巡り、そして知識が増すでしょう』（ダニエル一二・四）。

今日、少しでも注目すべき出来事が起こると、それは三十分で世界じゅうに電信で伝えられる。だから、この数年のうちに知識がどれほど驚くほど進んだかが、たやすくわかる。こうしてダニエルの預言の幻が成就しているのである。

昔のエデンの園に初めて現れた蒸気機関車が、今日、煙を吐き、音を立てて行き来している。大きなダムを造るための資材を運んでいるのである。そのダムはユフラテ川に新しい水路を作り、それによってメソポタミアを潤す。そこはもともとアブラハムに与えられた地で、今日、シオニスト協会によって再び人が住むようになっている。

そして知識が増す

私たちは一世代のうちに、牛車から飛行機にまで進んだ。手紙と駅馬車のほかに通信の手段がなかったところから、巨大な新聞と、電話と電信にまで進んだ。それらは絶え間なく報道と知識を流し、ますます広く行き渡って、知識の大木から舞い落ちる木の葉のように地を覆っている。このことを立ち止まって考えるとき、ダニエルの預言の成就がたやすくわかる。

飛行船

今日、さまざまな国で空を飛び回っているのが見られる飛行船も、終わりの時のもう一つのしるしである。預言者イザヤは幾世紀を見通して、この終わりの時の飛行船を見た。そしてこう問わずにはいられなかった。『雲のように飛び、はとがその小屋に飛び帰るようにして来る者はだれか』（イザヤ六〇・八）。

御使はダニエルに、終わりの時まで、その備えの日まで、これらの預言を封じておくように告げた。ダニエルやナホムやほかの預言者が語ったキリストの来臨のしるしは、この五十年になるまで、すべての時代を通して封じられていた。

今日、列車は川の上も下も走っている。『川々の門は開かれる』（ナホム二・六）。『戦車はちまたに狂い走り、大路で互いに押し合う』（ナホム二・四）。主は言われる。『すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない』（マタイ二四・三三〜三四）。

これらの戦車、すなわち客車は、その備えの日に走ることになっていた（ナホム二・三〜五を見よ）。これらのことは刈入れの終わりに起こる。それは今私たちが生きている時であり、最後の招きが与えられている時、異邦人の時代が閉じる直前の呼び出しの時である。これらの列車は全土を走るのではなく、エルサレムにまで達することになっていた。そしてユダヤ人は、パレスチナで、その備えを示すこれらのしるしを見ることになっていた。それは、時代の終わりとキリストの来臨が近いことを知るためだった。今、列車はヨッパからエルサレムまで走っている。路面電車もそこを走っているといわれ、下水道をはじめ、近代のあらゆる設備が今そこに見られる。そこを通る車両や列車は、一つ残らずユダヤ人と私たちに、雷のような声で語っている。それは神からの警告の声で、こう言っている。刈入れの時は間もなく過ぎ、夏は終わる。備えの日々は閉じようとしている。キリストが来られる。迎えに出なさい、と。

イエスはいちじくの木を、またパレスチナのユダヤの民をのろわれた。雨と露はその地から取り去られた。地は荒れ果てた荒野となり、二千年のあいだそのままだった。主はユダヤ人に言われた。いちじくの木が再び実を結び、パレスチナ

に後の雨と露が降る。ユダヤ人であれだれであれ、それを見るなら、人の子の来臨が近く、戸口にまで来ていることを知るであろう、と。

愛する読者よ、聖地を訪れる人はみな、今日これらのしるしを見ている。この数年、神は雨と露を送っておられる。いちじくの木は実を結び、ほかの多くの種類の果物も実っている。花は咲いている。ユダヤ人は何千人も帰って行っている。これは最も強いしるしの一つである。ああ、主をほめたたえよ。私たちはこの最後の世代の終わりに生きていて、主の定められたこの時に応じて、信仰の仲間にその分を与えることを許されているのだ。この同じ時に、主はご自分の御霊を注がれて、霊の力の雨を私たちに与えると約束された。また、刈る者のかしらであるキリストが、栄光の雲と聖霊の力のうちに私たちと共におられ、収穫を刈り取り、麦を集めてくださると約束された。神に感謝する。私たちも刈る者のひとりになる喜びにあずかるのである。

主は私たちに言われる。『これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前に立つことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい』（ルカ二一・三六）。

今、闇の力を押しとどめている御使たちは、間もなく、神の怒りの四方の風を解き放つよう命じられる。この恐ろしい患難の時は何年か続く。私たちは三年半ほどと考えている。それからキリストはご自分の花嫁をお連れになって戻って来られ、千年の統治を始められる。そのとき、ユダヤ人はキリストを受け入れる。

『残っている人々も主を尋ね求めるようになる』（使徒一五・一七）。さばきは千年続く。主にあっては、一日は千年のようである。六日、すなわち六千年はほぼ過ぎた。最後の、第七の日が今来ようとしている。聖徒たちはこのさばきの日のあいだずっと、キリストと共に座して、諸国民と御使たちをさばく。『聖徒は世をさばくものであることを、あなたがたは知らないのか』（第一コリント六・二）。主は今、この働きのためにご自分の小さい群れを備えておられる。読者よ、あなたはその数に入るだろうか。

イエスは終わりの時のしるしについて語られて、こう言われる。

『いちじくの木を、またすべての木を見なさい。はや芽を出せば、あなたがたはそれを見て、夏がすでに近いと、自分で気づくのである。このようにあなたがたも、これらの事が起るのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい』（ルカ二一・二九～三一）。

『そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである』（マタイ二四・一四）。

宣教師たちの話では、福音は地上の人の住む所すべてに送られている。こうして今日、聖なる民の力は地上に散らされている。どの国民、どの部族、どの民、どの国語の中にも、イエスが地上で罪をゆるす権威を持っておられることの証人がいる。こうして今日、主を知る知識が全地を覆っている。少なくとも、理屈の上の知識としては。

ユダ族の獅子が勝利を得られた。力ある勝利者は、勝利から勝利へと進んで行かれる。今日、主は川から地のはてまで王の笏をふるっておられる。今日、主はわが国じゅうで、ご自分の民の心の中を治めておられる。

主にある愛する兄弟よ、元気を出しなさい。終わりが、そしてあなたのあがないが近づいている。私たちが初めて信じたときよりも、ずっと近づいている。全世界が回心する時が早く来るようにと祈る人々がいる。牧師でさえそう祈る。それは神のみことばの教えに反している。イエスは、人々はますます悪くなり、いっそう悪を行うと言われる。ノアの時には、人々は食い、飲み、めとり、悪の道を進んで行った。まさに洪水が来て彼らをことごとく押し流したその日まで、そうしていた。ロトの時には、人々は買い、売り、建て、神の使者たちをあざけった。神は御使たちを送られて警告されたが、火と硫黄のあらしから救われたのは、わずか八人だった。人の子の来臨のときも、ちょうどそのようである。

イエスは、教会の中に背教が起こらなければ、その時は来ないと言われる。偽教師が起こり、信心深い様子をしながらその力を否定する。こうした人々を避けなさい。今日、そのような教師は何百人もいる。彼らは盲人を手引きする盲人である。共に地獄へ落ちて行く。これはキリストの来臨の目に見えるしるしである。

先の戦争このかた、わが国の教会は霊の力を失い続ける一方で、立派な会堂を建てて富み、会員の数をふくらませてきた。しかし、人々を回心させる努力はほ

とんどしていない。回心していない者を会員に迎え入れているが、それは死んだ重荷にすぎない。

イエスは御使たちをつかわされて、毒麦の中から麦を集められる。愛する友よ、私たちが麦の中に入れるよう、神が助けてくださるように。

『日は暗くなり、月はその光を放つことをやめ、星は空から落ちる』（マタイ二四・二九）。これらのしるしは、驚くほどはっきりと成就した。天の花火の壮大な光景を見た人々が、何千人も生きている。そのとき天と地は火の玉に覆われた。人々は、さばきの日が来たと思った。大変な騒ぎが広がり、男も女も子供も、あわれみを求めて叫んだ。自殺した者もいれば、正気を失った者もいた。

多くの人が、太陽が暗くなった日のことを覚えている。十時に暗くなりはじめ、十二時にはランプをともすほど暗くなった。鶏はねぐらにつき、蛙は鳴きはじめ、牛は鳴きながら納屋の庭に入って来た。月は満月だったが、白い紙と黒いビロードの見分けがつかないほど暗かった。それが十四時間続いた。『よく聞いておきなさい。これらの事が、ことごとく起るまでは、この時代は滅びることがない』（マタイ二四・三四）。これらのことをすべて見てきたこの時代の人々は、生きてキリストの来臨を見る。主の来臨のときに起こる預言のほかは、どの預言も成就しつつある。

また霊的な意味でも、義の太陽は、ほとんどすべての教会で沈んでしまった。あるいは、教会から出て行ってしまった。

月の光はたいへん青白い。黒い霊の闇が、全土に垂れこめている。その闇は、さわれるほど濃い。年を経たへびは、多くの輝く光、すなわち星を引きずり落としている。

多くの輝く光が、恐ろしい闇の中で消えて行く。最もしっかりと立っているように見え、キリストの誉れと栄光のためならほとんどどんなことでも耐え忍ぶだろうと思っていた人々がいる。その人々が、力を持たず形だけを持つ人々と妥協しているのを、私たちは見る。主は、そのような人々を避けなさいと言われた。ほかの多くの人々は狂信に走り、惑わしを受け入れて、罪に定められることになる。このような時は、いまだかつてなかった。

狂信的な教師たちが、大都市に蜂のように群がっている。そしてあらゆる所を巡り歩き、人を惑わし、人に惑わされている。できることなら、選民をも惑わそうとするだろう。

苦難の時代が来ている。人々は、私たちのキリストの栄光の福音の信仰に耐えられない。

人々は、もう長くはそれを許しておかないだろう。あらゆる手を使って、それを押しつぶそうとしている。

主は、昼のあいだに働きなさい、だれも働けなくなる夜が来るから、と言われた。『完全に勝ち抜いて、堅く立ちなさい』（エペソ六・一三）。

私たちは今、その時を通っている。霊のききんが私たちに臨んでいる。しかし主は、その時にも私たちを支えてくださり、主に信頼する者たちを顧みてくださると言われた。

ラオデキヤの教会が主の口から吐き出されつつあるのを、私たちは見ている。主の御霊は彼らから取り去られた。次の招きは、さばきへの招きである。

クリスチャンと称する人々の塩は、その大部分が、救うききめを失ってしまった。

御使たちを押しとどめ、世を恐ろしい破滅から守っているのは、小さい群れにすぎない。神の僕たちは間もなくみな印を押される。それから主は、世の光である花嫁を取り去られる。花嫁はしののめのように美しく、太陽のように輝き、旗を立てた軍勢のように恐るべき者である。

キリストは完全な救い主である。キリストは、アダムの堕落によって失われたすべてを回復するために来られた。アダムは堕落したとき、聖なる性質を失い、からだには病と死が来た。もしキリストが魂とからだを回復することがおできにならないなら、完全な救い主ではないことになる。信じる者の魂は、この世で完全にされ、清く白くされる。からだは、キリストの来臨のときまで病を免れない。

キリストが十字架につけられたとき、『墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた』（マタイ二七・五二～五三）。

パウロは言う。『わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう』（ピリピ三・二一）。キリストが最後に征服される敵は、死である。墓の中にいる者たちが主の御声を聞く時が来る。『善をおこなった人々は、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人々は、さばきを受けるためによみがえって、それぞれ出てくる』（ヨハネ五・二九）。悪をおこなった人々は、自分たちの父である悪魔のかたちでよみがえるのである。

エリヤは金の車に乗って、魂もからだも共に天に上った。エノクはつむじ風に乗って上った。キリストは、十字架に釘づけにされ、墓に納められたその同じからだで、天に上られた。

パウロは、ある意味では完全であり、別の意味ではまだ完全でないと語っている。パウロは心においてはすでに完全である。しかし、『なんとかして死人のうちからの復活に達したい』（ピリピ三・一一）と言う。そのとき、魂とからだが一つにされて、パウロは完全になるのである。不死を着せられるとき、聖徒たちは死と地獄と墓とに対する勝利を叫ぶ。

『見よ、わたしはすぐに来る』（黙示録二二・一二）。主は、ご自分に真実なすべての人から、心からの応答を聞くことを期待しておられる。『アァメン、主イエスよ、きたりませ』（黙示録二二・二〇）。神のまことの子供たちは備えができている。死の時であれ、雲の中であれ、花婿が来られるのを、朝も昼も夜も待ち望んでいる。あかりを整えて、ともしている。神の怒りのあらしが、失われ滅びた世に恐ろしい勢いで襲いかかる前に、友人や隣人を集め入れようと、あらゆる努力をしている。

先触れが『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』（マタイ二五・六）と叫ぶときが来る。ああ、天の王が来られるのを見るとき、喜びに満ちた私たちの目の前に、どれほどの光景が開けることだろう。花婿は王の衣をまとわれ、天の世界のあらゆる栄光と金の車と共に来られる。輝くすべての御使が付き従い、小羊の妻である花嫁を、金の都、新しいエルサレムへと送って行く。聖徒たちの霊も、自分のからだを受けに戻って来る。ああ、墓よ、私たちのからだを返せ。力ある勝利者が墓の錠を開けられる。眠る聖徒たちの洞穴にまで響き渡る叫びと共に、墓は開け放たれる。眠っていた聖徒たちは、罪のもたらしたあらゆる影響から解き放たれて、ちりの床から出て来る。老い、白髪、しなびた手足、からだのゆがみ、死、病は、みな罪の影響である。イエスは、私たちを罪ののろいから救うために、また堕落によって失われたすべてを回復するために来られた。

イエスは、男盛りの力と勢いにあふれた人生の盛りに死なれた。私たちは主に似る者となる。この卑しいからだは変えられて、栄光に満ちた神の御子と同じかたちにされる。それは脱ぐためではなく、その上に不死を着るためである。

ああ、それは何という幸せな再会になることだろう。家族も友人たちも、そろって古い教会墓地からよみがえり、互いに長く抱き合う。その抱擁はとこしえに続く。母と子が、夫と妻が、兄弟姉妹が、友と隣人が、牧師と群れが再会する。

生きている者はたちまち変えられ、罪の影響から解き放たれ、天の栄光を着せられる。そのとき、何百万という聖徒たちから、大いなる勝利の叫びが上がる。「死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。墓よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。しかし感謝すべきことには、神は死と地獄と墓とに対する勝利を賜わったのである」（第一コリント一五・五五、五七）。

ああ、純金の大通りを行進するときの喜びよ！　私たちは声を上げ、私たちを買い取り、ご自分の尊い血で洗ってくださった小羊に、栄光の歌を歌う。その声は大水のとどろきのように、激しい雷鳴のように響く。手には立琴としゅろの枝を持ち、頭には冠をいただく。イエスはご自分の手で、輝く冠を私たちの頭に載せてくださる。それから私たちは、天の万軍のあらゆる音楽と共に、都の大通りを行進する。万軍は言う。『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる』（黙示録一九・六）。私たちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意をしたからである。

イエスは私たちを大きな白い御座に導かれて、言われる。「父よ、ここにわたしと、あなたがわたしに賜わった子たちとがいます」（ヘブル二・一三）。私たちは御座の前にひれ伏し、冠を主の足もとに投げ出して言う。『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主』（イザヤ六・三）。『ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい』（黙示録五・一二）。

私たちはみな、小羊の婚宴の席に着く。ああ、何という一団だろう。使徒たち、殉教者たち、父たち、母たち、子供たち、友人や隣人、主にある兄弟姉妹、牧師と回心者たちがいる。ああ、何という再会、何という集いになることだろう。食卓に沿って、明るく輝く顔を見渡すのである。そして、愛する救い主がご自分の子供たちにほほえんでおられるのを見るのだ！　愛する友よ、あなたはそこにいるだろうか。

第三十七章　戦いの備えと諸国民の結集についての説教

『見よ、わたしがユダとエルサレムとの幸福をもとに返すその日、その時、
『わたしは万国の民を集めて、これをヨシャパテの谷に携えくだる。
『もろもろの国民の中に宣べ伝えよ。戦いの備えをなし、勇士をふるい立たせ、兵士をことごとく近づかせ、のぼらせよ。
『あなたがたのすきを、つるぎに、あなたがたのかまを、やりに打ちかえよ。弱い者に「わたしは勇士である」と言わせよ』（ヨエル三・一～二、九～一〇）。

『末の日になって、主の家の山はもろもろの山のかしらとして堅く立てられ、もろもろの峰よりも高くあげられ、もろもろの民はこれに流れくる。
『多くの国民は来て言う、「さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。彼はその道をわれわれに教え、われわれはその道に歩もう」と。律法はシオンから出、主の言葉はエルサレムから出るからである。
『彼は多くの民の間をさばき、遠い所まで強い国々のために仲裁される。そこで彼らはつるぎを打ちかえて、すきとし、そのやりを打ちかえて、かまとし、国は国にむかってつるぎをあげず、再び戦いのことを学ばない。
『彼らは皆そのぶどうの木の下に座し、そのいちじくの木の下にいる。彼らを恐れさせる者はない。これは万軍の主がその口で語られたことである』（ミカ四・一～四）。

ヨエル書とミカ書からのこの二つの引用は、少し矛盾しているように聞こえる。人々がそう言うのを、私は聞いたことがある。しかしこの二つの言葉は、違った二つの人々と、違った二つの時のことを言っているのである。

第一の『あなたがたのすきを、つるぎに、あなたがたのかまを、やりに打ちかえよ』（ヨエル三・一〇）は、「戦いの用意をせよ」という意味である。それは今のこの時、戦争の時のことを言っている。

第二の「つるぎを打ちかえてすきとし、やりを打ちかえてかまとせよ」（ミカ四・三）は、「大いに耕す時のために用意をせよ」という意味である。

一方は、世がかつて聞いたこともない最大の戦いに備えよということである。もう一方は、戦争がもはやなくなる時のことを言っている。

この説教の最初の聖句は、戦いの備えをなせ、勇士をふるい立たせよ、諸国民を戦いのために集めよと言う。それは、私たちが今生きているこの終わりの時のことを言っている。異邦人の時代が満ちる、あるいは閉じようとしている時である。

あなたがたは、恐ろしい殺戮と虐殺を見ている。死に至る憎しみが、人々に互いを殺させ、滅ぼさせているのを見ている。神は、力あるいくさ人のように立ち上がられた。神はエルサレムから大声で叫ばれ、呼ばわられる。それは、すべての国民が死闘のうちに集められ、血が川のように流れるまで続く。

ヨエル書の聖句では、その呼びかけはまず聖地に向けられている。そこで全能の神の大いなる戦いが戦われるのである。それは神の大いなる日の戦いである。そのとき御使は太陽の中に立って、空のすべての鳥に呼びかける。神の大宴会に来て、すべての勇者、世の大いなる者、富める者の肉を食べよ、と。鳥たちは招かれて、血を飲み、肉を食べ、世の王や君たちのしかばねで肥え太る。その王や君たちは、主の大いなる輝かしい日に、間もなく倒れるのである。

主は目をさまされ、いくさ人のように叫ばれる。主はシオンから大声で叫ばれ、エルサレムから声を出される。諸国民が、小羊と、天から来るその軍勢とに対するこの大いなる戦いのために集まって来るとき、天も地もふるい動く。

ヨハネは言う。『わたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているかたがおられた。その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった。彼は血染めの衣をまとっていた。そして、天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った』（黙示録一九・一一～一四）。

ああ、主をほめたたえよ！　聖徒たちはすでに天に移されている。小羊とその花嫁との婚姻は、天と地をことごとく揺り動かした叫びとハレルヤのうちに行われた。壮麗と栄光と偉大さに満ちた大いなる婚宴は終わった。そして聖徒たちは、恐ろしい患難のあいだ、主と共に地上でさばきを行ってきたのである。

今や悪の杯は満ちた。人々は、もう十分すぎるほど天の神に逆らってきた。神は怒りのうちに立ち上がられた。地のすべての国民が、ヨシャパテの谷に集まって来る。主の主、王の王が、天のすべての軍勢を率いられて、勝ち誇って空から馬で下って来られる。エノクは、主が無数の聖徒たちを率いられて来られるのを見た。反キリストは自分の軍勢を集め、神の子供たちを滅ぼそうとしている。彼らは全軍をエルサレムに集めて攻めようとする。しかしそのとき主が天から来られ、この大いなる戦いを戦われる。聖徒たちは戦う必要がない。主ご自身が戦われるのである。

それから千年王国が打ち立てられ、サタンはその千年のあいだつながれる。そのあいだ、のろいとその影響は取り去られている。あらゆる雑草やあざみ、病を生むようなものなども、みな取り去られている。『彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない』（イザヤ一一・九）。人々が戦争をやめ、悪魔が人々の心から取り除かれる時が来る。

今日、人々はまるで、互いの血に飢えた野獣のようである。生きている者と死んだ者を一緒に埋めている。疫病もすでに、その恐ろしい猛威をふるいはじめている。

これほど急に大戦争が起こったのを、あなたがたは聞いたことがあるだろうか。この何年も、最も才能ある人々が、だれが最も恐ろしい武器を手に入れられるかを競って、発明を重ねてきた。

神は、津波やほかの破壊の力を押しとどめてこられた。神の御使は、それらを押しとどめて叫んだ。「神の僕たちが神の印を押されるまで待て」（黙示録七・三）。

ヨエル書の章の分け方はよくない。第三章の初めの節は、第二章の終わりの節の続きであって、そこから切り離すべきではない。

『終りの時には、わたしの霊を注ごう』（使徒二・一七）。それは、神が聖霊によってバプテスマを授けられ、聖なる民の力を散らされることである。

神は、その日わたしは怒りのうちに立ち上がる、と言われる。神のさばきが地に臨むとき、悔い改める者もいる。終わりの時には、わたしの霊を注ごう。神は、異邦の民をふるい立たせよ、と言われる。

神はご自分の聖徒たちに印を押しておられる。しかし、その印を押す時は、もうほとんど終わりかけている。

聖徒たちが新しい言葉を語ることは、主が来られるしるしである。

「聖なる民の力は散らされる」（ダニエル一二・七）。これは、陶器師の手にある粘土のような人々である。彼らはただの粘土で、自分で自分を少しも制していない。全能の神が、彼らを通して語られる。『わたしは、異国の舌と異国のくちびるとで、この民に語るが、それでも、彼らはわたしに耳を傾けない』（第一コリント一四・二一）。

民に宣べ伝え、告げ知らせよ。ラッパを吹け。聖なる山で警報を吹き鳴らせ。危険とは何か。主の日が来る。それは近い。

神の民はラッパを吹いている。シオンで警報を吹き鳴らしている。危険の合図とは何か。主の大いなる日が近い、ということである。

聖徒たちがまだこのことを知らないなら、今こそ知るべき時である。知らないで、どうして合図ができるだろうか。どうして人々に危険を警告できるだろうか。

つるぎが来るときに人々がのがれるなら、それでよい。しかし、とにかく警告しなさい。もし私たちが警告しなければ、彼らの血の責任は私たちの手に求められる。異邦の民をふるい立たせよ。勇士を呼び集めよ。兵士を整列させよ。備えをさせよ。世界の大いなる争いのために、戦いの武器を用意せよ。このようなことはかつてなかったし、これからも二度とない。

鋼鉄が足りなくなる。いくら作っても間に合わない。諸国は絶えず新しい軍艦を建造し、恐ろしい武器を数多く製造している。こうした軍艦を造るには、大量の鋼鉄が要る。何という巨大な船だろう。どの国も、最も大きな船を造り、最も恐ろしい武器を発明しようとしている。

それでも人々は「平安、平安」と叫んでいる。この偽りの平和と無事のさなかに、死と戦争と破壊が、つむじ風のようにやって来た。

鋼鉄が不足している。人々はどこからそれを手に入れるのか。間もなく、その需要に応えられなくなる。そのとき人々は、農家の庭や古い納屋や馬小屋や物置など、あらゆる所を探し回って、古いすきやかまを求める。打ちかえてつるぎやりにし、隣人を殺すことのできるものなら、何でも探すのである。

この栄光あるアメリカにも、党派や分派が起こる時が来る。労働が資本に、またほかの党派や分派が互いに立ち向かう。出る者にも入る者にも、安全はなくなる。そしてそのとき、獣の刻印がなければ、物を買うことも売ることもできなくなる。刻印がなければ死が待っている。そして獣の刻印を受けることは、第二の死を意味する。

出る者にも入る者にも、安全も隠れ場もなくなる。

『人がししの前を逃れてもくまに出会い、また家にはいって、手を壁につけると、へびにかまれるようなものである』（アモス五・一九）。

これは、その地に毒のあるへびや爬虫類や虫がはびこり、それらが人々のあいだに放たれることを示している。それらは、かみつき、刺し、滅ぼす恐ろしい力を持っている。

だから、あなたがつるぎと疫病から逃げて家の中に隠れようとしても、壁に手をつけると、毒へびにかまれる。出る者にも入る者にも、安全はない。

人々のあいだには、恐ろしい、死に至る憎しみが生まれる。人々は手に手を取って徒党を組み、互いに殺し滅ぼし合うための鋼鉄の武器を作る。

つい先ごろ、列強が鋼鉄の不足に悲鳴を上げているという記事を読んだ。あなたの隣人が、自分の隣人を殺すために、古い鋼鉄のかけらを探し回るようになる。

ヨーロッパでは今、若者や少年を召集して戦わせ、滅ぼしている。

今こそ死の眠りから目をさまし、いのちを与えてくださるよう、神に呼び求めるべき時である。

神のみことばと時のしるしによれば、私たちは今、この恐ろしい時代の初めに生きている。この文を読む人の多くは、私が書いたよりもはるかに多くのことを見るだろう。あなたとあなたの子供たちは、死に倒れるか、さもなければ、この恐ろしい患難の時を通ることになる。それは、かつてなかったし、これからも二度とないほどの患難である。

最もすぐれた聖書研究者の多くは、ダニエル書十一章はスルタン、すなわちトルコの支配者たちを指していると言う。

『彼は海と麗しい聖山との間に、天幕の宮殿を設けるでしょう。しかし、彼はついにその終りにいたり、彼を助ける者はないでしょう』（ダニエル一一・四五）。

そして、オバデヤ書もまた彼のことを言っていると考えている。

ダニエル書のこの箇所は、反キリストのことを言っているのではない。反キリストは、阻止している者が取り除かれるまでは現れず、権力を握ることもないからである。それは、キリストが異邦人の中から御名を負う民を選び出されるまでである。キリストが来られて、ご自分の花嫁を連れて行かれるまでである。

彼は終わりの時に、その終わりに至る。そのとき大いなる君ミカエルが、自分の民のために立ち上がる。いのちの書に名をしるされた者はみな救われる。これらのことを知る賢い者は、大空の輝きのように輝く。

トルコに対する戦いの激しさを見ると、トルコは首都コンスタンティノープルを失い、今にも本拠地を去らなければならなくなるかもしれない＊。そうなれば、トルコがまだ支配している聖地へ、急いで政府を移すのは、ごく自然なことだろう。トルコはそのために、ほとんどどんな建物でも使うことができる。

トルコ人は大きな宮殿、あるいは建物を建てているが、それを秘密にし、何のためのものかをだれにも言わないと伝えられている。

『彼は海と麗しい聖山との間に、天幕の宮殿を設けるでしょう。しかし、彼はついにその終りにいたり、彼を助ける者はないでしょう』（ダニエル一一・四五）。

しかし彼は、そこに長くはとどまらない。少しずつ衰えて、ついにはすっかり滅ぼされる。

聖地は、終わりの時まで異邦人に踏みにじられることになっていた。そして、その時にキリストが来られる。ユダヤ人はエルサレムに群がり集まり、再び聖地

を所有する。

患難を通った者の大部分は、もう十分に苦しみ、その預言者の声に耳を傾ける用意ができているだろう。

御使たちが解き放たれるなら、私たちが飛び立つのも間もなくである。これらのことが次々と起こりはじめるとき、私たちは間もなくこの世から取り去られる。最悪の苦難は、聖徒たちが取り去られた後に来る。反キリストはほむべきキリストを否定し、人々に自分の刻印を受けさせるか、さもなければ殺す。キリストと共に行かない者は、これを通るか、その中で倒れるかしなければならない。

イエスは、御名を負う民、ご自分の花嫁となる民を選び出すために来られる。主は来られて、花嫁を天へ連れて行かれる。大いなる婚宴が行われる。その後、花嫁となった人々はキリストと共にその御座に着き、この恐ろしい患難のあいだ、さばきを行うのを助ける。

花嫁の一団と共に上って行かなければ、どんなに恐ろしい死と殺戮と破壊が待っているかを見よ。

＊（一九一六年、悲しみはさらに深い）

キリストが来られるときに上って行く者は、小羊の妻である。キリストは戻って来られて、エルサレムの荒れた所を建て直される。そのとき土地はみな肥えていて、人々はたいして働く必要がない。千年王国の時代には、いつも聖なる野営集会のようになる。

イエスが最初に来られるとき、花嫁のほかにはだれも主を見ない。世は花嫁を憎み、少しも顧みない。そしてイエスは、花嫁を連れて行かれるのである。

キリストは、いなずまが東から西にひらめき渡るように速く来られる。まさにそのように速く、世が酔いしれて眠っているあいだに、花嫁の一団をさらって行かれる。

しかし次に主が来られるときには、すべての人がそれを知る。「すべてのひざはかがみ、すべての舌は告白する」（ピリピ二・一〇～一一）。すべての人の目が主を見る。そして、中傷していたすべての舌が、これらの人々こそ神に選ばれた器だったと、世の前で告白しなければならなくなる。

この誉れは聖徒たちのものである。彼らは、私たちが正しく、自分たちが間違っていたと告白しなければならなくなる。神はご自分の花嫁を、たいへん誇りにしておられる。神の子供たちは今、世の多くのものを自ら断っている。私たちの多くはこの世では貧しく、苦しい暮らしをしているが、それでも私たちは御国の相続人である。この古い世界に変化が来ようとしている。神はあなたに、見よと呼びかけておられる。もう一歩も先へ進むな。これ以上、傷だらけのキリストのからだを踏み越えて行くな。それが最後になるかもしれないのだ。

一度目には花嫁は引き上げられ、二度目には白い馬に乗って来る。イエスはオリブ山の上に立たれ、主を刺しとおした者たちは主を見る。あなたは今、心の奥底で、イエスがキリストであることを知っている。私たちがひとり残らず真剣であることを知っている。私たちが、生まれながらの人が聞く以上のことを聞いていることを知っている。私たちが得る知恵は、惜しみなく与えてくださる神からのものである。何にもまして私が祈ってきたのは、「知恵を与えてください」ということだった。時のしるしに目を向けさえすれば、盲人同然の人にでも見える。

ダニエルは、賢い者は主が来られる時を悟ると言っている。

あなたは、自分は信じないと言うかもしれない。あなたは信じたくないのだ。そしてその日は、夜の盗人のようにあなたを襲う。悪い者はだれも、イエスの来臨のしるしを悟らない。光の子であるあなたがたは知っているので、その日が不意にあなたがたを襲うことはない。神はダニエルに、失われた世の姿を示された。その中のだれも、主が来られる時を知らないのである。

賢い者とはだれか。主の来臨の時を知る者である。「多くの人を義に導く者は、星のように輝く。しかし賢い者は、大空の輝きのように輝く」（ダニエル一二・三）。賢い者は悟るのである。

墓に目を向けるな。目を上げよ。見よ、主は来られる。ああ、いと高きところでは、神に栄光があるように。ああ、あがない主よ、来てください。早く来てください。

付記

「世界大戦の悲劇、血なまぐさい光景に満ちる
「ドゥオモン要塞に突入したフランス軍の部隊は、ドイツ軍の突撃によって全員が戦死した。
「兵士たちは暗い地下のトンネルの中で、手持ちの探照灯とナイフと爆弾を使って戦っている。
「砲撃で地下の陣地が崩れ、何百人ものフランス兵とドイツ兵が生き埋めになった。
「恐ろしい殺し合いへの欲に駆られて、何十人もが正気を失った。
「麻酔なしで腕や脚を切断している外科医たちが報告している。傷ついたフランス兵とドイツ兵が、立つこともできないのに、ナイフで戦い続けているという。
「あるフランス軍の大尉の報告では、六百四十メートルほどの戦線に沿って、七千の死体が積み重なっていた」（一九一六年、合衆国の日刊紙からの抜粋）
一九一六年五月

ニューヨークで今叫ばれている「備え」

写真は、先週の土曜日にニューヨークで行われた、「備え」を訴える大がかりな示威行進である。ニューヨーク公共図書館の前を通る市民たちが写っている。二十人ずつ横に並んだ行進の列が二十マイルにわたって続いたことを思えば、その規模の見当がつくだろう。

諸国民の結集

衆目の一致するところ、ヨーロッパの戦争は、その始まりから、人類がかつて戦った最も巨大な争いとして記録されてきた。このような諸国民の結集は、かつて地上で見られたことがなかった。十八か月の戦いの後、ウィルソン大統領は一九一六年一月二十九日、オハイオ州クリーブランドでの演説で言った。「一年前には、これほど大規模な戦いが丸一年も続くことはありえないと思われたが、今や一年半も続いており、終わりはまだ見えない」（『ワシントン・ポスト』紙、一九一六年一月三十日）

戦争の犠牲

「近代の世界が知る最も暗黒の十八か月！　その結果は、人生の盛りにある二百九十九万人が死に、二百二十万人以上が捕虜となり、九百八十三万人以上が負傷したということである」（インターナショナル・ニューズ・サービス）
「こうして全世界に、ラッパの音と戦いの警報が聞こえている。『世界の三分の二が戦争をしている』のである。私は、私たちが日々、きわめて入り組んだ危険のただ中を歩んでいることを知っている。世界は燃えていて、火の粉がどこに落ちてもおかしくない」とウィルソン大統領は言った（『ワシントン・ポスト』紙、一九一六年一月三十日）。
預言に告げられた時（ヨエル三・九、一四、黙示録一一・一八、エレミヤ二五・三一、三三）。これらの聖句には、二つのことがはっきり見られる。第一は、主の日が近づくと、世界の国々が戦争のために巨大な準備をするということである。
『戦いの備えをなし、勇士をふるい立たせ、兵士をことごとく近づかせ、のぼらせよ。あなたがたのすきを、つるぎに、あなたがたのかまを、やりに打ちかえよ。弱い者に「わたしは勇士である」と言わせよ』（ヨエル三・九〜一〇）。今日の出来事を見ている人がこれを書いたのだとしても、国際情勢をこれ以上正確に描くことはできなかっただろう。

ハルマゲドン

諸国民の今度の争い、すなわちヨーロッパの戦争は、恐ろしく、広範囲に及ぶものである。それでも、聖書が告げる諸国民のハルマゲドンではない。しかしそれは確かに、世界の諸帝国の最後の大衝突の先触れである。

第三十八章　テキサス州サンアントニオとカリフォルニア州オークランド

テキサス州サンアントニオでの神の驚くべきみわざについて、少し書いておく。力はしばしば、ペンテコステの日のように臨んだ。人々は、あらしに吹かれるように神の力に揺り動かされ、羽のように軽く見えた。その顔は輝き、ステパノのように天を見上げていた。そして、イエスが神の右に座しておられる幻を見ていた。神は、イエスが言われたとおり、多くの驚くべきしかたでご自身を現され、『きたるべき事』（ヨハネ一六・一三）を私たちに示してくださった。集会の最後の夜には、始まりから夜遅くまで力が会堂に満ちていたので、ほとんど閉会することができなかった。会堂に入って来た者をひとり残らず、主がとらえられたようだった。罪人たちは深く罪を示され、泣きはじめ、祭壇の前に駆け寄った。間もなく会堂全体が一つの祭壇となった。会堂のあちこちで、人々が泣きながらキリストのもとへ進んで行った。多くの人が、立ったまま、あるいは歩き回りながら、聖霊のバプテスマを受けた。何人かの兵士が救われてバプテスマを受け、それから腰掛けや説教壇に上って、説教し、預言しはじめた。彼らは神の声のように異言で語った。ある者は解き明かしをして、神の大きな働きを語った。幼い子供たちも説教し、預言していた。私は本当に、自分たちがこのまま携え上げられるのではないかと感じた。

牧師である愛するフレッド・ローマン兄弟は、神に満たされていた。彼は気高い兵士だった。実にりっぱに私たちを支え、戦いを勝利の門まで押し進めるのを助けてくれた。人々は、天国へ行くことをよく話していた。私は天国を引き降ろしたいのである。

集会に来ていたイングランド国教会の主教とその夫人が、会堂に入って来た。説教壇へ半分ほど進んだところで、主教は神の力に打たれ、通路にとどめられた。そして、神の臨在の驚くべき現れに驚嘆して立ちつくした。牧師たちはみな、昔の祭司たちのように立ちつくした。神の栄光と臨在が主の宮に満ちたので、動くことも勤めをすることもできなかったのである。

これ以上は耐えられないと私は感じた。

力強くサンアントニオを訪れる神

（ここには、サンアントニオの牧師フレッド・ローマンが『ワード・アンド・ウィットネス』誌に寄せた、集会でのいやしや幻についての報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

サンアントニオで働かれる神

（ここには、同じ集会についてのフレッド・ローマンのもう一つの報告が載っていて、遠くから来た人々のいやしを伝えているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

オークランドでの集会

テキサス州サンアントニオでの集会を閉じると、夫と私はカリフォルニアへの長い旅に出た。私たちはオークランドに着いた。二十六年前、私は病弱な夫と、ふたりの若い娘と、ひとりの雑用係を連れて、この町に来たのだった。私たちはまったく見知らぬ者だった。雨季で、野営していた人々はみな天幕をたたんで去ってしまっていたが、私たちには大きな天幕が一つと小さな天幕が六つあった。望みの光はほとんどなく、主のほかに頼る者もいなかった。何人かの聖徒が、天幕で何が起きているのかを見に来た。彼らは間もなく、神が力強く働いておられることを知った。町で最も影響力のある男女も何人か来た。その中には、ジョージ・モンゴメリー、スミス医師夫妻、トリップ弁護士がいて、私たちの経済的な重荷を取り除いてくれた。ほかの人々も、できるかぎりやって来た。何千人もが救われ、いやされ、聖霊のバプテスマを受けた。

私は思い出した。主はそのとき、サンフランシスコとオークランドと周辺の町々を襲う大地震を、私に示された。また、私が生きながらえて、その廃墟の上で働くことも示された。今、これほどの年月を経て、私はその預言が成就したのを見た。

愛するモンゴメリー兄弟姉妹は、サンノゼで集会を始める前に、ビューラ・ハイツにある美しい安らぎの家で一週間休んでいくようにと、親切にも強く勧めてくれた。しかし、私たちが来ることを知った愛する聖徒たちは、一週間だけでもいいから集会を開いてほしいと強く願った。私たちは、長い年月の後に愛する人々に会いたいと切に願っていた。そこでモンゴメリー姉妹のもとに一晩泊まり、それからオークランドの劇場で五日間集会を開いた。救われた人々、いやされた人々、墓から救い出された人々に大勢会い、喜びの時となった。モンゴメリー兄弟姉妹とスミス医師夫妻は、主に大いに用いられた。これほど短いあいだに、これほど御霊が注がれ、これほど多くの人がいやされ、救われ、御霊に満たされたのを見て、だれもが驚いた。

カリフォルニア州オークランドでのエター夫人の集会

（『トライアンフス・オブ・フェイス』誌から転載）

私たちは、エター夫人がこの町に六日間とどまったあいだ、オークランドでの夫人の集会のすべてに出席する恵みにあずかった。集会は、十二番街三八七番地のキャッスル・ホールで開かれた。快適で風通しのよい会場で、数百人が座ることができる。集会には多くの人が集まった。エター夫人は、新生、キリストにある勝利の生活、二重のいやし（魂とからだのいやし）、主の来臨、またそれに関連した主題について、聖書の講話をした。夫人はしばしば一時間以上も続けて、神のみことばから教えた。神の力が初めから終わりまで聴衆をとらえていたので、終わる前に席を立つ人はほとんどいなかった。

祭壇での集いは目ざましいものだった。大勢の人が、霊の祝福とからだのいやしを求めて前に押し寄せた。いやしを求める人があまりに多かったので、エター夫人がひとりひとりと祈ることはできなかった。しかし夫人は、ほとんど毎回の祭壇での集いで大勢の人に手を置き、その人々のために信仰による祈りをささげた。その多くはたいへん重い病気のようだったが、祈りがささげられた後、外見が大きく変わったのを、私たちはたびたび目にした。苦しみから驚くほど解放されたと言う人々の声も、多く聞いた。ときには、その場でエター夫人が語った教えによって、神の光が魂に入ることがあった。そのとき顔の表情が変わるのを見るのは、実に驚くべきことだった。

苦しんでいる人々のうち、かなり多くは遠くから来ていて、祈ってもらった後に帰って行った。そのため、その後は会うことがなかった。

私たちは、耳が聞こえないのをたちまちいやされた若い婦人と話をした。十五年前から耳が少し遠く、この三年はひどく遠かったという。普通の声で話しても私の言うことが聞こえ、彼女はたいへん幸せそうで、賛美に満ちていた。エター夫人は、イエスの名によって、耳の聞こえない悪霊に彼女の耳から出て行くよう命じたのだった。

私たちの知っているある男は、五十年以上も患っていた難聴をいやされた。私が普通の声で話すと、彼は、私が大声で叫んでいるにちがいないと思った。通りで人々のそばを通るとき、その会話が聞こえるのを彼は喜んだ。口蓋裂を患っていて、はっきり話すことのできなかったひとりの少年が祈ってもらった。その後ははっきり話せるようになって、少年はたいへん喜んだ。

祭壇には、ほかにも多くの働き人がいた。エター夫人のそばに近づけない病人たちは、しばしばこれらの兄弟姉妹に祈ってもらい、いやされたと証しをする人も多かった。祭壇での集いには神の力がはっきり現れていたので、魂をキリストに導くのはたいへんたやすく思われた。人々がまったく素直にキリストを受け入れるのを見ることができた。ペンテコステのバプテスマを受けた人々もいた。

ときには、賛美と喜びの驚くべき波が聴衆を打ち、多くの顔が天の喜びに輝いた。あるときには、驚くべき天の賛歌が起こり、多くの声がそれに加わった。自身もかなりの音楽家で、このようなものを聞いたことのなかったある婦人が、あとで驚きと喜びをもって私に言った。「きっと御使たちが手伝っていたのだと思います」

この記事を書きはじめてから、ある婦人（私にとってはほとんど見知らぬ人）が電話で言った。「地上にいるあいだに、あの集会のときほど天国の近くにいることは、二度とないと思います」そして、エター夫人についてこう付け加えた。「夫人がいつも私たちにイエスを指し示し、だれにも自分に目を向けさせなかったのは、本当にすばらしいことでした」そうだ、神をほめたたえよ。それは本当だった。夫人は、自分が説教しているあいだ祈りによって支えてくれるよう、クリスチャンたちに願った。

主にあがなわれた多くの人々の顔を見、交わりの手を取り合うことのできた恵みのゆえに、主をほめたたえよ。主の力は驚くべきものだった。信じる者たちを聖霊のバプテスマへと導き、信仰の経験を確かなものにし、病人をいやした。大勢の人が、かつてないほどの力と賜物とをもって、みことばを宣べ伝えに出て行った。

編集者
C・J・モンゴメリー夫人

第三十九章　ロサンゼルスの世界野営集会

力強いしるしと奇跡

テキサス州ダラスで集会を開いていたとき、スコット兄弟がその集会に出席するためにカリフォルニアから来た。神は彼に幻をお与えになった。そして、私がカリフォルニアへ行って大きな野営集会を導くこと、彼がその準備をすべて整えることを示された。ボズワース兄弟も出席するよう頼まれたが、行くとは決して約束しなかった。

主は、聖徒たちを集めるという特別な召しを私に与えてくださっていた。私はそのことをスコット兄弟に話し、世界野営集会を開く準備をしているとも伝えた。しかし、そのことについて祈ると、主が私に何をするよう召しておられるのかを、私たちはみな感じ取った。また、世界野営集会はカリフォルニア州ロサンゼルスで開かれるべきだということも感じ取った。

スコット兄弟は帰途につき、道々、また国じゅうで集会を宣伝し、私が来ることを知らせた。彼らは驚くほどみごとに準備を整えてくれた。天幕を手に入れて張り、物質面の運営にかかわるあらゆることを整えた。よい照明をはじめ、私たちが快適に過ごせるように、すべてを用意してくれた。愛するスタッド兄弟も、あらゆる準備を手伝った。ふたりの兄弟は、物事を便利で快適にするために、あらゆる犠牲を払ってくれた。

州じゅうから、また外国からも、何千人もが集まった。これは終わりの時における最大の聖徒の集まりだったと、私たちは信じている。会長のスコット兄弟は、二百人の牧師が交わりと愛のうちに壇上に座っていたと述べた。主はそこにおられ、力強いしるしと奇跡をもって、みことばを良しとされることを示された。とくに、いやしと、聖霊と火とによるバプテスマのうちにそれが現れた。人を打ち倒す力も大いに現れ、多くの人が力によって打ち倒された。

幻や啓示を受けた人々もいた。信頼のおける牧師たちによれば、二千人が手を置かれて祈ってもらった。多くの牧師と伝道者が、私が手を置いたことによって、大きな力と賜物を受けた。これらの人々はみな、大きな信仰をもって出て行った。汚れた霊と悪霊を制する力を得て、それを追い出し、病気をいやすことを期待していたのである。その後、私はこの人々の多くから、その働きについてのよい知らせを受け取った。また、驚くほどいやされた多くの人々からも証しが届いた。

大勢の人が、見たこと、感じたこと、聞いたことを語りながら、この知らせを陸に海に運んでいる。ああ神よ、私たちがみな携え上げられるときに会うまで、この人々を進ませ続けてください。

大きな集まり

世界野営集会は、疑いもなく、この終わりの時における、聖霊のバプテスマを受けた聖徒たちの最大の集まりだった。十時の集会は、すべて私に任されていた。神の力が驚くほど注がれたので、その集会は昼も夜も続いたことだろう。しかし、ほかの集いのために、二時には閉じなければならなかった。私が集会の霊的な部分を受け持つことが、あらゆる所で告げられていた。そのため人々は、ほとんどすべての州と土地から、私に会い、いやされようとしてやって来た。病人と求道者に前に出るよう呼びかけると、彼らは何十人、何百人と押し寄せた。だれもが池に入ろうとしているかのようだった。何百人もが魂とからだをいやされた。ある日、「栄光の雲」が私たちを覆い、主は多くの奇跡を行われた。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、死にかけていた人が起き上がって歩いた。御霊によって歌う人々もいた。幻が与えられ、異言による言葉も与えられた。あちこちで人々が救われ、いやされた。私は二時の集会のために、やめなければならなかった。人々は私を、大きな壇から下りる階段へ導いて行った。その

とき私は立ち止まり、飢え渇いて切に求めている大勢の魂を見つめた。すると神の力が私に臨んだ。私が両手を天に上げてそこに立っていると、聖霊が群衆の上を吹き渡られた。私は言った。「主は今、愛するあなたがたの多くを救おうとしておられます。今、救われたい人はみな、前に出て来なさい。私がここに立ち、『生きた信仰』によって、イエスの血をあなたがたに振りかけます」四方八方から、人々が壇へ押し寄せた。彼らは泣き、叫びはじめ、何十人もが、ひざまずくこともなく回心した。例外は、全能の神の力に打たれて倒れた人々だけだった。そこにいただれも、このようなことを見たことがなかった。もし夕方まで集会を任されていたら、さらに何百人も回心したにちがいない。しかし私は、ほかの集会に譲らなければならなかった。

別の日、私が壇から下りて来ると、多くの人々がとても悲しそうに立っていた。私が病人のために祈っているあいだ、近づけなかった人々である。彼らはできるだけ私の近くに詰め寄り、私の手に触れようとし、話しかけようとした。私は立ち止まって彼らを見た。すると力が私に臨み、彼らの上を吹き渡った。私は両手を上げ、イエスを仰ぐように、上を見上げるように、手と顔を神に向かって上げるようにと、彼らみなに言った。そして、私が小羊の血を彼らの上に振りかけるので、みないやされるのだと告げた。ああ、神に栄光あれ。いやしの力が吹き渡った。多くのいやしの奇跡が行われ、人々は救われ、バプテスマを受けた。

それから二年ほどたって、ロサンゼルスでの私たちの大会で、世界野営集会でいやされた人々の驚くべき証しを数多く聞いた。中でも目ざましいふたりの人は、私が壇の階段に立っていたあの日にいやされたと言った。

証し

ロサンゼルス東三十三番街五一〇番地のガートルード・ベリー嬢は、その日にいやされたひとりだと証しをした。彼女には大きな腫瘍があり、体重は百三十六キロを超えていた。間もなく腫瘍は消え、体重は四十五キロ近く減った。サンフランシスコの病院で医師をしている彼女の兄弟が不安になり、彼女がブライト病だと思い込んだ。そこで尿を調べると、消えていく腫瘍の痕跡がその中に見つかった。それは彼女のからだから出て行ったものだった。彼女は今、からだも健やかになり、神はロサンゼルスの伝道所で、彼女をご自分の栄光のためにお用いになっている。

世界集会に私がいた最後の日、彼らは午後と夜の集会を私に任せてくれた。心の正直な人々はみな、そこに現れたほどの主の力と臨在を、見たことも感じたこともないと言った。

何百人もがいやされた。何百人もが救われ、立ち返り、あるいは聖霊のバプテスマを受けた。何百人もが奉仕のための力や賜物を受け、あるいはこれまでになく賜物を燃えたたせられた。私はおよそ二十の州で集会を開いてきた。そして、いやされた人々の力強い証しを数多く聞いた。彼らがカリフォルニア州ロサンゼルスの世界野営集会で見聞きした驚くべきことを語るのも聞いた。

私は、戻って来てほしいという招きを何度も受けた。そして昨年、一九一五年の十月に、ガー兄弟をはじめ多くの人の招きに応えて戻った。このときも大きな大会を開き、神は力強い奇跡を行われた。二年余り前のあの大集会で出会った多くの聖徒に再び会えたのは、大きな喜びだった。あの大集会の実りは、永遠だけが明らかにするだろう。

ヘイウッド兄弟の新聞から転載したロサンゼルスの集会の記事

「いやしを行う神の力は奇跡的だった。病人が遠くからも近くからも連れて来られた。神の謙遜な僕であるエター姉妹を通して、大勢の人が神の力に触れられた。姉妹の素朴な信仰は、多くの人に解放をもたらした。足の不自由な人は歩き、目の見えない人は見えるようになり、耳の聞こえない人は聞こえるようになった。がんが治り、腫瘍とサナダムシが消え、水腫と肺病の人々がいやされた。

「信仰が足りなくて、いやされなかった人も多かった。しかし、いやされた人々のいやしは実に目ざましいものだった。あるときには、エター姉妹が天幕を去りながら両手を天に向かって上げると、多くの人がいやされた。

「ある日の午後、罪人たちに強い罪の自覚が臨んだので、多くの人が壇へ駆け寄り、たちどころに救われた。それは、どこであっても、まず見られたことのない光景だった。神の力によって打ち倒された人があまりに多く、大天幕が戦場のように見えることもあった。ときには力が雨のように降り、天の賛歌があたりに満ちた」

カリフォルニア州ロサンゼルスでの驚くべきいやし

（ここには、エリザベス・Ｄ・ヴァン・ホーン夫人が腫瘍、ブライト病、水腫、心臓病からいやされた証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

注　この愛する姉妹は夫と共に、持ち物をすべて売り払ってエジプトへ渡った。神はその暗い地で、ふたりを驚くほどお用いになってきた。ふたりとも今もなお戦場にいる。

いやしについての驚くべき証し

（ここには、ヴィクトリア・フライマーク夫人の証しが載っていて、自分のいやしと、ドイツ系ユダヤ人の夫の回心を伝えているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

スコット兄弟の証し

ロサンゼルスでのあの驚くべき集会から、もう三年近くになる。その集会で神にいやされた人々の証しが、私たちのもとに数多く届いている。彼らは四方八方へ出て行き、主がどのように自分をいやしてくださり、愛と力で満たしてくださったかを語っている。

スコット兄弟は一九一三年の集会の会長だった。彼は主に用いられて人々を呼び集め、私にその集会を導くよう頼んだ。一九一六年のロサンゼルスの集会で、彼は二度か三度前に出て来た。そして、三年前の世界集会で主が両側の脱腸をいやしてくださったことを、証ししたいと言った。彼は長年それに苦しみ、たびたび危険な状態になっていた。その集会のあいだに、彼は何かのはずみでそこをひどく痛めてしまった。しばらくのあいだ、死ぬか手術を受けるほかないように見えた。彼の話では、私たちが手を置いて祈ると、たちまちいやされた。破れていた所はもとどおりになり、それ以来、脱腸帯を着けたことはない。彼はあらゆる点で完全にいやされたのである。

アンダーソン兄弟のいやし

アンダーソン兄弟はオレゴン州ポートランドから来た。神のいやしについて、あまり信仰も知識もなかった。しかし、ヴァン・ホーン姉妹も死にかけた状態でポートランドから来ていた。死に装束まで持って来ていたことを、私たちは知っていた。彼女がいやされたことを知ると、彼は、自分にもいくらか望みがあるかもしれないと考えはじめた。この世の望みはすべて尽きていたのである。彼は敗血症にかかっていて、膿が流れ、肉を食い進む醜いできものに覆われていた。中には、手のひらほどもあるものがあった。神経はすっかり参っていて、眠ることもできず、それが頭にまで障っていた。彼は、自分に望みがあるかと私に尋ねた。回復したいのちを神の栄光のために用いていただくようささげるなら、主は今すぐいやしてくださると、私は答えた。彼は「そうします」と言った。私は彼の魂とからだのために祈り、生きた信仰によって、イエスの血を彼の全身に振りかけた。神をほめたたえよ。血が染み込んだ。私は彼に手を置いて毒をしかりつけ、汚れた霊どもを追い出した。すると疫病はやみ、血はきよめられた。

神の力が彼を打ち、彼は倒れて死人のように横たわった。私は彼をそこに横たわらせたままにしておいた。しかし主をほめたたえよ。翌朝には、できものはすっかり消えていた。あの腐ったできものの傷跡さえなかった。手や腕の、大きなただれたできものがあった所の肉は、幼い子供の肌のようになっていた。主が奇跡を行われたことは、だれの目にも明らかだった。これはロサンゼルスでのことである。少しのちに、コネチカット州ロングヒルで私たちの集会を開いた。そのとき、天幕のうしろでひとりの兄弟が立ち上がった（それがアンダーソン兄弟

だった)。彼は会場に着いたばかりで、聖霊に満たされていた。顔を輝かせながら、彼は語った。神は、主が自分のためにしてくださったことを証しさせるために、自分を大陸の向こうから送ってくださった。主は自分を墓へ、早すぎる死へと下らせることはなさらず、全身を丈夫にしてくださった。そして、神が自分にどんなに大きなことをしてくださったかを語らせるために、自分を遣わしてくださった。魂とからだの救いの喜ばしい知らせと、イエスがすぐに来られることを宣べ伝えさせるためである。

何か月もたってから、私はこの兄弟がシカゴとフィラデルフィアで証しをするのを聞いた。彼はまったく健康で、神に栄光を帰していた。

スタッド兄弟のいやし

愛するスタッド兄弟が、坐骨神経痛とほかの神経の病にかかった。その苦しみはたいへん大きかった。彼はきっと死ぬだろうと思われ、ますます悪くなっていった。多くの人が彼のために、また彼と共に祈ったにもかかわらずである。望みは、彼を天幕に連れて来ることだった。連れて来られたとき、彼は死人のように見えた。私は彼に、元気を出しなさい、あなたは死ぬことなく、生きながらえて神に栄光を帰すのだと言った。私たちが手を置いて祈ると、彼は間もなく歩き回って主をほめたたえ、私がほかの人のために祈るのを手伝っていた。

第四十章　一九一三年のコネチカット州ロングヒルの野営集会（その一）

ロサンゼルスの野営集会にいた聖徒の多くは、愛する夫が耐えていた悲しく恐ろしい苦しみを知っていた。私はふたりの看護婦を連れて出発した。夫の世話を手伝ってもらうためである。太平洋から大西洋へ、さらにブリッジポートに近いコネチカット州ロングヒルまでの長い旅だった。着いたとき、夫はほとんど死にかけていた。しかし私は、ずっと元気になっていた。最善の世話を受けながらでも、旅は私にはつらかった。しかし今は、私たちの心はすべて夫に向けられていた。夫は一度に数分しか休むことができず、夫が身動きするたびに、私も揺さぶられた。私はすぐにロングヒルへ行けるものと思っていた。集会の責任者が、すべて整えておくと約束していたからである。私たちのもてなしの用意も、集会の用意も、大勢の人を泊めて食事をさせる手配もである。ところが驚いたことに、彼は私たちを、ある伝道所の人々のもとに預けた。その人々は彼をまったく信頼しておらず、少しも彼を助けようとしなかった。私たちはそこに一週間ほど置かれた。そのあいだに私たちはその人々の愛を得て、彼らは集会に行き、いろいろな面で私を助けてくれた。私は、ブリッジポートから数マイル離れた会場へ出かけて行った。すべて用意ができているものと期待していたが、代金を払って下宿する所さえ見つからなかった。野営地は町からかなり離れていて、下宿屋もなく、人々が眠る所もなかった。ようやくひとりの婦人が私を泊めてくれたが、愛する夫のための部屋はなかった。そして今や、聖徒たちが各地から集まりはじめた。最初に来たのは、カナダからの五人ほどの一行だった。彼らは途方に暮れて私に言った。「どうなさるのですか。こんな状態では、とても耐えられませんし、集会など開けないでしょう」私は答えて言った。「集会は国じゅうに宣伝されていて、人々は私に会えると思って、あらゆる所から来ています。私が集いのすべてを任されると告げられているのです」「ですから私は、聖徒たちが集まって来るまで、ここにとどまります。それから、何ができるか考えましょう。ロングヒルでは、集会を開かなければなりません」私は言った。「勇気を出さなければなりません。あなたがたも助けに来てください」間もなく、ひとりの姉妹が委員たちを連れてニューヨークから来た。次はニューヨークのある有名な場所で野営集会を開いてほしいというのである。私は、今はロングヒルのことしか考えられないと答え、ここでの集会を手伝ってほしいと頼んだ。姉妹は、私が助けを必要としていることを主が示してくださったので、用意をして来たのだと言った。彼らはすぐに取りかかり、たくさんの天幕を注文し、食堂の天幕の手配もした。ひどく嫌気がさして、家に帰ってしまった人も何人かいた。しかし、かなりの数の人が残って私を支えてくれた。そして、私たちが『心をこめて働いた』（ネヘミヤ四・六）ので、建物ができあがった。家では何不自由なく暮らしていた年老いた聖徒たちが、干し草を運んで寝床を作った。私の泊まっていた所のちょうど向かいで、白髪の老夫婦が干し草の寝床をこしらえているのを見た。雨が降っていて、何もかもが湿って濡れていた。私は泣いた。そして、私たちがキリストのために苦難を忍ぶのをいとわないことのゆえに、主をほめたたえた。私は叫んで、「神は集会に、大きな力と栄光をもって来られます」と彼らに言った。部屋が見つかるまで、私は一週間近く、愛する夫を町に残しておかなければならなかった。私は泊めてくれた婦人の信頼を得ていたので、彼女は一階の客間を私に貸してくれ、できるかぎり快適に整えてくれた。夫が連れて来られるとき、聖徒の一団が列車まで迎えに行った。私は行けなかった。夫は物事のありさまと、私から離れていることをひどく気に病んでいたので、うわごとを言うようになっていた。迎えに行った愛する人々にも、まったく気づかなかった。家に着いたときには、私のことさえわからなかった。私はその場で死んでしまうかと思った。しかし、死んだり嘆いたりしている暇はなかった。戦いが始まっていたのである。主の軍勢が東から西から、北から南から、主を助けて勇士を攻めるために集まって来ていた。主の軍勢の将がそこにおられ、戦いを導かれ、この時代の最大の勝利を私たちに与えようとしておられた。私たちはみな、あらゆる試練と苦難と自

己否定を、実に穏やかに、忍耐強く通り抜けた。そのことが、私たちを深い信頼と愛と交わりのうちに結び合わせた。それで私たちはみな、イエスのまことの兵士であること、キリストのために苦難を忍ぶことを、特権と感じた。これこそ、毎晩、主の火が野営地の中と上に見え、栄光の雲が絶えず野営地を覆っていた理由である。天幕は幾度も主の栄光に満たされた。カナダのオタワから来た兄弟で、編集者であり発行者である人の記述と、愛するシッソン姉妹の記述を、よく読んでいただきたい。熱狂も興奮もなかった。しかし、すべてが厳かで静かなとき、栄光の波が風のように会衆の上を吹き渡った。復活と力と軽やかさが人々を貫き、彼らは足が地から離れるほど持ち上げられた。そして天幕のあちこちで、御霊によって踊りはじめた。若い男も若い女も、老いた人もおとめも、みな目を閉じていた。目に見えない楽器を奏でている人も多かった。最も聡明で才能があり、高い教育を受けた牧師たちの何人かも、聖なる踊りに加えられた。一度に十四人である。そのうちの何人かは、驚くべき言葉を語った。これらの牧師たちは、たびたび死人のように倒れた。その中には、A・フレイザー兄弟と、カナダから来たひとりの兄弟がいた。主の栄光があまりに大きいので、主が私たちを携え上げに来られ、私たちが移されるのだと感じたことも幾度もあった。私はどこへ行っても、大きな試練と苦難に耐えなければならない。どの書き物でも、私はそのほんのわずかしか語っていない。通り抜け、打ち破らなければならない鉄の扉と大きな城壁がある。しかし主は、ロングヒルの野営集会について私が書いたことを世に送り出す務めを、私に負わせられた。そして主は、主の御霊によってこれを読むすべての人を、大いに祝福してくださるだろう。

時事と時のしるし

一九一三年のコネチカット州ロングヒルの大会

（ここには、オタワの編集者・発行者A・W・オットーが『ヘラルド・オブ・トゥルース』誌に寄せた、天の賛歌を描く報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第四十章　一九一三年のコネチカット州ロングヒルの野営集会（その二）

百五十人がいやされる

（ここには、前の節に続いて、A・W・オットーの報告が載っていて、集会で見たいやしを伝えているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

イエスの名によって行われた驚くべき奇跡

（目撃者が『エバンジェル』誌の読者に送る公開書簡。一九一三年六月十九日、コネチカット州ロングヒルの世界野営集会にて）

コネチカット州ロングヒルの世界野営集会で神がなさっていることの一端を、みなさんに伝えたい。神の力がこれほどはっきりと注がれている所に居合わせたことは、これまでなかった。多くの人が聖霊のバプテスマを受け、多くの人が異言を語っている。罪人が救われ、背信者が立ち返る力強い例もいくつかある。

神はあらゆる面で働いておられるが、とくに病人のいやしにおいて働いておられる。最初の二週間で、三百五十人が祈ってもらった。ひとりの宣教師が、調べたうえで、いやしを丹念に表にまとめた。次に挙げるのは、その表の一部である。神経痛、神経衰弱、るいれき、歩行の障害、虫垂炎、不潔恐怖症、失明、難聴、水腫、腫瘍、甲状腺腫、脱腸、流行性感冒、カタル、腎臓病、心臓病、気管支の病、腸の病、肝臓病、脊椎のずれ、脊椎の湾曲。

いやしがあまりに速く増えていくので、とても数えきれない。集会は三週目に入り、神の力はますます増し加わっている。ペンテコステの働き人たちが大勢集まり、御霊による深い一致がある。この集会のきわだった特色は、みことばの力強くまっすぐな教えである。熱狂がなく、ペンテコステの働きにあちこちで入り込んだ誤りが退けられている。神ご自身が、神の箱を支えておられるのである。尊い御名をほめたたえよ。

神は私たちみなを御霊の一致のうちに保っておられ、その一致は時を追うごとに聖められ、深められている。神が私たちの心に注いでくださり、唇から出させてくださる賛美は力強い。そして、この賛美の高まりに乗って、聖霊は出て行かれ、そのみわざをなさる。神をあがめる歌は、もろ刃のつるぎである（詩篇一四九・六）。町（霊のシオン）の城壁は救いであり、その門は誉れであることを、私たちは身をもって確かめている（イザヤ六〇・一八）。私たちは賛美によって入る（詩篇一〇〇・四）。敵は、聖霊による賛美の声の前に倒れる（歴代下二〇・二一～二三）。

酔いつぶれたひとりの哀れな罪人が、自動車で集会に連れて来られた。祈りの後、彼は祭壇の下で酔って眠り込んでしまった。酔いがさめると、彼は起き上がって神を呼び求めはじめた。その夜、彼は回心し、聖霊のバプテスマを受け、いやされた。次の夜、彼は妻を連れて来て、妻も救われた。それから息子も救われた。

ひとりの黒人の娘がいた。十三年前、手術の後に腹壁が破れ、それ以来、大腸の中身が絶えず脇から出てくるようになった。彼女は一年間入院し、何度も手術を受けていた。その娘が今、神の力によっていやされた。

二十五年来の甲状腺腫が、手を置かれるとともにいくらか小さくなり、今ではすっかりいやされている。ミード夫人は、十五年間歩くのが不自由だった。片方の膝はリウマチで、もう片方の脚には静脈瘤があり、十五年間膝を曲げることができなかった。祈ってもらうと、夫人はたちまち解放された。

オンタリオ州エレンデールから来たひとりは、事故のために七年間目が見えなかった。片方の目はつぶれ、もう片方も見えず、この二年は完全に失明していた。その人は聖霊のバプテスマを受けた後、初めて太陽を見た。そのバプテスマには、二つの大きな火の玉と一つの小さな火の玉が伴い、その小さな火の玉が目に入った。それ以来、彼は太陽を見ることができ、ほかの物も日ごとによく見え

るようになっている。この人の場合、いやしは徐々に進んでいる。オタワのある兄弟もそうである。彼は三十八年間カタルを、十四年間腸の障害を、四年間腎臓病を患っていた。

この手紙では、神のいやしの働きをこれほど大きく取り上げた。各地の哀れな病む人々が励まされ、いやしを神に信頼するようになることを願うからである。神は人をかたよりみることをなさらず、こう言われる。『あなたがたの信仰どおり、あなたがたの身になるように』（マタイ九・二九）。『わたしは主であって、あなたをいやすものである』（出エジプト一五・二六）。

私自身の魂にとって、この集会の最も驚くべき特色は、神の臨在を示す栄光の輝き（シェキナ）である。神はしばしばハレルヤの聖歌隊のうちに来られる。それとともに、天の輝きがすべてのクリスチャンの顔に宿る。それはまことに言い表しようのないものだが、次の聖句の豊かな注解となっている。『わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう』（ピリピ三・二一）。

神がご自分の尊い僕を支えておられるさまは、まことに驚くべきものである。その僕とは、この野営集会を任されている、私たちの愛するエター姉妹である。六十九歳の姉妹に、神は日ごとに力を加えてくださり、いやしの賜物を用いさせておられる。神が支えてくださらなければ、若い男の活力でも耐えられないような重い働きの中で、神は姉妹を支えておられるのである。

追記　今朝の集会に、回心していないひとりの母親が、回心していない十七歳の娘を連れて来た。娘は目をいやしてもらうために、三百五十マイルの道をやって来たのである。二歳のときから、まったく目が見えなかった。エター姉妹が手を置いて祈っていると、視力が与えられた。母と娘が泣きながら抱き合い、喜びのうちに互いを見つめ合う姿は、実に胸を打つものだった。娘は覚えているかぎり初めて、母の顔を見たのである。

回心していない人々が、これほど多くの場合に、いやしを求めてイエスに信頼するようになったことを、私たちは神をほめたたえている。ときには、救われた神の民よりも、彼らのほうがよく信頼しているように見える。ああ、『自分の民』のあいだに信仰が足りないとは、なんと忌まわしいことだろう。『彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった』（ヨハネ一・一一）。『人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか』（ルカ一八・八）。

さらに追記　またも目ざましいいやしだ！　ひとりの父親が、生まれつき耳が聞こえず口のきけない息子を、遠くから連れて来た。息子は教育のための施設に入っていたが、ひどく偏見にとらわれ、憎しみに満ちるようになっていた。父親が会場に連れて来たときには、野獣のようだった。父親は、息子が振りほどいて森へ逃げて行かないよう、押さえていなければならなかった。イエスの名によって手が置かれるとすぐ、悪霊どもが出て行った。息子の顔はやさしく愛らしくなり、耳が聞こえるようになった。そして今、話すことを学んでいる。神に栄光あれ！　霊の潮は刻一刻と満ちてきている。

六月二十七日　この野営集会の手紙に、付け加えなければならないことがある。神が野営地で、まことに驚くべきしかたで現れてくださったからである。昨日の朝、神の臨在と力が突然私たちに臨んだ。神を礼拝し、あがめていると、ひとりが『重い栄光』（第二コリント四・一七）の下に床に倒れた。それから、ひとりの牧師が進み出て、異言で力強い言葉を語った。まだ語り終えていないように見えたが、彼もまた倒れ伏した。

すると、激しい風のような音とともに「力」が臨み、会場じゅうで人々がその下に倒れた。壇の上とその周りで、私は十四人を数えた。会場全体でどれほどの人が倒れたかは、とても言えない。主に打ち倒される者は多かった。続いて、どんな言葉でも描き尽くせない光景が起こった。神の光と力が増していく中で、神の民は神を礼拝した。ときには、鳩のくうくうと鳴く声で礼拝した。その鳩とは神の聖なる鳩、聖霊であり、存在のいちばん奥深くから、イエスへの甘い愛の調べを引き出してくださったのである。

声は多かった。天幕の中のすべての人が礼拝しているようだったからである。しかし音は一つだった。大水のとどろきが一つに混じり合った音である。どんなに訓練された聖歌隊でも、これほどの調和と一致を、これほど甘い旋律で保つことはできなかっただろう。指揮者が聖霊であることは明らかだった。聖霊は、明け渡された楽器の一団で、練習なしに音楽を奏でることがおできになる。栄光あ

れ！」「ハレルヤ・コーラス」の合間には、きわめて厳かで、心を探り、愛に満ちた異言の言葉が、解き明かしとともに語られた。

そのあいだに、多くの人が幻を見ていた。イエスが力の白い馬に乗っておられるのを見た人々や、御使の大群が私たちの上を舞っているのを見た人々がいた。ひとりは、至る所に血があり、戦いの赤い馬が大またに進んで行くのを見た。罪人たちの群れが天幕の外側に立って、見守っていた。彼らはきわめて敬意をもって、厳粛に耳を傾けていた。言葉のいくつかは彼らに向けられていたが、ほとんどは聖徒たちに向けられたものだった。このとき、何人かが聖霊のバプテスマを受けるに至った。

この集会は午前九時に始まり、午後一時に終わった。午後三時に再び集まると、たちまち朝よりも強く、力がすべての人に臨んだ。白髪の罪人がふたり、群衆をかき分けて進み出て、イエスに身をゆだねた。そのひとりは実業家で、こう言った。「私は店を閉めて、罪に病んだ魂として来ました。何日も、この集会を見守ってきました。いやしと大いなる力を見て、『もしこれが神の力なら、それに反対することは一言も言えない』と言ったのです。今は、これが神の力だと知っています」彼ももうひとりの白髪の男も、ふたりとも輝かしく救われ、ほとんどすぐに光の中へ出て来た。それから彼らは、バプテスマを求めて進みはじめた。

まことに、使徒の時代が私たちに臨んでいる。多くの賛美歌と礼拝の歌が、異言で与えられた。互いに離れた所で、目を閉じてあおむけに横たわっている人々が、同じ異言でこれらの賛美歌を完全にそろって歌うのである。この異言の二重唱には、しばしば解き明かしの歌が続いた。いやされた人の多くは、力の下で跳びはね、踊っていた。それは、エルサレムでの光景を思い起こさせた。そのとき見ていた人々は、『あの人たちは新しい酒で酔っているのだ』（使徒二・一三）と言ったのである。そうだ、『これは預言者ヨエルが預言していたこと』（使徒二・一六）であり、それは『終りの時』（使徒二・一七）についての預言である。

まことに、私たちは終わりの時の、そのまた終わりにいる。イエスが来られるまでの時が短いことが、御霊に満たされた聖徒たちによって再び強調された。そして天の鳩である聖霊が、多くの言葉で、実にやさしく、嘆願するように語られた。油を手に入れ、天の花婿を迎える備えをせよ、と。これらの言葉は、力の下にある別の人々によって解き明かされた。この終わりの時に、『自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を』（マタイ二五・四）用意していないなら、私たちには弁解の余地がない。

この集会のことは、とても言い表すことができない。集会は午後六時ごろに終わった。私たちはすぐに再び集まり、御霊は午後十一時まで私たちをその力のうちにとどめられた。畏れが私たちの上にますます深まっていった。神の威光と栄光があまりに大きく、私たちはほとんど息もできなかった。だれも隣の人を見なかった。みな、神のすぐ御前にいるように感じていた。

救われていない人々の大群衆が集まり、ぎっしり詰まった天幕の周りを、何重にも取り囲んで立っていた。その人々に与えられた言葉は、鋭く、やさしく、厳粛だった。聖なる無言劇によって（エゼキエル四・一～八、一二・三～七など）、彼らのために私たちの主の十字架が演じられた。また、今、主に救っていただこうとする失われた者たちを迎えるために、主が冠をかぶって来られることも演じられた。祭壇への招きはなく、集会は死のような静けさのうちに終わった。私たちは、だれにも会いたくなく、話もしたくない思いで、家路をたどった。罪人たちも同じだった。彼らが群れをなして丘を下り、路面電車へ向かうあいだ、物音一つ聞こえなかった。天幕から出ると、『主に打ち倒される者』（イザヤ六六・一六）が至る所に横たわっていた。

『わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである』（第二ペテロ一・一六）。この聖なる山で主と共にいたので、私たちは主のほまれと栄光の目撃者でもある。

（署名）エリザベス・シッソン

イエスは来られる、この知らせを告げよ
遠く陸にも海にも
イエスは来られる、あがなわれた者を集めに
木の上の死によって買い取られた者を
御使たちは付き従い、天は降り

私たちの喜びは、あらゆる言葉を超える
麗しい王なる主を見るとき
私たちの花婿、あがない主、友を
　頭を上げて喜べ、正しい者たちよ
あなたがたの完全なあがないは近い
真夜中の闇が、すみやかに迫る
「主が来られる」と、空から響く
長く悪との戦いは続いた
地上で苦しむ聖徒たちによって
イエスは来られる、悲しみを追い払い
涙の流れることのない所へ導くために
　来てください、愛する主イエスよ、約束を果たして
すぐ来てくださいと、私たちの魂はあなたに叫ぶ

長く世は、誘惑する者のとりこになってきた
のろいは陸にも海にもある
しかしあなたは勝利される、国々をお従えになって
みことばの真実は、すたれることがない
神の驚くべき栄光は、深い海の大波のように
地の果ての果てにまで満ちわたる
　（おりかえし）
イエスは来られる、私たちの救い主、神なる愛するお方が
間もなく、代々のあがなわれた者が主の栄光のうちに輝く
代々限りなく、私たちは王と共にその御座で治める
驚くべき物語、私たちは主の栄光にあずかる
ただ主のあわれみによって、あがなわれて

第四十一章　一九一三年、シカゴのストーン・チャーチで（その一）

神がさまざまなペンテコステの伝道所をみな一つにしてくださったのは、驚くべきことだった。私は自分の集会で、教理の論点を取り上げることを決して許さない。「主義」も、対立を招く論点も、持ち出させたり論じさせたりしない。あるのは、ただキリスト、それも十字架につけられたキリストと、復活だけである。人々はすぐにそれを理解し、互いのことに目を向けなくなる。自分の考えや違いを忘れ、互いに愛し合うようになり、やがて神の深みに入る必要を感じるようになる。

各地から大勢の牧師、伝道者、働き人が、幼子のようにイエスの足もとに来た。よりよく仕えるために、再び満たしていただこうとしたのである。それは栄光に満ちたことだった。合言葉は「前進せよ」だった。私たちはみな、神のもっと深みに入らなければならないと感じた。上からのさらなる力が必要であり、主からの特別な資格、賜物と知恵、霊を見分ける力が必要だと感じたのである。人々は、もっと神を求めて飢え渇くようになった。その身さえも、神を求めて叫んだ。

私たちは、そうした牧師や働き人の何百人にも手を置いて祈った。すると聖霊の力がすべての人の上にくだり、多くの人が倒れてイエスの足もとに伏した。昔の預言者や使徒たちのように、彼らは天国の幻を見、きたるべき事を見た。彼らは、主イエスが神の御霊について言われたことを信じたのである。『きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう』（ヨハネ一六・一三）。多くの人が賜物と特別な召しを受けた。

神に示される思いがあまりに深かったので、何十人もの信者が会衆の中から進み出て、手を置いて祈ってもらうことを求めた。人が多すぎた。そこで主は私に示された。みなが来て説教壇の前に立つなら、主が彼らを祝福してくださる、と。私は飢え渇いているすべての魂に、周りに集まるよう告げた。そして、どんなことのためにも、自分自身を神にささげるよう告げた。私たちが立って、永遠の契約の血、小羊の血を彼らの上に振りかける。そうすれば神が御霊を注いでくださり、祝福と賜物を与えてくださる、と。

私は、最も神に満たされた牧師の幾人かに、信仰と祈りのうちに私と共に立ってくれるよう頼んだ！　ああ、栄光と力の雲がくだって来たさまは、なんとすばらしかったことか！　多くの人がよろめいて倒れ、力が会堂じゅうに吹き渡った。これは新しいことで、だれもこのようなものを見たことがなかった。多くの人が救われ、いやされた。まことに、主の力がそこにあって、いやし、救い、賜物を与えてくださった。そして、みことばを重んじ、私たちの信仰に報いてくださった。みことばは、目に見える形で示されなければならない。

ある朝、私が教会に入ると、二階席まで人でいっぱいだった。どの集いでも、たいていそうだった。人々は歌っていた。私は説教壇のそばに立って会衆を見渡していた。すると主は、最前列の席にいる、足の不自由なふたりの老人に私の注意を向けさせられた。ふたりとも英語があまり話せなかった。主は、そのうちの女性に立ち上がるよう告げなさいと私に言われた。彼女は「いいえ、歩けません」と言った。私は強い声で、立ち上がって歩きなさい、主があなたをいやしてくださっている、と命じた。彼女は立ち上がろうとした。すると自分がいやされているのに気づき、歩きはじめた。両腕を振り上げ、神をほめたたえながら通路を進んで行った。彼女は何年も病気で、足が不自由だったのである。

それから私は、ドイツ人の老人に語りかけた。イエスの名によって立ち上がって歩きなさい、キリストがあなたをいやしてくださった、と命じた。力が彼の上にくだり、彼は立ち上がった。そして神を賛美し、ほめたたえながら、老婦人の後について歩いて行った。彼は、十歳のときの事故のために、六十年間足が不自由だったと言った。

人々は叫びはじめた。通路の向こうを見ると、ひとりの若い婦人が立ち上がり、二本の松葉杖で立っていた。私は彼女に向かって、松葉杖を捨てて歩き出し

なさい、主があなたをいやしてくださった、と叫んだ。彼女は松葉杖を置いて通路に歩み出た。泣きながら神をほめたたえていた。このころには、会堂じゅうで多くの人が泣いたり笑ったりしていた。

続いて、松葉杖をついた十五歳ほどの少女が、座席から歩み出た。そして松葉杖を捨て、ほかの人たちの後について通路を進みはじめた。みな教会の中を回り、玄関の広間まで歩いて行った。ついには、すべての人が叫び、ほめたたえ、神に栄光を帰していた。娘のひとりは、五年間松葉杖をついていたと言った。もうひとりは、三年間松葉杖で歩いていたと言った。

私がこれを書くのは、これをなさったのが人ではなく神であることを、読者に示すためである。『権勢によらず、能力によらず』（ゼカリヤ四・六）、神の御霊によるのである。私はこの人々に手を置かなかった。彼らを知らず、ひとりにも触れなかった。ただ神を信じ、神に従ったのである。

それから二年がたった。少し前、私がカリフォルニア州サンフランシスコで集会を開いていたときのことである。アーギュー兄弟が大勢の会衆に、私たちの中で神が働かれたこのすばらしい現れのことを語った。彼は「あれはみな奇跡だった」と言った。イエスがすぐに来られるというこの最後のメッセージは、どうしても目に見える形で示されなければならない。

その場にいただれも、主が再びご自分の民を顧みておられること、ペンテコステが再び来たことを疑えなかった。愛する読者が警告を受け、主イエスがすぐに来られることに備えるよう、神が助けてくださるように。

シカゴが神のおとずれを受けた日

足の不自由な人は歩き、目の見えない人は見え、耳の聞こえない人は聞こえる　日々目撃された神の超自然的な力（一九一三年七月二日～二十八日）

（ここには、アンナ・C・リーフが『ラター・レイン・エバンジェル』誌に寄せた集会の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第四十一章　一九一三年、シカゴのストーン・チャーチで（その二）

半ば失われていた視力のいやし

（ここには、前の節に続いて、アンナ・C・リーフの報告と、それがイングランドでも発表されたという編者の注が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

内に持っている賜物を軽視してはならない

牧師とクリスチャンの働き人への教え

（一九一三年七月十七日、ストーン・チャーチにて、M・B・ウッドワース・エター夫人）

（『ラター・レイン・エバンジェル』誌から転載）

注　最も厳粛だった集会の一つは、七十人の長老、伝道者、助け手が手を置いてもらった集会である。御霊の新しい油注ぎを受け、伝道の務めにさらに力を得るためだった。聖なる静けさがすべての人の上に臨み、人を打ち倒す主の力が強く現れた。人々は次々に力に打たれて倒れ伏し、ついには広い壇が戦場のように見えた。

次に、病院で働く人々や病人を見舞う人々から、苦しむ人々に祝福をもたらす力をもっと与えられたいという叫びが上がった。エター姉妹と幾人かの兄弟が、五十人近くのために祈った。一か月の集会の終わりには、ほかの牧師や働き人も来た。そこで七月二十七日の日曜日にも同じような集いを開き、さらに五十人のために祈った。神の大いなる力がその働き人たちの上にとどまっているのを見て、居合わせたすべての人が深く心を動かされた。その光景を見つめる多くの人の顔は、涙にぬれていた。

七月十七日、エター姉妹は牧師とクリスチャンの働き人に話をする前に、短い前置きを述べた。姉妹は、説教の資格を与えて彼らを送り出すのではないと言った。しかし、そこにいる多くの人のうちに眠っている賜物があると、確かに信じていた。そして、兄弟たちの賜物を燃えたたせることが、自分の使命の一部だと考えていた。姉妹はこう言った。「私には、あなたがたを送り出す権威はありません。私の祈りは、神があなたがたに権威を与えてくださることです。千マイル離れていても、私たちは同じ思いを抱き、同じ御霊のうちにいることができます。神は賜物を分け与えることによって、私をすばらしく祝福してくださいました。私が手を置くと、多くの人がバプテスマを受けました。あなたがたは、これまでになかった勇気をもって出て行きます。私たちは物笑いの種になりたくはありません。主より先に走ったり、遅れたりしたくはありません。御霊の深みに入りましょう。そうすれば、今朝、力が私たちに臨みます」

アーギュー兄弟は、ロサンゼルスの野営集会で同じような集いによって多くの人に臨んだ、新しい油注ぎについて語った。また、次のことを強調した。手を置いて祈ってもらおうとしているこの牧師たちは、エター姉妹によって送り出されるのではない。姉妹やストーン・チャーチからの権威を主張するためでもない。この集いから、さらに力を得て、新しい勇気とより強い信仰をもって出て行くためである。彼は、知恵が大いに必要であることを語った。ある人々は知恵を働かせず、ある伝道所で手を置かれたからといって、そこからの権威を主張して出て行ったのである。

ひとりひとりが神にゆだねられ、神に対する自分の責任を感じさせられた。そのときにふさわしい、価値ある教えがほかにも多く与えられたが、紙面が足りないので、これ以上は記さない。次に、エター夫人の話を載せる。だれもが主の臨在の静けさを感じ、多くの人の心にとってまことに厳粛な時となった。

『そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである』（マタイ二四・一四）。

『聖霊が「さあ、バルナバとサウロとを、わたしのために聖別して、彼らに授けておいた仕事に当らせなさい」と告げた』（使徒一三・二）。彼らはすでに召されて働いていたが、今や特別なしかたで聖別されることになった。聖霊があなたがたを召され、資格を与えてくださらなければならない。

イエス・キリストが、あなたがたを送り出してくださらなければならない。

『そこで一同は、断食と祈とをして、手をふたりの上においた後、出発させた。ふたりは聖霊に送り出されて』出て行った（使徒一三・三〜四）。神はあなたがたを送り出されたか。聖霊が資格を与えてくださらなければならない。聖霊が来られて力強く働いてくださらなければ、私たちが手を置いても何の益もない。聖霊は『聖別して』と言われた（使徒一三・二）。この人々は召され、選ばれていた。すでに召されていた特別な働きのために、選ばれていたのである。

さて、ルカによる福音書の第十章には、主が七十人を選ばれ、ふたりずつ先におつかわしになったことが書かれている。主は言われた。「見よ、わたしはあなたがたを小羊としてつかわす」（ルカ一〇・三）。小羊のままでいようではないか。おおかみになって、だれにでもかみつき、ひったくり、引き裂き、敵対してはならない。『わたしがあなたがたをつかわすのは、小羊をおおかみの中に送るようなものである』（ルカ一〇・三）。しかし、おおかみはあなたがたを食い尽くさないことを覚えておきなさい。『財布も袋も持って行くな』（ルカ一〇・四）。何事にも、思い煩いすぎてはならない。

十九節には、こうある。『わたしはあなたがたに、へびやさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けた。だから、あなたがたに害をおよぼす者はまったく無いであろう』（ルカ一〇・一九）。

それから主は、霊を従わせる力があることを喜ぶのではなく、むしろ自分たちが神の子であることを喜ぶようにと言われる。奇跡によって高ぶってはならない。奇跡に目を向けず、イエスに目を注ぎ続けなさい。あなたがたは奇跡によって救われるのではない。神の力によって救われ、守られるのである。奇跡は聖霊のみわざである。あなたがたを通してなされる聖霊のみわざには、報いが与えられる。それはあなたがたの冠となるが、決してあなたがたを救いはしない。

私の祈りによって一日に十万人がいやされたとしても、私は自分の救いをそれにかけることはできない。私たちは行いによって救われるのではない。イエスを信じる信仰によって、生きた絶えざる信仰と祈りによって救われるのである。私たちは神の力によって守られている。行いは救いに添えて加えられるもので、それには大きな報いがある。私たちの冠は、いっそう輝くのである。

第四十一章　一九一三年、シカゴのストーン・チャーチで（その三）

昔の日のように

さて、モーセの時代にも、今と同じように働きは大きく、働き人の数を増やさなければならない時が来た。主はモーセに、評判のよい七十人の男、民の長老たちを選び、会見の幕屋に集めるよう言われた。モーセの上にある御霊を、主が彼らにも分け与えようとされたのである。

主は、彼らがモーセと同じように用いられると言われた。そのとおりになった。モーセの上にとどまっていた御霊が七十人の上に臨まれ、彼らはみな預言しはじめた。それから彼らは働きに送り出された。神の御霊があなたがたの上に臨まれるなら、あなたがたは何もせずにぶらぶらしてはいないだろう。また、宿営に残っていたふたりの男の上にも、御霊がくだられた。彼らはモーセによって幕屋に連れて来られたのではなかったが、それでも御霊が彼らの上にくだられたのである。

それをねたむ者たちがいた。今日も同じ霊が見られる。祝福を受けている人々へのねたみである。あなたがたは、神の立場のためにねたむのか、それとも自分のためにねたむのか。ヨシュアがモーセに、この人々の預言をやめさせるよう求めたのは、神の栄光のためではなかった。

モーセの答えのゆえに、神に感謝する。「主の民がみな預言者であればよいのに」（民数記一一・二九）。国内でも外国でも、神のために何かをしようとするなら、御霊が自分の上にとどまっておられなければならない。御霊を受けていなければ、働きにふさわしくない。国内で仕える人々も、中国やアフリカへ行く人々と同じように、御霊を受けていなければならない。

神はすべての人を外国の伝道地へ召しておられるのではない。しかし、すべての人を何らかのしかたで召しておられる。神に召されていないのに出て行くという誤りを犯す人は多い。また、野営集会から野営集会へと走り回ることに、時間をすべて費やす人も多い。どこにいても、そこを主との会見の幕屋にしようではないか。そうすれば、会見の幕屋に呼ばれなかったエルダデとメダデのように、御霊が私たちの上にくだられるだろう。

外国の伝道地へ召されていないなら、神が働くよう召しておられるその場所で、働きに取りかかりなさい。そこで神のために勝利を得られないなら、あなたはそこに召されていないのである。神があなたをお遣わしになるいちばん困難な場所こそ、神が最大の勝利を与えようとしておられる場所である。しかし、聖霊とその力によって奮い立たされていなければ、あなたは立ち往生するだろう。

神は、上にとどまる御霊によって私たちが資格を与えられていることを期待しておられる。この終わりの時には、モーセの時代にもましてそうである。キリストがお遣わしになった七十人は力を持っていた。キリストが栄光をお受けになった今、私たちはなおさら力を持つべきではないか。だから私たちは、マルコによる福音書の最後の章に記されている、あの大いなることをみな行うよう期待されている。さて、マタイによる福音書の第二十四章には、御国のこの福音がすべての民にあかしとして宣べ伝えられ、それから最後が来る、とある。友よ、あなたがたも私も、以前のように出て行って説教することはできない。過去に神がすばらしく祝福してくださった説教の多くを、私は今はできない。私はかつて、火がほとんど見えるほどに地獄の火を説いた。当時はそれが効き目を表した。しかし今日求められているのは、別の伝道の務めである。

それは説教の力よりも、むしろ御霊の現れによる。罪人たちは、以前よりも心がかたくなになっている。炎が見えるほど地獄を説いても、彼らは平然とあなたの顔を見て立っているだろう。しかし、神の大いなる力が現されるのを見せれば、彼らは罪を示される。弟子たちはひそかにイエスのもとに来て、主の来臨と世の終わりにはどんなしるしがあるのかと尋ねた。イエスはこれらの問いに答えられた。今日も同じ問いが尋ねられている。「主が再び来られることを、人々は

どうやって知るのでしょうか。また、患難が終わるとき、終わりのしるしは何でしょうか」

さて、私たちには、イエスがすぐに来られることを知るためのしるしが与えられている。主は続けて、私たちがそれによって知ることのできる多くのことが起こると語られる。この福音は全世界にあかしとして宣べ伝えられなければならず、それから最後が来る、と言われる。真夜中の叫びを響かせ、王の来臨を先触れすること、これが私たちの務めである。

聖徒たちのうちにあって、シオンでラッパを吹き鳴らすことが、私たちの使命である。主の日が近いからである。それは近く、戸口にまで来ている。イエスは同じ章で言われる。『いちじくの木からこの譬を学びなさい。その枝が柔らかになり、葉が出るようになると、夏の近いことがわかる。そのように、すべてこれらのことを見たならば、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい』（マタイ二四・三二〜三三）。

その直前に主は、大いなるラッパの音と共に御使たちをお遣わしになり、四方からその選民を呼び集められる、と語っておられた。これは実際の御使ではなく、神の僕たちである。「御使」と訳されているギリシャ語は、使者を意味する。先触れが出て行って、御国のこの最後のメッセージを伝えているのを、あなたがたは見ている。先触れは聖霊による力を持ち、「しるしと不思議」が伴っている。そうであれば、主の来臨が間近であることを知りなさい。

主は私に、一致と愛の霊をもたらすという特別な使命をお与えになった。神はあらゆる国で、もっと神を求めて手を伸ばす人々を起こしておられる。彼らは言う。「来て、私たちを助けてください。私たちは愛の霊がほしいのです。『しるしと不思議』がほしいのです」

ゆうべ、私はほとんど一晩じゅう目を覚まして横になっていた。そのとき主は私に示された。できるかぎり牧師たちを集め、私たちが思いを一つにし、同じ福音を説き、同じしるしが伴うようにせよ、と。みことばは出て行こうとしており、多くの群衆がそれを受けて、至る所に告げ広めようとしている。それは御国のこの福音、私たちの最後の任務である。だから、聖徒たちがこの最後のメッセージを伝えるために出て行くのが見える。イエスがすぐに来られることを、人々に告げているのである。

主は、ノアの時代のように、私たちの時代もそうなると言われた。大多数の人々はこの世のことに忙しくしている。そのあいだに、ノアとその家族のような小さな群れが、世に臨もうとしている災いからキリストのうちに隠される備えをしている。また、『終りの時』（ダニエル一二・四）にはダニエル書が読まれ、理解されると言われている。

ダニエルは、将来のことを示してくださるよう神に呼び求めた。そして大いなることが起こる幻を与えられた。しかし主は言われた。「ダニエルよ、これはこの民のためではない。あなたが尋ねている『終りの時』の民のためである。この書を封じておきなさい。今の人々には何もわからないだろう」（ダニエル一二・四、九）。

ダニエル書は私たちの時代のためのものであり、神は今、ご自分のみことばを開いておられる。天の光が私たちの上に輝いている。神はそれを私たちに明らかにしておられる。これらのことについて、かつてないほどの光を与えておられる。神ははっきりと言われる。『賢い者は悟るでしょう』（ダニエル一二・一〇）。私たちは、イエスが来られる前に知るようになる。幻のうちに引き上げられる人は、ほとんどみな、このメッセージを受ける。「イエスはすぐに来られる。人々に備えをするよう告げなさい」

神は、御国の大使として、教師として、使者として、私たちが警報のラッパを吹き鳴らすことを望んでおられる。主の来臨に備えていない人々への警報である。神は、私たちがみことばと、伝道の務めに伴うしるしと不思議とによって証明することを望んでおられる。イエスがすぐに来られることを、はっきりと示すのである。神の大使たちは、すべての争いをやめなければならない。細かいことにこだわる理論は、すべて捨てなければならない。「完成されたわざ」や「聖化」をしつこく繰り返して、聖徒たちを対立させるあれこれの持論は、取り除かなければならない。

私たちは、イエスを高く掲げるために出て行くのである。このごろは、激しいさばきを説いても、それによって入って来る罪人は多くない。パウロは、説教は

御霊と力の現れによらなければならないと言っている。聖霊は、しるしと奇跡によってあかしをされる。これらが伝道の務めに伴わなければ、私たちは成功できない。

何十人、何百人もの人が救われている。国じゅうの至る所から、いやされるために人々が来る。いやしの務めは、何よりも人々を引き寄せる。あなたが病人に手を置いて、その人がいやされるなら、空席に向かって説教しなくてすむ。あなたは天の「品物を出す」のであり、人々はその品物を求めている。みことばが、御霊の現れと力のうちに出て行くようにしよう。そうすれば人々は、神が自分たちのために何を備えておられるかを見ることができる。主の力がそこにあっていやしてくださるのを人々が見るなら、あなたの伝道の務めに失敗はない。

人々の前に掲げ続けるべき肝心なことは、イエスの来臨が近いことである。私たちはその日を定めてはならない。決してそうしてはならない。しかし、その日が近づくと、聖徒たちにはわかる。しるしによって、それが近いことがわかる。神は、あなたがたが権威ある者のように説教することを望んでおられる。これは、死を見ずに天に上げられる世代である。キリストは代々を見通されて、私たちの時代をご覧になった。全世界が不信仰にあり、人々が、地上に起ころうとすることを思って恐怖で気を失い、心が衰えるのをご覧になった。ダニエルも預言して言った。悪い者はますます悪くなり、悪い者はひとりも悟ることがない。しかし賢い者は悟る、と。

それから主は、ダニエルにもう一つの光景をお見せになった。ダニエルは、陸の上や海の上の、あちらこちらで、使者たちがラッパを吹き鳴らし、すれ違いながら互いに呼びかけ合うのを見た。何年も前から、私は神の子に会うたびに、「夜回りよ、今は夜のなんどきですか」（イザヤ二一・一一）とあいさつしてきた。神の御霊を多く受けている人々からは、「朝がきます」（イザヤ二一・一二）という答えが返ってくる。しかし、夜もまた来ている。私たちはそれを説かなければならない。

地獄の闇がこの地を覆って広がっていることを、私たちは知っている。やがてそれは恐ろしい光景となり、まさに血の大洪水となるだろう＊。私たちは警報を鳴らし、王が来られるというメッセージを伝えなければならない。ある人々は、これらすべてのことからのがれて、人の子の前に立つのにふさわしい者とされるだろう。

ここには愛による一致がある。私の知るかぎり、異を唱える声は一つもない。行き過ぎた熱狂もあまりない。神がそれをお許しにならないので、からすであるのに「私は鳩です」と言って、あえて加わろうとする者はいない。神をあがめるため以外に、あえて私たちに加わろうとする者はいない。御霊の生活を始めたばかりの人々は、多かれ少なかれ肉によって脱線するだろう。しかし正直であれば、立ち直って自分の場所に落ち着くだろう。集会には、悪魔以外のすべてのものの居場所がある。私たちは悪魔に居場所を与えたくない。ここで持論が持ち出されるのを、私は聞いたことがない。キリストはカルバリで、救いのすばらしい計画であるそのみわざを完成された。しかし私は、バプテスマの大いなるわざは、キリストが栄光に入られた後まで完成されなかったと考えている。キリストが昇天された後でなければ、聖霊が注がれることはなかったからである。

（ここには、＊の箇所に付けた編者A・E・シドフォードの短い注が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

そのバプテスマが、私たちを天上に導き入れ、道に沿って先へ導く。力と賜物があり、さらにまさる賜物がある。私たちは栄光から栄光へと進んで行くのである。神が私たちをお遣わしになったのは、持論を振り回したり、あの用語この用語を掲げたりするためではない。イエスを高く掲げるためである。神は、教会を打ち壊すために私たちをお遣わしになったのではない。

キリストは働き人をお遣わしになったとき、こう言われた。「町に行ったら、あちこち出歩いてはならない。一つの所にとどまって、よく祈りなさい。お金が入って来ないことを思い煩ってはならない。働き人がその報いを得るのは当然だからである」（ルカ一〇・七）。伝道の務めに自分を全くささげなさい。神のみこころのうちにいるなら、神があなたを養ってくださる。また、前に出されるものを食べなさい。食べ物について妙なこだわりを持ってはならない。「これは食べません」とか「あれは食べません」と言ってはならない。食べないなら、それには手をつけなければよい。しかし、それについての意見を言い立ててはならない。主は言われる。「わたしの名のゆえにあなたがたを受けいれる者は、わたし

を受けいれるのである」（マタイ一〇・四〇）。私たちは、主にふさわしく主を代表したい。

結婚を禁じることや、霊的な「伴侶」を持つことについては、猛毒の蛇を避けるように避けなさい。しかし、これらのことを話題にする必要はない。ただイエスを高く掲げなさい。神は、あなたがたがこれらの罪について人を名指しで責めることを望んではおられない。イエスが第一となられるようにしなさい。

イエスが高く掲げられるほど、人々はますます深くイエスを愛するようになり、それだけ早くほかのすべてを捨てる。だから、イエスを高く掲げ、王の来臨を先触れしようではないか。患難の大きな危険を人々に示しなさい。イエスを説き、しるしが伴うまで神にすがりなさい。しるしが伴わないなら、何かが間違っている。何か特別な賜物を受けるまで待っていてはならない。自分にはできると信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。祈りをささげるだけでなく、勇気を求めて神を仰ぎ、悪魔に去れと命じなさい。そうすれば、勝利があなたの旗の上にとまるのを見るだろう。

人々は、驚くべき奇跡を見て、日々心を動かされている。天上には、さまざまな段階がある。月があり、太陽があり、星がある。私たちが月以上のものにならなければならない時が来た。太陽のようにならなければならない。賢い者は、大空の輝きのように輝くのである。

教会を非難してはならない。カトリック教徒を非難してはならない。非難されるのを恐れて、カトリック教徒は入って来なくなる。私はカトリック教徒のことを決して口にしない。特定の教会を非難することも決してない。形式主義者のしるしを、一般的なしかたで示すことはできる。そうすれば彼らは、自分たちがもみがらで養われてきたことに気づく。自分たちが凍え死んでいることを知り、生き返りたいと願うようになる。

イエスを高く掲げようではないか。そうすれば、こうした敵対する霊は恥じ入るだろう。自分たちに欠けているものがあることに気づくだろう。ラッパを吹き鳴らし、超自然の神を人々に示しなさい。千年王国の時代に何が来るか、すなわち彼らが王となり祭司となることについて、光を与えなさい。そうすれば人々は、王が力と勢いと栄光のうちに私たちのただ中におられることを悟るだろう。正しいしかたで神を呼び求める者は、だれでも救われる。神は、むすこや娘たちの上に御霊を注いでおられる。この時代には、女性のための特別な伝道の務めがある。五千人が回心したとき、人々を集めたしるしは、いやしだった。あの人々が集会を解散させなかったなら、おそらく一万人になっていただろう。

このひとりの人がいやされた結果が、五千人である。そして、そのいやしのゆえに、弟子たちは神の大いなるみわざを宣べ伝えた。このように、新約聖書の大きなリバイバルは、みなだれかがいやされた結果だった。アイネヤは八年間患っていた。先日私たちが祈ったあの人と同じである。ただ、この人はおそらくアイネヤよりもひどい状態だった。

彼は体を曲げることも、口を開けることも、目や頭を動かすことさえできなかった。間もなく彼は自分の足で立てるようになった。彼は運び込まれて来たのだが、私たちが歌っているあいだに通路を駆け下りた。そして手すりにもつかまらずに階段を駆け下り、通りを駆けて行った。彼を見た人はみな、アイネヤがいやされたときの人々のように、神をあがめた。救われ、いやされる人が何十人もいる。だから、しるしが伴うなら、いつも奇跡があるのである。神は、救われる人々を引き寄せ、大いなるみわざを見させようとしておられる。

パウロはテモテに言った。『内にいただいた神の賜物を、再び燃えたたせなさい』（第二テモテ一・六）。神があなたに、持つべきだと示しておられる賜物があるなら、手を置かれることによって、それを受けることができる。大切なのは、バプテスマや聖霊についてあなたが何を言うかよりも、あなたが持っているものを人々が見ることである。私たちが声がかれるまで語っても、彼らは納得しない。しかし神の力が彼らを納得させる。何かの現れを待ってから出て行って何かをしようとしてはならない。あなたが最も弱いときにこそ、あなたは強いのである。出て行って奇跡を行おうではないか。そうすれば人々は神をあがめる。

耐え忍べ、主の来臨は近い　預言に描かれた今の世の有様

（ここには、一九一三年七月二十四日にストーン・チャーチでA・H・アーギューが語った話が載っているが、著作権が残っているため訳していない）

キニーの報告

数日前、ひとりの婦人が椅子に乗せられて壇に連れて来られた。ほかの人たちが祈ってもらっている椅子に移されることにも耐えられない、と彼女は言った。祈りの後、しばらく彼女に働きかけてみたが、あまり効き目がないように見えた。するとエター夫人が、イエスの名による権威をもって、立ち上がって歩くよう命じた。彼女はそのとおりにし、間もなくとてもよく歩けるようになった。彼女は集会で証しをしており、見たところ、ほかの人と同じようにしなやかに動き回っている。

ひとりの老婦人が、癌か毒性のものと思われる二つのできものに苦しんでいた。一つは一ドル銀貨ほどの大きさで、右のこめかみの上の、髪の生え際にあった。もう一つは、脇腹の心臓に近い所にあった。

祈ってもらってから数日たっても、どちらも痛まず、少しも膿が出なかった。以前は、一度に何枚ものハンカチがいっぱいになるほど、ひどく膿が出ることがよくあった。最初の夜、彼女はいつものように頭に包帯を巻くのを忘れて床についた。しかし、血は出ていなかった。

祝福された閉会

出席者は多く、増え続けていた。ペンテコステの牧師や働き人も多く来ていた。二度の朝の集いで、エター夫人は兄弟たちに助けられて、百人を超える牧師と働き人に手を置いた。より深く力を着せられ、御霊の賜物を受けるためである。この二度の集いは、一連の集会の中でも最も力強いものだった。手を置く前に、ためになる教えが与えられた。健全で分別を持ち、愚かで狂信的な極端を避けること、分裂を招きがちな持論や教理を説かないこと、である。彼らはキリストと復活を説くように言われた。肉を食べることを禁じることや、結婚を断つことのような問題には、かかわらないように言われた。肉を食べるべきでないという信仰を持っているなら、それを自分自身に持っていなさい。結婚は重んじられるべきものである。

個人を名指しして、あの教会、この結社をやり玉に挙げてはならない。イエスを高く掲げなさい。そうすれば人々は、間違っていることを捨てる。御霊が示してくださるからである。私たちはまだ「前の雨」の満ちあふれる豊かさにも達していない、と言われた。「後の雨」が来るときには、これまで見たどんなものにもまさる、とも言われた。このことは、預言的な解き明かしの力強い言葉によって確かめられた。鳩の悲しげな声が聞こえた。怒りの嵐と患難が、罪にのろわれたこの哀れな地に間もなく襲いかかる、という警告である。私たちは預言の霊のもとで、目を覚まし、嵐から逃れる避け所を求めよと警告された。集会には、多くのねじ曲がった間違った霊が来ていたと、私は聞いた。ある兄弟は妻に言った。「みんな来ているぞ」しかし彼らは黙っていた。御霊の力によって縛りつけられていたのである。かえるの鳴き声やからすのしゃべる声は、天の合唱と鳩の声に加わることができなかった。

牧師と働き人のための最後の祈りの集いでは、五十人ほどが祈ってもらい、そのほとんどが御霊の下に倒れ伏した。大いに助けられ、油を注がれたと証しをした人もいた。最もよい裏づけの一つは、多くの牧師や働き人が、あらゆる種類の病人のために祈り、恵み深い成果を上げていたことである。人数はあまりに多く、ひとりで祈りきれるものではなかった。一つの集いで二百人近くが祈ってもらったこともあった。この牧師たちの集いで、夫人はできるかぎり多くの人に手を置いたが、それでもまだ百五十人ほどが待っていた。夫人は彼らを壇の前に立たせ、牧師たちに、自分と共に人々の上に手を差し伸べるよう求めた。そして、彼らのためにまとめて祈った。

それから夫人は、兄弟たちの何人かに、人々に手を置くよう求めた。手で触れられた人のほとんどが、床に倒れた。剣を取って彼らを切り倒しているかのようだった。それほど神の力が力強く私たちの上にあったのである。

どのペンテコステの大会にも、それぞれの特色がある。この大会で最もきわだっていたのは、賜物、すなわちいやしの賜物と、それを働かせる信仰が分け与えられたことである。これは、教えにより、会衆全体の前での実地の示しと手本により、また祈りと手を置くことによってなされた。それから彼らは、壇の上で病人のために祈る働きに就かされた。

四組から六組もの働き人たちが、同時にそれぞれの病人のために祈った。信仰によって大いなるみわざを行えるのは、大きなことである。しかし、ほかの人々のうちにある賜物を燃えたたせ、彼らを戦いへと奮い立たせることができるなら、それはさらに祝福された務めである。多くの人がこの集会から出て行って、悪霊を追い出し、病人をいやし、来たるべき王の大いなるみわざを行うと、私たちは確信している。神の聖徒たちのうち、より霊的な多くの人の心には、しばらく前から一つの預言があった。世界がこれまで見たことのない、より大きく力強いリバイバルが、間もなく来るというのである。『そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである』（マタイ二四・一四）。

（署名）シーリー・D・キニー

『ラター・レイン・エバンジェル』誌の社説

（ここには、リディア・パイパーが『ラター・レイン・エバンジェル』誌の八月号に寄せた社説が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

美しい金の糸

日々の暮らしの中に織り込む
美しい金の糸を
労苦と争いの中に織り込む
けれども、それを握る手は
世にもまれな模様に仕立てる
真新しく麗しい、美しい糸で
やがて主は、そこにそれを見いだされる
美しい金の糸のうちに
忍耐強い手で織り込む
美しい金の糸を
名工の計られたとおりに、糸を埋めていく
そのお方は、人生の暗いひだも置かれた
ごくありふれた煩いの中に織り込む
ほかの人が負う重荷の上に
主なる織り手は喜んで分けてくださる
美しい金の糸を幾筋か
私たちの望みと恐れの中に織り込む
美しい金の糸を
金の糸はいっそう輝いて見える
人生の織物が古びていくときに
ほほえみと歌の中に織り込む
細くて強い、驚くべき糸を
善の下をくぐり、悪の上を越えて
美しい金の糸を幾筋か
目を凝らして織り込む
美しい金の糸を
影の落ちる所を横切って輝く糸を
人生の織物がすっかり広げられるとき
主の呼ばれる声の中に織り込む
杼の輝く糸は落ちるにまかせよ
御使たちが来て、それをみな集める
人生の美しい金の糸を

第四十二章　一九一三年八月、マサチューセッツ州モントウェイトでのウッドワース・エター集会（その一）

モントウェイトの集会は、シャトークア集会場の大きなコロシアムで開かれた。罪と、いわゆる「科学」に対して、この州でかつて戦われた最大の戦いだと言われた。しかし、イエスが勝利者であられた。その地方一帯が、信仰に賛成か反対かでわき立った。二十マイル離れたボストンの有名な新聞はみな、記者をよこした。私たちのことを記事にし、写真を撮るためである。神の力の下に打ち倒された人々や、祭壇の前に集まった求道者の群れの写真も撮った。彼らは働き全体のことも書いた。ありのままに書いたので、各州の至る所の人々が、モントウェイトの大リバイバルのことを聞いた。

日の出の集会のほか、七時、九時、午後二時、夜七時に集会があった。何千人もが集会に出席した。奇跡は、キリストと使徒たちの時代と同じように大きかった。病人が寝床に乗せられ、死にかけた状態で運び込まれた。その人々が起き上がり、大声で神をほめたたえ、歩き、走るのを見て、神への恐れが人々に臨んだ。人々は、彼らが跳びはね、踊るのを見た。多くの人が倒れて、死んだ男女のように横たわった。

ある朝、私は集会から出るときに、主に打ち倒された者を数えた。五十八人の男女が倒れていて、まるで大きな戦場のようだった。私が外へ歩いて行くと、男女が、会場の建物の入口の際近くにまで倒れていた。その場所全体が聖なる地のように思われた。

迫害と逮捕が続く

モントウェイトで私たちが逮捕されたことで、ニューイングランドの人々はみな、使徒的な集会のことでわき立った。大都市から多くの招きが来た。ボストンで最大の劇場を提供してくれる人々もいた。この信仰と力のことをもっと知りたくて飢え渇いている、と彼らは言った。何百人もの人が、手を置かれて祈ってもらうと同時に、救われ、聖霊に満たされた。主の栄光があまりにすばらしかったので、彼らは倒れ伏した。多くの人が、何時間も力の下に横たわった。幻と啓示を受けた人々もいた。多くの人が異言を語り、解き明かしをするに至った。

祈ってもらった後、椅子から立ち上がり、大声で神をほめたたえ、新しい言葉を語る人々もいた。オーティス兄弟がりっぱに支えてくれ、毎朝、日の出の祈祷会を導いた。主の臨在が、すばらしいしかたで見られ、感じられた。ピスガ山での祈祷会が終わると、人々は午前九時に大きな幕屋に集まり、もう一度祈祷会をした。十時からは私が受け持った。

天の合唱が何度も現れた。それは実に栄光に満ちていた。まる一か月の集会のあいだ、不和や争いは一つもなかった。主がシオンを回復される前に、神の子たちが現れる前に、私たちは「思いを一つに」しなければならない。こうして神は、力強いわざによって人々に確信させておられる。私たちが終わりの時にいることを、あの輝かしい日、すなわち主の再臨の直前に御霊をお注ぎになることによって示しておられるのである。

目覚ましいいやし

ひとりの若い男が、祭壇の所に連れて来られた。体がすっかりゆがみ、蛇のようにねじれ、引きつっていた。彼を押さえるのに四人の男が必要だった。生まれてからずっと、この状態だったのである。祈ってもらってから三十分もたたないうちに、彼は両手を上げてまっすぐに立っていた。着物を着て、正気になっていた。

ボストンから来たひとりの婦人が、簡易寝台に乗せられて壇に運ばれて来た。生きているというより、死んでいるようだった。彼女は間もなく歩きだし、主をほめたたえた。主のすばらしいいやしの力と、魂に受けた祝福のゆえである。彼女は昼食をたっぷり食べた。そして午後には壇に上がって、自分のいやしについて証しをした。

モントウェイトの集会

（『クリスチャン・ワーカー』誌から転載）

八月のひと月のあいだに、多くの人がいやされた。また、非常に多くの人がバプテスマを受けた。いやしのために椅子で祈ってもらっているあいだにバプテスマを受け、異言を語った人もいた。椅子にたどり着く前に、力に打たれて倒れる人もいた。神経の病からいやされた人が多かった。目もいやされた。ある人は、壇の上にいる人のだれがだれなのか見分けられたことがなかったが、今では一人ひとりの顔がはっきりと見える、と証しをした。

ある日、料理人が調理場で料理された。つまり、火に油を注いだために、腕と顔にひどいやけどを負ったのである。祈ってもらうと、彼はいやされた。痛みはすぐに取り去られ、そのまま台所に行って、熱いかまどのそばで働くことができた。

雑録

ある姉妹は、葬式の費用にと蓄えていたお金でモントウェイトに来た。しかし神が彼女をいやされたので、彼女は元気いっぱいの「亡きがら」になった。

ある若い婦人は、子供のころから病に苦しんでいた。ここに来たときには、十七週間も寝床から出ていなかった。その人が完全にいやされた。

ある姉妹は腫瘍をいやされた。腫瘍は日ごとにどんどん小さくなっていった。ある日曜日、七人の小さな女の子が長いあいだ力の下にあった。何人かは異言を語るに至った。そのうちのひとりは長々と預言した。そのメッセージの要点は、「イエスさまはすぐに来られる。用意して、用意して、用意して！」というものだった。その子はイエスの幻を見た。主が雲に乗って来られるのを見、また取り残された人々を見た。御霊はその子を通して言われた。「もう遅い、遅すぎる。あなたがたは行けない。行けない！」

ある姉妹は、真夜中に外を見て、講堂の中に二つの火の玉があるのを見た。火の玉は行ったり来たりしていた。それは長いあいだ続いた。ほかにも、超自然の光景が何度も見られた。

西部や南部から来た聖徒たちの中には、この集会に来るために犠牲を払った人々もいる。ある兄弟とその妻は、ここに来るために兄弟の時計を質に入れた。

六月から、ピスガ山で日の出の祈祷会を開いてきた。祝福された実を結んでいる。この早朝の集会で、聖霊のバプテスマを受けた人々もいる。その中には、ボストンから来たひとりの説教者もいる。

主の来臨のしるしとしての神のいやし

エリザベス・シッソン

主の来臨を告げるしるしが、急速に成就しつつある。その多くのしるしの中で、神の民の中に超自然の肉体のいやしが増えていることほど、目立つものはない。今からおよそ二千四百年前、エホバはマラキの口を通して約束を語られた。「わが名を恐れるあなたがたには、義の太陽がのぼり、その翼（またはヘブル語で『光線』）には、いやす力を備えている。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように育つ」（マラキ四・二）。

この預言がある程度成就したことは、地上でのイエスの生涯とわざのうちに認められた。イエスからは、いやす力が四方に流れ出たのである。聖霊に満たされたザカリヤが言ったとおりである。『上からの日の出が、わたしたちを訪れた』（ルカ一・七八、欄外の別訳）。しかし神の預言の言葉には、次々と重なる成就がある。このみことばが完全に成就するのは、『炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる』（マラキ四・一）という言葉と結びついて起こることになっていた。

こうして、ほむべきイエスの日の出は、主の再来を告げる神のいやしという形で、およそ四十年前にはっきりと始まった。ドイツのドロテア・トルーデルの時代である。その後、合衆国、イングランドなどで、カリス博士やほかの人々が続いた。

知ってのとおり、日の出にはいくつかの段階がある。夜明けから、太陽の本体が光を放ちきるまでの進み行きがある。昇ってくる太陽は、まず真夜中の闇を破る。しかし進んで行くにつれて、その明るい光線がますます力強い輝きでその到来を告げ、ついに太陽そのものが現れる。ほむべき主がこの地に再び来られる歴史も、まさにそのとおりであった。

この祝福された義の太陽のいやしの光線は、今度はパレスチナの小さな地に限られていない。知られている地のあらゆる所に及んでいる。海の島々、フィリピン、サンドイッチ諸島などにも及んでいる。アフリカ、インド、ロシア、中国、日本、朝鮮、南アメリカなどで、宣教師を通して光が差し込んだ所には、どこにでも及んでいる。

あちこちで死者さえも、イエスの名を信じる信仰によって、いのちに連れ戻されている。イエスの来臨がさらに近づくにつれて、この預言はますます豊かに実を結んできた。そしてついに最近、まったく新しいしかたでそれを見た。ロングヒルの野営集会で、シカゴのリバイバルで、そして今モントウェイトで見たのである。主イエスの霊的な臨在の、あふれ注ぐ力の下で、至る所で大勢の人がいやされている！

こうした力強いいやしと共に、さらに次の成就が来る。「あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のように育つ」。ヘブル語をもっと忠実に訳せば、「あなたがたは若い子牛のように跳びはね、踊る」となる（マラキ四・二）。

この記事を読む人はみな、おそらく、若い子牛のいのちの喜びを見たことがあるだろう。子牛は生まれるとほとんどすぐに動きだし、やがて、あふれるいのちのままに跳びはね、はねまわる。同じように今、来たるべき太陽のいやしの光線が神の民に触れると、主の復活のいのちが彼らをとらえていく。彼らは壇の上で跳びはね、踊る。礼拝とあがめのうちに、血管を、いや、全身を駆けめぐる主のいのちのあふれるままに跳びはね、踊るのである！　いやしの光線が、これほど力強く神の民の上に注がれている。だから、この義の太陽の本体がすぐに現れることが、私たちにはきっとわかるはずである！

かつて、まずユダが、次にイスラエルが心を一つにして集まり、ダビデを王にした。同じように今、ダビデ王の最も偉大な子のもとに、飢え渇いた人々が引き寄せられている。彼らは心の中でイエスを王にしようと求め、互いに『王を導きかえること』について語り合っている（サムエル下一九・一〇）。ああ、愛する者たちよ、今すでに主は、進んで仕える心を持つ民という戦車に乗り、力のうちに進んで来ておられる。彼らのうちにあるのは、霊的な形の再臨だからである。それは、目に見える、文字どおりの来臨に先立つものである。

聖霊の力の下に打ち倒されて床に横たわっていたひとりの人が、開かれた天へと続く明るい道を見た。その栄光の道を、彼女の慕わしい主が乗って下って来られた。驚いたことに、そこで明るく輝く一団が主のもとに引き寄せられた。主はまっすぐにその輪の中に入られ、もはや主ご自身の姿は見えなくなった。彼らが主と主のものとを吸い込んだのである。言い表せない輝きが、彼らを通して照り出しはじめた。主のいのち、主の説教、主のわざが、その栄光の一団から放たれていた。彼女は知らされた。主はあの輝く一団のために来られる。その前に、『下ってこられ、聖徒たちの中であがめられ、すべて信じる者たちの間で驚嘆される』（第二テサロニケ一・一〇）のである。

「迫害」

（ここには、エター夫人、アール・W・クラーク、サイラス・B・フォックラーが連名で出した、逮捕と裁判についての声明＊が載っているが、書き手のひとりの没年が確かめられないため訳していない）

証人台でのウッドワース・エター夫人の証言

問　どこで生まれたか。

答　オハイオ州ニューリスボン。

問　年齢は。

答　この七月で六十九歳になった。
問　伝道の務めをいつ始めたか。
答　三十五年ほど前。
問　それより前は。
答　家で家族と共にいた。
問　家族はどういう人々だったか。
答　夫と六人の子供。最初の夫は死に、子供たちも長女のほかはみな死んだ。
問　福音を説きはじめたきっかけは何だったか。
（検事が異議を唱えた）結局、判事が続けることを許した。エター姉妹は、十三歳で回心したときから今に至るまで、神が自分をどう扱ってこられたかをかいつまんで語った。開いたさまざまな集会のことも、数多く語った。
それから、ナッシュ弁護士が次のように質問した。
問　どの市や町で集会を開いたか。
答　とても思い出しきれない。ルイヴィル、スプリングフィールド、セントルイス、クリーヴランド、オークランド、ロサンゼルス、メンフィス、ダラス、シカゴ。
問　およそ何年か。
答　三十五年ほど。
＊九月二日、判事は訴えを退けた。告発は偽りであることが明らかになった。
問　倒れ伏すことが初めて起こったときのことを覚えているか。
答　覚えている。西部へ行ってから最初の集会で起こった。
問　どのくらい前か。
答　三十二年ほど前。
問　それ以来、そうしたことは起こり続けているか。
答　そうだ。力はいつも現されてきた。
問　力が人々の上に下ったのか。
答　そうだ。
問　その数を覚えているか。
答　五か月いたセントルイスのような大きな集会では、何千人にもなる。会場の外でも何百人もが打ち倒された、と人々は言った。私の一度も見たことのない何百人もの人である。彼らは五十マイル、百マイルも離れた所で打ち倒された。
問　どうしてそれを知ったのか。
答　その人たち自身と、その友人たちの証しによって。
問　人々が神の力に打たれて倒れるのを見たことがあるか。
答　ある。稲妻に打たれたように打ち倒されるのを見た。
問　催眠術を学んだことがあるか。
答　ない。
問　催眠術を行ったことがあるか。
答　ない。
問　催眠術が行われるのを見たことがあるか。
答　一度もない。
問　催眠術について知っていることを話してほしい。
答　集会に力が現れるので、催眠術師たちが調べにやって来た。私が七時間、力の下に横たわっていたとき、彼らは私を調べた。私の知らないうちに、催眠術師たちが何日も集会に来ていたこともある。そして人々を調べた。その多くは正直に、ひそかに、また公にも私の所に来た。そして、この力は催眠術の力とはまったく違うと言った。「神がおられるなら、これは神から出たものだ」と言った人もいた。
問　モントウェイトの集会と、これまで開いたほかの集会とで、何か違いはあるか。
答　ペンテコステの人々と一緒になってから、主をほめたたえるときに騒がしく表すことが多くなった。私がひとりでしていたころよりも多い。私は人々に、きよい手を上げるようにと言う。「あなたは自分が神の子だと知っているか」と言う。「主イエス・キリストによって、一つ以上の病気をいやされたことを知っているか」と尋ねる。私はいつもそうしてきた。シカゴでは、カナダから来たひとりの牧師が、みなに手をたたいて喜びの声をあげるよう求めた。それは聖書に

かなったことなので、私は許した。暴徒が来た夜にできたのは、立ち上がって手をたたき、主に向かって叫ぶことだけだった。

問　あなたが癌を治せると、だれかが言うのを聞いたことがあるか。

答　一度もない。しかしこの土地で、人々はそのことで私を責めた。

問　あなた自身が「私がいやした」と言ったことがあるか。

答　ない。断じてない。

問　何か特別な力を持っていると言ったことがあるか。

答　いや、ない。

問　あなたによっていやされた人がいると信じているか。

答　いない。私によって救われた人もいない。

問　集会でいやしを求めた人々は、見たことや証しを聞いたことによってそうするよう導かれたと思うか。

答　そうだと思う。何千人もの人がそうだ。

問　本を出したか。

答　出した。

問　最初の本を出したのはいつか。

答　西部に行ってから一年もたっていなかったと思う。私は病気をして、いやされた。そのことを語るこの小さな本を出した。私はいやしを説いたのではない。ただ、自分はいやされた、神はいやすことがおできになると信じる、と言ったのである。

問　キリストを通して、あなたの集会でいやされたと主張する人が初めて証しをしたのは、いつか。

答　何人もの人が来て、何らかのしかたで神に助けていただいたと言った。私はそのことを何も知らなかった。それは、私が西部へ出かけてからのことだった。

問　そのとき以来、あなたは人々と共に祈ってきたか。そして彼らは、いやされたと証しをしたか。

答　そうだ。

問　具体的な例を挙げられるか。

答　インディアナ州ココモの近くのダゲット医師が、私が手を置いたことを覚えている最初の人である。

問　どのくらい前か。

答　初めて西部へ行ったとき。

問　八月にモントウェイトで集会を開いたか。

答　開いた。

問　以前に開いてきた集会と同じようなものか。

答　多くの点で。

問　クラーク氏とフォックラー氏は、モントウェイトより前にもあなたと一緒にいたか。

答　クラーク氏だけが、シカゴで私と会って一緒に来た。

問　ロングヒルでは、だれがあなたと一緒にいたか。

答　さまざまな教派の牧師たち。

問　特別な手伝いはいたか。

答　私と夫、それに夫の世話をしてくれたひと組の夫婦だけだった。

問　あなたの夫はどこにいるか。

答　モントウェイトにいる。

問　ここには来ていないのか。

答　来ていない。しかし、来られれば喜ぶだろう。

検事による反対尋問は次のとおりである。

問　あなたは非常に多くの都市で集会を開いてきたのか。

答　この国でも最大の都市のいくつかで開いた。

問　セントルイスでは。

答　何度も開いた。一度は五か月にわたった。

問　ロサンゼルスでは。

答　開いた。

問　そうした集会では、あざける者や懐疑家、来て騒ぎを起こしたほかの者たちが回心したのか。

答　そうだ。

問　ほかの集会で、外の者たちに騒ぎを起こされたことはあるか。
答　少しはある。しかし、いつも守られて、騒ぎはすぐにやんだ。
問　セントルイスでは。
答　少しのあいだ。
問　オハイオでは。
答　ない。
問　当局とは何もなかったのか。
答　私の覚えているかぎりない。セントルイスで、初めのころに少しあった。それも、集会の進め方にかかわることではなかった。
問　ロサンゼルスでは。
答　外の者たちから少しあったが、集会からは何もなかった。
問　以前にも面倒があったのなら、モントウェイトでの経験は何も新しいことではないのか。
答　いや、新しい。腐った卵を投げられたことも、逮捕されたことも、これまでなかった。
問　あなたが集会を導いているあいだに、外の者たちが面倒を起こすのか。
答　そうだ。
問　ロサンゼルスでは、警察を呼ぶ必要があったか。
答　なかった。
問　予定を縮めたか。
答　縮めなかった。
問　ここに来ることについて、あなたとオーティス氏とのあいだで交わした手紙を持っているか。
答　持っていない。そのことは夫がした。
問　それを持っているか。
答　持っていない。
問　その手紙は、あなたの夫が持っているのか。
答　タイプで打った手紙のほかは、写しを取っておいたことがない。それは手書きだった。
問　ほかの取り決めは口頭だったのか。
答　そうだ。
問　ロングヒルでは。
答　そうだ。
問　何かの皮膚病の手当てを受けた男が出したカードを持っているか。うわさでは、その男は治ったということだが。
答　私自身は、カードを一枚も持っていない。
問　私が言っている件を覚えているか。
答　覚えている。
問　カードには何と書いてあったか。
答　それは一度も見なかった。
問　彼はあなたに何か言ったか。言ったとすれば何を言ったか。
答　覚えているかぎりでは、それはできものだった。何かの皮膚病があった。その少年は何も言わなかったと思う。だれが彼を連れて来たのかは知らない。顔色がとても黒いことに気づいたが、顔には吹き出物がなかった。両手には吹き出物ができていて、敗血症のように見えた。私は彼のために祈った。
問　彼のために祈ったのか。
答　そして、病気をおしかりになり、イエスの名によって彼をいやしてくださるよう、神にお願いした。
問　彼は倒れ伏したか。
答　いや。
問　彼は自分で壇から降りたか。
答　そうだ。友人たちと一緒に。
問　あなたは会衆に何か告げたか。
答　らい病のような皮膚病だと言ったと思う。らい病だとは言わなかった。後になって、人々がそれを梅毒だと言っていることを知った。彼らの住んでいる土地では、人々に知られていたのである。それで私は訂正した。
問　あなたの言ったことは、少年は手当てを受けていやされた、ということだったのか。

答　彼はその病気から治るだろう、と私は信じている。

問　その少年か、一緒にいた人々が、彼はらい病だとあなたに告げたのか。

答　そうは言わなかった。

問　前に彼に会ったことがあったか。

答　一度もない。その後もない。

問　あなたは診察したか。

答　一度もしていない。

問　カードに何と書いてあったか、問い合わせたことはあるか。

答　私たちはそのカードを持っていないと思う。

問　出血した婦人のことは。

答　ある日曜日の朝、大勢の会衆がいたとき、ひとりの婦人が死にかけている、あるいは死んだと告げられた。私は後ろへ行った。その人を見たとき、死んでいると思った。それまで一度も会ったことのない人だった。だれかが、彼女は出血したのだと言った。私は彼女のために祈り、目を開けるように言った。出血は止まっていた。彼女は前の方へ連れて行ってほしがった。私は、彼女に集会から出てほしかった。しかし人々は、いつも私の言うとおりにするわけではない。彼らは彼女をわらの上に寝かせ、私は集会を続けた。彼女のうめく声が聞こえたので、私は降りて行った。そして、彼女を外に運び出して医者を呼ぶように言った。しかし彼らはそうしなかった。二度目には、必ずそうしなければならないと言った。

私が逮捕された日、警察署長が入って来て私を呼んだ。彼女はその声を聞き、その恐ろしさで出血が始まった。私は出かけて行き、戻って来ると、彼女が死にかけていると告げられた。私は中に入り、医者を呼びにやった。だれかが外へ出てオーティス氏に会い、彼が入って来た。私は、医者を呼びにやったと言った。数分のうちに医者が来た。今、彼女は起きて歩き回っている。

彼女は私と同じ家にいて、私はほとんど毎日彼女に会う。彼女は壇の上で祈ってもらったことは一度もない。

問　あなたは当局と面倒を起こしたことは一度もないと言ったのか。

答　ここに来るまで、逮捕されたことは一度もない。

宣誓のもとでの証言

（『ワード・アンド・ウィットネス』誌の社説）

アーカンソー州マルヴァーン、一九一三年十月二十日

疑い深いトマスのような人々が、現代の神のいやしの証しは本物ではなく、神のいやしを唱える人々が偽造したものだと言ってきた。一九一三年八月、マサチューセッツ州サウスフレーミングハムのモントウェイトでのことである。Ｍ・Ｂ・ウッドワース・エター夫人、Ｃ・Ｂ・フォックラー、アール・Ｗ・クラークが逮捕された。そして、キングズベリー判事の法廷に引き出された。その理由はこうである。彼らは、集会で起こったと言われるいやしを、本物のいやしだと称している。だから、そうした働きを続けるために公に献金を受けるのは、人々をだますことである。偽りの口実で金を得ることである、というのである。それで、この三人の被告は、公開の法廷で証明しなければならなかった。相手は警察署長、検事、三人の医者、ふたりの説教者である。この集会で主によって人々が肉体の病からいやされていることを、議論の余地なく証明しなければならない。さもなければ、詐欺師として有罪となり、刑務所に行くのである。

八月二十七日、証人を証人台に立たせることが始まった。どの人も宣誓していたことを覚えておいてほしい。偽って誓ったなら、偽証罪で訴えられたはずである。これらの証言は日刊紙に載っている。八月二十七日から二十九日の『フレーミングハム・イブニング・ニューズ』紙、同じ日付のボストンの日刊紙などである。ここには、法廷で記者たちに伝えられたとおりに載せる。

イートン嬢

ニュージャージー州ブルームフィールドのイートン嬢は、ナッシュ弁護士が最初に呼んだ証人だった。彼女の証言はこうである。自分は十六年間、インドの宣教地で仕えてきた。モントウェイトの集会に似た集会は、世界じゅうで開かれている。彼女はエター夫人を二年前から知っていて、夫人がいやしの栄光を神に帰すのをいつも聞いてきた。

彼女は、モントウェイトでの肉体のいやしを、神からの肉体への新たな油注ぎだと言い表した。彼女はほかの所でも、多くのいやしと倒れ伏すことを（自分の目で）見てきた。倒れ伏すというのは、意識を失っていない心の状態のことだ、と彼女は言った。

ハリス夫人

ジョージア州アトランタのL・N・ハリス夫人は、ほとんどの集会に出席したと言った。自分はペンテコステの人々のひとりで、六年前から集会に通っている、とも言った。モントウェイトで壇に近づいたとき、彼女は祈ってもらった。彼女はリウマチと、片方の目が見えないことに苦しんでいた。目は、二十年前の脊髄膜炎のためだった。「正気に返ると、死んでいた神経がぴくぴく動きはじめました。そして死んでいた神経がいやされ、リウマチも消えていました。今は十六歳の娘のような気がします。壇の上に横たわっていたあいだ、起こっていることはみなわかっていました。被告たちが、自分が治したと言うのを聞いたことはありません。そんなことを聞いていたら、ジョージア州アトランタの家に帰っていたでしょう」

フローレンス・ジョンソン夫人

次に呼ばれた証人は、マサチューセッツ州チェルシーのフローレンス・ジョンソン夫人だった。彼女は四年前からペンテコステの人々の仲間で、ボストンの集会に出席してきた。彼女は言った。「アール・クラーク兄弟が悪魔をしかると、何年も使えなかった私のひざが治りました。この人たちが、自分が治すと言うのを聞いたことはありません。神はいやすことがおできになる、と言うのです。八歳の娘も、気管支と神経の病をたちまちいやされました」それから、その小さな女の子自身が立ち上がった。そして、いやされたことのゆえに神をほめたたえた。

リリー・ウォーカー

マサチューセッツ州チェルシーの伝道者リリー・ウォーカーは言った。「私は幻を見ました。神の御手が血を流し、その血が私の上に流れ落ちていました。死の骸骨を見ました。私はカタルと弱い目をいやされました。私は力の下に置かれましたが、意識を失ってはいませんでした」

エリザベス・デイヴィス夫人

カナダ、オンタリオ州セントトーマスのエリザベス・A・デイヴィス夫人は証言した。「私は神経痛と、潰瘍のできた歯に苦しんでいました。主はエター夫人を通して、私をたちまちいやしてくださいました」

第四十二章　一九一三年八月、マサチューセッツ州モントウェイトでのウッドワース・エター集会（そのニ）

エセル・ルイス

ニューヨーク州ピーターズバーグのエセル・ルイスは証言した。祈ってもらったとき、ほかの人たちが証しをしたような感覚は何もなかった。「でも私は、手を置かれることによって、霊のいやしと体のいやしを受けました。弱い肺が治りました。私は看護婦の訓練を受けていますから、それがわかるのです」

メアリー・エタ・トーマス

メアリー・トーマスは、三十年前からモントウェイトに住んでいる。ペンテコステの人々の仲間ではないが、この人たちはよい働きをしていると感じた。「この腕は、二十年間上げられませんでした。この人たちが来てから、今ではこんなに高く（腕を高く上げて見せながら）上げられます」

エバ・ダゲット夫人

彼女は証言した。「私はひどい状態でした。五年間、体がすっかり弱っていました。三人の医者にかかりました。神経炎と心臓弁膜症を患っていて、夜は寝床で、夫に体を仰向けから横向きにしてもらわなければなりませんでした。モントウェイトで、私は完全にいやされました」

以上の証言と、さらに多くの証言が、八月二十八日の『イブニング・ニューズ』紙に載っている。次に、八月二十七日の『ボストン・ヘラルド』紙から、神のいやしについての宣誓証言をいくつか載せる。十数人の証人が証言した。ペンテコステの弟子たちに手を置かれて、長年の病が奇跡的に治ったという証言である。それを聞いた後、キングズベリー判事は審理を翌日に持ち越した。

バプテスト教会の牧師の妻

フレデリック・ペック夫人

ペック夫人の夫は、ニューヨーク州ピーターズバーグのバプテスト教会の牧師である。夫人は、モントウェイトの集会に出席した結果、十七年来の病が治ったと証言した。被告のだれかが、いやしと引き換えに金を求めるのを聞いたことは一度もない、と彼女は言った。

体はぼろぼろだった

マサチューセッツ州リン、チェスナット通り五六三番地のキャリー・F・クレイガン夫人は証言した。「私は長年、伝道の働きをしてきました。モントウェイトで、心臓病、腫瘍、リウマチ、腎臓と膀胱の病を治していただきました。ここに来たとき、私の体はぼろぼろでした。何年もコルセットを着けることができずにいたのです」

銀行の取締役

ニューヨーク市のロバート・G・レークは言う。「私は葬儀屋で、地元の第一国立銀行の取締役です。二十八年前から、メソジスト教会の会員です。この三か月間、心の苦しみを味わっていました。妻と私は、好奇心からモントウェイトに来

ました。そして私は、心の落ち込みをすばらしくいやされました。妻も、二十年来の体の病から解かれました。妻は二十年間、静脈瘤に苦しみ、弾性の靴下をはかなければなりませんでした。しかし今は、モントウェイトに来てから、神によって奇跡的にいやされたと信じています。これが催眠術なら、一生、催眠術にかけられていたいものです。神が私にしてくださったことを立って語らなければ、私は臆病者でしょう」彼はさらに言った。「私の心の状態はひどいもので、心を痛めた妻は、私がもう妻を愛していないと思い、別れようとしていました。それでも、頭の上の天は固い青銅のように思え、モントウェイトに来るまで、何の助けも得られませんでした」

ほかにも、疑いようのない証言がたくさんなされたが、それを載せる紙面がない。しかし、これらの証言で、公平な心で問う人はだれでも納得するはずである。神は今日も人々をいやしておられ、その証しは疑いもなく本物なのである。キングズベリー判事も、これらの証言に納得した。一九一三年九月二日、地方裁判所で、判事は被告たちを無罪とし、訴えを退けたのである。人々はいやされていないという信じない者たちの愚かな主張は、宣誓した何十人もの生きた証人によって打ち消され、永久に葬られた。

すばらしいいやし

（『ワード・アンド・ワーク』誌から転載）

ペンシルベニア州ティオガ郡ノックスヴィルのジェシー・ヴァン・デューセン嬢の証し。一九一三年八月二十四日、日曜日の夜、C・B・フォックラーの話の中で、幕屋で語られたもの。

（ここには、ジェシー・ヴァン・デューセン嬢が幕屋で語った証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

確信させられて

（ここには、ヴァン・デューセン嬢の看護婦として付き添ったフローレンス・オリーブ・カーギルの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

証人台でのハンナ・マルフォード博士の証言

（『ワード・アンド・ワーク』誌から転載）

マルフォード博士は言った。「私はクリーヴランドとフィラデルフィアで開業していました。インドでも、どの団体にも属さない医療宣教師として働きました。インドにいるあいだにペンテコステの人々と出会い、その働きを信じるようになりました。

「私がモントウェイトに来たのは、ペンテコステの野営集会に出たかったからです。壇の上で起こったことを見てきました。壇の上で催眠術は行われていなかったと思います。そう思う理由は、人々が、催眠術にかけられた人のような状態ではなかったからです。私は壇の上で、椅子に座りました。だれだったかは知りませんが、ある人に言われました。主がしてくださったことと、これからしてくださることのすべてを、主をほめたたえなければならない、と。それから、二、三人の人が私の頭と肩に手を置きました。どんな言葉が語られたかは覚えていません。壇に上がる前、私は本当にひどく苦しんでいました。その後、家に帰ったときには、霊も心も体もすっかりいやされていました」

（ここには、編者A・E・シドフォードの短い注が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

アデリア・ロビンソン

（ここには、アデリア・ロビンソンの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

潰瘍と神経痛がいやされる

（ここには、ルーシー・D・ハリントンの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

宣誓のもとでの証言

（『ブライドグルームズ・メッセンジャー』誌から転載）

イエス・キリストとその力の敵であるサタンは、確かに度を越して、自ら墓穴を掘った。マサチューセッツ州サウスフレーミングハムの警察署長に、逮捕状を出させたのである。M・B・ウッドワース・エター夫人と、その同労者サイラス・B・フォックラー、アール・W・クラークの逮捕状である。偽りの口実で金を得たという理由だった。検事は、「訴えの趣旨は全体として、この人々が治すふりをしていることにある」と述べた。あらゆる種類の病気や疾患を治すふりである。この逮捕のおかげで、三十人ほどの証人を証人台に立たせるという、栄光に満ちた機会が与えられた。彼らは宣誓のもとで、霊の祝福といやしを受けた次第を語った。証人たちは、さまざまな職業や身分の人々だった。

牧師、医者、宣教師、看護婦、学校の教師、劇作家、銀行家がいた。年老いた人、中年の人、若い人がいた。みな神のすばらしい力について語った。イエス・キリストの名によって手を置かれ、悪霊と病がしかられたとき、その力が霊と体をどのようにみなぎって流れたかを語った。神の力の下に倒れ伏した人もいれば、跳びはねて大声で神をほめたたえた人もいた。けれども、この記事の目的は、裁判と、そこで得られた勝利について語ることが第一ではない。判事が被告たちに有利な判決を下し、警察署長とその仲間たちを退けた勝利である。それよりも、この人々がいやされたという事実を読者に示したいのである。その中には、本当の奇跡のいやしもあった。

ひとりの婦人が癌をいやされた。医者に見込みがないと言われた人々もいやされた。この人々は自分から進んで、宣誓のもとでそのことを証言した。こうした祝福された結果を得る方法について、批判やささやきが聞こえてきた。この集会で報告されたいやしを疑う者もいた。これにはおそらく、いくつかの理由がある。一つは、神を礼拝するよりも、いやされることを望んで来た人々がいたことである。そうした人々は、しばしば心の中に隠れた罪を持っていた。神はそれをご覧になり、それが彼らのいやしを妨げる。そして当然、彼らとその友人たちは悪い評判を広めるのである。

なぜ後戻りする者がいるのか

それから、ときどき、いやされたと証しをしても、間もなく誘惑されて、いやしから後戻りする人々がいる。回心を告白した多くの人々や、バプテスマを告白したほかの人々が後戻りするのと同じである。しかし後者について、前者についてのような厳しい批判は聞かない。どの牧師も働き人も、回心して御霊のバプテスマを受けるよう人々に勧め続け、後戻りしないよう警告している。なぜ、体のいやしについても同じようにしないのか。このやり方の何が悪いのか。イエスは、こうしたことがみな起こりうると教えておられたではないか。『もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから』と言われたときである（ヨハネ五・一四）。

また、あちこちに、まれな例として、熱狂的な人がいるかもしれない。自分はいやされたと言い、その趣旨の証しをし、喜んでそれを公表させようとする。ところが間もなく、ただ「信仰によって受け取った」だけだと言うのである。

そうしたすべての人について、またどんな種類であれ、ほかに失敗と見えることについて、私たちは深く遺憾に思う。そして、記事を書く人はみな、記事に取り上げる人が上に挙げた部類のどれにも当てはまらないことを確かめるよう勧めたい。この集会では、至る所で、何百もの完全ないやしがある。マサチューセッツ州モントウェイトの「宣誓した証人たち」のような人々である。彼らは宣誓のもとで、自分たちに臨んだ神の大能の力について証言するだろう。イエスの命令に従って、イエス・キリストの名によって悪霊と病がしかられ、手を置かれたときに臨んだ力である。

さて、この集会で用いられている方法についてのささやきについて、少し述べよう。祭壇の周りの大群衆のために、便宜上、人を壇に上がらせるのは悪いことか。その人の魂が神の前に正しいかどうかを尋ねるのは悪いことか。自分をすっかりイエスに明け渡し、イエスがすべての病から解き放ってくださることを期待するよう告げるのは、悪いことか。

ペテロとヨハネのように、人をじっと見て、私たちを見なさいと命じるのは悪いことか。そしてイエス・キリストの名によって、起きて歩けと命じ、手を取っ

て起こしてやるのは悪いことか。ペテロのように、『アイネヤよ、イエス・キリストがあなたをいやして下さるのだ』と言うのは悪いことか（使徒九・三四）。

パウロのように人をじっと見て、いやされるほどの信仰があるかどうかを見て取るのは悪いことか。大声で、自分の足でまっすぐに立てと命じるのは悪いことか。パウロがしたように、悪い霊につかれた人の所に行き、イエス・キリストの名によって、その人から出て行けとその霊に命じるのは悪いことか。人々が歌い、一つになって神をほめたたえ、大きな喜びに満たされるのは悪いことか。

ソロモンが宮を奉献したときのようにするのは悪いことか。そこには大勢の祭司（牧師）と多くの歌う者と楽器があり、みなが一つになって大きな賛美の声をあげた。それで宮全体が主の栄光に満ち、祭司たちは主の栄光のゆえに勤めをすることができなかった。民はみな地にひれ伏したのである。

そして最後に、祈ってもらう人に、手をたたいて主をほめたたえるように言って、信仰を行いに表すよう勧めるのは、悪いことか。いや、決してそうではない！　いや！　上のすべての問いには、ただ一つの答えしかないと私は信じる。それは悪いことではなく、正しいことである。だからこれらの方法は、祈ってもらう人々にも、祈ってもらいたいと願うほかの人々にも、神への信仰を励ましているのである。

この集会で用いられている方法が悪いのなら、ソロモンが宮の奉献で用いた方法も悪かったことになる。ソロモン自身も大した詐欺師だったことになる。ペテロもヨハネもパウロも、その方法が間違っていたことになる。イエスもそうである。イエスは人々に「見上げなさい」と言われ、『手を伸ばしなさい』と言われた（マルコ三・五）。またほかの多くのしかたで、信仰を行いに表すよう励まされたのである。

ばかげたことだ！　方法とこの力について、なぜこんなに疑い、つぶやくのか。それらは、ある人々の落ち着いたやり方には合わないかもしれない。しかし神はそれを重んじられ、祝福してくださる。この集会で、何百人もの人が救われ、いやされ、聖霊のバプテスマを受けている。同じような不信仰に陥ることのないよう、みなつぶやくのをやめようではないか。『また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた』（第一コリント一〇・一〇）。

（署名）サイラス・B・フォックラー

フローレンス・ジョンソンの証言

（マサチューセッツ州チェルシー）

（証人台で）

私は四年ほど前から、ペンテコステの運動にかかわってきました。その前は、メソジスト教会の会員でした。ボストンでペンテコステの集会に出席してきました。モントウェイトで壇に上がり、そこでいやされました。エター姉妹が、いやされたい人は前に出て来るようにと呼びかけたので、私は上がって行って椅子に座りました。一年以上、ひざを動かすことができずにいました。クラーク兄弟が悪魔をしかり、人々が祈り、私も祈って神をほめたたえました。私は力の下に横たえられました。そこからさめると、歩くことができました。それ以来、少しも痛みはありません。はい、若い娘のころに、催眠術の実演を見たことがあります。そのとき私は、催眠術の力の下に置かれたのだと思います。それは、これとはまったく違っていました。あの人たちは人の目をまっすぐに見つめましたが、ここでは私は目を閉じていました。はい、私のほかにも、この集会で助けられた人を知っています。八歳の小さな女の子が、気管支炎と神経の病をいやされました。たちまちいやされたのです。その子は力の下に倒れ、異言を語りながらさめました。いいえ、その子の言ったことはわかりませんでした。その子は聖霊の力の下にあったのです。ほかの人が異言を語るのを聞いたことがありますし、私自身も語りました。いいえ、自分の言ったことはわかりませんでした。解き明かされなければ、だれにもわかりません。ときには、その言葉を知っていて解き明かせる人がいることもあります。いいえ、エター姉妹も、神が解き明かしを与えてくださらなければ、それを理解することはできません。

ニューヨーク州アルビオンのエバ・ハリス夫人の証言

（証人台で）

質問に答えて、ハリス夫人は述べた。私は、娘を友人と一緒にモントウェイトへ行かせるつもりでした。娘は何年もてんかんを患っています。私自身は来るつもりはありませんでしたが、霊の助けが必要だと感じました。霊の教えを受けようと決め、それを受けました。娘は生後十一か月のときから、てんかんを患ってきました。モントウェイトに来てから、娘は別の子供のようになりました。来たことさえ覚えていなかったのです。今では、ほとんど普通の状態です。娘が壇に上がったとき、私はそこにいて、娘の代わりに答えました。何人かが娘に手を置きました。私は気がかりで目に入りませんでしたが、みなが手を置いたのだと思います。娘を証人台に立たせたいとは思いませんが、娘はモントウェイトにいます。娘を証人台に立たせるのは害になるかもしれない、と医者ならだれでも言うと思います。娘の知能に負担がかかるかもしれません。娘は最近まで、三人の医者の治療を受けていました。フィラデルフィアのミルズ医師、アトランティックシティのスチュアート医師、アルビオンのジャクソン医師です。興奮は娘に悪い影響を与えやすいと思います。もっとも、モントウェイトでは影響を受けませんでした。私は、たちまちいやされたと言っているのではありません。神はいつもたちまちいやされるわけではありません。娘がいやされ、よくなりつつあることを、私は確信しています。ここに来たとき、娘の顔はまったく表情がありませんでした。娘は壇の上の椅子で祈ってもらいました。娘が意識を失ったとはまったく思いません。私たちがそばにいるのがわかった、と娘は言いました。娘は運ばれて行き、私はそのそばにいました。娘はたぶん三十分ほど横たわり、それから歩いて家に帰りました。それ以来、医者に診てもらってはいません。その必要があるとは思いませんでした。私が頼りにしているのは、エター夫人ではありません。神です。

一九一三年八月十四日、木曜日

もう一つの報告

（ここには、マサチューセッツ州サウスフレーミングハムのE・W・ピットブラド夫人の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第四十三章　アーカンソー州ホットスプリングスで

神は力をもって私たちと共におられ、救い、いやしてくださった。多くの州から、多くの牧師と働き人が来ていた。みことばは力をもって語られた。大勢の群衆がそれを拾い集め、満ちたかごを運んで、飢えた魂に配った。多くのいやしの奇跡が行われた。

その一つは、見込みのない盲目の少女だった。彼女は救われ、たちまちいやされた。私たちが彼女に手を置いて視力のために祈ると、視力は完全に戻った。彼女の母親もそこに連れて来られた。多くの病を抱えた見込みのない足の不自由な人で、気が狂いかけていた。彼女は、自分はゆるされない罪を犯したと思っていた。彼女は救われ、いやされ、完全に健やかにされ、聖霊のバプテスマを受けた。それから彼女はアーカンソーからカリフォルニアへ行き、道々、神がしてくださったことを語った。二年後、私はカリフォルニア州サンフランシスコで、ふたりに再会した。ふたりとも御霊に満たされていた。神がどれほどすばらしく自分たちをいやしてくださったかを、大勢の聴衆にいつでも語ろうとしていた。視力を受けた若い姉妹は、見たこともないほど美しい青い目をしていた。大きく、まつげが長く、ぱっちりと見開かれていた。それは確かに大きな奇跡だった。

町のある酒場の主人が、私の本『聖霊の行伝』を一冊買い、妻のもとに持って帰った。妻はひどい病気になった。彼はそばに座って看病しながら、その本を読みはじめた。彼は罪を示されて回心した。間もなく二軒の酒場を売り払い、シカゴのムーディー聖書学校に行った。今は福音を説いている。これは、ホットスプリングスの集会で神がなさったことのほんの一部である。

私たちが開いた集会のどれについても、神がなさったことを語って、かなりの厚さの本が書けるだろう。しかしここには、ほんの少しだけ書く。イスラエルに神がおられることを、あなたがたが知るためである。

（署名）ウッドワース・エター夫人

アーカンソー州ホットスプリングス

（『ワード・アンド・ワーク』誌から転載）

よい働きは続いている。神をほめたたえよ！　ある夜、二十五年間目の見えなかった男がいやされた。彼は専門医たちに、治らないと宣告されていた。神は彼を、千二百マイル離れたアイオワ州デモインから、視力を受けさせるためにここへお遣わしになった。ほかにもいやされている人々がいる。

神はいやすために御手を伸ばされる

オッパーマン兄弟の報告

アーカンソー州ホットスプリングス

神の摂理によって、三人がアーカンソー州ホットスプリングスに来た。私たちの愛する姉妹M・B・ウッドワース・エター夫人と、アール・W・クラーク兄弟、C・B・フォックラー兄弟である。集会は、たいへん美しい場所であるホイッティントン公園の公会堂で開かれている。祝福されたリバイバルが町じゅうに広がっている。この集会に出るために、マルヴァーンの野営集会から百人を超える人々が来た。南部のほとんどすべての州から、また北部のいくつかの州からも訪れる人がいる。その大部分は、いやされるために来た。集会の最初の夜、最初に祈ってもらったふたりが、祈りの直後に力に打たれて倒れた。そして翌日、神にいやしていただいたと証しをした。それ以来、多くの人が主に大いに祝福され、いやされたと証しをしている。

六十七歳のある婦人は、三十五年来、耳が聞こえなかったが、たちまちいやされた。彼女は低い声の会話さえ聞き取ることができた。（筆者は、彼女が祈ってもらったときそのそばに立っていて、解き放たれるのを自分の目で見た）

（ここには、ルース・ウェブスター夫人とミニー・マクハーグ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

御霊による歌、天の賛歌、あがなわれた者のほかはだれも歌うことのできない歌が、しばしば現れる。それは御霊のたいへん美しい現れである。その後にはたいてい、預言と異言と解き明かしによって、主からの美しいメッセージが続く。

この集会のたいへん祝福された特色の一つは、聖徒たちのあいだに現れている愛と一致である。

（署名）Ｄ・Ｃ・Ｏ・オッパーマン

エホバは今もアーカンソー州ホットスプリングスで働いておられる

（ここには、ハワード・Ａ・ゴスの報告が載っているが、著作権が残っているため訳していない）

『わたしは主であって、あなたをいやすものである』（出エジプト一五・二六）

アーカンソー州ホットスプリングスでの最近のリバイバルで、主に奇跡的にいやされたふたりの婦人の証し

（ここには、アール・Ｗ・クラークが『クリスチャン・エバンジェル』誌に寄せた、ふたりの婦人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ホットスプリングスの集会の長く続く影響

私たちが去るとき、町全体が神の大能の力によってわき立っていた。集会は、御霊の力と現れのうちに続いた。多くの人が救われ、いやされ、聖霊のバプテスマを受けた。集会を開いていた会館は六か月のあいだ借りてあり、クリスマスまではフォックラー兄弟が責任者として残ったのである。この集会の長く続く実の一つは、ある姉妹からの五千ドルの献金だった。それでペンテコステの働きのための幕屋を建てるのである。オッパーマン兄弟がホットスプリングスの働きを受け持ち、聖書学校を開こうとしている。

罪人たちへの望み

罪人よ、友よ、解き放たれたいか
情欲と高ぶりと罪から
心の扉を開け放ち
愛する救い主を迎え入れよ
（おりかえし）
来るか、はい、行きます
あなたのもとへ帰ります
救い主がお呼びになる声が聞こえるから
私のような者にも望みがあるから
自分を喜ばせる生き方から降りて来なさい
その野心と愚かさと煩いから
どんな値で、魂を売り渡し
天の都の外に締め出されようというのか！
天国を得ようとする行いから降りて来なさい
むなしい告白と信条から
自分の内にある善や知恵から
欲に駆られて金をもうけるたくらみから
ザアカイが降りて来たように降りて来なさい
今日、自分を高くする所から
救いは失われた者のもとに下って来る
私の救い主は決して拒まれない

カルバリの山のあの木が見えるか
あなたのための救いが成し遂げられた所が
小羊の血によって神をほめたたえよ
私たちには、よじ登ることは何も残されていない

第四十四章　テネシー州メンフィスでのウッドワース・エター集会

（『ウェイ・オブ・フェイス』誌、一九一三年十二月十八日号から転載）

主はここメンフィスで、すばらしく働いておられる。先週の日曜日の最初の集会からである。主の御霊が目覚ましいしかたで注がれ、多くの病人をいやされた。主はエター姉妹がみことばを語るのを祝福しておられる。姉妹の使命は、神の民を呼び集めることである。どの集会でもそうであるように、人々は多くの州から来ている。ここには、一年前のダラスの集会でいやされた人々がいる。サンアントニオの集会でいやされた姉妹もいる。次はその姉妹の証しである。

（ここには、キャリー・レイ嬢の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

エター集会

テネシー州メンフィス、グレース・アンド・トゥルース・アセンブリー、一九一三年十二月八日

この一週間、神は力強く私たちのただ中におられ、罪と病から救い出す力ある方であることを示してくださった。また、聖霊のバプテスマを授けてくださった。群衆が押し寄せている。病人や足の不自由な人々が連れて来られ、イエスの名によっていやされている。日曜日の朝、ひとりの婦人がほかの州から、ふたりの人に運ばれて連れて来られた。壇にたどり着く前に力が彼女の上に下り、彼女は跳びはねて神をほめたたえはじめた。いやされ、喜びに満ちていた。

多くのハンカチ＊の上で祈り、それを送り出した。送った先の人々がいやされたという知らせが届いている。遠くから多くの人がここに来ており、来るつもりだと書いてくる人々もいる。

エター夫人と働き人たちは今テネシー州メンフィスに

（『クリスチャン・エバンジェル』誌から転載）

「すべての祝福の源なる神をほめたたえよ」。確かに主は恵み深い。『クリスチャン・エバンジェル』誌の読者のみなさんが、私たちのために大いに祈ってくださるものと信じている。また、主が私たちを導いてくださると信じている。私たちは南部への伝道旅行に出かけた。一つの所に十五日から三十日とどまるつもりである。先週の金曜日にここに着き、十一月二十九日の日曜日に集会を始めた。出席者は多く、集会にはとても麗しい霊があった。集会は、恵み深いいやしをもって始まった。エター姉妹は、大いに自由に説教している。姉妹が手を置くと、ほとんどだれもが跳び上がって躍り上がり、いやされたことのゆえに主をほめたたえた。聖徒たちはみな、手を上げて助けていた。勝利を祈り、信じていたのである。勝利ははっきりと現れた。救われた人もいれば、バプテスマを受けた人もいた。

その地域の聖徒たちは、ひどく分かれていたが、一つに集まった。あらゆる違いが、イエスの足もとに置かれた。みなが新しく出発し、キリストと復活のほかは何も見ず、何も知るまいと心に決めた。彼らはみな、最も神聖な信仰の上に築き上げられた。その結果、御霊のすばらしい注ぎがあった。

（ここには、＊の箇所に付けた編者A・E・シドフォードの注が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第四十五章　ミシシッピ州メリディアンとアラバマ州ウォリアーでの伝道

ウッドワース・エター集会

（ミシシッピ州メリディアンの『スター』紙から転載）

集会は元日の夜に、六番街の伝道用の天幕で始まった。路面電車のイーストエンド線の沿線である。毎日、午後二時と午後七時半に集いが開かれている。最初の集いから、集会は大成功を収めている。集会の中心人物は、インディアナ州インディアナポリスのM・B・ウッドワース・エター夫人である。夫人には三十五年の伝道の経験がある。何千人もの人が、夫人の働きを通して主からいやしを受けたと伝えられている。この集会でも、すでに十五人か二十人ほどが、いやされたと証しをした。病は、神経痛からブライト病や癌にまで及ぶ。天幕は毎晩、礼儀正しく熱心な聴衆でいっぱいになる。町の人々のほか、三百マイル以内の遠くからも来ている。

手を置かれて祈ってもらった人々の中に、アラバマ州北西部の著名な内科・外科医の娘がいた。彼女はリウマチのためにひざがこわばって、歩くことができなかった。医術はすでに尽くされていた。父親が娘の状態について証言した。エター夫人は、最も分別があり、実際的で、慎重で、勇気のある女性の一人である。夫人は、ほかの教派や医者を悪く思わせるようなことは、何一つ言わず、何一つしない。

席に座ったまま多くの人がいやされる

ミシシッピ州メリディアンにて
M・B・ウッドワース・エター夫人と働き人たち

（『クリスチャン・エバンジェル』誌、一九一四年一月十七日号から転載）

まことに主は恵み深く、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない。主はここで、驚くべきしかたで私たちを祝福しておられる。集会は始まったばかりだが、神の力があまりにはっきりと現れているので、席に座ったままいやされた人が大勢いる。神の力は人々の上にも下っており、罪人たちが自分の家で救われている。この前の火曜日、アラバマ州の著名な医者が、いやしを求めて娘を連れて来た。彼は内科・外科医で、娘をこの国で最もよい医者たちに診せてきた。娘は八回手術を受けていた。十五種類の麻酔を受け、片方の脚を失っていた。残った脚も、リウマチですっかり曲がっていた。祈ってもらうと、曲がっていた脚がほとんどすぐにまっすぐになった。彼女は目を天に上げ、涙を浮かべて叫びはじめた。「いやされた！　まっすぐになった！　まっすぐになった！」天幕の中のほとんどだれもが涙を流していた。午後の集会にしては、かなりの人が集まっていた。医者はとても喜んで証しをし、主が自分のために備えておられるものをすべて受けたいと言った。夜の集いでは、彼は祭壇の前に出て、バプテスマを求めていた。

エター姉妹の本を外国の伝道地に送れるようにしてくださっている方々に、感謝したい。今週は十五冊が出て行く。すでに送った本について、今、証しが届いている。本が、受け取った人々にどんな祝福をもたらしているかという証しである。

これは、神のいやしを通して異教の人々に届く、すばらしい方法になると私は確信している。だから、引き続き祈っていただきたい。外国にいるすべての宣教師が一冊ずつ受け取るまで、本を送り出すためのお金を主が送ってくださるように。主にあって、あなたがたの兄弟より

ミシシッピ州メリディアンでかつて開かれた最高の集会

（『クリスチャン・エバンジェル』誌、一九一四年一月三十一日号から転載）

集会への関心は、少しも衰えずに続いている。何人もの人が証しをした。ムーディーとサンキーの集会、サム・ジョーンズの集会など、この二十五年間にここで開かれた大きな集会にはみな出た。しかし、エター姉妹の集会に並ぶものは一度も見たことがない、というのである。群衆が毎晩、天幕の外に押し寄せている。明日は天幕を広げて、さらに四百人が入れるようにする。

集会のあいだに、主は多くの人を驚くべきしかたでいやしてくださった。とくにすばらしいいやしは、メリディアンでよく知られた綿の仲買人のいやしだっ

た。彼は二十九年間リウマチを患い、四年間ひどいペラグラを患っていた。祈りがささげられると、彼はたちまちいやされた。彼はこの国で最もよい医者たちにかかったが、長く続く効果はなかった。しかし偉大な医者であるお方のもとに来ると、主が彼をいやしてくださった。周りの州から多くの人が来ている。昨日は、ワシントン州からひとりの男が着いた。運賃は七十四ドルだった。彼は聖霊のバプテスマといやしを求めて来たのである。

ウッドワース・エター集会

（ここには、アール・W・クラークの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

十四歳の少年がいやされる

（ここには、チャーリー・F・オーエンの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

チャーリーの母から

（ここには、チャーリーの母ダン・L・オーエン夫人の短い証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ブライト病をすばらしくいやされる

（ここには、M・L・ホイットロック夫人の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ミシシッピ州メリディアン、二十三番街五〇九番地のオルガ・カールソン嬢は、上の例について私たちに書いてきた。詳しいことは書いていなかったが、「すばらしいいやしです」と言っていた。

アラバマ州ウォリアーでの集会

私たちは、魂に勝利を抱いて、ミシシッピ州メリディアンの集会を閉じた。私たちが泊まった家の人々は、美しいクリスチャンの家族だった。できるかぎり私たちをもてなし、自分たちの分の重荷を負ってくれた。出発の時刻が来ると、何人もの聖徒たちが駅に集まって別れを告げてくれた。喜びの涙と悲しみの涙が入りまじった。悲しみは私たちが去るからだった。喜びは、もう別れることなく、とこしえにイエスと共にいられるときが急速に近づいているからだった。列車がアラバマへ向かって駅を出ると、右手に貨物列車が止まっていた。そこには、家族のほとんどと共に救われた機関士が乗っていた。家族の多くは、すばらしくいやされていた。

バーミンガムでは、親類のもとで、必要だった休みを楽しんだ。町の聖徒たちは、私たちが来ていると知ると、自分たちのさまざまな集まりに来て集会を開いてほしいと切に願った。ひとりの若い男は、フロリダからずっと私たちを追って来た。私たちに会って話し、集会に出るためである。バーミンガムにいるあいだに、各地で集会を開いてほしいという招きがほかからもあった。その一つが、町から十五マイルか二十マイルほど離れた小さな町、アラバマ州ウォリアーからの招きだった。そこの聖徒たちは代表をよこし、自分たちの所に来て、せめて何回かは集会を開いてほしいと懇願した。彼らは熱心そうな、よい聖徒の一団だった。私たちは、そこに主の御手があると感じた。だから、行って何回か集会を開くのが私たちの務めだと思った。

まことに驚くべき出来事

私たちは土曜日に出かけて、月曜日に戻った。ウォリアーに着くと、大勢の聖徒たちが出迎えて、町に歓迎してくれた。駅で最初に私たちを迎えた人のひとりは、八十歳の老人J・W・アボット医師だった。八か月ほど前、彼は胃のひどい癌のために、祈ってほしいとハンカチを送ってきていた。彼はしばらく前からこの癌と闘っていた。医学が与えうる最善の助けを用いたが、すべてむだだった。ハンカチが届く前から、神は彼に、いやされたというあかしを与えておられた。

しかし彼は、まだたっぷりした食事をとるのを恐れていた。数日後に手紙が届くと、そこにはこう書いてあった。「何でも食べてよろしい。害にはなりません」これを読んで、彼の信仰は新たに神をしっかりとつかんだ。彼はたっぷりと食事をとりはじめ、それ以来ずっと健康である。癌は消えた。彼は駅で私たちと握手しながら、主がしてくださったことをほかの聖徒たちの前で証しした。そして、一枚の紙切れを私たちに手渡した。それは、私たちの本『聖霊の行伝』五十冊の注文書だった。近所の人々に配るために買ったのである。

ウォリアーに短くとどまったあいだに、大勢の人が救われ、いやされ、聖霊のバプテスマを受けた。聖徒たちは、近くからも遠くからもこの集会に来た。神の御霊が大能の力をもって彼らの上に下られた。ときには、ある人々の上にあまりに強く臨まれたので、彼らは御霊によって踊った。ほかの人々は神の前に打ち砕かれて泣き、神のもとへと突き進んで行った。

私たちがもてなされた家には、しばしば大勢の聖徒たちが集まった。私たちは長い時間、救い主への賛美を歌って過ごした。そうした集まりの何度かで、神の力が、集まったほとんどすべての人の上に下った。三、四人もの人が、聖霊に動かされて異言を語り、互いに話し合った。そのようなときにはいつも、部屋全体に神の力が満ちあふれていた。

第四十六章　ジョージア州アトランタでの大リバイバル（その一）

小さな地震が町を揺るがし、それから力強いリバイバルが起こる

多くの人がいやされ、救われ、バプテスマを受ける

一九一四年三月五日、エター氏と私は、ふたりの若い男と共に、働きの場であるアトランタの町へ向かう列車に乗った。夫はそのころかなり体が弱っていた。若いふたりは、キリスト者の戦いに踏み出したばかりだった。戦いは（人の目から見れば）厳しいものになりそうだった。しかし私たちは、任務を授けてくださったイエスを仰いだ。そして主の力によって進んで行った。そうすれば主のために大きな勝利を得ると知っていたからである。その勝利によって、多くの魂が御国に導き入れられるのである。私は、御霊に満たされたよい牧師を、主が少なくともひとりは送ってくださることを願っていた。私のそばに立ってくれて、少しは頼りにできる人である。しかし、そのような人は見当たらず、神がだれかをお遣わしになることもなかった。そのあいだに神は、戦いが始まったら、必要な助けと力を、ただご自身だけに仰がなければならないことを、はっきりと示してくださった。また、私に必要な助けを後で送ってくださることも示された。

この地で戦いを厳しくしたことの一つは、神の民が多くの党派に分かれていたことだった。何人もの聖徒たちは、私たちに数か月後に来てほしいと望んでいた。そのころには、私たちのために大きな幕屋の用意ができるはずだったのである。ある者はこちらへ、ある者はあちらへと引っ張っているようだった。町のある実業家（C・H・バージ氏）が、何年も前から小さな伝道所を持っている。そこで礼拝する人々は、自分たちを「ギデオン団」と呼んでいる。この人々は後に、その名にふさわしいことを示した。彼らは、私たちがメリディアンにいたときに代表をよこし、アトランタに来てほしいと招いてくれた。私たちは、この招きに神の御手があると感じた。それで、道が開かれるならという条件で、招きを受けた。代表のバージ兄弟は家に帰り着くと、関心を持ちそうな聖徒たちをみな集めた。私が町に来られたら大リバイバルが開かれる、という見込みに関心を持ちそうな人々である。

それは合同の集会になるはずだった。特定の教理は説かないことになっていた。罪人に必要なものとして、イエスと十字架を高く掲げるのである。どんな信条や「主義」に属していても、またどこにも属していなくても、すべての人のための集会になるはずだった。彼らは委員会を作り、事務と会計の面を受け持たせた。この委員会には、さまざまな信仰を持つ男女がいた。さまざまなペンテコステの伝道所の人々や、ギデオンの伝道所の人々がいた。ホーリネス運動に属する人々や、メソジストやバプテストの教会につながる人々などもいた。

幻によって示された戦いの一端

集会が始まる少し前、働き人のひとりが幻を見た。幻の中で彼はある所にいて、そこでは一晩のうちに一メートル二十から一メートル半ほどの雪が降った。翌朝、人々はみな、用事に出かけようと、雪をかき分けて進むのに苦労していた。道はすべてふさがれ、だれも通り抜けられそうになかった。だれもが、道を開こうとして自分の敷地より先へ踏み出すのを恐れているようだった。人々は、だれかがやって来て道を開いてくれるのを待っているようだった。人々が大いに待ち望んでいると、突然、一頭立ての馬そりがやって来た。乗っているのはひとりだけで、それは婦人だった。そのそりは、雪をかき分けてまっすぐに突き進んで行った。すると、たくさんの乗り物が見えてきた。みな、その一頭立ての馬そりの後について来ていた。間もなく、この道をあらゆる往来が通るようになった。人々は、だれかが思いきって雪を突き破り、道を開いてくれたので、うれしそうだった。そこで彼は目を覚まし、それが幻だったと知った。これは、ジョージア州の大きく美しい町アトランタで私たちが集会を始める、ほんの数日前のこ

とだった。その町で神は、病む人々と、魂ばかりでなく体も苦しむ人々のために、驚くべきわざをなさったのである。

私たちが町に着いて一時間もたたないうちに、町は地震に見舞われた。多くの家で棚から皿が落ちるほどの揺れだった。多くの所で感じられたが、町の地震計には記録されなかった。私をはじめ多くの人は、それが神の御声だと感じた。神は、大いなる力をもって来ようとしておられることを、とどろく声で人々に警告しておられたのである。恐ろしいさばきが間もなく世に臨むこと、キリストがすぐに来られるのに私たちが備えなければならないことも告げておられた。私たちは日曜日の朝、大勢の群衆を前に集会を始めた。私が最初の説教をしていると、人々がひとりの婦人を簡易寝台に乗せて運び込んだ。肺病で死にかけていた。普段の服ではなく、短い寝間着だけを着ていて、今にも息が詰まって死にそうだった。私は耐えられなかった。説教壇を離れて彼女のもとに行った。彼女は死にかけていて、救われてさえいなかった。熱に燃えていた。私は彼女に手を置き、神の小羊の血で彼女をおおった。彼女は静かになり、熱が去った。彼女はすぐに神をほめたたえはじめた。そして短い寝間着のまま寝台から降り、みなの前を行ったり来たりして歩いた。叫んで主をほめたたえていた。私は説教壇に戻って説教を終えた。午後には、彼女は壇の上でほかの人々と一緒に歌っていた。だれかが私に、朝の集会でいやされた婦人がどうなったか知っているかと尋ねた。私は、知らない、あれから見ていない、と答えた。「なんですって！　あの人なら壇の上に座っていますよ」とだれかが言った。彼女は、きちんと服を着て、ほかの人々と同じように歌いながら前に出て来た。

ラッキー通りの古いバプテスト幕屋で驚くべきことが行われているといううわさが、たちまち広まった。日中にも関心が高まり、席が足りずに多くの人が帰されるほどになった。ある晩には、千人から二千人が帰されたと見積もられた。戸口も通路も窓も、人々でぎっしりだった。福音が説かれるのを聞き、御霊が現れるのを見ようとする人々である。病人のために祈るときには、人々はいつも大きな関心を示した。病人が昔の聖書のやり方でいやされるのを見ることに、彼らは慣れていなかったのである。マルコの最後の章に言われているとおり、信じる者にしるしが伴うのを見ることにも慣れていなかった。アトランタの指導的な外科・内科医のひとりは、絶えず証しをした。この集会では、医学がいやすために何一つできない人々が、次々に壇に上がって来た、というのである。この医者自身（ボーエン博士）も、医者たちに死ぬものと見放された後、この集会でいやされた。集会の終わりには、彼と妻は聖霊のバプテスマを求めていた。そして、残りの生涯を伝道の働きにささげる備えをしていた。

町の外の多くの地域も、この集会によって大きな益を受けた。説教と病人のいやしのほかに、御霊は新しいしかたでご自身を現された。最も献身した人々が、昔のダビデのように、壇の上でも聴衆の中でも踊ったのである。小さな子供たち、若い男女、白髪の男女が、みな一度に踊るのが見られた。御霊が動かされるままに、前へ後ろへと揺り動かされていた。このように御霊に力強く用いられているうちに、倒れ伏して死んだようになる人々もいた。そして、神から幻と啓示を受けた。このような御霊の現れは、たいてい罪人に畏れと罪の自覚をもたらした。彼らは超自然の力が働いているのを見た。調べれば調べるほどこの自覚は深まり、ついに彼らは心を神にささげた。

耳が聞こえず口のきけない十人がいやされる

アトランタでの最初の集会のいやしの奇跡の中には、耳が聞こえず口のきけない人々およそ十人のいやしがあった。生まれつきそうだった人もいた。その中にひとりの婦人がいて、いやされると同時に回心した。彼女はすぐに、賛美の言葉をいくつか口にした。全身が復活の力によって軽くなり、すぐに前へ後ろへと踊りはじめた。そしてピアノの所へ行き、生まれて初めて音楽を聞いた。彼女はたいへん心を動かされ、音楽に合わせて拍子をとりはじめた。間もなく彼女は、生まれつき耳が聞こえず口のきけない友人を連れて来た。ふたりは並んで座っていた。聖霊がひとりの牧師をとらえられた。彼はいくつもの国の言葉を語り、御霊によって踊って歌い、それから手話で語った。そのメッセージは、耳が聞こえず口のきけないその婦人に向けたものだった。神は彼女とその友人をとらえられ、彼女を祭壇の前に導かれた。数分のうちに彼女は救われ、話すことも聞くこともできるようになった。ふたりとも主をほめたたえはじめ、踊った。ふたりともピ

アノの所へ行って泣き、新しい世界に入ったようだと聴衆に示した。ああ、その驚くべきみわざのゆえに、神に栄光あれ。もろもろの民に神をほめたたえさせよ。こうしたことは、いつも聴衆を涙させ、賛美の叫びを上げさせる。

ユダヤ人が異言のメッセージを理解する

同じ若い牧師が、異言を語っていた。私の働き人のひとりで、ほかの集会でも私と共に旅をした人である。会衆の中にひとりのユダヤ人がいて、神はこの牧師を通してそのユダヤ人に語られた。神の力がそのユダヤ人を打ち、彼は入神状態のパウロのように床に倒れた。イエスが彼にお現れになった。さめたとき、彼は回心しており、御霊に満たされていた。彼は立ち上がって、大いなる力をもって説教しはじめた。そして、あのメッセージは自分に向けたもので、ヘブル語で語られていたと言った。彼は、主が自分にお現れになり、十字架の出来事の一部始終を見せてくださったと言った。私は、それ以前にもそれ以後にも、これほどキリストを生き生きと描き出した人を聞いたことがない。彼はカルバリの悲劇を、大いなる力と雄弁をもって示し、イエスの御名をあがめた。彼を見て聞いた者はだれも、イエスがメシヤ、神の子であることを疑えなかった。

祈りを求める電報が届く

ある晩、私がたいへん大勢の聴衆に説教しはじめたころ、使い走りの少年が来て、一通の電報を私に手渡した。キャリー・ジャッド・モンゴメリーの夫ジョージ・モンゴメリーが両側肺炎で死にかけているので、祈ってほしいというのである。私はこの愛する兄弟をよく知っていた。彼を失うわけにはいかない、彼を起き上がらせることは神の栄光になる、と感じた。

私は聖徒たちに、私が彼のために祈るあいだ、信仰を一つにしてほしいと頼んだ。声に出して祈ると、彼がいやされたというあかしを受けた。私は人々に告げた。私たちは勝利を得た、祈りは聞かれた、疫病はやんだ。主は彼を起き上がらせてくださり、彼は野営集会に行って神の栄光を現すだろう、と。

私たちが祈ったのは、土曜日の夜九時ごろだった。はるかカリフォルニアでは、愛する家族が、彼が息を引き取るのを今か今かと見守っていた（この世の望みはすべて尽きていた）。そして大陸を隔てた所で、主は私たちの叫びを聞いてくださり、彼がいやされたというあかしを与えてくださった。

みなが驚いたことに、彼は翌朝起き上がり、服を着て、食堂まで歩いて行き、たっぷりと食べた。それからも日ごとに力を増していった。彼を起き上がらせてくださった大いなるあわれみのゆえに、主をほめたたえよ。

これを読む人の多くは、彼の長く重い病と、驚くべきいやしについて聞いているだろう。モンゴメリー姉妹は、そのことを広く知らせた。しかし姉妹は知らなかった。主が私たちに信仰とあかしを与えてくださったことを。何千マイルも離れた所から、主が私たちの祈りを聞いてくださったというあかしである。主が私に勇気を与えて、彼がいやされた、間もなく便りがあるだろうと大勢の会衆に告げさせてくださったことも、姉妹は知らなかった。ああ、神をほめたたえよ！私たちが呼び求めているうちに、主は答えてくださる。それから今で二年になる。数か月前、私がサンフランシスコで集会を開いていたとき、彼とモンゴメリー姉妹は、そこでのリバイバルの大きな助けになった。ああ、主が彼のいのちを救ってくださったことを、私はどれほどほめたたえていることか。彼は信仰と勇気に強く、夫婦は共に「昔ながらの良い道」を歩み続けていた。

内科・外科医ジョン・ボーエン博士

ジョージア州アトランタ、頭蓋骨折と脚の骨折をいやされる

（ここには、ボーエン博士の証しの手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ホルダビー博士、「神のいやし」について説教する

（ジョージア州アトランタの日刊紙から転載）

（牧師は、エター夫人には聖書の権威の裏づけがあると言う）

日曜日の朝、ムーア記念教会での礼拝の中で、ホルダビー博士はエター夫人に触れた。夫人は、古いブロートン幕屋で、自ら「神のいやし」と呼ぶ集いを開いている。（ここには、ホルダビー博士の説教からの引用が載っているが、博士の没年が確かめられないため訳していない）

（今日、信仰がどれほど欠けているかを示す、なんという言葉だろう）

執行委員会の会長とその仲間たちの報告

（ここには、編者A・E・シドフォードの注が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（C・H・バージ兄弟は、「ギデオン協会」すなわちアメリカ・クリスチャン旅行商人協会の地元の支部の会長でもある。この協会のおもな目的は、旅回りの商人をイエス・キリストに導くことである）

（ここには、執行委員会のC・H・バージ会長ら七人が連名で寄せた推薦の文が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（『クリスチャン・エバンジェル』誌から転載）

アトランタのリバイバル　多くの人が救われ、いやされたと伝えられる（一九一四年五月十七日）

（ここには、婦人準備委員会の委員長L・N・ハリス夫人の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第四十六章　ジョージア州アトランタでの大リバイバル（その二）

リバイバルのさらなる知らせ

これらの人々を集会に引き寄せている大きな理由の一つは、福音が目に見える形で示されるのを見ることである。昔のように『御言に伴うしるし』をもって示されるのである（マルコ一六・二〇）。主ご自身が、いやすために御手を伸ばしておられる。そしてイエスの名によって「しるしと不思議」が行われている。ここアトランタで、みことばに伴った最初のしるしの中には、医学の手のとうてい届かない肺病の人々が何人かいた。

この人々は、悪霊が追い出され、病がしかりつけられた後、歩いて神をほめたたえた。そして、まさにその時刻から快方に向かいはじめた。それ以来、神はご自分の力を現して、多くの驚くべきことをしてこられた。罪人の魂と体の必要を満たして、最もかたくなな罪人にさえ、福音がまことであることを納得させてこられたのである。それはアトランタの人々を大いにわき立たせた。実業家たちが仕事の最中に、ラッキー通りの古いバプテスト幕屋で起こっていることについて話し合っている姿が見られるほどである。アトランタの指導的な人々の何人かにも、福音が届きつつある。目覚ましい例の一つは、十歳の小さな小学生の場合である。彼は生後十三か月のときから片方の目が見えなかった。祈りの後、視力が戻り、その目でもう一方の目とほとんど同じくらいよく見えるようになった。

同じ晩、ひとりの婦人が、一歳の小さな子供を抱いてよその土地から来た。その子は背骨が役に立たず、座ることができなかった。知能も冒されていて、だれもその子の注意を引くことができなかった。また片方の目が見えなかった。祈りの後、その子の背骨に力が入り、まっすぐに座った。手の届くものは何でもつかみ、顔に笑みを浮かべて、物がわかる様子を見せた。どのように試しても、視力が戻ったことがわかった。そのあいだ母親は涙を流し、神への賛美にあふれていた。

サウスカロライナ州ウェストミンスターのD・T・ケイン牧師は、自分の病について問い合わせる手紙をよこした。彼は、一年近くまったく目が見えず、医者たちに財産を使い果たしたと述べていた。そして、神がアトランタでなさっている驚くべきみわざを聞いたのである。彼は、視力を取り戻す最後の手段としてやって来た。祈りの後、彼の目は開かれ、通りの看板が読めるほどになった。帰り道、彼は列車の中で多くの人に証しをした。そして家に着くと、再び説教しはじめた。十二人ほどか、それ以上の人々が、ケイン氏を個人的に知っており、彼の証しは正しいと証言した。

一九一四年七月九日付で、次の手紙を受け取った。

（ここには、サウスカロライナ州ランドーの国内伝道者E・J・ハリソン夫人の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

コロラドのある男から電報が届いた。集会がいつまで続くのかを知りたいというのである。彼はいやされたいと願い、また聖霊のバプテスマを受けたいと願っていた。彼はやって来てバプテスマを受け、ドイツ語を語りながらさめた。御霊に動かされて語られたこうした異言による言葉の中には、ヘブル語のものもあり、聴衆の中のある人々に理解された。その結果、すでに多くのユダヤ人が回心し、また多くの人がいやされた。これらは、神の力によって行われている何十もの奇跡のうちの、ほんのいくつかにすぎない。時間と紙面が許さないので、これ以上は述べない。

『アトランタ・ジョージアン・ニューズ』紙は、次の人々の名前といやしの次第を載せている。目の見えない婦人、エイラー夫人。祈ってもらった後、彼女は言った。「まあ、まあ、まあ、見えます！　ほら！　光が見えます！」同紙によれば、これは、エター姉妹がここに来てからの三週間に起こった百のいやしの、ただ一つにすぎない。

破傷風からすばらしく救い出される

ジョージア州アトランタのエター集会での、マーガレット・ダニエルズのいやし

（ここには、マーガレット・ダニエルズの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ほかのいやしの証し

（ここには、アーシュラ・グレッドヒル、J・A・ペリン夫人、エレン・M・ウィンター夫人、メアリー・N・ウィーラー夫人、H・P・スウィリング夫人の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

アトランタのリバイバルのあいだに、個人の部屋でバプテスマを受ける

（ここには、ホプキンズ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

バプテスマを受け、いやされる

ひとりの婦人（名をフィリップスという）が、肋膜炎と肺病を患い、簡易寝台に乗せられて集会に運び込まれた。祈ってもらうと、彼女は解き放たれ、聖霊のバプテスマを受けた。数日後、彼女は御霊によって歌い、演奏した（竪琴を弾くさまをして見せた）。その様子に、人々は御霊の働きに畏れを覚えた。

ニューヨーク州ヘムステッドのウォルター・デッカー氏は、ドラマティック・ストック・カンパニーという劇団と共に旅をしている若い男だった。彼は、摂理によって集会に引き寄せられた。彼は間もなく、神が働いておられると確信し、悔い改めの席にたどり着いた。そして心を神にささげ、その後すぐに、御霊が語らせるままにほかの国の言葉で語っていた。イエスにあって喜びに満ちていた。彼は、友人や親類に良い知らせを伝えるために家に帰った。

グレープ通り六九番地のウィリアム・エバンズ氏は、二年間まったく目が見えず、足も不自由だった。人々が彼を連れて来た。彼は二本の杖をつかなければならなかった。医者たちは、彼が回復する見込みはまったくないと告げていた。祈ってもらうと、神の力が彼を打ち、たちまちいやした。彼は立ち上がり、解き放たれたことのゆえに、叫んで神をほめたたえた。

テキサス州ヒューストンの手荷物総代理人W・S・ネーピア氏は、進行性のまひを抱えてこの集会に来た。彼はテキサス州ヒューストンとルイジアナ州ニューオーリンズの最高の専門医たちに診てもらっていた。それでも、よろめくほどの状態だった。五か月ほど、自分で服を着ることができなかった。彼はまた、慢性の胃病を患っていた。医者たちは彼に食事制限をさせていて、彼はごくわずかしか食べられなかった。医者たちは、回復する望みを少しも与えなかった。祈りの後、彼の顔色が変わり、すぐに快方に向かいはじめた。間もなく、ひとりで服を着られるようになり、何ブロックも歩けるようになった。小さな小学生のように体がしなやかに感じられた。数日のうちに、彼は喜びに満ちて家に帰った。この人は、何年も前から、自分の町の第一バプテスト教会の執事だった。

ウィンザー通り四二四番地のリチャード・C・エールワインは、十一歳の小さな少年である。骨が軟らかくなる病気にかかっていて、松葉杖で歩かなければならなかった。医者たちは八回も手術をしたが、まったく望みを与えなかった。そしてついに、彼は死ぬほかないと告げた。彼は、エター集会のことを聞いて来ることにしたと証ししている。祈ってもらうと、エター姉妹に、松葉杖を投げ捨てて二度と使わないようにと言われた。彼はそのとおりにして、それ以来一度も使っていない。

生まれつきの盲人

五月四日の夜、ジョーンズ街六八番地のG・L・ヒックマン夫人が、生まれつき目の見えない生後六か月の小さな赤ん坊を連れて来た。祈ってもらっているあいだに、その子の目が開き、見えるようになった。著名な内科・外科医がその場

にいて、目が開いた後にその子の目を診察し、見えることを証言した。翌日には、その子の父親も、見えることをはっきりと証言した。

ジョージア州イーストポイントのラスキー・ラムジーは、心臓弁膜症をいやされた。彼女は六か月のあいだ横になることができなかった。また数か月のあいだ、神経衰弱にも苦しんでいた。

アトランタのラルフ・ハモンドは十一歳の少年で、片腕がまひし、手が引きつって縮んでいた。また神経性の発作にも苦しみ、神経の状態のために学校に行けなかった。今、彼は、イエスが完全にいやしてくださったと喜んで語っている。そして今は学校に通っている。

ジョージア州ティルトンのエラ・スミス夫人は、耳が聞こえず口がきけなかった。エター姉妹に祈ってもらった後、彼女はピアノの音が聞こえると言った。

（ここには、ハート・ボールドウィン夫人の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

メイソン街二〇番地のニギー・L・ロフロンは、生まれつき耳が聞こえず口のきけない小さな女の子だった。三月十一日の夜の集いで、エター夫人がイエスの名によって、耳が聞こえず口のきけない霊に出て行くよう命じた。すると、その子はたちまちいやされた。

エター夫人がその子に手を置こうとする前、その子はおびえて泣きだした。いやされると、その子は夫人の首に腕を回して口づけした。子供の父親は、何年も専門医たちにかかってきたが、何もしてもらえなかったと言った。

ある日、ひとりの年配の男が、集会に来るために四百マイルの道のりをやって来たと言った。下半身がまひして、脚には生気がなく、腕もなえていた。彼を壇の上に運ぶのに、三人の男が必要だった。足を上げるように言われると、彼は上げようとしたが、できなかった。次に、イエスの名によってそうするように言われた。彼がもう一度やってみると、足が少し動いた。さらにやってみると、脚はもっと動いた。彼は奮闘し、間もなく勝利を得た。そしてすぐに、叫んで神をほめたたえながら、壇の上を歩いた。一か月ほど後、彼の腕にはすっかり肉がつき、健やかになったという証しが寄せられた。

アトランタの黒人のあいだでの働き

アトランタの町では（南部ではよくあることだが）、白人と黒人は一緒に礼拝しない。集会の初めから、黒人の兄弟たちの何人かが、思いきって集いに出席していた。彼らは後ろの方に、自分たちだけで座っていた。しばらくのあいだは、それが許されていた。彼らを追い返すことはできそうになかったからである。この友人たちは間もなく、黒人の住む地区に知らせを広めた。神がどのように働いておられるかを語ったのである。力が目に見える形で示されており、キリストが地上におられた昔のように「しるしと不思議」が伴っている、と。その結果、黒人の人々がやって来て、白人を押し出すほど多くの席を占めるようになった。そこで彼らはエター姉妹に、自分たちの大きな教会のいくつかに来て、自分たちのために何回か集会を開いてほしいと懇願した。姉妹は、彼らのもとに行かずにはいられないと感じた。彼らは、大勢で通常の集いに出ることを禁じられていたからである。彼らはたびたび（病人を連れて）外に立ち、集いが終わるまで待っていた。エター姉妹が通りがかりに一言かけてくれるか、手を置いて祈ってくれることだけを願っていたのである。このような場合、ほとんどの人もたちまちいやしを受けた。彼らはぱっと立ち上がって神をほめたたえ、喜びのあまり跳びはねて叫んだ。

町のさまざまな教会で、彼らのために週に一回集会を開く手はずが整えられた。こうした集まりには、彼らは大勢で集まって来た。メソジスト、バプテスト、ほかの教派の教会も含めて、できるかぎり大きな教会を集会のために確保していたからである。これらの集会で病人のために祈る時が来ると、群衆を抑えることはほとんどできないように思われた。あまりに多くの人が、池に入り、生ける水にきよめられ、いやされようと、待ちわびていたのである。床は、ときに主に打ち倒された者でおおわれた。

手足と背骨がまっすぐになる

ひとりの中年の男が、松葉杖にすがったまま運び込まれた。手足がみな、本来の位置から引きつっていた。彼は何年もこの状態で、医学の面からは見込みのな

い人だった。祈ってもらうと、彼の手足がまっすぐになっていくのが見えた。そして彼は、松葉杖を手に持って、歩いて集会から出て行った。

ひとりの若い娘が祈ってもらった。力が彼女を打ち、床に倒れ伏させた。彼女は背骨が曲がっていて、ほかの病気も抱えていた。力があまりに強く彼女に臨んだので、床に横たわっているあいだに、たちまち背骨がまっすぐになった。これらの数回の集会のあいだに、癌、肺病、神経の病を抱えた人々がいやされた。また、あらゆる種類の悪霊が追い出された。町のあちこちからの多くの招きには、応じることができなかった。それでも人々はみな、エター姉妹が自分たちのただ中に来ることを許されたことのゆえに、また黒人のためになされたことのゆえに、神をほめたたえた。

結びにいくつかのこと

集会の特色の一つで、聖徒も罪人も畏れに打たれたのは、御霊が天の合唱を通してご自身を現されたことだった。御霊は、集会の初めから終わりまで、このしかたで大いに働かれた。御霊にこのように用いられた人々の中には、倒れ伏して神からの幻を見る人もいた。御霊がこのように働かれると、人々は深く罪を示される。預言者が言ったとおりである。「おとめも処女も、若い者も老いた者も、共に踊りに加われ」（エレミヤ三一・一三）。壇の上の説教壇の周りや前の方では、十五人から二十人かそれ以上の人々が一度に踊るのが、しばしば見られた。彼らは目を閉じていたが、互いにぶつかることも、壇の端から落ちることもなかった。何度も、ある人々が踊りをやめて、大きな声で流れるように、異言による驚くべき言葉を語った。

大勢の聴衆の上に、畏れの霊が下った。人々は、イスラエルに神がおられ、その力ある「しるしと不思議」に印を押しておられることを知った。彼らは確信した。人々を死んだように倒した同じ力が、彼らを起き上がらせ、優雅に踊らせたのだと。またその力は彼らの発声の器官をとらえ、その舌をすみやかに物書く人の筆のようにして、神の大きな働きと知恵を述べさせたのだと。多くの言葉が語られ、解き明かされた。人々は、どの言葉が語られたのかを知らされた。それを知らせたのは、ときには会衆の中の牧師やよその人だった。ときには、五歳かそれ以上の小さな男の子や女の子が、人々を死んだように静まらせた。彼らが異言で説教して解き明かすあいだ、あるいは英語で説教するあいだ、あるいは踊るあいだのことである。それは、聖霊が彼らを通して働いておられることを人々に確信させた。何度も、目に見えない楽器の音が、天の合唱にまじって聴衆の中で聞こえた。聖なる畏れが人々をとらえた。多くの人が泣いた。どの集会でも、あらゆる階層の人々が祭壇に殺到した。あらゆる病人、罪人、また力のない男女が子供を連れて、池に入れてもらうのを待っていた。

エター姉妹と働き人たちがアトランタにいた最後の日曜日に、主の晩餐が執り行われた。これはまさに、祭の大事な日だった。二百五十人近くの聖徒たちが、新しく生まれた幼子も年を重ねた者も前に進み出て、パンとぶどう酒にあずかった。初めてあずかる人も多く、たくましい男たちが小さな子供のように泣いた。

刑事が回心する

町のある刑事は、法を犯す者を探り出すのが務めだった。その彼が、自分こそ法を犯す者であり、天にある権威に逆らう者であることに気づいた。彼は小さな子供のように泣きながら、神のもとへと進んで行った。

夜遅く、何百人もの人が列を作って、エター姉妹と働き人たちに別れを告げた。そして、秋にまた来てほしいと心から招いた。

第四十七章　ケンタッキー州ロンドンでの数日

アトランタから北へ向かう途中、私たちはケンタッキー州ロンドンに立ち寄り、何回か集会を開いた。指導者のG・F・ルーカス医師は、心の気高い歯科医だった。彼は、ひとりの人のことを心に置いていた。その人がいやされれば、ロンドンに立ち寄るよう招いたことは十分に報われる、と思っていたのである。それは、生まれつき耳が聞こえず口のきけない中年の男だった。祈ってもらうと、彼の舌はほどけ、耳は開かれた。彼はすぐに、神への賛美の声を上げはじめた。彼は言葉を覚えはじめ、間もなく、だれの後についてもいくつかの言葉を言えるようになった。集会の人々は、病人がいやされるのを見て、神をほめたたえた。条件が満たされるなら、神の力は今日も昔と本当に同じであることを、新たに悟ったのである。子供のころから口のきけなかったほかの二、三人も、解き放たれた。白髪の老人もいた。彼は南北戦争のときから耳が聞こえなかった。片方の耳は鼓膜が破れていて、医者には、その耳は二度と聞こえないと言われていた。祈ってもらうと、彼は集いからの帰り道、先ごろまで聞こえなかったその耳で、鳥のさえずりを聞いた。

神はこの小さな集まりのために、不思議を行われた。私たちが泊まっていた家の近所の婦人に、一歳ほどの小さな子供がいた。この子は生まれつき体の形がゆがんでいて、たいへんむずかる性質だった。それで母親は、昼も夜もその子を抱いてあやさなければならなかった。彼女は祈ってもらうために、その子を私たちの泊まっている家に連れて来た。私たちはすぐに、その子が悪霊につかれているとわかった。悪霊はイエスの名によって追い出された。まさにその時刻から、その子は快方に向かいはじめた。数日のうちに、その子は普通になり、おとなしくなった。母親は、子供を解き放ってくださったことのゆえに、神をほめたたえた。この集会を閉じると、私たちは、ミシガン州ペトスキーでの戦いの前に、インディアナポリスへ行って休むよう導かれていると感じた。ペトスキーでは、七月に集会が予定されていた。

証し

死の悪霊に打ち勝つ

ブルーワー夫人の証し

（ここには、J・C・ブルーワー夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

エター姉妹は言った。「あなたは毒にあたったのです」症状はみな、毒によるものだった。何人もの大人の男女が、ブルーワー姉妹は死んでいたと証言した。彼らは人々に、彼女は死んでいたと告げた。そして、エター姉妹が死という怪物をしかりつけ、起き上がるよう彼女に命じたとき、神が彼女をよみがえらせてくださったのだと告げた。

「わたしのしているわざを、あなたがたもするであろう」（ヨハネ一四・一二）。

（ここには、ローザ・グリーンとエラ・フリーマンの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

主は私には確かなお方

父なる神は、私には確かなお方
キリストに現された御心が、私には見える
私は神の子、王の世継ぎ
キリストと共に、王の権利にあずかる
（おりかえし）
主は私には確かなお方、確かなお方

父なる神は、私には確かなお方
私の魂は、確かなものを求める
父なる神は、私には確かなお方
　救い主の御名は、私には確かなもの
戦いのとき、私に勝利を与え
サタンの軍勢の支配を打ち砕き
ペンテコステの力を取り戻す
　御霊は確かなお方、その大いなる力は
誘惑のときに私を守る
御霊は全き光のうちに私を導いてくださり
ご自身を確かなものとしてくださる

　みことばは確か、魂よ、喜べ！
それは愛する救い主の御声！
それは私に、主の変わらない愛を告げる
天で私のためにとりなしてくださる愛を
　主の約束は、私にはまことに確か
主は本当に来られる
そのとき私は、主の祝福された御顔を見て
比べるもののない恵みのゆえに、主をほめたたえる
　魂よ、主はあなたにも確かなお方となられる
あなたがただ、確かなものを自分のものとしさえすれば
あなた自身も、すべてにおいて偽りなくあれ
確かなものが、あなたの心を満たす

第四十八章　ミシガン州ペトスキーの野営集会（その一）

ミシガン州ペトスキーの集会は、初めから終わりまで、多くの点で大いなるものだった。ここは避暑地である。この地での集会の宣伝が始まったのは、大きな美しい天幕が、たくさんの小さな天幕と共に張られる少し前のことだった。路面電車はなかった。だれもが町の中心から歩いて来なければならず、これは集会にとって大きな妨げだった。しかし間もなく力が下り、神が人々を引き寄せられた。

この集会は、罪人がキリストのもとに来たことで知られた。最初の集いで、何人かの老人と、町のたいへん有力な市民の何人かが、輝かしい救いの経験に入った。大きないやしもいくつかあった。人々はそれを大きな奇跡と呼んだ。神の力に打ち倒される人もいた。神がこの地を訪れておられるというわさは、間もなく広まった。集いのたびに関心は高まった。この老人たちは、輝く顔と響きわたる声で証しをした。自分たちの名が天にしるされていることのゆえに、神をほめたたえたのである。その多くが「二重のいやし」を受け、あらゆる病から全くいやされ、復活のいのちを受けた。

牧師、伝道者、働き人、あらゆる階層の人々が多くの州から来て、いやされた。多くの人が聖霊のバプテスマを受け、御霊の賜物と新たな油注ぎを受けた。彼らはまた賜物を燃えたたせていただいた。そして集会から出て行って、みことばを宣べ伝え、神がどんなに大きなことをしてくださったかを語った。

聖なる火を各地にまいた人々から、よい働きについてのすばらしい知らせを、私たちは数多く聞いている。

天の合唱は栄光に満ちていた。まるで天がくだって来て、御使の合唱が、多くの目に見えない楽器を携えて、主にあがなわれた者たちに加わったかのようだった。大きな壇は、バプテスマを受けた聖徒たちでいっぱいだった。彼らは輝く顔で神を仰ぎ、きよい手を上げていた。彼らの上には、しばしば明るい光が見えた。彼らの多くは、イエスが彼らのただ中に立ち、また歩いておられるのを見た。楽器（霊の楽器）の音は、天幕のずっと後ろまで聞こえた。千人以上が集まっていた。聖なる静けさと畏れの霊が聴衆の上に下った。人々は、神がそのただ中におられることを知った。私は二度、三度と、壇からいろいろな楽器の音が聞こえなかったかどうか、神を恐れて正直に答えてほしいと人々に頼んだ。その音は楽器によるものではなく、御霊によるものだった。私は、人々がそれを聞いたことを知っていた。私は、天の音楽、すなわち楽器の音を聞いた人はみな、神の御前で立ち上がるよう求めた。天幕のいちばん後ろまで、あちこちで男も女も立ち上がった。預言者は言った。神はこの終わりの時に、ご自分のみことばの正しさを示すために、天をくだされる。ペンテコステの日のように、天の花火をもって私たちを訪れられる。人々は、聖霊がそのわざ、その異なったわざをなさるのを見、聞き、感じる、と。あるとき、神の力が驚くほど臨んでいたとき、私はある姉妹の奏でる音楽を聞いた。振り返ると、ひとりの姉妹（伝道者）が天に目を上げ、顔を輝かせて、御霊によって竪琴を弾いていた。彼女の話では、主の栄光が彼女を覆い、主が金の竪琴を彼女の手に置いてくださったのだという。彼女の指は弾きはじめ、天の音を響かせた。ほかにも何人かが、さまざまな楽器を奏でて、天の音楽を響かせていた。

私は、このようなときによく感じるように、私たちは移されようとしているのだと感じた。それから、他国の言葉による力強い言葉が語られた。神がその栄光の光の中から、まるで電話を通すように、土の唇を通して、雷のように語られたのである。神は人々に、自分たちの神に会う備えをせよと警告された。イエスが間もなく来られることを告げられた。預言によって、地に臨もうとしている恐ろしいこと、すなわち神のさばきを告げられた。また聖徒たちに、急いで出て行って人々に警告し、神の選ばれた者たちを集めて、主の来臨に備えるよう警告された。

これらの集会の結果、私たちが去って間もなく、六十人以上が川でバプテスマを受けた。人々の行列は半マイル以上にもなったという。群衆がこのすばらしい光景を見ていると、神の力が彼らの上に下った。彼らは「こんな事は、まだ一度も見たことがない」と言った。受洗者のほとんどは、叫び、神をほめたたえながら水から上がった。何人かは水の中で力に打ち倒されたので、人々はしばらく待ってからでなければ、彼らにバプテスマを授けることができなかった。また、水に入る前に地に打ち倒される人もいた。バプテスマを受けているあいだにいやされる人もいた。ほかの人々には神の力が臨み、彼らは他国の言葉で語りだした。ああ、主をほめたたえよ。主が導いておられるか、治めておられるなら、主はこのようになさるのである。

驚くべき経験

いやされた多くの人々の中に、オハイオ州オーバリンから来たマーガリート・ブラック姉妹がいた。彼女がそちらへ向かうので待っていてほしい、という知らせが私に届いた。人々は、彼女が着くまでいのちがもたないのではないかと恐れていたのである。彼女は事故でけがをして、まひしていた。背骨を痛め、ひざの皿は外れたか、割れていた。うみの出るはれものもあった。両目は白内障で、ほとんど見えなかった。私たちはすぐに彼女のもとへ行った。運び込まれたとき、彼女は生きているというより死んでいるようだった（望みが彼女を生かしていたのである）。彼女は言った。ここに着くまで生きていられさえすれば、私に手を置いてもらうときにいやされると知っていた、と。彼女の期待したとおりになった。数分のうちに、彼女の体はまっすぐになった。彼女は手を打ち、両足で立った。不自由で痛むひざに体重をかけ、主をほめたたえはじめた。そして喜びのあまり、走り回り、跳びはねた。彼女は、自分がどんなにひどく無力だったかを話してくれた。歩くことも、自分の身の回りのことをすることもできなかった。背骨の病のために、ときどき正気を失うこともあった。白内障は彼女の目から落ちた。その日、彼女は集会の終わりまでずっと残っていた。人々は彼女を深く信頼していた。私は、以前に彼女に会ったことがあるとは知らなかった。しかし彼女は十四年前、無力でまひした体の不自由な人として、セントルイスの集会に運び込まれていたのである。私が手を置いて祈ると、彼女はいやされ、救われた。そして事故でけがをするまで、そのままだった。彼女は、私の所にたどり着きさえすれば、生きて神をほめたたえ、栄光を帰すことができると知っていた。彼女は神に大いに用いられた。

神は彼女に預言の賜物をお与えになった。洪水の前、彼女はテキサス州ガルベストンにいた。神は彼女に、恐ろしい高潮が迫っていること、大きな破壊が起きることを示された。そして、人々に警告するよう彼女に告げられた。彼女は神に従い、主の導かれる所ならどこへでも、あちこちに出かけはじめた。信じる者もいれば、あざける者もいた。彼女の姉妹は大家族で、裕福で、多くの財産を持っていた。その姉妹は彼女に腹を立て、気の狂った愚か者と呼んだ。それで彼女は町を去った。二週間後、高潮が来た。いのちと財産の恐ろしい損失は、今ではだれもが知っている。彼女の姉妹はすべてを失い、自分と家族のいのちまでも失うところだった。

セントルイスでもそうだった。主は彼女に、恐ろしい破壊をもたらす大旋風が来ることと、人々に警告しなければならないことを示された。彼女は最後の瞬間まで、人々に警告し、主を求めるよう勧め続けた。彼女はそこにとどまって、旋風を通り抜けることを許された。嵐の来た日、彼女は朝のほとんどずっと泣いていた。泊まっていた家の婦人が、何を悩んでいるのかと尋ねた。彼女は嵐が来ることを話し、それを告げなければならないと感じていると言った。それから彼女は、何かを取りに戸口へ行った。そして真っ青な顔で走って戻って来て、言った。「ああ神さま、旋風が来ます！　本当に来ました」神は彼女を驚くほど守られたので、彼女はけがをしなかった。みことばは言う。『きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう』（ヨハネ一六・一三）。

預言の霊は、初めから私の働きの中にあった。大きな災いのほとんどすべてが、来る前に示され、預言された。主は今も、地に臨もうとしている多くのことを示しておられる。唯一の安全な場所は、キリストのうちに隠れていることである。愛する読者よ、急いで、あなたの神に会う備えをしなさい。見よ、主は来ら

れる。迎えに出なさい！『預言を軽んじてはならない』（第一テサロニケ五・二〇）。

がんのいやし

ひとりの婦人が、シカゴの病院に連れて行かれた。医者たちは診察をし、二か所を切開して、切除できない命取りのがんが二つあるのを見つけた。手術をすれば死ぬだろう、と彼らは言った。医者は切開した所を縫い合わせ、彼女は死ぬほかないから家に連れて帰るようにと家族に言った。この状態で、人々は彼女をミシガン州ペトスキーに連れて来た。彼女は救われていなかった。私は彼女に言った。神がいやしてくださらなければ、あなたは間もなく世を去るだろう。救われたほうがよい。しかし主は、あなたを救うのと同じくらい速く、いやすこともおできになる。神はあなたをいやし、あなたのいのちに月日を加えてくださる。ただしそれには、自分の生涯を神にささげ、神に仕えて栄光を帰すと約束しなければならない。また、神が魂もからだも健やかにしてくださって、どんなに大きなことをしてくださったかを語らなければならない、と。彼女は深く罪を示された。私たちは「主イエスの名によって」祈り、彼女に手を置いた。そして、がんの悪霊どもに、サタンのあらゆる力と共に出て行けと命じた。

罪と病の重荷は転がり落ちた。彼女は跳び上がり、跳びはね、叫び、神をほめたたえた。医者が縫った糸がみな、ほどけてしまうのではないかと思うほどだった。その時刻から彼女は全く健やかになり、間もなく聖霊のすばらしいバプテスマを受けた。彼女の証しと働きは、彼女を見たすべての人を大いに納得させた。

六か月ほど後、彼女はシカゴでの私たちの大会に出席した。彼女はすっかり太って、十四キロ以上も体重が増えていた。さらに八か月ほど後、私たちはシカゴの別の地区でもう一度大会を開いた。彼女はまた主を助けに来た。健やかで神に満たされ、このころには体重が二十三キロ近くも増えていた。彼女の姿そのものが、見た人みなを納得させた。また、彼女のすばらしい証しを聞いた人のほとんどが、キリストが「きょうも変ることがない」お方であると確信した。

彼女は自分の証しを印刷して、あらゆる所に送った。その一部が、がんのために病院で死にかけていたひとりの婦人のもとに届けられた。人々は、彼女がいつ死んでもおかしくないと思っていた。私たちがシカゴで三度目の大会、すなわちリバイバル集会を開いていたとき、彼女はこのすばらしいいやしのことを聞いた。彼女は集会に連れて行ってほしいと望んだ。人々は彼女を自動車で連れて来て、集会の終わり近くに運び込んだ。彼女は衰弱がひどく、長くはいられないので、すぐに会ってほしい、と人々は言った。会ってみると、彼女はまるで骸骨のようだった。神経はすっかり参っていた。全身が、がんによる毒と病でいっぱいだった。しかし、主にとって不可能なことは何もない。彼女は魂もからだもいやされて起き上がり、歩き、叫んだ。そして、彼女のためにいつでもことを引き受けてくださる主をほめたたえた。神は、彼女が時の来る前に墓に下り、虫のえじきとなることを許されなかった。生きて大いなる御名をあがめ、ほめたたえるようにされたのである。

一日二日たつと、彼女は、主がどんなに大きなことをしてくださったかを見せたいと願って、歩いて集会に来た。

ミシガン州ペトスキーでのエター姉妹の野営集会

（『ワード・アンド・ワーク』誌から転載）

七月中にM・B・W・エター姉妹が開いた野営集会は、町を見下ろす大きな天幕で行われた。次の報告が私たちのもとに送られて来た。

罪を示す霊が人々の上にあった。神がその力を現されたので、罪人たちは畏れに打たれ、深く罪を示された。そして、遅かれ早かれ自分の心を神にささげなければならないと知った。ある婦人は証しをして、夫が病気で寝込んでいて、罪の自覚を振り払おうとしていると語った。集会に来た多くの魂が、これと同じ状態にあった。教会員である救われた人々が、聖霊を受けることについて尋ねた。そのうちの何人かは聖霊を受け、異言を語りだした。その多くは、前からバプテスマを受けていると信じていたが、今は自分たちが間違っていたことを悟った。罪

人は救いを求め、救われた人々はバプテスマを求め、ほかの人々はからだのために主を求めた。

神は多くの人を驚くほどいやされた。ミシガン州ナイルズの近くに住む農夫ジョセフ・ウォーカーは、しばらく前から脳卒中によるまひに苦しみ、ほとんど歩けなかった。彼は、足を引きずって歩かなければならなかったと証しをした。祈ってもらうと、彼は神の力が電流のように体を貫くのを感じた。彼は跳び上がって立ち、歩きはじめた。彼は七十歳の人である。自分のいやしが本物であることを聴衆に示すため、彼は聴衆の目の前で、十二歳の男の子のように壇の上を走った。

ある牧師の証し

（ここには、A・W・フロッドシャムとフレッド・W・アダムズの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ある夜、ひとりの婦人が神の力の下に打ち倒された。彼女の夫は罪を示され、自らいのちを絶とうと思った。しばらく妻を見つめているうちに、彼の心は砕かれた。そして間もなく、祭壇の前で泣きながら救いを得た。妻もまた、キリストにある輝かしい救いの経験に入った。

ステート通り二二四番地のアーサー・ジョーンズ氏は、三年前から結核を患っていた。いろいろな医者の治療を受けたが、効き目はなかった。彼は、ペトスキーで開かれている集会のことを聞いていた。ある晩、からだのいやしを得られないものかと、彼はやって来た。集会のあいだに祈ってもらう道は、開けそうになかった。集会は閉じられたが、彼の心には、祈ってもらいたいという強い願いがあった。最後の手段として、彼は手を置いてもらおうと、壇の所までやっとのことで進んで行った。壇に着いたとき、彼は疲れ果て、あえいでいた。ちょうど立ち去ろうとしていたエター姉妹が、壇の階段で彼に会った。彼は祈ってもらい、病はしかりつけられ、すぐにいやされた。彼は深く息を吸い、腕を後ろに振って、こぶしで自分の胸を強くたたくことができた。それでも何の不快も感じなかった。その夜、彼は何も苦しまずに家に帰った。集会に来るときには、せきをし、あえいでいたのである。次の夜、彼はほかの聖徒たちと一緒に壇の上で歌った。祈ってもらって十分後、彼は力強い声で叫んだ。「私はいやされ、救われました」彼は自分の胸をたたいて、いやしが完全であることを人々に示した。父も母もそばに立ち、すべてが真実であると証言した。そのとき、ふたりの頬には涙が流れていた。彼らは、医者たちが何か月も前から、彼は死ぬだろうと思っていたことを話した。今、彼は健やかな若者として、彼らの前に立っていた。

同じ病で死にかけていたひとりの婦人は、いやされ、救われて、今は聖歌隊で歌っている。五十歳ほどの別の婦人は、結核の末期で、椅子に座らされた。祈ってもらって数分後、彼女は「私はいやされ、救われました」と叫びながら、壇の上を歩いていた。人々が正しく来て、言われたとおりにするなら、主はこのように働かれる。このような救い主のゆえに、神に栄光あれ！

（ここには、J・R・キャリハン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ウッドワース・エター夫人のペンテコステ野営集会でのいやし（一九一四年七月、ミシガン州ペトスキー）

（地元の協力者たちが発行した報告から転載）

『あなたが、もしあなたの神、主の声に良く聞き従い、その目に正しいと見られることを行い、その戒めに耳を傾け、すべての定めを守るならば、わたしは、かつてエジプトびとに下した病を一つもあなたに下さないであろう。わたしは主であって、あなたをいやすものである』（出エジプト一五・二六）。

「まことに彼はわれわれの病を負い去り、われわれの痛みを運び去った。その打たれた傷によって、われわれはいやされた」（イザヤ五三・四～五）。

『イエスはみ言葉をもって霊どもを追い出し、病人をことごとくおいやしになった。これは、預言者イザヤによって「彼は、わたしたちのわずらいを身に受け、わたしたちの病を負うた」と言われた言葉が成就するためである』（マタイ八・一六～一七）。

『信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、病人に手をおけば、いやされる』（マルコ一六・一七〜一八）。

（ここには、編者A・E・シドフォードの注が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

次の証しに名を記した人々は、主が自分たちにしてくださったすばらしいことのゆえに、主に感謝の心を抱いている。そして、愛する御名をほめたたえるために、喜んで自分の経験を語っている。

（ここには、ジョン・ディットン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第四十八章　ミシガン州ペトスキーの野営集会（その二）

枯草熱、ぜんそく、心臓病のいやし

（ここには、Ｅ・Ｇ・リチャーズ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（地元の協力者たちが発行した報告から転載）

（ここには、リチャーズ夫人がミラー夫人にあてた手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（ここには、Ｆ・Ｅ・レオンハード夫人、レノーラ・アナベル、ハッティー・ゴスロー夫人、アーサー・Ｌ・ペファーの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

七年のあいだ、私はまひと心臓病のためにひどく体が不自由で、杖をつき、だれかにそばで支えてもらわなければ歩けませんでした。神をほめたたえます。神を信じる信仰によって、私は全くいやされました。七十四歳ですが、今は楽に、だれの助けも借りずに歩き回ることができます。

（署名）ミシガン州ペトスキー、エド・アナベル

（ここには、ハリー・シャノン、ハリエット・Ｌ・グレー、アーサー・ジョーンズの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

一年以上、心臓の弁膜症を患っていました。六人の医者にかかりましたが、みな、決してよくならないと言いました。エター姉妹が私に手を置いて祈ってくださると、神は私をいやしてくださいました。このことのゆえに、私は神をほめたたえます。私は六十八歳で、自分の仕事をすべてしています。病がぶり返す気配もありません。

（署名）ミシガン州ペトスキー、ジェファーソン街一〇二八番地、Ｅ・アナベル夫人

（ここには、証しを裏づける六人の連名の文が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

『それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」』（黙示録一九・九）。『御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」』（黙示録二二・一七）。

（ここには、メソジスト教会の有力な働き人であるＰ・Ｊ・ハワード夫人の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

南ミシガンから来たひとりの兄弟は、こう書いている。私が大天幕の中に座り、エター姉妹が人々に語っていたときのことです。神の御霊が彼女の上に下られ、彼女は三、四分のあいだ、大理石の像のように身動きしなくなりました。私は目を閉じました。すると間もなく、御霊が私の上にも下られ、私をあふれるほどに満たしてくださいました。目を開けると、天幕の西の端が、純金で張られているかのように見えました。これはしばらく続きました。私がこれまでに見た中で、最も美しい光景でした。

ある朝、ひとりのインディアンの婦人（少し前に救われたばかりだった）と、その娘がバプテスマを受け、新しい言葉を語りだした。娘は救われた。彼女はインディアンの言葉をうまく話せなかった。ところがバプテスマを受けると、すぐに自分たちの言葉を流暢に話しはじめた（母親がそう言った）。これは御霊の霊感によるものだった。母も娘もすぐに人々に告げた。自分たちの同胞のもとへ行って、御国の良い知らせを宣べ伝えるよう、御霊から召しを受けた、と。娘は聴衆に、心を揺さぶる勧めをした。あなたがたのために多くのことをしてくださったイエスに、生涯のすべてをささげなさい、と。彼女の言葉の一部はこうである。「ああ、来てください！　ああ、来てください！　神はあなたがたを求めておられます。神があなたがたを呼んでおられます。人はいつもあなたがたを支えてくれるとはかぎりません。でも神は支えてくださいます。ああ、なんとすば

らしいのでしょう。主はあなたがたに腕を伸ばしておられます。今日来てください。イエスはいつでも喜んで迎えてくださいます。主はなんとすばらしいお方でしょう。この世には本当の楽しみはありません」彼女はこのように、数分のあいだ御霊によって勧めた。この若い婦人は証しをして言った。自分はちょうど舞台に立つ準備をしていて、母親も連れて行きたいと思っていた、と。彼女は集会に来るのが少し怖かった。たぶん計画を変えることになると思ったからである。神をほめたたえよ。彼女は計画を変えたのである。神の御霊は彼女に深く罪を示された。それから彼女を救われ、バプテスマを授けられた。さらに、異言による言葉とその解き明かしをお与えになった。

幻

ひとりの若い婦人（ミシガン州ペトスキーのエスター・プラット嬢）が、この集会で救われ、聖霊のバプテスマを受けた。御霊の力の下に横たわっているあいだに、彼女は幻を見た。幻の中で彼女は、初めに黒い雲を、次に白い雲を、その後に青い雲を見た。これらがみな過ぎ去ると、彼女は、イエスが威光のうちに御座に着かれ、御使たちに囲まれておられるのを見た。主は御手を伸ばされ、言われた。「わたしはすぐに来る。行って人々に、わたしがすぐに来ると告げなさい」すべてが天の栄光に輝いているように見えたとき、突然、彼女は自分が他国の言葉で語っていることに気づいた。

集会では、ときに神の力があまりに強く現されたので、聖徒たちの何人かは、力の下で像のように身動きできなくなった。あるとき、力がエター姉妹を長いあいだこのような状態にとどめていると、力が集会全体に下りはじめた。祭壇の周りのあちこちで、人々が倒れはじめた。そのあいだに、ひとりの愛する兄弟が幻を見た。その幻の中で、彼は祭壇の周りの天幕が、すべて神の栄光で燃え立っているのを見た。そこは天からの輝く光で、燃える金のように照らされていた。天の神は、確かにこの働きのただ中におられる。同じ日の夕方、集会が閉じられようとしていたとき、ひとりの若い婦人が、からだのいやしのために祈ってもらおうと椅子に座った。祈ってもらっているあいだに力が彼女を打ち、それと共に、祭壇で求めていた女友達のための重荷が彼女に臨んだ。彼女は友達のもとに駆け寄り、抱きしめて助けた。力はすぐにその友達にも臨んで彼女を倒れ伏させ、彼女にも神にある輝かしい経験を与えた。

集会は、まさに初めから、人数も関心も増しはじめた。すでに何人もの牧師が求道者の中にいる。いくつかの教会は門戸を開き、会員たちが集会に出席して、できるかぎりの益を受けることを望んでいる。ひとりの牧師はこの働きに反対しはじめたが、間もなく、自分の会員たちが違う考えを持っていることに気づいた。会員たちはかなり規則正しく集会に出席するようになり、ひとりまたひとりと、この働きに加わった。何人かは間もなく聖霊のバプテスマを受け、異言を語りだした。ほかの人々も救われ、いやされている。その後、その教会の役員会の何人かが、ペンテコステの人々を招いた。野営集会が終わった後、教会のきれいな地下室を（無料で）使って集会を開いてほしいというのである。

地元の働き人たちの証し

（ここには、D・D・ミラー夫妻の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

大いなる勝利の朝に

大いなる勝利の朝に
花婿の呼ぶ声を聞き
キリストにある死者がよみがえるとき
私たちは朽ちないいのちに変えられる
またたく間に
そして空でイエスにお会いする
（おりかえし）
みな主を迎えに上り、みな主にまみえに行く
キリストにある死者がよみがえる朝に

みな主を迎えに上り、みな主にまみえに行く
そして空で婚宴にあずかる
　大いなる勝利の朝に
なんと幸いなときとなるだろう
キリストにある死者がよみがえるとき
主が栄光のうちに下って来られ
待ち望む子らを解き放ってくださり
私たちが空で主にお会いするとき
　大いなる勝利の朝に
刈入れが終わり
キリストにある死者がよみがえるとき
私たちは朽ちないいのちの冠を受け
キリストにお会いし、愛する人々みなに会う
空に携え上げられるときに
　大いなる勝利の朝に
私たちはすべての国を受け継ぎ
そのとき、キリストにある死者はよみがえる
とこしえの王、また祭司として治め
キリストのもとで永遠に祝福される
空でお会いした後に

第四十九章　ペンシルベニア州フィラデルフィアの野営集会（一九一四年）

私たちは、ウィリアム・アンダーソン兄弟と数人の聖徒の招きで、ペンシルベニア州フィラデルフィアへ行った。町には多くの伝道所があったが、どの二つも互いに一致していなかった。アンダーソン兄弟と共に立とうとする者はわずかだった。しかしその少数の人々は、力のかぎりを尽くし、お金も注いで、この働きに当たった。主がこの動きの中におられ、建物はできあがった。行ってみると、路面電車の終点に立派な天幕が張られていて、小さな天幕もたくさんあり、食事のための立派な天幕もあった。また、私と働き人たちのために、家具のよく整った立派な家も用意されていた。そこではひとりの姉妹が料理をし、私たちの世話をしてくれた。彼らは私たちを温かく迎えてくれた。愛するアンダーソン兄弟は、集会のあいだずっと私たちを実にりっぱに支え、戦いを門まで追い返す助けをしてくれた。

私たちは、敵対する霊が入り込むことを許さなかった。争いや分裂を引き起こすような教理は、持ち出させなかった。愛の霊が感じられた。人々はあらゆる伝道所から来はじめ、自分たちがキリスト・イエスにあって一つであると感じた。だれもが、神のうちにもっと深く入る必要を感じた。大群衆がますます増えていくにつれて、神の臨在がすべての人に見え、感じられた。みことばが力をもって宣べ伝えられると、神は力ある奇跡、すなわち「しるしと不思議」によって、それを目に見える形で示された。ついには罪人たちが震えて、『救われるために、何をすべきでしょうか』と叫んだ（使徒一六・三〇）。

大勢の男女がいやされ、主に立ち返った。多くの人が聖霊のバプテスマを受け、御霊が語らせるままに、異言による力強い言葉を語った。

神はアンダーソン牧師を驚くほど用いられた。彼は雷のような調子で語り、その声は神の御声のように響いた。実際、それは神の御声だった。神は、終わりの時には『異国のくちびると、異国の舌とをもって』この民に語る、と言われたからである（イザヤ二八・一一）。しかし、それでもなお信じない者がいる、とも言われた（イザヤ二八・一二）。続いて、解き明かしが与えられた。老いた男も女も子供も、いろいろな国の言葉で語り、説教し、預言し、新しい歌を歌った。その歌詞は、これまで一度も聞かれたことのないものだった。彼らは主をあがめ、ほめたたえた。あらゆる階層の多くの人々が、聖なる踊り、すなわち喜びの踊りに加わった。彼らは復活のいのちと軽やかさに満たされ、目を閉じて踊った。顔は明るく輝いていた。ときには目に見えない楽器を奏で、自分たちの音楽に合わせて歌い、踊った。

説教壇の上や、いろいろな人の上に、ときどき明るい光が見えた。主はひとりの兄弟を異言で用いておられ、彼は預言し、解き明かしていた。会衆の中に座っていたひとりのメソジストの牧師が、前に出て来て言った。その兄弟が語っているあいだずっと、ひとりの御使がそのそばに立っているのを見た、と。彼はたいへん心を動かされ、自分の見たことを前に出て語らずにはいられなかったと言った。ほとんどあらゆる階層の人々が納得し、罪を示された。警官や路面電車の車掌たちも、大きな関心を寄せた。どれほどの人が救われ、いやされたのか、私にはわからない。

最後の集会は労働者の日だった。その日、私たちは特別の集会を開き、牧師、伝道者、働き人たちのために祈った。彼らがバプテスマと新たな油注ぎと奉仕のための力を受けるように、と祈ったのである。また、賜物が燃えたたせられ、手を置くことによって新しい賜物が授けられるようにと祈った。集会は三度開いた。大天幕は人でいっぱいで、周りじゅうに人が立っていた。それほど混み合っていたが、秩序は申し分なく保たれた。だれもが関心を持ち、見たい、聞きたい、何か特別な祝福を受けたいと願っていた。主の栄光は雲のようで、その場所を幾度も幾度も吹き渡った。私たちは壇の上に椅子を並べた。特別な祈りと手を置くことを望む人々は、その椅子に座った。神の力がひとりひとりの上に下った。彼らはみな復活のいのちに満たされ、跳びはね、踊り、叫んで神をほめたた

えた。そのほとんどが倒れて、緑の牧場に伏した。何十人もの男女が、周りじゅうに死んだように横たわっていた。たくましい男や女が、天幕の中でも外でも泣いていた。

数か月後、私たちがシカゴで集会を開いていたとき、ひとりの牧師がこのフィラデルフィアの集会のことを話した。最後の日、すなわち労働者の日に、神の力に打ち倒された人をその日だけで百五十人数えたという。まことに、主に打ち倒される者は多かった。働きは遠くにも近くにも広がった。このフィラデルフィアの集会の結果、新しい伝道所がいくつも起こった。二年近くたった今、私はその同じ牧師から、集会を開いてほしいという切なる招きを受けている。彼は町の別の地区に、力強い会衆を持っている。それはあの集会から生まれたものである。神をほめたたえよ。働きは続いている。

集会の報告

（ここには、ウィリアム・アンダーソン牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

会衆の報告　フィラデルフィアのペンテコステ野営集会

責任者　ウッドワース・エター夫人

ペンテコステ野営集会は、一九一四年八月一日に始まった。責任者はM・B・ウッドワース・エター姉妹である。

多くの人が、聖書の信仰と聖霊による愛のうちに築き上げられた。

イエスの福音は、言葉だけでなく、聖霊の現れと力とによって宣べ伝えられた。神は多くのしるしをもってみことばを確かなものとされ、大いなる力をもって聖なる臨在を現された。

聖霊の注ぎは、目を見張るばかりだった。『わが霊をすべての肉なる者に注ぐ』という預言は、なんと真実なことだろう（ヨエル二・二八）。それは聖徒たちを大いに元気づけ、彼らの信仰を強め、神のより深いことへの渇きを彼らの心に生み出した。また、後戻りした者を立ち返らせ、罪人に悔い改めと救いをもたらした。多くの人が聖霊のバプテスマを受け、御霊が語らせるままに新しい言葉を語った。

ひとりの男が、脊髄癆をいやしてもらうために、二百マイルの道のりをやって来た。彼はふたりの男に助けられて野営地まで来なければならなかったが、主が触れられると、杖を投げ捨て、ひとりで歩いた。

二十年間脱腸帯をつけていたひとりの男が、脱腸を全くいやされた。

次の証しに名を記した人々は、主が自分たちにしてくださったすばらしいことのゆえに、主に感謝の心を抱いている。そして、愛する御名をほめたたえるために、喜んで自分の経験を語っている。

神のいやしの力のゆえに、神をほめたたえます。神は、生まれつき一生抱えてきた甲状腺腫を、いやしてくださいました。エター姉妹が私に手を置いてくださったとき、いやしの力が私の体を貫くのを感じました。甲状腺腫は、みるみる消えていっています。神をほめたたえます！

（署名）ペンシルベニア州フィラデルフィア、ポール・ド・ムーラーズ氏

（ここには、デニソン夫人、R・A・アーナル夫人、ジョン・レスラーの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

目を見張る証し

（ここには、ノラ・スチューバーの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

夫の死

この集会のさなか、ある日曜日の午後、私が説教をしていたとき、夫のS・P・エター氏がイエスにあって眠りについた。私は急行列車でインディアナポリスへ行き、美しいクラウンヒル墓地に夫を葬った。そして次の土曜日の夜には、集会を続けるためにフィラデルフィアに戻った。

夫は勝利のうちに世を去った。夫の願いで、人々は「救い主イエスよ、私の水先案内となってください」を歌った。夫は天と聖徒たちに向かって手を振りながら、潮を越えて行った（第五十章（その二）を参照）。

第五十章　一九一四年、シカゴのエングルウッドでの伝道集会（その一）

当時の報告

私たちのシカゴの集会は十月十日に始まり、一か月かそれ以上続く予定である。私たちが来るのを妨げようと、敵がこれほど多くの障害を置いた戦いに入ったことは、これまでなかったように思う。しかもその障害は、両方の側に起こった。私たちのために道を開いてくれた愛する聖徒たちは、これらの障害を乗り越えるなかで、信仰をきびしく試された。私は、神が今この時に私が行くことを望んでおられ、そこですばらしいわざをなそうとしておられると感じた。敵があれほど妨げたのは、それが一つの理由だった。しかし敵は小羊の血によって打ち負かされ、聖徒たちはみな勝利を叫んでいる。

最初の集会は、神が今この時にこの集会が開かれることを大いに喜んでおられることを示した。天気は悪かったが、多くの聖徒が来ていた。その晩ずっと集会の上にとどまっていた栄光の雲に、多くの聖徒が畏れに打たれた。この雲はときどき下って来て、聖徒たちは天の世界の栄光を感じるほどだった。最初の集会が終わったとき、聖徒たちは、それが勝利を告げていると感じた。そしてみな、神が今この時にシカゴで大きなわざをなそうとしておられると強く感じた。

集会は始まって以来、一日三回、順調に続いている。群衆は絶えず増え、関心も高まっている。すでに多くの人がいろいろな病からいやされ、また救われ、バプテスマを受けた。ほとんど毎回の集会の終わりに、祭壇の前で力に打たれて倒れている人がいる。説教が語られているあいだに力が何人かを打ち、彼らは神の力の下に倒れた。

ミシガン州ペトスキーの私たちの集会に来て、そこですばらしくいやされた聖徒たちが、何人もここに来ている。彼らは今も勝利を叫んでいる。

注　ここには、三十年近くも前に私の集会でいやされた人々も来ている。彼らは今も勝利を叫び、実際にその勝利を保っている。

昨夜は、これまでで最も大いなる祭りの日だった。天が下って来たかのようだった。ある者は踊り、ある者は手を上げて「栄光、栄光」と叫び、私たちの中にある神の力強い臨在のゆえに神をほめたたえた。ほかの者は天の合唱で歌った。神は幾人かに天の楽器を与えられ、彼らは信仰によってそれを奏でた。集会は信じない者たちに大きな影響を与えた。彼らは、これらの集会に現れている不思議な力の原因を、熱心に尋ねている。御霊はまた、解き明かしを伴う異言による言葉を多く与えてくださった。それはおもに救い主の来臨が近いことを語るものだった。そして、主を迎える備えと、世に臨もうとしていることへの備えをするよう、聖徒たちに警告していた。

追い出された悪霊ども

（ここには、ゴールディ・ハウエル嬢の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

以上は、イリノイ州シカゴ、二十五番街とディアボーン通りの角のゴールディ・ハウエル嬢の経験である。

ウッドワース・エター・ペンテコステ集会

シカゴでの伝道

（『ウォーター・オブ・ライフ』誌から転載）

西六十三番街、エングルウッド福音幕屋、十月十日～十一月十日。

集会が始まると告知されていた日のわずか三日前に、神はサウスサイドで最もよい場所をすばらしく開いてくださった。お金の当てが全くないまま、これほど

大きな伝道の費用をまかなうという問題も、もう一つの大きな山だった。しかしそれも、海に投げ込まれた。

人間的に言えば、愛する姉妹の体の弱さは、これほど骨の折れる伝道を引き受けることを許さなかっただろう。ほかの試練も、エター姉妹と伝道を計画する人々をくじいていただろう。しかし神は彼らの信仰をすばらしく強め、ご自分が「支える」と確信させてくださった。そして確かに、集会の結果は、聖霊の導きと聖霊の奇跡的な働きとを、力強く証ししている。

集会の基調

最初の集いから、集会の基調は主の来臨が近いことだった。ほとんどすべての説教で、たびたびの預言と警告で、また解き明かされた「異言」による言葉のすべてで、同じ言葉がはっきりと力強く響き渡った。「イエスはすぐに来られる」

エター姉妹は初めから、いやしの働きを自分の最も大切な務めとは考えていないことを、はっきりさせていた。主が彼女に負わせられた重荷は、「シオンでラッパを吹き、警報を吹きならす」ことだった（ヨエル二・一）。そして、天の花婿の来臨に備えて聖徒たちを呼び集めることだった。

聖霊の導き

彼女はすべての集会の進め方において、すばらしい機転と知恵を示した。論争を避け、また禁じ、御霊の思いを見分けたので、集会は決して型にはまらず、決まった順序に従うこともなかった。同じ集いは二つとなかった。聖霊の導きが認められるとき、聖霊の力の源がどれほど限りないかが、すばらしく示された。集いの胸の躍る瞬間や頂点は、人間の工夫で運ばれたのではなく、御霊ご自身が導かれたものだった。御霊が「種々の働き」と「異なったわざ」をもって、突然現れてくださったのである。

周りじゅうに劇場や娯楽場の誘惑があったにもかかわらず、毎晩何百人もの罪人がそこへ引き寄せられた。八百人が座れる幕屋は、毎晩いっぱいになった。日曜日の夜には、何百人もが入れずに帰された。朝十時と午後二時の昼の集会にも、大勢の人が集まった。

多くの証人が裏づけたエター姉妹の働き

この伝道で、エター姉妹の長い伝道の働きは十分に裏づけられ、認められた。神の僕の公の伝道と生涯の働きが、これほど裏づけられたことはかつてない。町の外から何十人、何百人もの訪問者が来た。彼らの証しを合わせると、私たちの姉妹の公の経歴のほとんど全体にわたった。いやしの証人、救いの証人、聖霊のバプテスマの証人である。二十五年前のセントルイスでのあのすばらしい天幕伝道の証人がいた。何年も前からオハイオ、インディアナ、イリノイで開かれたリバイバル集会の証人がいた。テキサス州ダラスの証人、カリフォルニア州ロサンゼルスの証人、コネチカット州ロングヒルの証人がいた。一年余り前にいやされて、そのまま治っている、シカゴのストーン・チャーチの何十人もの証人がいた。もっと最近のミシガン州ペトスキーとペンシルベニア州フィラデルフィアの伝道の証人も、大勢いた。この人々はみな、神がご自分の女の僕を用いてなさった、本物の、長く続くわざを証しした。神は、何年も前にご自分が彼女を召された伝道の務めの正しさを、この集会が完全に明らかにするように計画されたかのようだった。

開かれたみことば

これらの集会では、みことばによる説教と教えが十分な位置を占めていない、と批判されることがときどきある。この伝道を報告するにあたり、教えの言葉が重んじられたことを記せるのはうれしい。

エター姉妹は、私たちがこれまでに聞いた中で最も力強い言葉のいくつかを語るために用いられた。まことに、みことばは妨げなく進んだ。それは広まり、あがめられた。それだけでなく、聖霊の現れのすべてが、みことばに裏づけられていた。

回心した罪人たち

この働きに共感しない友人たちは、ペンテコステの集会で救われる罪人は少ない、という非難をしばしば持ち出す。この伝道一つだけでも、次のことが確かになるだろう。みことばの説教は、「しるしと不思議とさまざまな力あるわざとにより、また、聖霊の賜物によって」確かにされる（ヘブル二・四）。そのとき、それは罪人の群れを引きつけ、深い罪の自覚をもたらし、聖書にかなった確かな回心へと導くのである。

近年エングルウッドで開かれたどの集会も、これほど多くの救われていない人々を引きつけたことはなかった。毎晩何百人もが来ていた。このときばかりは、集会所が近くの劇場や玉突き場よりも大きな呼び物となった。説教だけでは納得させられなかったところで、彼らが見た奇跡が彼らを納得させた。記録はとっていないが、毎日だれかがキリストを受け入れ、求道者と共にひざまずいた。救われると同時に聖霊のバプテスマを受けた人も、何人もいた。また、エター姉妹の言う「二重のいやし」を、魂にもからだにも受けた人々もいた。聖霊のバプテスマを新たにされた人も多かった。

バプテスマを受けた求道者たち

『聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』人々がいた（使徒二・四）。その数は、ごく控えめに見積もっても、少なくとも百人を超えるだろう。毎回の集いに求道者がいて、ほとんど毎回の集いで何人かがバプテスマを受けた。ペンテコステのことを何も知らなかった諸教派の教会員たちも、この喜びにあふれる聖徒たちの群れの中に押し流されて来た。

いやされた病人たち

集会ではいやしが最も強調されたわけではなかったが、それでも何十人もの人が、あらゆる病からいやされた。聞こえない耳が開かれ、口のきけない者が語った。足の不自由な者は躍り上がり、歩き、神をほめたたえた。腫瘍や癌は、イエスの名によって御霊の剣に打たれて、しなびた。心臓病、カタル、器質性の病、機能の障害、精神錯乱、卒中、ひきつけ、そのほかあらゆる病に苦しむ人々が、イエスの名によって、神の力でいやされた。悪霊につかれていた多くの人が、解き放たれた。悪霊どもは命じる言葉によって、大声で叫び、恐ろしい悲鳴をあげて出て行った。

ある人々は、座席に座ったままいやされた。「神の力がいやすために臨んでいた」からである（ルカ五・一七）。左耳が十八年間全く聞こえなかったひとりの姉妹は、座って説教を聞いているうちに、手を置かれずにいやされた。いやしの証しのいくつかは、本号のほかの所に載せてある。

幻

聖徒たちには多くの幻が与えられた。ある人は、花嫁が空中で主に会うために引き上げられるのを見た。ある人はすべてを見通す神の目の幻を見た。天が開かれ、白い馬に乗っておられる方を見た人々もいた。災いの幻を見た人々もいた。ある集会で、ひとりの姉妹が両腕を上げて、部屋じゅうを激しく走り回った。彼女は患難の幻を見たのである。御霊によって彼女は走り、地の人々に臨む恐怖を描き出した。そのとき人々は、「岩や山に、自分たちの上に倒れかかれと叫ぶ」のである（黙示録六・一六）。

何人かの人は、滅びの幻を見た。高い石造りの建物が崩れ落ちる幻、燃える火の幻、押し寄せる水の幻、馬と人が通りを駆け抜ける幻である。彼らは、それがシカゴに臨む何かの災いの警告だと信じた。女預言者であるひとりの姉妹は、ガルベストンの災害とセントルイスの旋風を予告した人である。この姉妹は夜ごと災いの幻に重荷を負わされた。そして御霊にあってひどくうめいたので、何日も続けてほとんど食べることも眠ることもできなかった。御霊の力の下に壇の上で打ち倒されたもうひとりの姉妹は、ある幻を見て、あとで次のように語った。

幻の一つ

「主は私に多くのすばらしいことを見せてくださいました。しかしきょうは、幻のうちに、これまで見た中で最もすばらしいことを見せてくださいました。

「私は、エター姉妹の頭の周りに光の輪を見ました。彼女の頭の上に、火の舌を見ました。

「私は、天の城壁の上に戦車があって、下って来るのを見ました。

「私は、この会衆全体の上に雨が降っているのを見ました。イエスを求める方は、今イエスを得ることができます。

「私は、イエスが両腕を広げて立ち、あなたがたを待っておられるのを見ました。あなたがたをゆるし、きよめ、いやし、聖霊と火とでバプテスマを授けてくださるために、待っておられるのです。

「私は、この会堂にいる人々のうちに、さばきに向かっている人がいるのを見ました。イエス・キリストを受け入れず、この女性を平和の福音の使者として受け入れないなら、その人々はさばきに向かうのです。また、ここにいるあなたがたのうちのある人々が、自分の滅びを決定づけようとしているのを見ました。この言葉を拒み、みことばを拒み、聖霊を拒むなら、そうなるのです。

「私が見ていると、神が天からのように私に語りかけられ、こう言われました。

「『イエスはすぐに来られる』」

異言による言葉

ほとんど毎回の集会で、異言による言葉が一つ以上語られ、解き明かされた。これらの言葉の中心は、イエスの再臨が近いことだった。それは、備えのない者への警告の形をとるか、備えのできている聖徒たちへの喜びと栄光と、心を奪われるような期待の形をとった。次に挙げるのは警告の言葉の一つである。同じような趣旨の言葉が多く与えられた。

警告の言葉

「主はすぐに来られる。イエスはすぐに来られる。ああ、主はすぐに来られる。ああ、ああ、ああ、信じない人々の上に、大いなる滅びが来ようとしている。神のもとに来なさいという神の声を聞きながら耳を傾けないくらいなら、彼らは生まれなかったほうがよかった。彼らは岩に向かって叫ぶが、岩は彼らに耳を貸さない。わたしの怒りは彼らの上にあり、わたしは彼らが災いにあうときに笑う。わたしはわたしの使者たちを遠く広く遣わしている。これは世への最後の招きである。イエスは世の光である。主はご自分の花嫁を携え上げるために来られる。主は遅れることはなさらない。ああ、あかりに油のない者たちよ。ああ、目をさませ。わたしの手が見えないのか。わたしはラッパを吹き鳴らした。それが聞こえないのか。ああ、目をさませ、目をさませ。わたしはすぐに来る。わたしがすぐに来るのが聞こえないのか。目をさませ」

ある晩の集いで、働き人のひとりが御霊の油注ぎを受けて、突然、はずみ車が回るように、腕をものすごい速さと力で回しはじめた。そのあいだ、会衆の上には大きなおごそかさと畏れがとどまっていた。突然、彼はたいへんな勢いで、次の言葉を語った。

「まことに、神は異邦人の時代を終わらせようとしておられる。まことに、神は異邦人の時代を終わらせようとしておられる。まことに、神は異邦人の時代を終わらせようとしておられる。日はあなたがたの上に沈もうとしている。小羊のもとへ逃れよ。小羊のもとへ逃れよ。神にほめ歌をうたえ。ああ、主に心を翻せ。どうして死んでよかろうか。主に心を翻せ。どうして死んでよかろうか。ああ、どうして死んでよかろうか。心を翻せ。心を翻せ。ああ、どうして死んでよかろうか。ああ、強情で心のかたくなな者たちよ、聖霊に逆らうな。まことに、神は異邦人の時代を終わらせようとしておられる」

聖徒たちへの言葉の一つで、速記で書き取られたものは、ある日曜日の朝の集いで与えられた。エター姉妹は大きな力をもって説教していた。彼女は、イエスがすぐに来られると信じる人はみな手を上げるように、と求めた。何百もの手が上がった。次に、主がすぐに来られることを知っている人はみな手を上げるよう

に、と求めた。次に、主にすぐに来てほしいと願う人はみな手を上げるように、と。次に、主に来てほしいと願う人はみな立って、揺祭をささげるように、と求めた。御霊は栄光の洪水のように、会衆の上に下られた。わき起こる賛美と歌は、天のようだった。そのとき、この言葉が「異言」で与えられ、同じ兄弟を通して御霊によって解き明かされた。知られていない言葉と英語とが、一文ずつ交互に語られたのである。

ヘブル語による言葉

ある晩の集いには、何百人もの罪人が来ていた。そこで働き人のひとりが、『未信者のためのしるし』として最も強く罪を示した言葉の一つを語った（第一コリント一四・二二）。その言葉には、はっきりとした超自然の面が三つあった。第一に、それは「異言」による言葉だった。第二に、自分がヘブル語で語っていることが、その兄弟に示された。第三に、数列後ろの席に座っているひとりのユダヤ人に語っていることも、彼に示された。彼は繰り返して、「御霊が、あそこに座っているユダヤ人の兄弟に語っておられます。立って、あなたに語られたことを話してください」と言った。しかしその男は、ぼう然としたように、うなだれて座っていた。さんざん勧められて、ようやく彼は立ち上がった。そして、その言葉は自分へのもので、自分にはそれがわかったと言った。

祭壇への招きがなされると、彼は、見たところ最も深い罪の自覚のうちに、前に進み出た。その祈りとうめきには、深い悔い改めの響きがあった。やがて、どうなったかと尋ねられると、彼は顔を輝かせ、自分の胸を指さして、「イエスは私のメシヤです。メシヤはここにおられます」と答えた。次に、あの兄弟はイディッシュ語で語ったのか、ヘブル語で語ったのかと尋ねられると、純粋なヘブル語で語った、と答えた。言葉は何だったかと尋ねられると、「あなたは下りて来て、イエスを自分のメシヤと認めなければならない」と答えた。この言葉が何度も繰り返された、と彼は言った。

主はハウエル兄弟を通してその言葉をお与えになった。この兄弟は、自分は外国語を学んだことがなく、ヘブル語については何も知らず、小学校さえ卒業していない、と証言した。それなら、ここに、『新しい言葉』が本物の言葉であるという、議論の余地のない証拠がある（マルコ一六・一七）。ヘブル語はたいへん難しい言葉で、それで会話ができるようになるには何年も学ばなければならない。しかし聖霊は、奇跡によって発声器官を用い、高い教育を受けたユダヤ人と同じ完全な純粋さで、その言葉を語らせることがおできになる。

第五十章　一九一四年、シカゴのエングルウッドでの伝道集会（その二）

天の合唱

御霊による歌は、たびたび起こる現れの一つだった。ときには大勢の人が「異言」で天の合唱に加わった。それは、小羊にあがなわれた者だけが歌える歌である。その歌は、多くの水の音のような賛美のほとばしりにまで高まったかと思うと、鳩の鳴き声のような甘やかさにまで沈んだ。それからまた、打ち寄せる波のように、さらに高く上った。それはまさしく、天の鳩が歌い、つがいの相手を呼んでいるのだった。訓練を受けていない声が、熟練した声楽家にまさる澄んだ音色と調和で加わった。このような光景は、雅歌二・一〇～一三に預言的なたとえとして描かれた、花嫁と花婿の愛の語らいを、ありありと思い起こさせる。

『わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立って、出てきなさい

見よ、冬は過ぎ
雨もやんで、すでに去り
もろもろの花は地にあらわれ
鳥のさえずる時がきた
山ばとの声がわれわれの地に聞える
いちじくの木はその実を結び
ぶどうの木は花咲いて
かんばしいにおいを放つ
わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立って、出てきなさい』（雅歌二・一〇～一三）

私たちは、ひとりの兄弟が異言で神への聖歌を独唱するのを聞いたことがある。その声の響かせ方も、音の澄み方も、音色も、グランド・オペラの歌手に全く引けを取らなかった。それなのに彼は、歌のごくわずかな訓練しか受けたことがなかった。

御霊によって踊る

神はこの終わりの時に「異なったわざ」をなさっている（イザヤ二八・二一）。その中には、御霊によって踊ることや、御霊によって楽器を奏でることもある。これらの現れは、暗示や模倣によって引き起こされるものではない。確かに、ときには、ただ自分なりのしかたで喜びと賛美を表して、ステップを踏んだり跳ね回ったりする人もいる。私たちもみな、以前、ホーリネスの集会で、聖徒たちが祝福を受けて跳び上がり、跳ね、走るのを見たものである。このような肉の現れを罪深いとみなすことはできないし、偽善でないことも確かである。それは、大きな祝福を受けて神に向かう感情の、人間的な表現である。ちょうど、野球やフットボールの試合での熱狂と同じである。それは、それより低い肉の次元の喜びにおける、自然な人間的な感情の表現である。

しかし、御霊の力の下での本当の踊りは、全く違う。それはおのずから起こる。前もって考えたり選んだりすることなく起こる。人間の指図や制御は全くない。ツーステップやワルツや、これまでに習ったどんな踊りにも従わない。足の運びは、聖霊が制御なさり、導かれる。体全体が御霊によって力を与えられる。目は閉じている。動きは驚くほど優美で、しばしば、とてもまねのできない速さである。普通の踊りに特有の身構えや姿勢や、相手と組むおなじみの形は、全くない。

「金の竪琴」を奏でる

ほかの人々は、音楽家のような見事な腕前と器用さで、目に見えない楽器を奏でた。この経験は、それを受けている本人にとってと同じく、見ている人にとっても驚くべきものである。突然、自分の指が、自分は全く加わっていない目に見えない力によって動かされるのである。この経験をした人は、この「異なったわ

ざ」が超自然のものであることを証しできる。指はひとりでに竪琴の和音へと伸び、広がる。手と指の筋肉は引っ張られ、張りつめ、関節はゆるむ。それは、音楽学校で何年も技術の練習を積んで得られるものと似ている。

目に見えないバイオリンや竪琴を見事な腕前で奏で、その伴奏に合わせて踊り、歌う人々も見られた。さらにほかの人々は、のどでまねのできない音を出して、天の楽器を表した。それはその場にいた人々には、竪琴や鐘のように聞こえた。それはすべて、まことにすばらしいものだった。エター姉妹は、これらは花嫁に踊りと歌を教えておられる御霊の、最後の現れだと言う。小羊の婚宴に備えるためである。その婚宴は間もなく開かれる。それは、栄光と輝きと豪華さにおいても、歌と踊りと喜びと音楽においても、世が知るどの婚宴にもまさる。これまでのどの花嫁の合唱、どの結婚行進曲にもまさるものとなる。その様子は、黙示録一九・六〜八に描かれている。

わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った。

『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。彼女は、光り輝く、汚れのない麻布の衣を着ることを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである』（黙示録一九・六〜八）。

感謝をこめて

エター姉妹は、主にある母のようだった。彼女は働きに関心を示し、働きの重荷を負った。それは、来ては去っていく伝道者にはめったに見られないほどだった。お金の取り決めにおいても、気前のよい寛大な心を示した。自分から委員会の義務を一部免除した。そして、取り決めによって自分のものとなるはずだったかなりの額のお金を、自ら働きのために寄付したのである。称賛と感謝は、それがふさわしい所に示されるべきだと、私たちは信じる。

イエスにあって眠りについた

天に召されたエター兄弟

『生きることはキリストであり、死ぬことは益である』（ピリピ一・二一）

一九一四年八月十六日、S・P・エター氏が亡くなり、三年にわたる苦しみが終わった。七十二歳近い高齢で、霊はその土の住まいから解き放たれたのである。あとには、妻のM・B・ウッドワース・エター夫人と、ふたりの娘が残された。アラバマ州バーミングハムのJ・P・ベッグ夫人と、アーカンソー州ホットスプリングズのアイダ・エディ夫人である。

彼が亡くなったとき、十三年余り前に彼と結婚したエター姉妹は、ペンシルベニア州フィラデルフィアで野営集会を開いていた。彼の切なる願いで、彼女は伝道の場にとどまり、働きの重荷と、彼の容体を案じる重荷の両方を負っていたのである。彼女は急いでインディアナポリスの家に呼び戻され、そこで彼を葬った。そしてフィラデルフィアの伝道を続けるために戻った。彼女はこの試練を驚くべき不屈さと恵みをもって通り、持ち場で決してひるまなかった。そのことを、シカゴで証人たちが証言した。

結婚して以来ずっと、エター氏は妻のそばに立って、伝道の働きをしてきた。彼は勇敢で、決して務めからひるまず、どんな緊急の事態にもいつも備えていた。きつい力仕事もすれば、罪人たちに悔い改めを勧めもした。主は彼を、リバイバルでの歌と病人のための祈りにも、すばらしく用いられた。病気になってからも、彼は妻と共に何百枚ものハンカチの上で祈り、油を注いだ。解き放たれたことのゆえに神をほめたたえる人々から、次々と証しが寄せられた。

テキサス州ダラスの集会で、彼は骨と胃の結核にかかった。間もなく彼は自分では何もできなくなり、あちこちへ運ばれなければならなくなった。働きを求める招きがあまりに多く、切実だった。それでふたりは、そのような悪い状態のまま一万一千マイル以上を旅し、福音を宣べ伝え、一日に三回の集会を開いた。ふ

たりはほとんど合衆国じゅうを回った。エター夫人は彼に別れの口づけをして集会に出かけたが、帰ったときに彼が生きているかどうかわからないことが、たびたびあった。とくに、ジョージア州アトランタで三月八日から五月十日まで開いた集会のときがそうだった。

暖かくなるにつれて、彼はしばらく家に帰って休みたいと願った。神が間もなく彼を完全にいやされるか、栄光のうちに天の家へ迎えられるだろう、と期待していたのである。ふたりは五月の末ごろに家に着いた。彼は小さな家をたいへん喜び、魂には完全な勝利があった。

エター姉妹は、最後まで彼のそばにいたいと強く願った。しかしふたりは、ミシガン州ペトスキーの聖徒たちとペンシルベニア州フィラデルフィアの聖徒たちに、集会を開くと約束していた。出発の時が来ると、彼は力強い勧めの言葉をほとばしらせた。何があっても主の働きに勇敢に、雄々しく当たるように、主の来臨が近づいているのだから、と励ましたのである。家を出るとき、妻が聞いた彼の最後の言葉は、次のとおりだった。

「進んで行きなさい。神のご加護がありますように」

彼女は、自分が戻るまで神が彼を生かしておいてくださると信じていたが、神の御心に全く身をゆだねる思いでいた。

フィラデルフィアの集会が始まって間もなく、神が近いうちに彼を休みに召されるというしるしが、彼に現れはじめた。

エター夫人は働きをやめて帰るべきかと尋ねられると、彼は言った。「いや、月の終わりに集会が閉じるまで、続けなければならない」

その後、看護人は、彼が急速に衰えていくのに気づいた。

妻にすぐ帰るよう、知らせが送られた。

彼女はすぐに急行列車に乗ったが、枕もとに着く前に、彼は栄光のうちに移っていた。彼は八月十六日、日曜日の午後に、安らかに、幸せに世を去った。

神のいやしの証し

（『ウォーター・オブ・ライフ』誌から転載）

ぜんそく、カタル、心臓の衰弱からいやされる

十二年間苦しみ、医者に見放されていた人

（ここには、L・E・ミラー夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

この証しを書いた姉妹は、からだと同じほど魂にも祝福を受けた。生まれつき物静かな人だが、いやされてから一度ならず、御霊によって踊っているのが見られた。言葉に尽くせない、輝きに満ちた喜びにあふれていた（編者）。

多くの慢性の病からいやされる　九年間の遊走腎

（ここには、オロフ・スミス夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

腫瘍からいやされる　油を注いだトラクトを用いて

（ここには、A・V・ホーキンズ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

息を詰まらせる甲状腺腫からいやされる

（ここには、フィービー・トムキンズ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

病んだ足

イングランドのある婦人が足を病み、ひどい状態にあった。彼女は神の大いなるわざのことを聞き、自分の苦しみと、何をしても治らないことを書き送ってきた。そして、自分のために祈り、ハンカチを送ってほしいと頼んできた。私たちは祈ってハンカチを送った。間もなく彼女から手紙が来た。それは神への賛美で

始まっていた。彼女が言うには、ハンカチを受け取ったとき、神の力が彼女の上に臨んだ。そして、ほとんど腐りかけていた足の上にハンカチを置いた。すると、すっかりいやされたという。ハレルヤ。

精神錯乱

少し前に、ドイツで精神の錯乱した女性がいやされた。彼女は、ペンテコステの信仰を持つある男性の娘だった。悪霊につかれていて、父親をひどく苦しめていた。彼は私に手紙を書いてきた。神が自分に、私の本をドイツ語に訳すよう示された。しかし娘のために気が狂いそうで、何とかしなければ何一つ成し遂げられない、と。私はたいへん気にかけた。その本がその言葉で書かれるのを見たかったからである。私たちの何人かが、彼と娘のために祈った。間もなく手紙が来て、悪霊どもが追い出され、娘は元気になったと書いてあった。

（署名）ウッドワース・エター夫人

使者たちへの呼びかけ

クリスチャンよ、主は言われる、「刈入れに進み行け
目をあげて見よ、畑は色づいて待っている
働きが終わるまで、わたしがあなたと共にいる」
間もなく、ああ、間もなく、夜のとばりが下りる
（おりかえし）
内なる御霊は言われる、「進み行け
わが子よ、種をまくことを恐れるな
わたしが終わりまで共に行くから
大胆にみことばを語り、わが真理を守れ」
ほかの人々が滅びゆくのに、なぜ安楽に暮らすのか
今、神の真理と恵みに満ちあふれる者たちよ
世に神の御国の福音を伝えよ
聞け、世界じゅうから助けを求める声を
兄弟よ、刈入れの日は間もなく終わる
そのとき主はあなたに言われる、「よくやった」と
あなたが神とキリストと共に永遠に住み
御国で太陽のように輝くために
兄弟よ、主はキリストの兵士を求めておられる
真理と正義のために、あえて立つ者を
神の驚くべき力を示すことのできる者を
決して退かない者が、戦いに勝つ
主よ、私は行って、刈入れの畑で働きます
あなたのために、尊い金色の束を集めます
なくてはならない福音の種をまき
刈り取る魂が、私の働きの報いとなるでしょう

第五十一章　フロリダ州タンパでの働き

エター姉妹の幻

国内と国外のすべての聖徒たちに、イエスの名によってあいさつを送る。

この三年間、私の重荷と心配は重かった。私は病気の夫を運び、世話をしながら、一万一千マイル以上を旅した。大西洋から太平洋まで夫を連れて行き、大都市で一日に三回の集会を開き、それぞれの町に一か月かそれ以上とどまった。主の働きに伴うあらゆる重荷があった。ときにはひとりで立ち、昼も夜も夫の世話をした。そのうえに、八月には夫を亡くし、葬る悲しみが加わった。それは私がペンシルベニア州フィラデルフィアで大きな伝道のさなかにいたときだった。夫は最後まで、働きを進めるよう私を促していた。このような重い負担を通り、絶えず働き続けたので、私はついに体がひどく弱ってしまった。私はただ、神のいのちと力によって、なんとか続けていたのである。

シカゴでの集会のために家を出たとき、人々は私を自動車で駅まで運ばなければならなかった。私は、神が私を召されたのであり、集会のあいだ私を支えてくださると信じて出かけた。集会は、神の御心ならば、一か月かそれ以上続く予定だった。主は、私が約束した期間のあいだ、すばらしく私を支えてくださった。弱っていたところに、ある日ひどい風邪をひき、それは間もなく肺炎になった。同労者と友人たちはすぐに、私を集会から連れ出して、休むことのできるインディアナポリスの家へ帰らせることに決めた。次に載せるのは、このときの私の容体についての、熟練した医者である兄弟の証言である。インディアナ州マーティンズヴィルのマーティンズヴィル療養所の、グリーン医師が書いたものである。

（ここには、Ｅ・Ｖ・グリーン医師の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

自分の容体を聞かされると、私は主をほめたたえはじめた。間もなく主が、幻のうちに、栄光の雲の中で私に現れてくださった。主は大きな白い馬にお乗りになり、手に剣を持っておられた。そして、ご自分が死と病に打ち勝たれたこと、私が再び大いなる力をもって出て行くべきことを示してくださった。主が私と共にいてくださる、と。神をほめたたえる。聖徒たちが私のためにささげてくれた祈りによって、私のいのちは助けられたのである。今、主は私を再び働きへと呼び出しておられる。主の御心ならば、私は今から二月の初めまでのあいだに、フロリダ州タンパで次の集会を始める。

（ここには、グリーン医師のもう一通の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

フロリダ州タンパでの集会の時が来たとき、私はまだ体がたいへん弱かった。しかし霊は強く、再び戦場に出て、私の体を通して神に暗やみの力と戦っていただこうという勇気があった。私は心の中で、「主よ、たとえ途中で倒れても、あの地の愛する人々を失望させはしません」と言った。神は旅のあいだすばらしく私を支えてくださり、集会のあいだずっと私を元気に保ってくださった。

この集会で、神ははっきりと現れてくださった。バプテスマを受けた十二歳ほどの少女の上に、力が何度も臨んだ。彼女は激しい叫びと涙とをもって、罪人たちに、自分の賜物を神にささげるよう嘆願した。彼女は御霊の霊感を受けて、しばしば三十分ほども、神のすばらしいことについて語った。そして、すべての人に悔い改めて、もっと神を求めるよう勧めた。この子供を通した御霊の勧めは、いつも実を結んだ。人々が神を求めて祭壇へ殺到したのである。御霊が臨まれなければ、この小さな子供は、イエスのために多くを行うことも語ることもできなかった。私たちがただ粘土となって、陶器師に用いていただくなら、神が私たちを用いられる道には限りがない。

牧師の報告

ウッドワース・エター集会

（ここには、J・M・ロウ牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ブロッカー牧師の報告

一九一五年一月と二月のフロリダ州タンパでの働きについて

（ここには、E・A・ブロッカー牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

自由の鐘

自由の鐘を鳴らせ、うるわしい鐘を
ヨベルのラッパが鳴り響く
その銀の音色は喜びの波となって
天にも地にもあふれる
（おりかえし）
自由の鐘を鳴らせ、うるわしい鐘を
自由の鐘を鳴らせ
イエスはよみがえられ、獄を開いてくださり
地獄のかんぬきを打ち砕かれた
自由の鐘を鳴らせ、うるわしい鐘を
放蕩の子が見つかった
罪から救われ、喜びが始まる
周りのすべての人に響くうるわしい音楽
自由の鐘を鳴らせ、うるわしい鐘を
タンバリンを打ち、踊って歌え
馬と乗り手は海に沈んだ
勝利の賛歌を響かせよ
自由の鐘を鳴らせ、うるわしい鐘を
助け主が力をもって来られ
血で洗われた魂をひとりひとり治められる
天からの雨を求める魂を
自由の鐘を鳴らせ、うるわしい鐘を
聞け、竪琴をひく者たちがうるわしく奏でる
ガラスの海の上で、それはヨベルの祝い
われらの神の永遠の日の

第五十二章　一九一五年のアトランタでの集会

一年を経て　以前に回心した人々は健やかで幸せ

フロリダ州タンパから帰る途中、アトランタの愛する人々から熱心に招かれ、私たちは主が呼んでおられると感じた。そこで出かけて行き、ジャクソン兄弟の新しい会館で集会を始めた。そこはほとんど市の外にあった。市内の人々、とくに電車賃を払えない貧しい聖徒たちには、そこまで来るのが難しいことはわかっていた。チャップマン氏とアレクサンダー氏が、そのために建てられた大きな幕屋でリバイバル集会を開いていた。市じゅうを回って人々が誘われ、すべての教会と伝道所が彼らを助けると約束していた。私は彼らの近くで始めたくなかった。対抗しているように見えるからである。このような状況でリバイバル集会を始めようとする者は、千人にひとりもいなかっただろう。だれも私に一ドルも約束していなかった。家賃もすべての費用も、私が責任を負った。多くの貧しい人々がチャップマンとアレクサンダーの集会に出られないことを、私は知っていた。私は、ジャクソン兄弟の会館で集会を始め、主が人々を引き寄せてくださると信頼しよう、と言った。私たちはイエスの名によって勝利を叫び、この大きな会館にも人々が入りきらなくなる、と聖徒たちに告げた。そして、そのとおりになった。何千人もが集会に来た。ときには全員が入りきれなかった。イエスは『わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう』と言われる（ヨハネ一二・三二）。

前の年に大きな幕屋で九週間の集会を開いたときに来ていた何百人もの人々が、やって来た。救われて聖霊のバプテスマを受けた人々や、日ごとにいやされた人々から、響きわたる証しが上がった。これらの祝福を受けた人々のうち、一日に六十人もが証しをした。あらゆる病気や疾患からいやされ、魂も体も健やかに守られてきた、と。イエスは『あなたがたはわが証人』と言われる（イザヤ四三・一〇）。また、『ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられる』とも言われる（マタイ一八・一六）。イエスは、あがなわれた者たちの賛美を聞くことをこよなく愛しておられる。地上におられたときには、大きな行列を止められたほどである。あわれなひとりのらい病人と、この世にひとりの友もいないあわれな老婆の証しを聞くためであった。主はきっと、天の御使の合唱と音楽をお止めになって、ジャクソンの会館でのこのすばらしい証しに耳を傾けておられるに違いない。永遠の門がさっと開いたからである。神の御座の前から流れ出るいのちの川の高潮が、激しく押し寄せる大水のように人々の上に流れ込んで来た。そして、建物の中のすべての人が、いやし、いのちを与える神の力を感じた。

ある人は泣き、ある人は叫び、ある人は立ったまま、あるいは席に座ったままでいやされた。八歳の小さな男の子が、異言による言葉を語って解き明かし、踊り、説教をして、大群衆を魅了した。その子は、前の年に私たちが来たときに、救われ、いやされ、聖霊のバプテスマを受けたのだと人々に語った。家族は、姉妹も兄弟も両親も、ひとりを除いてみな救われた。そのひとりもすぐに救われることを自分は知っている、とその子は言った。家族のほとんどが聖霊のバプテスマを受けていた。御霊にすっかり支配された人々が、ピアノですばらしい音楽を奏でた。その全身は聖霊の大いなる力に満たされ、動かされていた。それは人々に大きな影響を与えた。楽器は神の栄光に満ちているようだった。

死にかけていた人が、今は復活のいのちに満たされて

アイダ・ボール姉妹は、肺病の末期に救われ、いやされた人である。彼女は集会のあいだずっとそこにいて、神に満たされ、主にすばらしく用いられた。小柄できゃしゃに見え、たいへん色白で、金色の髪をしている。彼女が会衆の前に出ると、いつも人々は魅了された。御使のようだと人々は言った。主が彼女をとらえられると、彼女は鳥のように軽くなり、聖なる踊りを踊った。髪がベールのよ

うに顔と肩のまわりに垂れた。彼女は、だれも聞いたことのない新しい歌を異言で歌い、それから英語で歌った。また、さまざまな言語ですばらしい言葉を語り、それを解き明かした。私はいくつかの大会に彼女を連れて行った。神は至る所で彼女をお用いになって、神が今日もご自分の民のうちに生きて働いておられることを、すべての人に確信させられた。

本を手に入れて救われ、いやされる

（ここには、J・F・ゴセット夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ジョージア州アトランタのエター姉妹

（ここには、『ワード・アンド・ワーク』誌から転載された、エター姉妹の秘書A・D・フリックの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ジョージア州アトランタでの奇跡

（ここには、伝道者S・C・ジョンソンの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

フロイド夫人の証し

（ここには、A・M・フロイド夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

見よ、わたしは来る

驚くべきこの主題を思い巡らすとき
ご自分の民を迎えにイエスが来られるという
それは朝の昇る光のように
天の家へとわれらを呼ぶ
　暗い時代の、この終わりの時に
悪霊どもが巧妙な力でうろつくとき
われらの神はしるしを示しておられる
来たる日と、近づく時の
　目覚めよ、わが魂よ！　高く舞い上がれ
あの「望み」に揺るがぬ目を注げ
間もなくわれらは愛の主にお会いする
空の雲の中で、共に
　疲れた魂には慰めがある
近づく喜びの輝かしい望みのうちに
そのとき、尽きることのない時代が巡り
地獄の力はもはや悩ますことがない
　イエスよ、早く来てください。あなたの花嫁は
あなたと、あの驚くべき時を慕う
あなたと共に、あなたのかたわらに座して
天の国で、あなたと共に治める時を

第五十三章　一九一五年六月、シカゴの赤い石の教会での大会

ホール兄弟と聖徒たちから、悪の町シカゴへ三度目に行って、もう一度大会を開いてほしいという熱心な招きがあった。ほかの州や町からも、日取りを待っている招きがたくさんあった。私は、主がこの招きを受けることを望んでおられるのか確かめるため、しばらく主の前で待ち望んだ。そして、行くことに決めるよう導かれた。ホール兄弟がインディアナの私の家に来た。主は祈りのうちに私たちを大いに祝福してくださった。私は、主が私を導いて、主に会う備えをするようシカゴにもう一度警告させようとしておられると確信した。この愛する兄弟は、市内で借りられるいちばん大きな教会を確保した。牧師や聖徒たちが市内の至る所から、またほかの多くの州からもやって来た。

助けてくれた人々の中に、ストーン・チャーチのフレイザー兄弟と、シッソン姉妹がいた。シッソン姉妹も主に大いに用いられ、祝福されてきた人で、外国の伝道地で働いたこともあり、ほかのいくつかの州でも私を助けてくれた。主が彼女の生涯に日と月を加えてくださり、年老いてもなお栄えて、多くの実を結ばせてくださるように。英語でも「異言」でも、多くの言葉と預言が与えられた。主イエスがすぐに来られること、今起こっている恐ろしい戦争、一年もたたないうちにすでに起こったほかの多くのこと、そして『大きな患難』についてである（マタイ二四・二一）。

何人かの人が、集会が終わって数日後に起こった恐ろしい災害の幻を見た。ミシガン湖で遊覧船が転覆し、何百人もの人がいのちを落としたのである。大きな災害が戸口に迫っている、と彼らは何度も告げた。その場にいてあざけっていた者のうち、何人かが沈むことも告げられた。私たちが去る前に起こったストライキも預言されていた。多くの人が、あわれみの最後の招きを受けたのである。次の招きは、さばきの時になるだろう。

イエスは言われた。「わたしがしているわざが、わたしのことをあかししている。わたしと共におられる父が、みわざをなさっているのである。今となっては、あなたがたには、その罪について言いのがれる道がない。あなたがたは罪ある者として、裸のまま神の前に立っている」

イリノイ州シカゴのエター夫人

（ここには、伝道者L・C・ホールの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

聖霊のバプテスマを受けたときにぜんそくからいやされる

（ここには、C・ボウマンの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

脊髄癆と痔からいやされる

（ここには、R・ハンコックの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

二年前にリウマチからいやされ、今も健やか

（ここには、A・ミラー夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

シカゴのウッドワース・エター集会でなされた証し

この七か月のあいだ、私はがんに苦しみ、一歩も歩けませんでした。医者たちは、私は決して治らない、望みのない症例だと言いました。私の苦しみは言葉では言い表せないほどで、がんが私の生気と力を食い尽くしていました。

私は、カンティルという夫人が、ミシガン州ペトスキーでのエター姉妹の集会で二つのがんからいやされたことを聞きました。そして、エター姉妹が今、幕屋に来ていることも聞きました。私は歩けなかったので、貸し馬車で幕屋に来て、椅子に乗せられて壇まで運ばれました。エター夫人ががんをしかりつけ、私のために祈ってくださると、私はいやされました。すぐに、若い娘のように歩いたり跳びはねたりできるようになりました。主に栄光と賛美がありますように。

（署名）ある黒人の婦人

いやしと救いの証し

（ここには、C・E・スティーグリッツの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

結核とアデノイドからいやされる

（ウィスコンシン州リオのグラディス・アレンの証し。一九一五年六月、シカゴのウッドワース・エター集会で、おばのメイ・アレン嬢が語ったもの）

（ここには、メイ・アレン嬢の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

多くの病からいやされる

（ここには、リジー・ハーティ嬢の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

慢性のカタルがいやされる

（ここには、C・W・グリフィンの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

目を見張るがんの例

（ここには、F・カンティル夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

母は多くの病からいやされ、子供たちは聖霊のバプテスマを受ける

（ここには、ジェームズ・ドーラン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

心臓病と水腫からいやされる

（ここには、ジョン・A・ウィーバーの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

シカゴ、モンロー通り一一〇六番地のJ・W・ゴードンの証し（一九一五年六月二日）。

（ここには、ゴードンの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

なんと喜ばしい再会

間もなく王の王が天から下られ
われらはラッパの響きを聞く
そのとき、生きている聖徒たちは永遠のいのちを与えられ
地からよみがえる人々に会う
（おりかえし）
なんと喜ばしい再会、なんと幸いなあいさつ
もはや別れることなく会うとき
そのとき栄光の野で、われらは生涯の物語を歌い
尊い救い主の御名をあがめる

ラッパが鳴り、死人が目覚め
われらが王を迎えに上るとき
われらはみな婚宴にあずかり
あがないの歌を歌う
　神の恵みによって、私は進み行く
パラダイスで私を探してほしい

第五十四章　ミズーリ州セントルイスでの集会

何年も前のリバイバルで神がすばらしく祝福してくださった地

私たちはセントルイスに二週間とどまり、一日に二回の集会を開いた。そして、以前のセントルイスでの集会で救われ、いやされ、祝福された愛する聖徒たちと、栄光に満ちた再会をした。その多くは、二十七年前の名高い「ケリー・パッチ」の集会に来ていた人々だった。彼らはみな愛と交わりのうちに集まり、神をほめたたえた。神が私のいのちも彼らのいのちも守ってくださり、もう一度共に集まって主の宮を建て上げることができるようにしてくださったからである。罪を示し、救い、いやす主の力が集会に注がれた。多くの人が聖霊のバプテスマを受け、罪人たちは神の大いなる力によって打ち倒された。多くの聖徒たちが『緑の牧場』に伏させられた（詩篇二三・二）。彼らは幻を見、『きたるべき事』が示された（ヨハネ一六・一三）。そこには御霊の大いなる現れと、さまざまな賜物と働きが伴っていた。群衆は会館に入りきれず、一部の人は外に立っていなければならなかった。ときには、人々はじっと動けなくなり、驚いて見つめていた。テキサスのボズワース兄弟も私たちと共にいて集会を助けてくれた。ほかの多くの牧師たちも助けてくれた。集会を乱す不和はまったくなかった。だれもがくつろぎ、天が下って来たように感じた。万軍の主がそこにおられ、『御言に伴うしるしをもって、その確かなことをお示しになった』のだと、みなが感じた（マルコ一六・二〇）。ベル兄弟とフラワー兄弟、フラワー姉妹も来て、助け救い主の御名に、私はいつまでも忠実であろう
そのとき、救われたすべての人に空で会う
　罪人よ、キリストのもとに来て、全き者としていただけ
きよめの流れに身を沈めよ
御霊に満たされ、金のようにきよめられて
血で洗われて、愛する人々に会える

てくれた。主はフラワー姉妹を通して、力をもって、雄弁に、流れるように「異言」で言葉を与えられた。彼女は主の御手の中で力ある器である。彼女は「異言」を語ることと解き明かしにおいて、すばらしく用いられた。ほかの多くの人々も、預言や言葉や警告を語った。神の驚くべきみわざと、世に来ようとしている恐ろしいさばきについて語ったのである。それからもう一年近くになり、その恐ろしいことの多くがすでに起こった。さらに多くのことが間もなく続くだろう。

ある人々は、実に優雅に軽やかに聖なる踊りを踊った。主の栄光がその顔に、また体全体とその周りに輝いていた。前の年にアトランタで肺病からいやされた愛するボール姉妹は、御使のようだったと、だれもが言った。その金色の髪は、絹のベールのように肩に垂れていた。彼女はいくつもの違う言語で語り、だれも聞いたことのない歌を歌った。その中には英語の歌もあった。

ほかの教会の古い友人たちの多くは、「異言運動」に強く反対していた。しかし彼らは来て、説教を聞き、多くのしるしを見、証しを聞いた。そして、すべてが宣べ伝えられたみことばのとおりに、神の秩序に従って行われているのを見た。行き過ぎた熱狂も、狂信も、争いも、互いにしかりつけたり虚勢を張ったりすることもなかった。それで彼らは、まことに「ペンテコステが再び来た」、神がその御霊を注いでおられる、と言った。二年かそれ以上私と共に旅をしてきたファイク兄弟は、聖なる踊りにおいて主にすばらしく用いられた。踊る人がみな

そうするように、彼も目を閉じていた。手足は実に軽やかで、手と全身を力強く優雅に使い、それまで見たこともない多くのステップを踏んだ。彼は目に見えない楽器を奏で、自ら奏でる天の音楽に合わせて踊っていた。このあいだずっと、人々は魅了されていた。彼は生まれつきたいへんもの静かな人で、生涯ダンスパーティーに行ったこともなく、踊ろうとしたこともなかった。だれもが、神がそこにおられ、私たちのただ中で「異なったわざ」と「類のない行い」をなさっていると感じた（イザヤ二八・二一）。

もし時間に限りがなかったなら、もう一度「ケリー・パッチ」のようなリバイバルが起こっていただろう。しかし私たちは、将来神が祈りにお答えになって、セントルイスの愛する人々にもう一度招きを与えてくださることを望み、信じながら、去らなければならなかった。

ひとりの盲目の女性の目が見えるようになった。二年近く前のあの集会でいやされ、救われたことのゆえに、多くの人が今日も主をほめたたえている。

セントルイスに来たエター姉妹

シカゴでの実りある集会を終えて

トピーカの野営集会の前に、セントルイスで十日間の集会の時を見いだす

（『クリスチャン・エバンジェル』誌から転載）

エター姉妹がセントルイスに来た。私たちは姉妹を迎えて、本当に喜んでいる。集会はシカゴの幕屋、すなわちアッシュランド大通りとオグデン街の角にある赤い石の教会で開かれ、広く告知されていた。しかし、路面電車のストライキのために、予定より一週間早く閉じられた。ストライキで、人々が集会に出かけられなくなったのである。

今週はずっとセントルイスに

エター姉妹は今週、六月二十六日まで、ことによるとさらに数日、セントルイスの聖徒たちと共にいる予定である。イーストン街の会衆がオリーブ通りの会衆と合流し、二つの会衆は今、力の限り協力している。神の働きを助け、みことばを宣べ伝え、病人のために祈るエター姉妹の手を支えているのである。乗り越えなければならない障害は多い。この集会は、いつか将来セントルイスで開かれると私たちが信じている、もっと大きく長い集会の先触れにすぎない。

すでに、よい結果がいくつか見られている。病人のために祈りがささげられ、罪人たちは涙を流しながらカルバリにたどり着いた。必要な教えも与えられた。それは、神に従い、聖霊に思いのままに働いていただきたいという人々の願いを、大いに助けている。エター姉妹は恐れることなく完全な福音を語っており、主は恵み深く、しるしをもってみことばを確かなものとしてくださっている。

シカゴからの祝福された報告

シカゴの集会から、祝福された報告がいくつか届いた。ある兄弟は、神が大いなる力をもって臨在され、救い、いやし、聖霊のバプテスマを授けてくださった、と書いて来た。ファイク兄弟は、「車椅子で集会に来た何人もの無力な病人が、今は自分で歩いている」と書いて来た。二十の州から人々が来ており、神の力が毎日多くの聖徒たちを倒れ伏させ、その中には驚くべき幻を受けた者もいた、と報告されている。

イリノイ州シカゴ、モンロー通り一一〇六番地のJ・W・ゴードンは、ブライト病と水腫と腎臓病からいやされたと証しをした。彼は死にかけていて、体重が十七キロほども減っていたのである。ひとりの兄弟が立ち上がり、ゴードン兄弟を七年前から知っていると言って、この証しを裏づけた。

ひとりの女性が、車椅子で集会に連れて来られた。その女性は、心臓の動悸と、九週間前に馬が暴走したときに負った背中のけがからいやされたと証しをした。彼女は、ひどい胃の病も含めて、今はすべてなくなり、胃があることもほとんど忘れるほどだ、と言った。

第五十五章　カンザス州トピーカに火が下る

敵が騒ぎ立つ　人々は祝福される

大いなる勝利が得られる

二年のあいだ、フォスター兄弟と聖徒たちは、大会を開くために私をトピーカに招き続けていた。ついに私たちは主が導いておられると感じた。そこで一九一五年七月の末、私は何人かのよい働き人と共に、美しい町トピーカに着いた。読者の多くは、二十七年前にその町で開いた大集会のことを読んだだろう。そのとき私は、ひとりの牧師に招かれ、ふたりの若い娘と雑用係を連れて、見知らぬ者として出かけて行った。そして美しい公園で、二か月近く集会を開いた。カリフォルニア州オークランドで贈られた、八千人近くが入る私の大天幕は、嵐で壊されてしまった。何千人もの人々がやって来て、私たちが林の中でなんとか集会を続けようとしているのを見た。彼らはすぐに動き出し、お金を集めて、私に大きな新しい天幕を買ってくれた。それから長い年月を経た今、私は再び市の公園の大きな劇場で集会を開いている。周りには回転木馬やダンスホール、あらゆる種類の運動や娯楽がある。愛する主イエスは、『わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう』と言われる（ヨハネ一二・三二）。主こそ、人を引き寄せる大いなる力である。私たちは、すべての人とすべての力にまさる第一の地位を主にささげて、みことばを宣べ伝えた。すると主は私たちと共におられ、「しるしと不思議」をもってみことばを確かなものとしてくださった。人々は、寝床に寝かせたり松葉杖をつかせたりして、病人を連れて来はじめた。足の不自由な人、目の見えない人、足なえが、簡易寝台や寝床から走り出すのが見られた。目の見えない人は見えるようになり、足の不自由な人は跳びはね、叫んだ。罪人たちは涙を流しながらカルバリに行き、立ち上がって主をほめたたえた。主が自分の魂にとって尊いお方であることを見いだしたからである。娯楽の場所が空になり、大きな劇場が満員になって多くの人が入れないことが、何度もあった。さまざまな教派の多くの牧師たちが、病人を連れて、列車で群れをなして各地からやって来た。

このことはすべて広く言い伝えられ、大騒ぎになった。兄弟たちは何年も前からこの町で集会を開いていたが、好かれておらず、彼らに偏見を持つ者もいた。大きな成功と関心の高まりと大群衆を見て、その者たちは「これをやめさせてやる」と言い、兄弟たちを訴える口実を探しはじめた。彼らは、ひとりの子供が神の力の下で祭壇に横たわっているのを見つけた。そして、十六歳未満の子供がまた祭壇にいるのを見つけたら、親を逮捕し集会を閉鎖する、という命令を出した。ある女性が、いやしを受けさせるために、百マイル以上の道のりを息子を連れてやって来た。医者たちは息子に何もしてやれず、母親もひどい病気にかかっていた。ふたりとも最初の日にいやされた。

警官が祭壇から少年をつかみ去る

その夜、少年は聖霊のバプテスマを求めて、母親と共に祭壇に出た。長い祭壇は男女でいっぱいだったが、警官たちはその端から端まで歩いて回った。いちばん端で、彼らはこの少年が母親と共にひざまずいているのを見つけた。母親は息子を抱きとめようとしたが、彼らは少年を母親から引き離して、警察署へ連れて行った。翌日、彼らは母親に、少年を家に帰らせるよう命じた。もし少年が集会に戻れば、ふたりとも逮捕して罰金を払わせる、というのである。母子はほかの郡から来ていたので、市を相手に多額の損害賠償を求めて訴えることもできた。こんなに怖い思いをしたあとでも、少年は完全にいやされていた。彼らは集会の指導者たちに、すぐにその場所から出て行くよう命じた。私たちには小さな天幕がたくさんあったので、すぐに移ることはできなかった。その夜は群衆が集まっていたが、彼らは八時に明かりを消すと言っていた。はたして明かりが消え、私

たちは暗やみの中に取り残された。このとき、ひとりの男が進み出て言った。道のすぐ向かいに自分のすてきな林があるから、無料で使ってよい。市が自分をどうするか見てやろう。好きなだけそこにいてよい、と。

牧師が逮捕され、釈放される

警官たちは怒り狂い、指導者を逮捕して署に連れて行ったが、彼は間もなく保釈された。次は私が連れて行かれるだろうと思った。それから二、三日、私はいつ逮捕されるかと絶えず思いながら、殉教のような苦しみを味わった。私は毎日、部屋着と、牢屋で必要になりそうなこまごまとした物を持ち歩いた。しかし、彼らがねらっていたのは私ではなかった。私に反対することは一言も言わなかった。イエスの足跡にぴったりと従うなら、昔の殉教者たちがどのように苦しみ、迫害されたかがわかるだろう。町全体が騒然となり、至る所で人々は集会に賛成するか反対するかに分かれた。ああ、神に栄光あれ。キリストは勝利者であられた。キリストが主の軍勢を導いておられたのである。すぐに大きな天幕が確保され、小さな天幕も間もなく、前よりずっとよい場所に移された。群衆は増え続け、関心も高まり続けた。それまで加わることも関心を持つこともなかった、りっぱな市民や教会員の多くが、私たちの受けた扱いにひどく憤り、見に来た。天幕は満員で、人々は天幕の周りにぎっしりと立っていた。みなが聞き取れるほど、あたりは静まり返っていた。神の力が雲のように来て、天幕と敷地の上にとどまった。すべての人が、神への畏れと神の臨在を感じた。だれもが私たちに敬意を払っているようだった。牧師たちも、主を助けに次々とやって来た。神がこの終わりの時に与えておられる力ある「しるしと不思議」を一度も見たことのなかった多くの人々が、それを見た。病人が最悪の病からいやされ、耳の聞こえない人が聞こえるようになり、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのである。彼らは、ガリラヤでのキリストの日々のようだと言った。また、年老いた男女から小さな子供まで、あらゆる人々が「他国の言葉」で語り、正しい解き明かしをし、みな神の大きな働きを述べるのを見た。彼らは驚きあきれて、「これは、いったい、どういうわけなのだろう。確かに、きょうは驚くべきことを見た」と言った。

オークス姉妹は、三人の小さな子供を世話しなければならない貧しい女性だった。その姉妹が、野営地で雷のような声をもって、「異言」で多くの力強い言葉を語った。彼女はたいへん小柄できゃしゃだったが、御霊によって「異言」で祈り、歌った。彼女はほかの人々と共に、聖なる踊りに加わった。彼らはあまりに軽やかで、今にも浮かんで行ってしまいそうだった。聖なる火は遠くにも近くにも広がった。神がトピーカで成し遂げられた力あるわざは、永遠だけが明らかにするだろう。

学校教師アルバック嬢の証し

（ここには、ルイーズ・アルバック嬢の記録が載っているが、記録に引かれたP・M・ラバージ夫人（アグネス・オズマン）の言葉のほかは、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ラバージ夫人は言った。「十五年前、私の名前がアグネス・オズマンだったころ、私はここカンザス州トピーカで、ほかの何人もの人たちと共に、十日間バプテスマを待ち望みました。私は十二年間伝道者として働いてきましたが、自分のためにもっと多くのものがあることがわかったのです。私の心はひどく飢え渇いていました。祈りの力が力強く私に臨んでいました。私は知っている限りのことをしました。神は私たちを導くために、ひとりの兄弟をお用いになっていました。私はその兄弟に、私のために備えられているものを受けられるよう、私の上に手を置いてくださいと頼みました。兄弟がそうすると、私は異言で語りました。私の心は満たされました。私は自分が異言を語るとは知りませんでした。そして、しばらくのあいだ英語を話すことができませんでした。それが聖書にかなったことだとわかりました。ある伝道所で、ボヘミア語のわかる人たちが、私がボヘミア語で語るのを聞きました。私は、神が私をどのように扱っておられるのかを理解できず、肉に陥って、霊的に暗い雲の下に置かれました。そして、批判と非難のために、バプテスマを捨ててもよいと思うようになりました。私は三

日半断食しました。すると主が、この聖句を私に与えてくださいました。『あなたがたのうちで、父であるものは、その子がパンを求めるのに、石を与えるだろうか』『天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか』（ルカ一一・一一、一三）」

（ここには、アルバック嬢の記録の続きが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

カンザス州トピーカで多くの人がいやされる

（ここには、アンドルー・L・ターナーの手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

故エター氏の詩

私が遠く離れ、失われていたとき
ああ、驚くべきことだった！
これほどの代価で救われたとは
ああ、驚くべきことだった！
（おりかえし）
ああ、驚くべきことだった！　ああ、驚くべきことだった！
イエスが私のためにいのちを捨ててくださったとは
ああ、驚くべきことだった
携えて行けるものは私の罪だけだった
ああ、驚くべきことだった！
その私が、主の愛を歌う者とされたとは
ああ、驚くべきことだった！
イエスは日ごとに私を守ってくださる
ああ、驚くべきことだ！
私が主に信頼し、従うとき
ああ、驚くべきことだ！
罪人よ、イエスがあなたを呼んでおられる
ああ、驚くべきことだ！
主の血はあなたのために惜しみなく流された
ああ、驚くべきことだ！
きょう、主のもとに来ないか
ああ、驚くべきことだ！
主のみことばに従わないか
ああ、驚くべきことだ！
今、主の命令に耳を傾けよ
ああ、驚くべきことだ！
主のさばきの前に立つことのないように
ああ、驚くべきことだ！

第五十六章　コロラド州コロラドスプリングズ

コロラド州プエブロでの数日も

カンザス州トピーカでの私たちの集会で神がなさったわざは、遠くにも近くにも広がりはじめた。次に約束していた働きの場は、ほんの数年前に世界野営集会を開いたカリフォルニア州ロサンゼルスだった。

そのあいだに、コロラド州コロラドスプリングズの聖徒たちが、私たちが自分たちの町を通ることを知った。ロサンゼルスでの集会が始まるまでに、少し時間があることも知った。彼らは私たちに切実な願いを送って来た。それは「まこと

のマケドニヤの叫び」だった。集会を開かずに素通りしないで、いのちのパンを分け与えてほしい、というのである。私はひどく休息を必要としていたが、この助けを必要としている働きの場を素通りすることはできないと感じた。そして、数週間の集会を約束した。私が行くという確約を受け取ると、聖徒たちはすぐに、よい天気を求めて神に叫びはじめた。長いあいだほとんど毎日雨が降っていて、天幕で集会を開くのはほとんど不可能だったのである。神は彼らの祈りをすばらしくお聞きになり、答えてくださった。集会が始まった日に雨はやみ、集会を閉じた翌日まで再び降ることはなかった。例外は、集会中にほんの数分だけ降った一度の小雨だけだった。この小雨で、もし神が雨を止めてくださらなかったら、私たちがどんなに無力だったかがわかった。天幕が雨漏りして、傘をささなければならなかったのである。

集会が続いたあいだ、神は私たちを大いに祝福してくださった。そこは難しい働きの場で、夏のあいだ神のために成し遂げられたことはほとんどない、とだれもが私たちに言った。実際そのとおりだとわかった。しかし、私たちが神に信頼し、神を仰ぎ続けさえすれば、神にとって難しすぎることは何もない。

急に来ることになったので、集会は広く宣伝されていなかった。そこを働きの場とする牧師がいて、私たちはその人がそばで支えてくれると期待していた。ところが私たちが着くほんの数日前、その牧師に、ほかの場所を助けてほしいという急な招きが来た。そのため私たちはほとんど孤立したが、それでも神は私たちと共にいてくださった。

群衆は、初めはそれほど多くなかった。しかし、本当に飢え渇き、助けを必要としている魂がいくらか来ていて、間もなく神に満たされた。御霊の剣によって、毎日、最も力ある奇跡のいくつかが行われた。

鉱夫の肺病がいやされる

ひとりの男が、鉱夫の肺病で死にかけていた。医者たちは、あと数か月のいのちだと言った。妻は彼に、あの集会に行って、どうにかしてもらえないか見ておいでと言った。宗教の集会に、それもあの天幕に行くなどと考えただけで、彼は怒り出しそうになった。しかし、病は彼の体をひどくむしばんでいた。自分の地上での時が限られていることを、彼は知っていた。それで、ある日、彼はとうとう行くことに決めた。彼はかなり前のほうの席に着いた。いつもの病人のための祈りの時間が来る前に、御霊がこの人を私に指し示された。私は、まったく見知らぬこの人のところへ下りて行き、彼に語りかけ、彼のために祈りはじめた。間もなく、神の力が稲妻のように彼を打った。彼は上着を脱ぎ捨てて、「私は救われ、いやされた」と叫んだ。そして、こぶしで胸を強くたたいて、それを示しはじめた。彼は来る日も来る日もそうして、祈り、証しをし、集会でたいへん役に立つ働きをした。彼の変わりようは驚くばかりだった。食欲が戻り、妻は彼が食べるだけの料理を作るのに追いつかないほどだった。

耳が聞こえず口のきけない霊が出て行く

会衆のかなり後ろのほうから、来る日も来る日もじっと私を見つめている、四十歳ほどの優しげな女性がいることに、私は気づいた。私は自分に問いかけた。なぜあの人は「主をほめたたえ」もせず、証しもしないのだろうか。いつも一言も話さないようだ。あとで人々が、祈ってもらうために彼女を壇に連れて来て、彼女が生まれつき耳が聞こえず口がきけないのだと私に告げた。それで私はすべてがわかった。私たちは、神が聞こえない耳をお開きになり、舌を解いてくださるよう祈った。すると間もなく、彼女は音楽を聞き、私たちと共に喜びはじめた。音を聞き、声を出したときの彼女の顔ほど、優しく輝いた顔は見たことがない。

さまざまな病が去る

ひとりの女性が連れて来られた。虫垂炎がひどく、叫び声を上げるほど苦しんでいた。六週間ほどのあいだ、悪い状態が続いていた。神の力のほかには、手術しか彼女のいのちを救う道はなかっただろう。私が祈ると、痛みはたちまち去り、彼女は救われた。彼女は完全に解放された。

多くの人が、あらゆる病に苦しみながら、簡易寝台で運び込まれた。ときには悪臭がしたが、神はひとり残らずお触れになり、いやしてくださったと私は信じている。この集会で、病人や苦しむ人々が起き上がって歩いた様子は、驚くべきものだった。いやす神の力がそこにあった。

また、ひとりの女性は、いくつもの病を併発して苦しんでいた。おもなものは動脈硬化だった。彼女はしばらく前から体の自由がきかなかった。簡易寝台に横たわって順番を待っていたとき、私は彼女に手を置き、イエスの血で彼女を覆った。彼女はすぐに眠りに落ち、目を覚ますと、ほほえんで、痛みはすべて消えたと言った。彼女は喜びにあふれ、神がしてくださったことのゆえに神をほめたたえはじめた。

神が天幕で何をしておられるのかを人々が知りはじめると、関心も群衆も増していった。神の力が目に見える形で示され、人々は救われ、いやされ、バプテスマを受けた。聖徒たちの中には、集会に出るために、四十マイルも離れたコロラド州プエブロから自動車で来た者もいた。神は彼らを大いに祝福してくださった。バプテスマを受けた者もいて、異言で神をあがめはじめた。

この小さな集会に、何人かの著名な人々も出席した。百万長者たちも私たちの中にいて、私たちと共に神を求めた。だれもが、私たちの時間がこれほど限られていることを残念がった。罪人たちは私たちに言った。「まだ去るべきではない。何が起こっているのか、人々がちょうど知りはじめたところだ。とどまれば、間もなく天幕に人が入りきらなくなる」そのとおりだと私たちも感じたが、次の集会のために、西部の次の働きの場へ移らなければならなかった。

この小さな町に、多くの本が広まった。私たちが去る日、私の働き人のひとりが、靴を直してもらおうと小さな靴屋に入った。入るとすぐ、店の主人が彼に言った。「あの天幕では、すばらしい集会をやっていますね」答えは、「はい、そうです」だった。すると主人は言った。「先日の夜、あなたがたの本を一冊手に入れましてね。ほら、ここに開いて置いてあります。もう半分まで読みました。いやあ、神の力がこんなふうに目に見える形で示されるとは、すばらしいものです。これこそ、私たちみんなが持つべきものだと思います。家内は長老派で、とてもの静かです。この聖霊のバプテスマこそ、私たちふたりに必要なものだとわかっています」間もなく、ほとんど同じ思いを心に抱いた人々が、ほかにも店に入って来た。「私たちにも、もっと神が必要です。あなたがた、私たちのために祈ってください」

プエブロの聖徒たちが祝福される

コロラド州プエブロから来た聖徒たちは、せめて数日の集会を約束するまで、私たちを放してくれなかった。自動車でプエブロまで連れて行くから一セントもかからない、プエブロはロサンゼルスへの途中にある、と彼らは言った。断ることはほとんどできないように思われた。私たちは約束し、美しい田園を眺めながら、彼らの町まで快い旅をした。もっとも、私の体にはたいへんこたえた。

尊い聖徒たちとのここでの短い滞在を、神は大いに祝福してくださった。力が大いに下った。もしこの地にしばらくとどまれたなら、リバイバルが起こっただろうと私は感じた。すばらしいいやしもいくつか起こった。神が彼らの牧師と、親切にも私たちを家に迎えて世話をしてくれた愛する家族とを、大いに祝福してくださるように。

コロラドスプリングズとプエブロの聖徒たちは、どちらも、本格的な伝道集会のために私たちを再び招いている。神がすみやかに道を開いてくださり、彼らが心の願いをかなえられるよう、私は望み、祈っている。

オクラホマ州ユーフォーラのA・E・レイフォード兄弟は、一九一六年四月一日付けでこう書いて来た。「死にかけていた人々がいやしを受けにそこへ来て、いやされ、喜びながら帰って行くのを見ました。あなたのことは決して忘れません」この愛する兄弟は、全身全霊で神のために生きている。病人が運び込まれては歩いて出て行く光景を見て、彼は深い感銘を受けたのである。

第五十七章　カリフォルニア州ロサンゼルスでの大会（その一）

二か月のあいだ再び戻る　ふたりの御使がその地を訪れる

いくつかのすばらしいいやし

ロサンゼルスの世界野営集会を去ったときから、私はこう感じていた。主が再び私をお呼びになるだろう、あの町での私の働きはまだ終わっていない、と。去ったときから、州の至る所から戻って来てほしいという招きを受けた。ついに、愛するG・ガー兄弟と多くの聖徒たちの切実な招きを受け、それが主の御心であると確信して、私はその招きに応じた。

彼らは大きなガレージを借りた。手に入る最も大きな建物で、二千人ほどが座れた。十月一日が開会の日と決められた。八か月前、多くの人が私の死の床だと思っていた床から、主が奇跡の力によって私を起こしてくださった。そのとき私たちは、フロリダ州タンパへの長い旅に出た。それ以来、私たちは休みなく懸命に働いてきた。その八か月のあいだに、私たちは六つの州で大会を開いた。集会は一度に二週間から六週間続いた。カリフォルニアへの長い旅に出たとき、私はひどく疲れていた。しかし主は私を支えてくださり、ロサンゼルスでのひと月のあいだ、昼も夜も無事に守ってくださった。私たちには多くの困難と試練があり、働きを大いに妨げるさまざまなことと戦わなければならなかった。そのため、主は思いのままにお働きになれなかった。栄光の雲はいつも人々の上にあった。しかし、主が力強くお現れになろうとしておられたときに、だれかが邪魔をして、雲が幕屋から去ってしまうことが何度もあった。ああ、なぜこれほど多くの聖徒たちが邪魔をし、神の箱を支えようとするのだろうか。そうすれば、自分の魂と生活にすみやかな死か不毛を招くことを、知っているはずなのに。御霊が悲しまれるのである。だから主の臨在がほとんど感じられず、見られないのであり、魂の救いに大きな実りがないのもそのためである。そのため神は、聖霊のバプテスマにおいて驚くべき働きの力をもってお現れになることがおできにならない。伴うしるしによって聖徒たちに証印を押すことも、おできにならないのである。

多くの牧師が集う

ほかの州の至る所から、またカリフォルニアの各地から、多くの聖徒たちが来た。最も名の知られた牧師、伝道者、働き人たちの多くも出席した。クリスチャン・アライアンスのエルドリッジ兄弟夫妻は聖霊のバプテスマを受け、御霊が語らせるままに「他国の言葉」で語った。ふたりは愛すべき聖徒で、神の前にも人々の前にも力がある。愛する姉妹は、数年前にインディアナ州インディアナポリスで奇跡的にいやされていた。エルドリッジ兄弟が私の夫を自宅に連れて行ったときのことである。私たちが手を置いて祈ると、数日後、兄弟は姉妹を私たちの天幕集会に連れて来た。姉妹は元気そうで、若返って見え、話をし、主をほめたたえた。そして、世界じゅうで人々が自分のために祈ってくれていたと言った。主をほめたたえよ。私は、再びふたりに会い、ふたりがこれほど元気で、神の栄光のために熱心であるのを見て、うれしかった。ふたりは集会の大きな助けになった。愛するアーギュー兄弟は、説教壇で力ある人である。彼は、ロサンゼルスでの大いなる働きを励まし、助けるために多くのことをした。ブラック兄弟とコリンズ兄弟、またガー兄弟とほかの多くの人々も、働きをりっぱに支え、大きな助けになった。彼らの愛の労苦は、永遠が明らかにするだろう。来る日も来る日も、大海のような顔の群れを見渡すのは美しい光景だった。その多くが神の栄光に輝いていた。力の波が何度も私たちの上に押し寄せ、ついに会衆全体が揺り動かされた。あがなわれた者たちの叫びが、海のとどろきのように上った。笑う者もいれば、泣く者も多かった。回心する者もいれば、立ち返る者も多かった。席に着いたままいやされ、御霊のバプテスマを受ける者もいた。主は彼ら

に、これが男の力でも女の力でもなく、主の力であることを証明しておられたのである。天の音楽と合唱は、ただただ栄光に満ちていた。まるで天の御使たちが下って来て、地上の聖徒たちに加わったかのようだった。目に見えない楽器の音が、聖徒にも罪人にもしばしば聞こえた。それは黙示録を書いたヨハネが見聞きしたものであった。待ち望む花嫁が、「天の合唱」の歌を歌っていたのである。ハレルヤ。その歌は御座に届き、とどろく雷のように、また海のとどろきのように響いた。歌はこう言っていた。「わたしたちは喜び楽しもう。小羊の婚姻の時が来ようとしており、花嫁はその用意をしているからである」（黙示録一九・六〜七）。

ときには、会堂が主の臨在の栄光に満たされて、私たちは携え上げられてしまい、地上にとどまれないのではないかと感じるほどだった。預言者の言葉は、なんと真実なのだろう。預言者は、この終わりの時について語っている。それは、私たちの主キリストが、ご自分の民と共にこれほど臨在してくださる時である。また、私たちが、シオンにいます万軍の主から与えられた「しるしと不思議」となる時である（イザヤ八・一八）。

自動車にひかれた人

多くの人が救われ、立ち返り、神に満たされ、御霊のバプテスマを受けた。あらゆる病や疾患がいやされた。足の不自由な人は歩き、耳の聞こえない人は聞こえるようになり、口のきけない人は語った。あらゆる種類の悪霊が追い出された。死にかけていると言われていた人々の中にも、起き上がって歩いた者がいた。自動車にひかれた男が運び込まれた。彼は全身に傷を負い、打ち身だらけだった。人々は、彼が死んでしまったと思った。何人かの兄弟たちが私と共に、彼のいる事務室に入った。どう見ても望みのない状態だった。しかし私たちは人々に、たとえ彼が死んでいても神は彼をよみがえらせることがおできになる、と言った。ああ、主をほめたたえよ。主にとって難しすぎることは何もない。間もなく私たちは、いのちのしるしを見た。私たちは勝利を叫んだ。夜の集いが終わる前に、彼は少し手を貸してもらって、歩いて集会に入って来ることができた。事故を見ていたかたくなな罪人たちも、神が私たちの祈りを通してこの人のいのちを救われたのだと納得した。ほかのすべての大会や集会と同じように、神が成し遂げられたことのうち、私たちが伝えられるのはほんの少しだけである。次の証しと報告が、おのずから語っている。

ロサンゼルスでの二つの驚くべきいやし

ガー兄弟夫妻が何人かの人の手を借りて、ひとりの女性を寝床ごと自動車に乗せて連れて来た。彼女は乳がんで死にかけていた。全身がむくみ、足と腕は今にも破裂しそうで、むくみが心臓の周りを取り巻き、息が詰まりかけていた。人々は彼女が途中で死ぬだろうと思ったが、それが彼女の最後の望みだった。においがあまりにひどいので、人々は彼女を群衆から離して、会館の後ろに置いておかなければならなかった。がんは口を開けて肉をむしばみ、ひどいうみが出ていた。私は気分が悪くなり、彼女を見て気を失いそうになった。彼女のために祈るのは、死人をよみがえらせてくださいと神に祈るのと同じだ、と私は言った。しかし主は、彼女に手を置いてこう言う信仰と力を私に与えてくださった。「主にとって難しすぎることは何もありません。たとえあなたが死んでいても、主はあなたをよみがえらせることがおできになります。これまでうまくいかなかったことは、すべて忘れてください（人々は国じゅうで彼女のために祈ってきたのである）。私たちは、この死に至るがんを、そのもたらしたものすべてと共にしかりつけます。主は今すぐあなたをいやしてくださいます」

私たちは悪霊どもに立ち向かった。すると、昔イエスがお命じになったときのように、悪霊どもは逃げ去った。主をほめたたえよ。悪霊どもは出て行かなければならなかったが、出て行くときに彼女を殺そうとした。しかし、新しいいのちが彼女の内にみなぎり、苦しみはすべて去った。彼女は楽に息ができるようになり、ひどいうみは引いていき、むくみも引いた。彼女は救い出されたことのゆえに神をほめたたえながら帰って行った。この変わりようを見た人々はみな、畏れに打たれて立ちつくした。多くの人が涙を流し、あるいは主をほめたたえた。

数日のうちに彼女は外を歩き回るようになり、間もなく教会に通いはじめた。そして、その姿と証しによって、神が大いなる奇跡をなさったことを示した。

ひどい水腫がいやされる

カリフォルニア州パサデナから、ひとりの女性が水腫の末期の状態で連れて来られた。彼女は何度も手術を受けて、大量の水を抜いてもらっていたが、医者たちはもう何もしてやれなかった。全身がむくみ、頭から足まで水のたまった袋ができていた。私たちが祈ると、いやしの力が彼女の内にみなぎった。水が皮膚から、また腎臓と膀胱から流れ出しはじめたので、人々は彼女を壇から教会の隅に移した。私はその隅にいる彼女のところへ行った。彼女は水に浸されたかのようにずぶぬれだった。私が、よくくるんであげるようにと言うと、人々は彼女を毛布でくるんで家に運んだ。しばらくして彼女は戻って来て、神が自分にどんなに大きなことをしてくださったかを語った。それはだれの目にも明らかだった。

「どうか、すべての人が、人の子らに対する主のくすしきいつくしみのゆえに、主をほめたたえるように」（詩篇一〇七・八）。

ガー兄弟の短い言葉

リバイバルは十月三日に、カリフォルニア州ロサンゼルス、サウスメイン通り一三一五番地で始まった。それは十一月いっぱい続いており、人々は熱心な関心を示している。多くの見知らぬ人々が来て、宣べ伝えられるみことばを聞くうちに罪を示され、主に立ち返った。エター姉妹は病人や苦しむ人々のために祈る力を授けられ、その結果は驚くべき、栄光に満ちたものだった。腫瘍、がん、熱病、足や耳や目の不自由など、敵がもたらした多くのものが、『信仰による祈』に屈した（ヤコブ五・一五）。その結果は、まことに信仰を奮い立たせるものである。祈ってもらったひとりの姉妹は、八百グラムほどの重さがあり、八本の根を持つ腫瘍から解放された。集会で起こったと私が知っていることは、ほかにもたくさん語ることができる。しかし、紙面が足りないので、これ以上は述べない。

聖徒たちは幻も見ている。ローマでカトリックの司祭になるための教育を受けたひとりの青年が、バプテスマを受けた。すると主は御使の一団を遣わされ、御使たちは彼の部屋を訪れた。彼がその話をすると、会衆は電気に打たれたようになった。それも幻ではなく、現実であった。彼はすっかり目を覚ましていて、そばにいた友人を起こそうとしたが、御使がそうしないようにと言ったのである。それから御使は、ヨーロッパの戦争のことと、なぜそれが起こったのかを彼に告げて言った。「神は平和とあわれみの福音によってヨーロッパに語ってこられたが、彼らは何年もそれを拒んできた」そして今、神は大砲の口によって彼らに語っておられる。間もなく神は、大砲によって合衆国にも語られる。合衆国も福音を拒んできたからである、と御使は告げた。集会では、御使たちの幻や、「白い鳩」が舞うのが見られた。それを見た人々は、こうした現れに畏れを覚えた。

イエスがすぐに来られるというメッセージが、数多く与えられた。聖徒たちはおおむね、主の来臨が遠くないことを確信している。私たちの主、救い主、大祭司、来たるべき王であるイエスの尊い御名にあって。

（署名）A・G・ガー
カリフォルニア州ロサンゼルス、ノースフラワー通り一二六番地

宣教師の証し

（ここには、南アメリカへの宣教師トマス・B・オライリーの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

いつまでも続くいやし

（ここには、オーガスト・D・ファイクの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

まことに驚くべき例

（ここには、ガートルード・ベリー嬢の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ふたりの御使の訪れ

（ここには、グレース・コクラン・トムソンの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第五十七章　カリフォルニア州ロサンゼルスでの大会（その二）

ふたりの御使の訪れがもたらしたもの

記事を読んで六人が救われ、何人かがバプテスマを受ける

『ペンテコスタル・ヘラルド』誌の十一月号で、私たちは御使の訪れについて伝えた。それは一九一五年十月、ロサンゼルスでのウッドワース・エター集会のあいだに起こったことである。エドワード・リロイ・ワイリーという人が、その話を語った。

次の証しは、その記事を読んだことから直接生まれたものである。

（ここには、ジュリア・ヴォイェヴツキ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（『ペンテコスタル・ヘラルド』誌から転載）

編集者は、上に述べた「御使の訪れ」の話を裏づける証しの手紙を何通か受け取った。その話を再び載せてほしいという願いも寄せられている。

石のような腫瘍がいやされる

カリフォルニア州ロサンゼルス、一九一五年十月二十二日　ローザ・ロペス夫人は、スペイン語で説教するペンテコステ派の伝道者の妻である。彼女は七年間、石のような腫瘍を患っていた。この四年間はずっと悪くなっていて、十月四日から九日までは激しく苦しみ、いのちが危ぶまれるほどだった。夫は、妻は死ぬに違いないと思った。彼女は水さえ胃に収めておくことができず、絶えず吐いた。

当局は彼に、手術を受けさせるため妻を郡立病院に連れて行くよう求めた。しかし彼が反対すると、十月九日、ヨーカム博士の信仰の家に連れて行くことを許した。ところが主がロペス兄弟に語りかけられ、エター姉妹の集会に連れて行くようにとお告げになった。そこで彼は電話をかけ、妻が集会に行けるように祈ってほしいと姉妹に頼んだ。

ロペス兄弟は十月九日の土曜日、妻を集会に連れて来た。エター姉妹は午後八時半に彼女のために祈った。姉妹は悪魔に、彼女をつかんでいる手を放すよう命じ、「私は御霊の剣を取り、主の名によって、この悪い腫瘍を切り離す」と言った。すると、外科医のメスを使ったかのように、腫瘍はたちまち切り離された。ふたりとも力に満たされて家に帰り、はっきりしたしるしを求めて神を待ち望んだ。そして日曜日の午前三時半、石のような腫瘍が根も枝もすっかり出て行った。神に栄光あれ。しかも彼女は、回復のために寝ている必要もなかった。外科医が手術をしていたなら、そうしなければならなかっただろう。私たちには、驚くべき医者であるお方がおられる。

ロペス兄弟は、妻の病状についての問い合わせに喜んで答える。彼の心は神への賛美に満ちている。彼にはお金がなく、イエスのほかに望みがなかったが、イエスは彼らを見捨てられなかったのである。

彼は言う。「神に感謝します。神は、ご自分の御子、私たちの愛する救い主イエス・キリストの血によって、いつも私たちに勝利を与えてくださいます」

彼によれば、神は彼に詩篇三四・一～四を与えてくださり、まことに彼をすべての悩みから救い出してくださったという。

彼の住所は、カリフォルニア州ロサンゼルス、ノースヴィニェス通り一三〇番地、アブンディオ・L・ロペス。

幻といやしの証し

（ここには、E・E・パーカー夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ホノルルから来たウィリアムズ氏

カリフォルニア州モンロヴィアのカール・L・ウィリアムズ氏は、手術の後、一年間病気だった。彼はこの前の五月、ホノルルに住んでいたときに、医者たちがデング熱と呼ぶ熱帯の病気にかかった。

彼が回復した後、妻は健康を損ねたため、彼のもとを離れてカリフォルニアに帰らなければならなかった。妻は着いて間もなく、ウィリアムズ氏がホノルルで重い病気にかかっているという知らせを受けた。ふたりの医者は、それを結核性腹膜炎と診断していた。

医者たちは腹部のエックス線写真を三枚撮り、胃の後ろに大きなしこりを見つけた。医者は全部で七人いたが、その何人かは、それががん性の肉腫で、まったく治る見込みがないという意見だった。彼はみるみる悪くなった。

妻は、まだ望みがあるという海底電信を二通受け取った。その後、三通目が来た。『しこり動かず。医師らは乗船不可と言う。来られたし』

二日後、妻はサンフランシスコから船で発ち、十月二十六日にホノルルに着いた。出発の前に、彼女はエター姉妹に手紙を書いて祈りを頼んだ。そして、夫をホノルルから連れ帰るまでロサンゼルスにとどまっていてほしいと願った。夫を連れ帰って祈ってもらえば、いやされるという望みを持っていたのである。エター夫人はすぐに、彼がカリフォルニアに帰る力を与えられるようにと祈りはじめた。

ウィリアムズ夫人が着くと、夫は病院にいて、試験開腹の手術を受けた後だった。その結果、腹膜の癒着があまりに多く、しこりを取り除くことはとうてい無理だとわかった。医者のうちふたりは、まだ血清療法が効くかもしれないと言った。しかし大多数は、がんなら彼のいのちにはまったく望みがないと言った。そこで医者たちは彼を九日間、病院の簡易寝台に寝かせたままにし、ひとりとして彼を診ようともしなかった。

それから妻が来て、彼を病院から連れ出し、宣教師の友人H・J・ジョンズ夫妻の家に移した。夫妻は親切にも家を提供し、彼が楽に過ごせるよう、できる限りのことをしてくれた。妻はそこで三週間あまり彼を看病した。その後、彼はカリフォルニアに向けて出発できるようになった。祈りが答えられて、彼は船旅にかなりよく耐え、少しも船酔いしなかった。しかし旅の最後の日、サンフランシスコからロサンゼルスへ向かう途中で、敵が彼のいのちを奪おうと激しく戦った。

背中の痛みは耐えがたく、食べ物をかむことも飲み込むことも、つばを吐くことさえも、激しい痛みなしにはできなかった。次の日（十一月二十五日の感謝祭の日）、ふたりはエター夫人の午後の集会に来ることができた。ウィリアムズ氏は痛みがあまりにひどかったので、集いが終わるまで横になっていなければならなかった。それから、やっと壇の上の椅子に座ることができ、エター夫人が彼のために祈った。

間もなく、彼は神の御霊の力の下に倒れ伏した。しばらくすると、だれの助けも借りずに跳び起き、背筋をまっすぐに伸ばして立つことができた。それまでは、体を二つに折り曲げて歩いていたのである。彼は壇の端から端まで歩き、全身を丈夫にされたことを喜んで、跳びはね、神をほめたたえた。それから、集まった群衆に澄んだ声で証しをした。神の力が体のすみずみをどんなに驚くべきしかたで生かしたかを、人々に語ったのである。さらに少したつと、彼は生のりんごを楽々と食べていた。飲み込むのに少しも苦労せず、一口ごとに主をほめたたえていた。

ホノルルから来ていやされたウィリアムズ氏は、数日後に再び来た。彼は妻のそばを歩き、妻を壇の上に助け上げて、自分が救い出されたことについてすばらしい証しをした。また、実際にやってみせて、自分がどれほど完全に救い出されたかを人々に示した。彼を知らない人なら、自分の目をほとんど信じられなかっただろう。妻もすばらしい証しをし、神がついにどのように自分たちを救い出してくださったかを語った。また、神の僕に手を置かれて、自分がどのようにいやされたかも語った。

脊髄癆

（ここには、S・E・ロジャーズ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

いやしの力がそこにあった

六十年間、自分の足で歩いたことのない女性がいた。脚が縮み上がってしまったので、医者たちは切断したがっていた。これは、ごく幼いころにかかった斑点熱のためだった。彼女のために祈りがささげられると、彼女は行ったり来たり歩き、手を上げて、いやされたことのゆえに神をほめたたえた。

ひとりの少年が集会に連れて来られた。しばらく前からまったく目が見えなかった。祈ってもらった後、家に帰る途中で、人々は彼の目を試した。『Ford』とつづってある看板が読めるかと聞かれると、彼は「F-e-r-d」とつづった。違うと言われると、すぐにもう一度見て、「Ford」と言った。その『o』は『e』によく似ていたのである。

母と息子がいやされる

（ここには、E・P・ライマン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

私は、神がどんなに驚くべきしかたで私をいやしてくださったかを証ししたいと思います。私はおよそ九十年前、ヴァージニア州リッチモンドで、ベッツィー・キンケードの奴隷として生まれました。ウィリアム・ダンズビーに売られ、ロサンゼルスに三十年住んでいます。七年ほど前、私は自転車に乗った男にひかれ、病院に運ばれました。肩がつぶれて肺の上に押し下げられ、腕は折れ、七年のあいだ苦しみ続けました。医者は、腎臓も悪いと言いました。私はたいへん苦しみました。腕を使うことができませんでした。二週間前、私はエター姉妹の集会に行きました。姉妹が私に手を置いて祈ってくださると、神は驚くべきしかたで私をいやしてくださり、まったく健やかにしてくださいました。私は神をほめたたえ、感謝しています。

（署名）マリンダ・ダンズビー

福音の牧師

（ここには、W・J・アダムズの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

いやしの証し

カリフォルニア州ロサンゼルスのウッドワース・エター集会で

（ここには、S・E・ビューグル夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ロサンゼルスの集会のあいだに主がどのように働かれたかについて、私たちはかなり多くの証しと報告を受け取った。紙面が足りないので、それらを要約せざるをえない。次の病から、ひとり以上の人がいやされた。

石のような腫瘍、肺病、てんかんの発作、がん、耳が聞こえないこと、足首の骨折、十五年間患っていた目の病、腎臓の病、脊椎の病、脳の病、焼けるような熱、肺の痛み、虫垂炎、慢性カタル、胃の病、結核。

最新の報告はスモック姉妹からのものである。編集者は姉妹と個人的に知り合いである。姉妹によれば、何百人もの人がいやされたが、その記録は取られていないという。

『わがたましいよ、主をほめよ。わがうちなるすべてのものよ、その聖なるみ名をほめよ。わがたましいよ、主をほめよ。そのすべてのめぐみを心にとめよ。主はあなたのすべての不義をゆるし、あなたのすべての病をいやす』（詩篇一〇三・一～三）（編者）

（ここには、ネリス夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

がんがいやされる

私は右の腰にがんがありました。とても大きく、ひどく痛むので、その側を下にして横になることができませんでした。四人の医者にかかり、それから病院に行きました。そこで医者たちはがんだと診断し、焼き取るつもりでした。私は七十七歳なので、それには耐えられないとわかっていました。それで娘婿が私を伝道所に連れて来てくれ、そこでエター夫人が私のために祈ってくださいました。痛みはすっかり去り、熱も引きました。私は完全にいやされ、以前より十歳若くなったように感じます。

（署名）マーガレット・ダイアー夫人
カリフォルニア州ロサンゼルス、ロサンゼルス通り五二二六番地

くも状のがんと慢性カタルがいやされる

（ここには、シドニー・ビューイック夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

心臓病がいやされる

（ここには、ウィリアム・ウォーンホルツ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

結核がいやされる

（ここには、A・B・ホーガン夫人の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

シカゴの『ペンテコスタル・ヘラルド』誌の編集者への報告

神はロサンゼルスで働いておられる

（ここには、F・M・ラングドンの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

大いなる日が来る

大いなる日が来る、大いなる日が来る
やがて大いなる日が来る
聖徒と罪人が右と左に分けられる日が
その日を迎える備えはできているか
（おりかえし）
備えはできているか
備えはできているか
さばきの日への備えはできているか
備えはできているか
さばきの日への備えはできているか
輝かしい日が来る、輝かしい日が来る
やがて輝かしい日が来る
しかしその輝きは、主を愛する者にだけ臨む
その日を迎える備えはできているか
悲しい日が来る、悲しい日が来る
やがて悲しい日が来る
罪人が「離れ去れ、わたしはあなたがたを知らない」との宣告を聞く日が
その日を迎える備えはできているか

第五十八章　カリフォルニア州サンディエゴでのつらくも祝福された日々

パナマ博覧会のさなかに

ロサンゼルスで集会を開いているあいだ、州の至る所から多くの招きを受けた。しかし、サンディエゴに行くよう勧めてくれる人はひとりもいなかった。人々の話では、あの町にはお金のある人がほとんどいないようだし、難しい所だという。聖徒はわずかしかおらず、しかも奇妙な教理のことでみな分裂している、というのである。

私は言った。「私は、ほかのどこよりもあそこで必要とされていると思います」神は全能であられる。神はいつも私を最も難しい所へお遣わしになる。しかし、私と共に行ってくださらなかったことは一度もなく、いつもお現れになって、私たちを輝かしい勝利へと導いてくださった。私には、こう言われる主の声が聞こえる。「わたしの言葉を宣べ伝えなさい。わたしがあなたと共にいる。そして『しるしと不思議』をもって、わたしの臨在とわたしが認めていることをあかしする」さて、御名をほめたたえよ。励みになるものは何一つなく、私たちは石の壁に突き当たっていた。わずかな聖徒たちは懸命に努力した。神の御霊と力についてほとんど知られていないその地で、主イエスのために勝利を得るためなら、彼らは何でもする覚悟だった。

ハーロウ兄弟はできる限りのことをし、りっぱに支えてくれた。そして私が去った後も働きを続け、よい成果を上げた。

最初の集いから、主は救いといやしのために、そこにおられた。

各地から聖徒たちや牧師たちが集まって来ると、みな神の内に深く入りはじめた。神は多くの力あるしるしをもってお現れになった。新しい言葉、すなわち他国の言葉による、きわめて力強いメッセージも与えられた。その多くは、シナイ山でラッパの音がいよいよ高く強く響き、宿営の民が震えたときのようだった。民はそれがエホバの声であることを知っていた。

同じように、サンディエゴの集会でも、人々は、主が土くれの唇を通して語っておられることを知った。主は警告なさり、預言なさり、注がれつつある神のさばきを示された。また、間もなく来ようとしている、さらに恐ろしい災いと、すでに戸口まで来ているいくつかの災いをも示された。

これらのメッセージは、筋の通った、よどみない英語で解き明かされた。そのため、どの集会にも神への畏れが臨んだ。

神はまた、しるしによって目に見える形でお示しになった。イエスがすぐに来られることを、みことばと御霊によって示されたのである。思慮の浅いおとめたちの運命は、あまりにもはっきりと示された。私たちは、彼女たちが締め出されるのがほとんど見えるような気がした。「もう遅い。わたしはあなたがたを知らない」と言われる神の声が、聞こえるような気がしたのである。

人々は、戸口まで来ている大嵐と洪水を示された。そして、ダムの決壊によって起こった恐ろしい苦しみと、人のいのちと財産の損失を示された。

私たちが去った日に、嵐が町を襲った。私たちは列車にたどり着くのもやっとだった。

罪を示す霊が四方八方に広がった。多くの人が救われ、さらに多くの人が「救われるために、何をすべきでしょうか」と尋ねていた。神に満たされ、聖霊のバプテスマを受けた者もいた。

多くの教会員が言っていた。「神があなたがたと共に働いておられ、ご自分の民を顧みておられることを、私たちは確信しました。私たちは長いあいだ神から遠く離れ、この尊い祝福に及ばないところにいました。聖霊のバプテスマを受けるまで、私たちは決して求めるのをやめません」

主は多くの病をお治しになり、いやしを行われた。それを見た人々はみな言った。「目の見えない者の目を開き、足の不自由な者を寝床から起き上がらせて歩かせ、松葉杖を投げ捨てさせることは、神のほかにだれにもできない」

人々が神の大いなる働きを見ていると、主の御霊が何度も何度もその上を吹き渡られた。キリストの時代のように、何十人もの人が壇に駆け寄った。だれもが、池に最初に入ろうとしていたのである。

天の合唱と聖なる踊りは、あがなわれた者たちの叫びと共に、天をとどろかせた。

いつものように、あらゆる階層の人々が、集会を閉じないでほしいと私たちに懇願した。

去ってからも、働きについてよい知らせを受けている。働きは今も続いている。

そして戸がしめられた（マタイ二五・一〇）

（ここには、会衆の長老W・F・ハロウの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

来たるべきリバイバルの幻が与えられる

（ここには、ローザ・ウィンストン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

カリフォルニア州サンディエゴ

各地の聖徒のみなさんへ、ごあいさつ申し上げます。

主がどのように祈りに答えておられるかについて、私の証しをしたいと思います。まず、神に栄光を帰したいと思います。神は私を救ってくださり、いやしてくださいました。また、聖書に記されたしるしを伴って、聖霊と火のバプテスマを授けてくださいました。私は五年間、不治といわれる病、すなわち進行性のまひに苦しんでいました。五年前には歩くことができませんでした。しかし、少し前に信仰による祈りがささげられ、その祈りによって、それ以来、主のために歩いています。御名をほめたたえます。

私たちの集会の勝利をお知らせしたいと思います。集会は愛するウッドワース・エター姉妹に導かれ、今月の一日に閉じました。しかし、その勝利は迫害を通して得なければなりませんでした。聖徒たちが礼拝するために集まると、悪魔もやって来て、私たちの中に烏の声が聞こえたのです。しかし、神の僕は耳を聖霊の声に合わせていたので、すぐに偽物を見抜き、イエスの名によってしかりつけました。すると間もなく、鳩の声が驚くべきしかたで響き、敵の現れをすべて黙らせました。

最も驚くべき現れは、十年間脊髄癆を患っていたひとりの兄弟のことでした。彼は痛みを抑えるために、モルヒネとコカインを一日に五～七グレイン（〇・三～〇・五グラムほど）使っていました。医者たちは、やめなければそれで死ぬし、やめても死ぬだろう、と言うまでになっていました。どちらにしても死ぬほかはないようでした。そこで彼は集会に来ました。入って来たとき、彼はまるで死人のようでした。エター姉妹がイエスの名によって彼に手を置き、麻薬の悪霊に出て行くよう命じました。すると悪霊は彼を床に投げ倒し、蛇のように暴れました。ある人々は彼が死にかけていると思いました。そして、彼は死んだように見えました。しかし、復活の力が彼を打つと、彼は床から起き上がり、壇の上を行ったり来たり歩いて、叫び、神をほめたたえました。すっかり生き生きとしていました。麻薬への欲求は取り去られ、彼の体には今も勝利があります。四週間で八キロあまり体重が増え、人の知恵に反して、日ごとに増えています。栄光あれ。ああ、私たちには驚くべき神がおられます。神はご自分の子供たちに、驚くべきしかたでご自身を現しておられます。サンディエゴのために祈ってください。主が思いのままにお働きになって、多くの尊い魂が救われますように。

主に仕える者として。

（署名）B兄弟

ブライト病がいやされる

（ここには、D・B・ハリソン夫人の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

サンディエゴの集会の報告

（ここには、P・F・クルーズの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第五十九章　一九一六年、サンフランシスコでの戦い

リバイバルが広がる。教会から大きな劇場へ

サンディエゴから、私たちはサンフランシスコへ行った。クレイグ兄弟が私たちを迎え、自分の信仰の家へ連れて行ってくれた。そこで私たちは、わが家にいるようにくつろがせてもらった。私たちが快く過ごせるよう、あらゆることがなされた。多くの聖徒たちがその家に来て、私たちは祝福された交わりを持った。神の甘い平安が、いつも家じゅうに満ちていた。

集会は力をもって始まった。聖徒たちは多く祈っていた。そして、戦いを勝利まで押し進めるために、あらゆる犠牲を払った。主はそこにおられ、目に見えないご臨在の目に見えるしるしによって、みことばを確かなものとしてくださった。人々はやって来て、聞き、見て、驚いた。日ごとに畏れと罪の自覚が臨み、人々は「まことに、神が私たちのうちにおられる」と言わずにはいられなかった。祭壇は毎日人でいっぱいだった。人々は至る所から来て、救われ、いやされ、神に満たされ、聖霊のバプテスマを受けた。その友人たちは、どれほどの変化が起こったかを見ると、多くがすぐに集会に通いはじめた。関心は高まっていった。ユダヤ人を含め、あらゆる階層の人々が救われた。ある日の午後、集会を開いていた劇場に入ると、牧師が戸口で私たちを迎えた。牧師の話では、人々がひとりの女性を自動車で連れて来たという。彼らは手もとに残った最後の六ドルを、彼女を運ぶために運転手に払った。運転手は集会まで待ってはくれなかった。それで、病気の女性を入口にいちばん近い通路に置いたのだという。痛ましい光景だった。その女性には小さな子供がふたりいた。そして四年間、ひとりで歩いたことがなかった。多くの病に苦しんでいた。夫もひどい病気を患っており、気落ちしていた。彼女は、これが最後の機会だと知っていた。それで、私たちが愛に満ちた救い主を指し示すと、信仰を持った。私たちが信仰による祈りをささげて手を置くと、汚れた霊どもは彼女から出て行った。いやしの力が臨み、彼女の全身を貫き、包んだ。彼女は自分がいやされたことを知った。彼女は立ち上がり、歩いて、叫んだ。「神に栄光あれ！」夫も主をほめたたえはじめ、彼もまたいやされた。彼女は子供を抱き上げ、歩いて自動車まで出て行った。私が壇へ進んで行くと、人々が体の自由のきかないひとりの女性を運んで来るのが見えた。彼女は不治の病人のための病院から来ていた。七年間、立つことも歩くこともできなかった。私は壇の上から、彼女とほかの何人かの足の不自由な人たちを見下ろした。

主は私に、彼女の病をしかりつけ、起きて歩くように命じなさい、彼女はいやされたのだ、と言われた。聖霊の力が私に臨み、私はイエスの名によって、起きて歩くよう彼女に命じた。彼女は私を見た。それから体を動かそうとしはじめ、やがて立ち上がった。私は彼女に、歩いて出て来て、あの階段を上って来るように言った。それから私は壇から三段ほど降りて、彼女の手を取った。すると彼女は、少女のように壇まで上って来て、壇の上を歩いた。彼女を連れて来た人々は、初めは彼女が死ぬのではないかと思っておびえていた。しかし、本当にいやされたのだとわかると、喜びのあまり泣いた。そして、彼女がどれほど体の自由がきかなかったかを話した。七年間、寝床で寝返りを打つこともできなかったのである。

十年間足が不自由だった別の婦人が、泣きだして言った。「まあ、あの人が歩けるのなら、私だって歩けます」彼女は立ち上がり、行ったり来たり歩きはじめた。二十分もたたないうちに、体の自由のきかない七人の足の不自由な人たちが通路を歩き、階段を上って壇まで来た。これらの奇跡を言い表す言葉が見つからない。私は彼らに話しかけたことも、手を置いたこともなかった。主は、力がご自分から出ていること、救いといやしのわざをなさっているのはご自分だけであることを、証明しておられたのである。会衆は心を動かされ、会場の至る所で泣く声と叫ぶ声が上がった。会衆の中からひとりの男が立ち上がり、証しをしたい

と言った。三年前、私がサンノゼで集会を開いていたとき、彼はやって来たが、何が行われているのかを知らなかった。それでも、中に入らずにはいられなかった。彼はばくち打ちで大酒飲みで、あらゆる点で悪い人間だった。酒のために錯乱を起こす寸前で、医者からは、次に発作が起きたら死ぬだろうと言われていた。彼はみじめで、自らいのちを絶とうと思うほどになっていた。ひどい事故にも遭っていた。鼻は折れ、片目は腫れて頬の上に飛び出しそうになっていた。頭と顔には包帯が巻かれていた。望みのない様子に見えた。なぜ町へ出かけたのか、彼にはわからなかった。外を歩いていたが、集会に行くつもりはなかった。何かが彼を中へ引き入れたのである。彼は立ち上がって、自分にもあわれみや助けがあるのかと尋ね、神に身をゆだねた。間もなく彼は救われ、痛みはすべて去った。視力は完全に戻り、鼻もいやされて、小さな傷跡が一つ残っただけだった。彼はあらゆる悪い習慣から解き放たれ、救われて、神の力によって守られた。そして主の働きで大きな実を結んだ。彼の証しは信じられ、多くの人に少なからぬ影響を与えた。彼は大きな助けとなった。主をほめたたえよ。

天の合唱はすばらしかった。多くの人が幻を見た。異言による驚くべき言葉と解き明かしが与えられた。ほとんどすべての教会から人々が来た。多くの人が、もっと神を求めなければならないこと、主の来臨がすぐ近くに迫っていることを、強く思い知らされた。多くの人が聖霊のバプテスマを求めた。愛するモンゴメリー兄弟姉妹は、働きの大きな助けとなった。パイパー姉妹と、スミス医師夫妻も加わり、伝道の全期間を通して貴重な助けを与えてくれた。スミス医師夫妻は、二十七年前のリバイバルのあいだずっと、私たちを実にりっぱに支えてくれた人たちである。愛する主が、彼らを長くお守りになり、イエスの旗を高く掲げさせてくださるように。カリフォルニア州サンフランシスコの集会で主が何をなさったかは、永遠だけが明らかにするだろう。

カリフォルニア州サンフランシスコでのウッドワース・エター夫人の集会（一月十三日から二月十三日、またはそれ以後まで）

（『ペンテコスタル・ヘラルド』誌から転載）

天がサンフランシスコに下って来ようとしている。ここは悪名高い邪悪な町である。私たちは心から確信している。神はアメリカのこのソドムをお選びになり、この時代の最も驚くべき奇跡のいくつかを現そうとしておられる。それは、できることなら人々に、イエスが今も生きておられることを納得させ、すべての人に花婿の来臨に備える機会を与えるためである。本日、一月二十日の時点で、大会はたけなわである。シオン・メソジスト監督教会で、毎日二回の集会が開かれている。牧師は、美しく新しい、申し分のない設備の会堂を、昔ながらのペンテコステのリバイバルのために明け渡してくれた。リバイバルは初めから力強く始まった。神は一刻も無駄にできないかのように、最初の集会から御霊を注ぎはじめられ、救いといやしをもたらされた。これまでのどの集会も、この町にとって注目すべきものだった。群衆は着実に増えている。栄光の福音のメッセージを聞き、約束どおりすぐに伴うしるしを見たいと願う人々には、この広い会堂も狭すぎるようになる。そのことが、今やはっきりしている。入って来る人のほとんどすべてが、神のご臨在をありありと感じて畏れに打たれる。座席に座ったままいやされる人々もいる。信仰による祈りがささげられると、いやされると同時に救われる人々もいる。ひとりの婦人は、祈ってもらっている娘のために自分も祈っていたところ、自分自身がいやされた。長い祭壇も、救いといやしとバプテスマを願って神を求める人々には狭すぎる。サンフランシスコは国際的な都市である。天下のほとんどすべての国の人々が、ここに大勢いる。多くの国の人々が、神の最善のものを求めて押し寄せている。スペイン語を話す多くの人々がいやされ、救われている。御霊に満たされた人々もいる。すべての栄光を、私たちの神とそのキリストに。

聖徒たちが、今ここに見られるように甘い一致のうちに住んでいるとき、私たちのキリストにとって難しい病は一つもない。みことばは、はっきりとした音をもって出て行く。グラッド・タイディングズ・アセンブリーで、私たちは、真の完全な福音を示すために『伴うしるし』が必要であることを感じている（マルコ一六・二〇）。読者のひとりひとりが、「キリストと父とが一つであられるように、みなが一つとなるように」と、信じて祈りをささげていただきたい（ヨハネ一七・二一）。そのような人々のために、主の栄光は輝き出るであろう。

（署名）牧師　ロバート・」・クレイグ

サンフランシスコのリバイバルは続く

ブリンカム兄弟と『ペンテコスタル・ヘラルド』誌の読者のみなさんへ

サンフランシスコは、実に大きな霊的覚醒を経験した。長くここに住んでいる人々は、この町がかつて知った最大のリバイバルが、この二か月のあいだに訪れたと言っている。ウッドワース・エター姉妹は、およそ七週間ここにとどまり、精力的に伝道の働きをした。この特別伝道の最後の二週間は、千五百人を収容するナショナル劇場で集会が開かれた。最後の日曜の夜には、ほぼその人数が集会に集まっていたと見積もられた。ほとんどすべての集会で、神の力が際立って下った。真のリバイバルのしるしは、伝道者たちが去った後もリバイバルが続くことである。今回は、ほぼそのとおりになっている。来たるべき王が、すべての敬意と栄光をお受けになるように。それは主のものだからである。私たちが会ったこともない各地の人々が、このリバイバルでいやされたり救われたり、あるいはその両方を受けたりした。集会は盛んに続いている。七百五十人ほどが座れるりっぱな会館が、今、この町のペンテコステの働きのために特別に整えられている。それはフィルモア通りの近く、エリス通り一六三六番地に置かれる。

エター姉妹があと二か月続けることができたなら、主は町全体を揺り動かされただろうと、強く信じられている。姉妹は去ったが、それでも私たちは、神がそうしてくださることを期待している。

御霊の現れは、人々を奮い立たせた。神はたびたびお現れになって、主の来臨が間近であることを厳粛に警告なさった。また、競走のためにかなぐり捨てるべき、人々の生活の中の罪と重荷に、目を向けさせられた。

救われて、伴うしるしと共に聖霊のバプテスマを受けた大勢の人々の記録は、天で記録をつける御使が保管している。

私たちはここで三年半、自分の持ち場に立ってきた。その後に、神がこれほど御霊を注いでくださっているので、私たちの心は感謝と喜びに満ちている。

（署名）牧師　ロバート・」・クレイグ

サンフランシスコ、エリス通り一六三六番地、グラッド・タイディングズ・アセンブリー

油を注がれたハンカチによっていやされる

この集会のあいだに、一枚のハンカチがカナダ（オンタリオ州エイトン）に送られた。そこでは、ひとりの女性が胃の病気で死にかけていた。体力が急速に衰えていたので、薬も医者も、もう彼女のために何もできなかった。神がなさっている働きを聞いて、彼女はハンカチを送ってくれるよう頼み、それに油を注いでもらった。それを体に当てると、間もなくいやしの力を感じた。そしてほどなく、彼女が勝利を得て、起き上がって動き回り、また食べられるようになったという知らせが届いた。

御霊によって病の床から起こされる

もうひとりの姉妹は病気で寝ていた。集会に行けるよう力づけてくださいと神を仰いでいると、御霊が彼女を起こしてくださった。彼女は九ブロックほど走った。集会へ行く途中、通りで病気の男の人を見つけ、いっしょに連れて来た。この人は手術を受けるために病院に入ろうとしていたところだった。耳も聞こえず、脚にはうみの出るひどいただれがあった。神は彼を救ってくださり、いやしてくださった。

夫が夢で妻の回心を知り、後に救われてバプテスマを受ける

私は二月四日、ウッドワース・エターの集会で救われました。そのとき、夫は家で床について眠っていました。私が救いを受けているあいだに、夫は夢を見ました。夢の中で御使が現れ、天の御使たちが喜んでいる、あなたの妻が心を神にささげたからだ、と告げたのです。後で私は夫に電話をかけ、このよい知らせを伝えました。夫は、そのことは全部知っている、御使が教えてくれたのだ、と答えました。次の夜、夫は救われ、バプテスマを受けました。私もバプテスマを受

けました。主はまた、私が生まれてからずっと患っていた慢性の腸の病もいやしてくださいました。一時は二か月以上も便通がなかったことがあります。そのあいだも食欲はありました。祈ってもらうと、私はいやされました。今では元気で幸せです。私たちの家庭は、地上の小さな楽園です。

（署名）カリフォルニア州サンフランシスコ、C・H・E夫人

医師の証言

一九一六年二月、ウッドワース・エター夫人がカリフォルニア州サンフランシスコで開いた集会について。

聖パウロは霊の賜物について、第一コリント一二・九でこう言っている。『またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物』私たちはウッドワース・エター夫人を二十七年前から知っている。私は、この州に登録された正規の資格を持つ医師である。ダブリンのトリニティ・カレッジを卒業し、ダブリンのロタンダ産科病院の免許を受けた。その私が、彼女が手を置いて祈ることによって、さまざまな病がはっきりと奇跡的にいやされたのを、この目で見た。その結果を私は保証する。事実は議論の余地がない。批評家たちはそれを「いかさま、催眠術、心霊術」などと呼ぶかもしれない。しかし私自身は、偏見のないクリスチャンとして、これらの偉業はただ一つの源から出ていると信じる。それは、全能の父なる神、全能の御子、全能の聖霊である。足の不自由な人は歩く。耳の聞こえない人は聞く。口のきけない人は話す。目の見えない人は、生まれつき見えない人でさえ、見えるようになる。このようなことは、この時代の自慢の外科学と医学のまったく外で成し遂げられている。それは聖書の立場から、私たちがすべての名にまさると認める御名によってなされているのである。キリストの時代、人々は「ベルゼブル」と叫んで、キリストの奇跡を悪魔のわざにしようとした。しかしキリストは、サタンは自分で自分に分かれ争うほど愚かではないことを、彼らに示された。私は、頸静脈と頸動脈を圧迫して窒息のおそれのあった巨大な甲状腺腫が、消えていくのを見た。また、七年間寝たきりで、そのあいだ一度も歩いたことのない女性が、集会に運び込まれるのを見た。彼女は、群衆の中で病人用の椅子に横たわっていた。エター夫人からイエスの名によって起きるよう命じられると、彼女は大胆に歩み出た。そして壇への階段を上り、歩きながら神をほめたたえた。また、別の人が私の目の前に運び込まれるのも見た。その人は十四歳のときから重い心臓病と腎臓・膀胱の病に苦しんでいた。心不全のためにひどく衰弱し、ほとんど死に瀕していた。それなのに数分後には完全にいやされ、私たちみなの前を足早に行ったり来たり歩いた。それ以来、ずっとその状態が続いている。しかし、例を重ねる必要はない。何十人、何十人もの人がいやされた。また多くの人が、これらの集会で心ならずも神の力の証人となり、それによって救われた。もしこれが悪魔のしわざなら、サタンはキリスト・イエスにあって新しく造られた者になったに違いない。神は栄光をお受けになり、魂は救われ、病は逃げ去り、聖徒たちは喜んでいる。そしてイエス・キリストは巡回なさってよいわざを行われ、もはや悪魔に押えつけられていない人々を、みないやしておられるからである（使徒一〇・三八）。サタンが押えつけなくなったのは、ひょっとすると、その仕事をほかの者に任せたからなのかもしれない。しかし、友人たちよ、サタンは今もサタンである。サタンは押えつけ、気落ちさせ、イエスにある真理を押えこむ。霊においても、魂においても、体においても、滅ぼす者の手から逃れた人々は幸いである。神をほめたたえよ。神は『わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった』（コロサイ一・一三）。

（署名）G・シドニー・スミス（ダブリン大学トリニティ・カレッジ文学士、医学博士）
カリフォルニア州イーストオークランド、フルートヴェール、東二十七番街三一四五番地
一九一六年二月二十六日

サンフランシスコで働かれる神

これを書いている今、私たちはクレイグ牧師が主宰する冬季大会のさなかにいる。M・B・W・エター夫人が毎日二回集会を開いている。集会はシオン・メソ

ジスト監督教会で開かれ、二月十三日まで続く予定である。これらの集会の祝福を言い表す言葉は、なかなか見つからない。ペンテコステの満ちあふれる力をもって聖霊のバプテスマを受けた神の愛する子供たちが、各地からここに集まっている。礼拝の霊が人々に臨むたびに、神の鳩は彼らを通して天の合唱の美しい調べを歌われる。それは、驚くべき、恍惚とした喜びと賛美を前もって味わわせるものである。主が天から下って来られるときの喜びと賛美である。そのとき主は、待っている者たちを引き上げてくださり、とこしえにご自分と共にいさせてくださる。

エター夫人とアーギュー兄弟から、力強い説教があった。その多くはきわめて厳粛で、主の来臨が近いことと、地に迫っているさばきを示していた。異言による驚くべき言葉と解き明かしもあった。その多くは、神のさばきのさらに大きな嵐が地に襲いかかる前に神に身をゆだねるよう、人々に懇願するものだった。主が近く来られるという預言もあった。全体として、これらの集会は大きな力と甘美さに満ちていた。私たちは、祈りに答えてくださった神をほめたたえる。七十一歳のエター夫人が、これほど神のいのちに満たされ、絶え間ない重い務めの中でこれほど支えられているのを見るのは、驚くべきことである。その務めは、年々ほとんど休みなく（四十年間）続いてきたのである。

（署名）C・J・モンゴメリー夫人

脊椎の病がいやされる

サンフランシスコのクロッカー老人ホームにいる七十歳を過ぎたメアリー・マリー夫人が、ある日、集会に運ばれて来た。重い脊椎の病のほかにも、あらゆる病気を抱えているようだった。この七年間、彼女はこのような状態だった。どちら側を下にしても横になれなかった。昼も夜も寝床の上で体を支えてもらわなければならず、ひどく苦しんでいた。市と州で最も優れた専門医たちに診てもらったが、みな、手の施しようがないと言った。彼女は、神がいやしてくださると感じていた。エター姉妹が信仰を起こさせようと彼女に語っていると、彼女は立ち上がって、壇へ上る小さな階段を上った。そして、ひとりで歩いて、自分がいやされたことを会衆の前で示した。友人たちはみな、驚くべきことだと思った。神の力が、いやすためにそこにあった。

甲状腺腫がいやされ、救われてバプテスマを受ける

（ここには、M・F・ロイク夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

心臓病と水腫がいやされる

カリフォルニア州サンノゼ、ウェスト・サンカルロス通り二八九番地のH・W・ポープ夫人は、十四歳のときから心臓病を患っていた。ひどい膀胱の病と婦人病もあった。最も優れた五人の医者が、彼女はもう助からないと見放していた。集会に運ばれて来たとき、彼女は死にかけていて、歩くこともできなかった。心臓は張り裂けそうなほど激しく打っていた。祈ってもらった後、彼女はひとりで壇の上を行ったり来たり歩いた。毎晩、彼女は証しをした。自分がいやされたことを示したのである。心臓は正常になった。ほかの病も去った。彼女の脚は水腫でむくんでいた。すぐに毛穴から水がにじみ出はじめ、脚を伝って流れ落ちた。むくみはごく短いあいだに引いた。今日、彼女は元気で幸せな女性である。

失明がいやされる

（ここには、F・イーグル夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

てんかんが治る

オファレル通り一八一〇番地のH・W・アピアラスは、十年間てんかんの発作に苦しんでいた。多いときは一日に二十回も発作を起こした。あらゆる医者に治療を受けたが、だれも彼を助けることができなかった。祈ってもらってから、彼

は一度も発作を起こしていない。父親が、彼の証しが真実であることを証言した。

目の病がいやされる

カリフォルニア州オークランドのW・R・ケリーは、三年間目の病を患っていた。目からほとんど絶え間なく出血し、ほとんど見えなくなっていた。オークランドとサンフランシスコの七人の名高い眼科医が、手の施しようがないと言った。エター姉妹がその目のために祈ると、目は治りはじめた。今では以前と同じようによく見える。

御使たちの歌声を聞く

（ここには、H・B・オストランダーの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

サンフランシスコでのウッドワース・エターの集会の報告

（ここには、オーガスト・ファイクの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第六十章　一九一六年三月、テキサス州ヒューストンでのしるしと不思議

サンフランシスコの集会を閉じるのは、とても残念だった。人を納得させ目覚めさせる力が、町じゅうのすべての教会に広がりつつあったからである。集会があと数週間続けられたなら、何千人もの人がイエスのもとに導かれただろうと信じている、と多くの人が言った。私たちは、あの町でも、州の多くの所でも、私たちの働きは終わっていないと感じていた。それで私たちはみな、近いうちに神が私たちをまたあの地へお遣わしになるだろうと感じた。

私たちは平原と山々を越える長い旅に出た。主は驚くほど私たちを力づけてくださった。テキサス州ヒューストンに着くと、モーウッド兄弟（牧師）が私たちを迎えてくれた。会うのは初めてだった。彼はわずかな聖徒たちと共に、この町でかつて開かれた最大のペンテコステの大会に備えようと、勇敢に努力していた。主をほめたたえよ。彼らは失望しなかった。集会を閉じるとき、彼はほかの多くの人々と共に、大勢の会衆に向かってこう語ったのである。集会はあらゆる点で成功し、彼の期待をはるかに上回った。いやしの奇跡と神のご臨在のしるしは、彼がこれまでに見たどんなものよりもはるかにまさっていた、と。

イリノイ州ザイオンシティから来たリッチー兄弟とその息子が、ほとんどの集会に出て助けてくれた。またカラザーズ兄弟も、すべての人にとって祝福となり、私を励ましてくれた。最初の集いから最後まで、人々は病人、足の不自由な人、目の見えない人、耳が聞こえず口のきけない人を連れて来た。寝床のまま運ばれて来る人もいれば、松葉杖をついて来る人もいた。かつぎ込まれる人もいた。しかし、主にとって難しすぎる者はひとりもなかった。神の定められた方法で来た人はみな、いやされて叫び、主をほめたたえずにはいられなかった。

ひとりの男とその妻が、二千マイル以上も離れたサウスダコタからやって来た。彼は最も優れた医者たちにみな見放されていた。列車で来るあいだも、生きているのがやっとだった。人々は私に、遠くから運ばれて来た男の人が会場で死にかけていると告げた。私は、彼を壇に連れて来るように言った。彼は間もなく救われ、いやされ、天の力と復活のいのちに満たされた。彼は起き上がり、歩いて、神をほめたたえた。妻も救われ、いやされ、バプテスマを受けた。ふたりはルーテル教会の信者で、御霊の現れを見たことが一度もなかった。妻がバプテスマを求めはじめると、彼は妻に、もしあの力の下で床に倒れたりしたら、置いて家に帰ってしまうぞ、と言った。祭壇にいるあいだに、彼女は打ち倒された。姉妹たちは、彼に見えないよう彼女の周りに立った。ところが、ふと見回すと、彼は会堂の別の所で主の大いなる力の下に倒れ、幻を見ていた。ふたりとも力の下から起き上がると、こう証しをした。神は確かにご自分の民を顧みてくださっている。自分たちは救われ、いやされ、聖霊に満たされた、と。帰る道々、ふたりは機会あるごとに、見たこと聞いたこと、神が自分たちのためにしてくださったことを証しした。家に着くと、ふたりは近所じゅうを奮い立たせた。そのため、集会を開いてほしいという願いが送られて来た。ぜひ集会を開いてほしい、私たちは神の深みに飢えているのです、というのである。

アイオワ州から、鉄道の車掌とその妻が集会に来た。彼は列車事故でけがをして、脊椎やほかの所が不自由になっていた。何か月も仕事を休まされていた。妻は長いあいだ病人だった。神の力あるみわざを見て、彼は、その半分も知らされていなかったと言った。あわれみ深いキリストが生きておられることを、彼は知った。彼は救われ、いやされたいと願い、その願いはかなえられた。彼の脊椎は間もなくまっすぐに、強くなった。曲がって半ばまひしていた手足もまっすぐになった。彼は妻を集会に残して家に帰った。間もなく次々と手紙が届き、神がどのように彼を救ってくださり、いやしてくださったかを伝えてきた。

簡易寝台に乗せられて運ばれて来た女性がいた。彼女は何週間もひどく弱っていて、飢え死にしかけていた。何も胃に収まらなかったのである。人々は彼女を奥の部屋から壇に運んだ。私たちは彼女をイエスの腕にゆだね、その血でおおった。数分のうちに彼女は起き上がり、歩いて叫び、握手をして神をほめたたえ

た。彼女は夜の集会まで残った。そしてほとんどすべての集会に来て、ほかの人々を助け、御霊によって歌い、神がどのように自分をいやしてくださったかを語った。いやされるとすぐに、彼女は言った。「子供たちに電報を打ってください。私はいやされて、おなかがすいていて、もう食べられますって」

寝間着のまま寝床から連れて来られた女性もいた。彼女は何もできない幼子のように運び込まれた。水腫のために、頭から足まですっかりむくんでいた。何度も手術を受けており、医者たちは、もう一度手術を受けたら助からないだろうと言っていた。ほかのすべての人と同じように、彼女もみなの前でいやされた。彼女は毎日やって来て、座ったり歩いたりした。むくみは引いていき、彼女は強くなっていった。がん、腫瘍、ブライト病、脱腸、そしてほとんどあらゆる病と、最も重い病苦がいやされた。目の見えない人、耳が聞こえず口のきけない人が、神の力によって、見え、聞こえ、歌えるようになった。天の合唱、霊的な踊り、異言による力強い言葉、解き明かし、預言が、神のご臨在を伴って与えられた。それは罪人も聖徒も震えさせた。

私たちの集会は、いつもきわめて秩序正しい。人々は神のご臨在の前で、笑ったりあざけったりするのを恐れる。私たちは、狂信や、ほかの霊、争い、教理が集会で持ち出されるのを決して許さない。神が聖霊を通してなさることはすべて徳を高めるものであり、いつも最善の秩序が保たれる。だから、正直な人はみな、それは神がご自分の民を通して働いておられるのだと認めないわけにはいかないだろう。

愛の御霊が、すべての人のうちに、すべての人を通して感じられ、見られる。それで人々は、「まことに、神がここにおられる」と言うのである。モーウッド兄弟は、すばらしいクリスチャンの男性である。彼は勇敢な兵士のように立ち、私にとても親切にしてくれた。彼の妻も、団の人々もみな、私を助け、快く過ごせるよう、できる限りのことをしてくれた。

数か月たった今、彼から手紙を受け取ったばかりである。関心がますます深まっていることが書かれていた。私たちが去ってから、毎晩集会が開かれているという。多くの人が救われ、バプテスマを受けた。主の御名によって、いくつかの大きないやしも行われた。この良い働きが、いつまでも続くように。

テキサス州ヒューストンでのエター夫人

（ここには、F・A・ヘイル牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ヒューストンのエター姉妹

（『ペンテコスタル・ヘラルド』誌から転載）

（ここには、ヘイル牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（ここには、ウィリアム・モーウッド牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（ここには、C・T・ウォリスの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（ここには、マーサ・ジョンソン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（ここには、E・ボハノンの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

この集会では、家族ごといやされている人々がいる。八十二歳のL・C・ウィリアムソン夫人と、その娘のウォーカップ夫人、ふたりの孫娘、ひ孫の男の子は、みな祈ってもらった。そして、いやされたと証しをしている。

（ここには、ウィリアム・シェイファー夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

少女の夢

愛するエター姉妹へ　わたしは、空の上にとてもきれいな御使たちがいる夢を見ました。白い衣を着ていて、とてもきれいでした。御使たちはひとりひとり、

長いラッパを口に当てているように見えました。それから夢の中で、雲の上にキリストが見えました。キリストを恐れて、逃げ出そうとしている人たちもいるようでした。でもわたしは、「動かないで。あの方は何も悪いことはなさらないわ」と言いました。これは、人々が神との関係を正しくするようにという警告だと思います。

この集会のあいだに私にしてくださったことを、神に感謝したいと思います。私は三十五年間、坐骨神経痛を患ってきました。この十五年間は家から出られず、多くの時間を寝床で過ごしていました。しかし今、私はいやされたと正直に言うことができます。エター姉妹が私に手を置いて祈ると、主はすべての痛みを取り去ってくださいました。私は七十六歳です。神に栄光あれ！

（署名）L・レスタージェット
テキサス州ヒューストン、メイン通り一四〇四番地

救われ、いやされ、バプテスマを受ける

（ここには、ジョン・ウォードの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

足の不自由な人が歩けるようになる

（ここには、L・C・ネルソン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

嗅覚が戻った驚くべき例

（ここには、A・J・ファウス夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ぜんそく、気管支炎、カタルがいやされる

（ここには、オーレ・S・B・オルソン氏の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

神経衰弱がいやされる

（ここには、イーノック・ゴードン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

勝利を伝える手紙が毎日届く

脱腸がいやされる

（ここには、R・B・フリスビーの手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

胆石がいやされる

テキサス州リーグシティ
私はヒューストンのエター姉妹の集会に来て、祈ってもらいました。そして、胆石と難聴と肺の弱りがいやされました。

私は完全にいやされました。耳もすっかり聞こえます。胆石は取り除かれ、それ以来痛みを感じたことはありません。私はイエスの名によって祈ってもらいました。主が私をいやしてくださったのです。御名に栄光あれ！

私は七十七歳で、地上で最も幸せな男です。

（署名）J・H・クレイビー
（『ウィークリー・エバンジェル』誌、一九一六年五月号から転載）

一八八八年に異言を語る

（ここには、A・P・デニスの手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第六十一章　「霊をためしなさい」

マサチューセッツ州モントウェイトで牧師と働き人たちに語った説教

「愛する者たちよ、霊をためしなさい」（第一ヨハネ四・一）。私たちが決してかかわりたくない霊は多い。自分自身の霊がある。肉と悪魔がある。多くの霊が争っている。そして私たちはたびたび自分自身の霊に支配させ、それが神だと自分に思い込ませてしまう。肉や悪魔についても同じである。

ときには、神ではないとわかっていながら、自分の思いどおりにしたいこともある。聖霊を持っているなら、私たちは霊を確かめることができる。聖霊がなさることはすべて、みことばによって確かにされるからである。異言や解き明かしに頼ってはならない。物事はみことばで測りなさい。異言や現れは、みことばで測らなければならない。それがみことばと合わないなら、受け入れてはならない。すべてはみことばで測らなければならない。

私たちは神を知っており、神の声を知っている。しかし悪魔は、光の御使を装って来ることができる。あなたが聖霊の中にいるときこそ、悪魔は入り込んで、あなたを迷わせようとする。聖霊が何か隠されたことを明らかにしておられると、同時に悪魔が入って来る。気をつけていないと、あなたは悪魔の言うことに耳を傾け、悪魔に従ってしまう。

あるとき、私はすばらしい幻を見ていた。そのさなかに、悪魔が私に「おまえは死ぬのだ」と言った。私はひどく体が弱っていて、死ぬほど働きづめだった。それで、ほんの少しのあいだ悪魔の言うことに耳を傾けてしまった。それから私は立ち止まって、神が私に何を教えようとしておられるかを聞こうとした。

私は言った。「神が私に示しておられるこれは何だろう。これは神が示しておられることと合っているだろうか」大きな違いがあるのがわかった。神は私の額にお触れになった。そこは知性と理性の座である。また口にお触れになった。それは、メッセージを語る勇気と力を表していた。私がこれをするのなら、死ぬはずがなかった。人々に神のメッセージを伝えるのなら、私は死なないのである。

ここでの集会に、神が祝福しておられるひとりの人がいた。神は彼女を用いようとしておられた。ところが悪魔が入って来て、どんなとんでもないことをしても、それは神から出たことになるのだと、彼女に思い込ませた。

悪魔がどのように私たちを惑わすかを見なさい。彼女は異言で語り、祈っていた。そして言った。「主よ、もしだれかを殺せとお望みなら、殺します。この野営地に火をつけよとお望みなら、つけます」

それは心霊術のやり方である。聖霊は決してそのようなことはなさらない。聖霊は、人を殺したり、人の頭をたたき落としたりするために来られるのではない。愛と優しさをもって人を扱われる。子供をいけにえとしてささげた人々さえいる。あなたが神に耳を傾けるなら、悪魔はわきへ押しのけられる。

こうしたことが、ペンテコステ運動を傷つけている。神はこの運動の中におられる。しかし、悪魔もその中にいる。多くの人は正直だが、理解していない。神はこれから起こる大きなことを示される。すると悪魔が入って来て、人々に日付を定めさせるのである。

ダニエルは、自分の見た幻をしばらく理解できなかった。御使が彼に現れて、その幻を悟らせた。悪魔が入って来ないよう、気をつけなさい。悪魔は、神があなたに与えようとしておられる意味とはまったく違う意味を、あなたに与えようとする。

あれこれと預言しても、まったく実現しないことがあまりにも多い。その預言は、神のみことばにかなっていなかったのである。ある人がだれかにメッセージを与える。それがみことばにかなっていないのに、その人は神が遣わされたものだと信じてしまう。

神があなたをお召しになり、ご自分の働きに出してくださるなら、神はあなたを顧みてくださり、食べ物と着る物を与えてくださる。遣わされる前に走って行く人があまりにも多い。それなら、いっそ行かないほうがよい。ときには悪魔が、異言を使って物事を全体にかき乱すこともある。悪魔も異言を語ることができるし、あなたの肉もできる。

神が異言で語られるとき、それには意味がある。だから解き明かしを求めなさい。神は、解き明かしを求めよと言っておられる。ときには神が、ほかの人を通して解き明かしを与えられる。しかし、異言を語る人に解き明かす機会を与えなさい。自分自身の霊で解き明かしをしないよう、気をつけなさい。それは至る所で働きを傷つける。霊をためし、肉に陥らないようにしようではないか。

だれかを好かないと、異言による言葉や叱責を与えて、その人の頭をたたき落とさんばかりにする人々がいる。これは悪魔のしわざである。すると、だれかが立ち上がって（実に愚かな人々がいるものである）、「それに手を出してはいけない。それは聖霊なのだから」と言う。だれもそれにあえて触れようとせず、すべてが悪魔の思うままになってしまう。

そして、指導者がそれをすべて認めているというううわさが広まり、人々はかかわりを持ちたがらなくなる。指導者に見分ける力があっても、だれかが上着のすそを引っぱって、「それに手を出してはいけない」と言う。そんなに恐れるかわりに、聖書を調べようではないか。神はだれにも、とげとげしい口調でしかれとは言われなかった。

西部で大きな働きが行われていた。とくにひとりの女性が、合衆国は滅ぼされるから日本へ行くべきだと言った。彼らは行った。そのお金を出す余裕のない人々までが、彼らを助けた。彼らは破滅を逃れるために行ったのである。

すべては悪魔から出たことだった。合衆国は滅ぼされなかった。彼らは日本語を話せなかった。彼らは行き詰まり、何人もが後戻りした。大きな建物のためにお金を集めようとしたが、ついに実現しなかった。彼らはここでよい働きをしていたのに、ほかの霊が入り込んだのである。

神は私に、卑しいものから尊いものを取り分けるという特別な使命をお与えになった。私は、あなたがたが悪魔のわなに陥ってほしくない。多くの若い人々が、バプテスマを受けた後、仕事をやめて説教を始める。数日もすると、知っていることを全部話してしまい、それから知らないことを話す。暮らしの糧は入って来ず、多くの者が後戻りする。

神があなたを遣わされないなら、仕事をやめてはならない。そうすれば、与えるものを持っていられる。外国へ行く多くの宣教師が、この誤りを犯している。持ち物をすべて売り、家庭をこわし、妻と別れる者もいる。しかし神は、彼らを召してはおられないのである。

聖霊は私たちを分別のある者にしてくださる。宿営にとどまっていた者も、出て行った者と同じだけのものを得た。神の管理人となり、主に主の分をささげなさい。丘の上の千々の家畜は主のものである。しかし主は、私たちを道具としてお働きになる。体のもの、お金のもの、霊のもの、あなたの持っているすべてを、主は与えてくださる。そして、あなたがすべての力を主のために用いることを期待しておられる。あなたが使い果たしても、主が満たしてくださる。

主は、あなたが主を共同経営者に迎え、主のものを主にささげることを期待しておられる。そうすれば、主はあなたを祝福してくださる。福音は支えられなければならない。水はただである。しかし、管を敷き、水を流し続けるにはお金がかかる。御使は飛ぶことができるが、人は運賃を払わなければならない。そして、だれかが助けなければならない。

管を整えておけば、福音は与えられていく。そして、あなたがたは祈りによって助け、働く人々の手を支える必要がある。神に信頼し、神と共に歩むなら、それこそ神があなたに望んでおられる働きである。

やって来る幻を何でも受け入れてはならない。ペンテコステ運動のある所では、人々が神のみことばを捨ててしまった。彼らは指導者を望まない。しかし、神はいつも指導者を立ててこられた。指導者がいないと、悪魔が議長の席に着く。神は、ある人を牧師、教師としてお立てになった（エペソ四・一一）。

神が人を伝道の務めに召されたことを、どうして知ることができるのか。ある人がこう言った。神がだれかをご自分の働きに召されるとき、その人を説教壇に上がらせるのはむずかしい。しかし悪魔が召すときは、その人を説教壇から遠ざけておくことができない、と。

ある人々はやたらに話したがり、争いの種を持ち込む。それが至る所で働きを傷つけている。本筋でない問題は持ち込まないようにしなさい。何を食べ、何を着、どこへ行くべきかは、神が人々に教えてくださる。神の子供たちの多くが、こうしたことでがみがみ言い合っている。主は言われた。肉を食べるのが正しいと思わないなら、食べないがよい。しかし、ほかの人をさばいてはならない、と。

口を開くなら、意味のあることを言おうではないか。バプテスマを受けているなら、それを言いふらす必要はない。人々にはわかる。神から語っていただきなさい。だれかが異言を語って、神はあなたがインドへ行くことを望んでおられると告げてくれるのを待ってはならない。神から語っていただきなさい。

ほかの人がそう言うから行く人々は、ホームシックになり、落胆して、また戻って来ようとする。主を私たちの導き手としようではないか。主の御心を行うなら、私たちは主の御心を知るのである。

イエスを高く掲げ、人々を聖霊で満たして、一致のうちに生きるようにしようではないか。私たちは、だれにも軽々しく手を置きたくない。争いの霊で何かをすると、気がついたときにはすべてがめちゃくちゃになっている。そして、一回の集会で想像もできないほどの害を与えてしまうのである。

イエスと復活を高く掲げなさい。神が光の中にいますように、私たちも光の中を歩こうではないか。キリストは偉大な前照灯である。私は、これまでの生涯で見たことのないほどの光を求めて、身を乗り出している。光の中を歩くとき、あなたがたは交わりを持つ。私たちは下の灯火であり、主は、次に何をすべきかを示してくださる。

主はあなたに、さあ、今ならこれができる、と言われる。あなたは、私を信頼してくださるとは以前は知りませんでした、と言うかもしれない。すると主はまた、今ならあなたにできる、と答えられる。

神があることを示されるまでは、それは罪ではない。しかし、神が示された後でそれをするなら、それは罪である。日ごとに、すべてを神にささげなさい。神は、力と恵みをお与えになるおつもりがなければ、あなたに何かをするようお召しになることはない。

集会に行ったら、その教えに耳を傾けなさい。それが気に入らず、ほかのものが欲しいなら、いちばんよいのは、静かに出て行って、自分で人を集めることである。ある人々は、だれにも教えてもらう必要はない、と言う。生まれながらの人はあなたを教えることができない。しかし、霊の人はあなたを教えることができる。

私たちは、自分の話していることを知っている。霊の人はあなたを教えることができる。私たちは、知らなければならないほどのことを何も知らない。知るべきことはあまりにも多い。

だれにも軽々しく手を置かないよう、気をつけなさい。ここで先ごろ起きた騒ぎについて言えば、私たちは聖徒であると公言しており、キリストの御霊を表したいと思っている。私たちは毅然としながらも、親切でなければならない。乱暴な口をきいてはならない。群衆は見たいのである。私も若いころなら、あなたがたが見ているものを見るために、首の骨を折りかねないほどのことをしただろう。

彼らが騒がしくなったとき、力ずくでやめさせようとしてもむだだったろう。けんかで終わるだけで、敵の計画がかなってしまったことだろう。神は、騒ぎを静めて秩序を取り戻すことのできるただ一つの方法へと、私を導いてくださった。神が私たちのために戦ってくださったのである。若者たちに乱暴な口をきいてはならない。ひとりひとりが、どこかの母親の息子なのである。神は罪の自覚をもって打つことがおできになる。戦いは神のものであって、私たちのものではない。

「霊をためしなさい」（第一ヨハネ四・一）。私たちのある集会に、霊的にすばらしい経験をしたひとりの黒人の婦人がいた。悪魔がねらうのは、そういう人である。ある日、彼女はひざをついて歩き回り、蛇のように身をくねらせはじめた。神はだれにも、そんなことをせよとは言われない。彼女は異言を語った。それから、「こんなことはしたくない。こんなことはしたくない」と言った。

それが神から出たものでないことは、だれもが知っていた。私は彼女に言った。「それは神ではありません。敵があなたをとらえているのです」初め、彼女はそれを手放そうとしなかった。しかし次の日、神が彼女にお示しになり、彼女

は解放されることを願った。悪魔が入り込んで、正しくないことを彼女にさせ、彼女の影響力をつぶそうとしていたのである。

ひとりの婦人が私の所に来て言った。「私に臨んでいるこの霊は、神から出たものではないのではないかと心配です。私は聖霊のバプテスマを受けました。それから、何でも異言によって決める伝道所に行きました。そこで私はすっかり混乱させられて、自分がどこにいるのかもわからなくなりました。そのとき、この霊が私をとらえたのです。この霊は私の頭を揺さぶり、頭痛を起こさせます」

それは心霊術である。ある人々は、人のために祈って手を置くとき、ぬるぬるしたものを払い落とすしぐさをする。それは心霊術である。決してそのようなことをしてはならない。あなたが人に手を置くとき、悪霊は神が始末してくださる。聖霊に満たされているなら、悪魔はあなたの外にいる。外に締め出しておきなさい。だれに手を置いてもらうかに気をつけなさい。悪魔は神のわざをまねているからである。

二年間、その婦人は証しをすることができなかった。神が揺さぶる霊をしかりつけられると、神の力が彼女の手と声に臨んだ。そして彼女は、神のために証しをした。

それが、ペンテコステ運動を病ませているものである。このようなことが、あまりにも多く忍び込んでいる。ある人々は、愚かなことを何でも聖霊のわざと思い込む。両極端がある。一方は、ある決まった筋道のほかでは聖霊が働かれないようにする。もう一方は、何でも聖霊から出たものだと考えて、「それに手を出してはいけない」と言う。どちらも同じように悪い。すべてを神のみことばによって行おうではないか。

私たちは終わりの時に生きている。ペンテコステ運動には、もっと高い基準がなければならない。キリストは来られようとしている。私たちは古いわだちの中を進んではいられない。神は今日、私たちをふるいにかけておられる。私たちは誤りを乗り越えなければならない。立ち上がって前進しなければならない。神の恵みによって、私たちはそうする。御名をほめたたえよ。

血がいやす所へ

罪に病む魂の安らぎを求めているか
それならキリストに願い出なければならない
あなたをいやせるお方はほかにない
血がいやす所へ来なければならない
（おりかえし）
血がいやす所へ来なければならない
血がいやす所へ来なければならない
あなたをいやせるお方はほかにない
血がいやす所へ来なければならない
ほかの治療に望みをかけてもむなしい
今こそ納得して、感じ取りなさい
キリストによってのみ助けを得られることを
血がいやす所へ来なければならない
差し出されるほかの助けは、あなたを欺くだけ
あなたの許すままに、いのちまで盗み取る
望みを受けたいなら、キリストを仰がなければならない
血がいやす所へ来なければならない
聞こえないか、誘い込む声がする
あなたの熱心を消そうと、絶えずつとめている
主から離れて、安全な避け所を見いだそうとするのか
血がいやす所へ来なければならない
痛みの床から起き上がりたいなら
キリストの勧めにひざまずきなさい
それは主が処方されたもの、ただ一つの望み
血がいやす所へ来なければならない

第六十二章　聖霊の働き

ウッドワース・エター夫人の説教

ヨハネ一五・二六～二七。イエスは、聖霊が来られることについて語っておられる。『わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう』（ヨハネ一五・二六）。

助け主とは聖霊である。主は、使徒のひとりについて語られるのと同じように、聖霊を一つの人格として語っておられる。ペンテコステの日に、人々はみな心を一つにして一つ所にいた。そして、あることが起こった。

あなたが御霊を持っているなら、それは毎日でも起こる。『突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきた』（使徒二・二）。これは、聖霊がとどまるために来られたときのことである。『また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』（使徒二・三～四）。

このことが言い広められると、大ぜいの人が集まって来た。何が言い広められたのか。この人々がみな、他国の言葉で語っているということである。その知らせはエルサレムじゅうに伝わり、群衆が集まって来た。そして、あっけに取られた。だれもかれも、自分の国の言葉で彼らが語るのを聞いたからである。集まって来たのは、天下のあらゆる国から来た人々であった。

彼らは、この百二十人が自分たちの生まれ故郷の言葉で語るのを聞いた。これが人々を集め、あっけに取らせたのである。人々はみな驚き怪しんで、互いに言った。『見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。それだのに、わたしたちがそれぞれ、生れ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか』（使徒二・七～八）。「あの人々がわたしたちの国語で神の大きな働きを述べるのを、わたしたちは聞いている」（使徒二・一一）。

聖霊はすばらしいお方であって、作り話や影ではない。ペンテコステは、神の働きの中でこれまでに起こった最も偉大なことである。聖霊がとどまるために来られたときだからである。聖霊は来られて、百二十人の男女をとらえられた。炎のように分かれた舌の姿で彼らの頭の上にとどまられ、中に入られて彼らの体をとらえられた。それから、彼らの発声器官をとらえられた。こうして彼らはひとり残らず、聖霊が語らせるままに語った。

彼らは学んだことのない言葉で語り、自分が何を言っているのかわからなかった。聖霊が彼らの舌をとらえられ、彼らを通して語られたのである。あなたが電話を通して話すように、聖霊は土くれを通して語られ、イエスについて告げられた。『わたしについてあかしをするであろう』（ヨハネ一五・二六）。

イエスは使徒たちに、あなたがたは証人となる、と言われた。聖霊は来られたとき、すべてをご存じで、彼らを通して神の大きな働きを告げられた。このことが言い広められると、大ぜいの人が集まった。人々を引き寄せたのは、異言で語ることだった。人々はそれを聞いて、あっけに取られ、『これは、いったい、どういうわけなのだろう』と言った（使徒二・一二）。

この点に注意していただきたい。人々をあっけに取らせたのは、異言で語ることだったのである。聖霊は、他国の言葉を学ぶために大学へ行ったこともない、この無学な人々を通して語られた。それは、神がこれまでになさった最もすばらしいことの一つであった。神があなたを通して語られる今も、そうである。

主は何百年も前に、預言者を通して言われた。「主はだれに知識を教えようとされるのか。乳離れした者たちにである」（イザヤ二八・九）。世の知恵は、この無学な人々によって恥を見ることになっていた。そして、そのとおりになった。

イエスは地上におられたとき、病人をいやされ、悪霊を追い出され、宮をきよめられた。しかしユダヤ人はイエスを拒み、十字架につけた。そして今、ペンテ

コステの日に、聖霊がこの百二十人の無学な男女を通して語られるのを聞いて、彼らはあっけに取られたのである。

彼らは、自分たちが十字架につけたイエスのことを、その人々が語るのを聞いた。そして、これは神の力のわざだと確信した。ある人々は、この人たちは酔っている、新しい酒に酔っているのだ、と言った。しかしペテロは、こんなに朝早くから酔っているはずがない、と言った。

ペテロは旧約聖書に立ち返り、聖霊が来られることについて預言者が言ったことを告げた。『これは預言者ヨエルが預言していたことに外ならない』（使徒二・一六）。聖霊はそれまでも、すばらしい仕方で使徒たちと共におられた。しかし彼らは、ペンテコステまで異言で語ったことはなかった。

イザヤは預言した。『主は異国のくちびると、異国の舌とをもってこの民に語られる。しかし彼らは聞こうとはしなかった』（イザヤ二八・一一～一二）。全能の神が、異言によって語っておられたのである。ペンテコステは、その預言が成就したことを証明していた。

彼らはイエスを信じようとしなかった。それで、自分たちの聞いたものが預言者たちの語った聖霊であることを、神のみことばによって納得させられなければならなかった。ペテロは旧約聖書を証拠として、彼らに説教した。彼らは罪を示されて回心した。その数は三千人であった。

彼らはあわれみを求めて叫んだ。私たちは主を十字架につけてしまった、どうしたらよいのか、と。彼らは救われ、聖霊のバプテスマを受けた。ペテロは彼らに言った。「あなたがたが見ているこれは、父から出たものである。自分のしたことを悔い改め、神に立ち返りなさい。そうすれば、聖霊の賜物を受けるであろう」（使徒二・三三、三八）。

『この約束は、あなたがたと、あなたがたの子らとに、与えられているものである』（使徒二・三九）。あなたがたはみな、私たちと同じ力を持ち、同じことをすることができる。あなたがたも、あなたがたの子供たちもである。あなたがたはこのバプテスマを受け、それを子供たちに教えることができる。子供たちもそれを受けることができる。「遠くの者一同、すなわち、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者」も受けることができるのである（使徒二・三九）。

神は聖霊をお遣わしになって、人の体の中に入らせてくださる。聖霊は発声器官を支配され、その人はそれに何の手出しもしない。しかし、神がこれほどすばらしいことをしてくださるのに、あなたがたの中には信じようとしない人々がいる。異言は信じない者のためのしるしである。彼らは、信じない者の中でも最もひどい者たちであった。主を十字架につけたのである。しかし、このしるしによってイエス・キリストを信じるようにされた。ほかのすべてが失敗したとき、彼らはこのしるしによって、イエスがメシヤであると納得したのである。

この人々は無学な人たちで、みなガリラヤ人であった。それなのに、さまざまな国々の言葉を、すばらしい仕方で語った。他国の言葉を身につけるには、何年も何年もかかる。その国の人のように流暢に話せる人は、ごくわずかである。この人々は無学だったのに、その国の人のように流暢に語った。全能の神が、彼らを通して語られたからである。

今日、受けるべきかたちで聖霊のバプテスマを受ける人はみな、他国の言葉で語る。そして最初の言葉は、ほとんどいつも「イエスはすぐに来られる！」である。

聖霊がこのように注がれることは、私たちが終わりの時にいるしるしである。聖霊が満ちあふれて来られるとき、あなたをとらえられ、あなたを通してイエスの死と復活と昇天について語られる。イエスは去って行かれるとき、説教はせずにエルサレムにとどまっていなさい、と言われた。聖霊があなたがたにくだって、あなたがたが力を受けるまで、というのである。

三年間の訓練の後、彼らには語ることがたくさんあった。しかしイエスは、それを語らず、共にとどまって、力が来るまで目をさまして待ち、それから主についてあかしをするように、と言われた。さて、聖霊が来られて彼らをとらえられたとき、聖霊が彼らを通してあかしをされるまで、彼らが黙っていたことを覚えておきなさい。それから、彼らは証人となることができたのである。

聖霊がひとり残らず彼らを通してあかしをされるまで、彼らは黙っていなければならなかった。聖霊は神の大きな働きを告げられた。イエスが死なれてよみがえられ、神の右に行かれて、ご自分についてあかしをさせるために聖霊を遣わさ

れたということである。それは私にとって、実にすばらしいことである。聖霊がまず語られ、ほかの者たちは、聖霊が語り終えられるまで待っていたのである。

聖霊は聖書を取り上げられた。人々はいつも預言者たちを信じていたからである。聖霊は証人台に立たれ、父の約束が時満ちて文字どおりに実現したという証拠を、人々に示された。神は人々を通して異言で語られたのである。ペテロは話を引き継いで、聖霊がなさったことを確かにした。旧約聖書によって確かにしたのである。

イエスは言われた。聖霊が来るとき、わたしについてあかしをする、それからあなたがたが証人となる、と。ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられる。聖霊が来られてとどまられるとき、生ける水の川のように体の中に入って来られる。力は頭からではなく、心から来る。私たちは知性を通して話す。聖霊は霊を通して話される。それが神のわざであるとき、聖霊があかしをされるのである。

ペテロは「これこそ」と言った。この特別なことこそ、というのである。酔った人のようにふるまうこの人々、他国の言葉で語るこの人々、これはみな「預言者が預言していたこと」なのである。神は、ご自分の霊が注がれるときには、異国のくちびると異国の舌とをもって語る、と言われた。しかし、ある人々はそれを信じようとしない。

炎のように分かれた舌が見られている。ダラスとシカゴでは、ある人々の頭の上に火が見えた。異言で語っておられるのは同じ聖霊である。それなら、炎のように分かれた舌が見えてもおかしくないではないか。

聖霊は来られるとき、その家をご自分のものとされ、上座に着かれて、ご自身で語られる。パウロは、聖霊によって神があなたを通して異言で語られるのはすばらしいことだと示している。パウロは何千年も前の預言者たちを引用している。

パウロは言った。『わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れることを、神に感謝する。しかし教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、ほかの人たちをも教えるために、むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい』（第一コリント一四・一八～一九）。『わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望む』（第一コリント一四・五）。『異言を語ることを妨げてはならない』（第一コリント一四・三九）。

これは、イエスがまもなく来られることを示す最後のしるしの一つである。聖霊のバプテスマを受ける人のほとんどだれもが、異言で語る最初の言葉は、解き明かされると「イエスはすぐに来られる。備えをせよ」である。異言で語る人はみな、それを解き明かせるように祈るべきである。

パウロは『霊の賜物を熱心に求めなさい』と言った（第一コリント一四・一）。異言を語る者は、神に向かって語るのである。だれもそれを理解しない。しかし彼は、霊によって奥義を語っている。彼は自分の徳を高める。しかし、彼が解き明かすか、ほかのだれかが解き明かすなら、教会全体の徳を高めるのである。

異言は信じない者のためのしるしである。イエスがまもなく来られること、そして聖霊が注がれていることのしるしである。異言の賜物を持っている人は、思うままに、あるいは御霊が働いておられるときにはいつでも、語ることができる。中には、経験を失ってもなお、いつでも何でも好きなことを語り、神の働きの名を汚す者さえいる。これは肉によるもの、あるいは神から出ていないものである。

バプテスマのヨハネは、生まれたときから聖霊に満たされていた。それでも律法のもとにあった。イエスの母は聖霊に満たされていたが、ほかの者たちと共にバプテスマを受けなければならなかった。使徒たちは聖霊を受けており、神の愛が心に注がれていた。それでも、ペンテコステの日にバプテスマを受けたのである。

進み続けて、本当のバプテスマを受けなさい。そうすれば、満ちあふれるものすべてで満たされる。イエスは、ご自分の働きを終えられ、いのちを捨てられた。そして神によって死人の中からよみがえらされるまでは、満ちあふれる力を持っておられなかった。

よみがえられたとき、イエスは力ある勝利者であった。そのとき、いっさいの権威と力をお持ちになった。イエスは使徒たちに息を吹きかけられて、『聖霊を

受けよ』と言われた（ヨハネ二〇・二二）。彼らは悟りが開かれ、それまでよりも多くのことを知った。彼らはすばらしく祝福された。

バプテスマを受ける前に、喜びに満ちていなければならない。彼らは喜びに満ち、みな心を一つにし、霊を一つにしていた。神に栄光あれ！　彼らは屋上の間に行った。彼らは備えができており、信じていた。そしてエルサレムで待った。彼らは心を合わせてとどまっていた。いつも祈って懇願していたのではなく、待っていたのである。

懇願するのをやめて、心に喜びを持ちなさい。そうすれば何かを受ける。神はそれまでも力をもって働いておられ、彼らは悪霊を追い出していた。しかし今は、力が臨むまで待った。そして彼らは、新しい言葉で語ったのである。

あなたが信じるだけ、あなたは受ける。バプテスマを受けた後は、だれでも異言で語るはずである。彼らには預言者たちの証言があり、キリストは彼らが異言で語ると言われた。彼らは十分に祈りを積んでおり、信じ、期待し、ほめたたえていた。そして聖霊が、彼らの上にくだられたのである。

彼らは喜びに満ちていた。疑いはすべて消えていた。聖霊が来てくださりさえすれば、結果がどうなるかは気にしなかった。そして、ひとり残らず聖霊に満たされた。あなたがたは、ほかのものも持たなければならない。ほかの賜物、悪霊を追い出すこと、病人をいやすことである。毒も、命取りの蛇も、あなたを害することはない。

使徒たちは、ほとんどすべての賜物を持っていた。彼らは異言を待ち望んでいた。多くの人は一度異言で語っただけで、ほかの賜物を求めていない。あなたが信じるだけ、あらゆる祝福を受ける。私たちは神に、きよめてください、祝福してください、と求める。そして信仰が届くだけ、求めたものを受けるのである。

この時代、私たちにはあまりにも多くの光があるので、神は無知を見過ごしにはされない。私たちは奇跡が行われるのを見ている。それは、聖霊が注がれていることを示している。そして神は、私たちがすべての賜物を求めて踏み出すことを望んでおられる。毒というものがある。腐って毒に満ちた、膿の出るはれものもある。そういう状態でここに来る人々がいる。神にそれをしかりつけてくださるよう求め、神がそうしてくださると信じるなら、それはきよめられる。うっかり毒を飲んでしまったら、信じて、神に栄光を帰しなさい。そうすれば、毒はあなたを害さない。まむしがパウロの手に食いついたが、パウロはそれを振り落として、何の害も受けなかった。人々はパウロを神だと思い、拝もうとした。これはみな聖霊のわざである。

今日多くの人は、聖霊のバプテスマを受けるまでは、だれも聖霊を持っていないと教えている。聖霊はさまざまな度合いで来られる。御霊に満たされることと、御霊のバプテスマである。バプテスマは、雲のように頭の上にくだって来る。

預言者たちが油を注がれたとき、油は頭に注がれた。それから、聖霊が彼らの中に入られた。聖霊は私たちの頭の上にくだられなければならない。それから私たちの全身に満ちられる。こうして私たちをとらえられるのである。多くの人は、異言で語ることのほかは何も考えず、ほかのすべてをわきへ置いてしまう。

三十五年前、私は聖霊と火とのバプテスマを受けた。そして、ひとりで立っていた。ペンテコステ運動が起こり、ある人々が異言のほかは何も受け入れないと言った。そのとき私は引き止められて、初めはこの運動とあまりかかわることができなかった。間違った教えがあまりにも多く、多くの人が聖霊を追いやってしまった。人々は、聖霊にこう働いていただきたい、ああではいけない、と望んだのである。神のみことばに合うものなら、どのようにでも聖霊に働いていただきなさい。

使徒たちには信仰があった。それまで持ったことのないような力を受けることを、知っていた。神は私たちに光を与えてくださった。そして、聖霊を受けるという信仰を私たちが持つことを期待しておられる。聖霊が私たちを通して語ってくださるほど、すばらしい仕方で受けるという信仰である。

私は、バプテスマを受けるすべての人を通して、聖霊が異言で語られると信じている。そして、ほかの賜物も信じて求めるなら、それも受ける。この終わりの時に、神はラッパを吹き鳴らす民を起こしておられる。

聖霊に満たされていなければ、どうして天の合唱で歌うことができるだろうか。ヨハネは、あがなわれた者たちの歌を、大水のとどろきのように聞いた。それは聖霊である。それは高まって、多くの水の音のように響く。

私たちは天の音楽を聞いてきた。楽器が奏でられているような音がすることも、たびたびある。聖霊が、人々を通して歌っておられるのである。神はこの時代、不思議な仕方で働いておられる。私はそのことのゆえに、神をほめたたえる。

前の雨と、それよりはるかに豊かな後の雨とは、同じ月に降ると約束されていた。初代教会と同じ力と賜物をもって降るのである。

『もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである』（ヨハネ一四・一二）。主はご自分の働きを、私たちの手にゆだねられた。聖霊のバプテスマを受けることは、すばらしいことを意味している。ユダヤ人は、聖霊があの無学な人々を通して異言で語られるのを聞くまで、信じなかった。そのとき、それが神であるとわかった。自分たちが主を十字架につけたこと、主がよみがえられて栄光の中に行かれたことを悟った。そして彼らは叫んだ。『わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか』（使徒二・三七）。

イエスは十字架の上で祈られた。『父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです』（ルカ二三・三四）。聖霊が来られたとき、彼らは自分たちのしたことを知った。「異言」は信じない者のためのしるしであった。それは今日も、神がこれまでになさった最も偉大なことの一つである。

聖霊は私たちを通して歌われる。小羊の婚宴で歌うために、私たちを訓練しておられるのである。私たちはみな死ぬのではなく、みな変えられる。イエスのような栄光の体を持ち、喜びに満ちて、空中で主を迎えに上るのである。

いやされた人々は喜びに満ち、いやしの力が入って来ると、ときには跳びはねたり踊ったりする。聖霊が、死んだような感じとこわばりを、彼らからすべて取り去られるのである。ときには神が彼らを打ち倒され、横たわらせられる。彼らに語りかけるためである。

男たちよ、女たちよ、喜びなさい。バプテスマを求め、賜物を受けなさい。信じて求めるなら、あなたがたはそれを受ける。そして証人となる。イエスの名によって、神がこのことをだれかの心に確かに刻んでくださるように。

第六十三章　ヤコブが教会に与えた、病人のために祈れという命令

ウッドワース・エター夫人の説教

ヤコブの手紙の最後の章。十四節は教会のためのものである。罪人のためではないことを覚えておきなさい。『あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリブ油を注いで祈ってもらうがよい。信仰による祈は、病んでいる人を救い、そして、主はその人を立ちあがらせて下さる。かつ、その人が罪を犯していたなら、それもゆるされる』（ヤコブ五・一四～一五）。

「互いに罪を告白し合いなさい」（ヤコブ五・一六）。神のもとに来るときには、かなりまっすぐでなければならない。『いやされるようにお互のために祈りなさい。義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである』（ヤコブ五・一六）。

エリヤは、ほかの人々と同じ人間であって、御使ではなかった。彼は雨が降らないようにと祈った。すると三年六か月のあいだ、雨が降らなかった。彼がふたたび祈ると、神はそれをお聞きになって、雨を送ってくださった。この章は私たちのためのものであり、私たちに当てはまる。この章は全体を通して、私たちが生きているこの時代のことを言っているのである。

これらのことが起こるとき、終わりが近いことを知りなさい。この章は、私たちを終わりの時にまで連れて来る。

七節。東方では、穀物の芽を出させる前の雨があった。後の雨を受けるまでは、収穫について何もわからなかった。後の雨が豊かに降れば、豊かな収穫があった。

使徒は私たちに言っている。「後の雨を待ちなさい。あなたがたも主の来臨の時まで耐え忍びなさい」（ヤコブ五・七）。後の雨が降っているとき、私たちは主の来臨が近いことを知る。私たちは前の雨を受けている。そして、まもなく後の雨を受ける。主は花嫁を整えておられる。

使徒は教会に語っている。あなたがたの中に病んでいる者がいたら、医者のもとへ走ったり、病院へ送ったりせず、病人のほうから長老たちを呼びにやらせなさい。長老たちは、聖霊の力を着せられた人々であるはずだった。彼らが来て、その人のために祈り、油を注ぐ。そうすれば、その人は立ち上がらせられる。そして、もし何かの罪を犯していたなら、それを告白し、祈りによってゆるされなければならない。

ある人々は、これは霊的ないやしのことだと言う。彼らが見えないのは、見えないことを望んでいるからである。油を注ぐことは、聖霊の油注ぎの象徴である。樽いっぱいの油でも、いやすことはない。しかし、信仰と従順をもって油を注ぐなら、祝福を受ける。

それはイエスのいやしの力であり、神の力である。病が追い出された後、イエスのいやしの力が入って来る。信仰による祈りは病んでいる人を救う。神の力は魂をきよめる。そして病人は、魂も体も立ち上がらせられるのである。

聖霊に満たされた神の子供ならだれでも、病人と共に祈り、主の御名によって油を注ぐことができる。そして、その人が立ち上がらせられることを当てにしてよい。

特別な賜物がなくても、それはできる。互いのために祈りなさい。助けが届く前に死んでしまう人もいる。隣人を呼び集めて、一緒に祈りなさい。陰口があったなら、それを告白しなさい。

信仰による祈りは効果があり、大いに力がある。特別な賜物を持っている人を呼べないなら、互いのために祈りなさい。私は、家族が医者にかかったことのない人々を大勢知っている。親が子供のために祈り、子供が親のために祈る。やっと口がきけるくらいの幼い子供が祈り、病人が立ち上がらせられるのである。

互いのために祈りなさい。あなたがどこにいても、そこにイエスがおられる。イエスはいやし主であり、また、バプテスマを授けるお方である。イエスは復活のいのちをお与えになる。今日、多くの人が、ひとりで神と向き合っているあいだに、すばらしくいやされている。神は驚くべき仕方で働いておられる。私たちは信仰と従順を働かせなければならない。

エリヤは神のもとで大きな力を持っていた。そして、ちょうどあなたと同じような人間であった。エリシャは、エリヤの二倍の力を持っていた。ムーディーは、私たちはエリシャよりもはるかに多くの力を持ち、もっと大きいことをするべきだと言っている。それは、教会がまだ月の光の中にあった、はるか昔のことであった。日の光の中にいる今日の私たちは、彼らの四倍の奇跡を行うべきである。

大きな奇跡が行われるべきである。そして、この時代に実際に行われている。花嫁が、花婿を迎えて共に空中に上って行くために、自分を整えている時代である。神は終わりの時に、もっと大きいわざをなさる。

御霊のバプテスマを受けている人々はみな、イエスがまもなく来られると信じている。その半数は、それを知っている。どのようにしてか。みことばとしるしによってである。神はご自分の民を動かして、来たるべき王の福音を全世界に宣べ伝えさせたいと望んでおられる。そのとき、主は来られる。

この来たるべき王の福音は地を一巡りし、神の子供と称するすべての人に、聖霊の力の中に入る機会を与えることになっている。私たちがラッパを吹かず、正しい音を出さないなら、患難が私たちの上に臨み、彼らの血の責任が私たちの手に求められる。

私たちは、その日が近づいているのを見て、目をさまして祈るように言われている。危険の合図とは何か。主の大いなる日が近いということである。合図を知らなければ、どうしてラッパを吹くことができるだろうか。私たちがそれを知っていることを、私はうれしく思う。

この章は、教会の中にある神の力を示している。神の子供はみな、祝福を呼び下すだけの力を持っているべきである。信仰と従順がなければならない。今すぐ主に何かを期待しなさい。主はすぐに答えてくださる。

祈りがどれほど早く答えられ、さまざまな病がいやされるかを、あなたがたは見ている。ここで毎日それを見ている。神は、信仰による祈りは病人を救う、と言っておられる。だれもが油を注がなければならないわけではない。賜物を持っている人々もいる。賜物はさまざまである。

イエスは言われた。『信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、病人に手をおけば、いやされる』（マルコ一六・一七～一八）。一つのことをはっきりさせておきたい。

そこには油を注げと書いてある。しかし、すべての罪人のために祈れとは書いていない。それは聖徒のためのものである。もし彼らが後戻りしていたなら、告白させなさい。そうすれば、ゆるされる。

罪人は、心を神にささげないかぎり、いやされることを期待できない。イエスは『あなたの罪はゆるされた』と言われ、それからいやされた（ルカ五・二〇）。神は、あなたが同じように来ることを期待しておられる。あなたが自分を神にささげないかぎり、私はあなたの体のために祈ることはできない。神にいやしていただきたいなら、罪を犯すのをやめなければならない。

罪を犯すのをやめると私に約束するなら、神は私たちの信仰を通して、その約束を受け取ってくださる。神は、罪人をいやして、悪魔に仕えるために出て行かせるとは約束されなかった。主は言われた。『もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから』（ヨハネ五・一四）。救われないかぎり、あなたは罪を犯すのである。

どの教会でも、何をすべきかを知っているべきである。長老たちを呼びにやるのである。最近まで、油を注がずに病人に手を置こうとする人は、ごくわずかだった。私はこのことで、ずっと批判されてきた。

私は三十五年前、神が私を病の床から立ち上がらせてくださったときに、油注ぎを受けた。神は私に、いやしを説かなければならないとお示しになった。それで私は人々に、神がどのように私を立ち上がらせてくださったかを話した。しばらくして、私はインディアナ州で集会を開いていた。死ぬほど働き、ときにはほとんど夜通し働いた。

主の霊が私に臨まれた。神は、病人のためにいやしを説くことを望んでおられると、私に示そうとしておられた。しかし私は、それが敵から出たものではないかと恐れた。思い上がりのように思えたのである。神のいやしによって、多くの魂が救われることになる。悪魔はそれを知っていた。

新約聖書において、いやしは人を引き寄せる大きな力である。ついに私は、その問題に決着をつけた。それが主であることがわかった。そして私は言った。「私がだれかのために祈ることを望まれるときは、いつでもその人を私の所に連れて来てください。あるいは、私をその人の所に連れて行ってください。そうすれば祈ります」

最初に行った所で、すばらしい集会が開かれた。ひどい懐疑論者だった男の人がいた。私はある人に出会い、その男の人の娘を見舞ってほしいと頼まれた。娘は死にかけていて、五人の医者が見放していた。

彼女は数週間前に、私たちの集会で回心していた。どうすれば行けるのか、私にはわからなかった。しかし、その中に主の御手があると感じて、私は言った。「行けないとしても、私は彼女のために祈ります。神は彼女をいやしてくださると信じます」

次の朝、私はひどく弱っていたが、どうしても彼女の所へ行かなければならないと感じていた。そのとき、主が私に言われた。「あなたは彼女のために祈りなさい。わたしが彼女をいやす」数日後、別の町で、主が約束を果たされたという知らせが私に届いた。あなたがたは、催眠術の力だとか、私の力だとか言う。私はこの女性に会ったことすらなかったのである。

手を置くことについて話そう。私はインディアナ州で集会を開いていた。祈って力を呼び下す人は、ほとんどいなかった。医師のダゲット博士が、来ることのできるときにはいつも集会に来て、祈りを導いてくれた。

彼はひざの痛みにひどく苦しんでいたので、ときどき外に出なければならなかった。主は私に、「あの人はいやされるべきだ」と言いはじめられた。主があまりにも強くこのことを私に感じさせられたので、私は彼の所へ行って言わなけ

ればならなかった。「あなたが出て行かなくてすめばいいのですが。ここにいていただきたいのです」彼は言った。「本当に申し訳ないのですが、とても痛くて、出て行かなければならないのです」私は彼に、神があなたをいやすことがおできになると信じないのか、と尋ねた。そして、神はあなたをいやしたいと望んでおられると私は信じている、と話した。

神は彼にも、同じように働きかけておられた。私は会衆を呼び集めて言った。「ここに、神はいやすことがおできになると信じるクリスチャンはいますか。本当に信じるなら、来て私を助けてください。私はいやしのために祈ります」

何人かが来た。私は赤ん坊と同じで、どうしたらよいかわからなかった。私は祈りはじめた。主の力が私の右腕を持ち上げ、腕はひざの上まで来て止まった。私がひざに触れたくなかったからである。神の力が私の手にあった。神は、私があの人のひざに手を置くことを望んでおられたのである。

神が何を望んでおられるかがわかったとき、私はひざに手を置き、病を取り去ってくださるよう神に願った。彼は飛び上がった。いやされたのである。彼は十二年間そのような状態だった。だれもが彼を知っていたので、だれもが驚いた。

あるとき、何千人もの人が集まっていたところで、私は呼びかけた。「ダゲット博士は会衆の中にいらっしゃいますか」彼は群衆の中をかき分けて、壇の上のある場所へ走って来た。彼は、自分がどれほどすばらしくいやされたかを話した。私は十二年後にも、彼のことを聞いた。

それが、私が初めて手を置いた人であった。『病人に手をおけば、いやされる』（マルコ一六・一八）。神はそのようにして、私を導き出された。私は油を注ぐ人々から、ずっと批判されてきた。

ペンテコステの後、使徒たちが油を注いだという記事は一つも出て来ない。彼らはイエスが指示されたとおりにした。病人に手を置くと、病人はいやされたのである。

神はすべての人を同じように導かれるわけではない。神が油を注ぐように導かれる人なら、それでよい。しかし神は、私をそのようには導かれなかった。信仰による祈りをささげ、手を置き、イエスの名によって悪霊を追い出すように導かれたのである。

ヤコブが与えている命令に従う信仰を持つ人ならだれでも、病人のために信仰による祈りをささげることができる。そうすれば、病人はいやされる。

第六十四章　『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず』

ウッドワース・エター夫人の説教

第一コリント二・九～一四。聖霊を持っている人でなければ、だれもこれを理解できない。『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた。そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである』（第一コリント二・九～一〇）。

今日多くの人は、これを永遠に、あの世に当てはめている。別の世界に入るまで、私たちはこれらのことを決して知ることはないと考えている。この聖句がそれ自身を説明していることを、私はうれしく思う。『目がまだ見ず』とあるのは、生まれながらの状態でのことである（第一コリント二・九）。神は、今このときに、御霊によって私たちに啓示してくださった。どのようにしてか。この世で、御霊によってである。『御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめる』（第一コリント二・一〇）。

とくに十四節に注意していただきたい。『生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない』（第一コリント二・一四）。

生まれながらの人は、このすばらしい聖句を理解できない。人には二つの種類がある。霊の人と、生まれながらの人である。生まれながらの人は『苦い胆汁』の中にいる（使徒八・二三）。霊の人は神から生まれ、御霊によって歩み、深みへと出て行く。生まれながらの人は、霊のことを決して見分けられない。主のわざを聞いて理解することも決してない。これらのことは、人のあらゆる理解を超えている。この世の知恵、知性や科学は、神の霊的なことを決して理解できない。

知恵には二種類ある。この世の知恵は、神の前では愚かである。上からの知恵は、生まれながらの人には理解できない。神がご自分を愛する者たちのために備えられたものを思うことなど、その人の想像に浮かぶことさえない。

神はすでに備えておられ、それを御霊によって私たちに啓示してくださった。神の御霊は私たちを深みへ、神の深みにまで導き入れてくださる。これが、私たちが説き、行い、その上に立っているものである。御霊のわざは、生まれながらの人には愚かである。しかし、御霊を持っている人は、霊のことを見分けることができる。

今日、世には多くの種類の力があり、多くの霊が出て行っている。そして私たちは、霊をためすように言われている。霊は多いのである。すべては、尊い聖霊を通して神によって明らかにされる。私たちがかかわりたい霊はただ一つである。自分自身の霊でも、ほかのどんな霊でもなく、生ける神の御霊である。すべて神の御霊に導かれている者は、神の子である。御霊は私たちをあらゆる真理に、どこまでも導いてくださる。真理を得られる所へ導いてくださる。神の子供は、聖霊と火とのバプテスマ、すなわちペンテコステのバプテスマへと導かれる。

そうすれば、私たちは一つの深みから次の深みへと進むことができる。聖霊はイエス・キリストによって私たちに遣わされ、すべての賜物は聖霊を通して来る。イエスは言われた。聖霊は自分から語るのではなく、わたしについて語る。あなたがたに語り、きたるべきことを知らせる、と。私たちはそれを信じる。神に栄光あれ！

これが、ペンテコステの日に来られて、エルサレムをかき回された聖霊である。イエスは、聖霊が来るときには、いつまでも、終わりまでも私たちと共にい

る、と言われた。御霊のわざは、生まれながらの人には愚かである。その人はそれを理解できない。

神の声を聞こうとしないなら、あなたは生まれながらの人の声に動かされる。そして、自分の見るものを、興奮のせいか、何かほかの力のせいにしてしまう。聖霊が注がれるときには、いつも二種類の人々がいる。一方は納得し、罪を示されて、それを受け入れる。もう一方は言う。受け入れたら、違う生活をしなければならないし、世の見せ物にならなければならない、と。彼らは代価を払おうとせず、それで退きはじめる。初めは異なったわざに驚く。それから、受け入れようとしないので、侮りはじめる。聖霊のわざを侮り続ける者はみな滅びる。

世には、神から出たものではない、偽物の力が多くある。しかし偽物がある所には、いつも本物がある。本物でないものを偽造しようとする者はいない。それこそ、それが本物であることの確かな証拠である。

悪魔はさまざまな仕方で自分の力を見せて、人々を欺く。神の力のかわりに、何かほかの力を置こうとする。モーセの時代も、預言者たちの時代もそうだった。ある時代には神の力がとくに世に現れた。すると魔術師たちが自分の力をもって出て来て、似たように見えるものを見せた。一方は神であり、もう一方は悪魔であった。

モーセは民を導き出すために、エジプトへ行った。パロの前で杖を投げると、それは生きた蛇になった。魔術師たちは、自分たちにも同じ力があると言って、何本かの杖を投げた。すると、それも蛇になった。一方は神から出たもの、もう一方は悪魔から出たものであった。モーセはおじけづいて逃げ出したりはしなかった。神を知っていたので、たとえエジプトじゅうの蛇が自分の前に出て来ても、逃げなかっただろう。

モーセは一歩も引かなかった。私はそのことでモーセに感心する。私は臆病者が好きではない。結果はどうだったか。モーセの蛇がほかの蛇を、頭から尾まで飲み込んでしまった！　あとには何も残らなかった。神の力をくつがえして、何かほかのものをかわりに置こうとしている人々には、さばきの日が来る。全能の神の力が彼らを飲み込む時が来ようとしている。神の怒りの日である。

神の小羊は栄光の領域を離れ、この地上に下って来られた。足を痛め、ほこりにまみれ、疲れ、つばきをかけられるためである。主は言われた。「神よ、わたしは御旨を行うためにまいりました」（ヘブル一〇・七）。もし主がこれらすべてを忍ばれなかったなら、もし十字架まで行き通されなかったなら、聖霊は決して来ることがおできにならなかった。もし主が墓の中に残されていたなら、聖霊は決して来ることがおできにならなかった。主が死人の中からよみがえられ、天に昇られるとすぐに、聖霊は来ることがおできになったのである。

神は御子に、天の万軍の前で最も高い地位をお与えになった。それから、この体、すなわちご自分の宮に住まわせるために、聖霊を遣わされた。聖霊は大きな力である。聖霊は、風と水と火にたとえられている。

ペンテコステの日に、聖霊は旋風のように、激しい風のように来られた。聖霊は生ける水の川のように来られることになっている。また、火としても来られる。ペンテコステの日には、火のような舌がひとりびとりの上にとどまった。風と水と火、それは私たちの知る最も破壊的な力でありながら、最も役に立つものでもある。

神はそれらを用いて、聖霊の大いなる力を表しておられる。そして聖霊は、イエスが栄光を受けられた後に与えられることになっていた。私たちは聖霊の大いなる力の現れを、数多く見ている。そして、その栄光と威光について、『自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない』（使徒四・二〇）。これらのことを知るとき、私たちは聖霊の力と威光と栄光の証人となる。神に栄光あれ！

聖霊は大いなる力であり、この体の中に住んでおられる。聖霊はこの地上で、私たちの上に『永遠の重い栄光』を降ろしてくださる（第二コリント四・一七）。栄光に満たされると、それを外に出さなければ、私たちは破裂してしまう。私たちは何者か。ちりの虫けらにすぎない。私たちは神の栄光に耐えられない。神のひと息で、私たちは倒れ伏してしまう。

聖書には、神の栄光を垣間見た人々がどのように倒れたかが書かれている。聖パウロは、信心深い様子をしながらその力を否定する人々がいる、こうした人々を避けなければならない、と言っている。『終りの時には、苦難の時代が来る』

（第二テモテ三・一）。そして、ちょうど魔術師たちがモーセに逆らったように、知性の腐った人々が、神の子供たちに面と向かって逆らう。

終わりの時には、神のすぐ近くに生きる人々がいる。しかし悪魔にも働き手がいて、行われたしるしと不思議を、キリストの力のほかなら何の力のせいにでもする。神の小羊、ユダ族の獅子は、決してその力を失われたことはなく、これからも決して失われない。私は、悪魔のほうが神よりも力があると思っていることを、自分の行いで言うようなことはしたくない。

神の力と、ほかのどんな力とのあいだにも、驚くほどの違いがある。聖霊はキリストにあってのみ来られる。神を愛する者の体の中にだけ来られる。聖霊は私たちをとらえられるとき、私たちを、この世で最も甘美な経験へと連れて行ってくださる。神とふたりきりになるのである。聖霊は私たちに語られ、『きたるべき事』を明らかにしてくださる（ヨハネ一六・一三）。

すばらしいことだ！　神が私たちを力の下に置かれ、神が私たちをそこから出してくださる。だれも、この力を人に授けることはできない。それはイエス・キリストを通してのみ来る。力には二種類ある。その違いを知らない人々が、今日立ち上がって、知恵を愚かだと言うのである。

今日多くの人は、知的な信仰、歴史的な信仰を持っている。彼らは信じている。しかし、悪霊どもでさえ信じて、おののいている。信じることと信仰とは、別のものである。『文字は人を殺し、霊は人を生かす』（第二コリント三・六）。もし真理がおおわれているなら、それは滅びる者たちにとっておおわれているのである。

私たちは知的な想像を抱き、学問の課程を修めて、人の教えを学ぶことがあるかもしれない。しかし、聖霊のほかには、だれも私たちに「神のこと」の知識を与えることさえできない（第一コリント二・一一）。それは、生まれながらの人には愚かに見える。ときには聖霊が笑いの霊を与えられ、ときには涙の霊を与えられる。そして、その場にいる者はみな御霊に動かされる。

私は何千人もの人々の前に立ちながら、語ることができず、ただ泣いていたことがある。目が見えるようになったとき、至る所で人々が泣いていた。それが、聖霊が働かれる一つの仕方である。私は神の大いなる力に支えられ、手を挙げたまま一時間立っていたことがある。我に返って人々を見ると、その顔は輝いていた。

「神は人知を超えた道によって、その不思議なみわざを行われる」。これが私の礼拝する神である。イエスは言われる。「ここにわたしと、あなたがわたしに賜わった子たちとがいます」（ヘブル二・一三）。私たちは「しるしと不思議」を信じている。下からのものではなく、上からのものである。私たちは人々に驚かれる民であり、人々の中でしるしとなっている。

天も、いと高き天も、神をいれることはできない。それなのに神は、人の間に幕屋を張られる。来られて、私たちの内に住まわれるのである。神の賜物は私たちを通して現される。神がシオンに住んでおられることを、人々が知るためである。私たちには、御使の護衛がついている。主の使は、神を愛する者たちのまわりに陣をしく。『わたしたちの国籍は天にある』（ピリピ三・二〇）。そして私たちは、そこへ向かう途上にある。

聖霊はさまざまな仕方で働かれる。ペンテコステの日に、人々は弟子たちの頭の上に火を見た。弟子たちは酔った人のようによろめいた。それから、聖霊が彼らの舌をとらえられた。全能の神が百二十人のご自分の子供たちを通して語られ、彼らは神の大きな働きを告げていた。彼らは自分が何を言っているのかわからなかった。しかし、だれもかれも、自分の生まれ故郷の言葉で彼らが語るのを聞いた。

神が今日も同じことをしてくださるのを、私はうれしく思う。救われていない人々は、神の力を憎む。冷たく死んだ形式主義者たちは、神の力を理解できない。それは彼らには愚かなのである。彼らは、人々が興奮している、催眠術にかけられている、正気を失っている、と考える。

神の力と、催眠術の力や悪魔の力との見分けがつかないなら、神が私たちをあわれんでくださるように！　聖霊に対して言い逆らう者は、決してゆるされない。聖霊のわざを悪魔のせい、あるいは何かの汚れた霊のせいにすることは、ゆるされない。それが、ゆるされない罪である。

聖霊を悪魔呼ばわりしている人々がいる。彼らは気をつけたほうがよい。さまざまな種類の霊があり、さまざまな種類の力がある。そして生まれながらの人

は、聖霊のわざを理解できない。輝く顔、歌、ひとりのように声を合わせて一つの音を出す叫びがそうである（歴代下五・一三）。ときにはよろめいて倒れ、「酔っている、しかし酒のゆえではない」ようになる（イザヤ二九・九）。ときには「異言」を語る。

神をほめたたえよ。あがなわれた者たちの中には、聖霊に満たされている人々がいる。聖霊がその人たちを通して、あがなわれた者のほかはだれも歌えない歌を歌っておられるほどである。「働きは種々あるが、御霊は同じである」（第一コリント一二・四〜六）。パウロは言っている。御霊はあなたの内ではある仕方で、ほかのだれかの内では別の仕方で働かれる。あなたはそれが同じ御霊であることを知っているので、ほかの人が祝福されてもねたまない。御霊がどのように働かれても、体のすべての部分が益を受けるのである。

人々はこうしたことを眺める。私たちが神にきよい手をあげるのを見て、それを嫌う。彼らはあまりにも死んでいて、手をあげることもできないのである。パウロは言っている。『男は、どんな場所でも、きよい手をあげて祈ってほしい』（第一テモテ二・八）。詩篇の作者は言っている。『もろもろの民よ、手をうち、喜びの声をあげ、神にむかって叫べ』（詩篇四七・一）。

人々は劇場へ行って手をたたく。ところが、私たちが死に装束を脱いで手をたたきはじめると、とんでもないことだと思う。ダビデは力をきわめて、神の箱の前で踊った。ときには神の御霊が私たちの足に入られて、足を『めじかの足』のようにしてくださる（詩篇一八・三三）。

ダビデは言っている。『わが神によって城壁をとび越えることができます』（詩篇一八・二九）。空中へ飛び立つ備えをしているこの終わりの時には、なおさらである！　私たちはこの力を十分に蓄えなければならない。イエスを引き上げたのと同じ力が、いつの日か私たちを引き上げるのである。

私たちは、もっとこれが欲しいのではないか。この大いなる力が、もっと欲しいのではないか。人々が何と言おうと、愚かだ、催眠術だ、ほかの何だと言おうと、それでそうなるわけではない。御霊は私たちを深みへ、まさに『神の深み』へと連れ出してくださる（第一コリント二・一〇）。

旧約聖書に記されている多くのことは、新約における御霊のわざの型である。神がご自分の子供たちを通してなさった多くの動きは、愚かに見えた。神が預言者たちに伝えさせられたメッセージも、人間的に言えば、とても愚かに見えた。

神はノアに箱舟の設計図をお与えになった。窓は一つだけ、戸も一つだけであった。ノアは神の設計図どおりに箱舟を造り、人々のあざけりに耳を貸さなかった。人々は、ノアが正気を失いかけていると思っていた。ノアはみなの見せ物になったが、それでも造り続け、ついには神の知恵を証明した。

ノアは箱舟を造り、神は水を備えられた。人々が望むよりも多くの水、彼らには多すぎるほどの水である。何が起こったか。神はご自分を信じる者たちを箱舟に入れられ、戸を閉じられた。水かさが増し、箱舟は木々の梢より高く上った。私たちもいつの日か、そのように上って行く。神は今、箱舟を造っておられる。そして聖霊のわざは、それと戦っている人々には愚かなのである。

箱舟は漂い去り、世は沈んだ。ノアとその家族のほかは、すべてである。神が造っておられる箱舟に入る人は多くない。人々は「愚かだ」と叫んでいる。あるとき、大きな戦いがあった。敵はいなごのように集まっていた。神は、ご自分の民の中に臆病者が大勢いることを知っておられた。そして彼らをためされ、ついに敵に立ち向かう者は三百人だけになった。

神は、多くの者によってと同じように、少ない者によっても働くことがおできになる。神はギデオンに、何をすべきかを告げられた。ギデオンは兵を三組に分け、『手に手にラッパと、からつぼとを取らせ、つぼの中にたいまつをともさせた』（士師記七・一六）。そして言った。「わたしが合図をしたら、ラッパを吹いて、『主のためのつるぎ、ギデオンのためのつるぎ』と言いなさい」（士師記七・一八）。

彼らが指導者に従ったとき、あることが起こった。神には、いつも指導者がいるのである。合図とともに、彼らはラッパを吹き、つぼを打ち砕いて、たいまつを現した。そして、『主のためのつるぎ、ギデオンのためのつるぎ』と叫んだ（士師記七・二〇）。

叫び声と光に、敵は死ぬほどおびえて逃げ出した。しかし神は、彼らの中に混乱を送られた。三百人の「変人」の小さな一団が、敵の全軍を敗走させたのであ

る。彼らのしたことは、愚かに見えたではないか。しかし、結果はどうだったか。敵の全軍が打ち負かされたのである。

神は幻を用いられた。神はときどきそうなさる。神はギデオンを敵の陣営に下って行かせられた。そこでギデオンは、ある人が仲間に幻、あるいは夢を語るのを聞いた。『大麦のパン一つがミデアンの陣中にころがってきて、天幕に達し、それを打ち倒し、くつがえしたので、天幕は倒れ伏した』という夢である（士師記七・一三）。

もうひとりは、それを解いて言った。『それはギデオンのつるぎにちがいない。神はミデアンとすべての軍勢を彼の手にわたされるのだ』（士師記七・一四）。それでギデオンは信じて、勇気を得た。

自分をひとかどの者だと思っている神の子供たちよ、あなたがたは何者でもない。自分が何者でもないと悟るとき、神があなたのために戦ってくださる。ミデアン人と戦うそのやり方は、なんと愚かに見えたことか！　イスラエルはこう言うこともできただろう。つぼを割れば、たいまつで敵に居場所を知られて、射られてしまう、と。神が語られるときは、前進し、神に従いなさい。神はご自分の者を守ってくださる。

まことに、神は人知を超えた道によって働かれる。エリコの陥落を思い出しなさい。エリコは大きな城壁に囲まれ、民はみな中に閉じこもっていた。神はヨシュアに言われた。ヨシュアと戦士たちは、六日のあいだ一日に一度、町の周りを行進しなければならない。七人の祭司が、雄羊の角のラッパ七つを携えて、神の箱に先立って行く。七日目には町を七度巡り、祭司たちはラッパを吹き鳴らす。そして長く吹き鳴らしたら、民は叫ぶ。そうすれば、城壁は崩れ落ちる、と。

勝利のしるしが何もないのに、あれだけの行進をし、叫ぶには、信仰が要った。城壁が崩れた後なら、だれでも叫ぶことができる。人間的に言えば、これはみな、なんと愚かなことだったか。そう思わないか。戦いの準備は何もなく、ただ行進して雄羊の角を吹き鳴らすだけである。しかし、それが神のやり方であり、彼らは愚かにも神に従ったのである！　結果はどうだったか。城壁は崩れ落ちた。

このように、神のみことばを全体にわたってたどることができる。実に愚かに見えること、人々が笑うようなことが、たくさんある。しかし、それは神のやり方であり、神の僕たちは喜んで神に従った。その結果、神のすばらしい知恵が示され、目に見える力の現れによって勝利がもたらされた。

このような目に見えるしるしが現れたとき、人々は神を恐れるようになった。聖霊のわざについても同じである。神の道は、生まれながらの人には愚かである。御霊のわざも、生まれながらの人には愚かである。しかし、結果はどうか。

パウロは言った。『もしあなたがたのうちに、自分がこの世の知者だと思う人がいるなら、その人は知者になるために愚かになるがよい』（第一コリント三・一八）。後には、『主のまぼろしと啓示とについて語ろう』と言った（第二コリント一二・一）。パウロは、第三の天にまで引き上げられたと言った。それが、体のままであったか、体を離れてであったか、わからなかった。体ごと行ったのかどうか、わからなかった。あまりにも軽く感じられて、体をここに置いて来たのかどうか、わからなかったのである。

パウロは『神がご存じである』と言った（第二コリント一二・二）。そして、口に言い表せない言葉を聞いた。またあるとき、パウロは宮で祈っているうちに、神の力に打たれて倒れ、入神状態に陥った。この世に対しては意識を失っているように見えたが、生涯でこれほど神に対して目覚めていたことはなかった。

そのようなときにこそ、神の御霊は私たちを深みへ、神の深みにまで導き入れてくださる。ペテロは屋上で入神状態に陥り、神は三度ペテロに語られた。パウロとシラスは、回心した人々を訪ねるために出かけた。パウロは幻を見た。ひとりのマケドニヤ人が手を差し伸べて、『渡ってきて、わたしたちを助けて下さい』と言っていたのである（使徒一六・九）。パウロはそれが神の召しであるとわかったので、彼らは道筋を変えて、その地へ行った。自分たちの計画とはまったく違う所であった。

彼らが説教を始めて捕らえられたとき、自分たちは間違っていたのだと思ったかもしれない。しかしパウロは神を知っていた。そして、自分を召したのが神の声であったことを、決して疑わなかった。彼らはこう言うこともできただろう。ここに来なかったら、説教する相手が大勢いただろうに。こんな見知らぬ土地に

来て、牢に入れられ、足かせをはめられてしまった、と。悪魔が彼らをそこに入れたのだが、神がそれを許され、神が彼らを救い出された。

この終わりの時には、私たちの周りに多くのすばらしいことがある。生まれながらの人には理解できないこと、神の力の現れである。ほかの力もあり、多くの人はその違いを知らない。神の力は最も偉大であり、あなたの魂に平安をもたらす唯一の力である。

神は、あなたがきよく聖なる者となり、聖霊に満たされることを望んでおられる。しかし悪魔も、すぐここにいる。違いを知らないなら、あなたは悪魔の言うことに耳を傾けてしまう。悪魔はときに、光の御使を装って来る。エデンの園では、一つの言葉が世をくつがえした。「ない」という小さな言葉である。

神があなたに語られるとき、そのメッセージは書かれたみことばと一致する。聖霊は、みことばと一致しないことを決して言われない。天から来るメッセージは、みことばと一致していなければならない。そうでなければ、受け入れてはならない。

世には愚かに見える御霊のことが、悪魔を敵に回す。そして悪魔は、ときにとてもよく似たことをする。しかし、わかる人にとっては、驚くほどの違いがある。私は何度も何度も、御霊によって運び去られたことがある。

あるとき、私は七時間、神の力の下にあった。そのようなときに医者に診察されたことがあるが、正常な状態だとわかった。私の知る多くの人は、理解できないながらも、その力は催眠術ではないと正直に言ってくれた。

世界で最も偉大な催眠術師のひとりが、セントルイスの私たちの集会にやって来た。私が何も知らないうちに、彼はもう二、三日そこにいた。彼は、ひとりの男の人がそこに横たわっているのを見て驚いた。それは、何百人もの催眠術師が自分の力の下に置こうとした人であった。彼自身もやってみたことがあった。

彼はその人の所へ行って、さめさせようとしたが、できなかった。しばらくして、その催眠術師は私と会って話をしにやって来た。そして、友人たちを呼び集めて、自分には理解できないものを見つけたと話すつもりだ、と言った。

彼は言った。「もし神がいるのなら、これは神の力だと思います」彼は、だれをその力の下に置くことも、だれをさめさせることもできなかった。私が力の下に横たわっていたとき、医者たちが私を診察して、脈は規則正しく、血液は正常に流れ、心臓も正常な状態だと言った。

聞くところによると、人が催眠術にかけられると、血液は正常に流れず、その人は意識を失って、ただ言われたとおりのことをする。だれかがその人をその状態にし、またさめさせなければならないのである。

神はまさしく、ご自分の民を力の下に横たわらせられる。そして、彼らに語られるのである。まる一週間、神の力の下にあった人々を、私は知っている。神がこれらの真理を、私たちの心に確かに刻んでくださるように！

私は催眠術の力については何も知らない。人が催眠術にかけられるのを見たこともない。しかし、神の力、聖霊の力については、いくらか知っている。この力を送られるのは、神ご自身である。私たちはボタンを押すことはできるが、力を送られるのは神である。

興奮だなどと、よく言えたものだ！　この力は、神経を静めるのに世界で最もよいものである。この人々は神をほめたたえながら倒れ、そこにいるあいだもほめたたえ、起き上がってからもなお神をほめたたえている。

『息のあるすべてのものに主をほめたたえさせよ』（詩篇一五〇・六）。なぜ主をほめたたえよと言うのかと、人々は尋ねる。初めはそう感じなくても、「いけにえ」としてほめたたえなさい。しばらくすると、喜びに満ちた魂から、賛美はおのずから出て来るようになる。ハレルヤ！

聖書を調べるなら、私があなたがたに話したことが真実であるとわかる。私の言葉は、神のみことばに裏づけられなければ、何の価値もない。主が今夜このメッセージを私に与えてくださり、私はそれをあなたがたに伝えたのである。

御霊の力がこれほどそしられているときこそ、あなたがたが真理のために立ち上がる時である。船が危険にさらされると、船乗りたちは、臆病者でなければ前に出て来る。私たちも前に出ようではないか。逃げ出すのではなく。

私は福音を弁護するために、ここに立っている。私たちが忠実であるなら、万事は相働いて、神の栄光とならなければならない。御名をほめたたえよ。

第六十五章　神の火と栄光が宮に満ちる

ペンテコステの日の聖霊の注ぎの型

ウッドワース・エター夫人の説教

（要約）

歴代下五・一一～一四。『そして祭司たちが聖所から出たとき』（歴代下五・一一）。

彼らがどのように出て来たかを見ていただきたい。百二十人がさまざまな楽器を持っていたが、みな同じ一つの音を出していた。レビ人たちは白い亜麻布を着ていた。それはきよさを表している。『ラッパ吹く者と歌うたう者とは、ひとりのように声を合わせて主をほめ、感謝した。そして彼らがラッパと、シンバルとその他の楽器をもって声をふりあげ、主をほめた』（歴代下五・一三）。

ラッパを吹く百二十人の祭司がいて、歌うたう者たちと楽器もあった。しかし彼らはひとりのように声を合わせ、一つの音を出した。『主は恵みあり、そのあわれみはとこしえに絶えることがない』と言ったとき、雲はその宮すなわち主の宮に満ちた。祭司たちは雲のゆえに立って勤めをすることができなかった。主の栄光が『神の宮』に満ちたからである（歴代下五・一三～一四）。

勤めをするはずの百二十人の祭司は、像のように立ちつくした。そして聖霊が集会を取り仕切られた。建物全体が神の栄光で満たされた。

宮が神の栄光で満たされるという、この現れはみな、百二十人の祭司がラッパを吹いたことによってもたらされた。さまざまな楽器の音が、大勢の歌うたう者たちの声とまじり合った。その目的はただ一つ、神の栄光を現すことであり、みなが一つの音を出していた。

神は完全な調和を望んでおられる。だれも批判せず、だれもあら探しをせず、みなが神への賛美を響かせることである。そして白い衣、すなわちきよさのうちにいることである。私たちが小羊の血で洗われた白い衣を着て、神を迎えに出て行くとしよう。みなが同じ一つの音を出し、神の栄光を現すために出て行くとしよう。そうすれば神は、そのにぎやかな音をすべて重んじてくださる。

それは興奮ではない。神は賛美にこたえるために下って来られる。彼らがボタンを押すと、神の力が下った。その同じ力が、いつの日か私たちを救うか、滅ぼすかするのである。宮は主の力と栄光で満たされた。

そのとき、説教はなかった。歌があり、叫びがあり、主への賛美があった。賛美した者はみな、神の栄光を現した。宮は神の栄光で満たされた。人々はなお立っており、ソロモンは宮を献げようとしていた。この宮はイエスの教会を表している。また、私たちの体をも表している。「あなたがたは、自分の体が生ける神の宮であることを知らないのか」（第一コリント六・一九、第二コリント六・一六）。

七章から二、三節を見よう。それはペンテコステに似ている。ペンテコステを表しているのである。『ソロモンが祈り終ったとき』（歴代下七・一）。多くの人は、神が答えてくださることを決して期待しない。もし神が答えられたら、おびえてしまうだろう。ソロモンは手を伸べて神に祈り、神は彼の祈りを聞かれた。

ソロモンが祈り終えたとき、あることが起こった。あなたがたが力を恐れず、自分のすべてをもって神の側に立つ備えができているなら、神は現れてくださる。ペンテコステの民として、私たちはいつも「十分に祈りを積んで」いなければならない。そうすれば、すぐに神をとらえることができ、それが神の栄光のためであると確信できる。

『天から火が下って燔祭と犠牲を焼き、主の栄光が宮に満ちた』（歴代下七・一）。ある人々は、まるで神には栄光などなかったかのように話す。神の栄光が、いつの時代にも見られたことがないかのように話すのである。

パウロは言った。『もし石に彫りつけた文字による死の務が栄光のうちに行われ』たのなら、『まして霊の務は、はるかに栄光あるものではなかろうか』（第二コリント三・七～八）。

律法のもとでの栄光は長く続かなかった。しかし聖霊は、とどまるためにペンテコステに来られた。聖霊の務のもとでの現れは、はるかに大きな栄光を伴い、『はるかに栄光に満ちたもの』となるはずである（第二コリント三・九）。律法のもとでの力は、恵みのもとで私たちが持つべきものの影にすぎなかった。これは死の務ではなく、いのちの務であった。

宮は主の栄光で満たされた。人々はそれを見、それを感じた。それは影ではなかった。ここでも神の栄光が何度も見られたことを、私はうれしく思う。私たちの働きの中で、神の栄光が私たちの上に見られたことが何度もある。神はここにおられる。これが、あなたがたの見聞きしているものである。「これこそ」それであり（使徒二・一六）、これが父の約束であり、これが聖霊である。

祭司たちは宮に入ることができなかった。まったく入れなかったのである。主の栄光が主の宮に満ちたからである。『イスラエルの人々はみな火が下ったのを見、また主の栄光が宮に臨んだのを見て、敷石の上で地にひれ伏して拝し、主に感謝して言った、「主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」』（歴代下七・三）。

これにかかわるすべてのことが、この栄光ある時代を表している。使徒は、神は世々隠されていたご自分の教えを明らかにすることがおできになる、と言っている。主を十字架につけた人々は、キリストの神秘的な体について知らなかった。私たちの内にあるこの神のいのちを知らなかった。もし知っていたなら、主を十字架につけはしなかっただろう。

それは、人々に新しい契約を悟らせるために、聖霊が神のもとから下って来られたときに、初めて明らかにされることができた。死の務に属する栄光は、とどまるために来たのではなかった。その栄光は契約の箱から出た。箱には、律法、すなわち十戒の書かれた石の板が納められていた。

そこにはケルビム、すなわちふたりの御使がいた。互いに向かい合い、箱と贖罪所の上に翼を広げていた。そこは、神がご自分の宮に住まわれる所である。神の幕屋では、心の中には神のみことばのほかに何もないはずである。それは新しく永遠の契約であり、石の板にではなく人の心の板に、全能の神の指によって書かれている。

民が従ったときに神の栄光が下り、民がひれ伏したのなら、今日はどれほどの栄光があるはずだろうか。そのときには、幕屋は一つだけ、石の板は二枚だけであった。今日、あなたの体は生ける神の宮である。私たちの体は聖霊の宮である。そして神はご自分の指で、私たちの心にみことばを書いてくださる。

栄華をきわめた昔の宮は、私たちひとりひとりの体を表している。あるべき姿のとおり聖霊に満たされているなら、体は水の川にあふれ、それがほかの人々へと流れ出る。そして体は、神のために燃える。

主の栄光は箱の上に見られた。幕屋の中では、ともし火がいつも燃えていた。油が絶えず補われていたので、決して消えることがなかった。体という宮の中で、神は私たちの心にご自分の愛を置いてくださる。そして、その光をいつも燃やし続け、決して消さないことを望んでおられる。

信仰の通り道からあらゆる妨げを取り除いておくなら、私たちは絶えず油の補給を受ける。そして光は、いつも幕屋じゅうを照らす。石に書かれた神の言葉が栄光あるものだったのなら、恵みのもとでは、どれほど栄光に満ちていることか！　聖霊はいつまでもあなたがたと共にいてくださる。

イエスは言われた。私たちが主の戒めを守るなら、父と主とが私たちのところに来られて、一緒に住まわれる、と。父と子は私たちと共に住まわれ、私たちは聖霊にあふれる。人々に驚かれる民である。「ここにわたしと、あなたがわたしに賜わった子たちとがいます」（ヘブル二・一三）。完全な交わりと調和がなければならない。私たちはみな、一つの音を出さなければならない。ソロモンの祈りに、栄光が下った。その栄光を垣間見ただけで、人々は力を失い、群衆全体が倒れた。

人々が救われるように、いやされるようにと私たちが祈っているとき、ある者は叫び、ある者はほめたたえ、ある者は祈る。しかし、みなが同じ一つの音を出している。私たちは信仰によって血を身にまとい、主の栄光を垣間見る。人々が

力を失い、自分に臨む新しいいのちの下にひれ伏したとしても、何の不思議があるだろうか。

私たちが人々に驚かれる民であるのは、不思議なことだろうか。あなたがたはここで、これをみな見てきた。歌い、奏で、同じ一つの音を出しているのを。ここに来る人々は、とくに、これまでになく血の下に入ろうとして来る。その人々がイエスを垣間見るとき、ひれ伏したとしても、何の不思議があるだろうか。

私たちを罪に定める前に、神が変わられたこと、ご自分の力を取り去られたことを証明しなければならない。神の賜物と召しとは『変えられることがない』（ローマ一一・二九）。神は決して変わられない。きのうも、きょうも、いつまでも同じお方である。

だれにも、私たちを罪に定める権利はない。人々が催眠術にかけられている、気が狂っている、正気を失っている、私が魔法をかけた、などと言う権利はない。大いなる神よ、さばきの雷が人々を呼び覚ます前に、人々を目覚めさせてください！　私たちを拒む前に、聖書を捨てるか、賜物と召しとが教会から取り去られたことを証明するか、どちらかにしなければならない。

私たちは聖書の道を進んでいる。あなたがたには、ほかのことを教える筋合いはない。神のみことばにしっかりとどまらなければならない。私たちは、神のみことばのほかには何も掲げない。私にはそれで十分である。私はキリストの福音も、その力も恥としない。

私たちは、なんとすばらしい特権を与えられた民であろうか！　今日、だれもが神の祭司となることができる。私たちが主につながっており、主の言葉が私たちにとどまっているなら、何でも望むものを求めることができる。それはかなえられる。私たちはまことにすばらしい特権を持っている。主の力は、律法のもとでよりも百倍も大きく輝き出ている。そのときの力は、ペンテコステの型であった。

聖書を手に取って、これらのことを調べなさい。あなたがたは神の光を受けている。たとえ小さな弱い女から受けたのであっても、神はあなたがたがその光の中を歩むことを期待しておられる。主の御名によって、私たちはあなたがたに、これらのことが真実であると告げる。神の前に立つとき、人の意見など何になるか。人のひからびた意見や言い伝えは、みな滅びに至る。しかし、私たちがあなたがたに説いているのは、生きたみことばである。

ヨハネは獄にいたとき、イエスがキリストであるかどうか、少し疑いはじめた。そして弟子たちを遣わして尋ねさせた。『きたるべきかたはあなたなのですか』（マタイ一一・三）。イエスは、「わたしはある教会に属している」とか、「ある大学に属している」とは言われなかった。こう言われた。「行って、あなたがたがここで見たことをヨハネに報告しなさい。足の不自由な人は歩き、目の見えない人は見え、さまざまな病がいやされ、貧しい人々は福音を聞かされている。わたしにつまずかない者は、さいわいである」（マタイ一一・四～六）。人々は聖霊のしるしに腹を立てる。ねたみ、憎しみを吐き出し、神のわざを打ちこわそうとする。

もしヨハネがしるしによってキリストを信じなかったなら、どんな雄弁も役に立たなかっただろう。証人たちの告げることを信じなかったなら、彼は何も信じなかっただろう。あなたがたも同じである！　悪魔の偽物があり、そして本物がある。それは、あなたが生きているのと同じくらい確かである。

ただ傍観しているだけなら、私たちが神をほめたたえるのも、人々が聖霊に満たされて賜物を受けるのも、あなたには愚かに見えるだろう。しかし、それは初めから終わりまで、いつもイエスなのである。私たちはイエスを掲げ、その御名をほめたたえる。明るく幸せそうな顔を見、体から痛みが去るのを見る。そして、この地上で天国を味わっていると感じながら、喜んで家に帰るのである。

主の名によって悪魔に立ち向かいなさい。ときどき、私が立って説教していると、悪魔が私を倒して死なせようとする。私が悪魔に耳を貸せば、そうなってしまうだろう。私は主の名によって立ち向かう。すると悪魔は去らなければならない。私たちには、なんとすばらしい救い主がおられることか！

あなたがたは病人に手を置く。どこでとは書かれていない。主が私に命じられたのであり、私は人に従うより神に従う。死をもたらす蛇も、どんな毒も、あなたがたを害することはない。あなたがたは悪霊を追い出す。私はそのすべてを一つ残らず信じている。そして、そのすべてを見てきた。ハレルヤ！

私は主から任命を受けた。主が私を召されるまでは、出て行かなかった。バプテスマを受けて、資格を与えられるまでも、出て行かなかった。私はメッセージを天から受ける。何を話すことになるのか、私は知らない。しかし神は、ここにいるひとりひとりを知っておられ、ひとりひとりに何が必要なのかを知っておられる。そして、あなたがたに何かを与えてくださる。

イエスは弟子たちに、エルサレムにとどまっていなさいと言われたとき、力を約束された。その力は、彼らの生き方を変え、天の務めを果たす資格を彼らに与えるものであった。聖霊のバプテスマを受けた後、彼らは主に忠実であり、主の証人となるはずであった。

彼らは主をほめたたえながら、その山を下った。約束の成就を待つためにエルサレムへ帰るとき、彼らは大きな喜びに満たされていた。彼らは神に信頼していた。主がそう言われたので、彼らはほめたたえはじめたのである。

あなたは、イエスが自分の主、救い主であることを少しも疑わず、喜びに満ちているか。あなたは神のわざを行う力を求めている。力を着せられることを求めている。神は、火でバプテスマを授け、知恵と知識と賜物を与えると言われる。神はあなたに神の深みを悟らせてくださる。そして、あなたがそれを教え、それに生きるとき、神はあなたと共にいてくださる。

あなたは、この祝福を受けるのだと信じなければならない。彼らは『心を合わせて』いた（使徒一・一四）。神が私たちをそこにまで至らせてくださるように。神は、私たちが心を一つにすることを望んでおられる。水滴が流れ合うように、心が一つに溶け合うことである。

そのような小さな群れは、一日で町を揺り動かすことができる。ある者はこちらへ、ある者はあちらへ引っぱっているとき、私たちは心を合わせてはいない。「たぶんこうだ」「たぶんああだ」という声が聞こえるときも、そうである。そんな状態で、神があなたを祝福してくださると思うか。

あなたがたは初歩さえ理解できない。いったん新しく生まれた喜びを心に持つなら、それをだれかほかの人の内に見るとき、それが神から出たものだとわかる。心を一つにしなさい。神をほめたたえるべきことがどれほど多くあっても、私たちはいつも、もっと多くを求めている。

ペンテコステに、突然、激しい風が吹いてきたような音を彼らは聞いた。私たちが掲げているこの聖霊は、大いなる力である。聖霊は天から嵐のように来られた。器を満たす洪水の水のように、また百二十人の頭の上の火のように来られた。

炎のように分かれた舌のようなものが、彼らの頭の上にとどまった。それから聖霊は中に入られ、宮をとらえられた。機械をすっかりとらえられ、ねじをお巻きになって、神のために動かされたのである。彼らは酔った人のようによろめき、倒れた。この大いなる力が彼らの舌をとらえ、彼らを通して他国の言葉で語られた。

はるか昔、預言者たちの書に、こう書かれていた。『主は異国のくちびると、異国の舌とをもってこの民に語られる』（イザヤ二八・一一）。考えてもみなさい！　神がこれほど大いなることをなさるのである！　しかし、ある人々は信じようとしない。聖霊はそのようにして来られ、今日もそのようにして来られる。それなのに人々は、それは何かほかの力だと言う。

彼らは正気を失ったのではない。そのとき初めて正気を得たのである！　彼らは愛と慎みとの霊を受けた。キリストの思いを持つまで、私たちは決して健全な思いを持つことができない。これを理解できない人々は、こうしたことは愚かだと言う。この世の知恵は神の前では愚かである、と私たちは教えられている。これは神の力であり、神の知恵であって、悪魔のわざではない。人々がそう言っても、それでそうなるわけではない。

神は完全に支配しておられた。神は入って来られ、彼らをとらえられた。聖霊は今日も世におられる。神の民に手を出す権利を持ちたいなら、その前に、聖霊が取り去られ、賜物と召しも取り去られたことを証明しなければならない。

今日愚かだと呼ばれていることこそ、救いを得させる神の力である。神と共に深みへ踏み出しなさい。パウロは私たちに告げている。主は天に昇られ、賜物を下してくださった。それは奉仕のわざのため、聖徒たちをととのえるため、キリストの体を建てるためである、と。

今日の教職者たちは、賜物を望まない。聖徒たち、すなわちクリスチャンたちは、体全体が建てられるために、聖霊のバプテスマを受ける。あなたがどれほど

多くを受けていても、そうである。神が働いておられるとき、神の子供たちはひとり残らず徳を高められる。神がだれかほかの人を通して働かれるなら、私は徳を高められ、励まされ、喜ぶ。

聖霊の働きは、イエスが共におられることの目に見えるしるしである。彼らはエルサレムから出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。そして主は彼らと共におられた。私はその言葉が大好きである。主は天におられるのか。そうである。しかし、主は私たちと共にもおられる。

主は彼らと共におられ、みことばを確かなものとされた。どのようにしてか。伴うしるしと不思議によってである。アーメン。彼らはどこへ行っても、顔が輝くのを見、だれかがいやされ、だれかが異言を語るのを見た。あなたがたが見聞きしているのは、これである。それは聖霊であり、奉仕のわざのためのものである。

イエスが私のかたわらにおられ、その愛の御腕が私を抱いていてくださることを知らなかったら、私は今日ここに立っていられないだろう。主がこの体に住んでおられることを知らなかったら、私にはその力がないだろう。これらのことが真実であると体験によって知らなかったら、私はここに立っていられないだろう。

私は真理を試してみた。それが神から出たものであることを知っている。私たちは、自分の見たことを語らずにいられるだろうか。私は御霊によって、また幻の中で、さまざまなことを見てきた。イエスを見た。天が開けるのを、婚宴を、御使の大軍を、神の栄光を見た。私はそれを見たのである。神に栄光あれ！　私は自分の話していることを知っている。あなたがたがここにいることよりも確かに、イエスが生きておられ、私のかたわらに立っておられることを、私は知っている。これらのことは真実である。

私はキリストの福音を恥としない。神に栄光あれ！　強い男たちがあなたがたに告げるべきだったことを、弱い女がここに来て告げるとき、あなたがたはそれをどう思うだろうか。私は、これらのことは真実であると言う。人々がそれを愚かだ、狂信だと言うなら、みことばによってそれを証明しようとする勇気があるだろうか。やれるものならやってみるがよい。

聖霊が世から、神の民から取り去られたことを彼らが証明できたなら、私は牢に入る覚悟がある。それまでは入らない。

第六十六章　踊りについての説教

真珠の門を開け

私たちは王の大路を進み行く
叫び歌い、目を覚まして祈る
怠けている暇も、待つ暇もない
金の門へと急ぎ行く
（おりかえし）
開け、開け、真珠の門を
開け、開け、真珠の門を
開け、開け、真珠の門を
あがなわれた者を通らせよ

ひとりびとりの頭に喜びと楽しみをいただき
祝宴の備えられた所へと進み上る
そこでは王の宴が開かれる
天の門に入るすべての者のために

汚れた者はその道を上らない
そこには獅子もいない、一頭も
ただきよい白い衣をまとい
輝くすまいへの備えのできた魂だけが行く

戦いを戦い、勝利を得て
戦いの武器をみな置き
金の竪琴をかき鳴らして歌い
勝利の王としてキリストに冠をささげる

御霊によって踊ることは、いつも勝利を意味する

ウッドワース・エター夫人

ダビデは力をきわめて、主の前で踊った。みことばは踊りに満ちている。聖書で踊りが語られるところでは、それはいつも主の軍勢の勝利を表している。踊りはいつも、神の栄光を現すためになされた。主は、力の霊と踊りを愛する心とを教会に置かれた。聖書が踊りについて語るところでは、どこでも、人々は霊感によって踊り、御霊に動かされていた。そして主はいつも喜ばれ、ほほえまれて、よしとされた。しかし悪魔がそれを盗み去り、自分の利益に用いた。この終わりの時に、神は天の水門から、大雨のように、高潮のように、ご自分の御霊を注いでおられる。いのちの大きな川が私たちの霊と体にあふれ、火と復活のいのちと神の力とをもって、私たちにバプテスマを授けている。主はご自分のわざ、異なったわざをなさっている。御霊によって踊ること、異言を語ること、そのほか多くの働きと賜物である。聖霊は、来たるべき王の最後のメッセージを、大いなるしるしと不思議と奇跡とをもって、確かなものとしておられる。聖書が踊りについて言っていることを注意深く読むなら、あなたは驚くだろう。そして、歌と音楽と踊りが、主の教会の中に、つつましくも聖なる場所を占めていることがわかるだろう。詩篇一四九・三を読みなさい。『彼らに踊りをもって主のみ名をほめたたえさせ、鼓と琴とをもって主をほめ歌わせよ』。『鼓と踊りとをもって主をほめたたえよ。緒琴と笛とをもって主をほめたたえよ』（詩篇一五〇・四）。『その時おとめたちは舞って楽しみ、若い者も老いた者も共に楽しむ』（エレミヤ三一・一三）。

ダビデは主の前で踊った

ダビデは力をきわめて、主の前で踊った（サムエル下六・一四）。妻はそれを快く思わず、ダビデをなじり、軽んじた。ダビデが、はしためたちの前で、いたずら者のように踊っていると言ったのである。ダビデを卑しい下劣な者のように言いなした。しかしダビデは答えた。わたしは人の前で踊ったのではなく、主の前で踊ったのだ、と。それは、ダビデにはもう世の人々のことも、彼らが何を思い、何を言うかも、目に入らなくなっていたことを示している。ダビデは神の栄光のために、まったく聖霊に動かされ、導かれていたのである。大群衆はみな祝福されたが、ミカルだけは違った。ミカルは死ぬ日まで子を産めない身にされた。このことから、ミカルが罪を犯したことがわかる。聖なる踊りの中にある神の力を軽んじて（今日もある人々がそうしているように）、それを肉や悪魔のせいにしたのである。そういう人々はいつも損をし、多くは死ぬまで暗やみの中にいる。

女たちが歌い踊る

ダビデ王の大勝利の知らせは、たちまち国じゅうに広まった。ダビデが巨人ゴリアテを殺し、ペリシテびとの大軍を滅ぼしたという知らせである。ダビデが敵を打ち殺して帰って来ると、女たちはイスラエルのすべての町から出て来た。そして大きな喜びをもって、楽器を手に、歌い踊りながら王を迎えた。さて、注意していただきたい。すべての町で、女たちは通りに出て、楽器に合わせて踊った。そこには男たちのことは書かれていない。おとめたちと女たちだけである。女たちは神の御霊に促されて、踊りをもって神をほめたたえ、神と王とをたたえて主の前に踊った。このようにして王をたたえるには、勇気が要った。しかし主は、昔の聖なる人々を通してそれを書き記され、尊いみことばの中に私たちへ伝えてくださった。そのようにして、ほほえまれて、よしとされたのである。

使徒三・八。彼は踊り上がって立ち、神をほめたたえた。使徒一四・一〇。サウロが『自分の足で、まっすぐに立ちなさい』と言うと、彼は踊り上がって歩き出した。

モーセの姉が楽器を奏でながら女たちを率いて踊る

出エジプト一五・二〇～二一。女預言者ミリアムはタンバリンを手に取り、女たちもみなタンバリンを取って、踊りながら、そのあとに従って出て来た。ミリ

アムは彼らに和して歌った。「主にむかって新しい歌を歌え。主は輝かしくも勝ちを得られた。主は馬と乗り手を海に投げ込まれた」神は、このときほど大きな奇跡を行われたことはなく、これほど大きな栄光の雲のうちにご臨在を示されたこともない。主のご臨在の霊感と光のもとで、彼女たちの体と霊のすべてが、愛のうちに注ぎ出された。女たちの大群衆を、女預言者であり指導者であるミリアムが率いて出て行き、踊りと叫びと音楽とをもって主をほめたたえた。彼女たちは、御霊からたった今与えられた、まだだれも歌ったことのない新しい歌を歌った。あなたはそれを愚かだと言うのか。そうではない。彼女たちは神の大いなる力のうちに、その力によって動かされながら、踊りと歌とをもって主をほめたたえていたのである。

モーセが民を率いる　民は御霊によって歌い踊る

モーセも同じように、音楽と踊りと、そのときのために御霊から与えられた新しい歌とをもって、民を率いた。同じように、今日も聖霊は神の聖徒たちの上に下られ、聖徒たちは同じように用いられている。一度も踊ったことのない人々が、聖なる踊りの名手になる。音符一つ見分けられない人々が、さまざまな楽器を奏でる名演奏家になる。目に見えない楽器の音が、しばしば壇の上から聞こえ、その音は会堂じゅうではっきりと聞こえる。神を恐れ、神の御前にあって言うが、その歌と現れは、人々の上に神への恐れをもたらし、聖なる静けさを臨ませる。異なったわざは、ますます多く現れている。それは、これらが何か新しいものであること、イエスがまもなく来られることを示している。また、主が花嫁に備えをさせておられることを示している。花嫁が引き上げられ、まもなく行われる小羊の大いなる婚宴で踊り、奏でるための備えである。花嫁はその用意をしているからである。

兄が音楽と踊りの音を聞く

ルカ一五・二五。兄は畑にいた。家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえたので、「いったい、これは何事なのか」と尋ねた。人々は言った。「あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなさったのです」兄は怒って家に入ろうとしなかった。しかし、祝宴と喜びはそのまま続いた。父は言った。「死んでいたのに、いなくなっていたのに、あなたの弟を無事に迎えたのだから、楽しみ喜ぶのはあたりまえである」だれもが私に同意するだろう。これは昔ながらの、聖霊によるリバイバルであった。いなくなっていた息子とは、御霊が暗やみから光へ連れ出された罪人のことである。聖徒たちは御霊に満たされている。

御霊によって踊ることは主から出ている

「私は、御霊によって踊ることを、なかなか受け入れられなかった。それが肉によるものではないかと恐れたのである。しかし間もなく、踊りと、目に見えない楽器の演奏とを生み出しているのは、人々の上にある『栄光の雲』であることがわかった。甘く美しい天の音楽が、しばしば聞こえた。私は何度か会衆に頼んだ。壇の上から（そこには楽器が一つも見えないことを人々は知っていた）この音楽を聞いた人は、正直に手を挙げてください、と。聖徒からも罪人からも、多くの手が挙がった。音楽の音が天の合唱を伴って聞こえると、死のような静けさが人々の上を覆った。しばしば、異言による言葉が一つ以上の言語で与えられ、その解き明かしも与えられた。聖霊によって人々が神の御前にいることを確信させられるのを見て、私は結論した。これはまことに主の異なったわざであり、類のない行いである、と。私は、最も名の知られた牧師たちが九人も、一度に壇の上で踊っているのを見た。彼らはそれぞれひとりで、目を閉じて踊っていた。しばしば、ある者は神の大いなる力に打たれて倒れた。これらのことが私を確信させた。足の不自由だった男女が、すばらしく優雅に踊りに加わるのも見た。五年間松葉杖をついていたひとりの婦人は、席に座ったままいやされた。その後、天の音楽を歌いながら、壇の上を踊りまわった。おとめも、若い男も、老いた男も、みな共に踊りに加わる。主をほめたたえよ。『わたしたちは喜び楽しみ』と言おう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意をしたからである（黙示録一九・七）。主は引き上げのために、私たちの死ぬべき体を生かしておられる」

第六十七章　ヨエルの預言による、終わりの時の聖霊の注ぎ

ウッドワース・エター夫人の説教

主は私たちのただ中におられる。静まって、神の声を知りなさい。主はその聖なる宮におられる。全地はそのみ前に沈黙せよ。主のすばらしいご臨在を、心から感じ取るように努めようではないか。私たちはみな、遅かれ早かれ、ひとりひとり主にお会いしなければならない。今、主と親しくなっておくのはよいことである。

使徒二・一七。この聖句は今日の私たちに当てはまる。『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし、若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう。その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう』（使徒二・一七～一八）。

『また、上では、天に奇跡を見せ、下では、地にしるしを、すなわち、血と火と立ちこめる煙とを、見せるであろう。主の大いなる輝かしい日が来る前に、日はやみに月は血に変るであろう』（使徒二・一九～二〇）。これはすばらしい聖句であるが、多くの人はこれを理解していない。ここには、ある時のことが語られている。そのときには、ある大いなるすばらしいことが起こり、人々は預言が成就しつつあることを知るのである。『終りの時には、わたしの霊を注ごう』（使徒二・一七）。そして天と地に、しるしが現れる。主が来られることのしるしである。『主の大いなる輝かしい日』が来る前に、聖霊が注がれる（使徒二・二〇）。

この預言は、イエスが地上に来られる八百年前に初めて語られた。ペテロはペンテコステの日に立ち上がり、この預言を繰り返して、それを確かなものとしている。聖霊の霊感を受け、頭から足まで聖霊に燃やされ、火の舌で語りながら、ペテロは、これらのことは終わりの時に起こると言った。

私たちは、神のみことばによって、またしるしによって、今が終わりの時であると信じ、また知っている。ペテロが語ったまさにその時、起こる大いなることによって、私たちが知ることになっていた時である。私たちこそその民であり、今がその時である。『主の大いなる輝かしい日』が世に突然臨む直前の時である（使徒二・二〇）。私たちは、自分たちがその民であると信じている。いや、それを知っている。私たちには、このように信じる権利がある。それは神のみことばに基づいているからである。だれにも、男であれ女であれ、私たちの教えを非難する権利はない。何かの仕方で私たちに害を加える権利もない。私たちの教えることが真実でないと、神のみことばによって証明されるまでは、そうである。

あなたがたは、私たちの言うことを聞くべきである。それから同じ神のみことばを取り、それによって、私たちの教えることが真実でないと証明してみなさい。できるものなら、である。これらのことは神から出ている、と私たちは言っている。そのゆえに私たちを詐欺師、偽善者と非難する権利を持つ前に、まず証明しなければならないことがある。大いなる奇跡の力のすべてをもって働かれる聖霊が、もう取り除かれたということである。

牧師でも弁護士でも、だれかが壇に立つとしよう。そして、聖霊とその大いなる奇跡の力が教会から取り去られたことを、神のみことばによって証明するとしよう。そのときには、私たちは牢に入る覚悟がある。それまでは入らない。そんなことはできない。神は決してご自分の賜物を取り消されない。神は決して変わられない。私の聖書には、『イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない』とある（ヘブル一三・八）。聖霊の働きのほかにも、今が終わりの時であるとわかる道はたくさんある。

ヨエルは終わりの時について語りながら、多くのことを告げている。今日ここで話すことはできないが、それらは、今がその時であることを示している。ナホムは、この時が来ると、それは『その備えの日』になると告げている（ナホム

二・三）。患難が来る前に、まず人々がこの世から取り去られるように、人々を備えさせる日である。

洪水の前に、ノアは箱舟を造るように命じられた。ノアが箱舟を造ったのは、わずか五年であった。もっとずっと長かったと信じている人も多いのだが。ノアが箱舟を造っていた時は、その時代の備えの時であった。ノアは神の命令によって、自分と家族のための場所を備えていた。来ようとしている嵐の上に、大波と荒波の上に、安全にいられる場所である。古い世界が警告を受けていたのと同じときに、ノアは箱舟を造っていたのである。

イエスは、その備えの日を、この終わりの時のこの時代にたとえておられる。それは短い期間であり、すでにしばらく前から続いている。地には大いなるしるし、血と火と煙、地震、大いなる破壊があると預言されている。これらのことはみな、この数年のうちに地に臨んできた。神は、すべてのことに時を定めておられる。ダニエルは、終わりの時には知識が増し、多くの者があちこちと行き巡る、と言っている。そしてナホムは言っている。『戦車はちまたに狂い走り』、『彼らはたいまつのように輝き、いなずまのように飛びかける』（ナホム二・四）。（第三十六章「キリストの再臨についての説教」を参照）

イエスは、大いなるしるしと不思議とを伴わせて、聖霊を遣わされた。聖霊は人々をとらえられ、人々は酔った人のようによろめいた。彼らは酔っていたが、酒のゆえではなかった。彼らは『異国のくちびると、異国の舌とをもって』語った（イザヤ二八・一一）。これらのことは、ペンテコステが初めて来たときに、教会を力のうちに打ち立てるために起こった。それが前の雨であった。

終わりの時、すなわち備えの時に、神はペンテコステのときのように、再び前の雨を降らせてくださる。また同じ月に、後の雨をも豊かに与えてくださる。これをどう思うか。初代の弟子たちは、死の道を通って行った。私たちの体を満たし、霊と魂と体とを健やかにするには、御霊の二倍の分が要る。イエスはいなずまのひらめきのように来られる。そのとき主は、私たちのこの体を一瞬にしてお変えになり、ご自身の栄光の体と同じかたちにしてくださる。

『ここで、あなたがたに奥義を告げよう』。私たちはみな『変えられる』（第一コリント一五・五一）。そして、空中で主を迎えに上る。これらのことはいつ起こるのか。備えの日の終わり、患難が世に突然臨む直前である。私たちはしるしを見張らなければならない。集会をやめてはならない。かの日が近づいているのを見て、ますますそうしなければならない。神に栄光あれ！　ユダヤ人は、このことをいくらか理解していた。彼らは互いに言う。私たちは傷つけられ、多くの苦難を通って来た。さあ、主に帰ろう、と。『主は、ふつかの後、わたしたちを生かし、三日目にわたしたちを立たせられる』（ホセア六・二）。聖霊は、ペンテコステに初めて注がれた。

今、私たちは、キリストが御国を打ち立てられてから二千年目の終わりに来ている。ユダヤ人はどうか。今日、ユダヤ人はパレスチナで大きな自由を得ている。何千人も帰って行って、荒れた所を建て直しているほどである。今日そこには近代的な設備があり、彼らは何かを待ち望んでいる。それが何であるかは知らないのだが。患難の後、ユダヤ人は主に立ち返る。

『終りの時には、わたしの霊を注ごう』（使徒二・一七）。数滴を振りかけるのではなく、すべての人に注ぐのである。大雨である！　まさに終わりのときにである。それは、聖徒たちが取り去られるまで続く。それから患難が地に突然臨む。そのしるしは『あなたがたの』とある。すべての人ではなく、あなたがたの中のある人々である。あなたがたのむすこ娘は預言をする。これはだれにでもわかるほど、はっきりしている。終わりの時には、すばらしい伝道の務めがある。パウロは、キリストにあっては男も女も一つであると言っている。終わりの時には、男も女も預言をする。それが聖霊の注ぎの結果である。ほかのしるしもある。悪霊が追い出され、病人に手が置かれると、病人はいやされる。多くの者が新しい言葉を語る。もしだれかが誤って毒を飲んでも、害を受けない。終わりの時には、蛇も害を加えることができない。

今日人間に与えられている力を見なさい。人はいなずまさえ鎖につないだ。今は備えの日である。人々はあちこちと行き巡り、国の上を飛んでいる。急ぎなさい！　箱舟はまもなく完成する。そのとき神は「上って来なさい」と言われる。箱舟は水の上に上り、世は沈んだ。神は今日、霊の箱舟を備えておられる。キリストの体はまもなく完成する。完成すると、それは木々の梢の上へ上り、空中で私たちの主、王を迎える。私たちは栄光の王の備えの日にいる。そして、その花

嫁は用意をしている。喜び楽しもう。小羊の婚姻の時が近づいているからである。花嫁は白い亜麻布、すなわち義の衣を着なければならない。注がれた御霊を通して、大能の神の力を着なければならない。

花嫁は、花婿を迎えるために衣を整えている。この時代に生きていることのゆえに、私は主をほめたたえる。花嫁は、患難がこの罪にのろわれた地に突然臨む直前に、引き上げられる。花嫁は非常に美しくなければならない。花嫁は、最も上等な縫い取りの衣を着た王妃として描かれている。空中で主を迎えるときに花嫁が着る、あの上等な婚礼の衣、その衣装とは何か。花嫁は聖霊の賜物と宝石とで輝く。私たちはこの宝を土の器の中に持っている。しかし、賢い者は太陽の輝きのように輝く。賢い者は、これらのことがいつ来るのか、箱舟がいつ上ろうとしているのかを知る。主は、彼らに何の秘密も隠されない。花嫁と花婿のあいだに完全な信頼があるように、イエスはご自分の花嫁に秘密を明かしてくださる。主は神の深みを示してくださり、私たちは終わりが近づいていることを知る。あなたは、自分の婚礼の衣を自分で作らなければならない。人に頼んで作ってもらうことはできない。その時が来ようとしている。人はふつう、婚礼の日が近づくまで婚礼の衣を作りはじめない。花嫁はとても幸せである。父の家も、友人も、何もかも捨てて、花婿と共に行こうとする。外国へさえも行こうとする。花嫁は、後に残す人々を愛している。しかし花婿は、何にもまして愛しい。私たちも、イエスと共に行くために、どんなものでも、何もかも捨てる覚悟がなければならない。花嫁は人々の中から取り去られ、男も女も後に残される。あなたは「私はそれを信じない」と言うかもしれない。私はそれを信じる！

これらのことが真実だと知らなかったら、私が家も友人も、ただひとりの子供も後にして、ほかの人々のために生涯を費やすと思うか。神はこれらのことを、みことばによって、またしるしによって明らかにされた。私は、それが真実であることを知っている。神は全能であり、日ごとにこの真理に印を押しておられる。日ごとに人々の上に聖霊の印を押しておられる。聖霊は大いなるしるしと不思議とによって、私たちが神のみことばを説いていることを、あなたがたにあかしをしておられる。私は神を証人として言う。聖霊は、ここでのわざに印を押しておられる。ここでは日ごとにしるしが現れている。あなたがたはそれをどうするつもりか。聖書を信じるなら、それを受け入れなければならない。私たちには、立つべき永遠のみことばがある。そして、私たちと共におられるお方は、私たちに逆らいうるすべてのものよりも強い。

ペンテコステの後、彼らは出て行って、天に昇られたイエスが遣わされた聖霊を宣べ伝えた。そして主は、伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされた。私は神の前で言う。主はここで日ごとに、みことばを確かなものとしておられる。そしてこれらの奇跡は、天の記録に書き記されている。イエス・キリストは、いやすお方であり、バプテスマを授けるお方である。バプテスマのヨハネは言った。『わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで』、『このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』（マタイ三・一一）。その火のいくらかがこの場所を打ったことのゆえに、私は神をほめたたえる。あなたがたは美辞麗句を並べた演説をすることができる。そして悪魔は笑う。しかし、このわざは悪魔をかき立てる。『わたしの霊によるのである』と主は仰せられる（ゼカリヤ四・六）。

パウロは、自分の教えは人の知恵の巧みな言葉によらず、霊と力との証明によったと言った。それは世を揺り動かす。今日もまったく同じである。あなたは、私はこの力が好きではないと言う。そう、悪魔もそれが好きではない。私はこの働きに出て三十五年になる。私がいやしを説く前から、何千人もの人々が力に打たれて倒れた。悪魔をほえさせるほどの、御霊の大いなる注ぎがあった。律法の文字を取るとき、私たちが本当の福音をどれほど知らないかがわかる。それは脱脂乳のようなものである。御霊によらなければ、だれも神の深みを悟ることはできない。パウロは多くの知識を持っていた。しかしパウロは、この世の知恵は神の前では愚かであると言った。まことの知恵は天から来る。みことばは単純に説かれなければならない。イエスは、いと高き天の雄弁を思いのままに用いることがおできになった。それでも、最も教育のない人にもわかる言葉を使われた。

単純な仕方で説き、そして実証しなさい。みことばには、聖霊によって印が押される。多くの人は、私たちが人々に手を置くと、人々は催眠術にかけられるのだと言う。彼らが神の力をもっと知らないのを、私は残念に思う。サマリヤで大

きなリバイバルがあった。魔術師シモンはバプテスマを受けたが、彼らのうちだれも聖霊のバプテスマを受けていなかった。ペテロとヨハネはサマリヤへ行き、彼らの上に手を置いた。すると彼らは聖霊を受けた。使徒たちが手を置くことを通して、何かの仕方で、聖霊が彼らに授けられたのである。シモンは、その力が魔術とは違うことを認め、それを欲しがった。シモンは使徒たちに金を差し出して言った。自分が手を置く者がだれでも聖霊を受けられるように、この力を与えてくれ、と。

使徒たちはぞっとした。彼らは言った。『おまえの金は、おまえもろとも、うせてしまえ。神の賜物が、金で得られるなどと思っているのか』（使徒八・二〇）。聖霊とその力は神の賜物である。それを買うことはできない。今日多くの人は、シモンと同じほどにしか理解していない。使徒たちはシモンに、悔い改めなければ滅びると言った。おまえは『苦い胆汁』の中にいる（使徒八・二三）。神が人々の目を開いてくださるように！

使徒たちが手を置くことによって、あることが起こった。聖霊がその人々の上に下られ、彼らは大きな祝福を受けた。その時代には、聖霊が人々の上に下られると、大きな現れがあった。要するに、手が置かれると、あることが起こったのである。彼らは他国の言葉で語り、その口は笑いで満たされ、ときには死人のように倒れた。

私たちを厳しくさばく前に、神がこの力を取り去られたことを証明しなければならない。ペテロは、ペンテコステの日に彼らが見たことは、預言者たちが起こると言っていたことであると言った。なぜ人々が倒れるのかと、あなたは尋ねる。神の力の下で、私たちの小さな力など何になるだろうか。人々は神の栄光を垣間見るといつも、力を失って倒れる。パウロは自分の幻について、体のままであったか、体を離れてであったか、わからなかったと言った。神がご存じである、と。黙示録を書いたヨハネは、幻の中で神の栄光を見たとき、倒れて死人のようになった。ダニエルは幻の中で顔を伏せて倒れた。すると一つの手が彼に触れ、彼にひざと手をつかせた。あなたがたは、そのようなことを一度も見たことがない。それからダニエルは引き起こされ、力づけられて、大いなる幻を見た。ダニエルと共にいた人々は逃げたので、その幻を見なかった。しかしダニエルは逃げなかったので、それを見た。ただ、彼は倒れ伏した。神の力がほんの少し現れるだけで、私たちは力を失って倒れるのである。

あなたがたの中には、御霊の働きを理解しない人がいる。それが御霊のわざであるとわかるほど、神の近くにいないのである。ペテロは屋上で祈っていた。そして力を失って倒れた。天からの声が三度ペテロを呼んだ。私たちがこの世のことを感じなくなっているとき、神はときに十分間で多くを教えてくださる。ほかの方法なら何か月もかかって学ぶほどのことである。パウロは、クリスチャンたちを迫害しながらダマスコへ旅していたとき、天から光が照ると、地に打ち倒された。共にいた者たちも地に倒れた。パウロは、その光は太陽よりも明るかったと言っている。しかも、それは真昼で、太陽が最も強く照っているときであった。神の栄光が通り過ぎたとき、その人々はみな馬から落ち、ちりの中をころげ回った。パウロは目が見えなくなり、三日のあいだ見えなかった。

イエスはなきがらとなって墓に下られた。しかし主が死人の中からよみがえられたとき、兵士たちは神の力と栄光の現れに打ち倒された。私たちを罪に定める前に、神がもはや力と栄光を現されないことを証明しなければならない。最初の殉教者ステパノを思い出しなさい。彼は信仰と知恵と力とに満ち、聖霊に満ちた人であった。知恵ある人々は彼を言い負かそうとしたが、できなかった。それで彼らはねたみ、彼を除こうとした。彼らはならず者を雇った。そういう仕事には、そういう人間を使うものである。その者たちが、この大いなる神の僕について偽りを言った。

彼らはステパノを捕らえた。ステパノは大議会の前に立たされた。彼は自分を弁護しようとはせず、与えられた機会をとらえて、彼らにイエスのことを説いた。彼は聖霊に満たされていた。その顔は御使の顔のようであった。偽証して彼を死に追いやった者たちも、それを見た。ステパノは、うそつきや偽善者のようには見えなかった。彼は全能の神の僕であった。

今日でも、神の子供たちの顔に、ときにその光を見ることができる。ステパノは天を見つめて、神の栄光を見た。死人の中からよみがえられたイエスが、神の右に立っておられるのを見た。そして、そのことを人々に告げた。ああ主よ、この人々の目を開いてください。主の使が私たちの周りに陣をしき、イエスがその

ただ中に立っておられるのを、見させてください！　ステパノが見たことを告げると、彼らは歯ぎしりした。悔い改めるつもりはなかった。彼らはステパノを引きずり出し、石で打ち殺した。しかし主は彼を受け入れられた。それを許されたのも主であった。神は、ご自分の民が守られると約束しておられる。苦難が来るからといって、神が彼らを見捨てられたしるしではない。ステパノの敵は、神が彼を受け入れられたのを喜ばなかった。また、その顔が神の栄光で輝くのを見るのも喜ばなかった。彼の体は打ち傷だらけで横たわっていたが、彼は主を迎えに上った。彼は栄光に満ちた幻を見た。あなたは、彼が御座を見、イエスがそこに立っておられるのを見たと信じるか。人々は、こうしたことをまるで作り話のように語る。

神は、イエスが来られる前に、これと同じ「しるしと不思議」が起こると言われる。病人はいやされ、悪霊は追い出され、人々は異言を語る。主が来られる直前にである。私はこの時代を心からうれしく思う。イエスが前に来られたとき、主はユダヤ人の指導者たちをとがめられた。あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら、時のしるしを見分けることができない、と言われた。「どうしてわたしを待ち望まなかったのか」主が再び来られるときには、どれほど人々をとがめられることか。なぜしるしを見なかったのか。なぜわたしの使者たちに耳を傾けなかったのか。なぜみことばを見て、彼らが真実を語っているのか、詐欺師なのかを確かめなかったのか。イエスの前に立つとき、言いわけは通用しない。光は来たのである。起きて光を放ち、神に栄光を帰そうではないか。

大いなる聖霊のほかには、何ものも、あなたを雲の中に引き上げることはない。聖霊はこの死ぬべき体を生かしてくださり、体は変えられる。私たちには翼が生えるわけではないが、手も足も軽くされる。私たちの足は『めじかの足』のようになる（詩篇一八・三三）。走り、跳ね、ほとんど飛ぶようになる。私たちは復活のいのちの力を知る。私たちは、体が軽くされるほど聖霊に満たされる。ときどき私の体はとても軽くされて、地にとどまっていられないほどである。

私の足は地にあるが、手は御座に届いているように思える。キリストは死人の中からよみがえられた。主はよみがえりであり、いのちである。人々は、イエスの御名によって、イエスの血を自分の上に、病んだ体の上に受けたいと願っている。

あなたは今、信じるか。信じて、信仰によって主をほめたたえるなら、そのとおりになる。喜びを感じないなら、いけにえとして賛美をささげ、喜びを与えてくださるように神に願いなさい。汚れた霊が追い出されると、病は去り、復活のいのちが入って来る。そのとき、あなたは自分の小さな力を失い、ダニエルやヨハネやほかの人々のように倒れる。そして緑の牧場に伏すのである。

イエスのいのちが体を駆けめぐると、ある者は踊り、叫び、主をほめたたえる。神の権威によって、また自分自身の体験から、私はあなたがたに断言する。それはイエス・キリストを通して働く神の力であると、私は知っている。イエスがわざをなさるのに、長くはかからない。しかし私たちのある者は、そこにたどり着くまでに長くかかる。五分でわざはなされる。そのとき神の平安が川のようにあなたを流れ、あなたは聖霊による喜びを持つ。家に帰ったら、自分の罪のことを考えてはいけない。もう罪を犯してはならない。過去のことで思い悩むな。それは血の下にある。

神は私にメッセージを与えてくださり、ここに立ってそれを伝える力を与えてくださった。神は愛をこめて、空中で主を迎えるように、婚宴に連なるように、あなたがたに求めておられる。あなたがたは、そこで私と会うだろうか。主はまもなく来られる。主が来られるまで私は生きているだろうと、私はよく思う。これらのことを知っていることのゆえに、私は今日、主をほめたたえる。ときに人々は肉に陥って、度を越した現れをする。しかし、それでも、決して語らず、祈らず、歌わないよりはよい。罪に定めないようにしよう。みなで、もっと神に近づくように努めよう。それが、今日私が努めていることである。ああ神よ、私は今日、あなたの御子を掲げました。あなたが与えてくださったすべての力をもって、御子の御名をあがめました。見えない人々の目からうろこを取り除いて、明らかにされた真理を見させてください！　彼らが何度もそれを思い返しますように。これらのことがそのとおりかどうかを確かめに、あなたのもとへ行きますように。

あなたはご存じです。私はどれほど人々に、神の箱にも、主の油注がれた者たちにも手を出さないようにと懇願してきたことでしょう。死んだ形式しか知らなかった人々の目を開き、私があなたの僕であることを知らせてください。主よ、私は、彼らが天への道を歩んでいるので、天で喜びの鐘が鳴ることを願っています。しかし、彼らの意に反して彼らを連れて行くことはできません。小羊の婚宴で彼らに会えますように、私は祈ります。

第六十八章　エルサレムの大リバイバル

モントウェイトでのウッドワース・エター夫人の説教

使徒五・一一～一二。『教会全体ならびにこれを伝え聞いた人たちは、みな非常なおそれを感じた。そのころ、多くのしるしと奇跡とが、次々に使徒たちの手により人々の中で行われた。そして、一同は心を一つにして、ソロモンの廊に集まっていた』（使徒五・一一～一二）。

これは新約聖書に記された最も大いなるリバイバルであり、多くの点でペンテコステよりも大いなるものであった。ペンテコステのときには、彼らはみな心を一つにして一つ所に集まり、御霊の注ぎを待っていた。彼らはみな、同じ一つの音を出した。あなたがたがそこまで行くなら、神は国じゅうを揺り動かされる。

しるしと不思議とが行われ、ほかの者たちは、だれひとり、その交わりに入ろうとはしなかった。彼らはあまりにも火に満ちていたので、偽って「私はあなたがたの仲間だ」と言う勇気のある者はいなかった。神に打たれて死ぬのを恐れたのである。神は、力に、ご自分の力に満ちあふれた民を得ようとしておられる。そうすれば、行き過ぎた熱狂の火に満ちたほかの者たちが、「神が私を遣わされた」と言うことはない。

その結果はどうだったか。信じる者が教会に加えられたのか。いや、主に加えられたのである。男女とも大ぜいであった。こういう興奮、こういう狂信は女には似合いだ、と言う人々がいる。しかしここには、しっかりした考えを持つ男たちが大ぜいいた。

人々は病人を大通りに運び出し、寝台や寝床の上に置いて、ペテロの影なりと、そのうちのだれかにかかるようにした。なんと「変人」の集まりだったことか！　私たちも、ちょうどそのようであったらと思う。興奮はますます高まっていった。

その地方一帯が騒ぎ立った。エルサレム付近の町々からも大ぜいの人が病人を連れて集まって来た。そして、ひとり残らずいやされた。正しい仕方で来たので、いやされたのである。すばらしいリバイバルではないか。

その最中に、集会は解散させられた。大祭司とサドカイ人たちが使徒たちを捕らえ、獄に入れたのである。神をほめたたえよ。彼らはそこに長くはいなかった。神は御使を遣わされ、彼らを連れ出されて、宮に行って人々に語るように命じられた。

それには恵みが要ったではないか。すぐにそこへ戻り、みことばを漏れなく説いたのである。神のいやしも省かず、あらゆるしるしと不思議とを示した。朝になると、彼らは使徒たちを連れ出しに人をやった。獄には錠がかけてあったが、中にはだれもいなかった。捜していた人たちは、外で説教していたのである。

神に従うほうがよい。結果がどうなろうと、私たちは神に従う決心をしている。神の民は迫害に遭わなければならない。人々は、このわざは神から出たものではないと言う。それこそ、悪魔が聞きたがる話である。悪魔はただ笛を吹けばよい。すると悪魔の軍勢は、そのわざをするために走って行く。

神は、ご自分の民にご自分のわざをさせるまでに、何度も何度も笛をお吹きにならなければならない。それでも私たちには、『あなたがたのひとりは、千人を追い払うことができるであろう』という約束がある（ヨシュア二三・一〇）。悪魔はきよさと力を憎む。悪魔は迫害する。そして迫害こそが、人を天国にふさわしい者にするのである。

これは大いなるリバイバルであった。使徒たちはひとり残らずそこにいたようである。神は彼らにすばらしい力を与えられた。多くの大いなるしるしと奇跡とが、彼らによって行われた。彼らが心を一つにして説き、信じていたからである。そのために神の火が教会の上に下り、罪人たちは震えはじめた。

神の力が人々を震えさせるような仕方で説くことを、私は信条としている。きよさを説き、人々が前に出て来て神の御旨を行うように説くのである。『主を恐れることは知恵のはじめである』（詩篇一一一・一〇）。私たちが神を初めて知るとき、聖なる畏れが私たちの上に臨む。私たちは、神に働いていただき、私たちのただ中にご臨在を感じさせていただきたいと願う。そのときには、神にはご自分の民の中で働く力があると感じなければならない。そして、それに逆らうのは恐ろしいことである。

私たちは完全な武具を身に着けて、戦いに突き進まなければならない。「戦いを門まで追い返せ」（イザヤ二八・六）。人の助けはむなしい。イエスの傷ついたわき腹のほかに、隠れ場はない。それが、地上で私たちの逃れて行ける唯一の所である。私たちはそこで義の道を学ぶ。そして、罪人がこの隠れ場を受け入れなければ何が待っているかを知る。

旧約聖書には、神がご自分の民の中で働かれたことが記されている。だれかがメッセージを携えて遣わされたとき、それは人間的に言えば、しばしばとても愚かに見えた。その結果はどうだったか。神はいつもご自身を現され、ご自分のわざに印を押される。メッセージが伝えられると、神は超自然のわざをもって、目に見えないご臨在のしるしをもって現れてくださった。

神は奇跡的な仕方でご臨在を現された。それが異邦人の上に神への恐れをもたらした。彼らは、そのすばらしいみわざのゆえに、ヘブル人の神のような神はいない、と言った。神は恐るべき神であった。

新約聖書では、しるしと不思議が人々の前で行われた。イエスが行かれる所はどこでも、人々は主について行った。神が主と共におられ、奇跡としるしと不思議とによって人々の上に恐れをもたらされた。神が主を通して働かれたのである。

主は言われた。「わたしはこれらのことを自分からしているのではない。父がわざをなさっているのである」（ヨハネ一四・一〇）。使徒たちも同じことを言った。「聖霊の大いなる力によって、イエスがわざをなさっている」私ではなく、キリストである。今日も同じである。

今日のしるしと不思議にあっても、「私ではなく、キリスト」である。主はこの体に住まわれ、わざは聖霊の大いなる力によってなされる。「自分の体が聖霊の宮であることを、あなたがたは知らないのか」（第一コリント六・一九）。イエス・キリストは私たちの内に住んでおられる。私たちは神の発電所である。

神が大いなるみわざをなさったのは、御使の手によってではなく、使徒たちの手によってであった。そして、しるしが伴ったとき、人々は信じた。イエスが汚れた霊に出て行けと命じられると、霊は出て行かなければならなかった。聖霊の力が使徒たちの手を通して働いた。今日も神は、まさにそのようにして働かれる。

使徒たちは、迫害も剣も、ほかの何ものも恐れなかった。臆病者となってキリストの立場を辱めるよりは、どんな形の死にも立ち向かった。私たちが仕えているのは大能の神である。そして今日、天に昇られたイエス・キリストが、ここで私のかたわらにおられる。主はご自分の軍勢を勝利へと導いてくださる。戦いを門まで追い返そうではないか。

この宗派は、いつも悪く言われ、曲げて伝えられ、偽りを言われている。しかしイエス・キリストは、ご自分の軍勢を導いておられる。神はイエスが十字架に釘づけにされ、墓に葬られるのを許された。しかし主は、太陽のように現れ出られた。

神は使徒たちが捕らえられ、獄に入れられるのを許された。そこで神は、ご自分の力を現す機会を得られた。神は御使を遣わされて、彼らを救い出された。主の使は、主に属する者たちと共にいる。私たちの国籍は天にある。私たちは王の子供である。

私たちの周りには、昼も夜も、救いを受け継ぐべき人々に奉仕するために遣わされた、仕える霊たちがいる。ただ主の現れと引き上げの栄光とを待ち望んでいるなら、私たちは曲げて伝えられても、獄に入れられてもかまわない。門を勢いよく通り抜けて行くのを、待ち望んでいるのである。

使徒たちは迫害され、主が十字架につけられたエルサレムで、集会は解散させられた。集会は、町の目立つ場所の一つであるソロモンの廊で開かれていた。使徒たちはこの大きな廊にいたようである。人々は病人を寝台や寝床に乗せ、あら

ゆる仕方で大通りに運び出して、周りじゅうに寝かせた。病人、目の見えない人、汚れた霊に悩まされている人々、大群衆である。

私たちがこのようにして病人を教会の周りに連れて来たら、説教者たちはどう思うだろうか。第一に、第二に、第三にと、あのりっぱな説教をしているときに、だれかが病人を真ん中に下ろしたとしよう。彼らはすぐに警官を呼びにやるだろう。そうに決まっている。

中風の人が、説教しておられるイエスのもとに連れて来られ、屋根から下ろされても、集会はこわれなかった。主は私たちの模範である。主はそのようなことを喜ばれた。ご自分の力を現す機会になったからである。主は彼のすべての罪をゆるされた。それから、彼が起き上がり、床を取りあげて歩くようにされた。

人々は「栄光」と叫びはじめた。あなたがたがここでしているのと同じである。そうせずにはいられないのである。まだそうしたことがないなら、いずれそうするだろう。肺病の婦人が、寝間着のままここに運び込まれた。何を着ていようと、私はかまわなかった。彼女はいやされたのである。ハレルヤ！

中風の人がいやされたとき、人々は神をあがめた。今日人々は、「あんな変人の集まりは聞いたこともない」と言う。そのときの人々の声を聞かせたかったものだ！　私たちには、騒ぐだけの理由がある。死んだ人々は、決して大きな音を立てないではないか。墓地はあまり騒がしくない。

凍りついて、足に死に装束を巻いたままの人々がいる。神が死に装束を取り去って、私たちを自由にしてくださるように！　ダビデは力をきわめて、主の前で踊った。妻はそれを快く思わなかった。はしためたちの前でダビデが自分に恥をかかせたと思い、不平を言いはじめた。

ダビデは、はしためたちの前で踊ったのではなく、主の前で踊ったのだと言った。主のわざに手を出すのは危険である。ミカルは死ぬ日まで子供がなかった。それはユダヤの女にとって大きな失望であった。だれもが、主の母となることを望んでいたからである。

主のわざに手を出してはいけない。神の箱に手を出すことは、即座の死を意味した。聖霊に対する罪に気をつけなさい。それはゆるされない罪であり、決してゆるされることがない。ときには聖霊は、天からの激しい風のように来られ、人々の中に大きな騒ぎを起こされる。ときには静かに来られる。聖霊は、ここで私たちのもとに来てくださる。

あなたがたは傘をたたんで、バケツを上向きにしなければならない。神は器を満たされ、あなたをご自分のための発電所にしてくださる。そして神は、ご自身を力ある者として現してくださる。悪魔の要塞を打ち倒され、キリストの御国を建てられるのである。

あなたがたは説教する力を持ち、使徒たちの時代のように、しるしと不思議が行われる。主は彼らと共におられた。目には見えなかったが、主は彼らと共におられ、しるしと不思議とをもって、みことばを確かなものとされた。私たちが主に従うなら、主は決して私たちを見捨てられない。

伴うしるしと不思議。何に伴うのか。みことばの宣教にである。主はここにおられる。そしてあなたがたは、私たちが目に見えるしるしと呼ぶものによって、主を見る。ペテロは、「あなたがたが見ているこれが聖霊である」と言った（使徒二・三三）。あなたがたが望むなら、ここでそれを見る。神がすばらしい仕方で来ようとしておられるからである。

人々は使徒たちの頭の上に火を見た。御霊が語らせるままに、彼らが他国の言葉で語るのを聞いた。彼らが酔った人のようによろめくのを見た。聖霊が注がれる所ではどこでも、あなたがたはしるしを見る。

それは大いなる集会であった。病人は寝台や簡易寝台に乗せて運ばれた。そして神は、使徒たちの手によって、多くのしるしと不思議とを行われた。神への恐れが人々の上に臨んだ。幾千幾万もの人々が回心した。

彼らの名は天に記された。彼らは聖霊に、神の栄光に満たされた。神の力はあまりに大きく、人々は、病人すべてに手を置いてもらえるほど近づくことはできなかった。ペテロが、この神のいやしの運動の指導者であったようである。人々は、ペテロの影なりと、そのうちのだれかにかかるように、病人をできるだけ近づけようとした。

その力は聖霊によるものであった。イエス・キリストを信じる者は、その腹から生ける水が川となって流れ出るほどの力を持つ。聖霊は川のようである。ペン

テコステは使徒たちを満たした。そして人々は、ペテロの影を待っているだけでも、いやされたのである。

聖霊の力が病人たちを打ち、彼らをいやした。人々は驚いた。イエスは多くの力あるわざをなさった。そして使徒たちに、わたしを信じるなら、これよりも大きいわざをする、と言われた。

男たちよ、女たちよ、神はあなたがたがそこまで行くことを望んでおられる。神が人という器を通して働かれることが、わからないのか。私たちが神の中に飲み込まれるなら、神は私たちを用いてくださる。シカゴでは、人々は席に座ったままいやされた。はるか上の二階席でも、ある人々は死人のように倒れた。

私が話しているあいだにも、神の力が出て行っている。私が真実を語っていることを、あなたがたは知っている。それを信じ、受け入れて、もっとイエスをいただきなさい。もし私たちが取り入れ、取り入れるばかりで、外へ出さないなら、しぼる必要のあるスポンジのようになってしまう。私たちを通して流れ出るほど満たされようではないか。吸い込み、吸い込むばかりで、決して出さないのではいけない。

あなたがたの多くは聖霊のバプテスマを受けている。私が力をあちらへ送るあいだに、あなたがたは力をこちらへ送るべきである。二つがぶつかり合えば、何かが起こるだろう。あなたがたがそうするなら、私は立っていられないだろう。栄光！　神に栄光あれ！

そのリバイバルを思い描いてみなさい。彼らは気の狂った人々のようにふるまったか。エルサレムの最も善良な人々の何人かが、そのリバイバルに加わった。あらゆる階層の人々がそこにいた。人々は周りじゅうに横たわっていやされ、あるいはほかの人をいやしてもらうために連れて来ようと走っていた。そして大ぜいの人が救われた。

それは最も大いなるリバイバルであった。神のいやしが人々を引きつけたのである。人々がいやされるとき、それは単にいやしを意味するのではない。それは人々をキリストへ導くのである。宮の「美しの門」でいやされた人を考えてみなさい（使徒三・二）。

ペテロはその奇跡を題にして説教した。役人たちはペテロに手をかけ、イエスの名によって語ることも説くことも禁じた。しかしペテロとヨハネは、私たちはどうしてもその名によって説く、と言った。彼らが祈ると、聖霊が大いなる力をもって来られた。宮でのそのいやしから、大いなるリバイバルが生まれたのである。

ペテロの体から出た大いなる力に注意しなさい。その影さえ人々をいやした。パウロは異常な奇跡を行った。その体からハンカチや前掛けが送り出され、人々はそれによっていやされた。これは新約聖書のほかのどの奇跡とも違う。しかし神は今日も、同じことをしておられる。

聖霊は私たちの手を通して、私たちの体を通して働かれる！　私たちは何千枚ものハンカチを、国じゅうに、陸にも海の向こうにも送っている。それがなすわざについて、すばらしい話をすることができる。一枚のハンカチで五人がいやされた。

私たちがイエスを掲げるとき、神は使徒の時代になさったように、私たちを通してご自分の力を送ってくださる。起きて光を放ち、神に栄光を帰そうではないか。

私が初めて説教に出たとき、だれかのいやしのために祈ることになるとは知らなかった。しかし神は、私が神のいやしを説かなければならないことを示された。悪魔は私を引き止めようとした。しかし何千人もの人がいやされ、いやしを通して救われた。

私はイエスの名によって手を置く。あなたをいやされるのはイエスである。ときには力があまりに大きく、人々は即座にいやされて、跳びはね、躍り上がり、神をほめたたえる。主はここにおられる。私たちは、エルサレムで彼らが得たのと同じほど大いなるリバイバルを得ることができる。そして神への恐れが、人々の上に臨む。

神は、あなたが十字架へと進み、神に栄光を帰すことを望んでおられる。私たちはここで働きに取りかかりたい。まず、あなたの魂の中で主にわざをしていただきなさい。私たちはここで、エルサレムのような、多くのしるしと不思議とを伴うリバイバルを得るのである。

神のいやしを受けるのは、医者に行くのとは違う。帰る前に聖霊のバプテスマを受けなさい。そうすれば、家に帰っても後戻りしない。神に栄光あれ！

イエスとの語らい

静けさを破る音はなく
その場に入り込む姿もない
ただ愛するお方の御声と
わが王のお姿のほかは
（おりかえし）
尊く、優しく、聖なるイエスよ
わが心の祝された花婿よ
奥まったひそかな部屋で
あなたはご自分がどのようなお方かをささやかれる
この天の所で
深い安らぎのうちに静まり
私は喜びのうちに飲み干す
あなたが示そうとされるすべての愛を
深く礼拝する沈黙に包まれ
主イエスよ、私は身じろぎもできない
ほんのかすかなささやきも聞きもらさないように
愛の耳に届けようとされるささやきを
わが魂よ、満ち足りて憩え
幸いな所にたどり着いたのだ
救い主のふところで
愛しい御顔を仰ぎ見ながら

第六十九章　聖霊を汚す言葉

神の力の旋風はすべてを平らにする

ウッドワース・エター夫人
一九一三年七月六日、イリノイ州シカゴのストーン・チャーチにて
（『ラター・レイン・エバンジェル』誌から転載）

愛する友よ。私たちは、いと高き神の御前に集まった。エホバのための務めを果たしに来たのである。それをりっぱに果たそうではないか。私たちは永遠の世界で再び会う。厳粛な思いでいようではないか。神の記録係が、今夜ここでのあらゆる思い、あらゆる行いを書き留めている。神に逆らう者のものも、神の側に立つ者のものもである。だから、この世のはかないもの、過ぎ去って行くものから心を離し、この時、神と共に閉じこもろうではないか。

今夜、主が私たちの前に示されたメッセージは、マタイ一二・三一～三二にある。

『だから、あなたがたに言っておく。人には、その犯すすべての罪も神を汚す言葉も、ゆるされる。しかし、聖霊を汚す言葉は、ゆるされることはない。また人の子に対して言い逆らう者は、ゆるされるであろう。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でも、きたるべき世でも、ゆるされることはない』（マタイ一二・三一～三二）。このメッセージは今夜、まるでイエスがここに立っておられるかのように、イエスから私たちに来ている。いま栄光のうちに治めておられる神の御子のくちびるから出る、永遠のみことばを聞きなさい。そのみことばは、聖霊の力によって出て行くなら、主のくちびるから出たときと同じように力がある。この主題は、神のみことばの中でも最も深いものの一つとされている。「ゆるされない罪とは何か」という問いを、あなたがたはしばしば聞いたことがあるだろう。そして、それを犯してしまったのではないかと、ひどく案じている人々がいる。ヨハネは言っている。死に至る罪がある。これについては、願い求めよとは言わない。しかしほかの罪は死に至るものではなく、祈りによって、神はそれをみな洗い流してくださる。

神を汚す言葉も、神と人とに対するあらゆる種類の罪も、ぬぐい去られる。しかし、聖霊に対して言い逆らう者は、この世でもきたるべき世でも、ゆるされることがない。キリストがこう言われたのは、人々が、主は汚れた霊につかれていて、その霊によって力あるわざをしている、と言ったからである。だから、わかるだろう。聖霊の力あるわざのどれかを悪魔のせいにすることは、ゆるされない罪なのである。初代教会以来、今日ほど、人々がゆるされない罪を犯す危険の大きいことはなかった。ペンテコステの火が地を取り巻き、何万もの人々が聖霊を受けて、そのご臨在を感じているからである。しかもそれは、しるしと不思議と、御霊の種々の働きとによって裏づけられている。

男や女がこの聖霊のわざに触れ、そのお言葉を聞き、そのみわざを見る。そのとき、そこにある力を、神の御霊ではないほかの何かのせいにしてしまう危険がある。その力を罪に定め、神の僕たちを罪に定めてしまう危険がある。牧師たちは、男や女や子供が異言を語るのを聞いて、「ああ、それは悪魔のしわざだ」と言う。その言葉を、私たちはどれほどしばしば聞いてきたことか。さあ、神がそれについて何と言っておられるかを聞きなさい。彼らは聖霊に対して言い逆らっているのである。神はこの町で働いてこられた。そして、もっとはるかに大きな規模で働こうとしておられる。私たちは、もっと大きなしるしと不思議を見ることを期待している。聖徒たちが一つになって立ち、共に祈り、勝利を叫ぶなら、神はご自身が力ある神、救い主であることを示してくださる。

神は、いやしの力をもって来られるだけでなく、多くの力ある仕方でご自身を現してくださる。ペンテコステの日に、ペテロは言った。「神は、あなたがたが見聞きしているこのものを注がれたのである」（使徒二・三三）。彼らが聞いたこと、見たことから、三千人が、それが神の力であると認め、キリストに立ち返っ

た。ほかの人々は罪の自覚を押し殺し、「これは悪魔のしわざだ」と言って背を向けた。聖霊が注がれるとき、それはいのちからいのちに至らせるか、死から死に至らせるかのどちらかである。前に進む人々にとってはいのちからいのちに至らせ、聖霊を汚す人々にとっては死から死に至らせるのである。だから私たちは、聖霊の種々の働き、超自然のしるし、みわざに逆らって何を言うかに気をつけたい。ある人々はながめていて、「催眠術のようだ」「あれは動物磁気だと思う」と言う。ほかの人々には、ただの愚かなことに見える。聖書が生まれながらの人について言っているとおりである。「神の御霊のことは彼には愚かなものであり、御霊によって判断されるべきものであるから、彼はそれを理解することができない」（第一コリント二・一四）。

ペンテコステの日も同じであった。群衆は、弟子たちが御霊の力の下でよろめき、異言を語っているのを見た。ある人々は「彼らは酒に酔っている」と言ったが、ほかの人々は、神の大いなる力がそこにあることを知っていた。ここには、地のものではない力がある。人々を引き上げ、男や女を正しい者にし、よい隣人、よい夫、よい妻にする力がある。それは全能の神の力あるご臨在である。この人々の生活を見なさい。彼らはこの世の娯楽を求めない。神の力が彼らのうちに現れているのである。ペンテコステの日に、その力は何をもたらしたか。集まって来た群衆はみな驚いて言った。「こんなことは、まだ一度も見たことがない」みなが罪を示されはじめた。しかしある人々は、それを受け入れようとせず、キリストのために愚か者と呼ばれることを望まず、それを拒んだ。そして、とがめる良心をなだめるために、「彼らは酒に酔っている」と言った。彼らにはわかっていたのである。神の大いなる力がそこにあることを知っていた。もし疑いがあったとしても、神がそれに決着をつけられた。ペテロが兄弟たちの中に立ち上がって言った。「この人たちは、あなたがたが言うように酒に酔っているのではない。人は朝の九時に酔ったりはしない。そうではなく、これは預言者ヨエルが預言していたことである。『終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。若者たちは幻を見、老人たちは夢を見るであろう』。これが、あなたがたが今見聞きしている聖霊である」（使徒二・一五～一七、三三）。今夜も同じ聖霊である。聖霊は神の御霊である。聖霊は人格を持つお方であり、イエス・キリストの指図のもとに、その命令のもとに働かれる。キリストが命じられることのほかは、何もなさらない。私たちが聖霊を受ける用意ができると、イエスは聖霊を遣わされて、ご自分の賜物を私たちに分け与えてくださる。聖霊はこの宮をきよめられ、入って来られ、住まわれる。この体を満たされ、私たちのうちにある聖霊の力が異言を語らせ、ほかの仕方でも私たちを通して働く。さて、ゆるされない罪を犯さないように身を守るには、聖霊がどういうお方かを少しは知らなければならない。聖霊は、キリストが栄光をお受けになるまでは、来ることがおできにならなかった。キリストは人の体で、ほんの短いあいだ地上におられた。しかしペンテコステに、聖霊を通して、とどまるために来られたのである。

イエスは、父がイエスの名によって遣わされる聖霊が来られるとき、「聖霊はいつまでもあなたがたと共におられる」と言われた（ヨハネ一四・一六）。そして聖霊は、ご自分から語られるのではなく、聞かれることを語られる。ああ、私は聖霊を愛する。聖霊はいつもイエスのためにあかしをされ、私たちに力を与えるために来てくださるからである。聖霊は『助け主』であり、『真理の御霊』であって、『いつまでも』とどまってくださる（ヨハネ一四・一六～一七）。聖霊はすべてのことを思い起こさせてくださる。生まれながらの状態では、私たちはひどく忘れっぽい。しかし私たちには霊の思いがあり、神はみことばを私たちの思いに書きしるしてくださる。そして聖霊は、ちょうどよいときに、そのメッセージを私たちに届けてくださる。罪の中にあるこの人へのメッセージ、悲しみの中にあるあの人へのメッセージである。天からのメッセージによって、弱い者を励まされ、強い者を助けられ、いつも偉大な重荷を負うお方であるイエスを指し示してくださる。そして、ひとりひとりから生ける水の川が流れ出し、いやしの力が出て行く。

ペテロからは力が出て行き、その影がかかっただけで病人がいやされた。パウロからも力が出て行き、人々はその体からハンカチや前掛けを送り出した。それを病人にのせると、いやしの流れが出て行き、悪霊が追い出された。聖霊は「水」と呼ばれている。「わたしは、かわいた者に水を注ぎ、干からびた地に流れを注ぐ」（イザヤ四四・三）。栄光の高潮が、こちらへ押し寄せて来ている。私たちが空の器のようになれるよう、神が助けてくださるように。聖霊の力が私た

ちをあふれるほど満たすためである。聖霊は「火」「風」「水」として語られている。この世で最も破壊する力の強い三つのものであり、また最も役に立つ三つのものである。

私たちは、火も風も水もなしには生きていけない。旋風が来ると、男も女も青ざめる。聖霊による神の旋風が人々を打つとき、それはすべてを平らにする。人々は自分の金袋のことなど目に入らなくなり、あらゆる憎しみも悪意も、旋風がすべてを運び去るように吹き払われる。高潮が町を襲うと、すべてが水に沈む。それと同じように、聖霊の高潮の中では、すべてが沈むのである。ああ、私たちは神の力の旋風を求める。私たちの生活から妨げとなるすべてのものを吹き払う旋風を、私たちを神の中に沈める高潮を求める。

神は、火と風と水というこの大いなるものを、その力のかぎりお用いになる。そうして、聖霊の大いなる力がどのようなものかを私たちに示してくださる。私たちの体は聖霊の宮である。大きな機械が電気で動くように、私たちの体も、天から遣わされた聖霊の力によって動く。私たちの体は、これまでに知られた最もすばらしい機械である。ペンテコステの日に、聖霊は百二十人を満たされて、イエスのためにあかしをする力を与えられた。使徒たちの手によって、神は病人をいやされた。そして今日も、使徒たちの上にあったのと同じ力によっていやされる。神は生ける水の川を注がれる。私たちは、どのような人であるべきだろうか。

もし力がないなら、それを告白し、神が最初の弟子たちにお与えになった力を私たちにも与えてくださるように求めようではないか。主のもとに来る人々が、ペンテコステの日の弟子たちのように満たされるなら、生ける水の流れが私たちのうちをほとばしる。そして、地の果てまでも流れて行く。イエス・キリストは聖霊のバプテスマを受けられたが、その道のりを走り終えられるまでは、いっさいの権威を持っておられなかった。主は、十字架に行かずに引き返すこともおできになった。しかし主は最後まで行かれ、『すべてが終った』と叫ばれた（ヨハネ一九・三〇）。主の最後のわざは、この死に下られることであった。

しかし全能の神は主をよみがえらせられた。そして主がよみがえられたとき、いっさいの権威が主に与えられた。いっさいの権威である！　主は弟子たちをご自分の名によって遣わされた。そして言われた。主を信じる者は悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、病人に手を置く。毒を飲んでも（もちろん、うっかり飲んだときのことである）害を受けない。主は弟子たちに言われた。「あなたがたが見ていることに驚いてはならない。信じるなら、これらのことをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである」（ヨハネ一四・一二）。さて、ペンテコステが来たとき、彼らはみな屋上の間で待っていた。みな救われていて、みなきよく、心を一つにしていた。分裂もなく、論争もなかった。彼らは『父の約束』がどのようにして来るのかを知らなかったが、それを待っていた（使徒一・四）。すると突然、御霊が旋風のように来られて、建物全体を満たされた。力の大いなる高潮が彼らの上に向けられ、彼らはみな生ける水に満たされた。

御霊の火の舌が彼らの頭の上にあり、彼らはみな、聖霊が語らせるままに、異言を語りはじめた。駆け寄って来た人々は驚いて言った。「これはいったい、どういうことか。ここで語っているこの人たちは、みなガリラヤ人ではないか。彼らはこういう外国の言葉を知らないのではないか。それなのに、だれもが、自分の生まれ故郷の言葉で彼らが語るのを聞いている」（使徒二・七〜八、一二）。彼らに他国の言葉で語らせたのは、聖霊であった。主は言っておられた。「わたしは、異国の舌と異国のくちびるとで、この民に語る。しかし、それでも、彼らは信じない」（第一コリント一四・二一）。主はその言葉に力を込められた。人々は聞いて知ったが、それでもなお、あざけって、あの人たちは酒を飲んでいたのだと叫んだ。聖霊は、イエスについてあかしをするために来られた。御霊はペテロを通して、イエスの復活についての最初の説教をされた。ペテロは立ち上がり、聖書を持ち出して、この現れが聖霊によるものであり、聖霊がキリストについてあかしをされたことを証明した。

イエスがキリストであることを信じていなかった人々が、このとき罪を示され、その日、三千の魂が回心した。イエスはほかのだれもしなかったわざをなさり、この人の語るように語った者はこれまでにない、というほどに語られた。それでも、彼らは信じていなかったのである。エルサレムの多くの人々は、聖霊の

働きを見て信じた。そして、『祭司たちも多数、信仰を受けいれるようになった』（使徒六・七）。

聖霊は今夜ここにおられ、イエスを私たちのただ中にお連れくださっている。聖霊は今日、神の力によって病人をいやしておられる。悪霊は追い出され、イエスの力ある御名により、聖霊の力を通して奇跡が行われている。神は幻を与えておられる。預言者は言う。『幻がなければ民は滅びる』（箴言二九・一八）。今日人々は、主の再臨の幻を、小羊の婚宴の幻を、携え上げられることの幻を見ている。聖霊は涙と共に来られる。聖霊によって、あなたがたは地に臨もうとしていることのゆえに泣くのである。ああ、苦難のしるしがある！　信じない世は暗やみに投げ出される。しかし、世の悲しい有様に嘆き泣きながらも、私たちはイエスがすぐに来られることを知って喜ぶ。

私たちはモリーンで集会を開いていた。ある晩、それまで会ったことのない女性の伝道者がやって来た。私たちは聖霊のバプテスマについて話していた。彼女はそれについて聞いていて、それに飢え渇いていた。私は彼女に言った。「あなたは今夜バプテスマを受けますよ」私が立ち上がってみことばを語りはじめたとき、そうなりそうな様子はあまりなかった。彼女は私の前に座っていた。私が話しているあいだ、彼女は眠っているように見えたが、神の力が彼女の上にあった。みことばが出て行き、稲妻が落ちた。私が話し終えたとき、力がすばらしい仕方で彼女の上にあり、彼女は異言を語り、解き明かしをしはじめた。

それから彼女は、私がそれまで聞いたこともないほど悲しい嘆きの声を上げた。エルサレムの娘たちが宮の破壊を嘆いて泣いているかのようだ、と私は感じた。あまりに痛ましく、あまりに悲しげだったので、だれもが悲しくなった。私は言った。「これは、人々の上に臨もうとしている大きな悲しみ、大きな苦難、大きな苦悶と災いのしるしです」神は私に、それが苦難のしるし、臨もうとしている恐ろしい災いのしるしであることを示された。同じとき、ひとりの姉妹が、大地震を見たと言い、水が死体の上を流れ、通りを流れ下って行った様子を語った。翌日、新聞に、ジャマイカのキングストンで地震による恐ろしい破壊があったという記事が出た。

あなたがたは、その幻の中に神の御手を見ないか。それはすぐに実現して、人々を納得させるものであった。昨年ダラスで、主は、軍勢がぶつかり合ったときにトルコで起こった多くのことを私たちに示された。ダラスのある年老いた兄弟は、戦いが起こる前にその幻を見て、大ぜいの人が殺されるのを見た。

ある晩、恐ろしい爆発のような大きな音がした。六十人ほどの聖徒がそれを聞き、会衆はその衝撃を感じた。知らせが届くとすぐ、私たちは新聞でそれについて知った。聖霊は、賜物を、奇跡を、霊を見分ける力をもたらされる。私たちは御霊によって笑い、泣く。叫び、踊り、跳びはねる。体はとても軽くなり、ほとんど地に足が着かないほどである。御霊は天の音楽を与えてくださる。

コネチカット州ロングヒルでの前回の集会では、天の合唱が、私がそれまで聞いたどんなものにもまさっていた。それは一日に二、三度あり、少しの不協和音もなかった。聖霊がこの体を通して和声を奏でておられたのであり、その歌は地の歌ではなく天の歌であった。ときどき私が集会に少し遅れて行くと、丘を上って行くあいだに、天の合唱の響きが下のほうへ漂って来た。天から来るかのように聞こえた。それはあがなわれた者の歌であった。

神はご自分の子供たちに、小羊の婚宴で歌う備えをさせておられる。彼らは、あがなわれた者のほかはだれも歌うことのできない歌を歌う。外の者はだれも加わることができない。御霊は私に、主の来臨がすぐ近いことを示された。私は今、かつてなかったほどそれを知っている。神は二十五年以上前に、すばらしいバプテスマを私に授けてくださった。しかし私は今日、かつてなかったほど飢え渇いている。私は今日、かつてなかったほど大きな可能性を見ている。一つの段階から次の段階へと進んで行こうではないか。主人が帰って来たとき、自分の持ち場にいて、家の者たちに時に応じて食物を分けているのを見られる僕は、さいわいである。今があなたがたの機会、神のおとずれの日である。『花嫁はその用意をした』（黙示録一九・七）。宴会に行く服を仕立屋に注文することはできない。自分で作らなければならないのである。花嫁はその用意をした。それは、あなたがたが聞いたこともないほどすばらしい婚礼の衣となる。

清い亜麻布の衣を織り、「細かく織った亜麻布の細工」を縫い取りするには、腕が要る。そして花嫁の用意ができたとき、主は彼女のうるわしさを大いに慕わ

れる。宴会の広間には大ぜいの客が集まる。しかし私たちのうちのある者は、まだ用意ができていない。衣を持っていないのである。用意をする時が来た。ああ、小羊の婚宴のために装うのは、重大なことである。王の息子や娘を祝う宴会があるときには、それは大きな催しであり、楽士たちはずっと前からそのために訓練を受ける。さて、天で開かれようとしているこの宴会、この小羊の婚宴は、かつて知られた中で最も大いなる婚礼となる。

栄光の王が、その花嫁と結婚される。この世が楽しむあらゆるよいものを、神は一万倍にして私たちに楽しませてくださる。それを、あなたがたは知らないのか。御国でパンを食べ、ぶどう酒を飲むとき、それはかつて聞いたこともないほどの最も大いなる宴会、最もすばらしい催しとなる。花嫁は今、訓練を受けている。聖霊は鳩である。その歌は、嵐の前の鳩のくうくうという鳴き声である。嵐の前に、鳩がつれあいに、隠れ場を探そうと呼びかけているのを聞いたことがあるか。それと同じように聖霊も、くうくうという鳴き声、さえずる声で、私たちに隠れ場を求めるよう呼びかけておられる。地に臨もうとしている患難の嵐からの隠れ場である。主は私たちを訓練なさり、私たちの体を軽く、しなやかにしてくださっている。私たちが上って行けるようにである。私たちが聖霊に満たされるよう、主が助けてくださるように。私たちが上ることができるためである。聖霊こそ、キリストの教会の中にある唯一の動かす力、力ある働き手である。主はご自分の体を通して務めを進めるために、聖霊を遣わされた。神のための務めを果たせるように、天からの火をいただこうではないか。そして、ゆるされない罪を犯すことのないように、神の力を悪魔のせいにしないよう気をつけようではないか。

第七十章　ミシガン州ペトスキーでの第二回野営集会のまとめ（その一）

本の印刷中に開かれているペトスキーの集会

新しい本が印刷に回るにあたって、一ページだけ書き加える。北から南から、東から西から、多くの招きがあるなかで、御霊は二度目に私をミシガン州北部のペトスキーへ引き寄せられた。神は私たちのただ中で力強く働いておられる。しかも、まだこれから続くものがある。

証しと共に、驚くべき幻が与えられている。幕屋のあちこちに光が見え、また、御使たちが祭壇の上を舞っているのが見える。毎日、すばらしいいやしが起こっている。曲がった手足がまっすぐにされ、視力が戻り、足のなえた者が喜び躍り上がり、悪霊が追い出される。そして神は、このわざに印を押される。

だれが、神の選ばれた者たちに逆らって何かを言えようか。あかしをするのは御霊である。あざける者は黙らされる。信じない者はあっけに取られ、高ぶる者は低くされる。そして、『柔和な人たちは、さいわいである』（マタイ五・五）。

そうだ、神に栄光あれ。私は今、大きく広げられたこの天幕の下、風にそよぐ森の中にいる。そしてこの七月二十二日に、七十一年の生涯にもう一つの道しるべを数えることを許されている。脈は力強く打ち、足は御霊の呼びかけにすばやく応じる。ときには、この土の牢獄が砕けて、あがなわれた私の霊が永遠の至福へと舞い上がるに違いないと思われる。しかし、そうではない。魂を御国に導き、新しく生まれた魂の歌声を聞くことにまさる至福があろうか。「よきおとずれ」を告げ、福音のラッパを吹き鳴らす使者となることにまさる栄誉があろうか。

主はマリヤに、「行って告げなさい」と言われた（ヨハネ二〇・一七）。そして主は今も、ご自分の女の僕たちを重んじてくださる。聖なる御名に栄光あれ。

ウィスコンシン州ミルウォーキー、グリーンフィールド街一一六四番地のスティーブン・フェイスが集会に来た。彼は二年半のあいだ、炎症性リウマチにひどく苦しんでいた。足はひどくはれて形がゆがみ、絶えず痛んだ。この数年で、働けないために七百ドルほどを失った。ここへ来る旅では、人々が彼を体の不自由な人として助けた。主は、彼がいやされるためにこの集会に来なければならないことを、彼と妻にはっきりと示された。旅の途中で、神は彼に聖句をお与えになり、彼がいやされることを示された。人々が彼を祭壇の前に連れて来たとき、彼は痛みのために、また後戻りした自分の状態のために泣いていた。それまで何度も祈ってもらったが、悪くなる一方だった。私たちは、魂と体の両方のために、信仰による祈りをささげた。すぐに罪の重荷が転がり落ち、彼は痛みが足首と足から出て行き、はれが引くのを感じた。彼はただちに神をほめたたえはじめ、跳び上がって立った。そして壇の上で、痛んでいた足で跳びはね、床を踏み鳴らして、いやされたことを示した。

神の力が彼の上に臨んだ。涙をほおに流しながら、彼は神がしてくださったことを会衆に語った。御霊による彼の勧めはすばらしく、神が大いなる奇跡をなさったことを、すべての人に納得させた。

その後、彼は聖霊のバプテスマを受け、そのしるしとして異言を語った。また、異言による言葉を英語で解き明かしもした。

二年前に祈ってもらった多くの人々が証しをしている。甲状腺腫、腫瘍、弱い目、多くの不治の病のために祈ってもらった人々が、今日まったく健やかである。彼らは健やかであることを示すことができ、実際に示している。

御霊は多くの人をこちらへ導いておられる。関心は深まり、人々は尋ねる。『これは、いったい、どういうわけなのだろう』（使徒二・一二）。確かに、主の手が短くて救えないのではない。その耳が鈍くて聞こえないのでもない。主は今も宣言しておられる。『異国のくちびると、異国の舌と』をもって、わたしはこの民に語り、わたしは栄光を得る、と（イザヤ二八・一一）。イエスはきのうも、きょうも、いつまでも変わることがない。救い出すに強く、救うに力あるお

方である。『だから、兄弟たちよ。主の来臨の時まで耐え忍びなさい。見よ、農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている』（ヤコブ五・七）。

ミシガン州ペトスキーに後の雨が降っている

（ここには、F・W・ジュエル牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

集会の終わりの牧師の報告

（ここには、ジュエル牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ある宣教師が見たすばらしい幻

（ここには、N・ダイアモンド・ギルの幻の記録が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ペトスキーの集会のエター姉妹

（『ワード・アンド・ワーク』誌から転載）

（ここには、オーガスト・ファイクの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

エター姉妹の集会

ミシガン州ペトスキーで集会を開いているウッドワース・エター姉妹が、七月十八日に書き送ってきた。集会はすばらしく、力が下り、人々が救われ、いやされ、バプテスマを受けている、とのことである。日曜日にはデトロイトからふたりが来て、夕方にはふたりともバプテスマを受けた。また別のときには、若い夫婦がデトロイトから来た。夫はその日のうちに、妻は数日後にバプテスマを受け、ふたりともいやされた。昨夜は何人もがバプテスマを受けた。神が私たちの愛する姉妹を用いておられると聞いて、私たちはうれしい。彼女がこのモントウェイトで開いた集会を、私たちは決して忘れない。彼女がここにいたひと月のあいだに、多くの人がいやされ、祝福された。主をほめたたえよ。

（編者）

（ここには、J・R・クライン牧師の手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ミシガン州北部のエター姉妹

（ここには、J・P・ハワード夫人の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（ここには、ベンジャミン・ウィティックの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

ペトスキーの集会で見られたいくつかの幻

この集会の驚くべき点は、聖徒たちが見た多くのすばらしい幻であった

私は、十字架に釘づけにされたイエスを見ました。御手と御足の釘も、頭のいばらの冠も見ました。私は泣きだし、御足もとにひれ伏して叫びはじめました。主は、この罪深い世のために死なれたのだと言われました。私は、主が十字架から降ろされ、大きな墓に納められるのを見ました。墓の内側はごつごつしていました。それから、醜い顔をした男たちが大きな石を転がして、墓の入口に寄せるのを見ました。その石を転がすのに、二十人ほどがかかりました。私は、主が突然墓から起き上がられ、歩いて出て来られるのを見ました。石は転がしてありました。主は川べりに出て行かれ、何人かの男たちにお会いになって話されました。主は言われました。「わたしは父のもとに上って行く。わたしはまた帰って

来る。わたしが上からの力をあなたがたに授けるまで、とどまっていなさい」大ぜいの人が周りに集まっていました。それから主は上げられ、栄光のうちに雲の中へ入って行かれました。

ひとりの姉妹が御霊によって連れて行かれ、気がつくと御座の前で、もっと大きな力を求めて嘆願していた。それから彼女は、力がきらめく宝石のように、天幕の中の人々の上一面に降り注ぐのを見た。また、力ある御使が降りて来て、翼を広げて天幕の上を舞っているのを見た。

別の幻では、多くの御使が見えた。その輝きは太陽のようであった。御使たちは天幕の周りを舞っていた。その中央にイエスが立っておられた。その栄光は太陽よりも明るく輝いていた。御手は人々の上に差し伸べられていた。私たちが歌うと、主はほほえまれた。優しさと嘆願の表情が主の御顔に浮かんだ。それから声が語って言った。「あなたがたの声が、御霊による感謝と賛美となって出て行くとき、御使たちはあなたがたの歌を、かぐわしい香として、御座の前の父のもとへ運ぶ」この幻の美しさは、言葉でも筆でも言い表すことができない。

また別のときには、光、すなわち栄光が、地平線の少し上に昇るのが見えた。それは太陽のように見えた。その栄光と輝きはあまりに大きく、肉の目ではじっと見つめていることができなかった。光のすぐ上には輝く十字架があり、十字架の上には、虹の形に、金の文字でこう書かれていた。『見よ、わたしはすぐに来る。主の出現を待ち望むあなたがたには、義の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている』（マラキ四・二）。

虹の色をした光の輪が、火の柱から発して、天幕の周り一面に見えた。また、イエスが天幕の中で御手を差し伸べておられるのも見えた。

ある姉妹が自分の天幕で休んでいると、直径二十五センチほどの火の玉が見えた。火の玉は天幕を突き抜けて落ちて来て、大きな音を立てて破裂した。すると天幕は、きらめくダイヤモンドで満たされたように見えた。この同じ姉妹は、ある日の午前二時ごろに目を覚まし、アルト・コルネットの楽隊のような、このうえなく美しい音楽を聞いた。このような音楽は、御霊に満たされた聖徒たちにしばしば聞こえる。彼らは何度も御使の歌声を聞く。代価を払って主と共にどこまでも行く人々のために、神はすばらしいものを備えておられる。数年前のテキサス州ダラスでの私たちの大リバイバルでは、天から下って天幕の周りに落ちる火の玉が、何度も見られた。

イエスがご自分の軍勢を集結させておられるのが見えました。主は御力の白い馬に乗っておられ、まもなく天の雲を突き破って来られます。それはまさに現実です。私はあなたがたを見ているのと同じように、はっきりと主を見ることができました。イエスはすぐに来られます。この世の試練と患難は、まもなくあまりに大きくなり、神の子供たちはここにとどまっていられなくなります。

私は明るい光を見ました。その光の中に御座があり、御座には神が座しておられました。あまりに栄光が満ちていたので、神を顔と顔を合わせて見ることはできませんでした。イエスは言われました。「わたしはすぐに来る。出て行って福音を宣べ伝えなさい。わたしはあなたと共にいる。わたしはいつもあなたと共にいる」私は主に申し上げました。私は何も知らず、聖書も持っておらず、聖句もあまり知らないので、何もかも主が備えてくださらなければなりません、と。主は、私を満たし、道を開いてくださると言われました。主はもう一度、福音を宣べ伝えるかと私にお尋ねになりました。私は「はい」と答えました。

私はたくさんの金の楽器を見ました。イエスは言われました。「わたしは近ごろ、人々にこれを奏でさせている。わたしの霊を注いでいる。わたしはまもなく来て、わたしの花嫁を引き上げる。わたしはまもなく四方の風を解き放つ」イエスは少しのあいだ私から離れられ、ひとりの御使が私の前に立ちました。イエスは私の上の雲の中に、突然お現れになりました。主はその栄光のすべてをまとっておられました。大ぜいの御使が後に続きました。私は、聖徒たちが主を迎えに上って行くのを見ました。

いくつかのいやしの例

さまざまな病のいやし

（ここには、アビー・トーマス夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

第七十章　ミシガン州ペトスキーでの第二回野営集会のまとめ（その二）

いやされ、聖霊のバプテスマを受けた

（ここには、グレース・ボッグズの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

（ここには、M・バンフィル夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

その他

七月四日に、ふたりの若者が、何が起こっているのかを見に入って来た。ふたりはまもなく罪を示され、前に出て来て、心を神にささげた。まもなく力がそのひとりの上に下り、彼は壇に上って、御霊によって預言しはじめた。そして、イエスの足もとにへりくだってとどまっているようにと、聖徒たちを戒めた。聞くところでは、彼は十六歳ほどの、農家の男の子にすぎなかった。

ある夫婦が、はるばるノースダコタから来た。最初の晩、夫が集会に座っていると、いやしの力が彼の上に臨み、全身を巡った。彼は、自分がどのようにいやされたかをやって見せた。

ミシガン州アランソンから来たひとりの姉妹が、急性虫垂炎をいやされた。

オハイオ州ティフィンから来たひとりの女性が、六歳ほどの子供を、祈ってもらうために集会に連れて来た。その子は恐ろしい病を親から受け継いでいて、全身がかさぶたと膿のかたまりになっていた。母親の話では、膿が深さ一センチあまりにもなっているように見える所が、体のあちこちにあった。祈ってもらうと、その子はまもなく、いやされるきざしを見せた。一週間ほどで、体の大部分がいえた。それはすべての人にとって驚きであり、その子を診察した医者たちにとってさえそうであった。その後、母親から、子供はほとんどすっかりいやされたという手紙が来た。

嗅覚と味覚の回復

（ここには、ジョージ・シミンズ夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

脊椎の湾曲と神経衰弱のいやし

（ここには、ミニー・カップの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

すばらしいいやし

（ここには、ミニー・ボウマン夫人の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

まひと水腫のいやし

（ここには、ジョセフ・ウォーカーの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

二年前にペトスキーから行ったペンシルベニア州フィラデルフィアの集会についての伝道者の報告

（ここには、ハリー・W・タイラーの手紙が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない）

異言による言葉のいくつかの解き明かし

わたしは生きている者である。わたしの言葉はむなしくわたしに帰ることはなく、わたしの望むところを成し遂げる。

この集会は、受け入れる者にとってはいのちからいのちに至らせるさばき、拒む者にとっては死から死に至らせるさばきとなる。この日、この時に、わたしの言葉は、力あるしるしと不思議とを伴って宣べ伝えられなければならない。

見よ、わたしは、わたしの民が決して恥をこうむることはないと言った。わたしはあなたがたのただ中で一つのわざを行う。その前に、言い逆らう者たちは口を閉ざす。見よ、時は来た。わたしは、わたしの聖なる言葉の中で語った預言を、まさに成就しようとしている。神のわざを行う者は、その救い主のあらゆる力のうちに立ち上がる。

ときどき与えられている警告に耳を傾けなさい。災いが来ようとしている。そのとき、あなたがたは、神に会う備えをするために、この日々の一日でもあればと願うだろう。しかしそのときには、この日々は過ぎ去っている。さばきが来る。あなたがたはさばきの座の左に座る者に数えられる。そして審判者は言う。「のろわれた者どもよ、悪魔とその使たちとのために用意されている火の池に去れ」（マタイ二五・四一）。あわれみの戸が開いているうちに来なさい。

見よ、わたしは来る。あなたがたが岩と山とに向かって、御座にいます方の御顔から自分を隠してくれと叫ぶ時が近い。天と地はその御前から逃げ去る。地は酔いどれのように、よろめき揺れ動く。その日、あなたがたはどこにいるか。見よ、わたしはあなたがたに警告した。これらのことをあなたがたに告げた。

わたしの民よ、この場所から投げかけられた警告に耳を傾けなさい。うなじのこわい、心のかたくなな者たちよ。来ることのできるうちにイエスのもとに来なさい。あなたがたは、岩と山とに向かって自分を覆ってくれと叫ぶ日を見る。しかし、そのときには遅すぎる。ああ、警告に耳を傾けなさい。見よ、わたしはすぐに来る。すべての目がわたしを見る。あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。わたしは、再び来るとき、わたしを待ち望んでいる民を得る。婚礼の衣を着続けて、用意していなさい。今はふるい分けの時である。だれが立ちおおせようか。語るようにとわたしが与えた言葉に、だれが忠実であろうか。だれがわたしの心を行うであろうか。見よ、わたしはわたしの子を世に遣わし、カルバリの十字架の上で苦しみを受けさせ、血を流させ、死なせた。あなたがたがいのちを得、罪からあがなわれるためである。それでもなお、あなたがたは信じようとしない。しかし、立ち返りなさい。なぜ死のうとするのか。わたしの腕があなたがたを救うために伸べられているうちに、今来なさい。罪と不義のゆえに、神の怒りの暗やみがこの地に注がれる。あなたがたがわたしの子の血を足の下に踏みつけ、それを汚れたものとしたからである。ああ、ほかのすべてを忘れなさい。ただ、イエスが十字架の上で死なれたことだけを覚えていなさい。あなたがたがいのちを得、それを豊かに得るためである。

しばらくのあいだ、あなたがたはしるしを伴う教会を待ち望んできた。今、私たちはそのただ中にいる。信じる者にはこれらのしるしが伴う。今、あなたがたは言い訳をはぎ取られた。これこそ、来たるべきものとして預言者ヨエルが語ったことであり、あなたがたに対するあかしである。

見よ、目を上げれば、あなたがたは見ることができる。この世を見渡し、わたしの言葉を読んで、比べてみなさい。暗やみが地に忍び寄るのを見なさい。大きな戦争と疫病が、まさに今来ようとしているのを見なさい。私たちが終わりの時に生きていることを悟りなさい。ああ、あなたがたは、あなたがたの神に会う備えをしなければならない。

今、神の怒りがこの地に注がれている。それを知らないのか。わたしは、わたしの子供たちの額に印を押すために、この恐ろしい災いと恐ろしいことを引き止めている。あなたがたはそれを知らないのか。その日は近い。あなたがたはわたしの中に隠れていなければならない。もっと近くに来なさい。わたしの中に隠れ、わたしにあなたがたを守らせなさい。

地に住む者たちが嘆く日が近い。太陽が炉のように燃え、わたしの中に隠れているあなたがただけが、これらのことに耐えられる日が近い。見よ、わたしが疫病と災いとでこの地を打つ日が近い。あなたがたが今感じているのは、苦しみの始まりにすぎない。

わたしは異国のくちびると異国の舌とで語り、来たるべきさばきについてあなたがたに警告した。あなたがたの神に会う備えをしなさい。神の怒りがこの地に注がれようとしているからである。あなたがたは岩と山とに向かって、御座にいます方から自分を隠してくれと叫ぶ、とわたしは言わなかったか。見よ、あなたがたの家は見捨てられて荒れ果てる。めんどりがそのひなを集めるように、わたしはあなたがたを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに、あなたがたは応じようとしなかった。多くのしるしと不思議が、あなたがたのただ中で行われた。それでもなお、あなたがたはうなじをこわくし、心をかたくなにした。見よ、わたしの僕たちの手は、あなたがたの血について潔白である。彼らはあなたがたに警告し、嘆願し、来たるべきわたしの怒りを示した。それでもなお、あなたがたのうちのある者は信じようとしなかった。

別の集会で

回心した世界産業労働者組合の指導者を通して、御霊が異言で与えられた言葉

さあ、わたしの民よ、シオンへ進みなさい。イエスがあなたを呼んでおられる。信仰に堅く立って立ち上がり、平和と義の福音の備えを足にはいて走りなさい。前を見なさい。なおも前へ、神の小羊、汚れのないお方を見なさい。そうすれば主はあなたがたを導き出され、さらに先へ、なおも遠くへと導いてくださる。あなたがたは主に選ばれた者であり、あがないの日のために証印を押されているからである。

わたしはいつも、わたしの民を愛してきた。わたしは彼らのためにいのちを与えたではないか。道は狭いが、その道を歩んで救われなさい。さあ、行って、諸国民に宣べ伝えなさい。天国は近づいた、と屋根の上から叫びなさい。わたしに従う者はみな、救いのよきおとずれを宣べ伝えなければならない。わたしの子供たちよ、ここに来なさい。わたしに従って来なさい。わたしがあなたの羅針盤となり、案内者となり、医者となる。永遠のいのちを受け継ぎたいなら、信じて受けなさい。民よ、目を覚まして、イエスは救ってくださると叫びなさい。ペンテコステのときのように、それを告げ知らせなさい。「空を横切る炎」のように。あなたの行くどの国にでも、このメッセージを叫び伝えなさい。イエスを高く上げ、人々に神の小羊を指し示しなさい。

イエスが上げられるなら、大ぜいの人が救われる。わたしの民よ、わたしはあなたと共にいて、この世でもきたるべき世でも、あなたを強め、守る。アーメン。

結びのことば

さて、愛する読者よ、集会が閉じたので、ペトスキーでの神の驚くべきみわざと、伸べられた御手について、さらに書こう。

確かに、この町と周辺の地方の人々には、自分の罪を言いのがれる道がない。聖霊はまた、しるしと不思議と御霊の賜物とによって、霊的な示しと種々の働きとによって、みことばにあかしをされた。パウロは、それがすべての人の益になると言っている。

大会は休みなく六週間続いた。一日に三度の集会があり、ほとんど毎日、早朝の祈祷会もあった。

集会への関心は、初めから終わりまで、力においても人数においても増していった。イエスは言われる。「わたしが上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう。死体のある所、すなわち純粋で強い肉が掲げられている所には、わしが集まる」（ヨハネ一二・三二、マタイ二四・二八）。私たちは主をほめたたえる。神の聖徒たち、すなわちわしたちが、多くの地方から来た。牧師によれば、合衆国のほとんどすべての州から来たという。集会の主は、その栄光のご臨在をもってこの祝宴を重んじられ、絶えず天の恵みで食卓を満たしてくださった。ああ、主をほめたたえよ。主は敵の前で食卓を整えてくださる。敵はその祝宴を味わうことができない。ああ、見なさい。天から下った『生きたパン』の大きなかたまりの、美しい白さ、輝く明るさを（ヨハネ六・五一）。それは荒野のマナのように、食べた人々が死んでしまったものとは違う。

このパンを食べる者は、いつまでも生きる。ああ、見なさい。食卓は肥えたもので満ちている。久しくたくわえたぶどう酒の祝宴、髄の多い肥えたものと、よく澄んだ長くたくわえたぶどう酒の祝宴である（イザヤ二五・六）。私たちを主にあって力強くする強い肉を見なさい。主の麗しさが私たちのうちに見られるように、私たちを輝かせる油を見なさい。

集まり続けた多くの飢え渇いた心のゆえに、神をほめたたえよ。多くの人は初めはとても気おくれし、自分がふさわしくないと感じていた。しかし祝宴の主はいつもそこにおられ、彼らをお迎えになり、その恐れを追い払ってくださった。主がご自身を彼らに現しはじめられると、彼らはナザレ人を愛するようになった。そして主に思いのままに働いていただくと、主の愛と輝きが彼らを通して輝き出しはじめた。ついには、ステパノのように、彼らは御使のように見えた。

彼らが家路についたとき、その証しは叫びと涙と共に鳴り響いた。期待していたよりもはるかに多くのものを受けた。これからはあらゆる仕方で励み、イエスがまもなく私たちを引き上げに来られることを、言葉と生活とによって示さなければならない。彼らはそう証しした。

主は聖徒にも罪人にも、さまざまな仕方でご臨在を現された。カトリックのある夫婦がキリストに導かれ、いやしを受けた。また、神の輝きの栄光が彼らの部屋を照らし、その栄光によって、ふたりは聖霊のバプテスマを受けた。ふたりはおびえて隠れようとしたほどであった。多くの人が家で、また席に座ったままいやされた。多くの人が天幕の中に明るい光を見、天幕が燃えるような栄光に包まれるのを見た。主の火と栄光の現れが、天幕の中でも周りでも数多く見られた。しばしば天幕全体が、あるいはその一部が、神の栄光で照らされているのが見えた。主が壇の上に、また天幕のあちこちに見られた。

御霊に満たされた聖徒たちを通して、あがなわれた者のやわらかく甘い、鳩のような歌が、ほとんど毎回の集会で天幕の中に響き渡った。その歌は遠くの人々にも聞こえた。ヨハネが言っているとおりである。「それはとどろく雷のよう、あるいは海の逆巻く波のようであった」（黙示録一四・二）。人々は驚いてながめていた。死のような静けさが人々の上を覆った。それから神が天から、他国の言葉で語りはじめられた。小さな子供たち、年老いた男や女、若者やおとめたちを通して、ひとりずつ語られたのである。その言葉ははっきりとして、よどみなく、意味が通り、大いなる力があった。そして、どの言葉も、知られていない言語でその言葉を語った人と同じ声で解き明かされた。小さな子供たちが、自分の言葉をしばしば自分で解き明かした。みな神の大きな働きを語り告げ、多くの人が何も知らない、このうえなく力強い預言を引いた。彼らは、だれも聞いたことのない言葉で、イエスとその来臨についての新しい歌を歌い、それから英語で歌った。会衆は驚きと感嘆に魅了された。神への恐れが人々の上にとどまり、多くの人が神のご臨在に泣き、震えた。

主はご自身を現され、このわざに印を押された。

聖徒たちが日ごとに集まるにつれて、祭りの終わりの日まで、力と栄光は増していった。神の栄光が幕屋の上にとどまった。多くの牧師、伝道者、また戦いに出て行こうとしている人々が前に出て来て、賜物のために手を置いて祈ってもらった。すでに持っている賜物を燃えたたせ、新たに油を注がれ、力を着せられるためでもあった。彼らは失望しなかった。神の力がひとりひとりの上に下ったからである。何人かはバプテスマを受けて、はっきりとした異言を語った。そしてすぐに出て行って立ち、人々に神への恐れを抱かせるような仕方で説教した。この集会で多くの人が聖霊のバプテスマを受け、さまざまな賜物を受けた。多くの人が解き明かしの賜物を受けた。

ああ、愛する読者よ、悪い日々が私たちに臨んでいる。患難の恐ろしい嵐とやみが、今、激しい力で私たちの上を吹き渡っている。神の深みに、そうだ、もっと深く入らなければ、まもなく解き放たれる地獄のあらゆる力に立ち向かうことはできない。前に進もうではないか。低地にとどまってはならない。地上のすべてのものを喜んで捨て、父の家を離れ、主だけを礼拝しようではないか。そうすれば主は、かつてなかったほどご自身を私たちに現してくださる。ああ、花嫁の行列に加わり、嵐から逃れ、いのちの冠を受けようではないか。アーメン。

来たるべき王

シオンの軍勢よ、ラッパを吹き鳴らせ
すべての丘と野に警報を響かせよ
すべての国がこの警告を聞くまで
イエスが再び来られると
（おりかえし）
主は再び来られる
おお、シオンの栄光の王よ

主は再び来られる
われらの労苦に報いを携えて
陸にも海にもこのメッセージを送り出せ
全地に喜びのおりかえしを歌わせよ
まもなく、すべての目がその比類ない栄光を見る
イエスが再び地に来られるときに
おお、来たるべき王に会う備えをせよ
その血に洗われ、清く白い衣をまとって
主は喜びの冠を携えて来られる
りっぱに戦い抜いたすべての者のために

第七十一章　地で行われる憎むべきことのために嘆き悲しむすべての男と女に、しるしをつけよ（その一）

（エゼキエル九章）

ミシガン州ペトスキーでのウッドワース・エター夫人の説教

一九一六年七月

主がおよそ二千七百年前に、預言者にお与えになった幻がある。エルサレムが滅ぼされたときに起こったのと同じことが、今日起こっている。主はまた、わたしの耳に大声で呼ばわって言われた。「町を罰する者たちを近よらせよ。おのおのその手に滅ぼす武器を持たせて」これは、エルサレムを滅ぼした大軍のことを言っている。見よ、北に向かう上の門の道から、六人の者（権威ある者たち）が出て来た。おのおのその手に殺す武器を持っていた。彼らの中のひとりは白い亜麻布を着、その腰に物を書く墨つぼをつけていた（この人は、エルサレムの滅亡の前の、バプテスマを受けた聖徒たちを表している。彼らは内に聖霊を宿し、血と火とで人々にバプテスマを授けて回っていた）。そして主は、白い亜麻布を着て物を書く墨つぼを持っている者（この人は今日の教会を表している）をお呼びになって言われた。「町の中をめぐり、エルサレムの中をめぐり、その中で行われている憎むべきことに対して嘆き悲しむ人々の額にしるしをつけよ」また、わたしの聞いている所で、ほかの者たちに言われた。「彼のあとに従い町をめぐって、撃て。あなたがたの目は惜しみ見るな。またあわれむな。老人も若者も、おとめも幼子も女も、ことごとく殺せ。しかし、身にしるしのある者には近づくな。まずわたしの聖所から始めよ」そこで、彼らは宮の前にいた老人たちから始めた。主は彼らに言われた。「宮を汚し、死人で庭を満たせ。行け」そこで彼らは出て行って、町の中で撃った。さて彼らが人々を打ち殺していたとき、わたしひとりだけが残されたので、ひれ伏し、叫んで言った。「ああ主なる神よ、あなたがエルサレムの上に怒りを注がれるとき、イスラエルの残りの者を、ことごとく滅ぼされるのですか」主はわたしに言われた。「ユダの家の罪は非常に大きい。国は血で満ち、町は不義で満ちている。彼らは主について、『主はこの地を捨てられた』と言うからである」

今日も人々は同じことを言っている。主はもう見ておられない、と。神は言われる。「わたしの目は惜しみ見ず、またあわれまない。彼らの行うところを、彼らのこうべに報いる」見よ、白い亜麻布を着、物を書く墨つぼを腰につけていた人が帰って来て、報告して言った。「わたしはあなたがお命じになったように行いました」

そして主はわたしに言われた。「町の中、エルサレムの中をめぐり、その中で行われているすべての憎むべきことに対して嘆き悲しむ人々の額にしるしをつけよ」それが終わると、その人は帰って来て報告した。「済みました。わたしは成し終えました。最後のひとりに証印が押され、戸は閉じられました」

預言者は、イエスが来られるおよそ七百年前に、この幻を見た。その幻を見てから、今ではおよそ二千七百年になる。それはエルサレムの幻、教会の幻、世の有様の幻であり、とりわけ教会の有様の幻であった。私たちが今生きている時代は、世においても教会においても、それとよく似ている。大患難の直前の今日、同じ驚くべきことが起こっている。神の怒りが、人々の上に容赦なく注がれる直前である。同じことが今日起こっている。主は預言者に、教会の恐ろしい有様を示された。そして、これらのことがユダヤの国民に臨んだ。しかし今度は、それが全世界に臨む。ユダヤの国民は神に罪を犯していた。彼らは神の宝の民、神に召し出された民であった。神は言われた。「わたしがあなたがたを召し出したのは、あなたがたが最も大きな民、最も強い民、最も富んだ民、最もすぐれた民

だったからではない。あなたがたがすべての民のうちで、最も数が少なかったからである」神に選ばれた民は、いつも最も数が少なかった。

「わたしはあなたがたを召し、選び、あなたがたに心を寄せた」この民に律法が与えられ、預言者たちが遣わされ、それからキリストが来られた。神は、力あるしるしと不思議のただ中で、律法をお与えになった。宮が奉献されたとき、神のご臨在が見られた。神はお現れになり、祭司と預言者、天からの啓示、霊的なしるしと幻を彼らにお与えになった。御使が現れた。神の民が従っているあいだ、神は天から語られ、これらすべてのことをしてくださった。しかし、やがて彼らは誇り、高ぶり、思い上がった。そして、数が増えるのを誇りはじめた。彼らは、心に割礼を受けておらず神の前に正しくない、ほかの国々の人々を受け入れた。そして、その人々に教会の高い地位を与え、大きな特権を与え、神の聖なる器を任せた。その者たちは、鉄のつえで聖なる民を治めた。霊の宮である教会には、一つの戸しかなかった。入る道はただ一つ、正しい土台も一つであった。それは心と肉の割礼である。

「行って、彼らに警告しなさい。彼らは生ける水の源を捨てて、水を入れておくことのできない、こわれた水ためを掘った、と」彼らは人の知恵に従いはじめた。

神の栄光がエゼキエルに現れ、彼の髪の毛をつかんで持ち上げられた。そして天と地の間を運ばれて、エルサレムにお降ろしになった。神は彼に、恐ろしいことをよく見なさいと言われた。聖なる所は、へびの絵で満ちていた。今日の悪魔礼拝のような、汚れたものであった。神は彼にすべての憎むべきことをお示しになり、最も聖なる所に連れて行かれた。そこでは二十七人の者が神に背を向けて座り、太陽を拝んでいた。「さあ、行って、神の栄光が宮に満ちていたときの、栄光に輝く宮の設計図を持って行きなさい。この民に警告しなさい。栄光の宮の設計図を持って行き、彼らをそれと比べて、どこが足りないかを示しなさい。彼らが悔い改めるかどうか、見なさい」彼らは警告を受けた。

「人の子よ、わたしはあなたを異邦人に遣わすのではなく、イスラエルの家の民に遣わすのである」しかし彼らは、神の預言者が自分たちのただ中にいることを悟らなかった。預言者が立って警告しても、何の役にも立たなかった。やがて最後の預言者が来たが、彼らはその預言者を退けた。神の力を感じ、驚くべきしるしを見てきた彼らは、捨て置かれた。四百年近く、あるいはそれ以上のあいだ、イスラエルの子らには聖なる祭司も預言者もなく、幻も啓示もなかった。へりくだった小さな者がわずかにいただけである。彼らは言いはじめた。「いつまでなのか。もう私たちに告げることのできる者はいない。私たちには預言者も祭司もなく、幻も啓示もない」彼らはかつて神に選ばれた民であり、神は彼らと共におられた。しかし後戻りしたとき、彼らはつながりを失った。管が詰まり、生ける水が絶えた。そして彼らは、自分のためにこわれた水ためを掘りはじめた。人の富と知識である。それは神なしには憎むべきものである。

イエス・キリストが来られたときの有様は、そのようであった。彼らは四千年のあいだキリストを待ち望んでいたのに、来られたキリストを知らなかった。「なぜあなたがたは、この時のしるしを見分けないのか。あなたがたの預言は成就し、あなたがたは人の子が来る日々に生きている」しかし彼らは言っていた。「神はこの地を捨てられた。神は見ておられない。神は地を去られ、しるしと不思議はすっかりなくなった」そして彼らは人の知恵に従っていた。彼らは神の力を望まない。生ける水の源を捨ててしまった。宿営の中に叫びを聞くことを望まず、神の力を見ることを望まない。今もそのとおりである。

しかしイエスは来られたとき、「後の雨」のように、もう一度彼らに呼びかけをされた。しかし彼らはイエスをはねつけ、追い返した。今日の人々がしているのと同じである。そしてついにある日、イエスは彼らの上に御手を広げられ、泣いて叫ばれた。「ああ、エルサレムよ、来ようとしている嵐から、わたしはおまえを幾たび集めようとしたことであろう」（マタイ二三・三七）。今夜も主は同じことを言っておられる。しかし、あなたがたはあまりに盲目で、見ようとしない。あまりに耳が聞こえず、聞こうとしない。きょう、あなたがたの家は見捨てられて荒れ果てる。あなたがたの町は滅ぼされる。敵が攻め入って来る。あなたがたの所を荒れ果てさせるために、軍隊が攻め入って来る。血は川のように流れる。しかし主には、キリストを受け入れ、小羊に従ってきた民がいた。ある日キリストは、宮について語られたとき、彼らに言われた。「あの美しい宮が取りこわされ、一つの石も他の石の上に残らず、町が滅ぼされる日が来る」（マタイ二

四・二)。すると彼らは、主の再臨と世の終わりには、どんなしるしがあるのかと尋ねた。そこでイエスは彼らに話された。

イエスはまもなく来られる。そして私たちは、しるしに心を向けている。主は、どのようにして知ることができるかを彼らに話された。主はお与えになり、言われた。「これこれのことが起こるのを見たら、山へ逃げる備えをしなさい。逃れる用意をしなさい」それから、ほかのしるしを、そしてついに一つの特別なしるしをお与えになった。「このしるしを見たら、逃げる備えがすっかりできていなくても、屋上にいて家に何かを残していても、それを取りに行かず、山へ逃げなさい。門が閉じられ、あなたがたは閉じ込められてしまうからである」彼らは神の言われたことを信じた。信仰によって神のみことばを受け入れた。そのみことばを信じ、責任を感じた。彼らは自分の同胞を愛していた。そして、同胞がイエス・キリストを受け入れなければ逃れられないことを知っていた。彼らは、肉による同胞と隣人たちのために嘆き悲しみ、来ようとしている災いのゆえに泣いていた。それでも彼らは、神と共に閉じこもっていた。彼らには神のしるしがつけられていた。世を青ざめさせ、震えさせることが起こるのを見たら、頭をもたげて喜びなさい。まもなくそれは終わるからである。だから神の聖徒たちは、これらのことを見て嘆き悲しむ。それでも喜ぶ。自分が救われていることを知っているからである。

聖霊の民よ、まもなく、これらすべてのことが来る。急いで働きなさい。人々が聞いても、拒んでも、警告しなさい。人々に警告しなさい。聖霊に満たされた神の聖徒たちを見なさい。彼らが店や商売の場所を巡って行くのが見える。そこには、この滅びの軍勢に襲われようとしている人々がいて、何も気にかけずに、商売のために行き来している。こうして今日、私たちは大きな戦いに備えている。

さばきが来る。滅びが来る。町は攻め取られる。彼らは、愚か者、狂信者、敵とあざけられた。人々は聞こうとしなかった。しかし聖徒たちは知っていた。滅びが来れば町は攻め取られ、商売も役に立たなくなる。敵がすべてを奪い、家も土地も無に帰する、と。彼らにできるただ一つのことは、自分の金を使って、滅びが来ることを人々に警告することであった。彼らの金銭も、金銀も、土地も、何の役にも立たなくなる。あなたがたの金銭も、あなたがたの役には立たない。それがわかるよう、神が助けてくださるように。

シオンでラッパを吹け。警報を吹き鳴らせ。エルサレムは攻め取られる。患難が来る。主の日は近い。すみやかに来る。それはもう戸口まで来ている。額に神の印を押されなければならないと、人々に警告しなさい。だから私たちは、人々を救いに導きながら巡り歩いている。人々が額に神の指としるしとで証印を押されるように、聖霊によってみことばを伝えている。彼らがこれらのことを悟るには、額に神のしるしがなければならなかった。「町の通りを巡り、嘆き悲しむ人々に目を留めて、その人々にしるしをつけなさい」今日、神がしておられるのはそのことである。神に栄光あれ。

彼らはそのとおりにした。みことばは宣べ伝えられた。彼らは軽蔑や迫害など、あらゆるものを身に受けた。そして、しるしがいよいよ速く来るのを見た。彼らは山に身を隠したが、友人や隣人たちのことを思って、日ごとに心を痛めた。彼らは急いで町に入って行き、これらのことが真実であると人々に示そうとした。しかし人々は信じなかった。それでも事実は変わらなかった。

その大きな祭りのときには、世界じゅうからラビたちや多くの人々が来ていた。ユダヤの国民が町に集まっていた。町は大きな祭りのために人であふれていた。主は彼らに言っておられた。「ある合図を見たら、すぐに出て行きなさい。家から何かを取り出そうとして戻ってはならない。急いで町から出なさい」人々は何も信じようとせず、楽しく過ごしていた。しかしついに、その合図が来た。門は閉じられ、人々は食べる物もなく閉じ込められた。しかし生ける神の印を押された者たちは、引き上げられた。連れ出されたのである。その時が来れば、私たちもちょうどそのようになる。歴史家ヨセフスによれば、イエス・キリストに従う者はひとりも、その殺戮で倒れなかった。彼らは神を信じ、逃げる備えをして、逃れたのである。ハレルヤ。

私たちは憎まれる国民、好まれない国民、さげすまれる国民である。この宗派はいたるところで反対されている。しかしパウロは言った。「私はその仲間であることを喜ぶ」イエスが来られるとき、あなたがたは、狂信者とも、ホーリーびが来ることを人々に警告することであった。彼らの金銭も、金銀も、土地も、

ローラーとも、何と呼ばれてもよいと思うだろう。その日は来ようとしている。それがわかるよう、神が助けてくださるように。

人々はみな不意を突かれた。敵が来て、門は閉じられ、世がかつて見たことのない最大の災いがユダヤ人に臨んだ。軍隊は町に入り、聖なる人々、すなわち二十七人が神に背を向けて座っていた内庭に入った。軍隊はこの肥え太った祭司たちと教会のかしらたちから始めた。その人々は牛のようにほふられた。伝えられるところでは、人々には食糧がなく、そこに閉じ込められて、文字どおり飢え死にした。やさしく柔和な女たちが、自分の子供を食べた。足の裏を土に付けようともしなかったやさしく柔和な女たちが、その包囲のあいだに自分の子供を食べたのである。このようなことは、それまで一度も起こらなかった。あなたがたはこれらのことをよく知っている。ある者は捕らえ移され、さげすまれたわずかな小さい者たちだけが、奴隷として残された。しかし、しるしのある神の民には、神がこのことを知らせてくださり、最後のひとりまで連れ出された。ああ、ハレルヤ！

しかし預言者は、同じように、はるか今日の私たちにまで目を向けている。イエスが来られるとき、地にはかつてなかったほどの患難と悩みの時が来る。あれは小さな嵐にすぎなかった。今、私たちの国じゅうで、また世界じゅうで、大きな備えが進められている。やみは、さわれるほど深くなる。イエスが花嫁を引き上げに来られるとき、世が聞いたこともないような時が来る。世で行われている憎むべきことのために嘆き悲しむすべての者、すなわちしるしのある者は、昼の子である。その日が夜の盗人のように、あなたがたを不意に襲うことはない。あなたがたは光の子だからである。賢い者は悟る。神に栄光あれ。歴史によれば、多くの富んだ人々や偉い人々が、その包囲の中で倒れた。しかし召された者たち、神のしるしのある者たち、さすらい人であり旅人であって、家を捨て、富を捨てなければならなかった者たちは、逃れた。いのちと、身の回りのために持ち出せたわずかな物とを持って逃れたのである。イエスが来られるとき、あなたがたは何も持って行かない。すべては、悪魔が用いるために残される。世は今と同じように続いて行くからである。イエスが来られるときが、世の終わりなのではない。弟子たちは尋ねた。「あなたが来られるときと世の終わりには、どんなしるしがあるのですか」花嫁である聖徒たちは、イエスが来られるときに引き上げられる。

第七十一章　地で行われる憎むべきことのために嘆き悲しむすべての男と女に、しるしをつけよ（その二）

毎日目を覚まし、毎日備えている。しかし、ある合図を見るまで出て行こうとしない人々がいる。その合図を見たら、すぐに出て行ったほうがよい。急がなければ、捕まってしまう。締め出されてしまう。

愛する友よ、私たちはそれとよく似た時代に生きている。イエスは再び来られる。神は再び地を訪れられ、御霊を注いでおられる。教会は後戻りしてしまった。私が娘だったころ、メソジスト教会は最も霊的な教会であった。人々は神の力に打たれて倒れ、踊り、ほかにもいろいろなことをした。どの教会にもアーメン席があった。説教者は来ると、何があっても立ち止まらず、説教壇に上って聖書を開き、語りはじめた。「第二に」「第三に」と区切ることもなかった。そんな暇はなかったのである。会堂じゅうからアーメンの声が上がった。彼らには神がおられ、彼らは幸いな民であった。しかし今では、彼らはまったくユダヤ人のようである。「私たちは神を知らない。神は私たちを去られた。私たちには神が見えない。神は遠くにおられる。あの人たちの騒ぎは好まない。あんなことをして何になるのか」そして、ひとりの姉妹が叫ぶと、三、四人の姉妹が彼女を取り囲み、彼女は二度と叫ばなくなる。

愛する友よ、もしその人々（あなたがた自身の父、母、祖父たち）が正しかったのなら、だれかにその人々を気が狂っていたと言われたくはないだろう。もしその人々が神の前に正しかったのなら、今日、だれかが間違っている。しかし今日、人々が集まって叫び、神をほめたたえるのを見るたびに、彼らはその人々を「変人」とみなす。

うなじのこわいユダヤ人たちは知らなかった。しかし、さげすまれていた者たちが助かったと知ったとき、自分もその仲間であったらよかったのにと願った。彼らが悟ったときには、もう遅すぎた。「変人」たちが取り去られた後で、人々は言うだろう。「あの人たちは、結局それほど変人ではなかった」

神は再び御霊を注いでおられる。地のすべての国民に、世界じゅうに注いでおられる。神には、バプテスマを受けた民がいる。この国には、あらゆる国民、あらゆる部族の聖徒たちがいて、聖霊と火とのバプテスマを受けている。彼らは働き、人々を救いに導き、聖霊と火とのバプテスマを受けさせている。

血の下に入り、額に生ける神のしるしを受けなさい。恐ろしい患難の前夜に、神は再びあなたがたを訪れておられる。男も女も自分の肉を食べ、自分の子供を食べるようになる。滅びた家族を見なさい。死体は海に投げ込まれて、さめのえさになった。そして今、さめは肉を欲しがり、生きている者を追おうとしている。神は、そうなると言っておられる。その悪魔のような食欲は、あらゆる種類の動物、野の獣に入り込む。ききんが来るので、なおさらそうなる。動物たちは荒野を出て、食べ物を得るために町に入って来る。戦争とききんと疫病、これらすべてが一度に来る。戦争を逃れても、野の獣に襲われる。獅子とくまを逃れて自分の家に入り、安らかに死のうと壁に寄りかかっても、へびにかまれる。大いなる神よ。これらのことが来ようとしているのが、あなたがたにはわからないのか。神は警告なしに、あなたがたを放っておかれはしなかった。

しるしを見張り、みことばを読みなさい。みことばを読み、しるしを見張りなさい。これらは、はるか昔に預言者が活動写真のように見たことである。これらのことは二千七百年前に見られた。主にとって一日はほんのしばらくのことであり、千年もただ一日にすぎない。今日、舞台の上に立っているのは私たちである。この殺戮と流血の大軍のただ中に置かれる民である。聖徒はみな連れ出される。今日この地上で聖徒となる者たちもである。この時代は、イエスが来られるまで決して滅びない。今夜ここに生きている人々のうちのある者は、神の御子が栄光のうちに来られるのを見るまで、決して死を見ない。

だから私たちは、イエスが来られるというしるしが、いたるところで成就しているのを日ごとに見ている。一つの大きなしるしは、神のまことの聖徒たちが、あらゆる危険を冒して人々を照らそうと、懸命に世を巡っていることである。彼らは、メッセージを受け入れて救われ、神にしるしをつけていただき、額に生ける神の印を押していただく心を見いだしている。幻を明らかにしなさい。神よ、助けてください。私たちがこの幻の中で演じる者であることを、人々は悟るだろうか。メッセージと印を受ける者が、備えをするために走るように、それを明らかにしなさい。それが、私たちがしようとしていることである。

さて、愛する者たちよ、私たちは神のこのしるしを受けなければならない。救われるだけでなく、証印を押されなければならない。聖霊のバプテスマを受け、生ける神の印を押されなさい。十分に深く入るなら、地に臨もうとしているこれらすべての恐ろしいことから、隠されるかもしれない。神と共に閉じこもりなさい。

地の四方の風を引き止めていると描かれている御使たちは、今、それを解き放ちはじめている。神が生きておられるのと同じほど確かなことである。私たちはこれらのことを不思議に思う。御使たちは地の有様を見ている。不義の杯は満ちている。「ああ、なぜ解き放ってはならないのですか。私たちは滅ぼす力を引き止めています。解き放ってもよいでしょうか。太陽を照りつけさせて、人を焼かせてもよいでしょうか。大風に香柏を倒させてもよいでしょうか。高潮に町々を押し流させてもよいでしょうか。地震に地を揺り動かさせてもよいでしょうか」しかし、イエス・キリストの大いなる御使は言う。「しばらく待て。しばらく待て。解き放つな。太陽の力を引き止めておけ。最も大きな高潮、最も大きな風、最も大きな地震、最も大きな災いを引き止めておけ。私たちが神の僕らの額に、生ける神の印を押してしまうまでは」

今夜、神の僕であるあなたがたは、神の印、血と火のしるしを押されなければならない。生ける神の印を押されなければならない。「すべての災いを引き止めておきなさい。それはわたしの聖徒たちにとって大きな妨げになる。彼らは世の光である」救われたいと願う魂のために、主は、人々にもう少し働く機会を与えてくださる。「引き止めておけ」なんのためか。私たちが神の聖徒たちの額に、生ける神の印を押してしまうまでである。わが神よ、この人々が悟ることができるよう助けてください。太陽が華氏でもう二、三度熱くならず、何百万人も死なずにすんだのは、なぜか。来ようとしていることのしるしがわからないのか。シカゴでは暑さで百人が倒れた。あと数度高ければ、何百万人も倒れていただろう。これらのことはみな来ようとしている。目を覚まして祈りなさい。これらの恐ろしい災いからのがれて、神の御子の前に立つにふさわしい者とされるように、いつも祈りか賛美の姿勢でいなさい。愚かな話をしたり、あの人がこう言った、この人がこう言ったと話したりする暇は、私たちにはない。それがわからないのか。私はイエスが言われたことを語るために、ここにいる。私は隣人から言葉を盗まない。

私たちが信じて神をしっかりとつかむことのできる所に至れるよう、神が助けてくださるように。

ふたりの者が畑にいると、ひとりは取り去られ、もうひとりは取り残される。ひとりは目を覚まして祈っており、もうひとりはむだ話をし、冗談を言っている。あなたは聞かなければならないので、彼に答える。しかし、まもなくあなたが見回すと、彼は答えない。「おや、どうしたんだ、トム」あなたはひとりきりである。彼はいなくなった。どこへ行ったのか。見つけられるものなら見つけてみなさい。彼は逃れたのである。ふたりの者が一つ寝床で眠っていると、ひとりは引き上げられ、もうひとりはいびきをかき続ける。神に栄光あれ、彼は門が閉じられる前に逃れたのである。引き上げられたのである。

イエスが来られるときは、まさにそのようになる。主は、まばたきするよりも速く、彼らを生きたまま引き上げてくださる。別の体ではない。この体がとても軽くなるのである。私たちは翼を待っているのではない。この体を軽くする、天からの発電機を待ち望んでいるのである。私たちは、主が上られたように上る。手も足も翼のようになる。私たちは空を渡り、星々を越えて上り、叫びと共に主を迎えに上る。神に栄光あれ。

しかし残される者たちにとっては、まったく違ったものになる。キリストを退けた者たちは、残されて滅びる。ああ、神よ、残される者たちのために、私たちはどれほど嘆き悲しむべきだろうか。私たちの嘆きは足りず、泣くことも足りな

い。しかし同時に、私たちは喜びに満ちあふれていて、それを外に出さなければ破裂してしまうほどである。後の雨の時代に生きているのだから、喜びなさい。喜び楽しみなさい。同時に私たちは、来ようとしている災いのゆえに嘆き悲しんでいる。私はたびたび叫ぶ。私のうちにおられる聖霊が叫んでおられるのである。預言者がこの時について語ったときに言ったように、それは私に臨んだ。「ああ、わがはらわたよ、わがはらわたよ」預言者の体は燃える荒れ地となり、その頭は涙の泉となった。地で起こっている滅びのため、来ようとしている恐ろしい日々のためである。イエスがエルサレムのために泣かれたのと同じである。聖霊は私を通して、なんと泣かれることか。死ぬまで泣き続けるのではないかと思うほどである。しかし私は進み続ける。

神は、地に臨もうとしているあらゆる忌まわしいことから私たちを守るために、私たちにしるしをつけておられる。愛する友よ、わからないのか。御使たちは四方の風を引き止めている。今にも解き放とうとしている。「ああ、解き放ってもよいでしょうか。彼らはあまりにも悪い。人々を滅びにまかせてください」「いや、まだだ。私たちが神の僕らの額に生ける神の印を押してしまうまでは、まだだ」通りを巡って、嘆き悲しむすべての者にしるしをつけなさい。神のしるしをつけなさい。その人々に聖霊のバプテスマを受けさせなさい。イエス・キリストは、聖霊と火とであなたがたにバプテスマを授けてくださる。主は私たちに知恵をお与えになり、知識をもって証印を押してくださる。あなたがたはやみの中に残されず、悟るようになる。救われて、神の前にきよく聖なる生活を送っているあなたがたよ。ひざまずいて神をもっと求め、証印を押されるのでなければ、あなたがたもやみの中に残される。イエスの永遠の腕に抱かれているのを感じられる所に至らなければ、押し寄せる人波に押し流されてしまう。そして、イエスが来られるときに上る備えができていない。「ああ、神の僕らが光を受け、額に生ける神の印を押されるまで、引き止めておけ」

私が休まないのも不思議ではない。私は、神が最後まで私を導いてくださると信頼している。私はこれらのことが真実であることを知っている。神が私たちを助けてくださるように。私たちは今、かなり閉じ込められつつある。悪魔の偽りの教えが、実に多く入り込んでいる。血の下にとどまっていなければ、押し流されてしまう。イエスがまもなく来られることを知っているゆえに、私は神をほめたたえる。とこしえに御名をほめたたえよ。これらの恐ろしい患難が、今まさに地に臨んでいる。主が、これこれのことが起こると言われたことを、あなたがたは知っている。そして、これらは苦しみの始まりにすぎない。諸国民は狂っている。正気を失い、ねたみと憎しみに満ちて、互いに殺し合っている。国は国に敵対し、いくつもの国が倒れた。それを見なさい。本当のことはだれも知らない。国の最もすぐれた者たちが倒れている。それがわかるよう、神が助けてくださるように。これは苦しみの始まりである。四人の御使は、あなたがたが生きているのと同じほど確かに、解き放とうとしている。神のさばきの座へ向かう旅人たちよ、尋ねたい。これが苦しみの始まりなら、終わりはどうなるのか。あなたがたは最悪のことからのがれて、隠されるかもしれない。はるか終わりの時に目を向けた預言者は、聖徒たちが上って行くのを見た。預言者は言う。「わが民よ、上って来て、あなたがたのために備えられた所に入り、うしろの戸を閉じて、しばらく隠れよ。主は地に住む者を罰するために下って来られるからである。彼らの血はちりのように流され、彼らの肉は糞土のように捨てられ、彼らは葬られない」何万もの人が、積み上げられて焼かれ、腐っている。あなたがたは知っている。これらのことを聞いている。終わりがどこにあるのか、だれも知らない。それが今、成就しつつあるのではないか。これが苦しみの始まりにすぎないなら、終わりはどうなるのか。人々が警告を受け、さらに警告を受けるまで、神は最悪のことを引き止めておられる。

神は、カトリックの司祭になるように育てられたひとりの人に、すばらしい幻をお与えになった。ふたりの御使が夜その人を訪れ、まもなく起ころうとしていることを示した。そして、あの大きな会衆、およそ二千人の人々に行って警告しなければならないと告げた。

神はここで人々に警告なさり、生ける神の印を押される機会をもう一度与えておられる。そして、まもなく最後のひとりに印が押される。神はあわれみをもってこの国を呼んでおられる。しかしまもなく、大砲の口によって呼ばれる。最もよいのは、身を隠すことである。私たちが立ち上がって働くことができるよう、神が助けてくださるように。私たちが亜麻布を着て、聖霊の力が私たちを通して

働くように。ラッパを吹き鳴らしなさい。神の前に正しい者となりなさい。神に知識と知恵を求め、体に復活の力を受けなさい。そして、イエスが来られるときに、この世から引き上げられなさい。

生きながらえて残る私たちが、眠った人々より先になることはない。キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、ちりとうじを露のように振り払い、叫びと共に上って行く。主をほめたたえよ。彼らは私たちに会う。キリストにあって死んだ人々のことを心配してはならない。イエスが来られるとき、神は彼らをイエスと共に連れて来られるからである。こうして神は、花嫁を迎えに「御子の婚宴」に来られる。死んだ人々のことを心配する必要はない。彼らはよみがえる。ああ、時は近い。愛する人々に会えるまで、もうそれほど長くはない。主が来られるその日に、まさに最後の一分に葬られる人もいるだろう。私は二年あまり前に、愛する夫を葬った。夫は世を去るときに言った。「私は墓に入ることなど、まったく考えていない」しかし夫の体はそこにある。そして、夫が栄光の体で上って来るのを見た人が何人もいる。私が空中に上るとき、夫は真っ先に私を迎える者のひとりとなる。多くの愛する聖徒たちが、叫びながら死に、栄光のうちに移った。彼らはよみがえらされ、私は彼らに会う。ああ、愛する友よ、キリストにあって死んだ者はみな、まず最初によみがえらされる。私たちは栄光の朽ちない体で上り、空中で主に会う。

さて、愛する者たちよ、これを聞き流してはならない。心の奥に下って燃えるようにしなさい。あなたがたの心の中で燃えるようにしなさい。これは主からのメッセージだからである。ハレルヤ。あなたがたが一度も聞いたことのないことだが、今それを聞いているのである。

あなたがたは、預言者エゼキエルの時代とよく似ていることを見ている。危険を見ている。警告を受けている。聖書を手に取り、愚かだと言われているこの人々について、神に尋ねなさい。ああ、神に栄光あれ。私は、神を信じるほど頭が軽いことを喜ぶ。主が来られるとき、空中に上れるほど軽いことを喜ぶ。ハレルヤ。栄光あれ。私は空へ、空中へ上ることを待ち望んでいる。墓へ行くのではない。神に栄光あれ。ハレルヤ。アーメン。

講談社インターナショナル

2026年11月23日版
著者　マリア・ウッドワース・エター
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/signs-and-wonders/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/signs-and-wonders
全文を、原文（Signs and Wonders God Wrought in the Ministry for Forty Years）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。